

小原台だより

Vol. 1 平成 6 年 1 月 1 日号

Vol. 2 平成 7 年 1 月 1 日号

Vol. 3 平成 8 年 1 月 1 日号

Vol. 4 平成 9 年 1 月 1 日号

Vol. 5 平成 10 年 1 月 1 日号

Vol. 6 平成 11 年 1 月 1 日号

Vol. 7 平成 12 年 1 月 1 日号

Vol. 8 平成 13 年 1 月 1 日号

Vol. 9 平成 14 年 1 月 1 日号

Vol.10 平成 15 年 1 月 1 日号

Vol.11 平成 16 年 1 月 1 日号

Vol.12 平成 17 年 1 月 1 日号

上記各号の表示をクリックすると、各号の先頭ページにジャンプします。



上記の説明に従い下欄のステータスバーを使うと、ページ間の移動が簡単に行えます。

左のしおりタブをクリックすると各号の目次が表示されます。
各目次をクリックすると当該ページにジャンプします。
もう一度しおりタブをクリックすると、タブが閉じます。

小原台だより

VOL. 1

平成 6 年 1 月 1 日

発行 防衛大学校同窓会

編集 土肥 弘実

印刷 ㈱エイコープリント



機関紙「ゆうかり」が生まれ変わりました。
新名称には青春の思い出である「小原台」を
使い、読みやすく、内容も豊富になりました。



目次

新学校長紹介……………1

会長挨拶……………2

特集「防大は今」……………3

生活・教育の基準

最新の防大全景

学生舎・部屋

女子学生

校友会主要活動実績

※(財団法人設立断念について)……………6

※(将来構想検討委員会について)……………7

平成5年度同窓会行事……………11

平成4年度決算報告……………11

平成6年度予算支出計画……………12

事務局からのお知らせ……………13

夏目前学校長退官記念……………14

パーティーのお知らせ

会費未納者数期別一覧……………14

学 校 長 の 略 歴



昭和6年10月4日 誕生（愛媛県）
昭和29年3月 東京大学教養学部教養学科 卒業
昭和36年3月 慶應義塾大学大学院法学研究科
政治学専攻博士課程修了
昭和36年4月 慶應義塾大学法学部副手
昭和37年4月 同 上 助手
昭和40年4月 同 上 講師
(現代東南アジア研究、国際政治論)
昭和42年4月 同 上 助教授
昭和47年4月 同 上 教授
昭和48年10月 慶應義塾大学学生部長
昭和50年9月 法学博士「中国の東南アジア政策」
昭和52年4月 慶應義塾志木高等学校長
昭和53年6月 慶應義塾理事
昭和56年6月 慶應義塾常任理事
平成5年6月 慶應義塾大学法学部教授
平成5年10月 防衛大学校長

この間、日本国際政治学会理事長、アジア政経学会理事長、国際法学会評議員、大学基準協会理事代理、大学設置・学校法人審議会委員、日本学術会議委員、日本私立大学連盟副会長、中央教育審議会委員、国際開発学会理事、大学審議会組織運営部会特別委員、教育職員養成審議会委員などを歴任

御 挨拶

防衛大学校長 松本三郎

年頭に当たり、全国、全世界で活躍されている同窓各位に心からお慶びの賀詞を申し上げます。

去年十月、夏目前小学校長のあとを受け新学校長に就任して以来三ヶ月を経過しました。この間、自衛隊観閲式、防大開校記念祭等の華やかな行事をはさみつつ、着実に進められている防大教育の実態に親しく接することができ、防衛庁、自衛隊という大家族の一員としての認識を深めるとともに、将来のわが国防を担う幹部候補生養成機関としての防大のもつ役割の重要性をひしひしと身にかけているところであります。

ご承知のように今日の日本は、明治初期、第二次世界大戦直後期につづいて三度目のきわめて大きな社会変動期を迎えております。これからのわが国が、また日本を取り巻く世界が、どのような方向に進むのか全く不透明で予測不可能な状態にあり、正に転換と模索の時代に入っているといえます。こうした中で、将来の日本の国防を担う幹部に期待されるのは、何よりも変化に正しく適応できる柔軟な思考・行動力と、積極的に新しいものを生み出すことのできる創造力にあります。

すでに一般の大学でも、心ある大学は、こうした人材―二十一世紀の世界に通用しうる人材―を生み出すべく大改革をはじめられています。防大もそれらに遅れては

なりません。言うまでもなく慎智雄初代学校長によって確立された防大教育の基本理念は「優れた武人たるとともに良きジェントルマン（社会人）の育成」にあり、それは今日においてもいささかも揺るぐことのない防大教育の目的であります。この変わることはない基本理念の上に、歴代学校長の下で不断に続けられてきた改革を一段と進め、教職員一丸となつて新しい時代に相応しい教育研究体制を確立することが、私に課された責務と考えております。同窓各位のご理解とご協力をお願いする次第であります。

さて、昭和三十二年に源を發した防大の同窓会もすでに三十七年を経過し、今や各地で活躍する同窓一万六千余名を数える大部隊に成長されたことは誠に慶賀にたえません。青春時代を共に過ごし、ハグカの附合いをした仲間が、同窓の会で再会し、昔日を懐旧、今日を語れば話は盡きることなく、それは人生に大きなうるおいと豊かさをもたらすことでしよう。正に論語に言う「有朋自遠方来不亦乐乎（友ありて遠方より来る、また樂しからずや）」そのものです。

また現役の学生諸君にとつても、同窓の先輩は、自分たちの将来の道標であります。先輩たちが、良きジェントルマンとしてプライド高く、いきいきと活躍している姿は、何にも増して自分たちの修練の励みとなりましょう。同窓各位のご健康、ご活躍と、同窓会のいよいよのご発展を祈念して、新年の御挨拶とさせていただきます。



新年のご挨拶

同窓会長

中尾 時久

新年おめでとうございます。

一万六千余を教える同窓生の皆さんも、世界各地でよいお正月をお迎えのことと存じます。

昨年は同窓生がカンボジアやモザンビークで、PKOとして大活躍をされた画期的な年でした。冷戦の終結に伴い自衛隊も皆さんも国際貢献での出番が益々多くなることでしょう。

防衛大の教育をキチント受け、各自衛隊で真剣に訓練に励んでいけば、国際貢献で世界中どこへ行っても成功疑いなしと確信しています。「今時の若い者は…」と言うと否定的なことが多いのですが、こと国際貢献については、今時の若い者は頼りになります。

一時期、国際貢献やPKOにからめ、前向きの憲法改正の論議が盛んでしたが、細川政権の成立とともに次第に下火になってしまいました。世の中は凄く早さで変化しているのですから、その変化に即応するためにも憲法改正を躊躇すべきではないのです。

昨春秋、社会党の五人の閣僚が衆議院で「自衛隊は違憲」と答弁して物議を醸しました。自衛隊抜きではわが国の安全保障は成り立たないのですから、違憲というのならそうならないように施策することこそ、閣僚としての責任ある態度です。それができないのなら閣僚にならないことです。万野党として、今迄どおり「憲法改正反対」、

「自衛隊反対」を唱えていけばいいのです。また、「閣僚として」と、党員として、を使い分けるなどおかしな話です。そんなことが罷り通るなら、日本人全員が二重人格者になってしまおうでしょう。

一方、岸政権までは憲法改正に真面目に取り組んでいましたが、池田政権が「所得倍増」という豊さと引き替えに、民族の魂・気概を養うのを軽視して憲法改正に及び腰になって以来、自民党も気骨がなくなり、挙げ句の果てに金権に塗れて政権を滑り落ちてしまつたと評されています。

自衛隊在隊間、憲法改正による国軍を待望し続け、それが実現しないまま退官した現在、政局の動きを見るにつけ失望し、空しさを覚えます。

争いは人間の業みみたいなものですから、戦争や紛争が地上から消滅することはないでしょう。昭和二十年の敗戦以来、マスコミの大部が陸海軍や軍人を悪し様に貶め続け、その結果、間違つた意識が国民に浸透してしまつたのは、民族の将来にとって極めて憂慮すべきことです。

今の段階では、国と国の争いから国土や民族を守るための武装集団は、独立国にとって欠かせない存在なのです。この武装集団は権力の手先ではなく、国民のための存在であり、国民の精神的な拠り所であり、国民共通の財産でなくてはなりません。そして、真に日本的なもの象徴として、例えば武士道の精神等を継承するような、一本筋の通つた集団であるべきです。

憲法上で疑義があり、警察の出来損ないみたいなその性格にも疑義があるのが、今の自衛隊です。国家百年の計のためにも、一日も早く自衛隊を真つ当な武装集団として遇するべきです。

自衛官は有形な処遇改善もさることながら、精神的な処遇改善を渴望しているのです。それは、国軍としての栄光、軍人としての名誉、名を惜しむ武士道の継承者としての処遇等に加えて

の、国民の全幅的な信頼と支援です。

本来は政治主導に期待すべきなのではないが、それに期待できないのなら、国民からの自衛隊支持率八十数%をかち得た経緯と同様に、まず国民の憲法改正への支持を得ることが重要です。世論を喚起することです。そのためには、現役の皆さんは災害救援、民生協力、国際貢献等を通じて、健全にして役に立つ武装集団の真姿を国民にアピールして下さい。また、毎年約四百人のペースで定年退官され民間人となつた皆さんは、防衛について啓蒙し憲法改正を訴えて下さい。迂遠な道ですが、民主主義国家においてはこれしかありません。

同窓会活動を活性化させるためには情報交換と意志の疎通が重要になってきます。このため、機関紙「ゆうかり」を今年から「小原台だより」と改め、紙面を増やし内容も充実させました。

この外に昨年、懸案だった財団法人問題を断念するという形で決着をつけ、将来構想検討委員会を発足させました。同窓会の在るべき姿を検討してもらいます。一步後退三步前進の施策になるでしょう。また、支部のあり方についても抜本的に検討中です。

最後に、皆さん及び御家族御一同様にとつて、本年が良き年でありますようお祈り申し上げます。(日本工機株式会社・常務取締役、元陸将)

◎ 生活・教育の基準

日課表

曜日 日課	月～金	日・土 ()は土曜日	曜日 日課	月～金	日・土 ()は土曜日
起床	0630	0700	午後課業終了	1705	
日朝点呼	0635	0705	国旗降下	1705	
朝食	0700-0745	0720-0800	課外活動終了	1815	
国旗掲揚	0805		夕食	1800-1900	1700-1800
朝礼	0805		入浴	1705-1930	
午前課業開始	0830		自習時間	2000-2210	
午前課業終了	1140		日夕点呼	2220	2220(2320)
昼食	1200	1130-1230	消灯	2230	2230(2330)
午後課業開始	1300		外出時間		0800-2220 (0800-2320)

学生の外出について

特別外出(外泊)	
学年	年度回数
4	制限なし
3	16回
2	11回

平日外出
第4学年は、平日の課業終了後、外出することができる。

教育課程の主要な変更

- 履修単位制を廃止し、卒業に必要な単位のみを取得すればよいこととした。
- 選択制度を大幅に導入した。(選択できる割合：理工学専攻11%⇒48%、人・社専攻23%⇒46%)
- 理工学専攻の6専門を14学科に、社会科学専攻を2学科とした。

本科学科一覧

理工学専攻													人文社会科学専攻	
数	地	電	電	通	機	精	機	土	応	航	情	材	管	国
学	球	気	子	信	械	密	械	木	用	空	報	料	理	際
物	科	工	工	工	工	機	シ	工	化	宇	工	物	学	関
理	学	学	学	学	学	械	ス	学	学	宙	学	性	科	係
学	科	科	科	科	科	工	テ	科	科	工	科	工	科	学
科	科	科	科	科	科	学	ム	科	科	学	科	学	科	科
						学	工							
						科	学							
							科							

教育課程の主要な変更

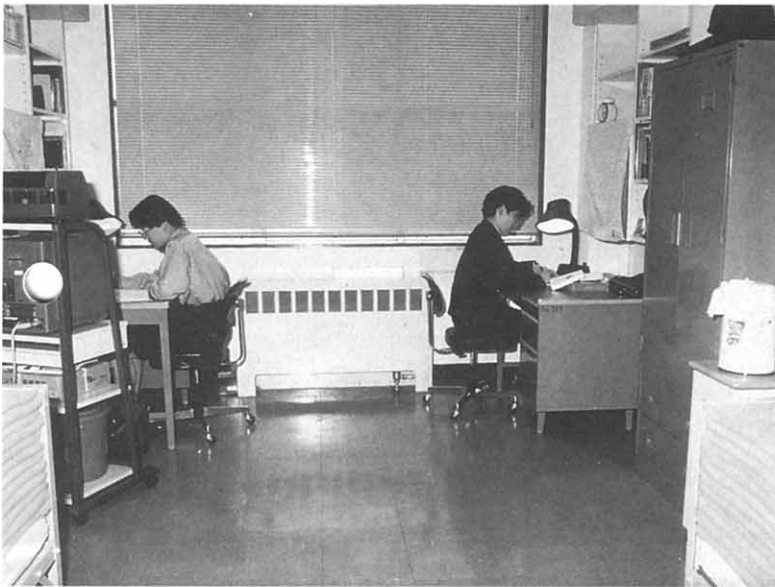
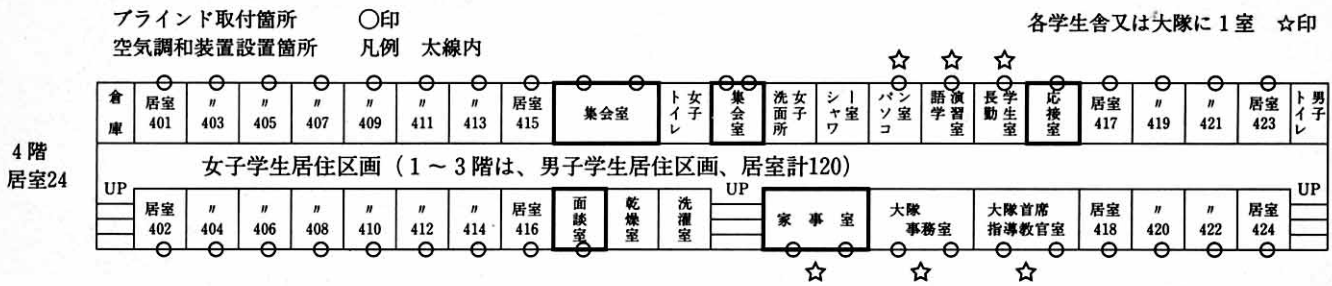
- 訓練課程総時間を1176時間から171時間(約15%)削除して、1005時間とした。
(新カリキュラムへの移行は平成3年度に完了した。)

最新の防大全景

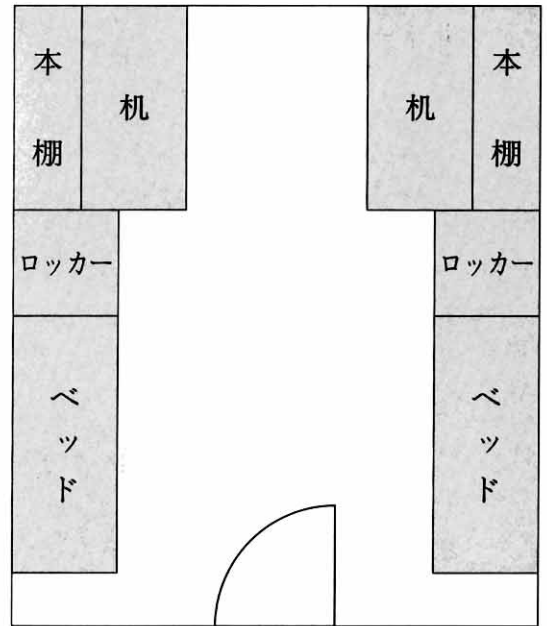




8号学生舎（女子受入）平面図



二人部屋見取図



廊下側

「財団法人設立断念」について

一 経緯

昭和五十五年頃から同窓会館を作ろうという動きが起こり、そのためには財団法人化が必要ということになって、五十八年財団法人設立委員会が設置され、翌年にその基本財産として一億円の支出が承認されたのが、そもそもの発端でした。その後、財団法人は公益性が必要であり、特定の団体や特定の団体のためだけの事業には認可されないことがわかり、自衛隊員募集状況が逼迫していた折から、目的を再検討し防衛人材確保協会（仮称）として発足すべく、平成三年秋頃から、防衛庁内局と委員会の間で本格的な折衝が始まりました。収益事業が軌道にのるまでの間、年間の活動資金約三千万円を確保できれば認可も近い、と思われる段階まで調整が進み、賛助会員を募集しました。

一方、昨年夏頃、内局で構想中の防衛交流協会（募集のほか、在日米軍人・家族の親日化、隊員への英会話教育受託等の内容）との合体案が内局から呈

示され、その受諾をめぐり、委員の意見が二分し結論が出ませんでした。折

から、防衛人材確保協会においても賛助会員の応募が思ったよりも少なく、財団法人問題を根本から考えなければならぬ事態となりました。

そこで、昨年六月末に臨時評議員会が召集され、財団法人問題は断念し、財団法人設立委員会も解散することが提案され、議決されるに至りました。

二 断念理由

（一）防衛人材確保協会の設立断念

ア 賛助会員応募率が二〇％強であり、同窓生の賛同を得られたいはいい難い。

イ 有効な収益事業の具体化がでない。

（二）防衛交流協会への不参画

ア 同窓会の目的と事業内容が馴染まず、同窓生への直接のメリットが少ない。

イ 同窓会として同協会の主導性を取れない。



社会科学館



図書館(新館)



総合体育館

「将来構想検討委員会」について

一 経緯

昨年六月三十日に財団法人設立に関する臨時評議員会が開催され、財団法人設立委員会の解散が議決されるに至りましたが、そのおりに防衛大学校同窓会として、今後の事業の在り方について、長中期の見地から検討する必要性が提起されました。

このため、会長を中心に事業推進検討委員会(仮称)として所要の準備が進められ、その作業の中で検討対象の範囲を広げ、名称についても「将来構想検討委員会」とする案が生まれました。

そして同十月二十五日に開催された評議員会において討議に付されたうえで決定され、十一月十三日防衛大学校第四十一回開校記念祭に併せて行われた総会において承認されるに至りました。

なお、この委員会の細部については次のとおりであります。

二 目的

防衛大学校同窓会のあるべき姿を明らかにし、今後の運営の在り方について、長中期の見地から、構想及び運営計画を策定する。

三 主検討項目

- (一) 同窓会の活動範囲及び事業
- (二) 同窓会組織の検討・確立
- (三) 会則の抜本的見直し

四 委員

定年に達した四期生までの期から陸・海・空各一名(期生会長推薦)及び小原台クラブから二名
 (尚、来年度からは五期生も参加)
 委員長 志摩 篤氏 (二期)
 事務局長 君嶋 信氏 (三期)

五 最終答申期限

平成八年三月三十一日

女子学生

平成四年四月に初めて女子学生を受け入れてから二年、今年度からは、二学年として陸海空自衛官要員に指定されました。



一・二学年共、男子の一割弱と少数ですが、男子学生に負けず劣らず頑張っています。
この新しい後輩たちの表情と各要員訓練（二学年）・入校（一学年）の感想を一部御紹介いたします。



夏季定期訓練で得たもの

防大二三二小隊

二学年陸上要員 平松 千枝

雨の北海道、夏とは思えぬ寒さの中、昼夜戦闘訓練は続いた。移動は駆け足、小銃を握りしめ泥に塗れて這いまわる。ほふくで手足は擦り傷、痣だらけ。ドランで肌は荒れ放題。訓練の終り頃には、みんな女とは思えぬ出で立ちになっていた。

「男女同じ訓練内容をこなし、決して手は抜かせない」そんな意識が男子の中に、そして女子の中にある。「男子に負けてはいけない」そんなプレッシャーが私達の疲れに拍車をかけた。「女なのはどうして……」そんな言葉が思わず洩れてしまう程だった。

そんな私達を支えてくれたのは、同じ班の男子であり教官であり助教の方々であった。一人一人のほんの僅かな心遣い。それは、女子だけでなく班全体を包み込んだ。全員が強い絆で結ばれ、班の団結が日に日に深まっていくのを感じた。

全てを自分たちの力で運用していく、それは並大抵の事ではない。しかし、そこから強い絆と団結は生まれてくる。それを目の当たりにした私は、「陸上要員になって良かったな」そう感じた。そして、夏季定期訓練での一番の収穫は、そう思えるようになった自分自身だと私は思う。

要員訓練を終えて

防大二四二小隊

二学年海上要員 永原 炎

夏季定期訓練から、既に四カ月が経過している。海上要員としては、ポンドでの訓練と乗艦実習との、大きく分けて二つの訓練を終えた。月日が経てば忘れるもので、蓄えたはずの知識も殆ど残っていない。だが、特に乗艦実習においての海上勤務に対する概念把握、伝統的慣習体験等、体得したのも少なくない。私自身、最もよく記憶している乗艦実習を主とした感想を述べようと思う。

一番の収穫は、乗艦されていた女性幹部の方とお話してきた事、艦内での仕事ぶりを目の当たりにできた事である。事務以外の場で女性の方が勤務されているのを見たのは初めてであり、将来への展望が開けた気がした。今は艦艇勤務の他、パイロットへの道も開ける等、女性の職域も大分広がった訳であるが、補給長として働く彼女の果たした役割の大きさを改めて感じた。

素晴らしい先駆者の開拓されたレールを伸ばし、また岐路を増やす事が、私達に与えられた課題であろう。今定訓で得たものを来夏に生かし、よりよいものとなるよう、一層の努力をしていきたい。

夏季定期訓練を終えて

防大二四三小隊

二学年航空要員 鈴木 浩子

航空要員として初の部隊実習は、誰にとってもきつとそうであったように私にとつて感慨深く、思い出さきものとなった。また、将来パイロットになることを希望している私にとつては、この実習が、パイロットへの思いを一層強め、これまで漠然としていたパイロットへの未来予想図を、一歩踏み出して考え始める契機となったことは間違いない。

初めてC-130のコックピットから雲の上の世界を見渡した時のあの感動、実際に操縦席に座り操縦桿を握ったときのあの感激、きつと忘れないだろう。そしてその時思った「絶対パイロットになりたい。」という気持ちはこれから先、何よりも強く自分を支えていくことになるだろう。私の実習先は美保基地であったのだが、偶然にも私が幹校を卒業する頃には、美保は輸送機のPコース課程で必ず一年余りの教育を受けなければならぬ場所となる。そういったことを話しながら必ずまた美保に戻ってくることを、お世話になったWAFの方に約束した。

航空要員としてはまだまだひよつ子の私達は、実習先でお役に立てることではなく、ただただ御迷惑をおかけするばかりであったが、それでも親切に好意的に面倒を見て下さった部隊の方々の優しさに、大変感謝しています。

負けるな！防大女子学生

防大二四二小隊

一学年 石田 加奈

平成五年四月に入校した防大四十一期生の石田加奈です。

早いもので私が防衛大学校女子学生と呼ばれ続けて八カ月が過ぎました。実のところ途中幾度となく「普通の女子大生になりたい。」と思ったこともありましたが、というのも自分が考えていた以上に女子学生と女子大生にはかなりの違いがあるのです。少々オーバーですが私にとつては聞くも涙、語るも涙、涙の八カ月と言えるかも知れません。

私と同年代の女性はいえば、おしゃれもした年頃です。ファッション雑誌は買ってはみませんが、私服は着れないのみか、校内の男子学生からは、女子の夏制服はサファリパークのお姉ちゃんだと言われ、訓練指導教官からは乙武装が似合うとほめられ？喜んでよいものか、悲しむべきなのか悩んでしまっています。パレード訓練でたくましく育った右腕に、食べることが唯一の娯楽となつてしまったために形成された肉づきの良すぎる体を付け加えて、時には「女の幸福」についてふと考え込んだりもしました。

とは申しまして、やはり将来、幹部自衛官になるべく、ある面では女を捨て、開き直ってがんばっています。夢は、防大生数、男女同率。防大女子学生に、夢多かれ！

平成5年度校友会主要活動実績

【凡例】1全般成果：☆上昇，★下降
2昨年度との比較：↑上，→同じ，↓下

連番	部名	全日本クラス	関東クラス	県クラス(その他)
☆1	短艇委員会	全日本カッター競技会 1位/13校↑	関東カッター新人戦 1位/6校↑	
2	バスケットボール部		関東学生リーグ 14位/6部↓	神奈川リーグ 2位/2部
3	柔道部		関東学生優勝大会 3回戦敗退↓	神奈川学生大会 3位/1部↑
4	ラグビー部		関東学生リーグ2部7位 3部落↓	
5	サッカー部			神奈川学生上位リーグ 2位/4校→
6	剣道部	全日本学生選手権大会出場	関東学生優勝大会 2回戦敗退↓ 関東理工系 準々決勝敗退→	神奈川学生大会 団体予選敗退 個人優勝
7	空手道部	全国空手道選手権 2回戦敗退→ 全日本選手権大会 32位/89校→	関東大学選手権 2回戦敗退↓ 関東学生定期リーグ 2位/2部↑	神奈川県選手権大会 有級組手 優勝↑
☆8	バレーボール部		関東学生リーグ 1位/8部 7部上↑	神奈川大学選手権 4位/1部↑
★9	卓球部		関東学生リーグ 5位/5部 6部落↓	
10	陸上競技部		関東学生競技 100M 防衛大新↑ 関東理工系 総合4位/61校↓ 東日本駅伝 28位/771チーム↑	神奈川選手権大会 顕著な記録なし↓
★11	硬式庭球部		関東理工科 4位/7部 8部落↓ 関東学生リーグ 2位/10部→	
☆12	硬式野球部			神奈川リーグ 1位/2部 1部上↑
13	射撃部	全日本学生選手権 3姿勢8位,伏射ち10位/72校↑	関東学生選手権 10位/31校→	
14	水泳部		関東リーグ水球 5位/3部 4部落↓ 東日本理工系競泳 総合優勝↑ 東部国立競泳 総合2位↑	
15	ハンドボール部		関東学生リーグ 3位/6部↓	
☆16	アメリカンフットボール部		関東学生リーグ2部優勝 2部残留	
17	ヨット部(クルーザー)	全日本ポイントレース		
18	ヨット部(小型)		関東学生選手権 23位/25校↓	神奈川5大戦 470級5位↓
19	銃剣道部	全日本優勝大会 準優勝→ 全国並北陸大会 準優勝→	全関東大学選手権 3位/8校↓ ; 新人戦 優勝/8校↑	神奈川国体予選 予選落ち→ 神奈川短剣道 団体/個人優勝↑
20	ソフトテニス部		関東大学対抗戦 ベスト32↑ 関東学生リーグ 2位/10部→	神奈川BC級大会 3位/10校→ 神奈川リーグ 3位/10校→
21	ボクシング部		関東学生トーナメント 3位/4部↓	
22	レスリング部		東日本学生リーグ2部 4位/8校↓ 東日本新人戦 1位 ソクラテスカップ 1位	
23	ボート部	全日本選手権 3位/3艇→	関東新人戦 シングルスカル6位↑ 5大学レガッタ フォア3位↑	
24	フィールドホッケー部		関東学生リーグ 3位/2部→	
☆25	パラシュート部	全日本選手権(ジュニアの部) ↑ 1位 2位		
26	準硬式野球部			神奈川6大戦 3位/6校→
27	弓道部		南関東トーナメント 団体優勝↑ 南関東リーグ戦 男1部 女3部→	
☆28	少林寺拳法部	全日本学生大会 団体演武1位→	関東学生大会 団体演武1位↑ 段外の部2位↑	神奈川大会 団体演武1位↑
★29	フェンシング部		関東学生リーグエベ・フルーレ4部↓ サーブル 3部→	
30	ウェイトリフティング部			神奈川新進大会 2位↑
31	相撲部	全国国立大学対抗新人戦 ↑ 2位 3位 全国学生選手権 Cリーグ3位→	東日本学生リーグB 9位 C落ち↓	
32	バトミントン部		関東学生リーグ 3位/6部→	神奈川リーグB 2位↑
33	体操部		関東理工系大会 4位/8校↑	
34	自動車部		JACSラリー 4位/10台↑	
☆35	グライダー部	久住山岳滑翔大会(個人) 1位		
36	新聞委員会			新聞「小原台」の発行
37	雑誌委員会			雑誌「小原台」の発行
38	茶道部			定例鎌倉茶会
39	吹奏楽部			定期演奏会
40	音楽部			定期演奏会

平成5年度同窓会行事

六月 臨時評議員会

財団法人設立断念
財団法人設立委員会解散

十月 評議員会

将来構想検討委員会設置議決
平成四年度決算報告
平成六年度予算案審議

十一月 顕彰碑献花式

平成四年十月二十七日茨木市北方海上で墜落殉職された故 加藤和人 三等空佐の御遺族の参列を賜り、しめやかに執り行われました。

総会

将来構想検討委員会承認
平成四年度決算報告承認
平成六年度予算案承認
機関紙の充実案承認

二月 夏目前校長退官

記念パーティー
〔平成六年二月十一日(金)
一八〇〇～二〇〇〇
高輪プリンスホテル
(東京・品川)〕

平成4年度決算報告

防大同窓会経理部
平成5年11月13日
(単位 円)

担当部	項目	予 算	実 績	備 考
収 入	前年度繰越金	230,505,438	233,817,772	
	会 費	22,918,358	20,084,042	
	名 簿	8,000,000	8,429,497	
	その他(利息等)	13,694,233	15,156,086	
	合 計	275,118,029	277,600,397	
支 出	事 業 部	7,280,000	5,211,339	5年度へ繰越金細部 定期：217416185 普通：5200415 名簿：8429497 共済：2433154 現金：287281 合計：233766532
	総 務 部	4,427,200	3,196,967	
	編 集 部	850,000	730,917	
	人 事 部	25,000,000	29,727,303	
	経 理 部	6,037,400	3,253,103	
	法人設立準備委員会	101,000,000	1,600,412	
	小 計	144,594,600	43,720,865	
	残金(5年度へ繰越金)	130,523,429	233,766,532	
合 計	275,118,029	277,600,397		

平成6年度予算支出計画（細部）

防大同窓会経理部
平成5年11月13日
(単位 円)

	科 目	予 算	5 年 度 比	摘 要
事業部	総会費 (会場設営費)	1,500,000		
	(支部代表旅費)	800,000		
	(通信費)	100,000		
	(印刷費)	400,000		
	期生会支援費 (42期生会助成)	100,000		
	(39期生会助成)	100,000		
	(各期生会助成)	1,000,000	-680,000	
	校友会対外活動助成費	1,000,000		
開校祭助成費	2,000,000			
	小 計	7,000,000	-680,000	
総務部	顕彰碑献花式費	600,000		
	顕彰室整備支援費	300,000		
	慶弔費 (弔慰)	700,000		
	(供花)	350,000	+50,000	
	職員定年退職者記念品費	100,000		
	事務通信費	20,000		
	コピー機賃貸料	120,000		
	電話・FAX維持費	360,000		
	東京事務所運営費 (室賃貸料等)	1,200,000		
	(会議費)	240,000		
	(事務通信費)	240,000		
(人件費)	1,500,000			
評議委員会運営費	500,000			
	小 計	6,230,000	+50,000	
編集部	機関誌発行費 (作成)	500,000	+250,000	「機関誌」の充実
	(発送)	900,000	+350,000	
	事務通信費	50,000		
	小 計	1,450,000	+600,000	
人事部	事務通信費	100,000		
	小 計	100,000		
経理部	会長運営費	650,000		予備：期生会長 活動費、前学 校長退官記念 パーティ費用
	事務員雇用費	2,000,000		
	事務費	300,000	-200,000	
	通信費	350,000	+150,000	
	交通費	150,000		
	会議費	200,000		
	予備費	3,000,000	+1,000,000	
	小 計	6,650,000	+950,000	
新規	将来構想検討委員会活動費	1,000,000		
	小 計	1,000,000		
合 計		22,430,000	+920,000	

事務局からの お知らせ

出版物のお知らせ

編集部から

平成五年度同窓会事務局役員
平成五年十月二十五日評議員会承認

同窓会名簿について

◎ お詫び

平成四年度版同窓会名簿の中で、次の方が誤って「逝去」となっています。謹んでお詫び申し上げますとともにお手持ち名簿を御訂正下さいませますようお願い申し上げます。

- 六期 航空 高 橋 俊 雄 様
- 「四六八頁 下から五番目」
- 二十期 陸上 大 庭 満 様
- 「一七三頁 上から十二番目」

◎ 代金の納入

名簿代金の納入通知の中で、一部口座番号の誤りがあり、大変御迷惑をおかけしました。

なお、十月末現在で約70%しか回収されておりません。未納の方は一部につき二千元を左記口座に御振込下さい。

第一勧業銀行 横須賀堀の内支店
普通預金 1315034
口座名 横須賀市走水一―十一―二十
防衛大学校同窓会

TEL ○四六六(四一)三八一〇
「四年度名簿には在庫があります。希望者は事務局まで御連絡下さい。」

「鈴木桃太郎先生追悼集」

鈴木桃太郎先生追悼集編集委員会編集 A五判四百三十二頁 頒布価格二千元 (非売品)

本追悼集は、一昨年八月に亡くなられた初代副校長鈴木桃太郎先生を偲び先生の御遺稿及び本校卒業生をはじめとする多数の教え子並びにその他先生の御薫陶に接した多くの人々による思い出から構成されています。

本書は、本校の初期の理想を追究する上での第一級資料でもあり、先生の教えに直接触れることのできなかった方にとっても有意義なものです。

申し込み受け付け
一、東部方面総監部 援護業務室
(担当 佐 藤 明 治 准尉)

TEL ○三―三二六八―三一一一
FAX ○三―三二六九―四〇七七

二、防衛大学校 材料物性教室
藤 本 司 郎 教授

TEL ○四六八―四一―三八一〇
(内線 二四一七)

FAX ○四六八―四四―五九一〇
(材料物性教室のFAXです。)

送料 五百円

同窓会機関紙が本号から刷新され、名称も「ゆうかり」改め「小原台だより」となりました。その理由の第一は同窓会の方針及び活動について会員の皆様に周知徹底を図り、同窓会としての意思決定を迅速かつ確実にするためです。

そのために、紙面を以前のタブロイド判一枚の新聞形式からA4判十六枚の雑誌形式とし、内容を充実させるとともにビジュアル化しました。

また、以前の「ゆうかり」という名称は、ゆうかりの木が校内に数多く植えられていた初期の卒業生には、馴染み深いものでしたが、成長は早いが大きくなるとあまり見栄えのしないこの木は、桜、松などにとって代られ現在ではほとんど残っていない。最近の卒業生にとっては、母校を連想させる名称ではなくなっていました。そこで、新名称について昨年十月に行われました評議員会に諮った結果、四期海上評議員小今井氏御発案による本名称に決定いたしました。

今後、会員の皆様がより興味を持って見ていただけるような紙面作りに尽力する所存ですので、御批判、御要望等ありましたら、遠慮なく事務局へ御連絡下さい。

職名	氏名	期別	要員	勤務	先電	話
会 長	中尾 時久	1	(陸)	日本工機	03-3436-	1223
副 会 長	安岡 義純	5	(空)	防大電気工学	専 8-40-	2272
副 会 長	阿部 英輔	6	陸	陸 幕 監 理 部	専 8-33-	2410
理事(法務担当)	菅沼 祐亨	1	(空)	菅沼法律事務所	03-3465-	1650
理事(会計担当)	後藤 薫	1	(陸)	後藤会計事務所	0423-74-	4759
理事(総務担当)	松村 嘉夫	1	(空)	三菱重工	03-3202-	2295
理事(総務担当)	中村 義一	2	(陸)	防大材料物性工学	専 8-40-	2381
副 事 務 局 長	鈴木 弘	21	陸	防大3大隊事務室	専 8-40-	2735
総 務 部 長	佐伯 義次	25	陸	防大33中隊	専 8-40-	2733
人 事 部 長	野村 孝善	25	陸	防大23中隊	専 8-40-	2723
経 理 部 長	西郷賢二郎	23	陸	防大42中隊	専 8-40-	2742
事 業 部 長	宮崎 守	25	海	防大44中隊	専 8-40-	2744
編 集 部 長	土肥 弘実	25	海	防大21中隊	専 8-40-	2721

事務局連絡先

〒二三九 横須賀市走水 一―十一―二十

防衛大学校 同窓会事務局
TEL ○四六八―四一―三八一〇
内線二七〇七

FAX ○四六八―四四―三三〇一
専用線 八―四〇―二七〇七

東京分室連絡先
〒一〇六 東京都港区六本木七―十八―
十八

防衛大学校同窓会東京分室
(代表) 福田光信(一期)
TEL ○三―三四七九―九二五四
専用線 八―三二―五七四五

夏目前校長退官記念パーティーについて

主旨

前防衛大学校長 夏目晴雄先生が去る九月三十日付をもって退官されました。先生は昭和六十二年三月防衛大学校長に就任され、爾来、五年半もの間、熱心に学校の発展と学生の教育指導に尽力されるところに、入試制度の改革、女子学生受入れ、卒業時の学士・修士号付与など数多くの御功績を残されました。

この度の御退官にあたり、防衛大学校同窓会としましてこれまでの御苦勞と御厚誼に謝意を表し、先生の今後の御健勝と御発展を祈念致したく、送別の宴を催すとともに記念品を贈呈すべく左記のとおり計画致しました。当主旨に御賛同いただき、奮るって御参加下さいますよう御案内申し上げます。

一 退官記念パーティー

(一) 日時 平成六年二月十一日(建国記念日)

一八〇〇～二〇〇〇

(二) 場所 高輪プリンスホテル(東京品川)

(三) 会費 一〇、〇〇〇(当日徴収致します。)

(四) 御申込 別送の参加申込書又は官製ハガキにより

平成六年一月十五日までに事務局まで御送り下さい。

二 記念品代

(一) 申込単位 一口 一、〇〇〇円

(二) 申込方法 別送の御芳名簿に御記入の上、記念品代を添えて事務局まで御送り下さい。

銀行口座を御利用される方は次の口座を御利用下さい。

第一勧業銀行横須賀堀内支店 口座番号
1353130 防衛大学校同窓会

会費未納者数期別一覽

(5. 12. 10 現在)

期別	会員数	完納者数	完納率%	未納者				期別	会員数	完納者数	完納率%	未納者			
				陸	海	空	計					陸	海	空	計
1	340	316	93	14	7	3	24	20	383	347	91	20	3	13	36
2	359	340	95	12	5	2	19	21	489	465	95	13	5	6	24
3	484	443	92	21	13	7	41	22	473	401	85	35	10	27	72
4	463	424	92	27	10	2	39	23	414	390	94	8	8	8	24
5	528	467	88	33	16	12	61	24	446	411	92	9	19	7	35
6	479	411	86	48	13	7	68	25	419	389	93	15	7	8	30
7	504	449	89	36	10	9	55	26	505	460	91	31	8	6	45
8	466	408	88	42	11	5	58	27	388	375	97	10	1	2	13
9	498	428	86	44	13	13	70	28	451	419	93	17	8	7	32
10	498	440	88	31	14	13	58	29	391	353	90	18	9	11	38
11	495	442	89	30	10	13	53	30	410	337	82	54	13	6	73
12	466	392	84	38	21	15	74	31	430	407	95	15	7	1	23
13	467	387	83	54	14	12	80	32	404	347	86	33	14	10	57
14	491	453	92	23	2	13	38	33	448	373	83	46	20	9	75
15	461	437	95	16	4	4	24	34	427	371	87	41	9	6	56
16	428	400	93	11	6	11	28	35	496	475	96	12	6	3	21
17	497	447	90	23	11	16	50	36	354	343	97	7	2	2	11
18	422	394	93	9	7	12	28	37	384	341	89	18	8	17	43
19	446	407	91	14	23	2	39	合計	16,504	14,889	90.2	928	367	320	1,615

小原台だより

VOL.2

平成7年1月1日

発行 防衛大学校同窓会

編集 堀井 克哉、七嶋 剛士、荒井 正芳

印刷 働エイコープリント



目次

会長挨拶	1
将来構想検討委員会報告	3
特集「防大は今」	5
陸・海・空要員の選状状況	
運動系校友会の新入生加入状況	
六年度運動系校友会活動結果	
期生会便り	7
平成五年度予算使用実績	14
平成七年度予算支出計画	14
平成六年度同窓会行事	15
広報部からのお知らせ	15



新年のご挨拶

同窓会長

中尾 時久

世界各地で御活躍の同窓生の皆様には、良いお正月をお迎えのことと、心からお祝い申し上げます。

一 節操なき社会党

社会党の委員長が総理大臣になり、社会党が自衛隊を合憲と認めるなど、世界大激変の波がやっと国内にまで及んで来ました。

それにしても、自衛隊は違憲であるとして永年に亘って自衛隊とその関係者を悪し様に罵り、日陰者として肩身の狭い思いをさせてきたのに、明確な理論的説明もなく、ましてや自衛隊関係者への一片の謝罪もなく、露骨な政権欲に駆られて大変身するとは、見下げ果てた全く身勝手な政党です。

自衛隊が合憲であることは、国民の大多数や多くの政党が既に認めていたことであり、今回の決定は一周遅れで皆に追い付いたようなものです。

社会党が自衛隊違憲を主張し続け「さわさりながら、責任ある立場に立てば、自衛のための武装集団は必要だ」と、その矛盾の解決に正々堂々と憲法改正を訴えるなら拍手喝采です。これなら、大幅に遅れていたランナーが疾走して皆を追い抜いて先頭に立ったと、評価できます。

与党になって責任ある立場につけば、安全保障や消費税について従来の主義・

主張を改めるということは、野党であった長い期間を無責任な言動に終始したという告白であり、政治家としての罪は万死に値すると言えます。

社会党を戯画的にとらえれば、カヤの外で駄々をこねていた悪戯鬼が、やっとな大人になる機会を与えられたということでしょう。

二 「憲法改正」の訴え

中西元防衛庁長官でさえ憲法改正に触れた発言をした途端にクビになるお国柄ですので、現役自衛官の皆様は沈黙を守り、替わって自衛隊現役以外の同窓生が憲法改正のキャンペーンをして下さい。

各種世論調査によれば、憲法を改正した方がよいという意見が多数派を占めているのに、政治家が保身に汲々として臆病すぎるため、政治が世論よりも大幅に遅れてしまっています。

昨年十一月、読売新聞社が「憲法改正正試案」を呈示しましたが、憲法改正に一石どころか大石を投じる快挙です。ただ「国軍」とせず「自衛のための組織」としたり、国家非常事態に対処する条項がない点は、反対派を意識し過ぎて、防衛に関し腰が引けている印象を与えます。

軍隊と警察は本質的に全く異なる組織です。それなのに、自衛隊はその出

生に起因して警察的な要素を色濃く持つています。「国軍」としない限りそれは改まらないでしょう。単に「自衛のための組織」として認知しただけでは駄目なのです。法令、制度、待遇等の全てに亘って改正が必要です。

三 憲法改正がなぜ必要か

日本国憲法の前文には「われらは国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思う」「いずれの国家も、自国のことにみに専念して他国を無視してはならない」とあります。これは「国際協調主義」であり、金だけでなく人も出す国際貢献によって名誉ある地位を占めたいという誓いでもあります。

一方、第九条は自衛のための武力しか認めていないので「一國平和主義」です。前文と明かに矛盾しています。また、国連に相応に協力するために、日本国憲法を改正して国連憲章との整合を図る必要があります。

憲法がそのままでは、自衛隊は本質的には軍隊ですが法制上は軍隊ではなく、国際的には特殊な団体にすぎません。この特殊性は永年のお付き合いがある米軍は知っていますし、日本国民も勿論知っています。従って、米軍と共同して国土防衛をする際は、軍隊ではない特殊性からくる多くの不利点はカバーされます。

しかし、PKOとして世界各地に派遣された場合は、多くの国の軍隊と関わりがでてきますが、自衛隊という特殊性を仲々わかってもらえず、そのマインナスのツケはすべて派遣部隊に回ってきます。それでも、政治が自衛隊の名誉と地位向上にあまり努力しないの

で、自衛隊がPKOで成果を挙げて、自助努力として国民世論を喚起するという意味合いならPKOまでは納得できます。これとても、自衛隊のままなら列島守備隊なので、本務に支障ない範囲でやるべきであって、自衛隊法を改正して本務に加えることには疑問を感じます。国軍にしないのなら、自衛隊の国際貢献は副務としてのPKOまでを限度とすべきでしょう。現憲法のままでは全面的な国際貢献には無理があり、それ故に国会でもPKFを凍結した筈です。

PKFとして派遣するならば、憲法を改正して列国並に国軍とした上で出すべきです。可能性も与えず任務のみ過重にしたのでは、派遣される自衛官が可哀想です。国軍としての名誉も権限も待遇も与えられず、身の危険だけが列国の軍隊並というのでは、まさに悲劇的な漫画です。首相の「人(自衛官)にやさしい政治」はどうなっているのでしょうか。

国際貢献は貿易立国である日本にとって当然の義務です。それを果たす組織は自衛隊以外にはないでしょう。平和憲法という「家訓」をたてに武力不行使と言って理想を追求したつもりでも、世界の常識は「他国の青年だけに血を流させる気か」と言うでしょう。

安部常任理事国となって引け目を感じないためにも、全面的に国際協力するためにも、憲法を改正して自衛隊を国軍として認知すべきです。

四 憲法をどう改正するのか

この項は同窓会会長としての意見ではなく個人的な見解です。叩き台

を提供したいと思えます。

憲法の前文に示された平和主義や国際貢献の精神は貴重なものです。これは今後とも尊重すべきでしょう。

しかし、自衛隊が武装集団として機能するに際し現行憲法は不備が多いので、次の三点の改正が必要です。

第一点は、自衛隊を憲法で国軍として認知し、それを小中学生でもわかるような文書で明記することです。

日本の平和が永年に亘って維持されているのは、自衛隊の存在と日米安保条約のお陰であることは、常識ある全ての人が認めるところです。そして、自衛隊が戦力なき存在ではなく、本質的には軍隊なるが故に存在意義があることも自明のことです。

自分達の属している組織が憲法上疑義があり明文化されていない所謂「日陰者」であることは、士気に影響します。この士気というのは、武装集団にあつてとても重要な要素なのです。

また、強力な物理的破壊力を持つ自衛隊を憲法の枠外に放置しておくのは、猛獣を檻の外に出しておくようなもので危険であります。

第九条の改正は軍事大国への道と言って脅しをかける輩がいます。第一次大戦までと異なり、武力を行使しても領土も戦利金もとれず、逆に国民が戦火に晒されるだけで、損ばかり多く何の得もしないのが現代の戦争です。また、自衛隊という小さな組織でさえ演習場に事欠く日本です。軍事大国になる必要性も可能性も全くありません。

折角これまで健全に育ててきた国民的財産である自衛隊を不当に差別する

こと無く国軍として正当に位置づけ、きちんとコントロールしながら本来の力を十分に発揮させることが、国民の利益に繋がるのではないのでしょうか。

第二点は、国家非常事態に関して規定することです。現憲法を制定した時は米軍の占領下にあったため、非常事態には米軍が対処するようになっていました。今や独立国として非常時には自衛隊が対処するわけですが、これに関わる法制が全く不備であり、自衛隊は有事に機能できないおそれがあります。超法規であれば、文民統制に違反すると責められるでしょうし……。自衛隊だけでなく国家そのものが、有事には半身不随になってしまう危険があります。

第三点は、特別裁判所の設置を認めることです。軍刑法と軍法会議は武装集団を正しく運用するためには欠かせない機能です。有事には死の恐怖があるので、平時には考えられない異常事態になりがちです。その時に、平常心に一般の人に適用される法律だけでは、武装集団の秩序は維持できないでしょう。例え死の淵に臨んでも、部下が任務達成に邁進するよう統率するのが理想ですが、統率力だけで事が解決できると思えません。武装集団を正常に機能させるためには避けて通れない問題です。

わが国の防衛を真剣に考えた際、以上三点について憲法を改正することが必要だと私は考えます。これを「叩き台」として皆様も考えを進展させ、大いに改憲を訴えて下さい。

五 陳腐化した「日本国憲法」

日教組の平和教育とやらに毒された人々にとつては「憲法改正はとんでもない」と考えるでしょうが、世界的視野から眺めれば、日本国憲法は極めて古くなり陳腐化しています。即ち「新憲法」と称して馴染んできた日本国憲法は百七十三ヶ国のうち十五番目に古くなり、しかも施行後一度も改正していません。世界中で異例中の異例とされています。また「世界に冠たる平和憲法」というのも誤解であつて、七十九ヶ国が何等かの平和主義の規定を盛り込んでいます。

世の中の凄まじい速さでの変化に即応するためにも、憲法改正を躊躇すべきではないのです。

六 同窓会としての施策

懸案だった財団法人問題を白紙に戻すという形で決着をつけ、将来構想検討委員会を発足させました。その委員会は昨年初頭から活発に活動しています。皆様の御意見を十分に盛り込んで

うえ、来年三月末に同窓会のあるべき姿について答申が出されることになっています。その成果に大いなる期待を懸けているところです。

また、今年度から事務局の編集部を広報部と改称し人員も強化しました。徐々にPR面で効果を発揮してくるものと確信しています。

なお、現役会員への機関紙の配布は部隊の通郵便を利用していましたが、会員の手元に届かないという苦情が多いので、来年度から全会員ヘダイレクトメールで送るよう計画しています。

従つて、住所が変わる都度、事務局に新住所を御連絡下さい。こうすれば、副次効果として名簿が逐次正確になっていくことでしょう。また、転居の際は郵便局にも確実に届けましょう。

本年も皆様とご家族にとつて、幸福で健康な良き年でありませうお祈り申し上げます。

お 願 い

一、来年度から同窓会機関誌を同窓会全会員に直接郵送することになりました。つきましては、最新の住所を同窓会本部まで、電話、FAX、葉書等により御一報ください。

一、同窓会機関誌に掲載する広告を募集しています。掲載を依頼される方は、同窓会広報部長まで御連絡ください。

☎二三九 横須賀市走水一―一―二十

TEL ○四六八―四一―三八一○内線二七二三

将来構想検討委員会報告

一 全般

平成五年六月三十日の臨時評議員会での財団法人設立断念に伴い、「防衛大学校同窓会のあるべき姿を明らかにし、今後の運営の在り方について、長中期的見地から構想及び運営計画を策定する。」目的をもって、同年十月評議員会で「将来構想検討委員会」の発足が決議され同年十一月の総会で承認を受け、平成六年より一期陸の志摩 篤氏を委員長とする委員会は実質的な活動を開始しました。その主要な検討項目は次の三つであります。

- ①同窓会の活動範囲及び事業
- ②同窓会組織の検討・確立
- ③会則の抜本的見直し

委員会は、昨年十月末までに6回の委員会と4回の作業部会を開催すると共に、アンケート調査や委員の部隊訪問による意見聴取を行い、「将来の活動方向及び会則改正方向の大綱」を決定すべく、鋭意検討を進めております。

今までに、現状の問題点の指摘、他大学等の同窓会の状況調査を始めとして、特に退職会員の増加に伴う各種の問題点を検討し、支部の在り方、本部・事務局の組織の在り方・場所、将来活動方向、会則の不備事項等について議論を重ねております。

委員会では手弁当での検討とは言え、同窓会の将来について真剣かつ熱の入った意見を交わしており、現在予定通りの進捗状況となっております。

二 アンケート調査結果概要

委員会は昨年六月から七月にかけて、「同窓会将来方向の大綱」「同窓会会則改正の大綱」決定の資を得るため、現状の問題点、同窓会の在り方・進むべき方向、会則改正方向についてアンケート調査を実施しました。

調査対象は退職会員については約1/4の任意抽出とし1期から5期まで各期百名の計五百名、現役会員は各期期生会長、評議員、各支部長等の四百二十五名で総計九百二十五名で、回答率は約7割でありました。

調査結果につきましては、次のとおりです。
1Q 同窓会活動について知っていますか。(知っているものを複数回答で選択)

1位 会議及び名簿の発行(95%)、2位 親睦事業(74%)、3位 期生会活動助成(67%)

2Q 次頁グラフ表示

3Q 現在の同窓会組織は機能していると思いませんか。
1位 あまり機能していない(50%)、2位 大体機能している(46%)、3位 十分機能している(2%)

4Q 次頁グラフ表示

5Q 7Qは4Qで「積極案を選んだ方」への細部設問(省略)
8Q A「会員相互の親睦交流」B「母校への発展充実への援助」C「対外活動」の優先順位をつけて下さい。(択一)
1位 ABCの順(53%)、2位 ACBの順(16%)
3位 CBAの順(10%)、4位 BCAの順(7%)

9Q 4Qで「積極案を選んだ方」はどの様に実施すべきだと思いますか。(択一)
1位 同窓会組織を強化して実施(65%)、2位 財団法人を設立して実施(30%)、3位 その他(5%)

10Q 将来、同窓会活動の拠点として同窓会館または代替機能をもつことについてどう思いますか。(択一)
1位 代替機能(69%)、2位 必要なし(15%)、3位 会館を持つ(13%)

11Q 同窓会の機能強化を図るとすれば何が重要だと思いますか。(複数回答可)
1位 同窓会中央組織(理事会・事務局スタッフ等)の強化(62%)、2位 支部の強化(56%)、3位 その他(9%)

12Q 逐次退職会員が増加していく将来、支部にどのような機能を期待しますか。(択一)
1位 自主的な活動ができる機能を保持(70%)
2位 連絡機能のみ(20%)、3位 支部不要(5%)

13Q 次頁グラフ表示

その他、全回答者六百三十に名の内8割を越える約五百名の方から、文章で貴重かつ率直な意見を頂きました。委員会と致しましてはこれらのアンケート結果並びに貴重なご意見を十二分に踏まえまして、今後の検討に活用させていただきますとともに、前向きにかつ実行可能な計画を指して参りたいと存じます。

三 委員会の構成

委員長		志摩 篤 1期陸	
第一作業部会 (将来方向検討)		第二作業部会 (会則改正検討)	
部長	委員	部長	委員
阿部 博男	1期空	本間 敏昭	2期陸
菅原 祐亨	小原台	船山 眞弘	小原台
井川 宏	2期海	長谷川 孝一	2期空
井上 陽	3期陸	金子 光男	3期海
下村 教久	3期空	常田 頼史	4期陸
小今井 淡水	4期海	田中 厚彦	4期空
近藤 一郎	5期陸	野尻 勝馬	5期海
村上 健孝	5期空		
根岸 勝利	小原台		
委員代理	事務局	事務局	事務局
根岸 勝利	小原台	上野 明義	20期陸
事務局局長	君嶋 信	同補佐	福田 光信
同窓会東京分室長(アドバイザー)			1期空

四 今後の予定

委員会は、平成六年度末に同窓会の将来方向及び会則改正方向をまとめ、七年度上半期に再度アンケート調査を実施すると共に、委員の方面隊クラスへの意見聴取を行う等、できるだけ会員の皆様のご意見を伺い、答申案を作成する予定であります。

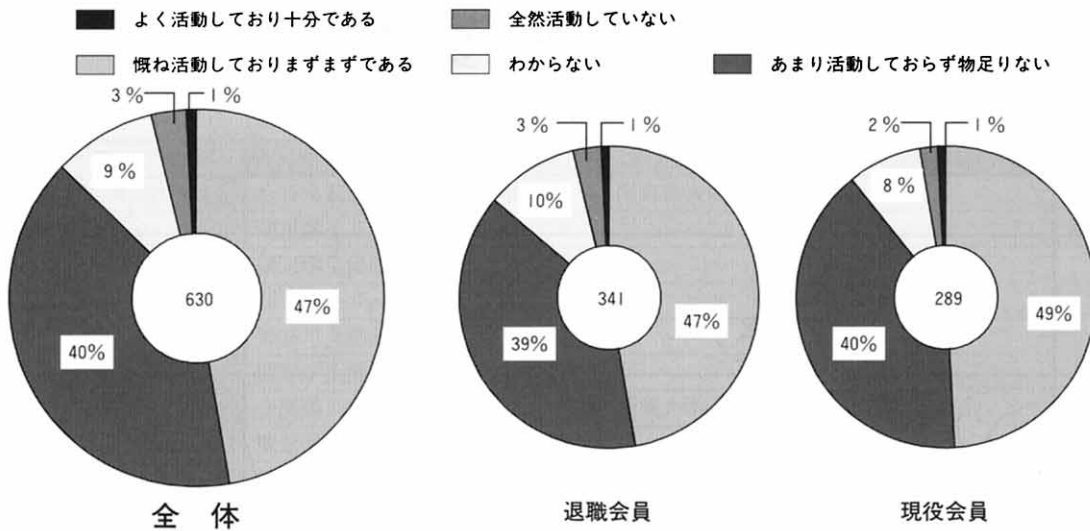
会員各位におかれましては、積極的なご協力、ご支援をお願い申し上げます。

また、将来の同窓会活動・組織及び会則改正等に関しましてご意見がございましたら、委員会事務局までご一報いただければと存じます。

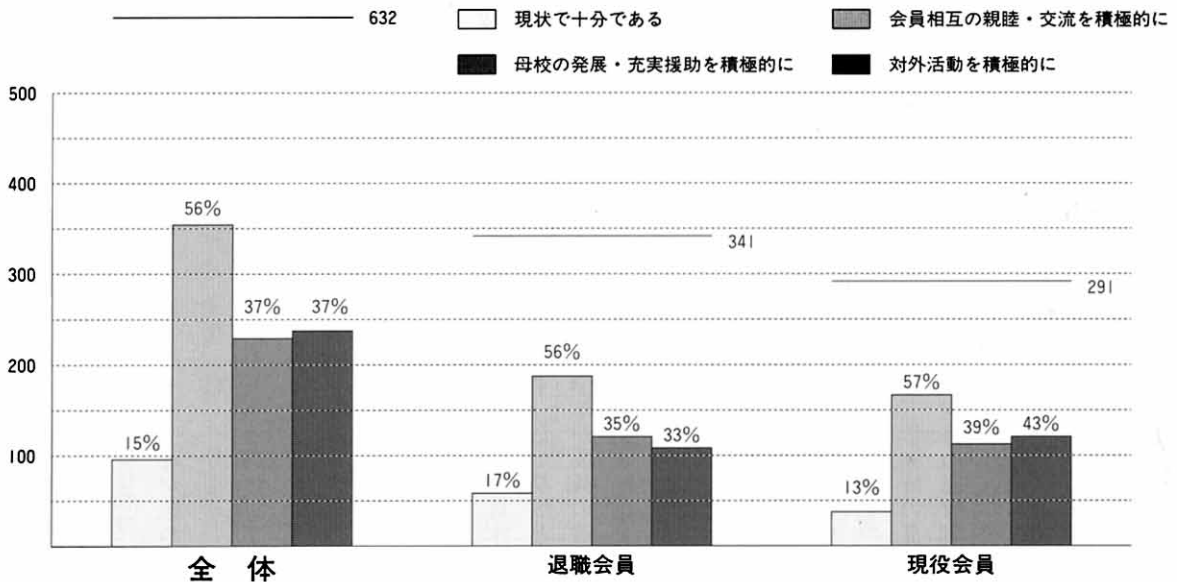
連絡先

〒一五三
東京都目黒区中目黒二丁目二番一
陸自幹部学校内「委員会事務局」
☎〇三(五七二)七〇〇九内線四二八三
専用線 八七五・四二八三

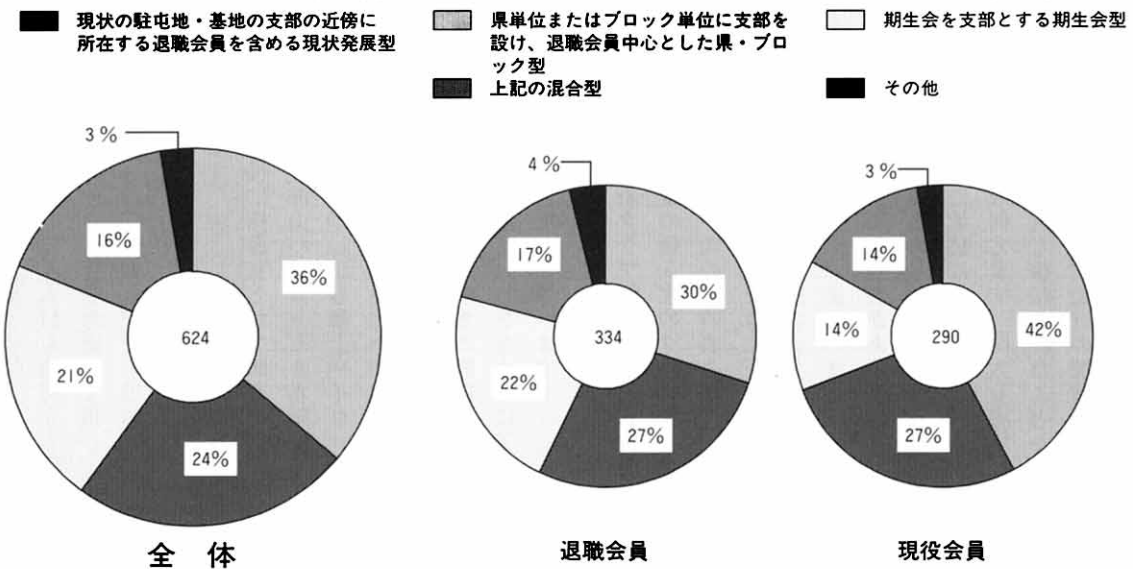
2 Q 現在の防大同窓会活動についてどう思いますか



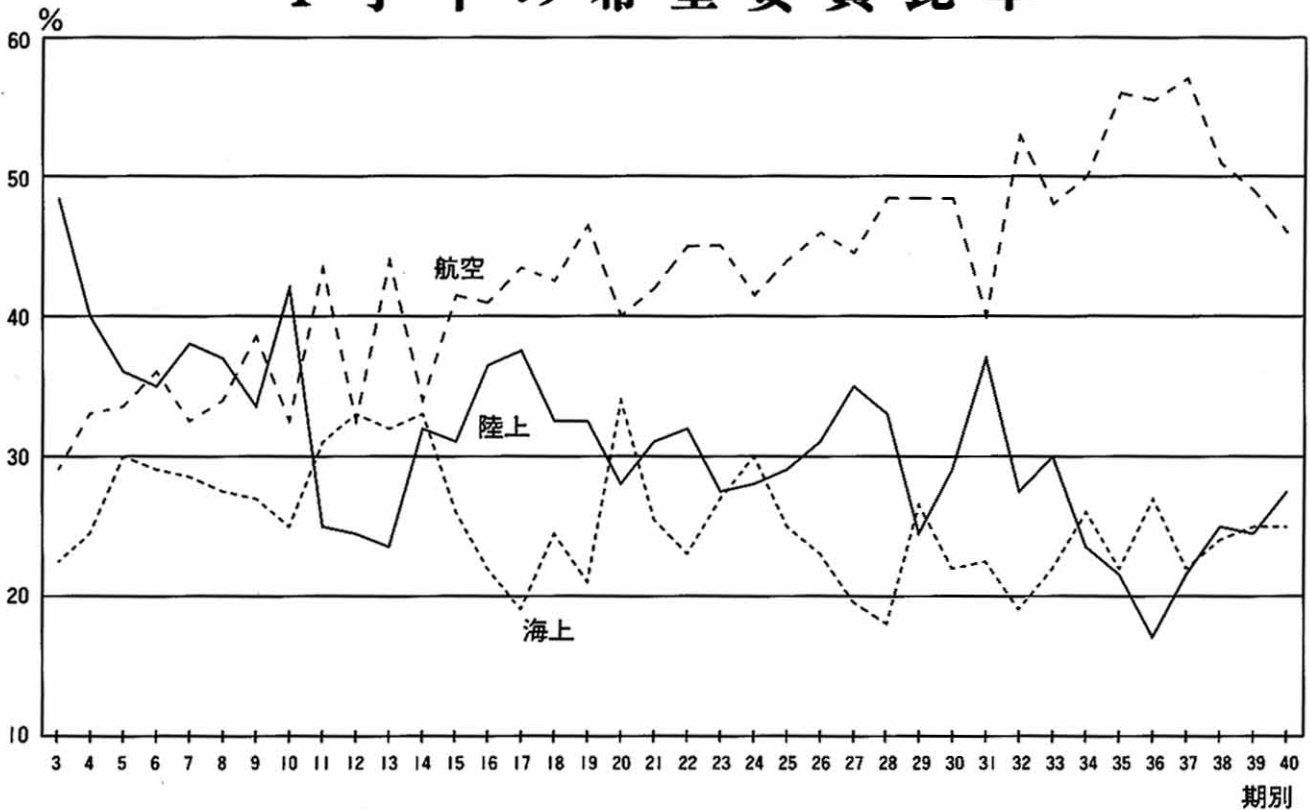
4 Q 将来の同窓会活動の方向はどうあるべきと思いますか。(複数回答可)



13 Q 退職会員が増加する将来、支部の構成はどうあるべきと思いますか。(択一)



1 学年の希望要員比率



〈陸・海・空要員の選択状況〉

上のグラフは防大三期生から四十期生までの第一学年時の第一希望の比率を表したものです。要員の配分は、各期の志望調査時の第一学年の総数により多少変動するものの、その比は、陸・海・空それぞれが概ね二対一対一です。指導官は、一学年全員が第一希望の要員になれるように、すなわちこの比率にあわせて学生が希望するように、入校当初よりガイダンス・朝礼等あらゆる機会を通じて教育します。

防大に入校したばかりの一年生にアンケートを取ると、大半の学生が、陸・海・空自衛隊への具体的な希望を持っておらず、ただ漠然としたものです。

第一学年が要員の選択に資する機会は、夏季定期訓練における各自衛隊の見学等ありますが、一番大きな影響力があるのは上級生からのアドバイスです。陸・海・空それぞれの要員が決定した上級生が、各要員の善し悪しを話すのを聞きながら要員を決めていくようです。その上級生の受けた印象の大半は、第三学年時の夏季定期訓練における約一ヶ月の部隊実習です。それぞれの部隊において隊員と共に生活及び訓練は、学生にとって最も思い出深いようで、上級生の下級生に対するアドバイスの大半は、部隊実習に受けた印象のようです。これをお読みの部隊のOBにとっては、訓練最盛期の

忙しい時期に実施しなければならない、煩わしい実習であるかもしれませんが、部隊実習に来た防大生は、次の陸・海・空自衛隊を担う人材を獲得する広報官であるという面を考慮して頂き、彼らにとって部隊実習が良き思い出となるよう今後も引き続きお願いしたいと思います。

最後に指導官として頭を痛めているのは、海上パイロットを希望する学生が少なく、しかも海上パイロットだけにはなりたくないという学生が多いことです。一学年及び海上要員の三学年が海上航空部隊に来た際には、海上航空部隊の素晴らしさを大いにアピールして頂きたいと思えます。

〈運動系クラブ新入生加入状況〉

本年度の新入生のクラブ加入状況については、次の頁の表の通りです。これを見てわかるように、武道系よりは球技系、また最近の人気スポーツに希望が集中しています。また、二学年時にカッター競技会があるということで、短艇委員会の希望が多いように、目先のことに敏感になるという最近の若者の気質も伺えます。防大も週休二日制、特外の制限も緩和されたことから、合宿期間の長短、土日の練習の有無、引退の時期も重要な選択要因になっているようです。このことは、新入生の勧誘のポスターからも伺えます。

平成6年度運動系校友会主要活動結果及び新入生加入状況

凡例：（）内は女子数

校 友 会 名	主 要 活 動 結 果	新入生加入数
短 艇 委 員 会	全日本競技会 8位 関東新人戦 1位	32
バスケットボール部	関東学生リーグ 6部残留	13 (1)
柔 道 部	関東学生優勝大会 2部残留	9
ラグビー部	関東学生リーグ 3部残留	48 (1)
サッカー部	神奈川大学リーグ 2部降格	21
剣 道 部	関東学生優勝大会 1回戦敗退	12 (2)
空 手 道 部	全国国公立大会 3位 関東大学選手権 ベスト 16	15 (2)
バレーボール部 (男子)	関東学生リーグ 6部昇格	11
〃 (女子)	関東学生リーグ 13部入格	6
卓 球 部	関東学生リーグ 5部昇格	7 (1)
陸 上 競 技 部	関東理工系大会 2位 箱根駅伝予選会 18位	13
硬 式 庭 球 部	関東理工系リーグ 8部残留	16 (1)
硬 式 野 球 部	春季神奈川リーグ 2部降格 秋季神奈川リーグ 2部残留	10
射 撃 部	全日本学生選手権 団体 (3姿勢) 10位 個人10位	5
水 泳 部	関東水球リーグ 4部残留 東日本理工系大会 2位	8
ハンドボール部	関東学生リーグ 7部降格	4
アメリカンフットボール部	関東学生リーグ 1部昇格	24
ヨ ッ ト 部	関東学生選手権 予選敗退	10
銃 剣 道 部	全日本優勝大会 団体 3位	10
ソフトテニス部	春季関東学生リーグ 9部昇格 秋季関東学生リーグ 9部残留	4 (1)
ボクシング部	関東学生リーグ 4部残留	5
レスリング部	東日本学生リーグ 2部残留	15
ボ ー ト 部	全日本大学選手権 ダブルスカル 8位	1
フィールドホッケー部 (男子)	関東学生リーグ 2部残留	12
〃 (女子)	関東学生リーグ 2部入格	2
パラシュート部	全日本選手権 (ジュニアの部) 個人 1位、2位、3位	4 (1)
準硬式野球部	春季神奈川6大学 3位 秋季神奈川6大学 3位	14
弓 道 部 (男子)	南関東リーグ 1部残留	5
〃 (女子)	南関東リーグ 3部残留	1
少林寺拳法部	全日本学生大会 (団体演武)優勝 (2段の部)優勝 (3人掛の部)準優勝 (初段の部)3位 (段外の部)3位	12
フェンシング部	関東学生リーグ (エペ・フルーレ) 4部残留 (サーブル) 3部残留	3
ウェイトリフティング部	神奈川選手権大会 (個人) 2位 3位	2
相 撲 部	全国相撲選手権 Cリーグ残留	1
バトミントン部 (男子)	関東学生リーグ 6部残留	8
〃 (女子)	関東学生リーグ 6部入格	0
体 操 部	神奈川県大会 (団体) 7位 関東理工系大会 (個人) 15位	2
自 動 車 部	JACSラリー 2位	3
グ ラ イ ダ ー 部	久住山岳滑翔大会 個人 2位	10 (1)
応援団リーガー部		5
山 岳 部		4 (1)
ワンダーフォーゲル部		6 (2)
合 気 道 部		13 (3)
居 合 道 部		3
吹 奏 楽 部		7 (2)
儀 仗 隊		22 (4)

期生会便り

一期生の現況

一期生会会長 深山 明敏

光陰矢の如く、一期生も今や赤いチャンチャンを着る時期になりました。後輩の諸君が、国の内外で目覚ましい活躍を続けていくことは本当に心強く、頼もしいかぎりであり、私も多少でも応援できればと考えています。

一期の仲間も逐次第三の人生に歩を進める者が増えてきており、期生会の活動方向も新たな転換期を迎えております。同窓会が将来の構想をちょうど今、検討してくれているように、私どもの期生会もこれからのように進んだら良いのかということを考えなければいけないと思っています。特に、役員及び事務局の在り方、会費の見直し連絡網の整備、ならびに毎月の昼食会（市一会）の実施要領等を検討することになっています。

国内外の情勢が、極めて不透明・不確実・不安定な時期にある折柄、一期生もそれぞれの分野で活躍しています。特に国政に参画している田村秀昭参議院議員にとっては、改選の時期になっています。与党や野党、また党派の如何にかかわらず、同じ釜の飯を食

べて草創期に苦楽を共にした仲間を再び国会に送り、自衛官の立場に立って真剣に防衛問題を論議してもらったため、何はともあれ同期生が一致団結して、先輩・後輩各位のご支援も得ながら有形・無形の応援を進めて行きたいものと考えているところです。

自衛官からは「行かされる立場」の論理を国会等で堂々と代弁し、国家政策に反映してくれるような議員の存在が求められているのではないかと思います。その意味において、田村参議院議員と足並みを揃えて衆議院を目指し静岡県の沼津・裾野・御殿場地区で出馬態勢の整備に草の根運動を意欲的に展開中の近藤一視君にとっても、夢が実現する機会が到来したならば、また光明を見出すべく、皆様方の力強いご支援を是非お願いしたいものと考えております。

皆様方にとって、それぞれより一層良い年になりますよう心からお祈り申し上げます。

二期生会の状況

二期生会会長 小田原 昭

ポスト自衛隊の生活も軌道にあり、皆様には益々ご健勝のことと拝察しま

す。同期生会としても、逐次その活動が組織的になりつつあることはご同慶にたえません。

さて、この紙面をお借りして、この一年の同期生会及び役員会の動きをご紹介させて頂きます。現在、掌握している同期生総数は三五六名（陸海空）です。北海道に七名、東北地区に六名、中京・近畿・中国地区に四九名、九州に二二名、残り二七三名が関東地区に生活の基盤を置いております。

二木会（毎月の昼食会）・関東地区に在る同期生で毎月第二木曜日に市ヶ谷駐屯地で昼食会を行っています。毎回五〇名前後が集まり、ビールを片手に話が弾んでいます。日頃のストレスの解消と情報の交換、懇親の場として盛況の内に続けられています。今後は、同期生会の意志決定の場としても活用出来るのでは？と思います。地方の方で御上京の節は是非御参加下さい。また、先般、関東地区の緊急連絡網を配布しました。大切に保管して下さい。ゴルフコンペ等・陸海空の各支部

毎コンペを実施しています。陸は毎月赤羽と千葉で交互に、空は四半期に一回赤羽で等、その他、テニスを四半期に一回、スキーシーズンには同好の者で白いゲレンデを楽しんでいます。良かったら是非御参加下さい。いろいろな輪を作り、皆さんに楽しんでいただきたらと願っています。さて、役員会と

して、この一年間は退官後の期生会活動の基礎づくりに焦点を当て作業を実施しました。その一つは、会則の改定です。既に改定趣旨をお手元にお届けしましたように、退官後の実態に合うように修正するとともに、地方の活動基盤を明確に致しました。この間、数次にわたる役員会を開き、また地方の同期生とも調整し一案を得ました。その二は名簿の作成です。住所等の掌握、原稿の作成、印刷、配布等いろいろな意味で苦勞しました。全体の名簿としては、恐らく、この名簿が最後の名簿になると思います。大事に保管して下さい。今後、当分の間は部分修正で済ませたいと思います。その他、同期生に関する情報を、どんな些細なことで結構ですから役員までお知らせ下さい。相互扶助は期生会が一番大きな任務であります。では皆さんお元気で！

五期生会会員へ

五期生会会長 松井甲子雄

去る四月末に関東地区会を開催しました。関東一円に在住の同期生約三〇〇名に御連絡を差し上げたところ、一七〇名余りの御夫妻が東京グランドホテル市ヶ谷の大広間に集まって下さいました。平山茂男元期生会指導教官を始め多くの来賓の祝辞を頂きながら懇親の宴を楽しみました。

五期生会規約によりますと、総会・

懇親会は五年毎に実施されることになっております。前回、平成三年春に小原台で実施したので、次回は平成八年春の予定です。防大及び湘南地区に在勤、在任の現役員が準備を担当致します。詳しい日程、場所等は改めて御連絡致しますので、是非とも御参加下さいませよう期待しております。

また期生会名簿の発行も二年毎になりましたので今秋は休刊です。御了承下さい。なお、再就職、再出発で勤務先、住所、電話等に変更があった会員は名簿添付のハガキか官用ハガキ、電話等で是非とも御連絡頂ければ幸いです。

航空一〇期生会報(平成六年度特別版)

一〇期生会会長 西川正長

航空一〇期生会は、歴代会長の卓越した統率と全会員の固い団結により、何れの期にも引けを取らない心強い活動を続けています。例えば会則に則り会員の冠婚葬祭への祝弔電報等、年一から二回の総会開催、四半期一回の親睦ゴルフ、各専攻班別の懇親会、各基地単位においては、十全会(幹候校四三期との合同親睦会)活動など幅広い運営を行っております。特に平成四年五月には防大入校三十周年記念パーティを横須賀「ホテル・セントラーザ」で開催し、会員及び夫人計九十余名が集い、防大人文学教場に記念品と

して姿見一式を贈呈しました。しかしながら、昨年度から既に、定年退職者が逐次始めており、今後の会の運営にも何らかの転機を余儀なくさせられそうです。なお、本年度からは、前会計理事松山君の発案により住所録に添えて会報を発刊し、既に第三報まで全国に発送しました。以下にこの紙面を借り、その要約紹介並びに新規連絡の臨時増刊号とさせて頂きます。会報一から三号要約及び連絡事項

一 十期生会役員紹介

会長 平田伸成

西川正長(四月から)

副会長 白岩利雄

企画理事 高部求

会計 西田正憲

松山豊(四月から)

磯貝壽夫(八月から)

評議員 瀬戸正胤

佐藤昌史(八月から)

監査 山中啓吉

二 六年四月二二日 六本木、ホテル「ラ・パンセ」で春の定期総会実施、

懇親会、役員の改選他実施、二十五

名参加

六年十月七日 同く「ラ・パン

セ」で秋の定期総会実施、懇親会及

び基地毎の近況紹介、二十二名参加

平成七年度定例総会は七年四月第

四週末の予定で準備中

三 定年退官者(平成五年四月から六

年十月末現在)

富吉(三術校)、藤原(中業隊)

布浦(百里防空隊)

四 御存知、幸治昌秀君主宰「航風館」

平成四年七月に永六輔氏、村上英子氏の参加を得て「風のサミット」を成功裏に開催、「風は地球の息づかい地球に優しいエネルギー」のユニークな活動は、新聞テレビその他で広く紹介済み、房総の行楽にふつと立ち寄るのに最適、宿泊も可 予約八七五五―五七〇

五 布浦つとむ君著「時、所、人、そして夢(ある航空自衛隊指揮官の追想)」は、編単部隊指揮官としての実体験を隊員との交情をベースに自らの人生観を交え、心血を注いだ名著であり、若手幹部の必読書かと考えます。訓練図書としても最適でしょう。(購入申し込みは 千三〇五 茨城県つくば市 稲岡七〇九の十五 布浦つとむ迄 一、四〇〇円)

六 次回十期生会報は最新の名簿を添えて各基地別の寄せ書きを収録する方式を予定します。顕著な出来事、人の動きなど何でも結構です。会計理事磯貝まで、都度お知らせ下さい。(電話、FAXとも八三三―三八五〇 桧町中央業務隊本部、原稿手書き可)

十二期生会の皆様へ

十二期生会会長 佐藤 哲

全国津々浦々で御活躍中の十二期生の皆様、お元気のことと存じます。過日、テレビを見ておりましたら東京オリンピックで活躍した円谷選手を題材にした番組がありました。あの国立競技場での開会式で、各国の国名の書かれたプラカードを持った防衛大

学校の一学年(と二学年)が、紺の上衣・白のスボンと肩吊り弾帯という颯爽とした服装で行進し、多くの国民に爽やかさと凛々しい印象を残したことを思い出しました。あれから、二十三年間、諸兄におかれては、それぞれの時期・立場で研鑽・努力され、自衛隊の為に将来を見据えながら幾多の足跡を残しつつ職務を果たされてこられた訳であり、御同慶の至りです。

六年前、小原台で二十周年記念行事が催された頃は、国際的には米ソINF削減交渉の成功等に見られる冷戦構造の最中で、また国内適には自民党の単独政権が揺るぎない情勢でしたが、昨今はポスト冷戦で新たな紛争が湧出し、自衛隊が湾岸戦争後におけるペルシャ湾での掃海部隊の活躍以来、平成四年からはカンボジアに続きモザンビークでPKOに従事しており、現在は社会党首に率いられた自社等連立政権の下、人道援助の目的で約四〇〇名の「ルワンダ難民救援隊」がザイルの

ゴマ市で活躍中という情勢に大きく変化してまいりました。即ち自衛隊が日本の領土外で列国の軍隊と同様の活躍を果たすことに国内外の人々がもつてきた懸念が払拭され、幅広い国民の支持を得て、更にこれらの分野でも貢献が期待される時代になりました。このため、自衛隊のそれぞれのポストで重責を担う我々の見識と団結が一層大切になってきたものと感じます。

さりとて、我々の現役時代の終焉も見通せる時期でもありません。このような時期に家族を含めて陸海空同期生の意志疎通と親睦を深め、且つ民間にて活躍中の同期生諸兄との交流を広げると共に、将来の連帯について共通の認識を得ることなどの目的をもって、防大卒業三十周年という節目に有意義な行事を実施する提案があり、有志の尽力でこの事業の準備が進められていることは、既に諸兄の御承知のとおりであります。折角の機会ですので、この誌上で期生会本部で準備を進めている「防大卒業三十周年記念行事」について紹介させていただきます。

この件につきましては、実行委員会からアンケートが実施されて、陸一〇八名、海四四名、空五六名の諸兄から回答及び貴重なアイデアが寄せられ、その結果がまとまりました。それによりますと、全般構想は次の通りです。

時期 平成十年四月末（GW初日）

予定

場所 横須賀市内（小原台では特別な事業は実施しない）

参加態様 原則として夫婦同伴

予算 会員一人当たり約三万円の予定

招待範囲 卒業時の指導教官、卒研（同伴Dパーティー代含む）

の教授及び会員遺族（夫人）で希望される方

実施事項 総会、記念誌の発行、記念品の作成、記念講話、記念パーティー

以上の構想を実施するため、総務委員・記念誌委員・記念品委員・記念講話委員会及び記念パーティー委員が組織されました。そして業務は七年度から着手されることとなっています。今後、各担当チームが中心になって準備を進めて頂く訳ですので、諸兄の御協力をお願い致します。最後に諸兄の御健勝と益々の御発展を御祈念申し上げます。挨拶とさせていただきます。

第十三期期生会の現状

第十三期期生会会長 牧木信近

一期生会組織

防衛大学第十三期期生会の組織は、昭和五五年三月二日（日）十四〇〇から十六〇〇市ヶ谷会館で開催された期生会総会の時承認を受けた「防衛大学第十三期生会会則」に基づいています。それは、次のとおりです。

（組織）第三条

一 本会の会員は、防衛大学第十三期卒業生とする。

二 本会の運営にあたり、本部並びに陸上支部、海上支部及び航空支部に次の役員を設置する。

（一）本部

会長一名、副会長二名並びに理事、庶務及び会計各三名

（二）陸上支部、海上支部及び航空支部責任者各一名並びに理事、庶務及び会計各一名

三 役員の出は次による。

（一）会長及び副会長は、自己の所属する陸上支部／海上支部／航空支部の役員をそれぞれ兼任するものとし、原則として学生隊長学生長経験者が三年任期の交代制で就任する。

（二）理事、庶務及び会計は自己の所属する陸上支部／海上支部／航空支部の役員をそれぞれ兼任するものとし会長・副会長（支部責任者）がその都度指名する。

二 活動状況

通常は、支部単位の活動が主であります。特に海上支部及び航空支部は、幹部候補生学校（六十九幹候）の期生会として活動が多く、防大三期のみによる親睦活動の場は極めて少ないようです。三年度毎の会長交代の時期（三月から四月）に原則として期生会総会の開催及び近況を添えた会員名簿の作成を実施しています。なお、歴代の期生会会長は次のとおりです。

昭和四十四年から五十四年度

（陸） 丸田清次郎

昭和五十五年から五十七年度

（空） 内山好夫

昭和五十八年から六十年

（海） 牧本信近

昭和六十一年から六十三年度

（陸） 山下輝男

平成元年から三年度

（空） 内山好夫

平成四年度から六年度

（海） 牧本信近

三 将来展望

平素の親睦活動については、防大十三期のクラスから陸自、海自、空自の六十九幹候のコレスへと拡大して、B出身者・U出身者ともに連帯を図りたいものです。また、非現役会員（既に自衛隊を退職した会員）との交流の現状は、個人レベルで平素から実施しているものの、組織レベルでは期生会総会だけであります。そこで、各地方支部において、組織として平素の活動を一緒にやる方を検討しています。以上の二件についても、会員各位よりしく願います。

十六期生会だより

十六期生会会長代理 角田 司

同窓会員の皆様には益々御健勝にて御活躍のこととお喜び申し上げます。

一九六八年小原台に集った十六期生も一九七二年卒業後二十二年を経過しました。今回は一回目ですので、十六期生会活動の概要等を御紹介いたします。

本会の活動は、同期生相互の親睦と団結を図ることを目的に行っておりませんが、一九八三年に殉職者の弔慰を契機に「本部」「陸・海・空部会」を設ける等の組織の強化及び会計業務の改善を図り今日に至っております。主たる活動としては、二年に一回の会報「聡明」の発行、卒業十六周年記念行事、総会の実施等がありますが、同窓会活動支援としまして、小原台クラブとともに同窓会三十周年記念行事の裏方支援を担任致しました。

来年度には十六期生も自衛隊二十五周年勤務の記念章を着けることとなりますが、民間企業等で活躍している同期生共々、「防衛力の再編」等の新たなチャレンジの大波を、働き盛りの四十代としてたち向かえることを誇りとし、厳しい職務に邁進しつつ、更に同期の絆を強めるとともに、現役学生及び同窓会活動への献身を体现する期生会活動を行っていきたくと願っております。今後とも本会对する同窓会員皆様のご理解・御協力をお願い申

し上げ紹介と致します。

十七期生の皆様へ

十七期生会

会長 陸幕人事部 鈴木 陽

副会長 海幕人事部 久保 秀人

副会長 空幕人事部 小川 剛義

秋も深まり朝夕めっきり寒くなって参りましたが、同期生の皆様におかれましては益々御健勝にて部隊長、幕僚、教官、研究員等様々な場所御活躍のことと拝察いたします。特に今は「ルワンダ難民救援隊」が九月に派遣され、同時にこれを直接支援する航空輸送隊がアフリカの地に展開するという、これまでとまた一つ違った形での国際貢献が行われおりますが、我が同期も副隊長、幕僚、現地支援チーム、ザイール大使館勤務要員と重要な職務に邁進しております。早いもので、同期が一同に会し「卒業二十周年記念パーティ」を東京で催してから二年の月日が経ちますが大変意義の深かったものと感じております。いま、そのときの再会が縁となって公私にわたる協力・支援関係が行われている例も伺っています。冒頭に申し上げました様に、卒業二十周年それぞれ重要な地位にある我々十七期の団結が自衛隊の一つの原動力になっていることは間違いなく、さらに強固なものにしていきたくと願っております。さて、振り返って四十代半ばの年

代にさしかかった今、それぞれの家庭の中で良き父、夫であることは勿論良き社会人たらんとして皆様努力していることと思いますが、仕事から少し離れたところでの繋がりの一つとして同期生会の意義もあるかも知れません。この答を見つけることは「仕事人間」的生活に浸かっている我々にとって少し難しいことかも知れませんが、これからの同期生会についても何か考えなくてはと思うこの頃です。数年後、また皆で集うことを考えておりますが、何かいい知恵がありましたら教えて下さい。最後になりましたが、益々の御活躍と御家族共々の御健康と御多幸をお祈りいたします。

十八期生会だより

十八期生会会長 柳原 孝重

昭和四九年三月に小原台を去って以来二〇年、せり出す腹に対抗すべくダイエツト作戦を展開するもの予測した成果には遠く、また次第に寂しくなる頭頂部に昔日の姿を再生せんと高額医療品に投資するものの、これまた予期した成果に遠く闘志もしばし萎え気味となる今日この頃です。

さて、十八期生会は本年二月、学校長、同窓会長、在校時の恩師及び指導教官等にお越し頂き期生会二十周年記念行事を実施しました。「同じ釜の飯を食った仲間同士」久しぶりに自由闊

達な雰囲気に戻り、当時を懐かしむとともに期生会団結の意気込みを新たにしたいところです。未だ修業の足りない身ではあるものの、「我、組織の原動力なり」と自覚し、先輩期、後輩期と連携して、防大同窓会の発展に寄与したいと考えております。

今後、活発な期生会活動を実施するため、本コーナーを大いに活用させて頂きます。

十九期生会だより

十九期生会会長 酒井 健

第十九期生会会員の皆様お元気ですか。司令部等の幕僚として、部隊等指揮官として、または会社等の中核として御活躍のこととお慶び申し上げます。ちなみに、湾岸戦争以来脚光を浴びているPKOでも同期生が活躍しております。

UNTAAC第1次派遣隊に若松幹泰君が、カンボジア派遣海上輸送補給部隊に斉藤力君及び西耕平君が、ルワンダ難民救援隊に加川健二君及び黒川博士君が参加し、任務を完遂され無事帰国しました。また、コレラ・黄熱病・ツエツエバエ等々と格闘しつつ任務を遂行しております。「祈 任務完遂・無事帰国！」

さて、我々第十九期も昭和五〇年早春に小原台を巣立ち来年三月で卒業二〇周年を迎えることとなりました。日本の二一世紀の担い手として我々第十

九期生の心意気を示すとともに、益々の団結を図るべく、只今検町に勤務する十九期統合戦力が記念行事を計画しておりますので、期生会会員の皆様の積極的な御支援、御協力をお願いいたします。細部は後日御案内申し上げます。

記念行事の概要

時期 平成七年二月十八日(土)

一六三〇から二〇〇〇

場所 赤坂プリンスホテル

千代田区紀尾井町一の一六

内容 記念講演

猪口邦子女史(上智大教授)

の講演

記念パーティー

在校間お世話になった方々を御招待し努めて夫人同伴で、同期生の旧交を暖める場とする。その他 同期生名簿等の作成・配布問い合わせ先

陸 幾多光治(陸幕運用課)

(内線)二五四二

三本明世(陸幕防衛課)

(内線)二四九三

海 国井晶(海幕航空機課)

(内線)二八九一

空 富田修(空幕防衛課)

(内線)三二六四

二十六期生会だより

二十六期生会会長 屋代 律夫

二十六期の皆さんお元気ですか、私達も卒業してはや十二年がたちました。まだまだ若い若いと思っておりますが今年の卒業生は三十八期、自分の年齢を考えるとやはり年々防大時代が遠い昔となっているのを感じております。しかし、未だ同期生と再会するたび学生時代がよみがえり、すぐに意気投合できるのは私だけではないと思います。周りの人たちの「何倍もある大きな声」で雑談できるのはやはり同期生同士だからではないでしょうか。自分の人生・環境そして社会の中で黙々と走っているときに、ふと時間が止まるような気がするのは学生時代から、苦しいこと、悲しいこと、楽しかったことを分かち合ってきた者同士だからなのだと思います。

さて、その同期生会を一九九六年のオリンピックの年に全国規模で東京で実施する予定であります。その準備として来年全員が集えることを心から願っております。

二十七期生だより

二十七期生会会長 小林 茂

二十七期生会では、去る六月二十五日、京王プラザ四階扇の間において同期生会を挙行しました。もともとは卒業後十年目を期して行おうと考えていたのですが、準備期間等々の関係から卒業十一年目の開催となりました。今回の

「期生会だより」では、残念ながら当日の期生会に参加できなかった方々への御報告から文を綴ってみようかと思えます。

当日は、あいにくの雨模様でしたが、初代の期担当指導教官の中村様、二代目担当指導教官の長池様、卒業時の第一中隊指導教官の茂木様にもご参加していただき、総勢二〇〇余名という非常に多くの同期生の参加によって盛大な会を催すことができました。互いに懐かしい顔々が集まり「全然、昔と変わってないな。」などと言いつつ

(しかし、二十歳前後の若者から見れば明らかにお互いに年をとっている)。最後には「道遥歌」(勿論口上に始まりとなり、全員の合唱による伴奏につながり、歌へと引き継がれるあのパターンです。)で散会となりました。散会后もそれぞれのつながり毎二次会へと流れていきました。これほど期生会を盛況にとりおこなうことができたのも、準備に携わった方々の努力と期生会全員の何とかが参加しようという意志の表れによるもので、我々自ら高く評価できるものだと思います。

懇親会の実施に先だって総会を実施し、役員の変更と今後の活動について取り決めました。当日参加できなかった方々には事後承諾となりますが、この紙面上での報告でご勘弁お願いしたいと思えます。まず役員に関してです

が、会長は前会長の高山君からの依頼を受け、私、小林がさせていただくこととなりました。どうも東京にいる期間が長くなりそうなので、結構便利かななどと自分では思ったりしています。副会長・会計は私の一存で決めさせて頂きまして、副会長は池君(「イケ、タロウくん」です。)、会計は佐藤君(同期の皆様には「マサヒサ」の方が通りがいいかもしれない。)をお願いしました。その他の係については特に決める必要性もないと判断し、三名だけを役員とすることとしました。

さて、今後の活動ですが、最大の事業はやはり次の期生会総会の実施です。次の総会は今から十年後、平成一六年に東京で実施したいと考えています。次回開催の準備も在京の同期生数名によるチームを作って実施したいと思えますので、その時に東京にいる方は御協力のほど宜しくお願いします。その時には、今回参加できなかった方にも是非参加していただき、今回にも増して盛況な会となるよう頑張ります。最後にになりましたが、前会長の高山君のこれまでの労をねぎらい、「期生会だより」へ寄稿いたします。

三十期生だより

三十期生会会長 堀切光彦

お久しぶりです。いかがお過ごしでしょうか?このたび、「ゆうかり」が

「小原台だより」に生まれ変わり「期生会だより」のコーナーができました。今後は、このコーナーを活用して期の連絡を図りたいと思います。まず手始めに、防大卒業後九年目の陸・海・空・民のそれぞれの同期の近況を（一般）をお知らせいたします。

陸上便り（堀内・松本十三普連）

ほとんどの者が一昨年に幹部上級課程を卒業し、いよいよ中堅幹部として脂ののった時期です。部隊にあつては中隊長等として、方面・師団・各部隊の司令部にあつては（子）幕僚としてあるいは指揮幕僚課程の学生または受験生として奮闘しています。

海上便り（清末・自衛艦隊司令部）

ほとんどの者がここ何年かで中級課程に入校（期間は様々）の時期です。艦艇勤務の者は航海長・砲雷長・船務長等に、パイロットは航空機を降りて陸上勤務をする時期で、早い者では海幕で勤務する者も出ています。

航空便り（池田・防大指導教官）

パイロットの者は四機編隊の編隊長や航空集団の教官をやっています。変わり種では高橋（とおる）君が政府専用機の出納長をやっています。

民間便り（土村・熊本県庁）

最近自衛隊を辞めました。現在、郷里の熊本で県庁に勤めつつ実家に農業を細々とやっています。皆さん米は国産を食べましょう。

期生会名簿の再編について

ご承知のとおり名簿（住所録）の整備が遅れております。名簿の整備にあつては時間と労力と忍耐を要するため、度々の申し送りによって時機を逸し、住所等が時代遅れになっていきます。この責めはひとえに私にあります。この度、このコーナーを利用して名簿の整備を実施しようと思います。各自の現況を左記の宛先までハガキでお知らせ下さい。

宛先 四一〇一四 静岡県駿東郡小山町須走四八一―二七

富教団本三科 堀切 光彦

現況の内容

おとところ…住所、電話番号

おつとめ…現在の所属（会社）、役職名、職業等

その他…同期に伝えたい近況等

締め切り 平成七年一月十五日（年賀状可）

新名簿発簡予定 平成七年二月十五日

*名簿の興廃の一戦にあり、各員必ず一報せよ！連絡待つ

三十八期生会だより

三十八期生会会長 石井 浩之

はじめまして、今年度より伝統ある防大同窓会に入会しました三十八期生会です。平成六年三月に小原台を巣立ち、陸海空それぞれの幹候校へと進んだ我々も、早いもので陸上及び航空自

衛官におきましては、それぞれの補職も決定し、全国各地の部隊へと配属されました。防大において屈指の団結力を誇った三十八期生も、いよいよその真価をとわれる時期が到来しつつあります。各部隊におきましては、諸先輩の皆様いろいろなとお世話になることと思ひますが、御指導のほど宜しくお願い致します。

それではここで私たちの近況をお知らせしたいと思います。

陸上においては、去る九月三〇日に久留米の幹候校を卒業し、それぞれの部隊において隊付教育を受けている最中でありまして、もしかしたら、この記事を御覧の先輩方の近くで勤務しているかも知れません。見かけたら是非声を掛けて下さい。尚、戦闘職種については富士学校に平成七年一月入校予定であります。

海上につきましては、幹候校における厳しい訓練の真つ最中でありまして、夏場の猛暑の中での護衛艦実習、そして原村における野外戦闘訓練と海へ山へまさしく体力の限界に挑戦しております。

航空は九月一四日に奈良の幹候校を卒業し、全国各地の部隊で隊付教育を受けております。職種によっては早い者で十月末から術科学校への入校が決まっており、着々と部隊の原動力となるべく力を蓄えているところです。パ

イロットコースへは七十三名中二十四名が進んでおります。尚、三十八期生会に対する御要望等ございましたら、私、石井候補生まで御連絡下さい。様々な形で諸先輩方及び同期の親睦を深めることができれば幸いです。

最後に防大同窓会の御発展を心から祈念して、三十八期生会の近況報告を終わりたいと思います。

航空自衛隊三沢基地北防群防空管制隊 専用線（八一二七―二七二二）

小原台クラブの活動について

小原台クラブ会長 菅沼祐幸

同窓生の皆様いかがお過ごしでしょうか。小原台クラブは防大に籍を置きながら、中途で退学したり、卒業しても民間企業や自営業に転じた者たちが集まり、相互扶助と親睦を目的として設立しましたが、今や定年退職組も相当数輩出して、民間で活躍されています。

小原台クラブとしても、このような時の流れを十分認識し、防大出身者の民間に在る活力を結合して、新しい時代的要求に応じられるような団体になりたいと考えております。

そのために、本会の活動目標として、三つの柱となる目標を考えております。一つは、母校及び母校同窓会への協力、支援であり、二つには会員相互の親睦の増進、相互扶助の体制の確立、

三つには本会自体の社会的存在の確立とその働きの拡大であります。具体的な行動については、企画、広報、文化、相談の各委員会を通じて、右の目標に向かって、試行錯誤を重ねながら進んでいるところであります。

我がクラブの実績としては、防大同窓会三十周年記念行事における本会の協力、支援の実績については、多くの方に評価していただいたものと自負しております。

また会員相互の親睦や、より高い社会活動への参加、異業種、同業種間の交流を通じて、より活発な経済界への参加機会の拡大を図るために、毎月第三金曜日に副会長長根岸勝利君の応接間をお借りして、自由な討論や談話、自己紹介や今日的事業の動向など、全く自由な立場で話し合う場を設けています。酒肴も簡単なものですが十分用意され、卒業期の上下のわけへだてもなく、話もはずみお互いを知り合う良い機会と好評です。ただ参加できる人数として二十名前後のスペースしかないことは残念なところではありますが、それはそれなりに十分機能を果たしていると思っております。二ヶ月一度の各期幹事会もお互いを知り得る方法とします。

本会の事務局は東京都品川区旗の台五の十五の十五コーポ野村旗の台二〇一（電話三七八五―一六六四）であります。

ます。本会の活動に対し、同窓生各位の御理解を心からお願い申し上げます。

防衛大学校の近況

四月四日に山口防衛政務次官をお迎えして入校式が行われ、本科四十二期学生五〇五名、理工学研究科学生七十五名が入校致しました。

四月二十八日にカッター競技会が行われ、第二大隊が五年連続の総合優勝、しかも、決勝レースにおいて一位から三位までを独占するという快挙を成し遂げました。

九月十日に水泳競技会が行われ、第一大隊が二年連続の優勝をしました。

三十九期の門倉光慶（航空要員）学生が、十月一日から五日の間、アイルランドで行われたウォールハンドボール世界大会に日本代表として参加しました。

十月下旬から十一月月上旬に愛知県で行われた国民体育大会に三十九期の松崎英治（海上要員）学生が銃剣道競技に、四十期の弥頭親善（陸上要員）学生がボクシング競技に神奈川県代表として参加しました。

十一月十三日の開校祭において棒倒しが行われ、第一大隊が三連覇を達成し、海軍機関学校同窓会から三年連続優勝記念杯が合わせて授与されました。



平成5年度予算使用実績

防大同窓会経理部
平成6年11月12日

担当部	科 目	予 算	実 績	備 考
事業部	総 会 費	2,800,000	2,681,360	
	期生会支援費	1,200,000	923,870	
	校友会対外活動助成費	1,000,000	0	
	開校祭助成費	2,000,000	1,978,012	
	小 計	7,680,000	5,583,242	
総務部	顕彰碑献花式費	600,000	533,135	
	顕彰室整備支援費	300,000	192,911	
	慶弔費(弔慰・供花)	1,000,000	312,266	
	職員定年退職者記念費	100,000	58,710	
	事務通信維持費	500,000	486,447	
	東京事務所運営費	3,180,000	3,180,000	
	評議委員会運営費	500,000	913,969	
小 計	6,180,000	5,677,438		
編集部	機関誌発行費	800,000	915,887	
	事務通信費	50,000	40,801	
	小 計	850,000	956,688	
人事部	同窓会名簿整理費	1,000,000	1,455,721	
	事務通信費	100,000	0	
	小 計	1,100,000	1,455,721	
経理部	会長運営費	650,000	494,319	
	事務員雇用費	2,000,000	2,000,000	
	事務通信費	700,000	723,324	
	交 通 費	150,000	81,360	
	会 議 費	200,000	195,823	
	予 備 費	2,000,000	0	
小 計	5,700,000	3,494,826		
財団法人 関 連	財団法人設立基金	100,000,000	0	
	財団法人設立委員会活動費	1,000,000	1,000,000	
	小 計	101,000,000	1,000,000	
合 計		122,510,000	18,167,915	

平成7年度予算支出計画

防大同窓会経理部
平成6年11月12日

担当部	科 目	予 算	6 年 度 比	摘 要
事業部	総 会 費	3,410,000	+610,000	会員の増加及びダイレクトメールの実施 過去の実績を反映
	期生会支援費	700,000	-500,000	
	校友会対外活動助成費	1,000,000	0	
	開校祭助成費	2,000,000	0	
	小 計	7,110,000	+110,000	
総務部	顕彰碑献花式費	600,000	0	防大が担当実施
	顕彰室整備支援費	0	-300,000	
	慶弔費(弔慰・供花)	700,000	0	
	職員定年退職者記念費	350,000	0	
	事務通信維持費	1,760,000	0	
	東京事務所運営費	1,560,000	-1,620,000	
	評議委員会運営費	500,000	0	
小 計	4,310,000	-1,920,000		
広報部	機関誌発行費	3,976,000	+2,576,000	機関誌の充実及びダイレクトメールの実施
	事務通信費	50,000	0	
	小 計	4,026,000	+2,576,000	
人事部	事務通信費	0	-100,000	
	小 計	0	-100,000	
経理部	会長運営費	500,000	-150,000	期生会長活動費等の削減
	事務員雇用費	2,000,000	0	
	事務通信費	650,000	0	
	交 通 費	150,000	0	
	会 議 費	200,000	0	
	予 備 費	2,000,000	-1,000,000	
小 計	5,500,000	-1,150,000		
将来構想	将来構想検討委員会活動費	1,000,000	0	
	小 計	1,000,000	0	
合 計		21,946,000	-484,000	

平成六年度同窓会行事

十月 評議員会

平成五年度決算報告
 平成六年度予算案審議
 同窓会会員に対する連絡方法の変更案議決
 準公務の顕彰者報告
 本年度の顕彰者報告

十一月 顕彰碑献花式

公務に準じて他界された四名の方々の御遺族の参列を賜り、しめやかに執り行なわれました。

総会

平成五年度決算報告承認
 平成六年度予算案承認
 同窓会会員に対する連絡方法の変更案承認
 準公務の顕彰者報告
 本年度の顕彰者報告

広報部からのお知らせ

同窓会機関誌は本号から「期生会便り」というコーナーを設け、会員の皆様にとってより興味のあるものになりました。

このコーナーの目的は、期生会各期の親睦をさらに深めるとともに、同窓会会員に対して活動状況を紹介することであります。このコーナーは、各期期生会長をはじめとする会員皆様方のご協力なくしては成り立ちません。今後とも御協力宜しくお願い致します。なを本年度原稿を送って頂いた各期期生会長の皆様にこの場を借りて御礼申し上げます。

さらに来年度からは、同窓会会員の皆様に機関誌を直接送付するダイレクトメール方式により、皆様の手元に少しでも早く届けられるようにと考えています。住所変更された場合には、同窓会本部まで御一報ください。さらに、各期期生会で名簿を管理されている方々のご協力を宜しくお願い致します。

また、ダイレクトメール方式による郵送費用の増加分を広告による収益で補いたいと考えております。各企業等で御活躍されている皆様方の広告の掲載によるご協力を宜しくお願い致します。

なを、掲載の依頼については広報部長にお願い致します。

平成六年度同窓会事務局役員

職名	氏名	期別	要員	勤務先	電話
会長	中尾 時久	1	(陸)	日本工機(株)	03-3436-1223
副会長兼事務局長	安岡 義純	5	(空)	防大電子工学	専 8-40-2272
副会長	石飛 勇次	10	陸	陸幕管理部	専 8-33-2410
理事(法務担当)	菅沼 祐幸	1	(空)	菅沼法律事務所	03-3465-1650
理事(会計担当)	後藤 薫	1	(陸)	後藤会計事務所	0423-74-4759
理事(総務担当)	松村 嘉夫	1	(空)	三菱重工(株)	03-3202-2295
理事(総務担当)	中村 義一	2	(陸)	防大材料物性工学	専 8-40-2381
副事務局長	峯村 勇	22	海	防大2大隊事務室	専 8-40-2725
総務部長	福島 睦	26	空	防大31中隊	専 8-40-2731
人事部長	久木田善人	24	海	防大11中隊	専 8-40-2711
経理部長	納富 茂年	23	空	防大4大隊事務室	専 8-40-2745
事業部長	白坂 昌行	26	陸	防大41中隊	専 8-40-2741
広報部長	堀井 克哉	25	陸	防大13中隊	専 8-40-2713

事務局連絡先

☎二三九 横須賀市走水一―十一―二十

TEL ○四六八―四一―三八一〇内線二七〇七

FAX ○四六八―四四―三三〇一

専用線 八―四〇―二七〇七

東京分室連絡先(代表) 福田光信(二期)

☎一〇六 東京都港区六本木七―十八―十八

TEL ○三一三四七九―九二五四

専用線、八―三二―五七四五

小原台だより

VOL. 3

平成8年1月1日

発行 防衛大学校同窓会
編集 五領 隆男、徳留 和弘
上大迫 淳、右田 竜治
印刷 聯エイコープリント



目次

会長挨拶	1
総会報告	2
平成六年度決算報告	4
平成六年度予算使用実績	4
平成八年度予算	5
平成八年度予算支出計画	5
特集「防大は今」	6
学生の海外派遣実績	
留学所感	
六年度運動系校友会活動結果	
期生会便り	10
平成七年度同窓会行事	18
広報部からのお知らせ	18
防衛大学校の近況	19



新年の御挨拶

同窓会長
中尾 時久

一新春有感

新年おめでとうございます。
戦後五十年の節目の昨年は、本来的に水と油の政党が野合して政権をとった結果、政治混迷がその極に達し、政治的に無為無策の一年間でした。何でも反対してきた無責任政党が、責任ある立場において何も出来ず、醜態を演じたということでしょう。

健全なナショナリズムを有し世界の常識を物差しとして考える者にとつては「五十年経つと、国内で猛威をふるった諸悪も常識的な決着をみるなあ」と思われることでしょう。進歩的文化人の筆害・口害。社会党の自衛隊違憲、日米安保条約反対の現実無視の非常識。国鉄労組の国民無視の横暴なストの連続。日教組の親共反米の偏向教育等々当時は隆盛をさわめたものも、五十年経つと常識的におかしかったことは通用しなくなります。歴史の評価に耐えないものは贖物なのです。

が、年月の経過とともに国民の信頼が高まりその真価が認められてきています。それは自衛隊が歴史の評価に耐える本物だからです。国軍に昇格する資格を十分備えていると言えましょう。おかしいと言われて久しいのに変わっていないもの——その最大のものが日本国憲法です。平和という美名の下に一国平和主義という国際的無責任主義。日本は米国に共同で守ってもらうのに相手の危機には知らん振りの自己本位防衛。非常事態対処規定の欠落。権利ばかり規定し義務には類かぶりの一億総無責任体制。過剰な個人尊重による公共の福祉とのバランスの喪失等々はいずれも憲法の不備に起因しています。勿論良い点も沢山ありますが、歴史的使命は終了したと言えましょう。昨年本欄で書いた通り、日本国憲法は陳腐化し疲労しきっています。世界の常識では、現実に馴染まない条項を改正するのは当然であり、おかしいのに変えないことの方が異常です。一日も早く憲法を改正して名実ともに国軍を有する真つ当な国にならない

と、日本国は亡国の憂き目を見かねません。

二 将来構想の策定

一桁期の自衛隊現役会員が逐次定年退職を迎え、同窓会としての過渡期にあたる平成四年に会長を拝命しました。私は定年退職してから就任したので、会長任期の全期間が民間人だった初の会長ということになります。

同窓会運営の将来の方向づけをキチンとやっておく必要性を痛感し、平成五年秋に、総会で将来構想検討委員会を結成することをご承認頂きました。爾来約二年間、同委員会の皆様の無償の献身的なご努力により、①同窓会の活動範囲・事業の検討 ②同窓会組織の検討・確立 ③会則の抜本的見直し——を主要検討項目とする同窓会のありべき姿・今後の運営の在り方についての将来構想がまとまりました。これは、同窓会の将来の道筋を照らす大きく強い灯台の明かりです。

私の会長在任間には中長期的な将来構想を策定し事業推進委員会を発足させるのが精一杯でしたので、その実行は次期会長にお願いすることになります。幸い会長予定の小西岑生君は将来構想検討委員会で活躍頂いた方ですので、実行者として最適任と存じます。

三 在任間の総括

皆様の暖かいご支援・ご協力を頂戴して、会長の任を全うした四年間の歩

みを振り返ると次のようになります。

* 財団法人化の実現に努力したが、大勢判断の結果白紙還元。

* 将来構想検討委員会を結成し将来構想を策定。

* 機関紙「ゆうかり」を「小原台だより」と改称し内容を充実。送付の方法も改善。

* 事務局の「編集部」を「広報部」と改称して、機関紙作成のみでなく広報活動を行うよう充実強化。

* 校友会活動での非公務死亡者を殉職に準じて顕彰するよう制度化。

* 六年度から防衛協会主催の所謂「防大公開講座」を協賛。

* 今後のため、事業推進委員会、防大創立五十周年記念事業実行委員会を設置。

また、機関紙の年頭挨拶で現役諸君の言いたいことを代弁して、思い切った発言したのも思い出となっています。母校・防大は二〇〇三年に開校五十周年の節目を迎え、記念事業等が計画されています。同窓会もこのため委員会を結成し、記念事業を行いますので、皆様のご支援・ご協力をお願いします。蛇足ですが、各幕等で施設整備を担当している同窓生の皆様は、影に日向になりながら防大が計画している大建設事業を側面からブッシュして下さいます。本年も皆様にとって良き年でありますようお祈り申し上げます。

(日本工機株式会社
常務取締役・開発本部長、元陸将)

総会報告

平成七年十一月十一日(土)、横須賀市「よこすか芸術劇場」ヨコスカ・ベイサイド・ポケットに於いて、同窓会総会が行われました。当日は、一期生から三十九期生まで九十八名の参加を得ました。

主要議題は、

- 一 平成六年度事業及び決算報告
 - 二 平成八年度事業及び予算審議
 - 三 「将来構想検討委員会」答申の骨子について(報告)
 - 四 新委員会の設置について
 - 五 同窓会会長の改選について
- であり、以下三、四項について報告いたします。なお決算報告及び予算については、四、五頁をご覧下さい。五項については同窓会会長の新年の御挨拶に述べられておるとおりです。

「将来構想検討委員会」答申の骨子

一 経緯

(一) 委員会の編成

- 委員長…志摩 篤(一期生陸)
- 委員…小西岑生(二期生海)
- 他一五名
- 事務局長…君嶋 信(三期生陸)
- 事務局補佐…上野明義(二期生陸)
- アドバイザー…福田光信(一期生空)

目的

(二) 防衛大学校同窓会のあるべき姿を明らかにし、今後の運営のあり方について長中期的見地から構想及び運営計画を策定する。

(三) 委員会の主要検討項目

- ア 同窓会の活動範囲及び事業設定
- イ 同窓会の組織の検討・確立
- ウ 会則の見直し

(四) 委員会の活動概要

委員会は、平成六年一月から平成七年七月までの

一年半活動し、この間十一回の合同会議、十一回の作業部会及び二回の全国規模のアンケート調査を実施した。平成七年三月三十一日、同窓会会長・副会長に対して中間報告を行い、同年七月二十六日に最終報告実施に至る。

二 答申の要旨

答申では、同窓会の目的が新たに再定義され、その活動範囲は五項目に改正された。そしてこの五項目を達成するために、委員会は事業を「基盤確立のための事業」(中央組織の強化・支部組織の整備)と「同窓会の活動に應ずる事業」とに区分し、前者を優先的に実施すべきことを答申している。

また委員会は、右記の考え方に沿って会則を改正すべきことを答申している。

三 将来の同窓会活動のあり方

(一) 同窓会の目的

- ア 会員相互の親睦
- イ 母校の発展のための援助
- ウ 社会的活動への寄与

(二) 同窓会の活動範囲

- ア 会員相互の親睦・交流に資する事業
- イ 母校の発展に資する事業協力と援助
- ウ 防衛意識の向上・普及活動
- エ 社会的活動に資する事業
- オ その他前条の目的を達成するため必要と認める事業

(三) 事業設定

- ア 事業推進の基本的考え方
- イ 「基盤確立のための事業」及び現行事業(改善)を優先して実施し、その後新体制下で逐次「活動範囲に應ずる事業」(除く現行事業)を実施する。
- ウ 「基盤確立のための事業」とは

- 中央組織の強化
- 支部組織の整備
- 場所、施設に関する事業
- 財政見直しに関する事業
- 「活動範囲に應ずる事業」とは
- 現行事業の改善
- 新規事業

エ 段区分と事業の重点

- ・中期的に実施すべき事業
- ・長期的に実施すべき事業

事業	基盤確立	段区分
現行事業の改善	強化整備等 中央支部・支場	第1段
中期的事業	見直し・強化	第2段
長期的事業	見直し・拡大	第3段

オ 現行事業の改善項目

- 会員名簿の作成・発行
- 機関誌の発行
- 会員に対する慶弔
- 中期的に実施すべき事業項目
- ホームカミングデーの実施
- 相談窓口の設置
- 現職・退職との交流会等の推進
- 講演会の実施
- 会員の出版への支援
- 各種団体への交友活動
- 長期的に実施すべき事業項目
- 会員の親睦関連
- 防衛意識の向上・普及活動
- 会員の社会的活動に資する活動

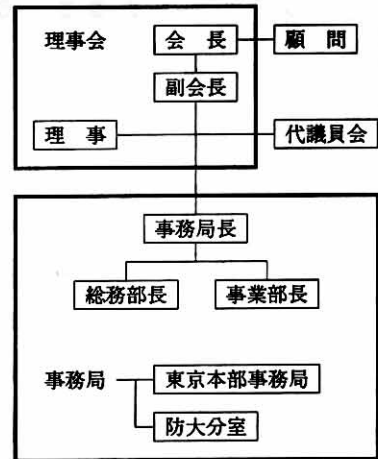
キ

- 同窓会組織の検討・確立
- 本部組織の整備(将来中央組織)
- 同窓会本部組織(理事会+事務局)
- 理事会…同窓会のプレーン部門
- 事務局…本部事務を所掌、2部に統合
- 委員会…理事会の下に設置可能とする
- 総務部長及び事業部長は専従員とする

カ

- 現行事業の改善
- 中期的事業
- 長期的事業

* 期代表者と支部代表者による代議員会を新設し同窓会の決議機関の役割を持たせる



イ 地域支部組織の整備

地域ブロック単位に支部を（地域支部長―退職会員）設け、退職会員中心の地域型支部を整備する。また地域支部の下部組織として、駐屯地等地域支部（現職会員）、地区支部（退職会員）及び地域直轄支部（地域内有志の会）を設置できるようにする。

* 現職会員…防衛庁職員である会員

* 退職会員…防衛庁職員を退職した会員

ウ 小原台クラブ

小原台クラブの総意が同窓会の下部組織になることに賛成し届け出があった場合、直轄支部として認定する。

(五) 会則の見直し

ア 本部、支部及び事務局

本部に理事会と事務局をおき、本部は東京都に置く。北海道、東北、東部、中部、西部及び沖縄に地域支部を設置する。なお現職会員は従来通り駐屯地基地単位とする。

イ 目的及び事業・活動

同窓会全体として何をやるかという観点で改善機関

決議機関として期代表者と支部代表者による代議員会を設置

必要に応じ、委員会の設置は会長及び理事会の権限とし、理事会の下に設置

エ 総会

議決機関とせず、報告の場とする
総会は毎年1回

四 同窓会財政の見直し

- (一) 案出された基本の方針案
 - ア 収益事業による増収
 - イ 会費徴収の方法及び額の変更
 - ウ 寄付による増収
 - エ 他の事業の削減や事務経費の切り詰め
- (二) 財政問題解決のための方策
 - 専門の調査分析を行うプロジェクトチームを新たに設置し要検討（答申では方策案の列挙に止める）

五 その他

- (一) 場所・施設
 - ア 本部（理事会・事務局）の東京への移転
答申では、将来活動の中心となる退職会員の活動拠点として便宜性を考慮し、できるだけ速やかに同窓会本部を現在の東京分室に移転することを提案している。
 - イ 事業推進委員会の新設
平成七年度中に事業推進委員会を設置し検討結果を実行に移す。
- (二) 同窓会館
 - 当面同窓会館代替機能の保持に努め、爾後機能を拡大か、会館設立かを再検討する旨答申

新委員会の設置について

一 事業推進委員会

- (一) 設置の理由
 - 将来構想検討委員会が、同窓会のあるべき姿について鋭意検討し、種々の有益な提案を答申した。この提案を実行に移すためには、標記委員会を新設して実行案の策定及び所要の調整等を実施する必要がある。
- (二) 任務
 - 将来構想検討委員会の答申内容を実現させるための具体的な実行案を策定し所要の調整等を行って、逐次事業を推進する。

(三) 規模

委員長、十名程度の委員、事務局等で
合計約十五名

(一) 期間

委員長は阿部博男氏（二期空）を予定
総会での承認後から約二年間存続

二 防大創立五〇周年記念事業実行委員会

- (一) 設置の理由
 - 防大当局と調整しつつ同窓会としての記念事業を立案し、実行するためには専属の組織が必要である。
- (二) 任務
 - 防大当局と密接に調整しつつ同窓会としての記念事業を立案し、これを実行する。この際、事業に必要な経費は特別会費及び寄付等を募り、独立会計で実施するものとする。また、防大の計画する事業に対し所要の支援を行う。

(三) 規模

委員長、十五名程度の委員、事務局等で
合計約二十名

(四) 期間

委員長は、佐久間一氏（二期海）
総会での承認から、五〇周年式典終了まで

(五) 略称

記念事業委員会

三 共通事項

- (一) 指揮関係
 - 同窓会会長の直接指揮を受ける。
- (二) 経費
 - 平成七年度は将来構想検討委員会の予算の残額を充当する。平成八年度は両委員会に合計一〇〇万円を配分する。
 - なお、2つの新委員会は総会で承認されました。答申は、決定されたものではなく、今後、評議員会、総会の承認を得て、実行されるものです。御意見等がありましたら、事業推進委員会（陸自幹部学校内）
☎〇三―五七二―七〇〇九 内線 四二―八三三
までご連絡下さい。

平成 6 年度同窓会決算報告

防大同窓会会計幹事
平成 7 年 11 月 11 日

	項 目	予 算	実 績	備 考
収 入	会 費 (38期生)		14,539,876	38期生の約74%が加入※
	貯金利息等		7,297,078	
	その他		640,700	未納者の会費等
	合 計		22,477,654	
支 出	事業部	7,000,000	6,013,544	
	総務部	6,230,000	5,270,055	
	広報部	1,450,000	1,047,122	
	人事部	100,000	0	
	経理部	6,650,000	3,189,801	
	将来構想検討委員会活動費	1,000,000	972,191	
	小 計	22,430,000	16,492,713	
	財産目録へ		5,984,941	収入の27%に相当
	合 計		22,477,654	

※現在、未納分を鋭意徴収しています。

平成 6 年度予算使用実績

防大同窓会会計幹事
平成 7 年 11 月 11 日

	項 目	予 算	実 績	備 考
事 業 部	総 会 費	2,800,000	3,012,195	
	期 生 会 支 援 費	1,200,000	845,201	
	校 友 会 対 外 活 動 助 成 費	1,000,000	158,000	
	開 校 祭 助 成 費	2,000,000	1,998,148	
	小 計	7,000,000	6,013,544	
総 務 部	顕 彰 碑 献 花 式 費	600,000	486,134	
	顕 彰 室 整 備 支 援 費	300,000	15,599	
	慶 弔 費	1,050,000	783,045	
	職 員 定 年 退 職 者 記 念 品 費	100,000	146,795	
	事 務 通 信 費	20,000	20,000	
	コ ピ ー 機 賃 貸 料	120,000	118,656	
	電 話 ・ F A X 維 持 費	360,000	99,021	
	東 京 事 務 所 運 営 費	3,180,000	3,180,441	
	評 議 委 員 会 運 営 費	500,000	420,364	
小 計	6,230,000	5,270,055		
広 報 部	機 関 紙 発 行 費	1,400,000	1,039,137	
	事 務 通 信 費	50,000	7,985	
	小 計	1,450,000	1,047,122	
人 事 部	事 務 通 信 費	100,000	0	
	小 計	100,000	0	
経 理 部	会 長 運 営 費	650,000	265,500	
	事 務 員 雇 用 費	2,000,000	2,000,000	
	事 務 費	300,000	126,587	
	通 信 費	350,000	115,720	
	交 通 費	150,000	48,620	
	会 議 費	200,000	242,968	
	予 備 費	3,000,000	390,406	
小 計	6,650,000	3,189,801		
将 来 構 想 関 連	将 来 構 想 検 討 委 員 会 活 動 費	1,000,000	972,191	
	小 計	1,000,000	972,191	
合 計	合 計	22,430,000	16,492,713	

人は空に夢を見る。

三菱重工業株式会社

航空機・特車事業本部

東京都千代田区丸の内2-5-1 〒100 ☎東京(03)3212-3111

平成 8 年度同窓会予算

防大同窓会経理部
平成 7 年11月11日

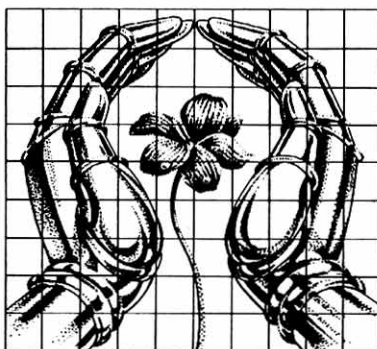
	項 目	金 額	備 考
収 入	会 費 (40期生)	20,701,000	58,150×356 (総員の90%) 現在の3尉初号俸の1/4
	貯金利息	2,452,650	
	広告代	未 定	
	合 計	23,154,050	
支 出	事業部	6,990,000	
	総務部	4,100,000	
	広報部	4,026,000	
	人事部	0	
	経理部	4,750,000	
	新委員会の活動費	1,000,000	
	小 計	20,866,000	
	財産目録へ	2,288,050	収入の10%に相当
	合 計	23,154,050	

平成 8 年度予算支出計画

防大同窓会経理部
平成 7 年11月11日

担 当 部	科 目	予 算	7 年度比	摘 要
事 業 部	総 会 費	3,490,000	+ 80,000	会員の増加及びはがきでの送付並びにダイレクトメール 6 年度実績を反映
	期 生 会 支 援 費	700,000		
	校 友 会 対 外 活 動 助 成 費	800,000	- 200,000	
	開 校 祭 助 成 費	2,000,000		
	小 計	6,990,000	- 120,000	
総 務 部	顕 彰 碑 献 花 式 費	600,000	- 210,000	6 年度実績を反映
	慶 弔 費	1,050,000		
	職 員 定 年 退 職 者 記 念 品 費	100,000		
	事 務 通 信 費	20,000		
	コ ピ ー 機 賃 貸 料	120,000		
	電 話 ・ F A X 維 持 費	150,000		
	東 京 事 務 所 運 営 費	1,560,000		
	評 議 委 員 会 運 営 費	500,000		
小 計	4,100,000	- 210,000		
広 報 部	機 関 紙 発 行 費	3,976,000		
	事 務 通 信 費	50,000		
小 計	4,026,000			
人 事 部	事 務 通 信 費	0		
	小 計	0		
経 理 部	会 長 運 営 費	500,000	- 750,000	6 年度実績を反映 " " " "
	事 務 員 雇 用 費	2,000,000		
	事 務 信 費	200,000		
	通 信 費	200,000		
	交 通 費	100,000		
	会 議 費	250,000		
	予 備 費	1,500,000		
	小 計	4,750,000		
将 来 構 想 新 委 員 会 関 連	将 来 構 想 検 討 委 員 会 活 動 費	0	- 1,000,000	総会報告を参照
	新 委 員 会 活 動 費	1,000,000	+ 1,000,000	
	小 計	1,000,000	0	
合 計	計	20,866,000	- 1,080,000	

いま、技術は
知性をもった。



つねにゆとりある社会づくり。それが急速に発展するテクノロジー時代に川崎重工がかかげるテーマです。人間が真に人間らしく、豊かに生きるために、技術の発展はあるはず。めざましい技術革新の世紀をリードしてきた、「技術の企業」川崎重工は、技術を人間のためのものとして高めるために、つねに努力をつづけています。

川崎重工

本社・神戸/東京

特集 「防大は今」

学生の海外派遣実績

派遣先	年度	46	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	元	2	3	4	5	6	7
		50																				
米 国 3 軍 士 官 学 校	陸	2	3	1	2	2	1	2	1	1	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
	海	1	1	2	1	2	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	3	3
	空	1	2	1	2	2	2	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	3	3
	小計	4	6	4	5	6	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	6	8	8
カナダ統合軍士官学校					6	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	6	8	8	
フランス陸軍士官学校			2	2		2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	
韓国陸海空軍士官学校									3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	
タイ、シンガポール士官学校													3	3	3	3	3	3	3	3	3	
独国防大学及び陸海空軍士官学校																		3	3	3	3	
連合王国陸海空軍士官学校																					3	
国際情勢会議(米海軍士官学校)									2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	
合 計		4	6	6	7	6	6	6	6	11	11	11	11	14	14	14	14	14	17	19	21	25

本科学生の外国士官学校への短期留学は、昭和四十五年五月猪木防衛大学校長が欧米視察の際に、学生の相互交流に關し示唆され、各国士官学校学生とのヒューマンリレーションの醸成及び相互理解、学生の国際的視野の拡充及び勉強意欲の向上を目的として同年十月に吉田国際基金の支援を受けアメリカ合衆国3軍士官学校訪問が開始された。派遣される学生は将来、幹部自衛官として職務遂行に關する意志が強固であり成績優秀、加えて体力強健の者であり当初は第四学年が派遣されていた。しかし教育効果の面から五十四年度以降は第三学年が派遣されている。昭和四十八年度からはアメリカ合衆国三軍士官学校への留学が予算化され、昭和五十二年にはフランス共和国陸軍士官学校へ(昭和五十四年度は中止)、昭和五十四年度にはカナダ統合軍士官学校へ、昭和五十八年度には大韓民国士官学校へ、昭和六十二年にはタイ・シンガポール士官学校へ、平成四年度にはドイツ国防大学及三軍士官学校へ、そして平成七年度からは英国軍士官学校へと短期留学が実施され七年度の短期留学学生の合計は二十五人となっている。各学生は短期留学期間中の貴重な体験から様々な所感を持っている。今回、平成七年度の海外派遣学生四名の留学所感を述べてもらった。

ドイツ連邦共和国派遣所感



第三二一小隊 陸上要員
第三学年 松原 泰孝

十月十五日から十一月五日までの約3週間、私は、入校当時から憧れであった海外派遣学生としてドイツ連邦共和国に滞在することができた。海外へ行くのは2度目だが、ヨーロッパに行くのは初めてであり、とにかくすべてが新鮮で、驚きで、感動だった。そんな3週間の旅を簡単に述べてみようと思う。

ドイツで訪れたのは、陸、海、空各士官学校と、ミュンヘン及びハンブルクの国防大学であった。ドイツを南から北へ縦断し、気候は日本に比べかなり寒かった。

1、握手について

ドイツ人の握手はすごい。誰もががちりと握ってくるのではじめはかなり戸惑った(少し痛い)。しかも、特に海軍では「おはよう」と挨拶するときも、「また明日」と別れるときも、とにかくも握手をするのだ。そのおかげで、はじめは戸惑っていた握手にも最後には、握り返してみたり、逆にこちらから求めるようになっていた。

2、責任と義務の徹底

すべての士官学校にいえることだが、学生のほとんどが車を持っていて、1日の自分の義務が終わるとすぐにその車で外出してしまう。また、週末には

(金曜日の午後から)ほとんどの学生が実家に戻っているそうである。私がドイツの士官候補生に、車を持っていることをうらやましがると、逆に、なぜ日本では車をもてないのかと不思議がっていた。

先にも述べたが、外出に関しては私たちと大きく異なる点であり、自分の義務さえ終了すればいつでも外出でき、翌日のクラスが始まる前に戻れば何の問題もないのだ。それができて問題がないのは、誰もが階級を持っていることや、さらに言うところの勉強をしないと単には合格できないほど厳しい試験があるため自分から求めていかないと脱落してしまうのである。また、「オフイサーになるんだ」という強い意志を持っている事も理由の一つであろう。特に陸軍の学生は、外出もあまりせず、ほとんど自分の勉強に時間を使っているそうである。

3、困ったこと

一番困ったのはやはり語学である。相手の言っていることはだいたい理解できるのだが、何しろ英語が話せない。言いたいことは山ほどあるのに、いざ話してみると、本当に伝えたかったことの半分も伝わらず悔しい思いをした。特に、別れなければならぬときに、彼らは、私たちの旅の無事と、成功を祈っていると喜んでくれるのだが、私たちは、ただ「Thank you very much」を連発するだけで、今まで世話になったお礼を言いたくても、何一ついえなかった。とにかくそれが悔しかった。

4、終わりに

私がドイツで体験してきたことは、まだまだたくさんあるが、それらのすべてが、言い表せないほど素晴らしいものばかりだった。そのうえ、ドイツにたくさんさんの友人を作ることができたことは、私にとって最高の成果であったと思う。最後になりましたが、このような機会を与えてくださった関係各位の方々に対し心から感謝し海外派遣の感想とします。

英国派遣所感



第二三小隊 海上要員
第三学年 浦沢 禎之

現在、防衛大学校(以下防大と略す)には米国をはじめ、八カ国の士官学校への短期留学制度があり、主として三学年の秋季に各国二、三名が派遣される。私はこの度、連合王国派遣学生として十月二十二日から十一月十二日まで、陸上要員及び海上要員の学生それぞれ一名とともに英国陸海空軍士官学校で、一週間ずつ研修を行った。

防大から英国への派遣学生は今回が初めてのことであり、英国駐在武官の嶋田一佐をはじめ多くの方々に格段のご尽力を戴いた。我々はもちろんのこと、英国の士官候補生達の我々に対する関心も高く、お互いにとって大変有意義で、また、非常に楽しい留学であった。

学校の体制については、陸海空いずれの士官学校も原則的に一般の大学を卒業した後に入学するため、日本で言えば防大よりも幹部候補生学校に近く、学生の期間も陸海軍は約一年、空軍は約半年という短いものである。その点からも彼らと我々防大生を単純に比較することはできないが、同じ士官候補生として考えさせられることは多くあった。

一番に痛感したことは学生の士気についてである。英国の学生全てが完璧で優秀とは思わないが、訓練等に対する積極性という面で我々防大生よりも優れていると感じた。最もこの要因としては、単に学生の資質の違いではなく、学生の期間の違いや授業のプログラムの違いなども考えられる。しかし、我々防大生が「ゆとりある教育」の名のもとで怠惰に支配されているのも否定できない、と改めて感じた。

最後にタートマスの海軍士官学校については、一言で言ってしまうと、様々な面において実用的、実践的であった。そもそもはブリタニア号という停泊した軍艦の中でおこなっていた教育を丘の上の学校に移転したということで、学校の作りも軍艦をイメージしたようであった。訓練についても入校七週間目にして、機動艇を学生に操縦させ様々に変化する状況(司令部がゲリラにより爆破された等)に対応させるといった訓練なども行っており、私も一員として参加したが、拙い英語に苦しみつつも大変面白かった。

私にとっては初めての海外であり戸惑いながらも多くの方々のご助力により無事に今回の短期留学を終えることができた。今回の貴重な経験をなるべく多くの学生に伝えるとともに今後の防大や海上自衛隊での生活において有効に活用していきたい。

タイ・シンガポール派遣所感



第四一三小隊 海上要員
第三学年 松浦 知寛

私は今回の短期留学でタイ及びシンガポール共和国の二カ国の士官学校に行ってきました。両国とも東南アジアの中では発展している国なので日本とほとんど変わりなく有意義な留学となりました。日常会話は全て英語のため、毎日が非常に疲れましたが、拙い英語でも話そうという意欲があれば通じるものだなと強く感じました。言葉については、自分の領域で話す分には全く問題なく生活できたのですが、物事についての説明の時は、多少専門的な用語が増えるためうまく伝わらなかったことが非常に残念でした。

次に両国について述べたいのですが、特に、印象に残ったタイ王国士官学校生の心の持ちようについて考えたいと思います。タイ王国は、日本と非常に似ていて王室があります。そのため日本とのつながりが非常に強く、各士官学校の学生も日本のことをよく知って

います。ここで、タイ全体の事を思い出してみると、貧富の差がとも激しい国でした。このことについて学生と話し合ってみると、彼らは、それが今一番大切な問題だと認識していました。そこで驚いたのですが、その後には彼らに「どうしたらこの問題が解決されると思うか」と聞いてきたのです。ここが我々と違うところだと思います。タイでは軍人のステータスが高く、国を守るのも将来の国を支えるのも軍人だという考えが学生全員にあります。そのため国の現状をよく考え、それをよくするにはどうすればよいのかという事まで考え、チャンスがあれば外国から様々なものを取り入れたいと考えています。我々はどうでしょう。日本は世界的に言っても発展した国です。だからと言って現状に甘えていいのでしょうか。日本の軍人のステータスが低いからと言って、防大に在る間遊んでいいのでしょうか。将来私達は、彼らと国際的には同じ土俵に立たなければなりません。我々は防大での四年間を無駄に過ごしてはいけません。今のままでは、諸外国の士官候補生とは対等に話せないのではないのでしょうか。防大の学生全員が遊んでいるわけではありませんが、タイ王国の学生と比べると、負けているのではと強く感じます。このことに関しては学校のシステムが違うので、タイ王国の学生と同じ考えに考え方を換えることはできません。しかし、将来、同じ様な立場になるのですから、頭の片隅にでも置

いてもらい、機会があればほんの少しだけでも考えてもらいたいです。私は、このことに関し今以上に努力し、他の防大の学生に刺激を与え得る学生になれば良いと思います。

今回の短期留学で様々なことを学びました。例えば、両国の国民性や歴史、生活などです。しかし、一番印象に残っている事は、両国の士官候補生に共通して言える事です。自分達は軍人で、国を守り国を良い方向に変えるんだと考えている学生が多いという事です。まだまだ発展する余地があるとして外国から様々な事を学ぼうとし、良いと思う事はすぐに取り入れ、皆それぞれが国を愛し国のために勉強しています。このことは、先にも書いたとおり学校や国のシステムが違うせいもあります。が見習うべき事だと私は思います。私は、今回の短期留学で得たことを忘れずに今まで以上に真剣に物事に取り組み、日本のため学校のために頑張っていくことと思います。

大韓民国派遣所感



第四三三小隊 陸上要員
第三学年 山田 浩一

防大入校以来の夢が叶い、この度平成七年十月十五日から十一月四日までの三週間、大韓民国陸・海・空各士官学校へ短期留学した感想を簡単ながらこの紙面をお借りして報告いたします。



渡航前から韓国と日本は「最も近くて最も遠い国」という言葉を聞いていました。確かに「Xジェネレーション」という流行語があるように、若者の日本に対する感情は変化してきているのも事実です。これから日韓関係を築いてゆくのは我々若者なのですから、今回のように彼らと本音でぶつかりあえたことは貴重な体験になりました。ところで、この韓国派遣で私が出た最大限のものは、なんといっても「友人」でしょう。毎日夜遅くまで、堅い話は抜きにしてお互いのことを話しているのと、なんと共鳴できた士官候補生としての悩み、苦しみ、そして喜びが多いことか！お互いたどたどしい英語ながらも、理解しようと苦心したことは忘

れられません。こうして得た異国の友は、私にとつての一生の宝物となることでしょう。将来、ますます日韓の軍事交流が盛んになることは確実です。来年から海軍士官学校の四年生が遠洋航海に日本に来る予定だと聞きました。過去に暗い歴史があるのは認めねばなりません。しかし、彼らを通してそのギャップを乗り越え、小さくてもいいから両国の架け橋になることが、次の私の夢です。最後になりましたが、今回の派遣のためにご尽力いただいた関係者の方々と、苦楽を共にした金澤・木下両学生に感謝の意を表して、私の所感を終わらせていただきます。

平成7年度運動系校友会主要活動結果及び現在部員数

校友会名	全日本クラス	関東クラス	昨年比	部員数(女子)
短艇委員会	全日本カッター競技会2位/12校	関東新人戦2位	↑	71
バスケットボール部		関東リーグ7位/16校6部	→	42(6)
柔道部		関東学生優勝大会2部優勝	→	30
ラグビー部		関東大学ラグビー2部昇格(7戦6勝1負) 関東7人制大会1位	↑	134(1)
サッカー部		神奈川県秋季リーグ5戦5勝	↑	59(1)
剣道部	全日本学生優勝大会団体1回戦負	関東学生優勝大会ベスト16	↑	47(4)
空手道部	全国国公立空手道大会男子優勝 " 女子準優勝	秋季関東定期リーグ1部昇格	↑	62 3
バレーボール部(男子)		秋季関東大会リーグ4位/8校7部	↓	34
"(女子)		" 7位/12校13部	→	11
卓球部		関東リーグ5部残留		24(2)
陸上競技部	静岡国際陸上競技会個人800m13位	関東理工系学生大会3位/30校 関東学生陸上競技会個人400m1位		51(1)
硬式庭球部		関東理工科リーグ男子8部 " 女子10部昇格	→ ↑	51(13)
硬式野球部		神奈川大学リーグ1部6位	↓	35
射撃部	全日本大会個人3位, 6位	秋季関東学生選手権予選通過17名	→	21(2)
水泳部		東部地区国公立水泳競技会400m1位, 400m個人メドレー3位	→	41(2)
ハンドボール部		関東学生秋季リーグ3位/8校6部	↑	33
アメリカンフットボール部		H6 2部降格	↓	88(1)
ヨット部(小型)		関東学生選手権予選敗退	→	32(1)
ヨット部(クルーザー)	全日本学生外洋帆走レース11位, 14位		→	15
銃剣道部	全日本銃剣道優勝大会2位	全関東大学選手権新人戦団体優勝	↑	44
ソフトテニス部		関東リーグ(女子12部)1位 男子10部, 女子11部昇格	↓ ↑	40(3)
ボクシング部		関東トーナメント(4部)1位	↑	30(1)
レスリング部		東日本春季新人戦68kg級2位	→	29
ボート部	全日本新人選手権大会予選6位/6校		→	19(1)
フィールドホッケー部(男子)		関東学生リーグ6位/11校2部 神奈川リーグ優勝	→	35
"(女子)		関東学生リーグ1部昇格	↑	
パラシュート部	落下傘スポーツ日本選手権1位, 2位		→	27(1)
準硬式野球部		神奈川六大学秋季リーグ4位/6校	→	51
弓道部(男子)		秋季南関東リーグ3戦2勝1敗	→	32
"(女子)		" 4戦3勝1敗	↑	9
少林寺拳法部	全日本学生大会団体演武最優秀賞 その他優秀賞, 優良賞, 敢闘賞	関東学生大会(2段の部)1位 (団体演武)2位	→	54(1)
フェンシング部		関東国公立個人戦エベ3回戦敗退	→	21(1)
ウェイトリフティング部		神奈川県選手権団体2位個人76kg級1位	→	19
相撲部	全国国公立大学対抗選手権2位	東日本選手権(Cリーグ)3位	→	20
バトミントン部(男子)		秋季神奈川リーグ個人BLD2位, MIX2位	↑	26
"(女子)		関東リーグ5部昇格, 全自女子ダブルス準優勝	↑	7
体操部		関東理工系大学選手権個人13位	→	11(1)
自動車部	JMRCフレッシュマンラリー17位/33台			15
グライダー部	久住山岳滑翔大会1位		↑	40(3)
応援団リーダー部				15
山岳部		冬季五竜岳登攀 日本山岳会学生対抗マラソン大会4位/17校		11(2)
ワンダーフォーゲル部		冬季妙高高原池ノ平スキー場合宿		24
合気道部		関東学生連盟大会出場		51(5)
居合道部	全日本段別競技大会個人三段の部3位			31(4)
吹奏楽部		12月市文化会館定期演奏会実施		40(5)
儀仗隊		自衛隊音楽祭参加		59(7)

*部員数はH7年7月現在 *女子は内数 *成果のうち○○部とはその部に残留を示す

期生会だより

第三期生の現況

堂 建二

第三期生は、本年度で防大入校以来四十周年を迎え、去る十月吉日、長年勞苦を頌かち合った御夫人方と共に、道半ばにして逝った友を偲びつつ、幸いにも「無事」「健康」で、この長くて短かった道を走破できたことに素直に感謝して祝杯を上げ、そしてまだまだ遠い残る道のりのお互いのグッドラックを祈って再び杯を上げました。

実は我が三期生会は、ある時期から「陸海空」が各個別々に活動しておりまして。しかしながら、定年を迎え背広に着替えて社会に出てみると、同じ会社、同じ職域、はたまた同じ電車、同じ町内に「陸海空」の同期生そして先輩・後輩を見付け、考え方も変わって参りました。

時あたかも同期の統幕議長が誕生する象徴的出来事もあり、澎湃として起る声と共に、平成五年秋、復活第一回の「陸海空」合同の大パーティを開催することができました。

小原台以来の友もあり、最初は名札と顔を何度も照らし合わせるような場面もあちこちで見られましたが、それもほんの束の間、話は来し方・行く末、

縦横無尽、最後は学生歌斉唱で大同団結のメダタシ・メダタシ。早速、二年後四十周年記念、担当は「海上」と決定、今回の第二回のパーティに至りました。

とは申せ、陸二五〇、海九十、空一二〇、計四六〇十御遺族、約五〇〇名に近い同期の連携をこれから緊密に保つことは、なかなか大変な仕事です。現在は、一応「陸海空」でそれぞれの同期生会を維持・活動しており、その中で役員が定期・不定期に相互に連携を取り合い、全体の連携を保っています。

次の第三回の合同パーティは、五年後四十五周年記念、「空」担当と決まっておりますが、北海道から九州までの各地区でも合同の活動が段々と活発化してきており、そろそろ第二の定年を迎える時期にもあたり暇だけはある熟年、各地区・支部主催の「温泉パーティ」「ゴルフ大会」に全国から参加というのも夢ではないでしょう。

「陸海空」でそれぞれ団結を保ちながら、各地区・各支部では身近な交際として合同で活発に活動し、そして組織としては役員が中央で緊密に連絡を取り合う。そして数年に一度は合同の大パーティを実施する。これが現実の同期生会活動ではないかと思っています。

そして、このような活動を通じて同窓会将来構想検討委員会の提案される同窓会の横糸としての期生会の強化を通じ、同窓会全体の連携の強化にも寄与したいと考えております。

いずれにしても、いつでも裸でつき合える同期生会を大切にしたいものだと思います。

四期生会便り

内田 十允

四期生は防大卒業以来三十五年を迎え、陸・海幕僚長を勤めた富沢・林崎両君もすでにこの夏までに退官し、航空幕僚長の杉山君を除く全員が制服を脱ぎました。

この間、誠に残念ながら陸・海・空各一名の殉職者を含み、二十九名が物故致しております。

また四期生の現住地は概略、その三分の二が関東地方(二都六県)、四分の一が関東以西、残りの役一割が関東以北となっております。

四期生会は会則に基づき、陸海空のバランスをとった十二名の本部役員が、二年を基準として適宜交替しながら、終身会費制により会を運営しています。

本部が行う行事の主なもの、毎年二月に行う総会及び懇親会、会誌「新草」の年一回の発行、各種の相互扶助等です。とくに「新草」には、本部便り、陸上・海上・航空名簿及び地域別

OKI
People to People
Technology

夢の広がるマルチメディア社会

SynHoloNY
あなたの感性に響き合う。

いつでも、どこでも、誰とでも…。リアルで快適なコミュニケーション環境の実現に向けて、OKIでは情報通信の分野で長年培ってきた高度な技術力やノウハウをベースにマルチメディア関連技術の研究・開発に取り組んでいます。



マルチメディアのキーカンパニー 沖電気

沖電気工業株式会社

防衛営業本部 〒108 東京都港区芝浦4-10-3(本社別館) ☎(03)5445-6085(直通)

名簿を記載し、少なくとも十一月末までには全国の会員に届くよう手配しています。

これ等本部で行う行事のほか、地域ごとにあるいは陸海空毎に色々と活動を続けております。例えば、関東地域では陸海空有志が、年間数回にわたり「防衛装備研究セミナー」を行い情報交換をしていますし、空は更に「航空四期生会」を組織し運営するとともに、夫人を混えての有志ゴルフ定例コンペや海外ツアーを実施したり、海は一般大出身者を含めた海幹候校十一期生会（土風期会）に包含された四期生会の活動を活発に行っております。

来年度の四期生会総会・懇親会は平成八年二月十七日(出) 一五〇〇から明治記念館で行う予定ですが、本年度も例年通り夫人を含めて一六〇名、一七〇名の参加が見込まれます。懇親会の最後に参加者全員が大きな輪をつくり、防大学生歌、逍遙歌に引き続き四期生歌を合唱して幕を閉じるのを例としています。学生時代に思いを馳せ年に一度蜜声を張り上げて四期生歌を無心に唱う時ほど同期生の絆をひしひしと実感する時はありません。

六期生会

川崎 圭一

六期生会としては、卒業三十周年を一つの区切りとして会則を整備し、毎

年六月六日午後六時から曜日に関係なく原則としてグランドヒル市ヶ谷で総会を開催することになっている。

本年度末には、陸・海・空とも数名の将官を除き殆どの者が退官するが、昨年度役員の方力によって七月六月六日付けで会員名簿を整備し、総会参加者約一三〇名に手渡すと共に後刻全国の会員に郵送配布した。

各期とも共通の問題だと思いが、期生会名簿の維持が最も頭の痛い所である。特に陸上は員数も多く、定年前に退職した会員等で住所が把握できていない者もあるが、新たに名簿担当役員を定めて何とか完璧なものとするべく努力しているところである。

退官後の再就職先は圧倒的に東京近辺が多く、また定住地としては東京、神奈川、千葉、埼玉茨城に約六十五%が集中している。緊急時の連絡に備えて自宅の電話連絡網も整備したが、勤務先と現住所が遠く離れている者が多くどちらで対処すべきか今後の課題である。

現在市ヶ谷会館の近くに勤務している有志で毎月六日に昼食会を実施しているが、毎回十五名程度が集まっている。昼休みの一時間を有効に活用して情報交換の場としているので参加可能な会員は、休日でない六日の十一時三十分までに市ヶ谷会館本館三階のOBルームに参集して下さい。

退官後も元気に会社つとめをしている間は、何かと交流の機会も有りますが、第二の人生も定年を迎えることになるとますます疎遠になりがちです。何時迄も同期の絆を大切にしていきたいと思っておりますので、期生会に関する注文は、遠慮なく各役員に申しつけて下さい。

会の発展に、皆さんのご協力をお願いいたします。

七期生会

山本 安正

七期生会は「北斗会」と称しております。卒業後、まもなく三十三年になります。五〇四名の卒業者のうち現役は一〇九名(平成七年十月現在)となっております。退職者も全国に散らばり居住しておりますので、平成五年八月以来、全国を北海道、東北、関東、首都圏(東京、神奈川、千葉、埼玉)、中部、近畿・中国・四国、九州の七つの地域に区分し、それぞれに支部を置き、期生会の活動は本部とこれらの支部とで行うことにいたしました。期生会の総会は、毎年、七月七日に最も近い土曜日に首都圏で行うのを例としております。恩師や夫人方も交え、毎回盛会のうちに再会を楽しんでおります。官官、官民、民民の情報交換も盛んのようにです。

先般、卒業三十周年を記念して会誌

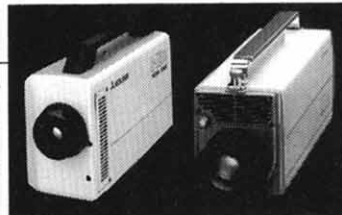
MITSUBISHI
SOCIO-TECHの三菱電機

高感度・高解像度画質で夜間監視・セキュリティに活躍。

標準タイプ
IR-M300

2次元センサを搭載しながら、経済性も追求した標準タイプ。

- 6万6千(256×256)画素
- フィールドタイム1/60秒
- 雑音等価温度差0.2℃



遠距離用高解像度タイプ
IR-M500

世界最高水準の解像度を持つ2次元センサ、夜間の遠距離・広域にわたるハイグレードなセキュリティを実現。

- 26万(512×512)画素
- フィールドタイム1/60秒
- 雑音等価温度差15℃

三菱サーマルイメージャ IR-M300/M500

お問合せは…本社電子機器部 〒100 東京都千代田区丸の内2-2-3(三菱電機ビル) ☎(03)3218-3370

三菱電機株式会社

「北斗」を発売いたしました。会員一人一人の短い所感と家族を含めた近況写真とを集めた物ですが、朝に勇智を磨き、夕に平和を祈る、礎ここに築かんと学び、汗を流し、真摯に義務を果たしてきた戦士が、無事役割を終え、安堵の気持ちをもって盾と矛を収める心境と次の人生へのチャレンジの意欲、自分自身の周辺に目を配ることができるようになった心のゆとり等々が淡々と綴られております。

まったく手前味噌になりますが、素晴らしい同期生会であると誇りに思っております。残念なことには、十八名の同期生が逝去されていることでもあります。

先に申し上げましたとおり、七期生会は一応将来に対応できる体制を整えましたので、今後は「継続は力なり」で本部、支部を中心に会員の親和を深めるイベントを途切らすことのないようにするとともに、防大同窓会の発展に寄与していきたいと考えております。

二十期生会

会長 佐藤 貞夫

「防大二十期生卒業二十周年

記念行事開催について」

一、目的

二十期生卒業二十周年にあたり同期生の旧交をあたためるとともに、元学校長をはじめとする恩師の方々

との懇親を行い、期生会員の親睦を図る。

二、日 時

平成八年一月十四日(日)

一三〇〇〇一六〇〇〇

三、場 所

グランドヒル市ヶ谷

四、行事内容

(1) 期生会総会

一三〇〇〇一三三三〇〇

(2) 記念パーティー

一三〇〇〇一六〇〇〇

五、その他

細部についての問い合わせは二十期生会二十周年記念行事実行委員会までお願いいたします。

* 陸幕人事部 君塚一佐

(八―三三―二四六八)

二十一期生会の状況

会長 松澤 勲

同期生の皆様には益々ご健勝のことと拝察いたします。

さて、現在の同期生会の現況を紹介させていただきます。現在、掌握している同期生の総数は四七九名(陸海空)です。

平成九年には、防大卒業二十周年という節目にあたり、家族を含めて陸海空の同期生の意志疎通と信頼を深め、かつ、民間にて活躍中の同期生諸兄との交流を広げるとともに、将来の運営について共通の認識を得ることなどの

目的で、二十周年記念行事を実施する発案があり、有志の尽力でこの事業の準備が着々と進められていることは諸兄ご承知のとおりですが、せっかくの機会ですので、二十周年記念行事準備委員会について紹介させていただきます。

平成九年、同期生の御夫妻に東京グランドヒル市ヶ谷の大広間にお集まり頂き、懇親の宴を楽しみたいと思っております。その時に、役員及び事務局の在り方、会則の改定、名簿の作成、連絡網の整備等を行い、期生会活動をより充実したものに行いたいと思っております。同期生に関する情報を、どんな些細なことでも結構ですから、役員にお知らせ下さい。連絡先は、次のとおりです。

会 長 松澤 勲

(東方総監部防衛部)

八―七八―二三六六

副会長 市田信行

(防衛研究所)

八―七五―六四七九

会 計 藤枝茂樹

(陸幕会計課)

八―三三―二四三二

監 査 宮崎義紀

(東方会計課)

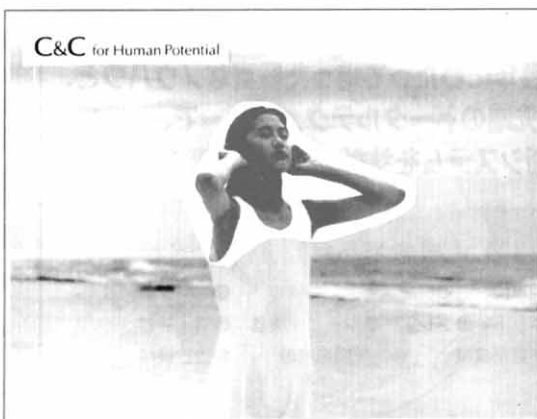
八―七八―二二一七

二十周年記念行事準備委員会

陸代表 市田信行

海代表 河野克俊(海幕防衛課)

八―三三―二四三二



いいコミュニケーションが
この星を変えてゆく。

NEC

空代表 行本雄司(空幕人事計画課)

八―三三―三〇四三

なお、同記念行事のための会合等については六本木勤務者を主体に陸海空(退職者を含む。)で密接な連携を図りつつ、逐次準備しているところです。諸兄のご理解ご協力をお願いします。最後に、同期生ご家族のご健勝ご多幸、益々のご発展を祈念申し上げ紹介と致します。

二十三期生会便り

会長 岩本 豊一

二十三期生の皆さん、お元気ですか？我々の同期生では、交通事故で楠永君、病気で鍵元君が亡くなりましたが、多くの皆さんは、佐官の充実した毎日を過ごされているのではないのでしょうか。さて、二十三期生会「樂の会」は、未だ眠っているのが現状です。防大卒業後全国に飛び散り、今やや中央に集まりつつあるといったところでしょうか。

組織自体は、卒業時の総会で今後の行方は会長一任ということで閉会したものですから、現在の状況は次のとおりです。

会長は、いろいろな意見がありました。が「お前はうちの期の顔だから続けろ」という激励を受け、岩本が引き続きやらせてもらっています。しかし、

ミニマムの活動はできるよう中央勤務者で「樂の会」幹事兼同窓会評議員を一名、会計幹事一名を御願ひして担当して頂いております。

現幹事は、陸の時津君、会計幹事は、海の藤井君です。現在、同期本人の弔事、同期関連の被災支援(地震、火事等)、中央で開かれる三幕統合の同期生会会同の援助を行っております。今後の課題は、異動に伴う役員の継承、当面の名簿作成、長期的総会の開催です。名簿は、陸は職種毎、及び海空の要員毎に掌握作成できればと思っております。時津君ともいろいろ相談し予定を立てたりしたのですが、目の前の業務に追われ、なかなか前進しないのが実状です。

同期の皆さんには申し訳ないと思っておりますが、「やりたい」「やろう」「やらないかん」と言う気持ちは保持しておりますので、どうか待っていて下さい。それから、一部の方には関連の調査をお願いするかもしれませんが、その時は喜んでお引き受けご協力下さい。

最後に、防大同窓会には、全体名簿作成、同窓会便り、期生会活動への援助など大変お世話いただきました。この場をおかりして、深謝申し上げます。

今後ともよろしくお願いいたします。

二十五期生会の皆様へ

会長 高鹿 治雄

二十五期生会会員の皆様お元気ですか。若い若いと思っていた我々も、いつの間にか、四十代がもうすぐ目の前になってしまいました。部隊においては、各級指揮官や司令部等の幕僚として、または会社のリーダー格として、ますます重責を果たさなければならぬ立場になりつつあるのではないのでしょうか。一方、家庭においては、良き夫として、良き父親として家庭の幸せを築き守らなければならない大変な時期になってきているのではないのでしょうか。小さいながらもマイホームを手に入れた者、家庭の事情で単身赴任を余儀なくされた者、ここに至りて自衛隊を辞めようかと悩んでいる者等、二十五期生として同じ小原台で青春を過ごした仲間達が今は、それぞれの場所です。それぞれの人生を背負って生きています。

少し、情緒的な挨拶になってしまいましたが、防大の同期生会是我々にとって、そんな様々な仲間達と何時までも交流する機会を与えてくれる大切なものではないでしょうか。

さて、我々二十五期も昭和五十六年に小原台を巣立つてから来春で卒業十五周年を迎えることとなりました。それに先立ち、現在六本木周辺に勤務する有志を中心に去る十月十三日(金)、



コマツは、長年にわたって培った豊富なノウハウと、最先端のトータルテクノロジーで、防衛システムをサポートしています。

〔営業品目〕

- 戦闘車両 ●施設車両 ●弾薬 ●エンジン
- ロボット ●プレス ●レーザー機器 ●電子機器
- 地下掘削機械 ●海洋開発機器 ●建設機械

KOMATSU コマツ 特機事業本部
〒107 東京都港区赤坂2-3-6 TEL. 03-5561-2740

ブレ十五周年として同期生会を六本木鳥居坂ガーデンで開催しました。当日は、各幕の予算要求や各種演習の準備等で多忙の中、陸海空の現役九十余名及び東京近辺で勤務するOB二十名弱、総勢一〇〇人を越える同期生の参加により、懐かしい顔が沢山集まりました。しかし、これを企画した私は同期会の当日、急に出席できなくなり各幕の担当幹事の諸君には大変ご迷惑をおかけしてしまいました。司会の空担当幹事・平川、会計の海担当幹事・山野井、挨拶、乾杯、締め、乾杯等をお願いした陸担当幹事・永井、空幕・吉田、統幕・徳丸、そして民間で活躍するOBの連絡を積極的に行ってくれた久留須等、快く大役を引き受けてくれた諸君の協力を深く感謝しております。その労あって、当日は盛会だっただけではなく、当初この同期会の大きな目的であった十五周年に向けた準備態勢の調整や、連絡網の確立を大きく推進することができました。自衛隊だけでなく、二十一世紀の日本をリードする我々二十五期生のパワーと団結を示すべく、来る十五周年記念行事を計画しておりますので、期生会会員の皆様の積極的なご支援、ご協力を心からお願いたします。概要は左記に示しますが、細部は、後日ご案内申し上げます。

十五周年記念行事の概要(案)
 時期 平成八年十月十一日(金)
 または十二日(土)

場所 未定(六本木周辺)

内容 記念パーティー

在校時お世話になった方々をご招待するとともに、会員は努めて夫人子供同伴で、同期生間の旧友を暖め並びに新しい出会いの場とする。

その他 同期生名簿等の作成・配布
 詳細別途
 問い合わせ先

会長 高鹿 治雄

(海上自衛隊厚木基地)

第三航空隊飛行隊)

内線 二七三

自宅 〇四五―九三二―一八五八

副会長 杉山 一弥

(航空自衛隊築城基地)

第八航空団修理隊長)

内線 二八〇

自宅 〇九三〇五―六一五八三三

陸 永井 昌弘

(陸幕人事計画課)

内線 二四五二

海 山野井 一三

(海幕経理課)

内線 二九三九

空 平川 義人

(空幕厚生課)

内線 三〇四九

期生会便り(二十八期)

会長 田浦 正人

平成七年六月三日(土)、品川プリンスホテルにて三尉任官記念、防大入校十周年記念に続く三回目の全国レベルの同期生会を防大卒業十周年記念として開催しました。当日は土田元学校長ご夫妻のご臨席を賜り、また同期生の半数以上の約二三〇名が出席し、会は大いに盛り上がりました。中でも、倉石君がアメリカから駆け付け皆を驚かせました。

我々二十八期生は、八九四九名の受験者の中から約十六倍の難関?を突破して五七五名が春まだ浅い小原台に着校しました。入校式までに二十三名がスポーツ刈りにヘアースタイルを変え小原台を去り、五五二名が入校式に臨みました。在校間、二十八期生は一学年時一部屋に四学年一学年まで同居するいわゆる縦割り編成のもとで修業を積み、さあこれからという二学年進学時学年別中隊編成が導入されました。また、三学年時には初めて硫黄島研修が実施され「硫黄島に上陸した防大生」としてマスコミ等に取り上げられました。卒業時は四五一名(陸上自衛隊二三四名、海上自衛隊九十七名、航空自衛隊一〇〇名、民間二十名)がそれぞれを進路を選び快晴の小原台を後にしました。

陸上自衛隊一八六名、海上自衛隊六



針路は「海への夢とあこがれ」へ。

日本丸、海王丸に続く、住友重機械建造の3隻目の帆船「あこがれ」。
 たくさんの夢や希望やあこがれを乗せて、世界の海へと航海を続けています。
 大阪市セイル・トレーニング・シップ「あこがれ」

住友重機械工業株式会社

本社：〒141 東京都品川区北品川5-9-11(住友重機械ビル) TEL(03)5486-8000
 大阪支社：〒541 大阪市中央区北浜4-5-33(住友ビル) TEL(06) 223-7111

十九名、航空自衛隊八十名、民間一
二名がそれぞれの分野でまさに中堅幹
部として活躍しています。特に民間で
は、村井君が宮城県議会議員、折口君
がベルファールの副社長として大活躍
しています。ここで忘れてならないの
は志半ばにしてこの世を去った四名(山
下君、島田君、迫畑君、生山君)の同
期生です。紙面を借りて改めて亡くな
られた同期生のご冥福をお祈り申し上
げます。

今後の同期生会活動としては、全国
レベルの同期生会を二〇〇〇年に開催
する予定です。その際のスタッフは、
期生会長と同じ駐屯地に勤務している
者という不文律?がありますのでご協
力の程をよろしく願います。当面
期生会は開催・同期生及び家族に万が
一のことがあった場合の対応・これら
を成り立たせるための財源の維持を主
要な活動として続けていきたいと思
います。

三十一期生会だより

会長 高山 博光

三十一期生会会員のみなさん、お元
気ですか。私たちが卒業してはや八年
が立ちました。まだまだ若いと思っ
ておりましたが、本年度には四十期生が
ここ防衛大学校を卒業し、来年度には
四十一期生が防大の学生舎生活を担
う、また新しい時代となります。我々

三十一期生が防大の学生舎生活を担っ
てからもうすぐ十年です。自分たちの
年齢を考えると、防大時代が遠い昔と
なっているのを感じておられることと
思います。しかし、未だ同期生と再会
する度に学生時代がよみがえり、すぐ
に意気投合できるのは、それだけ小原
台での生活が有意義であったからでは
ないかと思えます。「あいつは、今何を
やっているだろう。」と防大時代の頃を
思い起こしておられる同期も多いと思
います。そこで、今回は防大卒業後九
年目の陸・海・空・民のそれぞれの同
期の近況をお知らせいたします。
陸上便り

(藤井 富校普通科部教官)

ほとんどの者が一昨年に幹部上級
課程を卒業し、いよいよ中堅幹部と
して脂の乗った時期です。部隊にあ
っては中隊長等として、方面・師団
各部隊の司令部にあっては(子)幕
僚として、あるいは指揮幕僚課程の
学生あるいは受験生として奮闘して
います。

また、ほとんどの者が結婚をして
家庭と仕事を両立させ、頑張ってい
ます。ちなみに私も来年三月二日に
念願の結婚を致します。
海上便り

(伊保 幹部中級課程学生)

ほとんどの者がここ数年で中級課
程に入校の時期です(教育の期間は

様々です)。艦艇勤務の者は、航海長・
砲雷長・船務長等に、パイロットは
航空機を降りて陸上勤務をする時期
で、早い者では海幕で勤務してい
る者もいます。各幕僚監部で再会しま
しょう。
航空便り

(中嶋 第五航空団)

大多数のパイロットは教官として
勤務しており、また変わったところ
では、PKOで活躍した常井君が政
府専用機のパイロット、数名の同期
生が次期支援戦闘機FSXのテスト
パイロットとして活躍しています。
民間便り

(雲 機械関係会社)

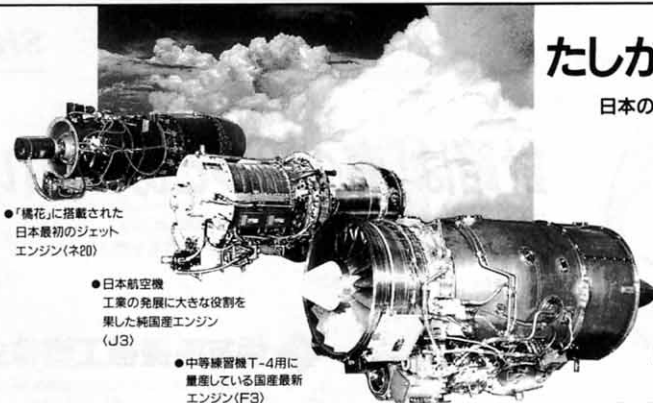
自衛隊を退職して六年が経ちまし
た。パブル最盛期の頃は景気もよく、
順調だったのですが、パブルが崩壊
し、景気が冷え込んでいる現在では、
非常に苦勞しています。

以上のように、同期生が各方面で活
躍しています。平成五年度には六本木
で同期生会を開催し約三五〇名の同期
が集いました。このような会を今後も
積極的に実施していこうと考えていま
す。そのためにも名簿の整備が必要で
す。各自の現況を左記の宛先までお知
らせ下さい。

藤井(旧姓南部)君の結婚式にはみ
んなでお祝いしましょう。

たしかな技術と実績

日本の夢を追い続けた半世紀です。



●「橘花」に搭載された
日本最初のジェット
エンジン(ネ20)

●日本航空機
工業の発展に大きな役割を
果たした純国産エンジン
(J3)

●中等練習機T-4用に
量産している国産最新
エンジン(F3)

IHI

石川島播磨重工業株式会社

航空宇宙事業本部

〒100 東京都千代田区大塚2-2-1(新大塚ビル) 電話 03(3244)5333

宛先

二二九

神奈川県横須賀市走水一―十一―二十
防衛大学校第四十四中隊指導官室

高山 博光

内容

おとところ…住所、電話番号

おつとめ…住所、電話番号、所属、

役職、職業等

その他…同期に伝えたい近況等

締め切り 平成八年一月三十一日

三十三期生会便り

会長 中塚 千陽

(内線 八―五二二―二七二)

昭和とともに防大の四年間を終え、
平成とともに自衛隊生活が始まった三
十三期生です。

卒業後、幹候校を経て、陸・海・空
それぞれの部隊に赴任し、現場でバリ
バリ部下を指揮する三尉、二尉もあつ
という間に過ぎ、学生時代は二尉の指
導教官を見て、「まだまだ先のこと」
なんて思っていた我々が、もう一尉で
す。こんな事を書いては大先輩方から
大目玉を食らいそうですが、「自分達も
年を取ったんだなあ」と感じ始めてい
ます。私事で恐縮ではありますが、現
在は幹部候補生学校の区隊長として後
進の育成にあたっています。

―入校してくる後輩(なんと今年度は
防大三十九期生が入ってきたのです。

つくづく自分の年を感じます。〴〵を見る
につけ、自分も候補生の頃はこの程度
だったのかとがっかりしつつ、体力的
には彼らから少しづつ遅れを取ってい
る現実をひしひしと感じます。また若
くバイタリティ溢れる後輩達の姿を見
ると、彼らにこそ部隊を引っ張っても
らいたいと期待もします。これも防大
という、縦のつながりのある組織なら
ではと思います。

期生会員各自が現場指揮官として部
隊を支えるのに忙しい、もしくは新入
社員として第一線で活躍するのに忙し
かったため、これまでは三十三期とし
てまとまった行事をすることができま
せんでした。

期生会長としては、卒業後十年目と
いう節目の年で、世紀末ともなる一九
九九年に、三十三期生会を開催したい
と思います。十年という年月が自分達
にどのような精神的・肉体的変化を与
えたのか、もしくは全く変わらな
いのかをじっくり見てみようではありませ
んか。

が、開催の上での問題点も数多くあ
ります。一番の問題は同期の連絡先が
不明瞭な点です。

陸・海・空もしくは民間会社とそれ
ぞれ個人的には同じ中隊・班・卒研部
屋等の同期の行方を追っていると思
いますが、期としてのデータベースがあ
りません。同窓会名簿の改訂とともに

データの更新も行ってはいますが、転
勤のサイクルに追いつけません。今後、
実行委員会を組織し、案内状等を出す
上で、連絡先をまとめるべく、同期生
についての情報の提供を個人的にお願
いすることになると思いますが、ご協
力のほど、宜しくお願いいたします。

三十五期生会紹介

会長 熊谷 三郎

我々三十五期生が防大を後にして早
四年半が過ぎようとしています。

同期生は各部隊においては初級クラ
スから中級クラス幹部の仲間入りをし
部隊の中核となる者、小原台におい
ては研究科生として再びペンを取る者、
指導教官として後輩の教育にらつ腕を
振るう者と、様々な場所で活躍してお
ります。加えて民間企業に勤務する同
期生も日本経済界を動かすべく礎を築
くために躍進中であります。

三十五期生会の活動は主として会則
に基づいた地道なものです。しかしな
がら他に誇れる唯一の活動として徹底
した住所管理を行っております。陸、
海、空及び退職者の各部長が、毎年
秋に往復はがきのやりとりにより、住
所リストを更新しそれを事務局でまと
め十二月初旬に全会員の元に届けてお
ります。一度途絶えてしまうと次に探
す際に倍以上の手間がかかるという自
衛隊の勤務の周期の早さを考慮し、卒

防災・環境関連調査のパイオニア

NGP 日本物理探鑛株式会社

〒143 東京都大田区中馬込二丁目2番地12号

TEL 03(3774)3211(代) FAX 03(3774)3180

2期 陸上 本間 敏昭

業後から今日まで密な連絡を続けてお
ります。

その他卒業後の特筆すべき活動とし
ましては、本年三月東京都周辺に勤務
している者を対象に、ホテルニューオ
ータニにおいて同窓会を催しました。
元防衛大学校長夏目先生を招待し同期
生約一〇〇名が集うという初回にして
は盛大なものでした。また、今年四月
に起きました同期生宅（特借宿舎）全
焼にあたり義援金（一口一〇〇〇円）
を募り、結果約三十万円を本人の元に
届けることができました。同期生の団
結を再認識するとともに、今まで培っ
てきた住所録の更新がここで役立ちま
した。

歴史が短い分これといった活動を紹
介できませんでしたが、三十五期生会
はこれから更に飛躍し、よりアグレッシ
ブに活動していく予定です。今後の
活動にご期待ください。

三十七期期生会便り

会長 宇佐美和弘（旧姓 松本）

我々、三十七期生が防衛大学校を卒
業したのは、平成五年三月です。以来、
二年以上経過し、幹部候補生学校、各
種術科教育等を経て、現在は、部隊に
おいて初級幹部として尽力しています。

私は、警戒資料群第一収集隊（稚内）
に籍をおいていますが、現在は陸上自
衛隊調査学校ロシア語課程に入校中で

す。学生時代は中国語を選択していた
ので、ロシア語に接する機会は初めて
でしたが、基礎から教育して頂けたの
で、徐々に身につけてきました。

さて、期生会としては、残念ながら
防大卒業以来、何ら活動は行ってはい
ません。そこで、三十七期の皆さんに
提案します。何か期生会で実施できる
企画があれば、是非、私まで御連絡下
さい。企画だけでなく期生会に対する
意見等もあれば御連絡下さい。

また、そろそろ初任地から、異動さ
れた方もあるかと思えます。名簿を作
成したいので必ず私に御連絡下さい。
また、この先約三十年間異動の度に御
連絡頂ければ幸いです。よろしくお願
いします。

実家：〒七七〇

徳島市城南町一―八―五

勤務先：〒一八七

小平市喜平町二―三―三

陸上自衛隊 調査学校

二十七日 OR

（平成八年三月中旬まで）

〒〇九七

稚内市恵比須五―二―二

航空自衛隊 警戒資料群

第一収集隊

（平成八年三月中旬から）

国を守る誇り！
国を創る情熱！



日本工機株式会社

本社 東京都港区西新橋2丁目36番1号(新橋ビル3階)

〒105 ☎(03)3436-1221(代表)

白河製造所 福島県西白河郡西郷村大字長坂字土生201

〒961 ☎(0248)22-3111(代表)

同窓生（第7期生）が現役で世に問う

軍縮の功罪 川島 正 著

近代文芸社刊 2,000円

冷戦後の軍備管理のあり方を第一次大戦後の
山梨軍縮と宇垣軍縮に求める。今必読の書

技術の日立

HITACHI



きっと、もっと、すてきな夢を咲かせます。

Interface

◎株式会社日立製作所 公共営業本部

〒101-10 東京都千代田区神田駿河台四丁目6番地 電話(03)3258-1111(大代)

富士通株式会社

特機システム本部

〒140 東京都品川区東品川2-2-4(東京Mビル)

平成七年度同窓会行事

十月 評議員会

平成六年度決算報告
 平成八年度予算審議
 将来構想検討委員会答申の骨子について
 新委員会の設立について
 同窓会会長の改選について
 本年度の顕彰者報告

十一月 顕彰碑献花式

公務で他界された三名の方々のご遺族の参列を賜り、各期の代表者の参列のもと、しめやかに執り行われました。
 顕彰された方々

- 故 佐々木義人二等海佐 (二十一期生)
- 故 酒井 秀春二等空佐 (二十五期生)
- 故 山下 圭一二等海佐 (二十六期生)

同窓会総会

総会報告のとおり。

広報部からのお知らせ

昨年度の本誌から「期生会便り」というコーナーが設けられたことはご承知のことと思います。
 昨年度は、十四の期生会から寄稿を頂き、本年度はその他の十三の期生会にお願い致しました。
 原稿を送って頂いた各期生会会長の皆様にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。来年度は、第一には、昨年度及び本年度を除く各期生会にお願い致します。その他の期生会におきましても、掲載のご希望がございましたら同窓会事務局広報部までご連絡下さい。

また本年度から、広告の掲載を始めました。初めてのことであり、手探りで大変な失礼も致しましたが、退官された同窓会会員の皆様のお力添えにより、多くの協賛を頂くことができました。広告を頂きましたお陰を持ちまして、紙面を四頁拡張し、二十頁にすることができました。これに伴い、送料を現状に留めるため紙質を薄くし、さらに初めて一部写真をカラー化することができました。協賛を頂いた各社にはこの場を借りて衷心より厚く御礼申し上げます。
 引き続き来年度以降も、広告の掲載を行って参りますので、各企業等でご活躍される皆様方のご協力のほど宜しくお願い申し上げます。

平成七年度同窓会事務局役員

職名	氏名	期別	要員	勤務先	電話
会長	中尾 時久	1	(陸)	日本工機(株)	043-243-5569
副会長兼事務局長	安岡 義純	5	(空)	防大電子工学	専 8-40-2272
副会長	小柳 毫向	11	陸	陸幕監理部	専 8-33-2410
理事(法務担当)	菅沼 祐幸	1	(空)	菅沼法律事務所	03-3465-1650
理事(会計担当)	後藤 薫	1	(陸)	後藤会計事務所	0423-74-4759
理事(総務担当)	松村 嘉夫	1	(空)	三菱重工(株)	03-3202-2295
理事(総務担当)	中村 義一	2	(陸)	防大材料物性工学	専 8-40-2381
副事務局長	八代 和典	25	海	防大2大隊事務室	専 8-40-2725
総務部長	佐藤 祐治	26	空	防大24中隊	専 8-40-2724
人事部長	井藤 等	26	空	防大12中隊	専 8-40-2712
経理部長	鍛冶 次郎	26	海	防大32中隊	専 8-40-2732
事業部長	深山 純一	27	海	防大44中隊	専 8-40-2744
広報部長	五領 隆男	27	海	防大21中隊	専 8-40-2721

事務局連絡先

〒二三九 横須賀市走水一―十二

TEL 〇四六八―四一―三八一〇

内線二七〇七

FAX 〇四六八―四四―三三〇一

専用線 八―四〇―二七〇七

東京分室連絡先

〒一〇六 東京都港区六本木七―十八―十八

TEL 〇三―三四七九―九二五四

専用線 八―三二―五七四五

防衛大学校の近況

二大隊五連覇ならず！

平成七年四月二十八日、絶好の天候の下、伝統の春季競技会（カッタ―競技）が開催されました。本年度は二大隊の五連覇がかかっていましたが、七年ぶりに四大隊が優勝し、五連覇は達成されませんでした。



一大隊強し！

平成七年十一月十二日、開校記念祭のメインイベントである棒倒しが約一万名の観衆の見守る中で、行われました。予選第一試合の二大隊対三大隊戦では延長でも決着がつかず抽選により二大隊が勝ち、第二試合の一大隊対四大隊戦では、圧倒的な強さを誇る一大隊が順当に勝ち進みました。決勝においても一大隊の攻撃はすさまじく、四十五秒で二大隊の棒を倒し、見事四連覇を成し遂げました。



女子学生奮闘す！

防衛大学校も、いよいよ平成八年三月には女子一期生が卒業します。フロンティア精神溢れる彼女達は、開校記念祭における女子だけのイベントとして四学年を中心に演舞と和太鼓を披露してくれました。同窓会の皆様には、部隊において彼女達を暖かく迎え、そして厳しく御指導を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。



施設整備着々と

平成七年七月、走水海上訓練場到新庁舎が完成し、四十二期海上要員が夏季定期訓練において初めて使用しました。冷暖房完備の快適な環境の中で、充実した訓練を行うことができました。

その他、理工学関連実験棟の建設、柔道・剣道・空手道場が武道場として平成九年三月には完成の予定であり、防衛大学校も施設の整備が着々と進められています。



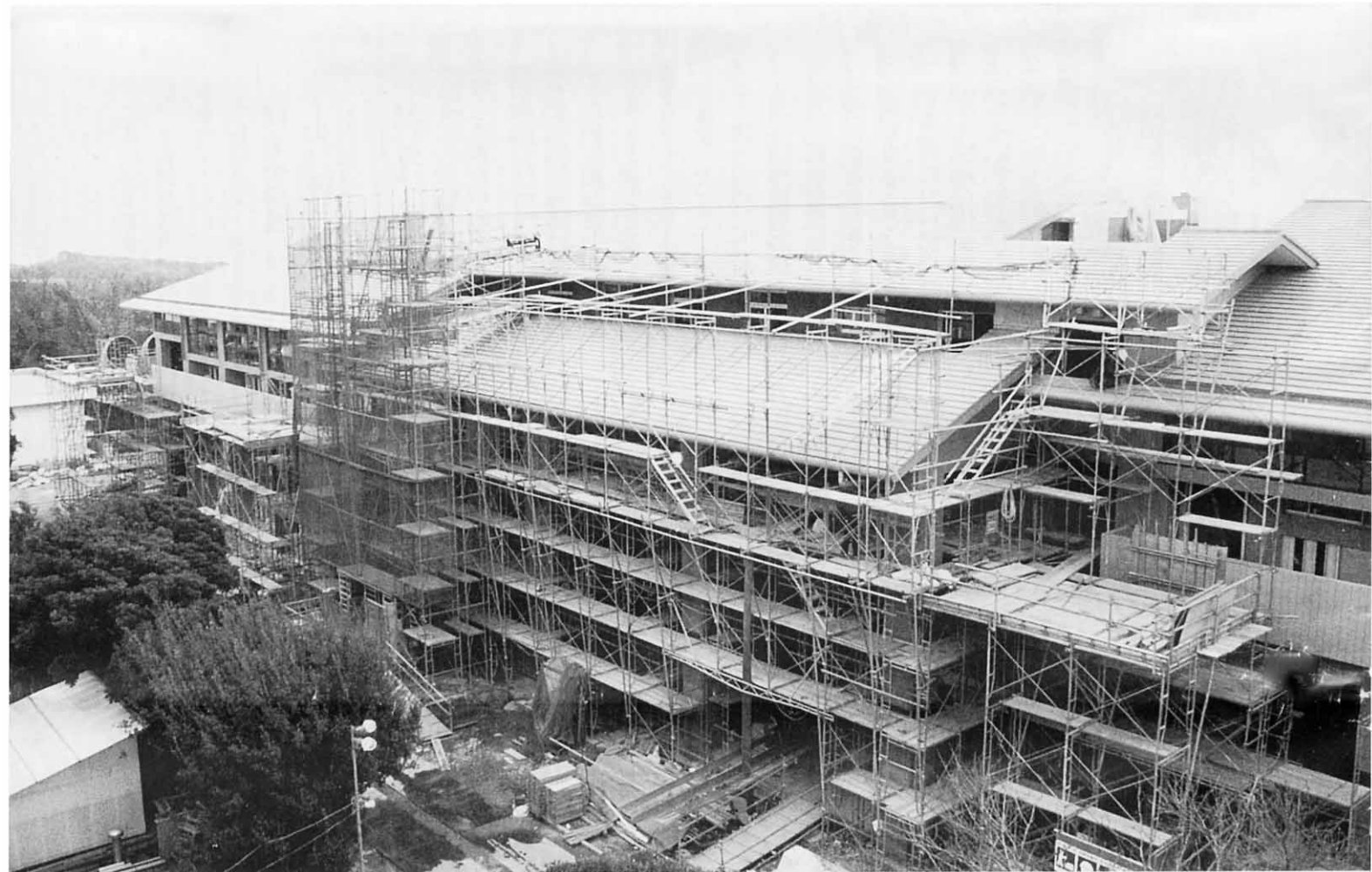
小原台だより

VOL. 4

平成9年1月1日

発行 防衛大学校同窓会

印刷 ㈱エイコープリント



完成間近の武道場

目次

会長挨拶	1
平成8年度総会報告	2
事業推進委員会答申骨子	2
五十周年記念事業について	3
平成7年度決算報告	5
平成9年度予算計画	6
防衛大学校校友会について	7
期生会便り	8
平成8年度同窓会行事	13
おしらせ	13
同窓会会則	14



ご挨拶

防衛大学校同窓会会長

小西 岑 生

新年おめでとうございます。

昨年四月、中尾会長から同窓会会長を引継ぎました。歴代会長にはそれぞれに立派な方が就任されており、私などは場違いの気もしますが皆さんの協力を得ながら精一杯努力する所存でございますので宜しくお願い致します。

同窓会も今年第四十一期生を加えて会員数は一万八千名を超えることとなりますが、一方その内の三十%以上が自衛隊員以外の会員で占めることとなり年齢の幅も益々拡大しております。

このような会の構成の変化に対応し、将来の、姿を描きつつ更なる発展を図るため、「将来方向検討委員会」続いて「事業推進委員会」が設置され、計三年間に亘り多様な検討がなされて参りましたが、昨年その成果の答申を受け、十一月の総会において答申に基づく会則の改正が承認されました。新しい会則は別掲の

とおりですが、従来と異なる主要な

点は次のとおりです。第一点は、本部を東京に移し理事を中心とする運営体制に移行することです。同窓生にとつて原点である小原台に本部を維持すべしとの声もありますが、各年代へのアンケート調査に基づく委員会の答申を尊重し、東京へ移転することとしました。ただし、当面は事務局を東京と防大内の二ヶ所に置いて業務を分担しつつ体制の確立を図ります。また、従来制度が有効に機能していなかった理事制度を充実して同窓会の運営中心とし、代議員会（評議員会を改称）において全てを決定する仕組みに改められます。このため、今まで総会で承認を求めていた事項は総会において報告することとなります。このことにも異論はありませんでしたが、各期、各支部を代表する代議員の数が総会出席者を上回る現状をも考慮し円滑な運営を図るために改正を提案しました。今後総会

は報告の場となりますが、そこでの出席者からのご意見が理事会の検討材料になることは当然であります。

第二点は、支部制度の充実です。

北海道、東北、東部、中部、西部並びに沖縄に地域支部を設け、会員は全ていずれかの支部に所属することとなります。今までは各都道府県に支部を置くことになっていましたが実体は各基地単位に支部があり、このため自衛隊員以外の会員は所属すべき支部がないという状態でした。また、支部活動を活性化するために、必要な条件を整えいろいろなタイプの支部が発足できるように細則を改正することが委員会において検討されており、期生会とは別に、同窓生としての絆が深まり人の輪が広がることを期待しております。なお、期生会との関係について会則では連係を密にするとのみ記述してその位置づけ等には触れていません。期生会の活動は同窓会を支える骨幹ではありますが、縦糸に焦点を当てた同窓会活動とは目的も異なります。

同窓会は今までどおり、学生の間

に期生会の設立を支援して参ります

が期生会は同窓会と対等の存在であると認識しております。

さて、八年度の総会では別の極めて重要な案件である防大五十周年記念に対する同窓会の取り組みについても承認されました。細部は別途七年度の総会で設置が承認され活動を開始した記念事業実行委員会の方から皆さんに連絡されることとなりますが、学校の行う記念行事への協力と同窓会自体が行う事業とに区分して進めることとなります。二〇〇二年の五十周年まではまだ時間の余裕があるように見えますが、実際の準備期間はあと五年しかありません。この件は、母校に対する同窓生の大規模な協力支援であると同時に同窓会の存在意義を示す好機と認識しており、後に顧みて悔いの残らないよう精一杯の努力をしたいと考えております。会則改正に伴う新たな組織体制の確立にしても記念事業への取り組みにしても、同窓会の総力を挙げて推進しなければ成立は難しく、会員各位の絶大なるご支援とご協力をお願い申し上げます。

国防の重責を担って全国各地で、また遠く海外で黙々と任務を遂行して居られる会員の皆さんに心から敬意を表わしますとともに、同窓生各位のご健勝と益々のご活躍を祈念致します。

総会報告

事業推進委員会答申の骨子

はじめに

平成八年三月、事業推進委員会は将来構想検討委員会答申の具体的実行案を策定するために発足致しました。そして鋭意検討を重ね、実行案の精査及びそれに基づく同窓会会則の改正案を策定致しました。

十一月九日の平成八年度総会で、会則改正案は無事議決されました(第14頁) 新同窓会会則参照)ので、ここに委員会答申の骨子を報告致します。

一 委員会の編成

委員長として一期(空)阿部博男、
 副会長二期(海)井川 宏・二期(空)長谷川孝一・三期(陸)井上陽、事務局長二期(陸) 本間敏昭ほか八期までの期生会推薦による二十名で編成

二 事業推進委員会の活動概要

平成八年三月二十七日委員会活動を開始、現在に至るまで五回の定例会議及び十一回の部会を開催

・八月一日、同窓会長・副会長に中間報告

・十月三日、同窓会長・副会長に委員会答申報告

・八月中旬に評議員の意見徴収)
 ・十月二十二日、評議員会にて委員

以上の項目については全て賛成多数により、本総会において承認されました。このうち、決算報告については五頁を、予算については六頁をご覧下さい。特に三、四項目については、これらの項目の議決は活発な議論が行われた結果であることを付け加えて報告いたします。

以下、事業推進委員会の答申の骨子を説明いたしますとともに、続けて四項目の防大創立五十周年記念事業について説明いたします。また今総会で改訂された同窓会会則については本紙最終面から掲載いたしております。

会答申議決

三 実行案策定の考え方

事業推進委員会は、「将来構想検討委員会」答申の基本的事業推進要領を踏まえ、実行可能性を考慮して策定作業を実施

四 実行案の主要策定項目

- (一) 中央組織の整備
- (二) 現行事業の改善
- (三) 財政の見直し

五 実行案の骨子

- (一) 中央組織の整備
- ア 本部の編成
- (二) 本部は「理事会」と「事務局」

で編成し、本部事務局を東京都(現東京分室)に、小原台事務局を防大に設置

- (イ) 本部事務局

- (ロ) 本部及び支部の事務を総轄

小原台関連の事務を担当、小原台支部組織が確立された時点で解消

- (ハ) 各事務局の部員構成

本部事務局員は退職会員、小原台事務局員は防大に勤務する現職会員で構成

- (ニ) 本部事務局員等の選定

立ち上がり時とりあえず期別管理による。

- (ヘ) 本部事務局の専従事務員

原則として同窓生でない専従員一名

- (ホ) 代議員会の設置

従来の評議員会を議決機関とし「代議員会」とする。

- (コ) 地域支部及び本部直轄支部の設置

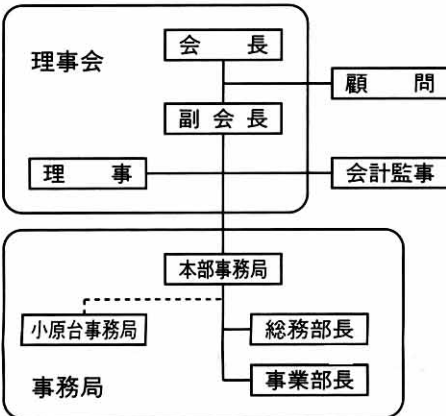
地域支部を北海道、東北、東部、中部、西部及び沖縄の各地域に設置、なお本部直轄支部は会員の届出により設置する。

- (ク) 現行事業の改善

現行事業の質的向上を主眼に実行案を作成

- (ケ) 同窓会事業の普及

・会員名簿の作成
 ・機関誌の発行



- ・会員に対する慶弔
- イ 中期的に実施すべき事業の推進

要領

- ・ホームカミングデーの実施
- ・相談窓口の設置等
- ・現職・退職の交流会等の推進
- ・会員の出版への支援

- ウ 各種団体への交友活動
- ウ 同窓会館の代替機能の確保

新体制で引き続き検討

- (三) 財政の見直し
- ア 財務運営の基本的考え方

同窓会の財務は、新たな活動が軌道に乗るまで基本繰越金(約二億五千万円)を概ね維持し年間収支の均衡を図って効率的に運営する。

- イ 収支予測

(ア) 算定項目

- ・新入会員等の会費
- ・基本繰越金の利息
- ・現行事業等に基づく年間支出

- (イ) 現行事業外の新規事業への充当可能額

二百五十万円～五百万円

十未納会費の回収額

- ウ 現行会費制度に基づく自助努力

未納会費の回収

- ・新入会費の完全徴収
- ・基本繰越金の有利運用
- ・現行支出項目・額の見直し

- エ 会費増収策の導入

将来、事業活動の充実・拡大に伴い新たな財源の必要性が生じた場合には、自衛隊退職時に徴収する「定年時會費」等を骨子とする実行案を策定

おわりに

実行案及び会則改正案作成にあたっては、評議員各位及び会員の皆様から貴重なご意見及びご協力を頂戴し誠に有り難うございました。今後とも会員皆様のご理解とご協力を頂けますようお願い申し上げます。

平成八年十一月

防大同窓会 事業推進委員会

委員長 阿部 博男(二期生空)

**防衛大学校
創立50周年記念事業
実行委員会**

同窓生に対する協力をお願い

私達の母校である防衛大学校は、昭和二十七年(一九五二年)の創立以来五十周年の節目を平成十四年(二〇〇二年)に迎えることになりました。この間防大は、建学の目的、精神を継承しながら着実な歩みを続け、多くの人材を送り出してきました。自衛隊は、精強な実力を目指す長年にわたる努力と最近のPKO等派遣及び大震災対処

等の際の活躍によって、国民の認識と信頼を得るに至りました。この歴史の中で防大卒業生が果たしてきた役割は、自負するに足るものがあると考えます。さらに冷戦後の自衛隊は、国防衛という本来の任務に加え国際社会における多くの任務が求められるようになりしました。また、これから防大創立五十周年を迎えるまでの時期は、二十世紀が終わり新しい二十一世紀が始まる節目にもあたります。

このような時に、過去の記憶を新たにその時代に生きた者の誇りを心に刻むとともに将来の更なる発展を期して、防大創立五十周年の記念事業を行うことは真に意義深いものがあります。

防大においては、施設整備、情報システムの整備、資料館の設置、五十年史の編纂等の記念事業を計画しています。施設については、平成八年度から十四年度にかけて学校の中央部地区に本部棟、多目的講堂(記念ホール)、人文科学館、情報館、図書館、給水塔(シンボルタワー)、中央広場等を総合的に整備しようという構想であり、その一部は既に着手されています。

防大同窓会も、この記念事業の意義に鑑み、平成七年度の総会で記念事業実行委員会を設けて積極的にこの事業に取り組むことを決定しました。さらに本年度の総会において、記念事業に関する次のような基本構想が承認され

ました。

《防大五十周年記念事業構想》

一 事業内容

(一) 全般

ア 防大が計画実施する事業への協力を主とし、併せて同窓会独自の記念事業を行う。

イ 記念事業の内容は、防大五十周年記念として社会通念上妥当な性格のものとし、かつ後世に遺す価値のあるものを重点とする。

ウ 記念事業の計画実施にあたっては、二十世紀後半の歴史を踏まえつつ新世紀へ向けての飛躍を理念とする。

(二) 防大が計画実施する事業への協力

ア 中央広場、記念ホール等に相應しいモニュメントの寄贈、設置

(ア) 当代の代表的芸術家の作品を目標とする。

(イ) モニュメントの種類は、記念ホール内に設置するステンドグラス等を第一案とし、状況に応じて中央広場の彫刻像を考慮する。

イ 資料館(顕彰室を含む)の整備に対する支援

資料館の整備にあたっての意見及び資料を提供するとともに、資料の維持に必要な経費の支援を行う。

ウ その他

防大五十年小史（日本文及び英文）並びに記念ビデオの作成に対する経費協力を行う。

(三) 同窓会が計画実施する事業

ア 記念記録（写真集等、記録映画等）の作成

イ 記念講演会（パネルディスカッションを含む）の開催

ウ 記念パーティー（外国留学生の招待を含む）の実施

エ その他（記念マーチの作成等）

二 事業経費

(一) 五十周年記念という独立性の強い事業であることから、これに必要な経費は同窓生の寄付を主とする独立会計を基本として計画、実行する。

(二) 募金要領

ア 目標総額 二億円

所要経費の概算見積りを次のとおりとする。

(ア) モニュメント 一億円

(イ) 資料館整備、維持及び五十年史 五千万円

(ウ) 同窓会記念行事及び記録 五千万円

イ 募金基準 一口 一万円

(ア) 自衛隊OB同窓生 一人 二口以上

(イ) 自衛隊現役同窓生 一人 二口以上

一人 一口以上

(ウ) 上記以外の同窓生は、同期生に相当する基準による。

(エ) 平成十三年度までにOBになる同窓生

現役時の募金基準によるほか退官時に追加拠金を期待する。

(ウ) 平成十三年度までに入会する同窓生

入会時に自衛隊現役同窓生としての基準による拠金を依頼する。

ウ 募金期間

(ア) 同窓生に対する募金は、平成九年に重点的に行い以後平成十四年まで継続して実施する。

(イ) 状況により同窓生以外に対する協力依頼を、平成十一年以降平成十四年まで実施する。

三 今後の予定

(一) 平成九年一月以降、同窓生全員に対する協力依頼を行う。

(二) 平成九年四月、同窓生に対する募金活動を開始する。

(三) 募金状況を勘案しつつ、平成十年に事業内容（項目）を確定する。

この構想の実現のためには、多くの同窓生の賛同と参加が不可欠であります。同窓会はこれまで防大に対する支援等を行ってまいりましたが、実態としての活動は各同期生会が主体

であり横のつながりが基本になって

います。今後もこれら同期生会が同窓会活動の中核になるものと考えられますが、この五十周年記念事業にあたっては、各期生会の力を結集し

同窓会全体が縦組織としての力を発揮する必要があります。またこのこと

によって、防大同窓会が同窓生としての精神的な結合集団から具体的な事業が実行できる組織へと飛躍する

好機にもなるものと考えます。

同窓生各位には、是非ともこの五十周年記念事業の意義と趣旨にご賛同を戴き、積極的な参加をお願いする次第です。平成十四年秋に予定されている防大創立五十周年記念行事

までの期間は約六年間ですが、資金を確保しながら構想を具現化し実行

していくためには、必ずしも十分な時間ではありません。同窓生各位に

は、各期生会あるいは別添の委員会メンバーを通じて事業に関する意見を積極的に寄せて戴くとともに、平成九年四月以降開始予定の募金活動

に対して絶大なご支援の程をお願い致します。

平成八年十一月

防大同窓会

防大創立五十周年記念事業実行委員会

委員長 佐久間 一

委員長 佐久間 一

〈防大創立五十周年記念事業実行委員会〉

〈委員長〉 佐久間 一（一期海 OB）

〈副委員長〉 志方 俊之（二期陸 OB）

石塚 勲（三期空 OB）

〈委員／事務局長〉

宇野 章二（四期陸 OB）

〈委員〉 久保 正佳（三期陸 OB）

馬野 猛彦（四期陸 OB）

桜澤 清志（四期海 OB）

田中 厚彦（四期空 OB）

福地 建夫（五期海 OB）

小泉 進（六期空 OB）

渡辺 正（五期空 OB）

小原台クラブ

石飛 勇次 陸将補

（十期陸 陸幕装備部長）

齋藤 隆 海将補

（十四期海 海幹校副校長）

渡辺 至之 一空佐

（二十期空 統幕五室）

永井 昌弘 二陸佐

（二十五期陸 陸幕人事計画課）

高橋 孝途 二海佐

（二十六期海 海幕運用課）

笠井 秋彦 一空尉

（三十一期空 空幕援護業務課）

〈事務局長補佐〉

長野 耕治 三陸佐

（二十六期陸 陸幹校）

平成7年度 防衛大学校同窓会決算報告

防衛大学校同窓会会計監事
平成8年11月9日(単位:円)

	項 目	予 算	実 績	備 考
取 入	会費(39期生他)	18,750,000	19,533,488	
	預貯金利息	4,360,000	3,438,992	
	広告代	0	464,588	
	雑収入	0	404,000	遺族寄附金他 佐々木弘栄様 (故21N佐々木義人氏ご遺族)
	取 入 計	23,110,000	23,841,068	
支	事業部	7,110,000	6,376,525	
	総務部	4,310,000	4,062,760	
	広報部	4,026,000	2,248,089	
	人事部	0	0	
	経理部	5,500,000	3,757,995	
	将来構想検討委員会活動費	1,000,000	1,000,000	
	小 計		17,445,369	
出	次年度繰越金		6,395,699	財産に繰り入れ
	支 出 計	21,946,000	23,841,068	

平成7年度 予算使用実績(細部)

	科 目	予 算	実 績	備 考
事 業 部	総会費(会場設営費)	1,700,000	1,685,287	
	(通信費)	1,656,000	1,601,555	
	(印刷費)	54,000	261,581	
	期生会支援費(43期生会助成)	100,000	100,000	
	(40期生会助成)	100,000	100,000	
	(各期生会助成)	500,000	453,800	
	校友会対外活動助成費	1,000,000	255,000	
	開校記念祭助成費	2,000,000	1,919,302	
	小 計	7,110,000	6,376,525	
総 務 部	顕彰碑献花式費	600,000	1,049,975	
	慶弔費(弔慰金・供花等)	1,050,000	662,330	
	職員定年退職者記念品費	100,000	174,852	
	事務通信費	20,000	0	
	複写機賃貸費	120,000	118,656	
	電話・FAX維持費	360,000	107,929	
	東京事務所運営費(室賃貸料)	1,200,000	1,200,000	
(維持費)	180,000	180,000		
(事務通信費)	180,000	180,000		
評議委員会運営費	500,000	389,018		
	小 計	4,310,000	4,062,760	
広 報 部	機関紙発行費(作成・発行)	3,976,000	2,211,889	
	事務通信費	50,000	36,200	
	小 計	4,026,000	2,248,089	
経 理 部	会長運営費	500,000	467,941	
	事務員雇用費	2,000,000	2,000,000	
	事務費	300,000	105,168	
	通信費	350,000	61,224	
	交通費	150,000	2,680	
	会議費	200,000	504,963	
	予備費	2,000,000	616,019	防大公開講座協賛金及び名簿関係費等
	小 計	5,500,000	3,757,995	
委 員 会	将来構想検討委員会活動費	1,000,000	1,000,000	
	小 計	1,000,000	1,000,000	
	合 計	21,946,000	17,445,369	

平成9年度 防衛大学校同窓会予算

防衛大学校同窓会経理部
平成8年11月9日(単位:円)

	項 目	金 額	備 考
収 入	会 費 (41期生)	22,485,000	59,800×376 (総員 418名の90%)
	預貯金利息	1,416,000	
	広 告 代	未 定	
	収 入 計	23,901,000	
支 出	事 業 部	7,200,000	
	総 務 部	3,050,000	
	広 報 部	3,850,000	
	人 事 部	10,000	
	経 理 部	6,700,000	
	委員会活動費防大50周年委員会	1,500,000	
	小 計	22,310,000	
	剰 余 金	1,591,000	
	支 出 計	23,901,000	

平成9年度 予算支出計画 (細部)

	科 目	予 算	8年度予算	8年度比	備 考
事 業 部	総会費 (会場設営費)	1,800,000	1,800,000		
	(通信費)	1,600,000	1,560,000	+40,000	
	(印刷費)	100,000	130,000	-30,000	
	期生会支援費 (45期生会助成)	100,000	100,000		
	(41期生会助成)	100,000	100,000		
	(各期生会助成)	500,000	500,000		
	校友会対外活動助成費	1,000,000	800,000	+200,000	
	開校記念祭助成費	2,000,000	2,000,000		
	小 計	7,200,000	6,990,000	+210,000	組織改編後は新事業部に移行
総 務 部	顕彰碑献花式費	600,000	600,000		
	慶弔費 (弔慰金)	700,000	700,000		
	(供花)	350,000	350,000		
	職員定年退職者記念品費	100,000	100,000		
	事務通信費	20,000	20,000		
	複写機賃貸料	120,000	120,000		
	電話・FAX維持費	360,000	150,000	+210,000	
	小原台事務室運営費	300,000	360,000	-60,000	東京分室分を転用
	評議委員会運営費	500,000	500,000		
	小 計	3,050,000	2,900,000	+150,000	組織改編後は新総務部に移行
広 報 部	機関紙発行費 (作成)	800,000	800,000		
	(発送)	3,000,000	3,176,000	-176,000	
	事務通信費	50,000	50,000		
	小 計	3,850,000	4,026,000	-176,000	組織改編後は新総務部に移行
人 事 部	事務通信費	10,000	0		
	小 計	10,000	0	+10,000	
経 理 部	会長運営費	500,000	500,000		東京分室分を転用
	事務員雇用費	2,000,000	2,000,000		
	本部事務局室賃貸料	1,200,000	1,200,000		
	事務費	200,000	200,000		
	通信費	200,000	200,000		
	交通費	100,000	100,000		
	会議費	500,000	250,000	+250,000	
	予備費	2,000,000	1,500,000	+500,000	
	小 計	6,700,000	5,950,000	+750,000	組織改編後は新総務部に移行
委 員 会	委員会活動費(事業推進委員会)	0	500,000	-500,000	
	(50周年記念事業委員会)	1,500,000	500,000	+1,000,000	
	小 計	1,500,000	1,000,000	+500,000	
	合 計	22,310,000	20,866,000	+1,444,000	

平成8年度運動系校友会活動結果及び部員数状況

部 名	全日本クラス	関東クラス	そ の 他	部員数 男, 女
短艇委員会	全日本カッター競技会 優勝	関東カッター新人戦 優勝		79
バスケットボール部(男子)		関東学生リーグ 13位/6部	神奈川リーグ 3位/2部	39
バスケットボール部(女子)			神奈川トーナメント10位	, 8
柔道部	全自衛隊大会 優勝	関東学生柔道優勝大会 Best 8		32, 1
ラグビー部		関東学生2部リーグ7位/8校 降格		164, 1
サッカー部			神奈川学生上位リーグ4位/7校	49, 1
剣道部	全日本学生選手権大会出場 初段以下の部 優勝 藤本 2位 水品	関東女子学生優勝大会 13位 関東理工系学生大会 優勝 村西		36, 6
空手道部	全国国公立学生選手権大会 女子 準優勝	関東学生リーグ2部優勝/6校 1部昇格	神奈川県選手権男子団体2位 有段の部 個人 古閑 優勝	46, 4
バレーボール部(男子)		関東学生7部 8位/8校	神奈川リーグ2部 優勝 1部昇格	27
バレーボール部(女子)		関東学生13部A 1位/4校	神奈川大学リーグ2部6位	9
卓球部		関東学生リーグ 5部 1位/6校	神奈川リーグ3位/4校	20, 1
陸上競技部	全日本学生選手権800m 優勝 和泉 自衛隊陸上競技選手権 800m 1位, 400m 1位, 1500m(女子) 1位	関東理工系 総合4位/50校 関東学生新人 800m 3位 榎木	神奈川選手権大会 富士登山駅伝参加	59, 2
硬式庭球部		関東学生リーグ 1位/4部	神奈川大学春季リーグ2部 1位	46, 8
硬式野球部			神奈川リーグ 1位/2部	27
射撃部	全日本学生選手権 P60 中村 優勝/200人 新人戦大会 総合8位 AR60 古川 15位/300人	関東学生ライフル選手権大会 総合7位/2部		17, 2
水泳部		関東リーグ水球 3位/4校 8部 東部国公立競泳 総合6位	東部国公立水泳大会 女子200m自由形 1位 川口 女子50m自由形 1位 平木 男子400m自由形 2位 相馬	35, 3
ハンドボール部		関東学生リーグ 1位/6部	韓国夏合宿	31
アメリカンフットボール部		関東学生リーグ2部A 7位/8校 エリアリーグ降格		93, 1
ヨット部(クルーザー)	全日本外洋帆走連盟レース2位		世界選手権出場(フランス)	14, 2
ヨット部(小型)		関東学生A 470級 25位/25校 スナイプ級 17位/19校	神奈川5大学戦 5位/5校	29, 2
銃剣道部	全国並北陸大会 団体優勝 全日本学生大会 優勝 藤本 2位 水品			35, 0
ソフトテニス部		関東学生リーグ 2位/10部	神奈川選手権W Best 8	41, 6
ボクシング部	第1回全国女子ボクシングスパーリング大会出場	関東学生トーナメント3部 3位/8校	神奈川国体予選L級 優勝 古味	36, 1
レスリング部		東日本学生リーグ2部A 5位/7校		27
ボート部	全日本選手権	関東新人戦	5大学レガッタ	16, 1
フィールドホッケー部(男子)		関東学生2部リーグ 6位		36
フィールドホッケー部(女子)		関東学生2部リーグ 8位 3部降格		11
ワンダーフォーゲル部			北海道夏合宿	22
パラシュート部	全日本選手権(JRの部) 個人2位 古賀	グリーンズカップ 個人2位 三谷		18, 2
準硬式野球部			神奈川6大学リーグ 4位	50
合気道部	全国学生演武大会		オーストラリア夏合宿	36, 6
体操部		関東理工系選手権 総合5位/8校		11, 2
弓道部		南関東トーナメント 団体優勝 南関東リーグ戦 男1部4位, 女2部2位	神奈川県男子新人戦 3位	36, 9
少林寺拳法部	全日本学生大会 団体演武 優秀 段外組演武 最優秀	関東学生大会 団体演武 最優秀		51, 2
フェンシング部		関東国公立戦 サープルの部 準優勝		21, 2
ウェイトリフティング部			神奈川新進大会 64kg級 1位 黄倉 59kg級 1位 磯貝	23
相撲部	全国国公立大学対抗新人戦 3位/15校 全国学生選手権Cリーグ 3位	関東学生大会Cリーグ 優勝	東日本学生相撲体重別選手権 個人60kg以下級 準優勝 渋谷(2年連続)	19
バドミントン部(男子)		関東学生リーグ5部 5位/7校		26
バドミントン部(女子)		関東学生リーグ6部 2位/8校		, 7
自動車部				15
居合道部	全日本居合道段別大会 Best 16			20, 4
グライダー部	久住山岳滑翔大会 2位 秋山			38, 2
吹奏楽部		日本海洋少年団バレード	定期演奏会	30, 3
儀仗隊	自衛隊音楽祭参加	下総海上ドリル参加	神奈川自衛隊音楽祭参加	56, 8

期生会だより

二期生会便り

会長 松崎 充宏

私達二期生は昭和二十九年に久里浜の保安大学校に入校して以来、友情を育み、本年で早くも四十二年の歳月が経ちました。同期としては誠に残念なことではありますが、これまでに殉職者四名を含む計三十一名の友を失い、現在は陸上百九十名、海上八十三名、航空五十八名の計三百三十一名となっております。

期生会の運営は、平成六年度の総会で改正承認された会則に基づき陸上、海上、航空の合同を基本とした全国組織を確立し、運営の円滑を図るための陸上、海上、航空の支部と地方の活動としての北海道、東北、関東、中部及び九州の各地方支部を置いております。

名簿は新たに地方支部区分で作成し平成六年十一月に配布しましたが、年度の継続的修正を実施することにし、また緊急時は電話による迅速な連絡網も確立していますので、会員諸兄には何か変更があれば至急連絡下さるようお願いいたします。

活動状況であります、期生会の年

度総会は毎年十一月二十二日、いい夫婦の日を選んで同伴参加を呼びかけており、例年一三〇〜一五〇名が集って旧交を暖め親睦を図っております。地区支部の年度総会（関東は全体の総会と兼ねる）も実施されており、特に中部は活動に積極的であります。関東支部は二木会と称し毎月第二木曜日に月例昼食会を行い、毎回四〇〜六〇名集って賑やかに談笑しています。今では参加する程に親交を深めており、この日を待ち遠しく感じる友が多い状況です。

趣味の会については、関東支部を紹介しますと、ゴルフは陸上支部（二球会）が月一回、各四〜七組、海上支部（球遊会）は年四回、幹候校九期会のメンバーで四〜五組、航空支部（球飛会）は年四回、五組程度で行っています。テニスは二〜三ヶ月おきに陸海空合同で六〜十六名参加して実施しています。その他の趣味の会もあり、同期生の夫人方も参加して随時行っております。

思い出を振り返ると、期生会は防大入校二十五周年を記念して小原台で家族一揃いになって総会を実施し、その折、記念として母校に吉田総理が揮毫され

た「治に居て乱を忘れず」の文字を刻んだ石碑を寄贈しましたが、今では同期生にとり遠き日の良き思い出になっています。

役員一同は時折折会合を開いては同期のために何かできないかと思案しております。期生会としましては防大の発展を願いつつ、同窓会を支え同窓会の事業推進に寄与できることを念願しています。同期会は陸海空の諸兄が集いのできるだけ参加して語り合うことにより、様々の知恵が湧き親睦も一層深まるものと思われまますので益々の御協力を宜しくお願いいたします。

第八期生会便り

会長 久留島昭彦

第八期生は、昭和三十五年入校以来、今年で三十六周年を迎えます。

入校当時は、「自衛隊はいずれは新国軍となる。」というような故吉田茂元総理のお話に、将来の夢を描いたこともありましたが、激動の六十年・七十年安保、冷戦のピークとしての八十年危機、そして九十年のソ連の崩壊等を経て、政治は敢えて火中の栗を拾わぬまま、自衛隊は本来あるべき姿とは違ったところに定着してしまっただけの強いつたところ。我々第八期生は、昭和三十三年四月、五百十一名が入校し、昭和三十九年三月、四百六十六名が卒業したことになりますが、今日に至



針路は「海への夢とあこがれ」へ。

日本丸、海王丸に続く、住友重機械建造の3隻目の帆船「あこがれ」。
 たくさんの夢や希望やあこがれを乗せて、世界の海へと航海を続けています。
 大阪市セイル・トレーニング・シップ「あこがれ」

住友重機械工業株式会社

本社：〒141 東京都品川区北品川5-9-11(住友重機械ビル) TEL(03)5480-8000
 大阪支社：〒541 大阪市中央区北浜4-5-33(住友ビル) TEL(06)223-7111

るまでに、二名の殉職者を含み十八名が他界し、また、中途退職又は定年退職により制服を脱いだものも逐次増加し、平成八年十月一日現在では、現職会員は卒業人員の約三分の一の百四十五名を残すばかりとなりました。

これらの現職会員のほとんども、ここ二年ほどの間にすべて制服を脱ぎ、第八期生会も新たな時代を迎えることとなります。このため、平成六年度に改正した会則で、終身会費制に移行することを定め、将来の会の経済基盤を確立しようとしているところでです。

第八期生会の運営体制は、会長を陸上・海上・航空で一年ごとに持ち回りとし、会長を補佐する通常六名の本部幹事（陸上・海上・航空・OB・企画・会計各担当）をもって会務を運営し、第八期生会にちなみ毎年八月に行う総会・懇親会、毎年一回の名簿の発行その他必要の都度の慶弔等を実施しています。

現在の同期生の概略の地域分布は、関東周辺の約三百名を筆頭に、九州に約五十名、中部、近畿、中国・四国にそれぞれ約二十名、北海道、東北にそれぞれ約十名という状況ですが、最近では、それぞれの地域ごとに懇親会、ゴルフコンペ、ツアーなど、地域の特性に合わせた活動を始めたところもあり、退官後の同期生の絆を大切にしていこうという気運が盛り上がりつつあ

るところです。

このような情勢を踏まえて、本部としては、現職会員がいなくなった時点で以降の第八期生会の在り方を模索し、準備しながら、当面はその時に備えて終身会費の完納を目標として基盤作りを重点にし、また、地域ごとの活動機運を大切にしていきたいと思いますと考えております。

防大九期生会便り

九期生会長 藤田 幸生

防大九期生会は、昭和三六年四月に結成以来、三五年になる。この間、活動はあまり活発ではなかった。会長さえ、はつきりしていなかった程である。しかしながら、このことは、九期生会会員の同期意識の強さとは、別のよう

に感じている。小原台における四年間、クラブ活動等にあまりにも熱中し過ぎた余り、期生会としてまとまるきっかけを失ってしまったこと、更に、卒業後の各候補生学校で、一般大学等他の出身者との絆を重視し、陸、海、空別に、それぞれ彼等を含めたクラス会をつくり、それらをより大切にしてきたことは事実である。「防大の期生会は、どこでも何時でもできる」という意識がどこかにあったように思う。おかげで、各自衛隊の防大九期相当のクラス会は、皆仲が良くまとまっている。仕

事も含め、先輩達からも、「君達のクラスは、気持ちの良いクラスだ。」と言われるようになっていく。我がクラスは、陸、海、空の各クラス会の会長がよく交代した。「今、そちらは誰が会長か？」とよく質問したものである。このことも、防大九期生会としてまとまった活動ができなかった理由のひとつであろう。最近、同期生が、次々と無事任務を全うして、定年で退官してゆく。OBとして、民の立場で訪ねてくる機会が多いが、その時には特に、防大の同期生を意識する。同期生が、官と民の立場で働くことができる期間は、すぐ終わってしまうだろう。やがてあと数年で、現役は居なくなる。それまでの間に期生会として今まで活動が少なかった分を取り戻す意味においても、防大九期生会を、しっかりとした態勢に整えていきたいと思う。期生会の活動期間は、まだまだ先が長いから……。

一四期生だより

一四期生会長 齋藤 陸

小原台を卒業して早二十七年が過ぎようとしています。まったく夢のごとく過ぎ去ってしまったというのが実感ではないでしょうか。我々が小原台在学中はまさに学生運動真っ盛り。自衛隊のPKO参加などとてもない話、品川駅構内での投石、火炎瓶の飛び交う中で制服に身を包み右往左往したの



C&C for Human Potential

いいコミュニケーションが
この星を変えてゆく。

NEC

がつい昨日のように思えます。

戦後の「ベビーブーマー」として、常に世間様から問題を起す世代として「悪態」を言われてきた世代もすでに人生の節目に差し掛かっています。職場においては中間管理職として、上司と部下に気を使い、家庭においては安らぎは、物言わぬ「犬か、猫」(人によって植物から鉱物に転換しているひともいると思いますが?)といった状況であることは想像に堅く無いでしょう。

昨年「新防衛大綱」が制定されましたが、その議論の過程において、三幕防衛課長(陸・渡辺 空・吉田 海・齋藤)の酒の席での話題、「運悪く、揃いも揃って我々一四期の防衛課長が、いやな役割を背負ってしまったなど、これも「団塊の世代」が世間様にご迷惑をかけてきた宿命か」とボヤクことしきり。それでも「お互いに足を引っ張り合い(?)」、時に「大同団結」なんとかまとめ上げることができました。これも一四期の団結のなせる技かと自己満足している今日この頃であります。

さて、防大は平成一四年には創立五十周年を迎えます。我々にとって防大とは?。卒業後も、余りにも職場が一緒なため、母校に対する思い入れが薄くなっていくのではないのでしょうか、もしかして空気のようなものなのかもしれません。この機会にもう一度母校

に思いをめぐらせ、そして、二十一世紀に向けて自衛隊の舵取りを、同期一致団結し頑張りましょう。

(追伸)

私、五十周年記念行事実行委員会における、十一期〜十五期までの取りまとめ責任者に指定されました、皆様のご協力を宜しくお願い致します。

十五期生会便り

期生会長 永岩 俊道

我々十五期生が防大を卒業したのは昭和四十六年のことです。当時は沖縄はまだ米国防領下であり、ベトナム戦争、中ソ武力衝突、ソ連軍のチェコ進入と、まさに冷戦最真中であつたことを思い出します。

それから二十五年、安全保障環境は実に大きく変わりました。沖縄の米軍基地に係る議論は御承知のとおりです。陸自を主体としたPKO部隊はカンプジア、モザンビーク、ルワンダ、ゴラン高原で活躍し、自衛艦隊はロシアや韓国の港に親善寄港し、政府専用機はほとんど毎月国賓等をお乗せして世界中を飛び回る時代になりました。自衛隊本来の任務、役割についての国民の期待の高まりはもちろんのことですが、卒業当時とは諸々隔世の感があります。

さて、十五期生会ですが、本部を檢

町駐屯地におき、各陸海空毎の分会により構成されています。統合の会長は、会則により各分会長の互選ということになっていますが、申し合わせにより、統幕議長と同じ制服の分会長が自動的に就任するというので、現在は空が会長に就いています。

防大卒業時、陸・海・空あわせて四百六十二名(陸二百五十一名、海九十三名、空百十八名)いた会員のうち、現在、自衛隊で勤務しているものは三百四十七名(陸百九十一名、海七十二名、空八十四名)です。残念ながら、殉職・病死等をあわせ十四名(陸二名、海四名、空八名)が物故しています。自衛隊以外で活躍している同期生は百一名(陸五十八名、海十七名、空二十六名)といった状況です。

事態対応型でよく纏まっていると評される十五期生ですが、いまのところ、分会ごとの期生会活動が主体であり、陸海空統合しての活動はやや不調かも知れません。しかし、統合重視の機運もさることながら、我々十五期生も、自衛隊生活残すところ十年弱、退官すればなおさら同期の結束が大切になるでしょう。その時をにらんで更に結束を高める諸活動が必要かと思えます。さて、その一つとして今年度中に卒業二十五周年統合懇親会を開催するというのは如何でしょうか。同期諸兄の積極的な賛同をお願いします。

技術の日立 HITACHI



きっと、もつと、すてきな夢を咲かせます。

Interface

株式会社日立製作所 公共営業本部
〒101-10 東京都千代田区神田駿河台四丁目6番地 電話(03)3258-1111(大代)

いざという時、困った時、何はさておき遠慮なく頼れるのが同期生。今後とも同期生の繋がりは大事にしていきたいと思えます。

平成八年十一月一日

統合十五期生会役員名簿

○ 統合担当 航 空

(八年三月二十五日以降)

・ 会長 永岩 俊道 空幕

・ 副会長 防衛部防衛課長：三〇六五

・ 副会長 藤根 順三 空幕

・ 副会長 装備部整備課長：四五一一

・ 総務 浅野 明照 空幕

・ 人事部人事計画課長：三〇三二

・会計 安宅 耕一 空暮

技術部技術1課長…三一一四

(評議員 江口 啓三 統幕学校

教官…八―七五―三三五六

○陸上

・会長 林 直人 陸幕

防衛部運用課長…二五四〇

・総務 兼子 忠 陸幕

装備部需品課糧食班長…二六一三

・会計 太田 保重 陸幕

装備部武化課車両班長…二五八四

○海上

・会長 道家 一成 海幕

監理部総務課長…二七九〇

・総務 奥村健一郎 海幕

・会計 (兼) 〃 監理部総務課…三七九八

三十二期便り

三十二期学生会副会長

榊原 吉典 (防大)

三十二期も卒業して早八年、この間世の中が大きく変貌したように、小原台も随分変わったようです。ですが、図書館の時計台や学生舎の並木たちは、八年前と同様に学生たちの活動を静かに応援してくれているようです。

さて、我々三十二期生会では、期生会会長の退職により、期生会の運営について同期の皆様方に御心配をおかけしたと思いますが、以前と全く変わることなく適正に運営されていること

を、この場をお借りして御報告申し上げます。それどころか、多分どの期よりも少なかったであろう期生会費も、健康な同期の皆様を支えられるとともに、会長の厳正な資金運用の甲斐あって、わずかながらも利増している状況です。

それでは、国の守りとして全国の陸海空の部隊、機関等で爆闘している同期の現況を紹介致します。

陸上便り
陸上責任者 石津 吉康 (陸幹校)
防衛大学校を卒業して早八年。殆どの者が二年前に幹部上級課程を終了し、第一線部隊において中隊長として、或いは、各種学校教官として勤務し、部隊の精強化、後輩育成のため日夜努力しております。また、十数名の者がPKOの勤務を経験し、現在においても数名の者がUNDOFで活躍しております。同期の者をテレビ等で見かける機会も多くなり、国際化の波を肌で感じるようになってまいりました。

しかしながら、忙しいのは勤務だけでなく、指揮幕僚課程や幹部技術課程の受験を控え、正月やゴールデンウィークをも犠牲にし、自己の能力の向上に邁進しています。

このように、卒業八年後というのは、陸上要員にとって、厳しい時期であり、この時期を乗り越えるべく、同

期一丸となって頑張っております。海上便り

海上責任者 本松 伸一 (二術校)
殆どの者がここ数年、中級課程入校の時期となっております。(教育の期間は職種により様々です)艦艇勤務の者は、航海長、砲雷長、船務長等にパイロットは搭乗員から陸上勤務に変わる者が多くなっており、その他では、海幕勤務、海外勤務及びPKO活動等を含め、様々な勤務を各地で経験してきております。

また、結婚した者も大半を占め、家庭と仕事を両立させ、頑張っております。

航空便り
航空責任者 尾崎 義典 (防大)
私たち三十二期が防大を卒業したのは今から八年前です。かろうじて、ひと昔までは行きませんがそれでもかなり昔のことになりました。私は縁あってこの春から小隊指導教官として、防大に勤務しています。十年前我々は防大三年生として学生舎で共に生活していました。勉学、校友会、学生舎生活、俗に言う防大三本柱。すべてに、とはいえませんが、どれかひとつは今でも胸を張れるものがあるはず。時代は変わりましたが、防大生の本質は今も変わらないと思います。

卒業して八年たち、我々の自衛隊

卒業して八年たち、我々の自衛隊

らくらく創造企業 ヤマト運輸

宅急便、 一步前へ。

たとえば、時間。ただ速い、というだけではなく、喜ばれるお届け時間を考えたい。そこで1988年、働く女性の生活時間を考えた「夜間お届けサービス」、1993年、分単位を争うビジネス界に、明朝10時のお届けをお約束する「宅急便タイムサービス」が誕生。翌日配達という枠を越え、心に「届く」便利を目指して宅急便は進化してきました。「今」に決して満足することのない、宅急便。いつも次の便利、次の快適を求めて前進し続けるのです。今日も——宅急便、一步前へ。

 **宅急便**

における役割も変わりつつあります。ついこの間まで、小隊長や、パイロットならウィングマンだったのに、いつしか、指導者になり、あるものは幕僚として司令部にゆき、ただがむしやらかな若さだけを求められていた頃とはひと味違った、役割を担うようになっていきます。

もうすぐ二十一世紀です。二十一世紀の日本を切り開いてゆくのは我々です。これからも頑張っていきたいと思います。

民間便り

三十二期学生会会長

山下 おみつ（福岡市）

三十二期も卒業してから、八年をすぎました。民間に下った同期は、皆とは言いませんが、元気でやっております。防大の教育に対して学生のときはあまりありがたいという意識がないのですが今になって非常に貴重な体験をしかも国費でさせていただいたということには民間の同期一同、感謝の念でいっぱいです。

あの年頃から、「組織管理」というテーマで悩むと言うことは民間では考えられないことです。いつも、周りの人間に対して「ひとつ次元が高い」考えができる……（思い上がりも多々ありますが……）

さて、我々も同窓会のあり方に対して私見を持つことがあります。高校、

大学とOBといわれる人間は現役に對していろいろと注文を付けたくなるものですが、ほととけば意外とスクスクと育つものをいじりすぎてだめにしてしまうのはわれわれ、OBの悪い癖だと思います。「金だけだして、口は出さない！」三十二期としてはこれが望ましいOBの姿だ考えております。先輩方は如何に！

皆様のご健勝とご活躍を心からお祈り申し上げます。

三十四期学生会便り

期学生会長 佐藤 信知

三十四期学生会のみなさん、お元気で
すか？

我々が小原台を巣立ってはや六年半。なかには研究科の学生や指導教官等で防大に戻った者もいますが、私などは夏季定期訓練で部隊実習に来る学生に会う程度。当時は洗濯の煩わしさも相まって、嫌でたまらなかつた真白い制服も、今では妙に懐かしい気がします。

さて、同期生の近況についてですが、私の乏しい情報収集能力で得たものから、詳細さ、正確さについては充分ではないかもしれませんが、紹介させていただきます。と思っています。

陸上の同期生は、そのほとんどが幹部上級課程を終了し、部隊で運用訓練幹部等として活躍するとともに、指揮

幕僚課程の受験に向け、猛勉強中です。海上の同期生も、艦艇部隊では、航海長、水雷長、砲術長……。航空部隊では、機長……。陸上部隊では、係長、班長……。と肩書きにもようやく「長」の文字がつき、仕事も訓練もおもしろくなってきたところ。です。

航空はといえば、F-11、F-15のパイロットのほとんどは編隊長となり、F-4のパイロットも前席への転換を終了。また、各特技はもとより、防大、幹候校そして操縦課程の教官をしている者、整備、高射から施設や人事へ職種転換をした者と、それぞれの分野で活躍をしています。

民間企業に就職した同期生は、未だバブルの影響が残り、苦勞している者が多いようです。

期学生会の私が言うのも何ですが、三十四期生会の活動は決して活発ではありません。会員を掌握するための住所管理にしても、平成五年に往復はがきを使って調査したにも係わらず、返答率三十パーセントを割り、頓挫したままの状態です。私もプロジェクトチームを結成し、徹底した住所管理を行うとともに、卒業十周年である西暦二千年には、記念パーティーが開催できるよう努力していく所存ですので、会員のみなさんご協力をよろしくお願いたします。

総合技術力と
高品質保証体制で
お応えする

島津の航空機器

航空電子機器 / 空気調和機器 / 油圧・燃料・滑油機器
作動機器 / 操縦機構機器 / ガスタービン動力機器 / 地上支援器材

SHIMADZU
Solutions for Science
since 1875

T4用ヘッドアップディスプレイ



⊕ 島津製作所

本社 京都市中京区西/京桑原町1
航空機器事業部 (075) 823-1308

お問合せはもよりの営業所へ

●東 京 3219-5850 ●大 阪 373-6632
●名古屋 565-7571 ●福 岡 271-0334

防衛大学校同窓会会則

第1章 総 則

(名 称)

第1条 本会は、防衛大学校同窓会と称する。

(本部及び支部)

第2条 本会に本部と支部をおく。

2 本部は、東京都におき、理事会と事務局で構成する。

3 支部は、北海道、東北、東部、中部、西部並びに沖縄の各地域支部と会員の届け出による本部直轄支部とし、その構成及び運営要領等は細則による。

第2章 目的及び事業・活動

(目 的)

第3条 本会は、会員相互の親睦、母校の発展及び社会的活動に寄与することを目的とする。

(事業及び活動)

第4条 本会は、前条の目的を達成するため次の事業及び活動を行う。

- (1) 会員相互の親睦・交流に資する事業
- (2) 母校の充実・発展に資する事業の協力と援助
- (3) 防衛意識の向上・普及活動
- (4) 社会的活動に資する事業
- (5) その他前条の目的を達成するために必要と認める事業と活動

第3章 会 員

(種 別)

第5条 会員は、次のとおりとする。

(1) 正会員

防衛大学校本科及び研究科卒業生並びに防衛大学校に学生として在籍した者で、加入の希望が理事会で承認された者

(2) 特別会員

防衛大学校職員のうち、校長、副校長、幹事、部課長、講師以上の教官等の職に在る者及び在った者のうち希望する者並びに防衛大学校同窓会の趣旨に賛同する者で、理事会で承認された者

(会費の納入義務)

第6条 正会員は、第26条に規定する会費を納入するものとする。

(会員の特典)

第7条 会員は、第4条に規定する事業及び活動並びに諸施設の利用等の特典を平等に享受することができる。

第4章 役 員 等

(種 別)

第8条 本会に次の役員及び代議員並びに顧問（以下役員等と云う）をおく。

- (1) 会 長
- (2) 副 会 長
- (3) 理 事
- (4) 会計監事

(員数及び選出)

第9条 前条の役員等は、次の方法で選出する。

- (1) 会長は、正会員のうちから代議員会で1名を選出する。
- (2) 副会長は、正会員のうちから代議員会で2名を選出する。
- (3) 理事は、正会員のうちから代議員会で若干名を選出する。
- (4) 会計監事は、正会員のうちから代議員会で3名を選出する。
- (5) 代議員は、防衛大学校本科各期から3名、研究科各期から1名、各地域支部から1名及び100名以上の会員を有する本部直轄支部から1名の届け出による。
- (6) 顧問は、代議員の推薦により会長が委嘱する。

(職 務)

第10条 役員等の職務は、次のとおりとする。

- (1) 会長は、本会を代表し、会務を統括する。
- (2) 副会長は、会長を補佐し、会長に事故があるときはその職務を代行する。
- (3) 理事は、会長・副会長を補佐して本会の運営にあたる。
- (4) 会計監事は、本会の財務を随時監査してその結果を代議員会に報告するとともに、理事会に出席して意見を述べることができる。
- (5) 代議員は、会員の代表として本会の意思決定に関与する。
- (6) 顧問は、会長の諮問に応じるとともに、代議員会及び理事会に出席して意見を述べることができる。

(任 期)

第11条 各役員等の任期は2年とし、3選を限度として再任を妨げない。ただし、辞任または欠員補充により選出された者の任期は前任者の残任期間とする。

第5章 機 関

(種 別)

第12条 本会に次の機関をおく。

(1) 代議員会

(2) 理事会

(構成)

第13条 代議員会は、代議員をもって構成する。

2 理事会は、会長、副会長、理事をもって構成する。

(定足数)

第14条 代議員会及び理事会は、その構成員の過半数の出席をもって成立する。ただし、代議員会の出席は委任状によることができる。

(議長)

第15条 代議員会の議長は、代議員会開催時、代議員の互選により選出する。

2 理事会の議長は、会長とする。

(代議員会・理事会の開催)

第16条 会長は、毎年1回定期代議員会を開催する。

2 会長は、次の場合に臨時代議員会を開催する。

(1) 会長が必要と認めた場合

(2) 代議員の3分の1の要請があった場合

3 会長は、随時理事会を招集し、開催する。

(機能)

第17条 代議員会は、会員を代表し、次の事項について決定する。

(1) 会則の改正

(2) 会費の改訂

(3) 事業計画の基本事項

(4) 年度予算及び決算

(5) 財産目録

(6) 会長、副会長、理事、会計監事の選出及び顧問の推薦

(7) その他理事会が必要と認めた事項

2 理事会は、次の事項について決定し、事務局の運営にあたる。

(1) 総会に関する事項

(2) 代議員会で審議する前項の(1)から(5)迄の案

(3) 細則の制定及び改正

(4) その他代議員会に付議すべき議案

(議決)

第18条 前条における議決は、出席者の過半数の賛成による。ただし、可否同数の場合は、議長の決定による。

第6章 委員会

(設置)

第19条 本会の事業及び活動に必要な場合、会長の要請または理事会の決定により正会員をもって構成する各種委員会を設置することができる。

(構成)

第20条 前条の委員会に委員長をおく。

第7章 事務局

(構成及び運営)

第21条 事務局は、事務局長、部長、部員及び職員をもって構成する。

2 事務局長は、理事の中から、部長及び部員は、正会員の中から会長が選出する。

3 事務局の運営要領等は細則による。

第8章 総会

(開催)

第22条 会長は、会員相互の親睦及び意思疎通に資するため、毎年1回定期総会を開催するものとし、開催時期等は理事会が決定する。

2 会長は、代議員会が必要と認めた場合に臨時総会を開催する。

3 総会の議長は、総会開催時、会員の互選により選出する。

(報告)

第23条 理事会は、総会において第17条第1項及びその他会長が必要と認めた事項を報告するものとする。

第9章 会計

(収入)

第24条 収入は、次による。

(1) 会費

(2) 寄付金及びその他の収入

(支出)

第25条 支出は、前条の収入をもってあてる。

(会費)

第26条 会費は、次の2種類とし、その金額及び納入要領等は細則による。

(1) 普通会費：入会時等に納入する会費

(2) 特別会費：大規模事業等の必要時に納入する会費

(会計年度)

第27条 本会の会計年度は、毎年4月1日に始まり翌年3月31日に終わる。

第10章 雑則

(期生会との関係)

第28条 本会の活動にあたっては、各期生会との連携を密接に行うものとする。

(細則)

第29条 理事会は、本会の運営に必要な細則を定めることができる。

附則

1 本会則は、平成8年11月9日から施行する。

2 防衛大学校同窓会会則(昭和62年11月15日制定)は、平成8年11月9日をもって廃止する。

防衛大学校同窓会機関誌

小原台だより



Vol. 5

平成10年1月1日
発行 防衛大学校同窓会

編集 荒 義和 稲垣純通
小野寺功 志岐浩一 古川洋
印刷 (株) エイコープリント



ご挨拶

防衛大学校 同窓会会長

小西 岑生

全国各地で活躍しておられる同窓生の皆さん、新年おめでとうございます。海外で多様な任務に従事しつつ新春を迎えられた方も多勢おられると思います。また、防大卒業後母

国に帰り重要な任務についておられる同窓生も多数にのぼります。一万八千余の同窓生の今後益々の御発展と御健勝を心から祈念申し上げます。

さて、昨年の本紙でも触れましたが、同窓会は会員数の拡大と会員構成の変化に対応するため、事業推進委員会の答申を基本に活動内容を逐次拡充すべく努力を続けております。本部は昨年小原台から六本木の東京分室に移りましたが、その後市ヶ谷への再移転の話が急浮上し将来の便宜さを考慮して夏に再び市ヶ谷駐屯地正門前の共済組合の建物に移動しました。維持費の関係もあって十分なスペースがあるとは言えませんが、10名程度の会議ができる部屋も確保してありますので期生会等の打ち合せ等に活用して下さい。

なお、本部の東京移転に伴って従来防大の開校記念祭に合わせて横須

賀で開催していただきました同窓会の総会及び懇親会は、年度末に東京で行うこととなりました。細部は別途御案内致します。

支部組織の充実に関しましては、昨年関係者のご尽力により北海道、西部、沖縄の地域支部が発足し、広島、熊本の地区支部も設立された他、小原台クラブが本部直轄の支部となりました。今後環境が整い次第逐次支部の充実を推進して参りますが、特に組織が確立されていなくても地域における同窓生の絆を強めるべく会員の皆さんが積極的に動いて下さることを期待しております。

この他に同窓会本部の企画として昨年夏に期別対抗のゴルフ大会（1期から7期対象）を実施しました。参加者からは大変好評を頂き今年は8期生までを対象に計画することとしております。なお、この企画に松本防大校長から立派な優勝カップを頂戴しました。

また、4月に予定されている防大の短艇競技には、学校からの申し入れを受けて同窓生で1クルーを編成、

女子学生クルーと競う計画で準備を進めています。この種の企画は可能なものから推進して参る所存ですが、当初はどうしても東京地区に偏ることとなりがちですので各地域においても可能な企画を取り上げて実行して頂きたいと思ひます。

今年と同窓会名簿を新たに作成する予定にしております。名簿の精度を高めるため各期生会のご協力が不可欠ですので宜しくお願ひします。本部における名簿管理も関係者の努力によってかなり充実に参りました。クラブ活動別の名簿等は比較的簡単に取り出すことが可能ですので活用して頂きたいと思ひます。

最後に、防大創立50周年記念行事に対する同窓会の取り組みについて特に申し上げたいと思ひます。既に実行委員会から同窓生各位に募金のお願ひが届いている筈ですが、この成果は同窓生の母校への熱い想いにかかっていると云えます。計画の細部は別に掲載しますので、ご意見を賜ると共に積極的なご協力をお願い致します。各理事、本部事務局の各班は、同窓会活動の活性化のために正に奉仕の精神を持って取り組んでおり、本年も一層の充実発展を目指して努力して参ります。20世紀も残り僅かとなった新しい年が同窓生の皆さん一人一人にとってより良い一年であることをお祈り申し上げます。

目次

会長挨拶	
防大の現況と将来	1
防大創立50周年記念事業	3
中期事業計画について	6
第一期別対抗ゴルフ大会	8
21世紀でのふれあい	10
期生会だより	11
平成8年度同窓会決算報告	14
平成10年度同窓会予算	15
事務局からのお願ひ・お知らせ	16
小原台今昔物語	

表紙

初代「榎学長の胸像」の前で語らう学生達

防大の現状と将来



昭和63年度以来の2人部屋が、平成9年9月から4人部屋に移行することとなった。

部屋編成の変遷は、旧学生舎（1～5号学生舎）時代には、学年混合の8人部屋編成であったが、昭和52年度から新学生舎が増設され、4人部屋編成に移行した。

昭和56年度には、各学年に必ず補導の推進、向学心の養成のねらいから、従来の学年混合中隊から学年別中隊に学生隊編成が変更され、それに伴い部屋員構成も同学年4人となった。

学年別中隊となったことにより、同期生間の切磋琢磨及び上下級生間の交流が低調となり、その解決策として、昭和61年度から学年混合中隊（小隊は同一学年）とした。

昭和61年度には、募集難等を反映した、いわゆる「魅力化」施策が掲げられた。その一環として、学生居室の改善により日常生活のゆとりを確保し、休養・安らぎの場として相応しいものとするため、居室を自習室・寝室兼用とし、部屋構成を同学年2人とするにととした。昭和63年度から平成5年度にかけて学生舎の内部改装が行われ、逐次2人部屋体制へと移行した。

2人部屋編成への移行が進む中、平成3年度には、リーダーシップ・フォロアシップの育成を重視し、それまでの学年別小隊編成から学年混合小隊編成とした。2人部屋の室員構成は、同学年のままとするかわりに、ブロック制度（4部屋を1ブロックとし、各ブロック毎に4学年のブロック長をおく）をとり、上下級生の交流がしやすい環境とした。

上記のように変遷をたどってきた学年混合小隊・同学年2人部屋編成であるが、最近の国際平和協力業務や災害派遣活動を通じて自衛隊に対する国民の理解と期待が高まっている中、校内はもとより部隊等からも、リーダーシップ、ミリタリーマインドといった面での更なる資質の向上が期待されるに至った。このため、学生舎生活の本来の意義である規律ある団体生活を通じての自己陶冶を実践させる上で、勉学の場合及び修養・切磋琢磨の場としてのあるべき姿を検討し、所要の措置を講じることとなった。

検討の結果、自習室を神聖な勉学の場とし、生活に「けじめ」をつけさせる上で自習室と寝室を分離するとともに、上下級生同室による緩やかな緊張の下での生活を通じ、修養（徳育の体得）に努めさせることとし、4学年部屋長のリーダーシップを期待する学年混合多人数部屋編成が適当とされた。2人部屋編成に移行を開始して約10年が経過した今、学生舎の各居室のスペースの現状を考慮し、4人部屋編成をとる事となった。

平成9年9月に第4大隊が、10月に第1～第3大隊がそれぞれ試行を開始したばかりである。

第411小隊 航空要員 第2学年 大城朝輝

「最近の防大生はたるんでいる」と言われるようになって久しい。プレスしていないよれよれの常装で町を歩き、酒に酔って電車の中でくだを巻く。それを見た市民やOBの方は嘆き、「防大はどうなってしまったのだ」と呟く。いったい防大生は何を期待させているのだろうか。

“組織”はある目的のために造られるわけで、その成員が同じ目標、課題意識を持って初めて、当初の目的の達成に向けて前進することができる。今の防大に欠けているのはまさにこの点である。

防大に入校した時点で防大の存在意義を考えた人が果たして何パーセントいるのだろうか。あるいはおぼろげながら淡いイメージを抱いて入校しても、何ら具体的に示してもらえず、確固たる方針がつかめないまま、時の流れるまま無為に過ごしてしまった学生が大半ではないだろうか。我々は、この組織としての大前提を見失っているという点で、すでにスタート地点で大幅に後れてしまっているのである。

世界の士官学校で二人以下の小人数部屋が主流となっている今、なぜ防大で4人部屋なのか。自主自律を叫ぶ前に、まず我々一人一人が、防大生という自覚を取り戻さなければならないのである。

第431小隊 海上要員 第4学年 稲葉忠之

防衛大学校では、今期より二人部屋制度から4人部屋制度への移行を実施しています。第4大隊では、1、2、3大隊に先駆け、夏季休暇明けに移行を完了し早2か月が経過しました。移行前には、数多くの意見が挙げられ、防大全体が渦中に置かれていましたが、移行後2か月を経てようやく生活環境に平静さを取り戻しました。

この制度の実施により、今まで以上に上下級生が互いにふれあう時間が増え、4学年が部屋長としての責任を自覚し、リーダーとしての素養を涵養するにふさわしい基本的環境が備わったように思えます。

しかし、善悪に関わらず、4学年の行動の全てが下級生に反映されると同時に、上下級生間のふれあいが増加し、その関係が馴れ合いになってしまう等の問題も生じています。

現在、一般社会においては自己中心的な人材が渦巻いていますが、今回の4人部屋制度への移行を機に、こういった人々とは異なった誠実な人格を身につけ、常にリーダー足るべく人物を育成しうる場を防衛大学校に芽生えさせるように、まずはその環境の整備に努めたい。

4人部屋に移行しての学生所感

第441小隊 第1学年 筒井慎之介

私たち1学年も防大に入校して半年経ち、ようやくここでの新しい環境に慣れ始めてきたかと思うと4人部屋への移行とまた環境があわただしく変化した。それで、最初は4人部屋への移行に対し抵抗を感じたのは確かである。今、実際に4人部屋で生活しているわけだが感想を述べると決して悪いものではなく、最初の不安が嘘のようである。4人部屋の利点を挙げてみると、上級生との人間関係が広がった、つまり縦の関係に慣れる場ができたこと、それから4学年の方のリーダーシップをとる機会が日常生活において増えたことがある。これは防大生が防大らしく振る舞える環境が確立されたことを表している。

過去において二人部屋に移行した理由として、個人のプライベートを重要視する社会に同調するためだということを聞いたことがある。それを考えると一見、今回の4人部屋への移行は時代錯誤したものに思える。しかし、今日の社会では、人々は他人と協調することを忘れてしまっていると言われている。その中で4人部屋への移行は、その協調性を取り戻すという点から見て時代錯誤しているというよりも、時代に沿った、いやその先を進むものではないだろうか。この機会に同じ部屋の上級生に学びながら躍進していきたい。

第433小隊 陸上要員 第3学年 松本公平

我々が4人部屋に移行して約2か月が過ぎようとしている。思えば、4人部屋の移行は我々にとってまさに「寝耳に水」の知らせであり、誰もが皆、驚きと不安、そしてなぜ今頃4人部屋に移行しなければならないのか、という疑問の気持ちで一杯だった。

それでも私の所属する第4大隊では、他大隊に先駆けて9月から実施の運びとなり、現在に至っている。

さて、4学年から1学年までが一緒に生活する4人部屋は、これまでの二人部屋と異なり、各学生のより一層の自覚ある行動が求められると思う。なぜなら、同期同士の二人部屋だといひ加減になりがちだった生活が、上下級生が互いに切磋琢磨し、上級生は下級生の良き模範となり、下級生がそれに良く従う生活に変わるからである。

まだ移行して2か月ということで、これから先色々な問題が生じるだろうが、当初の頃の様な不安はないし、一つ一つ解決してゆけば良いことである。現に先輩方はそうやってこれまでの伝統を築いてこられた。我々もこれにない、自分達で試行錯誤しながら、新たな防大の伝統を築いてゆきたいと思う。



総合安全保障研究科

日本の社会が高学歴化するとともに、自衛隊の任務の多様化及び国際化に伴い、幹部自衛官等が職務を遂行する上で安全保障、国際法等に関する専門知識、国際政治及び地域研究に関する識見及び能力が必要になってきた。

各自衛隊においては、社会科学に関するポスト・グラジュエイトは国内留学又は国外留学に依存していたが、国内の大学においては安全保障の分野の一部を副次的に教育研究しているにすぎず、また、海外留学による安全保障の教育は留学先の国情が反映されることとなるため、教育内容をそのまま我が国の状況に当てはめることができないという問題があった。

このため、防衛大学校において国防や戦略に関連した安全保障に関する体系的かつ理論的な教育を行う必要があるとして、防衛庁設置法の改正により平成8年度10月総合安全保障研究科を開設し、翌年(本年度)4月、第1期生22名を受け入れた。

国際士官候補生会議

学生の国際交流の機会を増やすため全学生が参加可能な国際会議を開催し、学生相互のプレゼンテーション及び議論を行うとともに、本会議を全学生に傍聴させ、また、会議以外の場でも交流することで、学生の

国際的視野の拡大、国際情勢の認識及び語学力の向上に資し、各国と我が国の安全保障に係る相互理解の促進に寄与させることを目的として、平成9年度から防衛大学校において国際士官候補生会議を開催することとした。

第1回会議は、平成10年3月の8日間に、米国、イギリス、ドイツ、フランス、韓国、タイ、フィリピン、インドネシア、マレーシア及びシンガポールの10か国からそれぞれ1名の士官候補生を招聘する予定である。

短期留学

昭和48年度に米国三軍士官学校への派遣が開始されて以来、徐々に派遣を増加し、平成9年度までに米国三軍、フランス陸軍、カナダ統合軍、タイ三軍、シンガポール国軍、韓国三軍、ドイツ国防大学・陸・空軍及びイギリス三軍への派遣が予算化され、現在16名を約2〜3週間諸外国士官学校等に派遣している。

また、昭和59年度には米国海軍兵学校の主催する「国際情勢研修会」に学生の派遣を開始し、平成9年度には米国陸軍士官学校の主催する研修会にも学生を派遣することとなった。

国際防衛学セミナー

我が国及び諸外国の軍学校、一般大学の教官、研究員を対象として、防衛学の教育・研究の充実、発展及び安全保障に係る事項の相互理解、相互啓蒙を目的として、平成7年度から毎年実施している。今年度で3回目であり、過去1、2回ともそれぞれ十数か国の参加を得ている。



防衛大学校創立50周年記念事業

防衛大学校は、将来、幹部自衛官となるべき者を教育訓練する機関として、昭和27年に設立され、平成14年(2002年)には創立50周年を迎える。

この50周年を記念して、記念事業を実施することを計画し、既に検討が開始されている。記念事業としては、以下のものがある。

- ① 施設整備事業
- ② 電算機の利用による全学的な情報システムの整備
- ③ 歴史資料、卒業生の足跡等を展示する資料館の設置
- ④ 50年史の編纂

施設整備事業

防衛大学校の現有施設の大部分は、創立当初の昭和30年代に建設されたものであり、40年を経過した今日では経年変化及び塩害による老朽化が著しく、かつ狭隘化が進んでいる。

再整備は、予算制約等の事情から逐年、計画的に進めざるを得ず、これまで理工学館等の大規模改修を行ってきたところである。

創立50周年を迎えるにあたり、本部庁舎、人文科学館、講堂、図書館、給水塔等、本校の管理機能や全校的支援機能を果たす諸施設が集中する中央部地区を統一的概念の下に、かつ長期的視野に立って、建て替え整備を行う。

情報システムの整理

従来の書籍等を中心とする図書館の機能に加え、電子図書、グラフィック及び音声・ビデオ情報等各種のメディア情報を統合し、通信・処理機能を取り込んだ総合的な教育支援施設、すなわち電子図書館を指向したシステム環境を整備する。

また、将来、ネットワーク化が常識になると思われる社会において、防衛大学校も学生に対する情報教育のあり方を確立するとともに、学生含ネットワークの充実やマルチメディア情報教室等の情報教育を支えるインフラストラクチャーを整備する。

資料館

学生に防大生たるの誇りを持たせ、士気を高揚させ、精神面で感化を与え得るような訓育の環境を整備し、併せて広報拠点とすることを目的とし、歴史・現状及び卒業生の足跡等を展示するものとし、整備にあたっては、同窓会とも連携をとりつつ、今後検討していく。

50年史の編纂

50年史の編纂・刊行については、資金面の措置を含め、同窓会と調整しつつ検討を進めていく。



155mmりゅう弾砲 FH70

国の安全と平和に寄与する技術

素材とメカトロニクスの総合企業
JSW 日本製鋼所

東京・日比谷三井ビル ☎3501-6111 (大代表)
ホームページ: <http://www.jsw.co.jp>

募金状況と
協力のお願い

防大同窓会
五十周年記念事業
委員長 佐久間一

平成14年に予定されている防大創立五十周年記念事業に対する防大同窓会の協力につきましては、御承知のとおり、昨年度の同窓会の評議員会及び総会における承認を経て、本年度から同窓生への募金活動を開始しました。現在までの成果について御報告致しますとともに今後のさらなる御協力をお願い致します。

1 募金状況

記念事業委員会では、防大五十周年記念事業についての基本構想と募金に対する協力依頼を内容とする趣意書を作成し、本年4月に1期生から7期生、6月には8期生から41期生の同窓生の皆様に、それぞれ送付致しました。

その結果、本年10月末までに寄せられた拠金の総額は約4600万円であり、拠金率は約20%に相当しています。なお各期別の拠金状況は別表のとおりです。

また、拠金の振込用紙の通信欄に記載された様々な御意見は何れも貴重なものと受け止めており、小原台上に同窓生の夢を実現して欲

しいという熱い想いや、来年退官を予定されている現役の同窓生がOBとしての拠金も併せて送付された事実には、深い感銘を受けました。一方、募金要領に対する疑問を提示された方には、しかるべきご説明をしたいと考えております。

2 拠金の管理

募金に応じて頂いた方々には、受領確認の葉書を送付するとともに各期別の名簿に入金状況を個人毎に記録しております。なお受領確認の葉書の送付は、7期までのOB会員についてはすべて終了しておりますが、8期以降の会員については事務処理能力の関係で逐時処理せざるを得ない状況にありますが、どうぞご了承下さい。

また現在迄に寄せられた拠金は第一勧銀に定期口座を設定してそのほぼ全額を預金致しました。この記念事業は同窓会自身の事業であることから、募金活動のための印刷費、通信費等は同窓会の経費として処理し、同窓生の浄財の使途は記念事業に直接必要な範囲に限定する事を方針としております。

3 記念事業の内容

同窓会としての記念事業の構想については既に送付した趣意書の中で御説明したところですが、募金状況の見通しを得た時点で具体的な計画を作成する事としております。

募金活動については、事業内容

を確定してそれに基づいた募金を行うべきとの御意見も承知しておりますが、事業内容について幅を持った構想を提示した上で募金を実施し、その成果に応じて事業の内容、規模を定めるという方策を採用する事が同窓会としての事業の性格から最も現実的な道である点を御理解戴きたいと存じます。

4 募金協力へのお願い

先に述べました同窓生への趣意書の送付数は約1万6千通であり、その処理作業の主体は防大勤務の同窓生の勤務時間外における努力によるものであります。しかし、趣意書の中で募金活動の重点を平成9年度とのみ記して募金期間を明示しなかった事、また振替用紙の入れ忘れ、宛名の誤記等のミスのために、現在まで拠金の機会を得られなかった同窓生に対して、記念事業委員会として真に申し訳なく思っております。

この記念事業の意義と趣旨については、既に前回の「小原台だより」や趣意書を通じて申し上げてきたところですが、母校の創立五十周年という節目に同窓生の想いを具体的な形で表わすとともに後

輩達に未来への希望を与え、さらに防大同窓会の団結と力を示すという意味で、是非この事業を成功させたいと念願しております。繰り返しになりますが、募金目標は2億円で、防大同窓会の募金基準は一口1万円でOB会員は2口以上、現役会員は1口以上であり、同窓生の募金は平成9年度末をその期限にしたいと考えております。よろしく御協力、ご支援の程お願い致します。

(平成9年11月 記)

注1

振替用紙が手元がない方で拠金される方は、お手数ですが次の口座を御利用下さい。

郵便局振替口座 口座番号 00150-6-352140
加入者名 防大50周年記念事業委員会

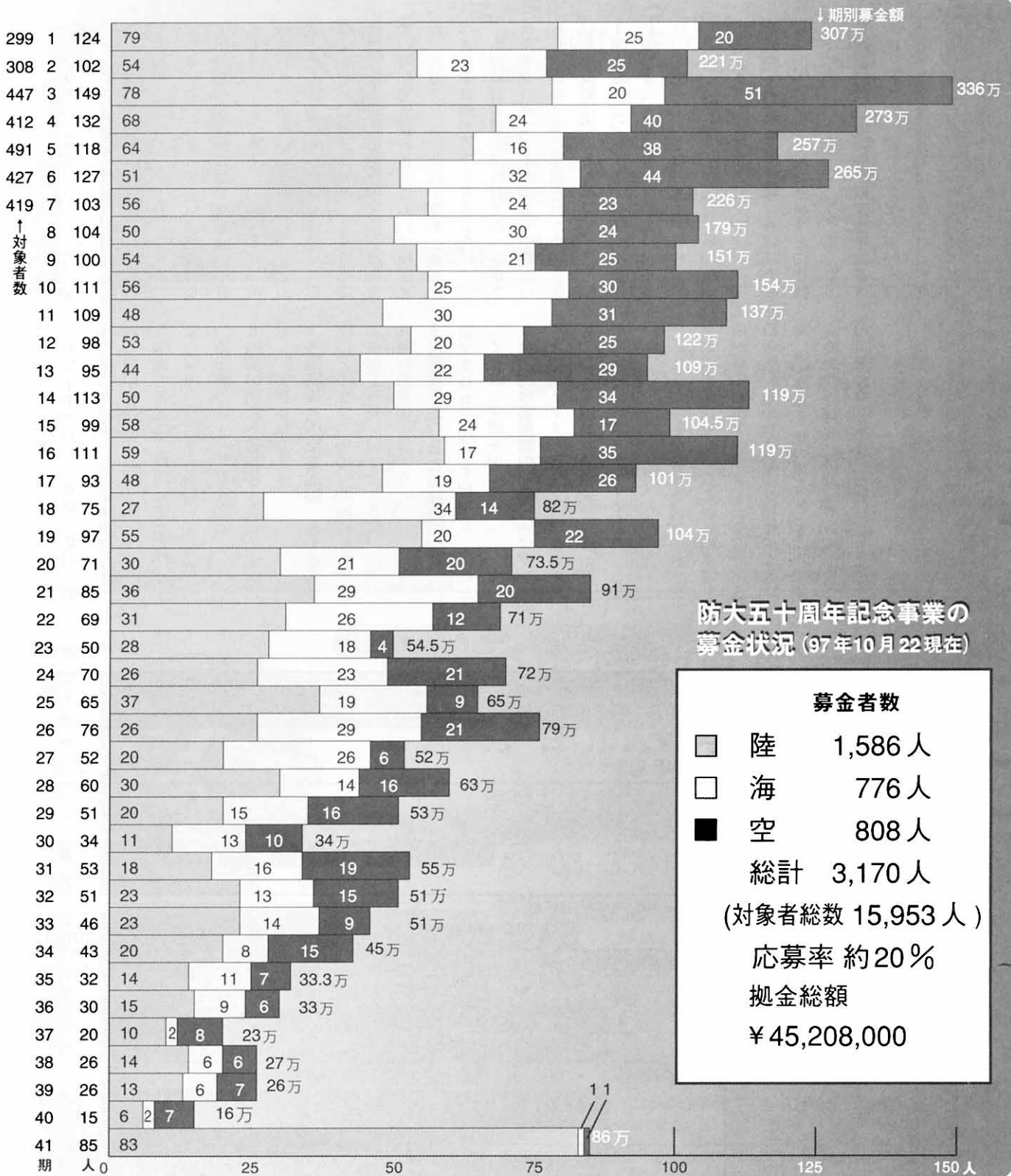
注2

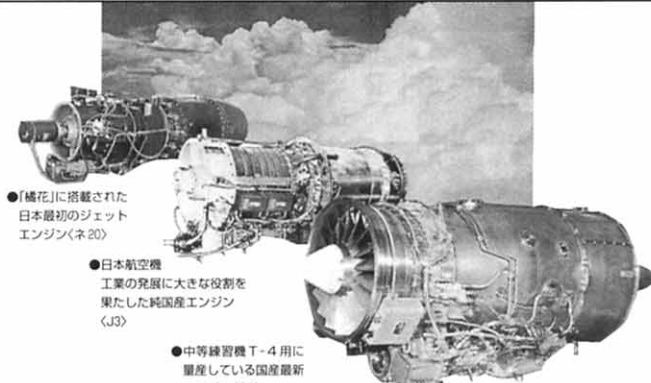
記念事業委員会に対してお問い合わせ等は、次の連絡先にお寄せ下さい。

〒160-0003
東京都新宿区本塩町21-3-2 共済1号館
防大同窓会本部内 50周年記念事業委員会
TEL 03-3351-8910



富士重工業株式会社





- 「橘花」に搭載された日本最初のジェットエンジン(ネ20)
- 日本航空機工業の発展に大きな役割を果たした純国産エンジン(J3)
- 中等練習機T-4用に量産している国産最新エンジン(F3)

たしかな技術と実績

日本の夢を追い続けた半世紀です。

IHI

石川島播磨重工業株式会社

航空宇宙事業本部

〒100 東京都千代田区大手町2-2-1(新大手町ビル) 電話 03(3224)5333

中期事業計画

について

事業部長 吉成 碩之

防大同窓会の今後あるべき姿及び長
 中期的な事業計画の基本構想は、平成
 6年1月から7年7月までの間に検
 討された「将来構想検討委員会」(志
 摩 篤委員長)並びにその構想を具現
 化するために設置された「事業推進委
 員会」(平成8年3月から8年11月ま
 で・阿部博男委員長)において検討さ
 れ、同窓会として今後中期的に実施す
 べき事業計画が答申されました。
 上記検討委員会で検討され、答申さ
 れた事業計画に、その後若干の見直し
 をし、理事会等で承認された中期事業
 計画の概要は次のとおりです。

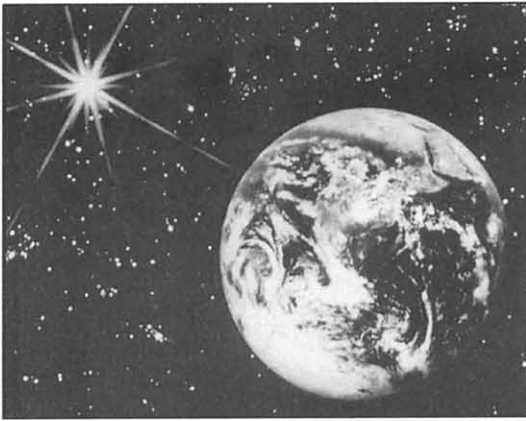
- 1 ホームカミングデーの実施 卒業後45周年をへた同期生一同が母校に集まり、旧交を温めるとともに、母校・学生との交流を図るもので平成13年の1期生から逐次実施されます。
- 2 現職・OB会員交流 各地域支部毎に、現職会員とOB会員等との親睦及び勉強会等を推進し、交流を深める。
- 3 親睦交流会の開催 期別對抗親善ゴルフ・テニス・囲碁等により親睦を深める。9年度試行的にゴルフコンペを実施しましたが、10年度はゴルフ及びテニスを実施する予定です。奮ってご参加下さい。
- 4 相談窓口の設置 学生、指導官、会員及び子弟に対して進路・結婚・教育・再就職等についての相談を受け入れる窓口を設置する。
- 5 講演会の実施 時局に応じた防衛・安全保障等に関する講演会を実施し、防衛意識の向上、普及を図る。
- 6 会員の出版への支援 会員の出版に対し、支援、協力する。
- 7 各種団体との交友活動 有力な各種団体との交流に努め、間接的に防衛意識の向上普及を図るとともに、同窓会活動の活性化に資する。
- 8 外国留学生OBとの連携の強化 留学生OBの現状を把握し、会員として登録し交流を深める。
- 9 全国的な情報網の整備 地域支部等を含めたインターネット、電子メール等による全国的な情報網を整備するためのシステムスタディーを行う。

それぞれの実施線表を表1に示しますが、平成10年度からこれらの事業計画が具体的にスタートしますので、会員各位におかれましては積極的な御協力、御参加をお願いするとともに、事業実施上の御意見、御要望等を本部までお寄せくださるようお願いいたします。

中期事業計画

表 1

事業		年度	平成9年 (1997)	平成10年 (1998)	平成11年 (1999)	平成12年 (2000)	平成13年 (2001)	平成14年 (2002)	
全般			▼ 創立45周年				▼ 1期卒業45周年 創立50周年		
1	ホームカミングデーの実施		P	R	準備 P	実行委員会 R	1期 準備 P	実行委員会 R	
2	現職・OB会員交流		地域支部の設置 交流の促進						
3	親睦交流会の開催	ゴルフ テニス 囲碁 他		▼	▼	▼	▼	▼	
4	相談窓口の設置		P	R	準備 (カウンセラーの養成・相談室の整備等)	▼ 窓口の設置	▼ 実	▼ 施	
5	講演会の実施			▼ 第1回	▼ 第2回	▼ 第3回	▼ 第4回	▼ 第5回 (50周年記念講演)	
6	会員の出版への支援		P	R	準備 (出版委員会の設置・基準の設定)		支 援		
7	各種団体との交友活動		P	R	準備	交 友 活 動 交友委員会の設置等			
8	外国留学生OBとの連携強化		現 状 把 握			▼ 名簿等整備	同 窓 会 員 と し て 把 握 連 携 の 強 化		
9	全国的な情報網の整備		準 備		▼ 名簿等整備	▼ システムの整備	運 用		



コマツは、長年にわたって培った豊富なノウハウと、最先端のトータルテクノロジーで、防衛システムをサポートしています。

【営業品目】

- 戦闘車両 ●施設車両 ●弾薬 ●エンジン
- ロボット ●プレス ●レーザー機器 ●電子機器
- 地下掘削機械 ●海洋開発機器 ●建設機械

KOMATSU コマツ 特機事業本部
〒107 東京都港区赤坂2-3-6 TEL. 03-5561-2740



US-1A 救護飛行艇

ShinMaywa

新明和工業株式会社

航空機事業部 〒658 神戸市東灘区青木1-1-1
甲南工場 TEL 078-412-9151
営業部 〒100 東京都千代田区大手町2-6-2 日本ビル
TEL 03-3245-6611

Hypermini



第32回東京モーターショーコンセプトカー



日産自動車株式会社 宇宙航空事業部

東京都杉並区桃井3-5-1 〒167
電話 03-3301-6720 (ダイヤルイン)
FAX 03-3301-6717

C&C for Human Potential



NEC

じぶん、新しくしたい。

頭のなか、心のなかで生まれたことを、自由に思い通り表現できる。時間や空間の制約を気にせず、世界中の人々と対話ができる。好奇心を刺激する情報がどんどん飛び込んでくる…。デジタルのチカラは、あなたのなかの新しいじぶんが目を覚ますのを応援します。さあ、一歩前に踏み出して、真新しいじぶんへ。

ちょっとの勇気とデジタルと。

既存の組織やネットワークの枠をこえて異業種間交流を行う

新世紀研究会

【会員構成】 経営者、管理職、ジャーナリスト、弁護士、公認会計士、医師
【例会会場】 東京都千代田区丸の内1丁目4番6号 日本工業倶楽部
【事務局】 東京都港区赤坂1-1-18 井波・太田法律事務所 弁護士 太田秀哉
TEL .03-3586-3641 FAX .03-3584-1595

期別対抗ゴルフ大会



炎天下、盛り上がる開会式

大会概要

- 主催者/防衛大学校同窓会会長 小西学生 担当理事/石津 節正
- 日時 /1997年8月4日
- 場所 /霞ヶ浦カントリー倶楽部
- 参加者/1期生より7期生までの各期より10名ずつ選出された70名の選手
- 優勝杯
 - 防衛大学校校長杯
グロス優勝チームに対して授与
 - 同窓会会長杯
ネット優勝チームに対して授与
- 各期世話人

1期	堀田恵彦 (競技委員長)
2期	佐藤十郎 (競技委員)
3期	茂手木久卓 (競技委員) 北島壽一
4期	内田耕太郎
5期	根岸勝利
6期	西村表明
7期	白井小五郎



(左) 会長杯 (右) 校長杯

当 大会は、同窓会活動活性化の為のひとつの試みとして、同窓会本部において企画された。まず選手の選出等について、取り纏めを、各期の世話人をお願いしたが、同窓会の予算が無いことから、非常に心苦しい思いをした。大会冒頭の挨拶で会長が申し述べられたが、会が開催できたことについて厚く御礼申し上げたい。

当日は快晴、と言えは清々しい良い天気と思われようが、時は8月4日、カンカン照りで湿度が高いという厳しい状況の中、09:40全選手70名が集めた。会長挨拶、競技委員長の競技要領説明、各チームの記念撮影と開会式が進むうちにも、選手のファイトが盛り上がってくるのが感じられ、優勝の挨拶のため、各チームのキャプテンを決めておくように言われるや、それは頂点に達した。

競技要領とルール

一. 競技要領

- 18ホールストロークプレー。ノータッチ。ホールアウトとする。
- スコアカードは対抗チームの選手よりアサインして貰い、各人サインの上所定の提出箱に投ずる。間違いないように同期パートナーと確認し合うことは許される。
- グロス優勝は各期チームのグロス1位より7位までの合計により決定する。ネット優勝は各期チームのネット1位より7位までの合計により決定する。同点の場合はシニア期の勝ちとする。
- ハンディキャップは新ベリア (トリプルボギー切り) 方式とする。

二. ルール

- 1 ルールの適用はJGA、ローカルルールに基づくが、競技委員が裁定に立ち会えないので各組のキャディの裁定に従うものとする。それが間違っていた場合は最終ホール終了後競技委員に提訴出来る。最終的な裁定は競技委員長によるものとし、会の運営、ルール適用等は親睦会にふさわしい厳格かつ弾力的に適用する。また、団体戦なので同組の同期生とは互いに教え合いながら戦うことが許される。ただし、バットの順番を変更したり身を支える、スイングの便宜を与える等の援助は許されない。
- 2 特別ルール
 - (その1) OBもしくは池に入ったと思われるボールの処理OBライン近く又はウォーターハザード近くで落下して見つからないボールは、それぞれ、OB、ウォーターハザードとして処理する。OBの虞れがある場合は、必ず暫定球を打っておく。
 - (その2) ロストボールの処理
ロストボールを処理する時間は5分以内とし、見つからない場合はボールが落下したと思われる場所に最も近いフェアウエーで、なおかつ、ホールに近づかない点にドロップして打つこととする。スコアはそのホールに要したストローク数に2打プラスして記入する。
 - (その3) アドレス及びアドレス後に動いたと思われるボールの処理アドレスしたかどうか、またボールが動いたかどうかは、全て競技者の自己申告によるものとする。

(付記) 空振りについても適用する。

10:00. Na 1, Na 3, Na 10, Na 12のティーより一斉スタート、白球を追って緑の戦場へと進軍した。期別対抗戦なので、同じ組の2名ずつが、同期生同志で協力しながらプレーをする。チームによっては、その日調子の良かった同期生のために、専らアシスタント役に徹したと言う話も聞いた。頭上には百里より飛来するF15イーグルの爆音が鳴なり響き、今は、OBとなった選手たちの血を沸かたてる。午前中元気にスタートした今だに血気にはやる老武者も、午後になると滝のような汗を流しては水を飲み、それを又流し出すという繰り返しの中、とぼとぼと最終ホールに辿り着くという有様になった。

キャディさんも、選手の顔色を見て相当心配したらしく、冷たいおしぼりを、まめに配るやら、冷水を怠りなく準備する等随分と気を使っていたようだ。とにかく、全選手70名と役員1名が無事にパーティに出席したことを報告する。

競 技終了後メインダイニングで表彰パーティを行った。結果は後記の通りだが、各チーム7名のベストグロスの合計が1位と2位で1ストローク差、4位までに数ストロークでひしめくという僅差になった。

競技委員立ち会いのもと6期生世話人、西村選手が厳しくチェックしたが、万止むを得ず、7期の勝ちを認め無念の涙を飲んだ。

—誰かが呟く。『たかがゴルフ、されどゴルフ』。—





諸先輩を押さえ、グロス優勝した7期生チーム



話題の尽きない表彰パーティー

会 長の閉会の辞にもあったが、全員が無事に大いに楽しめたことは、誠に素晴らしい事と思う。70名×25,000円=175万円という、選手皆様の多大な浄費によって行われた、同窓会活性化のための試みを、有意義なものにしたい。選手達は、今日一日の楽しい思い出に、感謝を込めた握手を交わしながら散会した。

記 根岸

グロス (ストローク) ネット (ストローク)

順位	学年	スコア	順位	学年	スコア
1位	7期生	592	1位	3期生	510.6
2位	6期生	593	2位	7期生	512.8
3位	2期生	596	3位	2期生	513.4
4位	3期生	597	4位	5期生	514.8
5位	5期生	606	5位	6期生	515.0
6位	1期生	628	6位	1期生	521.6
7位	4期生	648	7位	4期生	528.4

個 人のベストグロスは、6期の森本直孝選手で1ラウンド75ストロークの立派な成績であった。ネット優勝は、要領の良い3期生チームで、まあ揚言すれば戦略性に富んでいた(本人達が言っていただけだが)と言えるのだろうか。ひとつ付け加えれば、3期生チームキャプテンは、司会者の指名を待たず、勝手に勝利の挨拶を行ったことを報告しておく。(思いもかけないことで、途轍もなく嬉しかったのだと思う)

2期生はグロス、ネット共3位であったが、2期生チームの席から「我々は良くやったと思うよ」という声が聞こえたように善戦健闘を讃えたい。

1期生の席からは「若い期の連中が、我々を中心に集まって来て、一緒にプレーできるだけで嬉しいよ」という遠慮した声が聞こえた。4期生、5期生については、「負けるチームがあるから勝つチームがあるのだ」と言う慰めにもならない言葉を、述べておこう。

担当理事より来年からの大会のあり方につき意見を徴したところ、4期林崎選手他多数の発言を頂いたが、次回からも連続して大会を行うことについては、全員一致で賛意がよせられた。

選手

	1期生チーム	2期生チーム	3期生チーム	4期生チーム	5期生チーム	6期生チーム	7期生チーム
1	志摩 篤 (G)	岡部 文雄(N)	手塚 正水(N)	庄野 凱夫(N)	根岸 勝利(N)	上野 憲一(G)	石田 潔 (G)
2	向吉 長門(G)	吉崎 格 (G)	君嶋 信 (G)	水野 勝利(A)	千葉 瑞樹(G)	長谷川重孝(G)	吉岡 誠 (G)
3	小西 岑生(N)	佐藤 十郎(G)	朝倉 謙 (A)	宇野 章二(G)	福地 建夫(N)	森本 直孝(G)	白井小五郎(G)
4	山下 昌宏(N)	伊東 一光(N)	茂手木久偉(G)	植草 博明(G)	杉浦 功一(A)	吉田 耕平(G)	杉田 明傑(G)
5	勝山 満 (A)	三石 勉 (G)	中川 久雄(N)	猪狩 真 (N)	桐生 光憲(N)	杉本 光 (N)	土井 義彦(N)
6	堀田 恵彦(A)	白鳥 昭夫(A)	宮本 双葉(N)	林崎 千明(N)	青山 利雄(G)	中原 猛敏(N)	大田黒幸雄(N)
7	岡田 毅 (N)	岡 文夫(G)	渡邊 和彦(A)	青野 繁 (G)	村山 善康(A)	西村 義明(N)	玉井 秀幸(N)
8	城尾 百男(N)	石原 公夫(N)	松尾 照昌(A)	植村 明矩(G)	松本 哲雄(N)	葦津 和親(A)	平賀源太郎(N)
9	石原 隆 (A)	郷原 一保(G)	中嶋 平満(G)	加藤 公明(A)	江添 正倫(A)	入谷 正伸(A)	大杉 祐司(A)
10	遠茂谷博之(G)	大中 康生(A)	松永 保孝(G)	平松 雅史(A)	多田 力 (G)	富田 武征(A)	鈴木 俊道(A)

人は空に夢を見る。


三菱重工業株式会社

航空機・特車事業本部

東京都千代田区丸の内2-5-1 〒100 ☎ 東京(03)-3212-3111

私は碁が好きである。官舎の近くに篤志家
がいて自分の家の二部屋を自由に使つて良
いと解放してくれている。その部屋に碁好き
が集まって自由に囲碁を楽しんでいる。月に
一回大会を開いて自分の実力を思い知らされ
ている。近くに陸上自衛隊の駐屯地が多くあり
OBや現役の自衛官が、そして近くの民間の
親父さんもある。子供も数名集まってくるの
で教えている。総勢60名ぐらいで土・日には
その半数ぐらいが入れ替わり集ってくる。和
やかな交流である。いつのまにか趣味のクラ
ブになった。

話は変わるが私は陸上自衛隊の機関誌「修
身」が好きである。趣味に関する記事が多く
掲載されていること、思わぬ知人の近況を
知ることができるからである。趣味の写真や
絵画、短歌、川柳、囲碁・将棋、お茶に生け
花、ゴルフ等等。懐かしい名前の人の投稿
を見ると「ああ元気で人生しているのだな」
と思う。そして葉書の一枚「元氣してますね
今月掲載の風景の写真素晴らしいね。」と
便りする。そうすると彼の近況が返信され
て来る。

また話は変わるが世の中やコンピュータ
ーの時代である。若者の多くが仕事に、趣味
にそして実用のため手軽にコンピュータを
駆使している。これによって時間と距離が革
命的に短縮された。団塊世代以前の年配者
でもコンピュータを習い始める人
が多くなったと聞く。インターネット
トやホームページに関心を持ちそれ
も趣味の世界をより深く充実
するためとか。



私はこれら趣味の
クラブと雑誌やコンピュ
ーター等の発表媒体(ステー
ジ)として同窓会等直接出会う
会同を組み合わせて同窓生
の肩の凝らないふれあ
いを活発にできたらいいな

と考えている。同窓会活動の方向性は同窓生
とその家族の幸せへの貢献と同窓生を通じて
の社会への貢献があると考えています。その
根源は同窓生の一体感、そうすふれあいの
深さにあると思います。

現役の時代は人のご縁で仕事をしたいよう
なものです。まさに同じ釜の飯を食った仲で
おつきあいでした。OBになった途端にその
縁が稀薄になってしまふのは淋しい。終生に
わたり同窓生のふれあいを保つ事は幸せなこ
とである。気のおけない仲間と旧交を暖める
事に優る楽しさや寛ぎはない。年一回の同窓
会では不十分。趣味のク
ラブがあつてそれを発表
するステージと趣味人を
結び付けるネットワーク
があれば全国ネットの交
流の場を造る事が容易に
できる。常時、時と場所
を選ばず人のふれあいを
保つ事にことかかない。

趣味「囲碁」で考え
て見よう。防衛
大学のあ
る横須賀
としよう。30坪程の部屋があり
そこに20席ほどの碁盤を用意する。
周りに少しの休憩や懇談のためのスペース
があれば良い。少しのPRと口コミの後、横
須賀近辺のOBがたまに碁を打ちに来る。現
役の自衛官が「今日わ」。防大生が「先輩荷物
置かせて下さい」。こんな調子で次第に人が集
まりパチリパチリと手談がたのしい。コーヒ
ーでもあればなお楽しい。そのうち誰かが言
う。「防大の囲碁部は今どうなっているの? 顧
問にでもなれないかな?」「自衛官の子供に碁
を教えようよ。いい情操教育になるよ。」そん
な事で子供も集まる。「たまにはポラントイ
アで「地域の囲碁大会」を計画しようよ。」さ
っそく役場にいつて交渉する。大会場所の公民

ふれあい



富士学校総合研究開発部
8期(陸) 藤野 憲

館も碁器も賞品も市・町・村が準備してくれ
る。要は大会を運営するのである。こうして
地域の人々との交流が始まるかもしれない。
一つの社会貢献でもある。

ときには趣味を離れて、先輩・後輩の人生
相談もいし、諸々の情報交換も良いだろう。
これらクラブの大義名分は「交流」「子弟教育」
「地域等貢献」等そのクラブの特色に応じいろ
いろ考えれば良い。運営の細部は趣味の特性
に応じ色々アイデアを出して活動するこ
とになろう。色々な趣味を媒体としてこん
な集りが駐屯地の周辺等各支
部に沢山で

ければ楽し
い。特に単身赴任者
にとっては福音で有ろう。自
衛隊の事だから教える人、や世話を
焼く人等の人材には事欠かないだ
ろう。しかしクラブ運営のためには、
場所の確保を始め碁器の準備など少
しの運営資金はいるが知恵とアイデア
を働かせれば若干の収入を得ることは
なんとかなる。同窓会で応援してくれ
ればなおさら良い。

こうして小さなステージができる
これをさらに大なるステージとするためには、
コンピュータの出番である。個人やクラブ
等小さなステージをコンピュータネットワ
ークで結ぶのである。生活リズムも趣味のレ
ベルも千差万別の趣味人をその人のニーズに
応じてマッチングさせることはコンピュータ
ーの最も得意とするところである。何時、い
かなる場所にしようともコンピュータ囲碁
対局が簡単にできるのです。もちろんスピー
ドの遅い郵便対局というのもあります。こ
うして趣味インフラの出来上がり。秋の夜
長に北の友と南の友が画面を通じてしみじみ
手談。ああ至福なり! 近くにあっては一緒に
楽しみ遠くにあっては既知の友とも未知の新
しい友とも新鮮なふれあいができる。

そのうちクラブだけ
なく、たまには遠方の
友とも会って見たくな
り、どこかに会合して
地区大会や全国大会を、
はたまちよつと場所を
変えてと小さな旅行や外国
旅行と合わせた囲碁旅行の企
画など、ふれあい

の場は拡大をする。さて
今日は日曜日! クラブで仲間と会
うか。仲の良い北のあいつと一局コンピ
ューター対局といくか。来週は大会だ。今度こ
そ優勝だ。このところ仕事が忙しかったがよ
うやく一段落、来月12月は中国旅行、北京
で一局か、早く来い来い12月。来年は地区
大会の幹事だ。忙しくなるな。ところで子供
たちもだいが強くなった。落ち着きも出たし
明かるくなったな。等々。年を取るひまはな
いのである。まして粗大ごみにもならない。
さらに時が経ちサンデー毎日に結構。自
分の好きな、こんなに楽しい趣味を長く楽し
むために健康にも気をつけなくてはと自分に
言聞かせる。楽しきかな人生!

こんな調子で色々な種類の趣味のふれあ
いネットができれば、趣味相互の乗り入れも可
能となり、より大きなふれあいの場が出来る
のである。こうして出来た同窓生の強い絆が
あつてこそより大きな目標の同窓会活動が可
能になる。

さてこのアイデア何時から取り掛かろう
かと思案投げ首。現役終了近し。勤務地の
先々で打った碁がたきがニコニコしながら私
の頭のなかで踊る。とりあえずこんな話を聞
いてくれる友達にホラを吹きつつ各地に賛同
の友を募ることにしよう。それにつけても各
支部等に交流と情報発信拠点としての同窓会
館のようなものがあればこんなふれあい環境
も意外に早期に実現し同窓会も活性化するこ
と請合いなのだが。皆さん如何。



4期生会 ◆会長 — 林崎千明

4期生会友諸兄には恙無くお過ごしのことと存じます。会友の殆どは還暦を過ぎ、あるいは再転職の時期を迎えるなど再度の変化の時となりつつあります。「心地よさ」「心安さ」「懐かしさ」を求め得る期生会として会友の絆を深めてまいりたく思っております。

1 平成9年度版新草は、転職、住所変更等も多いため全面改訂版としました。

2 9年度総会・懇親会を3月1日(日)12時から明治記念館で開催します。御婦人共々での多数の参加を期待しております。

3 杉原剛介君が自身の還暦祝賀会の記念として「菊は咲くか—三島由起夫とそして自衛隊の若き士官たち」と題する本を刊行しますが、福岡市のタグチ工業会長田口一幸氏が増刷頒布しています。

4 同窓会期別対抗ゴルフ大会に4期として時間等に余裕のある10名が参加し断然ラストの成績を収めました。今後この種の大会に参加したい方は手を挙げて下さい。(但し期生会として特別の支援は致しません。)

5期生会 ◆理事長 — 安岡義純

左記により、5期生ゴルフ会を実施しましたので報告致します。

第1回5期生&コレスグリーン会東日本大会

1997年3月14日(晴)

於 越生ゴルフクラブ

第2回5期生ゴルフ東日本大会

1997年11月13日

於 八房カントリークラブ

7期生会 ◆副会長 — 杉田明傑

同期生の皆様、ますますご健勝のことと思います。昨年は同期のほとんどが退官する最後の年になりました。山本安正君(海)が海上幕僚長に昇進され同期の制服はたった一人となりました。山本君のますますのご活躍とご発展を祈りたいと思います。同期の皆様におかれましては全国津々浦々で新しい人生を歩まれご家族共々ご健勝でご活躍されていることと思います。今後なかなか一堂に会して旧交を暖める機会も無いと思いますが、地域ごとに末永く同期の絆を大切にしていってほしいと切に思うものであります。

さて、皆様ご承知のことと思いますがこの度、石田潔君(陸)が今年の参議院選挙に自由民主党比例代表として立候補する事になりました。同期生の皆様には、石田後援会事務所の方からご協力をお願いしていると思いますが、石田後援会事務所は同期の大越君(陸)を本部長に、田村君(陸)、平賀君(海)、伊藤淳君(空)を副部長に、そして吉岡君(陸)が事務局長として関東地区同期の支援を受けて

て昨年の8月事務所開き、10月「励ます会」の実施等頑張っています。

同期生の皆様には地域の支援組織造り等厳しいお願いを致していると思いますが、何卒宜しくお願いいたします。尾辻君(海)が現在、参議院議員として活躍ですが石田君を国会に送り同期二人が国の安全保障や危機管理分野を充実していくのを期待するものであります。

最後に同期生の皆様のご健勝とますますのご活躍をお祈りいたします。

8期生会 ◆会長 — 古澤忠彦

この度、計らずも8期生会の会長に選ばれました。これまでは、先輩役員、会長の計画されるままに懇親会があるといえは指定されたところに行き、総会があるといえは深く考えもせずに挙手をしてきたのが、急に主導的に動かなければならなくなったことに戸惑っています。ともあれ、多くの同期生が第2の人生を歩き始められているときに、未だ第1の人生に残っている者として最後の機会を同期生のために微力を尽くせる事は、或いは幸せなことかと思ひ直し、頑張ることを決意しましたので宜しくお願いします。幸い、頼りない会長を思っただけか、各役員の皆様が積極的にしっかりとされているので安心していただきたいと思います。

昭和35年に小原台に集まって以来、同期生の絆強く、互いに切磋琢磨し励ましあつてきた仲間ですが、これからは、互いに気遣いある年代になったことかと思ひます。人生80年の時代、これから更に30年の充実した人生を、これまで以上に同期生としての関心と気遣いを以て、楽しく過ごしていくためのきつかけを作ればよいと考えています。そのためにもできるだけ接触できる機会を作為し、近況を交換し情報を共有出来るようにしたいと思ひます。それぞれの地域で、小さくても集まる機会等これから増えればよいと考えて

います。

夫拔きの、夫人だけの集いも始まっており、互いに情報を交換し、絆を深めているところもあります。まだまだ我々には天下国家を論じる気概は十分にあるし、家族自慢に花を咲かせる心臓強さもあるはずで。

以上が会長就任の抱負ですが、最後に、先

期生会の状況についてお知らせ致します。

日時 97年8月23日

場所 グランドヒル市ヶ谷

参加者 約100名(夫人約20名)

次第 総会及び懇親会

1 8年度事業及び会計報告

2 新役員選出

3 9年度事業計画

新役員

会長 古沢忠彦(海)

本部長 川島一郎(海)

企画 宮崎健二(海)

会計 正岡敏紀(陸)

陸担当 矢島寛三(海)

海担当 吉岡勝義(空)

空担当 吉岡勝義(空)

なお、平成8年度に逝去された同期生は、次の方々です。

8・5・31 三崎恒義君(海)

8・7・8 沼生淑康君(陸)

謹んでご冥福をお祈り致します。

16期生会 ◆会長 — 江藤文夫

防衛大学第16期生会は、卒業25周年記念同窓会を、防衛大学開校祭に合わせ、平成9年11月8日(土)横須賀セントラルホテルで開催した。当日は陸・海・空自衛隊在職者はもちろんのこと民間で活躍している同期生を含め約120名が参加した。総会においては、今回全国規模で実施したアンケートの結果として今後ともこの会が存続



8期生懇親会

することについて370名(約90%)の賛同を得たことを報告すると共に、将来の16期生会の維持運営等について意見を交換した。この結果、引き続き同期としての親睦を深めていくため、定年退職者の出始める5年後に30周年記念同窓会を開くこと、そこで定年後を含めた同期の親睦の維持増進のための同期生会の運営要領を定めること等を決めた。

参加者のなかには、防衛大卒業後初めて参加する者、地方からこの日のために上京する者、奥さん連れの方等参加要領も様々であったが、懇親会においては、卒業当時防衛大の幹事だった曲元陸将をはじめ来賓としてお迎えした兼坂元教官、松本元大隊指導官を囲み思い出話に花を咲かせる者、家族の近況、職場のこと、学生当時の思い出話にふける者等、料理そっこのけでの懇親が進み、次の30周年での再会をそれぞれが誓い盛會裡に会を終了した。



16期生同期会集合写真



21期生同期会集合写真

19期生会

◆会長 — 酒井健

「19期生、これから同期の連携を」

昭和50年3月小原台から東立ち、陸・海・空の幹部候補生学校または民間の道へそれぞれ道を歩み、約23年が過ぎ現在では自衛隊や企業の中で中堅幹部の職に付く世代となりました。防大卒業時全員が凛々しい青年でしたが、私のみならず時々同期生の髪に白いものを見るに、今ではロマンス・グレーの世代になりつつあるとの感がします。

さて、平成10年度には、いよいよ部内の定年退職前の能力開発設計集合教育いわゆる「グリーン・プログラム」に参加する予定となり、特に、陸上自衛隊では19期生全員が同じ短期の講習を受けることとなります。

23年前と同じ顔ぶれが一同に会し、まさに「BACK TO THE SCHOOL」とでも言いましょうか、今から楽しみにしているのは私だけではないと思います。そこで、これから定年後の同期生間の相互の横の連携を図っていくための基盤を整えるため、この機会に同期生会の名簿作成を準備して参りたいと考えますので、ご協力の程宜しくお願い致します。

最後に、防大19期生同期同志の出会いと喜びをいつまでも大切にして参りたいと強く感じています。

21期生会

◆会長 — 河村克則

77年に小原台を巣立った我々21期生は、昨年卒業20周年を迎え、これを記念して、同期生相互の懇親を更に深めるために、平成9年2月8日東京新宿のホテル「センチュリーハイアット」において記念の宴を開催しました。当日は、全国各地から同期生184名と夫人34名と、来賓として小西岑生防衛大校同窓会会長及び後藤藤明敏21期生担当指導官をお迎えし、合計220名が本場に楽しい時間を過ごしました。猪木元校長は、大変残念ではございましたが体調が優れずご欠席され、かわりに暖かいご祝電をいただきました。

懇親会の前に(酔っ払う前に?) 期生会の総会を行い、まず、これまでの同期生物故者12名(●陸—山先、岩野、脇山、吉村、栗原、尊田 ●海—佐々木(義) ●空—浅野、柳園、高柳、新敷)に黙祷を捧げ、卒業以来20年間手をつけなかった会則の改正が議決されました。これは、今後、21期生会を我々の定年後も含めてなるべく無理なく長続きさせたいとの趣旨から成されたものです。また、20年

の長きにわたり会長を勤めた松澤君及び会計藤枝君から卒業以来20年分の会計報告があり、その場で参会者により了承されました。

ここに20年間会長として同期生の発展に尽くされた松澤君及び今回の懇親会の実施、名簿の作成等の20周年記念事業を約3年前前から準備された市田君、藤枝君、鎌田君、河村(修)君、久本君等の準備委員会の同期諸君に心から感謝致します。

なお、ここで平成9年7月16日に陸の野中敏治君が、長期に亘る病氣との戦いの末、惜しまれつつ永眠されたことをお知らせ致します。最後に、今後5年間の21期生会役員を紹介致します。

会長 河村克則(自衛艦隊司令部)
事務局局長 佐々木孝宣(統幕事務局)

副事務局局長

(陸) 平野治征(統幕5室)
(海) 安斎 勉(防研45期研修員)
(空) 秦 啓次郎(空幕防衛課)

総務 (陸) 吉田明生(防研45期研修員)
(海) 河村修二(統幕校学生)
(空) 久本幸男(空幕人計課)
会計 野村 勉(防研所員)
会計監査 飯尾俊政(海幕教育課)

29期生会

◆会長 — 馬場邦夫

全国各地の諸先輩、後輩の皆様には各分野でご活躍の事と存じます。

私も29期生も、卒業して早10年たち、30半ばの働き盛り・中堅どころとして各幕僚監部を始めとする主要機関・部隊において諸先輩方のご指導を頂きながら頑張っております。(廊下トンビ?)

又、海外においても4名が勤務しており、岩村君(陸上)がUNDOFの司令部要員とし

て、澤田君(陸上)が在アラブ首長国連邦(UAE) 日本大使館の警備官として、中筋君(海上)がアナポリスの教官として、秋元君(海上)が米国FMS連絡官としてそれぞれ活躍しております。日本を代表して海外で勤務する彼らの益々の活躍と無事の帰国を祈念している次第です。

最後になりましたが全国各地でご活躍中の諸先輩方、後輩諸君の益々のご活躍・ご健勝をお祈り申し上げますとともに、引き続きのご指導・ご鞭撻のほどを宜しくお願い申し上げます。

31期生会

◆会長 — 藤岡登志樹

防衛大第31期同期生会員の皆様におかれましては、陸海空各自衛隊並びに広く社会の第一線においてご活躍のことと思います。今や第41期の学生が卒業し、十年後輩の卒業生が部隊や社会において活動を始めており、時の流れの早さを改めて感じさせられているところでもあります。

さて、防大第31期生会は、期生会長並びに会計業務を防大の指導官、研究員及び研究科学生等にお願ひし、防大のある小原台を本拠にして活動して参りましたが、この度、事務局を東京地区に移転させることに致しました。当面は、比較的多くの同期生が勤務している目黒の陸海空幹部学校地区に事務局をおいて運営していきたいと考えております。そこで、卒業10周年を一つの節目として、同期生間の旧交を温め親睦を深めるために「卒業10周年記念行事(仮称)」を活動活発化事業の一環として実施する予定であります。細部については、まだ未定ではありますが、概要は次の通りであります。多くの方々への参加と、運営に関するご意見をいただければ幸いです。また、これに関連して同期生名簿も作成中ですので、併せてご協力を賜りますようお願い申し上げます。

防衛大学校第31期卒業10周年記念行事(仮称)

時期 平成10年4月または5月

場所 首都圏(東京周辺地域)

会費 約1万円(期生会からの補助金を一部使用し、もう少し下げる予定です。)

実行委員長 石井一将(陸・幹部学校)
名簿作成 寺西孝之(陸・幹部学校)

38期生会 ◆会長 一石井浩之

3年前の幹部候補生時代以来、今回が2度目の寄稿となります。この様に筆を執る機会を再び頂き、改めてこの数年間を振り返る時間を持つことよってある意味で驚きにも似た感慨が、私の中に湧いております。意識の高ぶりがそのまま私見に現れた際には、お許し願いたいと思います。

さて、防大38期生は今年度7月をもって2等陸、海、空尉にそれぞれ昇任し、小隊長として部下を持ち奮闘する者、新米パイロットとして部隊配置になった者、指導教官や区隊長、教官として後輩の育成にあたる者、あるいは防大研究科や一般大学院で学生として勉学に励む者等、多方面でそれぞれの能力を発揮し、部隊及び学校の核心となるべく東奔西走の毎日を送っています。

また私生活に至っては結婚する者も多く、結婚式では久しぶりに同期が顔を合わせながら同期会のような盛り上がりで新郎新婦を祝福する光景も少なくありません。そして家庭を持った中には2世誕生といった明るい話題も出始め、我々38期生は公私共に充実の真只中にあるといったところであります。

私の勤務する北部防空管制群は、部隊の特質上航空はもとより陸上及び海上との繋がりが非常に深く、また三沢基地は陸、海各部隊と位置的に近傍にあるということから、演習等の各行事で同期と顔を会わせる機会が多く、今年度も他部隊の同期に数人会うことができました。この様に陸、海、空の隔てなく会うチャンスがあるのは非常に恵まれた環境に私

がいるということなのでしょうが、そこでもいっつも強く感じることに紹介したいと思えます。

同期が久しぶりに顔を合わせる時私は努めて一席設けるようにしています。ほとんどの方がそうして機会ある毎に会合を持つのでしようが、その中で必ず話題に上がるのがそれぞれの近況報告と、直面する問題であります。これが部隊の枠を越えて自然発生的に語り合える所に同期が共有する大きな財産のひとつがあるのではないのでしょうか。

幹部に任官し3年弱、右も左も分からぬ3尉時代を経て初級幹部として部隊運営、隊員指揮の中核に位置する自らの責務の重さに気づいたとき、周囲からの期待の大きさや理想と現実のギャップが我々に大きな壁として立ちほだかります。この様なときに、同じ釜の飯を食い、苦楽を共にした同期が互いに現実の問題を提起し、議論しあえる時間がどれほど有益なものであり大切であるかを私は実感します。いかなる時でも立場や環境を越え、腹を割って話し合える同期の絆こそ、小原台での4年間が与えてくれた何ものにも換え難い宝物であると考えます。

もうひとつの宝物は、互いに理想や夢について語り合い同期として大きな方向性を見いだせることです。各方面、各部隊での勤務に没頭するあまり、ふと周囲の状況が見えなくなったり視野が狭くなったような不安に襲われることが度々あります。幹部として重要な要素であるところの理想を現実のものとする実行力や、現状をより良くしようとする革新性が、同期と語り合うことでほんやりとでもそれぞれの立場での、ベクトルとなり、ひいては組織の活性化に繋がると信じています。

防大時代には安易に得られる物として深く考えていかなかった事が、じつは人生に於いて最も大切なもののひとつになっている事実、今また筆を置くにあたって再認識する所でありました。

これからも38期生に対し変わらぬ御指導御鞭撻宜しくお願ひします。

39期生会 ◆会長 湯下兼太郎

秋冷の候、第39期生各位におかれましては益々御健勝のこととお慶び申し上げます。平成7年3月に防大を卒業して以来すでに2年以上経過いたしました。この間に陸・海・空各幹部候補生学校、また各職種や特技の教育等を経て皆様それぞれの職場で御活躍の事と思ひます。

さて、卒業の直前に、第39期生の名簿の作成を決めたことは皆様記憶しておられる事と思いますが、私の怠慢により作成はおろか、基礎資料の収集もままならない状態でありました。これからの同窓会として第39期生会としての活動の基礎とも言える同期生名簿の作成はいわば当面の必成目標であるといえましよう。

つきましては、陸・海・空の各職種・職域等の同期生(防大39期生が含まれているもの)等の資料をお持ちでいらっしゃる方がおられましたら、是非とも御提供頂きたくお願いいたします。また、名簿作成につきまして何かご意見等お持ちの方がおられましたら、私の方までご連絡頂きたく存じます。

最後になりましたが、会員各位の今後の御健勝御発展をお祈り申し上げます。

TEL 860・0864

熊本市八景水谷2-17-1

陸自42普連3中

TEL 8963・705

*10・3・6迄は左記

TEL 187・0044

小平市喜平町2-13-13

陸自調査学校

TEL 813621418・419

第77期幹部普通英語課程

TEL 030132144092

(学校直直) (携帯電話)

2005年の鳥。

次世代SST(超音速旅客機)



ボーイング777:世界最大の双発新鋭機の中核胴体等は川崎重工が製作しています。



フレイグ/ブルス:数々の編隊飛行を行うことのできる優れた運動性と操縦性を持つ中等練習機T-4が選ばれました。



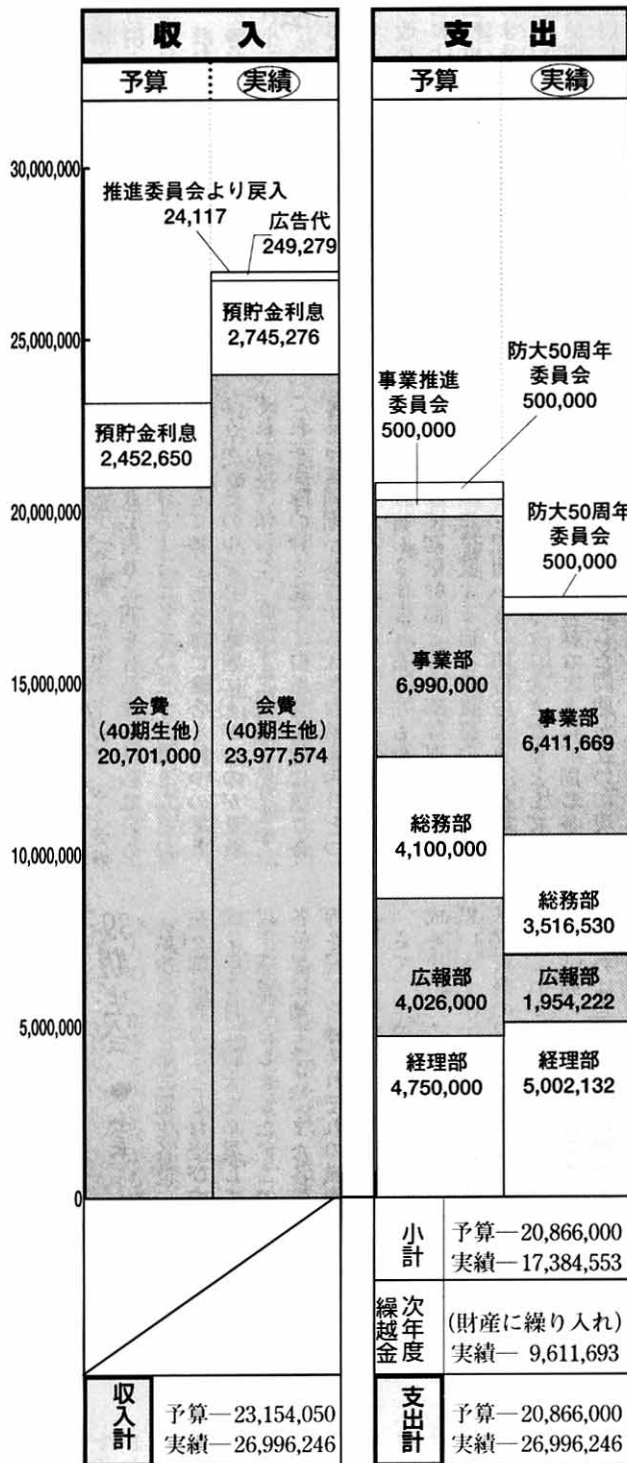
BK117:ユーロコプター・ドイツランド社と共同開発した双発多用途ヘリコプターは阪神大震災の災害救援活動を行いました。



H-IIロケット:その大切な衛星を打ち上げる前線な環境から守るフェアリンクは川崎重工が製造しています。

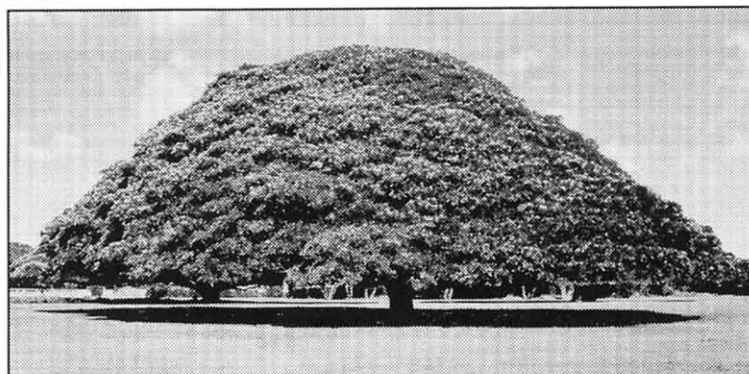
（陸と海と空の次世代は、ことし創立100周年を）
迎えた川崎重工の中で、もう始まっています。

世界と夢の先端に。
川崎重工
航空宇宙営業本部
〒105 東京都港区浜松町2-4-1 世界貿易センタービル
TEL 10313435・2111



平成8年度予算使用実績(細部)

	項目	予算	実績
委員会	事業推進委員会活動費	500,000	0
	防大50周年委員会	500,000	500,000
	小計	1,000,000	500,000
事業部	総会費(会場設営費)	1,800,000	1,891,248
	(通信費)	1,560,000	1,303,000
	(印刷費)	130,000	92,700
	期生会支援費(44期生会助成)	100,000	100,000
	(41期生会助成)	100,000	100,000
	(各期生会助成)	500,000	483,419
総務部	校友会対外活動助成費	800,000	522,000
	開校記念祭助成費	2,000,000	1,919,302
	小計	6,990,000	6,411,669
	顕彰碑献花式費	600,000	321,876
広報部	慶弔費(弔慰金・供花等)	1,050,000	688,391
	職員定年退職者記念品費	100,000	123,620
	事務通信費	20,000	41,440
	複写機賃貸料	120,000	118,656
	電話・FAX維持費	150,000	120,657
	東京事務所運営費(室賃貸料)	1,200,000	1,200,000
	(維持費)	180,000	180,000
	(事務通信費)	180,000	180,000
	評議委員会運営費	500,000	541,890
	小計	4,100,000	3,516,530
経理部	機関紙発行費(作成・発送)	3,976,000	1,899,727
	事務通信費	50,000	54,495
	小計	4,026,000	1,954,222
経理部	会長運営費	500,000	360,515
	事務員雇用費	2,000,000	2,000,000
	事務費	200,000	162,349
	通信費	200,000	163,618
	交通費	100,000	22,900
	会議費	250,000	604,192
経理部	予備費(本部移転に伴う諸費用・防衛公開講座等)	1,500,000	1,688,558
	小計	4,750,000	5,002,132
合計		20,866,000	17,384,553



HITACHI

きっと、もっと、
すてきな夢を咲かせます。

人間らしさをキーワードに、いま私たちの生活や社会には、
本当の豊かさやゆとりが求められています。
日立は、どこまでも人にやさしい先端技術を通じて、
そんな暮らしの夢をひとつひとつ花開かせ、豊かな実りをお届けします。

	項 目	10年度予算	9年度予算	9年度比
収 入	会費(42期生) ※	21,063,000	22,485,000	-1,422,000
	預貯金利息	1,377,000	1,416,000	-39,000
	広告代	未定		
	同窓会名簿売上金	6,000,000	0	+6,000,000
	積立金からの繰入	4,940,000	0	+4,940,000
	収入計	33,380,000	23,901,000	+9,479,000
支 出	事業計画の推進(現職・OB会員交流)	500,000	0	+500,000
	(同窓会主催親睦交流会開催)	300,000	0	+300,000
	(相談窓口の設置)	200,000	0	+200,000
	(講演会の実施)	500,000	0	+500,000
	(会員の出版支援)	200,000	0	+200,000
	(外国留学生OBとの連携)	100,000	0	+100,000
	(全国的な情報網の整備)	200,000	0	+200,000
	総会費(会場設営費)	1,800,000	1,800,000	
	(通信費)	1,400,000	1,600,000	-200,000
	(印刷費)	100,000	100,000	
	期生会支援費(46期生会助成)	100,000	100,000	
	(42期生会助成)	100,000	100,000	
	(各期生会助成)	0	500,000	-500,000
	校友会対外活動助成費	1,000,000	1,000,000	
	開校記念祭助成費	2,000,000	2,000,000	
	顕彰碑献花費	600,000	600,000	
	慶弔費(供花、弔電)	350,000	1,050,000	-700,000
	職員定年退職者記念品費	100,000	100,000	
	複写機賃貸料	120,000	120,000	
	電話・FAX維持費	720,000	360,000	+360,000
	小原台事務室運営費	300,000	300,000	
	代議員会運営費	700,000	500,000	+200,000
	各期成会連絡調整費	500,000	0	+500,000
機関紙発行費(作成)	800,000	800,000		
(発送)	3,000,000	3,000,000		
同窓会名簿発行費(作成)	6,000,000	0	+6,000,000	
(発送)	1,350,000	0	+1,350,000	
(郵便番号変更)	50,000	0	+50,000	
(発行案内広告)	240,000	0	+240,000	
会長運営費	500,000	500,000		
事務員雇用費	2,000,000	2,000,000		
本部事務局室賃貸料	2,750,000	1,200,000	+1,550,000	
事務費	250,000	240,000	+10,000	
通信費	250,000	240,000	+10,000	
交通費	300,000	100,000	+200,000	
会議費	500,000	500,000		
予備費	2,000,000	2,000,000		
委員会活動費(50周年記念事業委員会)	1,500,000	1,500,000		
支出計	33,380,000	22,310,000	+11,070,000	

※59000円×357名=21,063,000円(総員411名の87%)



TOSHIBA

人と地球の明日のために。

東芝グループ

E&Eの東芝

株式会社 東芝 〒105-01 東京都港区芝浦1-1-1(東芝ビルディング)

会費徴収基準について 同窓会 会費未納者をお願い



同窓会「会費規定」が本年4月1日から施行され、最高2万5千円の差が生じます。

同窓会会費徴収基準については、平成2年5月1日発行の防衛大学校同窓会機関紙「ゆうかり」(VOL.6,90)でお知らせしたとおり、「同窓会会費規定」が改定され、下記の「H10年3月31日以前に納入の場合」の額に修正されました。

今回、「防衛大学校同窓会会則」等の改定に伴い「会費規定」も改定され、本科卒業生及び研究科卒業生が納入する普通会費については「卒業時における3尉俸給月額(1号俸)の1/4(千円未満切捨)とされ、会費の納入を遅延した会員は、次により納入することとされました。

普通会費額 | 既納入額 + 遅延金
 但し、遅延金 1千円 × (完納年度 - 納入すべき年度)

「納入すべき年度」とは、本科卒業生については、防衛大学校卒業時から3尉任官相当時までの間(入会年度)に納入、研究科卒業生(本科で納入者を除く)については、研究科卒業時(入会時)に納入するとされています。

下記「会費徴収基準」は、既納入額がない場合を表示してあります。例えば、全く未納入の5期生が平成10年3月31日までに納入する場合は、26200円。平成10年4月1日以降に納入する場合は、47200円。平成11年4月1日以降については、更に1年を越える毎に千円ずつ加算されることとなります。

防大同窓会總會及び懇親会のご案内

平成9年度防大同窓会總會及び懇親会が下記により東京に於いて開催されます。

是非ご出席賜わりたくご案内申し上げます。

記

1日時 平成10年3月11日(水) 17:00~20:15

(1)總會 (2階・白樺の間) 17:00~18:00

(2)懇親会 (3階・瑠璃の間) 18:15~20:15

2場所 グランドヒル市ヶ谷 TEL:03-3268-0111

東京都新宿区市ヶ谷本町4-1

3懇親会会費 3,000円

4連絡先 防大同窓会本部事務局事業部

(局線: FAX 兼用 03-3351-8910 / 専用線: FAX 兼用 8-6-28895)

なお、参加される方は同封の返信葉書にて平成10年2月16日(月)必着でご返送をお願い致します。(欠席の方は返送不要です。)

地域支部等の設立状況について

(平成9年末現在)

北海道地域支部 支部長: 塙山 貢 (3・陸) 場所: 札幌市内

西部地域支部 支部長: 織田 豊夫 (1・陸) 場所: 福岡市内

沖縄地域支部 支部長: 小西 忠 (1・海) 場所: 那覇市内

広島地区支部 支部長: 松浦 育郎 (1・陸) 場所: 広島市内

熊本地区支部 支部長: 園川 清 (1・陸) 場所: 熊本市内

本部直轄支部

小原台クラブ 支部長: 菅沼 祐亭 (1・陸) 場所: 市ヶ谷

蓄積された技術で信頼にお応えします

ダイキン工業株式会社

本社/大阪市北区中崎西2丁目4番12号 梅田センタービル
 TEL 06-373-4312
 東京/東京都新宿区西新宿2丁目6番1号 新宿住友ビル
 TEL 03-3344-8058

■特機事業部営業品目

各種弾薬・信管 誘導弾用弾頭・信管 航空機部品

■その他営業品目

ルームエアコン 業務用エアコン 各種冷凍・冷蔵機器
 各種フッ素 化学製品 各種油圧機器装置 各種メカトロニクス
 製品 アーク溶接ロボット等

会費徴収基準

H10年3月31日以前に納入の場合		H10年4月1日以降に納入の場合				
本科	研究科	会費	延滞金	合計	延滞金	合計
1		10,200		26,200	41,000	51,200
2		10,200		26,200	40,000	50,200
3		10,200		26,200	39,000	49,200
4		10,200		26,200	38,000	48,200
5		10,200		26,200	37,000	47,200
6		10,200		26,200	36,000	46,200
7		10,200		26,200	35,000	45,200
8	1	10,200		26,200	34,000	44,200
9	2	10,200		26,200	33,000	43,200
10	3	10,200		26,200	32,000	42,200
11	4	10,200		26,200	31,000	41,200
12	5	10,200		26,200	30,000	40,200
13	6	10,200		26,200	29,000	39,200
14	7	12,200		28,200	28,000	40,200
15	8	14,200		30,200	27,000	41,200
16	9	15,200		31,200	26,000	41,200
17	10	16,200		32,200	25,000	41,200
18	11	19,200	15,000	34,200	24,000	43,200
19	12	25,600	14,000	39,200	23,000	48,600
20	13	28,200	13,000	41,200	22,000	50,200
21	14	30,200	12,000	42,200	21,000	51,200
22	15	32,500	11,000	43,500	20,000	52,500
23	16	33,700	10,000	43,700	19,000	52,700
24	17	34,900	9,000	43,900	18,000	52,900
25	18	36,400	8,000	44,400	17,000	53,400
26	19	38,400	7,000	45,400	16,000	54,400
27	20	38,400	6,000	44,400	15,000	53,400
28	21	39,200	5,000	44,200	14,000	53,200
29	22	40,600	4,000	44,600	13,000	53,600
30	23	42,900	3,000	45,900	12,000	52,900
31	24	44,200	2,000	46,200	11,000	55,200
32	25	44,200	1,000	45,200	10,000	54,200
33	26	46,200	0	46,200	9,000	55,200
34	27	47,500	0	47,500	8,000	55,500
35	28	50,900	0	50,900	7,000	57,900
36	29	54,300	0	54,300	6,000	60,300
37	30	56,400	0	56,400	5,000	61,400
38	31	57,700	0	57,700	4,000	61,700
39	32	58,300	0	58,300	3,000	61,300
40	33	58,900	0	58,900	2,000	60,900
41	34	59,000	0	59,000	1,000	60,000
42	35	60,000	0	60,000	0	60,000



▲ 選手訓練

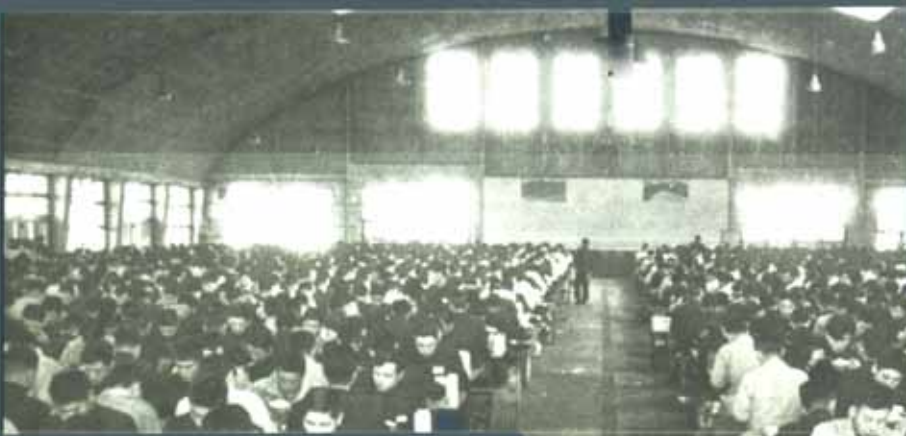


今昔物語

小原台



▲ 学生生活風景



▲ 横濱館中央駅前



▲ 学生食堂



防衛大学校同窓会機関誌

小原台だより



Vol. 6

平成11年1月1日
発行 防衛大学校同窓会

編集 熊倉惟晴 矢野幸治 川嶋隆志
印刷 (株)エイコープリント



ご挨拶



防衛大学校同窓会会長
小西 岑生

同窓生の皆さん、新年おめでとうございます。今年も平和の内に新しい年を迎えることができましたことを、皆さんとともに慶びたいと思います。

同窓会会員の大部分が現職の自衛官ですので、正月を勤務に就いたまま緊張の内に過ごされた方も大勢おられると思います。また、遠く日本を離れた土地で元旦を迎えられた方も多いことでしょう。昨年新たに会員となった防大第42期の同窓生は、幹部任官を目前に希望に胸を膨らませつつも、若干の不安を感じながら平成11年のスタートをきられたのではないのでしょうか。今年の世界情勢がどのように推移し、その中で日本が如何なる役割を果たすことが出来るのか予測することは困難ですが、それぞれに全力を尽くして、1900年代最後の年をやり多き一年としたいものです。

さて、昨年1年間の同窓会の活動を振り返って見ますと、本部を中心とする会の運営については、遅々とした歩みながらも少しずつ前進を続けてきたように思います。本部事務局が市ヶ谷に移転してから1年半が経過しましたが、準備した会議スペースも同窓生によって少しずつ活用が図られるようになり、本部を訪れる会員も増えてきました。また、名簿の発行に伴う会員データの充実も進みました。経費の増大と金利の低下による予算不足の

懸念も、9年度の決算(別掲)は一応黒字を計上することができました。樂觀は禁物ながら、余り悲觀的にならなくても済みそうです。これ等のことは、会員の皆様のご理解を支えに、各理事や事務局の人達が創意工夫を重ねつつ献身的にご尽力頂いた賜であり、深く感謝しております。支部組織の充実と活動の活性化は、なお今後の課題として残っており、先にご承認を得て改正された会則及び細則の再度の手直しも必要になると考えております。

防衛大学校創立50周年記念事業については、引き続き委員会において精力的に取り組んで戴いており、別掲の委員長報告の通り具体的な姿が見えてきました。この事業は、少なくとも2002年までは継続するものであり、従って、本事業を支える同窓生の範囲は、同年卒業予定の第46期生までと考えております。その後の期は21世紀半ばの創立100周年を担当してもらうことになりましょう。また、事業の推進においては、必要の都度代議員会の承認を得て進めて参りますので、会員各位も関心を持ってご意見等をお寄せ下さい。

今冬は、ここ一兩年に比べて寒気厳しいと予測されています。会員の皆様の益々の御発展と御健勝を心から祈念申し上げます。

目次

会長挨拶

防大の現状と将来

防大創立50周年施設整備事業……………1

学生所感……………3

平成10年度校友会活動状況……………4

同窓会行事……………5

第2回防大同窓会期別対抗ゴルフ大会……………5

第1回防大同窓会期別対抗テニス大会……………5

防大校内競技カッター……………5

防大50周年同窓会記念事業について……………7

同窓生アラカルト

国際貢献・国際会議……………9

防衛交流(私の中の国際化)……………9

ブルーインパルスIN長野オリンピック……………11

期生会だより……………12

地区だより……………15

平成9年度防衛大学校同窓会決算報告……………16

平成11年度防衛大学校同窓会予算……………17

事務局からのお祝い・お知らせ……………18

表紙

新しいシンボルタワー(給水塔)……………

防大の現状と将来



防衛大学校創立50周年記念事業については、前年度紹介したが、ここで再度その概要を紹介する。防衛大学校は、将来、幹部自衛官となるべき者を教育訓練する機関として、昭和27年に設立され、平成14年（2002年）には創立50周年を迎える。この50周年を記念して、記念事業を実施することを計画し、既に検討が開始されている。記念行事としては以下のものがある。

- ① 施設整備事業
- ② 電算機の利用による全学的な情報システム
の整備
- ③ 歴史資料、卒業生の足跡等を展示する資料館の設置
- ④ 50年史の編纂

今回は施設整備事業についてより詳細に紹介する。

平成9年11月、灰青色と白色の軽快なコントラストの外装に身を包んだ給水塔ができた。塔は高さ50メートル、前面と背面に校章が鮮やかに飾られている。本来の機能は、給水塔であるが、将来は立派なシンボルタワーとなるものである。

創立50周年に向けた施設整備事業は、本館から図書館に至る中央部地区のリビルドであり、中央部地区は全く新しく生まれ変わるようである。給水塔の立て替えは、その施設整備事業の先駆けをなすものである。

中央部地区整備の基本コンセプト

防衛大学校の施設は我が国の防衛

の任に当たる自衛隊の幹部自衛官を育成する建学の目的、精神にふさわしい威容を持ったものでなければならぬ。諸外国の士官学校を見ても、それぞれ国家の象徴としての地位と名譽を与えられている。その中心となる本館等は、それぞれの国の安全保障にかける意気込みを示すものになっていて、必ずしも豪華ではないが壯麗であり、簡素な中にも肅然たるたたずまいを示し、そこに学ぶ士官候補生やそこを訪れる人達に、自然と心身が引き締まり、また伝統と誇りを感じさせるものとなっている。本館を中心とした建物群には、士官学校のシンボルの役割を担っていて、景観も優れたものとなっている。これから進められる中央部地区の整備は、我が国の防衛にかける意気込みと誇りを示し、かつ本校卒業生の故郷として偲ばれる施設となるものである。

本部庁舎

本校の中核機能を果たす施設であり、本校正面の現在地に整備することとし、現在欠落している交流機能及び渉外機能を整備するとともに、現在校内に散在している食堂、売店、厚生課事務室、車両事務室、電話交換室等の施設を集約する。

人文科学館

人文科学教室及び外国語教室は、一般教養の主要部分を担当する教室であることから、引き続き中央部地区に整備することとし、語学教室センター等を整備し、現在2棟に別れているものを1棟に集約する。

図書館

現人文科学館跡地に整備する。図書館は地下1階地上1階の構造とし、保存書庫に関する施設は地下1階に整備し、地上1階は主として閲覧室等として使用する。屋上は、本部庁舎の1階と同じ高さになるように計画し、緑のある広場として有効に活用する。

情報館

図書館に隣接して整備することとし、情報

通信・処理機能を取り込んだ総合的な教育支援施設とし、さらに管理機能を付加して図書館と情報館とが、体化した図書・情報センター（仮称）を形成する。

多目的講堂

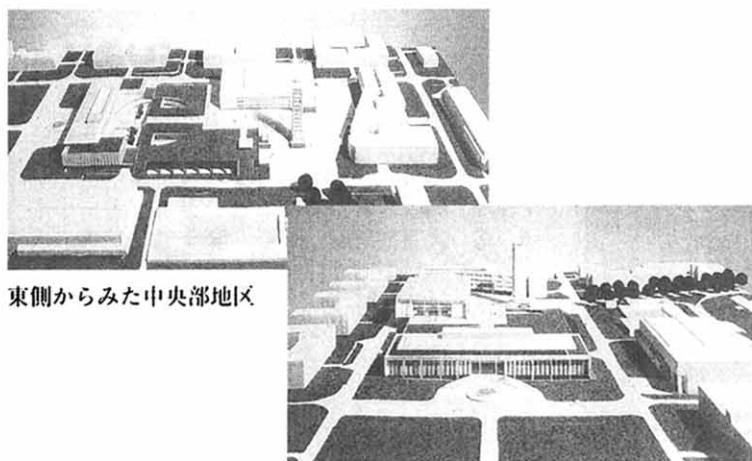
入校式、卒業式、各種講演会、国際会議、その他文化活動等他用途に活用することとし、施設規模は全学生が収容可能な規模とする。

広場

用地の有効活用のため、図書館及び情報館の屋上を自然環境と調和した広場として整備し、人的交流及び憩いの場を形成する。

給水塔

広場北西角地の学生通りが見渡せる場所に整備することとし、将来にわたり本校のシンボルとなり得るような景観と機能を備えたものにする。



東側からみた中央部地区

正面からみた中央部地区

人は空に夢を見る。

三菱重工業株式会社

航空機・特車事業本部

東京都千代田区丸の内2-5-1 〒100-8315 ☎東京 (03) 3212-3111

副校長 北野 昌 則

2期(陸)

第3期生を迎える1955年の春完成した校舎は、質素な中にも整然としたたたずまいで戦後の復興が緒に上ったばかりの当時は白亜の殿堂として羨ましがられる存在であった。小原台が防大の敷地として選ばれた理由は、幹部自衛官となるべき人材を養成するに相応しい場所として、我が国の象徴である富士山が見えること、島国の防衛に欠かせない海に近いこと、情報入手が容易で、かつ優れた教授陣が整備できる首都に近いことの3点と言われている。しかしながら、回りを海に囲まれた小原台は想像以上に塩害による老朽化が激しく、また科学技術の急激な進歩や国際化が進む中であって構造的にも機能的にも立て替えの時期にきている。小原台上の建物の延べ面積は約18万平方メートルあり、現在の予算規模でこれらを全て立て替えるためには4半世紀近くを要することになる。新しい時代に相応しい防大の施設を整備するには、小原台全域をカバーした長期的な視野のもと、統一的なコンセプトを構築して整備を進めなければならない。

東に房総半島、西に富士山、眼下に東京湾を眺望でき、観音崎固定公園と隣接した風光明媚な自然環境と調和を取りつつ、我が国の防衛の任に当たる自衛隊の幹部自衛官を養成する建学の精神、目的に相応しい壮麗さと厳肅さを持ち合わせた風格のある施設にしなければならぬ。ここで学ぶ学生はもとより、ここを訪れる人々にも我が国の安全保障にかける意気込みと、誇りを感じさせるものでなければならぬ。諸外国の士官学校を見ても国防という崇高な使命と名誉に相応しい威容を持った施設が整備されている。

防大は2002年の50周年記念を迎えるまでに、中央部地区(本部庁舎、人文館、中講堂、旧図書館、時計台等)の整備を行う計画である。中央部地区は本校の象徴的存在であり、中枢機能が集中している。本館や多目的

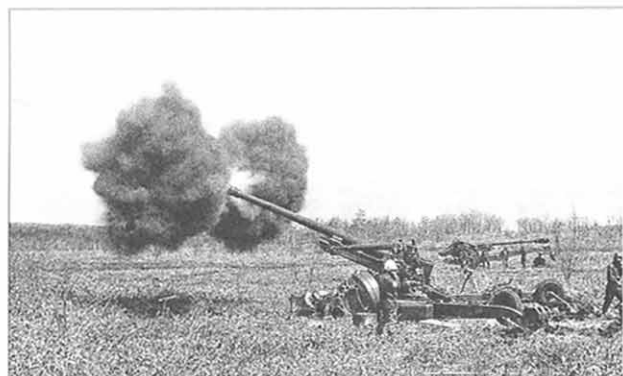
講堂に国際交流の為の機能を持たせ。高度情報化時代への対応など地域社会との交流に配慮することも重要である。この中央部地区を中心として、教育・研究ゾーン、生活ゾーン、訓練・運動ゾーンが広がっている。空間的にも中心部となるこの地域は、高い建物によって本館や教場と学生舎が分断されるのをさげ、地下2層構造とした図書館屋上には、開放感のある記念広場を造り、教職員と学生の交流や憩いの場として利用されるよう設計されている。特に記念広場に隣る時計台を兼ねた近代的シンボルタワーは本校卒業生の心の故郷となるであろう。また旧図書館の一部を利用した教育資料館も準備されており、本校の歴史を後世に伝えるとともに、学生の情操教育にも一役買うことになる。中央部地区の整備が完了した後は、ゆとりのある学生舎の整備を急がねばならない。



ISUZU
THE SUV SPECIALIST

American Blood
WIZARD

BELLCOM <http://www.isuzu.co.jp> Bell Fax 0120-740-050 Bell Call 0120-667-050
●2期(陸)は防大の職員会館に隣接する自動車科教室が本館の隣にあり、本館の隣にはTEL:03-5471-1180



155mm 榴弾 FH70

国の安全と平和に 寄与する技術

素材とメカトロニクスの総合企業
JSW 日本製鋼所

東京・日比谷三井ビル ☎ 3501-6111 (大代表)
ホームページ: <http://www.jsw.co.jp>

平成10年度運動系校友会活動結果及び部員数状況

校友会名	成績	部員数		校友会名	成績	部員数	
		男子	女子			男子	女子
短艇委員会	全日本カッター競技大会4位	78		ボクシング	関東大学ボクシングトーナメント3部	44	3
バスケットボール	男子 関東学生リーグ6部7位 女子 神奈川リーグ2部3位	34	12	レスリング	フェザー級準決勝進出		
柔道	神奈川県学生柔道秋季大会4位	27	2	ボート	東日本学生レスリングリーグ2部A5位	25	
ラグビー	11月30日以降に決定	167		フィールドホッケー	東日本大学選手権競漕大会エイト2位	15	
サッカー	神奈川県リーグ戦1部5位	55	1	ワンダーフォーゲル	秋季関東学生ホッケーリーグ1部6位	28	9
剣道	神奈川大会個人優勝 大崎 神奈川青少年剣道大会優勝 大崎	41	6	パラシュート	奥多摩 槍ヶ岳 妙義山 落下傘スポーツ日本選手権大会ジュニアの部	17	1
空手道	春季関東リーグ団体1位	61		準硬式野球	優勝 多田 準優勝 高良 神奈川六大学準硬式野球春季リーグ1部4位	44	
バレーボール	全国国公立大学選手権8位			合気道	全日本学生合気道演武大会出場	48	3
	男子 秋季関東バレーボール戦5部4位	13	9	弓道	秋季南関東リーグ戦1部4位(男子)	34	5
	女子 秋季関東大学女子バレーボールリーグ戦12部昇格				2部3位(女子)		
卓球	秋季関東学生卓球リーグ戦5部2位	22		少林寺拳法	少林寺拳法関東学生大会団体演武の部最優秀賞	31	1
陸上競技	関東理工系学生陸上競技大会	59	8	フェンシング	関東学生リーグ(エペ、サーブル)3部昇格	31	
	男子団体3位 女子団体2位			ウェイトリフティング	神奈川県社会人ウェイトリフティング選手権大会	23	
硬式庭球	関東理工科リーグ7部4位	40	12		69キロ級1位 潮村 85キロ級1位 今泉		
硬式野球	神奈川大学野球秋季リーグ2部優勝	33		相撲	全国国公立大学対抗相撲大会団体4位	13	
射撃	秋季関東学生ライフル射撃選手権大会2部3位	15	2		東日本学生相撲リーグ戦 3位		
水泳(水球)	関東学生水球リーグ2部22位	19		バトミントン	関東大学バドミントン秋季リーグ	18	10
水泳(競泳)	東部国公立大会団体4位	20	3		6部3位(男子) 5部5位(女子)		
	個人メドレー優勝 相馬			自動車	全関東学生ラリー選手権大会プライベート1位	13	
ハンドボール	関東学生リーグ秋季大会6部2位	37		グライダー	久住山岳滑翔大会3位 手塚	26	7
アメリカンフットボール	関東学生リーグ2部2位	98		山岳	穂高連峰 三つ峠山 立山連峰剣岳	12	2
ヨット(クルーザー)	学生ヨット世界選手権予選2位	15	1	吹奏楽	定期演奏会	24	3
ヨット(小型)	関東学生春季ヨット選手権大会決勝20位	28	1	儀じょう隊	自衛隊音楽祭り	42	3
銃剣道	全日本銃剣道大会優勝	30	2	居合道	居合道個人段別競技会出場	17	3
ソフトテニス	関東学生ソフトテニス秋季リーグ戦9部4位	27	3	体操	東日本学生体操競技グループ選手権大会団体13位	18	4

航空・宇宙・防衛分野で貢献しています。

ハイテック商社
株式会社 山田洋行

TOSHIBA E&Eの東芝

人と、地球の、明日のために。

東芝グループ

株式会社 東芝 〒105-8001 東京都港区芝浦1-1-1 (東芝ビルディング)

第2回防大同窓会期別対抗ゴルフ大会

平成10年10月27日久々の爽やかな秋晴れに恵まれた奥武蔵の丘陵に、かつて小原台で寝食を共にした仲間が全国各地から相集い、第2回期別対抗ゴルフ大会が心温まる小西同窓会長の開会挨拶と共に開始された。競技は1期から8期までの各期10名代表選手により実施され上位7名のスコアの合計をもってあらそわれた。

15時頃から各組の皆さんが順次ホールアウトされ、得意満面の笑顔の人や精魂使い果たして喘ぎ喘ぎアテストのデスクに辿り着く人であふれたが、倶楽部の若々しく爽やかな対応の女性点検官のお嬢さん方の前では最後の元気を奮い起こし真面目に素直に点検を受けていた。最後の組みがホールアウトしたのが16時を大分過ぎており、その後全データの処理を行ったこともあり、パーティ開始までには成績データ表は出来上がらなかったが、関係各位の絶大な協力のもと17時を過ぎてやっと完成し、成績発表並びに表彰式を取り行うことが出来た。正に滑り込みセーフであり、反省すると共に今後の要反映事項である。結果はグロス優勝したのは6期生チームでベスト7人のグロス計は564でした。また、ネット優勝したのは今回初参加した8期生チームでベスト7人のネット計は507・6でした。因みに今回の大会でのベスト・グロスは4期生の新田務さんで75でした。また同じくベスト・ネットは1期生の城尾百男さんで68でした。

更に何よりも素晴らしいのは選手80名と役員4名の全員が事故もなく本大会の全てを暖かさ笑顔のうちに完遂できたことである。秋の日は釣瓶落とし、全ての事務処理を終



優勝した6期生チーム

わって既に暗くなった駐車場で運転席に座り、今日のお天気のようにさわやかな気持ちでエンジン・スタートできたのも全く皆さんのお陰と心から感謝いたします。ときに17・5結構早く終わることができました。

グロス (ストローク) ネット (ストローク)

1位	6期生	564
2位	8期生	572
3位	2期生	575
4位	4期生	582
5位	3期生	587
6位	5期生	589
7位	1期生	601
8位	7期生	603

1位	8期生	507.6
2位	2期生	508.6
3位	6期生	509.4
4位	1期生	510
5位	5期生	512
6位	3期生	514.8
7位	4期生	514.8
8位	7期生	520.4

第1回防大同窓会期別対抗テニス大会7期が優勝

防大1期貫録の準優勝

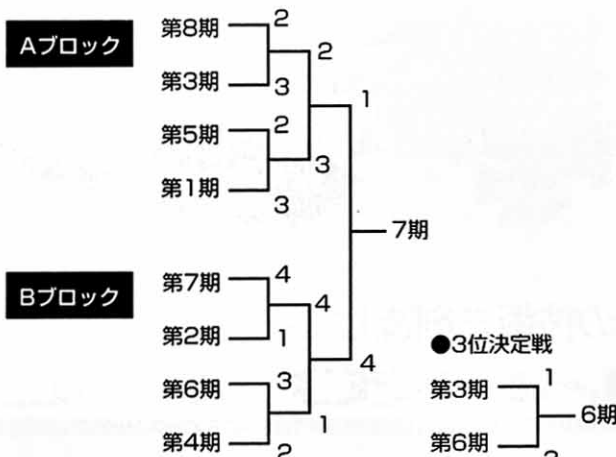
防大同窓会主催の第1回テニス大会が、6月28日母校防衛高等学校のテニスコートで実施された。

梅雨時の真最中であり、天候は前日までどちらに転ぶか分からない状況であったが、当日は参加者全員の熱意が通じたのか、絶好のテニス日和となり、1期から8期までの各期ダブルス5チームによる団体戦トーナメント方式で実施された。

今回の企画は、同窓会本部事務局員の担当者で防大硬式庭球部の創設にも尽力された2期の井川氏(海)を中心に準備が進められ、各期の代表との事前の綿密な調整により大会運営も極めてスムーズに実施された。また4期で現在防大教務部長の金井氏が硬式テニス部の部長をされている事もあり、学生諸君の支援も得る事が出来、試合の合間には、新設された防大のシンボルタワーとも言つべき時計台の見学等まで面倒を見ていただくことができた。大会は、開会式で小西同窓会長(1期海)のユーモア溢れ、かつ開会を盛り上げるに相応しい挨拶の後、事前の抽選により決められた組み合わせにより開始された。

Aブロックでは、一部現役の会員も混じる8期が、3期に破れ、持ち駒豊富な5期も選手1名不足のため、11人が2回も戦つと言うハンディをもつともしない1期に破れると言う波乱の幕開けとなった。1期は若手8期を破り、勢いに乗る3期も接戦の末下し、決勝戦に駒を進めた。一方Bブロックでは、優勝の呼び声高かった2期が、これまた質、量ともに豊富な7期と1

期別対抗テニス大会勝敗表



回戦で当たり、技の2期を若さの7期が破った。4期は教務部長も自ら出場して6期と対戦したが、僅少差で6期に軍配が上がった。準決勝は、年齢的にはほとんどハンディのない6期と7期の対戦となったが、優勝候補の2期を破り勢いに乗る7期が接戦をものにし決勝へ進んだ。

夏の炎天下、相当疲労も溜まっている中で決勝戦は、6歳の年齢差のある若手7期の豪勝かと思われたが、これが60歳半ばの人の体力かと思わせるような1期の動きに翻弄され、結果的には4対1での7期の勝利であったが、内容的にはかなり接近したゲームであった。遠く徳島からこの日のために駆け付けた、真木氏(1期海)はコートの外では足を引きずっているの



優勝した7期生チーム

に、一度コートに入るや右に左に球を打ち分け奮闘しているのが極めて印象的であった。
7期は昨年の同窓会ゴルフ大会に続いての優勝であり、来年は各期が打倒7期を目指し強力メンバーを組んで挑戦する事となろう。
試合終了後、学生会館で北野防大副校長(2期)及び支援に当たった硬式庭球部の学生を交えての表彰式及び懇親会が行われ、各期の代表が一言ずつ反省と、来年への抱負を述べ、かつ来年も防大での大会に参加する事をお互いに誓いあい、盛会のうちに第一回のテニス大会は終了した。
60歳前後の大先輩の活躍を目のあたりにした学生の間では、これから先40年位は十分にテニスを楽しめることがわかったとの声も聞かれた。

防大校内競技 カッターの OBクルーの参加

平成10年4月28日、競技は南西の風(5m/秒)と比較的荒れ模様の中で行われました。天気予報では、当日、前線が関東の南辺に停滞し、それに南から湿った大気が吹き込み、局地的には雷雨、南岸は大雨という本当に最悪(漕ぎ手のみならず応援者にとっても)のものでした。

従って、同競技予定より遅れ気味となりましたが、丁度それが幸いしOB艇の競技が始まる頃には、風は結構吹いておりましたが雨も上がってコンディションとしてはまあまあ状態となりました。

スタートは相手(女子艇2隻)を先攻させる余裕の発進?になりましたが、スタート直後の力強い漕ぎさばきにより、開始後約100mの地点では先頭を切り、小西会長他海自現職の力強い応援(今回の競技に際し横須賀警備隊所属の交通艇が応援艇として派出された)のもと、700mの地点では、20挺身近く水をあげ、終盤はその差をキープ(何故か差が開かなくなり、パテギみであったのと大差から来る気の緩み)したまま大差でゴールインしました。

その後、走水荘に場所を移動し、懇親会を実施致しました。何とか女子クルーに負けないうのがレース後の感想でした。



力漕するOBクルー

防大卒業留学生 歓迎夕食会

防大を卒業した留学生を開校祭に合わせ母校防大に招待するプロジェクトも今年で9年目となりましたが、今年と同窓会として初めて卒業留学生4名の歓迎夕食会を11月13日東京で開催しました。

夕食会は、同窓会本部君嶋会長代理がホストとなり、タイ王国海軍ウィナイ大佐(28期生)、タイ王国陸軍ソムチャイ少佐(33期生)、シンガポール陸軍チュール少佐(34期生)、同ウン大尉(38期生)の4名及び在日タイ王国駐在武官スリヤン大佐(陸幹CGS 38期生)をゲストとし、同窓会本部及び元在日防衛駐在官等関係者が出席しました。

夕食会は、留学生の在校間の思い出話から卒業後の活躍ぶり、さらには司馬遼太郎論など文学論議まで及び和やかに行われ、終わりに会長代理から記念品の盾が贈呈されました。またこの間、留学生の卒業帰国後の同窓会との連携要領についての貴重な意見も頂戴することが出来ました。

防大留学生の受入れは、将来、在校生の5%、10カ国以上にもなる計画がある由で、その卒業生との連携は益々重要となるものと思われま



新時代の技術を創造して行く

FHI AEROSPACE 富士重工業株式会社

防大50周年 同窓会記念事業について

実行委員長 佐久間 一

平成十一年の年が明けて、防大創立五十周年の節目を三年半後に迎えることになりました。

これに合わせて計画されている同窓会の記念事業の現状を会員の皆様に御報告するとともに、今後の御協力をお願いする次第であります。

1 募金状況

平成九年四月に開始した同窓会の募金活動に対して、平成十年十月までに約五千六百名の会員から寄せられた金額は、約八千二百万円、拠金率は約三十四%に至りました。一年前の実績である総額約四千五百万円、拠金率約二十%と比較すると、平成十年の一年間に約二千四百名の同窓生が三千七百万円の浄財を拠金して戴いたことになり、皆様の御協力に深く感謝致しております。なお拠金の細部は別表のとおりです。

2 防大の施設整備の状況

防大当局による記念事業としての施設整備は、財政事情が厳しい中で関係者の尽力によりほぼ当初の構想通り進捗しております。給水塔（シンボルタワー）は、既に完成して東京湾上からもその姿を望むことができ、また人文科学館及び本部庁舎の建替は、それぞれ平成十一年及び十二年末の完成を目指して作業が進められています。

モニュメントの設置場所となる多目的講堂（記念ホール）は、平成十一年度から三年間の工期で整備すべく予算要求中でありその設計図から完成後の壮観を想像することができません。顕彰室の設置が予定されている現在の図書館は、その改修の前提となる図書・情報

館の新設が平成十二年度から三年間で行われる予定です。

3 同窓会記念事業の準備状況

同窓会の記念事業の中核であるモニュメントの設置については、現在までにその構想が固まりました。

平山邦夫画伯（平成十年 文化勲章受章者）に原画作成の快諾を得たことは既に御報告したところですが、防大の施設整備計画の確定を受けて、平成九年秋に清家先生（元防大教授、元日本建設学会会長）に御支援を戴くことをお願いし快諾を得ました。その後、同先生、防大当局、多目的講堂の設計事務所と記念事業委員会との数度にわたる協議と、清家先生の二回にわたる防大訪問を経て、モニュメントの設置位置と規模が定まりました。場所は多目的講堂の正面であり、大きさは横六メートル、縦五メートル程度になります。また、昼間は外部からの自然光、夜間は講堂内の照明によって、屋内外から眼の当たりにすることができま。

モニュメントの構造は、千年にも至る長期間の保存に耐え得ることと平山画伯の御意向からステンドグラスに決定しました。その原画のモチーフについては、平成十年十月に平山画伯と関係者が直接協議した結果、防大生歌の内容と防大創設場所選定の経緯から「緑・海・空・富士山」というイメージで構図を固めたとの画伯の言葉を頂きました。

ステンドグラスの制作は、鹿島資料館及び横浜国際会議場のステンドグラスを平山画伯の原画に基づいて作成した実績のある日本交通文化協会から、防大記念事業の趣旨を十分に認識した上でこれに携わることの申し出がありました。同協会の見積もりによると、前記の規模のステンドグラスの制作、設置に要する費用は、約三千万円以内に収めることができます。

以上の経緯から、平成十三年暮には、防大

同窓会の寄贈によるステンドグラスが小原台に建設される多目的講堂の正面を飾る光景を、現実のものとして想像することができるとにりました。

モニュメントに次ぐ防大同窓会記念事業の重点である顕彰室の整備は、今後その規模等細部にわたる防大当局との調整を必要としていますが、同窓生の殉職者顕彰のシンボルとなる像を設置することが望ましいとの認識を得ております。

防大五十年史については、防大当局において検討の結果、オフィシャル・ストーリーとして作成し、同窓会関係の記事は含まないことになりました。なお、五十年小史及び記念写真集等の同窓会による作成については、今後検討を続ける予定です。

平成十四年の記念行事については、その項目の選定を進めています。記念パーティーは同窓会が計画実施する事業と位置づけ今後同窓会本部で検討することになり、記念事業委員会の担当事業から分離することになりました。

4 記念事業の今後の進め方

前記のとおり、記念事業の内容についてある程度具体的な姿が描ける段階に至りました。従って、今後記念事業委員会が担当する事業については、次の構想により進めたいと考えております。

(一) 記念事業の中核はモニュメントとし、ステンドグラスの設置構想の実現を図る（経費約三千万円）さらに今後の検討に基づき、中央広場へ彫刻像の設置を推進する（経費約二千万円）

〔モニュメント総額 約五千万円〕

(二) 殉職同窓生の顕彰室の整備を第二の重点とし、その中にシンボル像を設置するとともに、刻銘用石板等を寄贈する。（経費約一千五百万円）また、資料館整備について卒業生コーナーの設置及び資料収集等に対し協力を行う。五十年小史及び記念写真集等の

作成については、今後の検討結果を得て最終的に決定する。

〔顕彰室、資料館等 総額約二千五百万円〕

(三) 平成十四年の記念行事として、記念講演会等の実施及び記念マーチの作成・寄贈等について検討を行い、その結果を得て最終的に決定する。

〔記念行事総額 約一千五百万円〕

(四) 記念事業の拠金者に対して小規模な記念品を贈呈するとともにその名簿を防大構内に保存する。

〔総額 約二千万円〕

今回の記念事業のための募金は、当初、目標額二億円、その概略の内訳としてモニュメント一億円、資料館・五十年史及び記念行事・記録 各五千万円と見積もりました。しかし前記のとおり、モニュメントについてはステンドグラスが三千万円以内で制作できる見通しが得られ、また記念パーティーは同窓会本部の計画となった結果、目標額の縮小が可能になりました。

一方、現在までの募金実績の範囲では、当初の構想どおりの事業を実施することは困難であります。母校創立五十周年という記念すべき時期の同窓会の事業には、少なくとも半数以上の同窓生の参加を得て、後世に遺すにふさわしい事業を実現させることが重要であり、またそれを通じて防大同窓生の存在と行動力を再認識することに大きな意義があるものと考えます。

従って、同窓会としての募金活動は、前記事業の実施が可能な金額である一億二千万円を目標とし、平成十三年三月末を期限として、引き続き会員の皆様の御協力を仰ぐことにしたいと存じます。諸般の状況は厳しい折ではあります。この事業の趣旨と意義について御理解を賜り、最後の段階における御支援をお願いする次第であります。

防大五十周年記念事業募金状況

(平成10年11月6日 現在)

期	対象者数	拠 出 者 数				合計	拠金率	拠金額 (×1000円)
		陸	海	空				
1	299	128	44	31	203	67.9	4,750	
2	308	137	43	41	221	71.8	4,710	
3	447	126	47	79	252	56.4	5,580	
4	419	128	46	69	243	58.0	5,030	
5	491	111	45	65	221	45.0	4,600	
6	427	97	54	69	220	51.5	4,630	
7	419	105	51	48	204	48.7	4,335	
8	414	85	41	46	172	41.5	3,200	
9	424	86	53	50	189	44.6	4,210	
10	442	97	43	54	194	43.9	2,840	
11	462	86	50	40	176	38.1	2,390	
12	417	89	42	52	183	43.9	2,330	
13	403	72	33	56	161	40.0	1,820	
14	461	79	58	55	192	41.6	2,052	
15	401	106	36	42	184	45.9	1,885	
16	402	87	28	54	169	42.0	1,850	
17	455	82	46	46	174	38.2	1,850	
18	399	54	47	35	136	34.1	1,470	
19	413	86	29	43	158	38.3	1,660	
20	356	54	32	30	116	32.6	1,205	
21	465	68	43	28	139	29.9	1,490	
22	431	44	35	28	107	24.8	1,160	
23	378	51	30	28	109	28.8	1,225	
24	417	44	42	26	112	26.9	1,160	
25	374	56	39	23	118	31.6	1,230	
26	469	57	57	32	146	31.1	1,525	
27	364	37	57	14	108	29.7	1,120	
28	403	47	41	21	109	27.0	1,240	
29	414	43	32	26	101	24.4	1,050	
30	369	25	28	15	68	18.4	730	
31	396	38	24	23	85	21.5	880	
32	334	33	16	22	71	21.3	760	
33	378	40	20	18	78	20.6	800	
34	354	41	14	28	83	23.4	940	
35	439	32	20	9	61	13.9	658	
36	340	19	15	13	47	13.8	530	
37	366	17	12	16	45	12.3	490	
38	425	20	11	10	41	9.6	450	
39	338	24	14	12	50	14.8	520	
40	376	10	9	21	40	10.6	430	
4	403	86	38	3	127	31.5	1,075	
合計	16,492	2,727	1,465	1,421	5,613	34.0	81,860	

備 考

1. 8,267万円 (H10.11.6現在)

(1) 拠金総額 8,240万円 (真駒内同窓会団体 40万円)
(未確認拠金者等 14万円)

(2) 利息 27万円

2. 拠金される方は次の口座を御利用下さい

郵便局振替口座 口座番号 00150-6-352140

加入者名 防大五十周年記念事業委員会

* 事務能力上御案内の遅れました42期生の皆様よろしくお願ひ
します。(1口 1万円基準)

* 拠金は分割でも結構です。



HITACHI

人間らしさをキーワードに、
いま私たちの生活や社会には、
本当の豊かさやゆとりが求められています。
日立は、どこまでも人にやさしい先端技術を通じて、
そんな暮らしの夢をひとつひとつ花開かせ、
豊かな実りをお届けします。

◎ 株式会社 日立製作所 公共営業本部 〒101-8010 東京都千代田区神田駿河台四丁目6番地 電話(03)3258-1111(大代)



を張るには至らなかった。同グループは、常時西側グループを牽制しブレッシヤーを懸ける決議案を提出していたが、我が国はいつもコンセンサスには加わらない、という態度に終始していたが、これには非常につらいものがあった。ある時、ある代表団からは「コンセンサスとは必ずしも全会一致を意味しないから、日本1国が反対してもグループのコンセンサスは成立する」旨の暴言があった。勿論成立には至らなかったが、この時初めて「consensus」と「unanimity」なる英語の違いを知った次第で、正しく、海千山千の外交官の世界だなあ、と感じた次第である。

一方、痛快で面白かったのは、欧州先進国と共同戦線を張って、A、R、C3大国の横暴に抵抗した時である。この3大国は、時々尻尾屈をこねて強引に条約の趣旨を曲げようとする意向が見られたが、このようなときは、やはり我が国は先進超大国のA国よりは、どちらかという利害の共有点が多い欧州先進国と共同戦線を張って、大国をやり込めたことがあり、日頃の横暴に溜飲を下げたことがあった。

こと程さように、このような国連システムを適用した国際会議で、各国は自国の意志を通そうとして離合集散を繰り返すわけである。我が国が組織活動総予算の13%近くを負担しているが、そのことを尊重するのは極少数派の先進国のみであり、筆者の借家の1ヶ月分家賃と同額の分損金（1年間で）しか

払っていない国々の理不尽な横車であつても、数の論理で行けば「無理が通れば道理引つ込む」といった事態になるのである。この点に筆者は国連が代表する協議システムの限界を感じた次第である。「国連は肥大化し、重要な決議は成せず、衆愚政治の場になりつつある」、「国連は純粋に利益追求の場である」というのが率直な感想である。

防衛交流

現在、筆者は在京の各国武官25ヶ国との連絡調整にあたる渉外業務に携わっている。一度オランダでの防衛駐在官の立場になったわけである。そんな立場に立ってみて最近見えなかつたものが見えてきた。「○国の武官は誠実であり、よく働いている。」「△国の武官は口だけだ。」「×国の武官は仕事をしない。」「等々それぞれの武官を評価基準として不思議なくらいそれぞれの派遣国の印象が形成されていく。これと同じ様な評価が自分の外国勤務中にもあつたと思うと背筋がゾッとするものである。これを裏返せば防衛駐在官の重要性、特に、情報収集という本業にも増して一国の軍隊の代表としてまさしく自衛隊の顔であり、任国の関係者は防衛駐在官を通じてその派遣先、派遣国を評価しているであろうことは想像に難くない。

また、もう一つの重要な仕事に陸幕長の海外出張の調整、及び外国陸軍参謀長の訪日招待業務があるが、これは最も気を遣い、神経をすり減らす業務でもある。特に最近では、数年前には想像ができない程、交流対象国の質、量とも拡大しており、過去の経験だけに頼るわけにはいかないとかが多々ある。中でも招待業務は部隊訪問から文化研修、招宴、夫人プログラムまで、時間どおり進行するか、相手の希望に叶っているか、天気はどうか等々常時同行するものにとっては気が気でないものがある。勿論、一国の軍を代表してこれらる人達だから我々の準備したプログラムを文句も言わずに受け入れてくれるが、実際のところ

ころは満足しているのかどうか最後まで把握できず、恐らくその結果は、訪日のお返しで陸幕長が相手国を訪問したときに判るのであろう。幸か不幸か未だそのような状況にはいっておらず、特別の苦情も聞かなくてこないことから、なんとか不合格ではないらしい。

ただ全体の業務としてまだまだ我が国、特に陸上自衛隊の実施する防衛交流は端緒にいたばかりであり、実質的な交流はこれから、という感がする。冷戦時代は日米同盟関係を基軸とした交流であり、アメリカ以外の国との交流は儀礼的なものに終始していたものと思う。それが冷戦の枠組み崩壊後、また、我が国が国際貢献としてPKO活動や、軍備管理、軍縮の世界にコミットしただけからは、交流対象国が増えたことに加え、色々な国との利害、共通点を模索する必要があるようになった。同様に各国にしても新たな国際秩序、協力関係を模索している状況にある。これだけ自衛隊が海外との接点を持つようになった現在では、近い国だけに関心を持つだけでは十分とは言えず、遠い国であっても利害を共有できそうな国とは積極的に交流を図るべきであろう。そのような交流を通じて21世紀初頭には徐々に旗幟が鮮明になっていくだろう。防衛交流は平時に軍隊が実施できる各種活動の内少なからぬ役割を担っているものと実感している。

結言

筆者自信、国際人でも、国際感覚豊かな人間でも無い。逆に極めて古いタイプの日本人であると思っている。海外の経験はあるが、外国人が特別好きなのではない。ただ外国及び外国人から見た日本とはどういふものなのか、が少し判ってきたのではないかと、という自負心はある。また、国際社会の枠組み、国連というものが必ずしも最高の存在では無いという実感。今までは、多くの利害を共有できると思っていた先進国が、彼らは彼らなりこの明確な利益に基づいて行動しているという

MITSUBISHI
SOCIO-TECHの三菱電機



41万画素の高画質が用途を広げるコンパクト赤外線カメラ

IR-M700

- 世界最高水準41万画素(801×512)の高画質
- 雑音等価温度差 0.08℃の高感度
- 5kg・4.2ℓの軽量・コンパクト
- 45Wの低消費電力
- マルチ電子ズーム(2.4、8倍)、電子スクロール機能、画面フリーズ機能付

用途に合わせてお選びください。
IR-M300:6万6千(256×256)画素
雑音等価温度差0.2℃

NEW 非冷却タイプ
IR-U300M1:8万(320×240)画素
雑音等価温度差0.2℃

IR-M700/IR-M300/IR-U300M1

三菱サーマルイメージャ

●お問い合わせは三菱電機株式会社 本社 監視・検測システム営業課 〒100-8310 東京都千代田区丸の内2-2-3 電話(03)3218-3370

三菱電機株式会社

ことを実体験で知ったこと。また、国益というものが、現場で明確な指針を与えてくれる場合はかりでないこと。そんな時、自分の行動の指針を示してくれるのは、愛国心、日本人であることの誇り、といった心の部分によるところが大きい、ということであると思う。これらを肌身で知ることができたというのが筆者の財産であり、自信を持って読者諸兄諸姉に訴えられる事である。

今後の防衛大学校が21世紀に向けて、さらに有為な人材を自衛隊に、ひいては国際社会に送り出されんことをお祈りする次第である。この拙文に対する諸兄諸姉の御意見、御叱正を期待するものである。

ブルーインパルス IN 長野オリンピックピック

22期 (空) 阿部 英彦



1998年2月7日13時3分15秒。この時間を私は生涯忘れることは決してないと思います。

1964年10月10日、東京オリンピック開会式で東京国立競技場上空に鮮やかな五輪マークをF-86Fブルーインパルスが描いてから34年、三代目となるT-4ブルーインパルスが長野オリンピックに場を替えて開会式という大舞台に挑みました。

この長野オリンピック開会式という華やかな大舞台は、ブルーインパルスが飛行する上で最悪といつてよいぐらい悪条件が揃っていました。それは、盆地特有の予想できない乱気流や低く垂れ込める雪雲と吹雪等の視程障害現象、開会式で飛ばされる無数の鳩型の風船や会場周辺で飛行する警備や報道のヘリの

存在、冬期の低温におけるスモークの発色の問題、そしてブルーの飛行を大きく制限する長野県側からの曲技飛行禁止の要求等でした。さらに展示飛行をする上で、展示時刻が最大の難問でした。通常、我々空自のパイロットは示された時刻に1秒の誤差もなく飛行する訓練をしており確実に実施することが出来ます。そのため綿密な航法計画を立てるわけですが、今回は直前まで時刻が示されないだけでなく、式典の状況によってプラスマイナス20分の範囲の中で、かつ会場上空を第九の演奏直後に来て欲しいというものでした。航空機が空中で止まって待機することが可能ならば何ら問題がないのですが、常に約700キロというスピードで飛行し、使用できる燃料も限られていることからこの要求を受け入れることの難しさがお解りいただけると思います。これらの問題をブルーインパルスの隊員はもちろん、空自の隊員が一丸となってひとつひとつ解決し、そして長野オリンピック開会式でのレベルオーバーブナー(水平空中開花)を披露することができたのです。

誰もが一度は鳥のように自由に大空を飛んでみたいと思ったことがあると思います。私も子供の頃そう思った一人であり、幸運にも空自のパイロットとしての道を歩み夢がかなっただけでなく、ブルーインパルスの隊長として勤務することが出来ました。ここで少しブルーインパルスについて紹介したいと思います。現在T-4というジェット練習機で、年間二十数回全国各地で展示飛行をしています。大空をキャンパスに五色のスモークで華やかに、機敏に、雄大に飛行し、多くの人々特に子供達に大空に対する夢と希望と感動を与えようと頑張っています。この華麗な空中でのパフォーマンス、そして大空を自由に舞う見た目の華やかさのその裏で、パイロットは常にプラス6Gからマイナス2Gという普通の人には想像もできないような重力と闘い、地面が間近に迫る恐怖を克服し、他機との間隔がわずかな編隊をチームワークと集中力で維

持するという苛酷なフライトを汗だくでやっているのです。加えて展示飛行のほとんどが土日祝日に実施されるため、家族サービスはもちろん病気の時でさえ面倒を見てやれないといった任務とはいえ、家族に対してかなりの犠牲と我慢を強いています。ブルーのメンバーは航空祭等で確かにスターかも知れませんが、家に帰れば普通の夫であり父親であるわけで、この夫そして父親としての家族に対してすまないといったつらい心情はご理解していただけるのではないかと思います。とはいえ、子供達に夢と感動を与え続けるため今日も明るく爽やかに頑張っているのです。

話を長野オリンピック開会式に戻したいと思います。当日、私は開会式会場で地上指揮をしていました。当初あった多くの問題も解決し、残るは一番の問題である展示時刻だけでした。前日の総合予行どおりであればその時刻は12時53分15秒。そして開会式はスタートしました。頭の中はいつ最終決心をし、編隊長に通報するかだけで、式典を見る余裕な

どまるでありませんでした。案の定予行と異なり各イベントに遅れが生じどんどん時刻がずれ込む状況でした。そしてブルーインパルスの展示飛行直前のイベント第九の演奏合奏が始まりました。ブルーの編隊は上田市上空で待機中の連絡があり、最終的に決心した時間13時3分15秒、これを通報した以降もう変更はきかず神に祈るだけでした。第九が終り拍手が鳴り響く中、聖火台の上空にオリンピックカラーの五色のスモーク、そして等間隔に散開、観客全員が驚いたようにブルーインパルスの軌跡を見上げていました。少し間隔をおいてウオーという歓声と割れるような拍手、ブルーインパルスは一秒の狂いもなく最高のフライトで開会式を締めくくりました。こうしてT-4ブルーインパルスの長野オリンピックは終わりました。もしまだ一度もブルーのフライトを見ていない方は、是非近くの航空祭に足を運んで下さい。きっと何かを与えてくれると信じています。

Kawasaki

世界と夢の先端に。

川崎重工

航空宇宙事業本部
〒103-8155 東京都港区新橋2-1-1 川崎重工航空宇宙センタービル
TEL:03-3435-2111 FAX:03-3435-296



2期生会

(個人的懐旧談)
◆会長 浅野 豊

昭和25年(1950)6月、朝鮮戦争が勃発した。日本はこれにより、経済的には朝鮮特需という名の戦後復興の足掛かりをつかみ、軍事的にはマッカーサー元帥の「日本警察力増強に関する書簡」によって、警察予備隊(7万5千人)という再軍備の足掛かりをつかんだ。

そして早くもこの時期に、時の総理大臣吉田茂は、幹部養成学校を設立するよう指示したと言われる。「士官学校設立急ぐ、高校生業者を採用、予備隊幹部を養成(昭和26年1月12日付け、読売新聞)」の文字が紙上に見られる。

保安大学校は、昭和27年(1952)8月、「保安庁法」に基づき、警察予備隊が保安隊に改編されたのと同じに、保安庁の付属機関として発足した。そして開校準備作業が東京越中島の保安庁(現東京商船大学)で開始された。「防衛大学校創立50周年記念事業」が平成14年(2002)に実施される所以である。

国会では、「再軍備はいたしません」と言い続け、「戦力なき軍隊」という明言を編みだした吉田首相ではあるが、昭和29年6月、久里浜の保安大学校を突然視察した。横須賀の米海軍司令部を訪問しての帰路に立ち寄つ

たと言われる。

飯校舎の粗末な学生食堂で、1期生・2期生全員と昼食を共にされたが、榎智雄初代校長と並んで会食される御二人の眼下で、ただ黙々と一膳飯を食べていた1年坊主の私には、何故か印象深い思い出として心に残っている。結局、吉田首相は一口も箸をつけずに、榎校長と談笑しているだけであったが、国会では再軍備はしないと断言していても、本心はいずれ国軍にすると考え、保安大学校を将来の国軍の士官学校にすると考えていたことに疑いはない。

防衛庁が「省」にも昇格せず、未だ防衛大学校を継承している自衛隊の現実を、今なら何と言われぬか：是非、聞いてみたいと思っている。



2期生入校式(昭29. 4久里浜) 入校：408名 卒業：359名

4期生会

◆会長 林崎 千明

4期生会友諸兄にはお達者にてお過ごしのことと存じます。会友の一部には、防大において後輩の教育・指導に当たっておられる方もおりますが、杉山藩君を最後にすべての者が国防の第一線から退き、夫々に第二、第三の道を歩むことになりました。いよいよ期生会として、より団結を強め、今後の豊かな人生の時を刻むべきかと思えます。期生会活動をより活発にして、とは思いますが、組織を離れての夫々の独立の道、連携をとるのも容易ではありません。しかし小原台の4年間を含む長い道程において培われた友情、時々の場を通じた交流は可能であります。近々期生会誌「新草」発刊の予定であり、御意見等あればそれぞれの役員にお寄せください。なお、平成10年度4期生会総会、懇親会を次のとおり予定しております。

期日 平成11年3月6日(土) 17:00
場所 グランドヒル市ヶ谷
会費 7,000円(準会員は3,000円)

7期生会

◆会長 伊藤 惇

従来は明治記念館で行なっておりましたが、今回は自衛隊の風気も吸い得る市ヶ谷としました。多数の参加を願っております。押し付けられた期生会の各役員及び同窓会の各役員は会友各位のためにと一生懸命です。応援を期待しております。

志を胸に、小原台に集いて39年になる。海幕長の山本君を除いて、この春をもって全員が現役(ユニフォームとしては)を終え、7期生としてひとつの区切りを迎える時期となった。当然の事ながら、同期生も全国に散り、夫々新たな思いで、人生を楽しんでる。首都圏(東京・神奈川・埼玉・千葉)に在住す

る者6割、4割が地方という感じ。

過般、7月7日に、小西同窓会会長を招いて、約100名の7期生が明治記念館に集い、関の声を上げた。

今年は、防衛族一丸となって、参議院議員に送り込むべく推挙した石田君への諸活動にあたり、その中核として終始同期生が任じたことを、当り前の事とは言え特筆すべきと思う。御案内の結果で誠に口惜しい限りだが、中央、地方を問わず、全くの奉仕活動を黙々と組織し得たのは、同期としての求心力以外の何者でもない、秘かに思っている。同時に、先輩・後輩の同窓生諸兄にも、多大なる御尽力を賜った事に改めて感謝したい。

そろそろ還暦に差しかかる年代。身体のうちうちに衰えを感じるとは言いながらも、まだまだ不自由はない。社会に対しても、家族に対しても、一応の責任を果たした今、これからは、より自由により幅広く、貢献し世に存在したいと念じている7期生の昨今である。

8期生会

◆会長 平岡 裕治

8月に行われました8期生会総会におきまして、会長に選出されました平岡です。我が8期生も、現役は陸が藤縄君、空が私一人と合計2名を残すのみとなりました。今回の会長選出は、現役としての総仕上げに、同期生のために力を尽くせという神の声だと思ひ頑張りますので宜しくお願いします。

さて、「内憂外患」とはまさに防衛庁・自衛隊の現状を表すのに適当な言葉です。外には北朝鮮のミサイル発射、内には調本事業と、自衛隊創設半世紀を目前にして正念場を迎えていると言えらるでしょう。

一方、我々は諸先輩をはじめ隊員一丸となつての努力により、この半世紀において本来任務の国防はもとより、PKO、災害派遣等を通じて、国民の理解、支持を得てきました。

「税金泥棒」と呼ばれた時代から、「自衛隊さん御苦労様」と呼ばれる時代に、長い年月を経てようやくなりつつあります。この努力が水泡に帰すか否か、今が分岐点とも言えます。今、ここで思い出すのは我々八期生が草案を作成し、9期生、10期生が起草した防衛大の「学生綱領」です。「廉恥・真勇・礼節」の三つのモットーは、今こそ我々が初心に帰り思い起こさなければならぬ道義であろうと思います。誠実を基調にしてこのモットーを実践すれば、自ずと道は開けるものと確信しています。

我々8期生の現役生活もあと僅か。後輩諸子に託す言葉としてこの「学生綱領」の精神を送りたいと思います。

最後に先の期生会の状況についてお知らせします。懇親会では30数年前にタイムスリッブし、楽しいひとときを過ごしました。

日時 平成10年8月21日
場所 グランドヒル市ヶ谷
参集者 118名(うち夫人16名)
次第 総会及び懇親会
新役員 会長 平岡裕治(空)
企画 工藤雄司(空)
会計 山田正二(空)
陸担当 松浦紘之(陸)
海担当 大西秀男(海)
空担当 西野重信(空)

なお、9年12月に山口弘治君(海)が逝去されました。謹んで御冥福をお祈りいたします。



10期生会

◆50周年記念事業委員
(陸上) 会長 石飛 勇次

同期生諸兄には、恙無くお過ごしのことと存じます。初の零期生(?)として若さを誇って来た我々10期生も、大半が生後2万日を過ぎ、人生の中間目標であり、折返し点である定年が現実のものとなるとする昨今です。

御存知の通り、防大は、4年後の平成14年に創立50周年を迎えることになり、目下その記念事業の為、募金活動と事業内容の検討がなされております。

残念ながら募金活動は、決して順調ではなく、我々10期生の応募率も8/31現在で42.5%(188名)と他の期に比しやや低調です。

一方、記念事業の目玉として新設の記念講堂の一角に、同期の平山助成君の縁で、実兄平山郁夫氏の原画に基づくステンドグラス設置が企画されております。そういう意味でも、また零期生のメンツにかけてもより一層の募金活動をよろしくお願い致します。

小原台上で共に汗し涙した青春時代と同期生が懐かしく、絆の強化の必要性を痛感する秋になりました。

我々のクラスは、U出身者との連携と陸、海、空の独自性を重視したため、各地区毎に自発的な交流の機会はあるものの、正式な統一された期生会は、設立されていないのが現状です。遅ればせながら、後半生の寂しさを楽しさに変えるべく、是非とも具体化を促進したく、諸兄の御協力をお願い致します。

14期生会

◆会長 齊藤 隆

今回は14期生の海上要員の近況について、本年3月をもって全員が50才代に入りました。大部分の者は年相応に体力、頭の色等変化してきており定年も現実のものとして視野に入ってきております。そういう中で、7月

に行われた海上自衛隊とロシア太平洋艦隊との共同訓練に海自側指揮官として参加した関泰雄君をはじめとして、総員が海上自衛隊生活を通じてそれぞれが培ってきたものをもって各自の持ち場で頑張っております。また、毎年6月には一般大出身者も含めた期生会を兼ね、昭和46年度遠洋訓練習航海(14期生が実習幹部として参加)参加者の集いを催しております。本年も6月26日に第27回目の集いを開き、同期生だけでなく当時の司令官、乗組幹部、同行者等諸先輩方との旧交を温めました。

追伸・防大50周年記念日への募金宜しくお願致します。(10年3月31日現在、陸、海、空142名が募金されています。)

16期生会

(北海道分会) ◆吉良 節

現在、北海道の各部隊等には陸29、海・空各1合計31名の16期生が勤務しています。職務も防衛副長を始めとして各職種の部隊長、幕僚、地連部長等と幅広く、「ツー・カー」の関係で、お互いに切磋琢磨しつつ(?)任務を遂行しています。

31名中9名は道内に自宅を構えており、残余のほとんどは単身赴任です。

北海道は広いので、全員が一堂に会することはできませんが、札幌・千歳周辺地区の同期生を中心として、若干の業務上の調整とストレスの解消も兼ね、異動時の送別会・歓迎会、不定期のゴルフコンペ及び随時の飲み会を実施し旧交を温めています。また、多方面隊から同期生が札幌出張してきたときには近傍の同期生を非常呼集し、宴会やゴルフにより盛大に歓迎しています。どうぞ札幌出張の際にはご一報下さい。

なお、防大助教(戦史)の田中恒夫君が、かや書房から「朝鮮戦争・多富洞の戦い」という本を出版しました。韓国陸軍第1師団の戦闘を通じ、国土防衛作戦の実態や第一線部

隊の奮闘ぶりを克明に研究・観察した良書です、ぜひご一読下さい。

22期生会

◆副会長 早野 禎祐



「新生22期生会、盛大に20周年、遠く海外からも参加」
昭和49年入校、53年卒業の第22期生会が休眠状態から活動を再開いたしましたので報告申し上げます。

第22期生は平成10年3月をもって、防大卒業20周年となりました。この節目に、長らく組織としては休眠状態にありました期生会を組織も新たに活性化させることを計画し、平成10年3月1日に東京信濃町の明治記念館におきまして、卒業20周年記念行事を開催いたしました。記念行事にはご多忙中にもかかわらず、小西同窓会長、当時の左近充元訓練部長、山田元学生課長のご臨席を賜り、22期生100名以上が参集して約2時間半にわたり期生会の再出発と懇親を深めることができました。

記念行事は期生会会則及び会長等役員承認を行う総会でスタートいたしました。新会則は東京地区の会員有志による準備委員会によって案文の作成、全国の会員に対する意見聴取と事前承認アンケートが実施され、退職時まで見据えた会則として総会参加者の同意を得て採択されました。同時に新期生会会長に陸自の宮下寿広君(現陸幹校戦略教官室勤務)を選出するとともに陸海空から副会長及

び総務幹事等役員が承認され、新体制として活動を開始いたしました。

ご来賓をお迎えしての懇親会においては、小西同窓会長から「防大同窓会の現状と22期生に対する期待」のお言葉を賜りました。左近充元訓練部長及び山田元学生課長からは学生当時を思い出すような「開校祭におけるパラシュート降下の冷や汗話」や「学生隊解散」の当時そのままの号令までいただき、気分は一挙に学生時代へと遡りました。さらに、ご都合でご参加頂けませんでした猪木元学校長からは心温まる祝電を、また、海外勤務者からも是非帰国後にも総会・懇親会を開くようにという電報までいただきました。

私ども22期生は文化系入校の第一期でもあり、10数名の防衛駐在官を出し、読売新聞で親子三代のバラシュート降下と報道された高木雅弘君、長野オリンピックのブルーインパルス飛行を扱った日本テレビのドキュメンタリー番組で一躍有名になったブルー飛行隊長（当時）の阿部英彦君等、何かと話題を提供している期でもあります。懇親会では久々の出会いに現役もOBもあちこちで近況を語り合い、瞬く間に時間が過ぎてゆきました。

この総会・懇親会のために、商社勤務者が遠くロスアンジェルスから、小学校の教師が福岡から、県警の警察官が岩手からそれぞれ駆けつけ、現役では鹿児島部隊からも参加するなど、遠方からの出席を得て、新生22期生会のスタートを飾ることができました。最後に、小西同窓会長を輪の中に取り込み、全員で道遠歌を合唱、名残を惜しみながら次回の再会を約束して散会いたしました。

26期生会 ◆会長 一屋代 律夫

26期生のみなさんお元気ですか、私たちが防大を卒業してから早くも16年の年月が経ち

ました。若い若いと思いつながら気がついたら私たちが防大生の頃の大隊指導官と同年代となつています。防大の入校生が現在46期生、あと数年後には同期生の子弟が防大二世として入校することも夢ではないと思います。私たちは、我が国の防衛のみならず将来我々に続く後輩のために自衛隊を革新すべく多くの同期生が主要なポストにつき日夜奮闘努力しています。関東近郊では、大隊会・班会と年に数回同期生が集まっていますが、集まる度に思い出話で夜遅くまで語りあっています。再来年（2000年）はオリンピックの年であり全国26期生会の年です。多くの同期生が参加し、近況また将来について大いに語りましょう。

防大も2002年に50周年となります。昨年同期生全員にお願いしたように後輩に我々先輩として軌跡を残すためのモニメントを同窓会として寄贈することになりました。多くの同期生が本趣旨に賛同していただくことをお願いいたします。

28期生会 ◆会長 一田浦 正人

28期生の近況につきまして、前回の期生会より詳しく報告していますので、今回は少々趣向を変えて同期生座談会での話題を紹介いたします。9月都内某所に28期生数名が集い、いつしか「防大の部屋編成」の話題となりました。ご案内の通り、防大の部屋編成は平成9年に同期の2人部屋から各学年混在の4人部屋へ移行し、10年度以降各学年1名からなる縦割りの4人部屋（但し、前期は4年・3年・2年・2年と4年・3年・1年・1年の2タイプ）に変更されました。我々28

期生は、1学年時縦割りの4人部屋を、2学年以降同期の4人部屋を経験したため、両方の制度の利点・欠点ともに知り尽くしている数少ない期です。結論から述べれば、今回の変更はまさに改善であると全員の意見が一致

しました。同期による同部屋の制度は馴れ合いムードによる切磋琢磨の不足が一番の問題点であったように思います。28期のように同期が4人であればある程度閉止めがきいたように（そうでない部屋もありましたが）思いますが、同期が2人であれば切磋琢磨はかなり難しかったのではないのでしょうか。63年に同期の2人部屋編成に移行した時に、「防大の学生会が単なる学生会になってしまった」と嘆いていた同期の言葉を思い出します。縦割りの4人部屋編成は、リーダーシップ、協調性、切磋琢磨といった団体生活を通じて修得すべき資質の体得ができたと思います。ここで懸念されるのがいわゆる「上級生による下級生の私物化」ですが、相手の人格を尊重する事が人間関係を構築するうえでの大前提であることを認識させさえすれば、そう大きな問題にならないと思います。第一、縦割りの4人部屋編成にはそれ以上のメリットがあるのです。座談会に出席した者の中には、約20年経過した今でも当時の上級生と部屋会を開いている者も多く、良好な人間関係構築の重要性がうかがえました。防大の学生会は自己を磨く道場と認識し、縦割りの4人部屋編成のもと安心して修行に励んでほしい。これが、座談会出席者の総意でした。28期生の皆さんは、この便りを読まれた先輩等から

「〇〇君にリーダーシップや協調性が欠落している理由がわかった」といわれることがないようにそれぞれの部署で精進していただきたいと思えます。

30期生会 ◆会長 一堀切 光彦

1 30期同期生諸君、ご無沙汰しております。皆さんお元気ですか？

同期諸君は、陸・海・空又は社会と場所は違えども今や働き盛りで多忙を極める毎日をご過ごしていることと思います。陸自の話をして恐縮ですが、先日仕事で陸幕を訪れた

際、陸幕勤務をしている同期から名簿を見せてもらい同期の検町勤務者がBのみで36名（B・U・I併せて50名）もいることを知り驚きました。陸幕内を歩くとあちこちの部屋に同期がいて、机上のパソコンと向かい合って忙しく仕事をやる真面目なN君、電話であたふたと調整をするT君、ストレス太りかぶくぶく肥えてしまったT君、学生時代に悪魔のように下級生をいじめていたF君はなぜか人事を扱う仕事に就いていて何か企んでいるようだし、学生の頃よく物をなくしていたN君がなぜか装備部で物の管理をしていたり、相変わらずO君は鼻くそをほじっていましたし、陸幕という激務の中、忙しい中にも学生時代の個性が散見され、懐かしさ、かつ頼もしく思いました。

我々も防大を卒業してよりは12年、たまに会う同期の顔にお互い「おじさんになつたな」と痛感させられる今日この頃ですが、気持ちだけはいつでも小原台の頃のように若々しくかつ澆潤としていたいものです。ね。

2 期生会名簿整理上のお願い（総括が角君から山口芳正君に変わりました）
名簿は年賀状に間に合うように毎年11月末に発送の予定です。同期諸君は、期生会名簿整理上、次の点にご協力下さい。
*（全員必ず）同期生各位は、住所・連絡先の移動があった際、必ず自分の所属していた教務班の名簿係に毎年11月初旬までに住所変更の有無を「一報下さい」。

教務班の係りの連絡先が不明の場合は、直接山口まで「一報下さい」は結構です。
*（各班の名簿係）各班の名簿担当者には各班分をとりまとめ、毎年11月15日までに総括（山口まで）「一報下さい」。第1希望・Fax、第2希望・郵送
連絡先：山口芳正 〒179-0081

東京都練馬区北町4-1-1 第1普通
2中隊長

Fax・内線8-311-548、

外線03-3933-1161(内548)

電話・内線8-311-522、外線0

3-3933-1161(内522)

*尚、練馬・朝霞地区の同期の方々におか
れましては、11月中旬以降名簿郵送のた
めの作業のお手伝いをよろしくお願いい
たします

34期生会

◆会長 佐藤 信知

34期生の皆様、全国各地でご活躍中のこと
と思います

さて、我々34期も、陸上は指揮幕僚課程、
海上は幹部中級課程、航空は幹部普通課程等
において幹部候補生学校卒業以来、久しぶり
に同期生が集う機会を得ております。特に日
黒の幹部学校においては、新課程の入校時や、
受験や研修等のために同期生が来校する際
は、陸海空の壁を越えて同期生会が催されて
いると聞いております

かくいう私も、幹部普通課程を8月に卒業
し、母校である防衛大学校に指導教官として
戻って参りました。卒業10周年を2年後に控
えたこの時期に、防大に戻ってきたことにも、
いささかの運命を感じつつ、後輩指導、校友
会の顧問と共に、期生会にも力を注いで行く
所存であります。とは言うものの期生会は、
私一人の力では運営はできません。10周年記
念行事を含め、プロジェクト・チームを編成
し、運営していこうと思っておりますので、ご
協力をお願いします

なお、私は34中隊で指導教官をしておりま
すので、気軽に連絡を下さい

地区だより

北海道地域支部

支部長 樺山 貢

北海道地域支部は、昨年9月に地域支部と
しては、全国に先駆けて発足した

○当地域支部の特色としては、会員一、〇〇

○名の内OBは一〇〇名、現役が九〇〇名

と圧倒的に現役が多い。また支部も31個支
部で、道央圏(札幌・千歳・恵庭等)を主

体にて、広域に分散している。

○平成10年度は、各地区支部の基盤整備・充

実に努め、地域支部としての事業は実施し
ていない。

○平成11年度の事業に関しては、7月に「理

事会」を実施し、11月には「代議員会」を

開き、「地域支部会員としての会費徴収」

「防大創立50周年記念事業への募金への協

力」また「防大人校予定者への激励」等の

「実のある事業」を計画する予定である。

西部地域支部

事務局長 道下 富士雄

平成8年防大同窓会発足に伴い、平成9年
10月3日防大同窓会西部地域支部(九州防大
同窓会と通称)(会長・一期織田稔夫)とし
て退職会員約600名、現職会員約1、100名
の勢力で活動を開始しております

会の運営において、ややもすると事務局の
一方的な考えにおちいらないように各期から
1名の代表を幹事として事務局に配置し、ま

た2ヶ月に一度夕食会を幹事会として開き会

の活動の審議、防大や同窓生等の情報交換及

び親睦を図っており、会の運営になくはな

らない存在になっております。

また、毎年開く総会後の懇親会の計画・実
施の担当は、各期持ち回りとなっております
が、ちなみに来年度は退職会員5期と20年後
輩の現職25期の担当するようにしています

これにより退職会員と現職会員との連携の強
化を図るとともに同窓会への参加意識が高ま
るものと期待しております

さて、会の運営において名簿の作成は欠か
せない事業ですが、毎年追加・訂正を行いま
年は、現職会員の名簿は全員に送付すること
とし(5年に一度)、現職の名簿は同窓会事
務局・駐屯地・基地及び主要な部隊等に配布
しているところです

また、九州各県の同窓会設立の動きがあり、
熊本・大分・宮崎の各県ですすでに同窓会を
設立し活動を開始しておりますことも併せて
報告し、九州防大同窓会の近況報告といたし
たいと存じます

広島地区支部

事務局 上手 義孝

防衛大学広島地域同窓会は、防衛大学の
地域同窓会としては嚆矢となる同窓会を平成
9年7月5日設立し、丸1年余りになります

防衛大学校広島地域同窓会は、防衛大学校
の下部組織として活動し、母校の発展及び社
会活動に寄与することであり、広島地域同窓
会の結果が一つのパワーとなり地域社会に貢
献すると共に同窓生の相互扶助を強力に推進
すること等を目標にしており、会員は、会長

松浦有郎氏(防大1期 陸上)他広島・山
口・岡山県等で活躍している130名余りのOB
と部隊等に勤務している現役自衛官で構成し
ております

年間の活動は、定期総会の他に春・秋季行
事としてそれぞれ登山、テニス、ゴルフを家
族を含めて実施するよう計画しております

平成9年度定期
総会では、総会に
さきがけて松本三
郎防衛大学校長の
講演と海上自衛隊
呉地方総監部の協
力による艦艇見学
を実施し、OB、
現役及び家族を含
めて約100名が参加
しました。

平成10年度春季
行事として春爛漫の4月に江田島の古鷹山登
山と海上自衛隊第1術科学校の参考館見学、
五月晴れの5月にテニス、新緑の6月にゴル
フを開催しました。

参加者は、家族を含めて山登りは30名余り、
テニスは10名余り、ゴルフは、10組40名、延
べ80名余りが参加し、会員・家族及びOB・
現役相互の親睦、情報交換等を行い旧交を温
めました

なお、ゴルフコンペの成績は、優勝15期
(陸) 中田院也氏、第2位7期(海) 北山正
文氏、第3位海自幹部候補生学校校長12期(海)

勝山拓氏でした。

秋季行事として10月18日(日)海田駐屯地
でテニスを、10月25日(日)瀬野川GCでゴ
ルフを、11月7日(土)に三段峡ハイキング
を計画しております。

この他地域同窓会として、自衛隊の部隊又
は機関等が実施する観桜会、創立記念行事及
び展示訓練等に積極的に参加しております

「防衛大学校事務局連絡先」
〒730-0014 広島市中区上鞆町2-1

43 (財) 自衛隊援護協会広島支部(退職自衛官
無料職業紹介所)

総務8期(海) 上手 義孝 TEL: FAX
082-223-6900



平成9年度 防衛大学校同窓会決算報告

防衛大学校同窓会会計監事
平成10年11月17日(単位:円)

収入		支出		平成9年度予算使用実績(細部)			
予算	実績	予算	実績	科目	予算	実績	
	広告代 630,00			事業部	総会費(会場設営費)	1,800,000	1,492,641
	預貯金利息 1,433,775				(通信費)	1,400,000	86,721
	預貯金利息 1,416,000	事業部	7,000,000		(印刷費)	100,000	
	積立金からの繰入 4,682,000	事業部	4,085,202		期生会支援費(45期生会助成)	100,000	100,000
		総務部	4,860,000		(42期生会助成)	100,000	100,000
		広報部	3,850,000		(各期生会助成)	500,000	50,000
		人事部	572,000		校友会対外活動助成費	1,000,000	272,420
		経理部	8,800,000		開校記念祭助成費	2,000,000	1,983,420
		委員会	3,200,000		小計	7,000,000	4,085,202
		小計	28,282,000		総務部	顕彰碑献花費	600,000
		実績	21,124,151	慶弔費(供花)		350,000	193,933
		繰次年度 繰越年度 実績	3,886,424	職員定年退職者記念費		100,000	130,641
		収入計	28,282,000	事務通信費		20,000	8,675
		支出計	28,282,000	複写機賃貸料		120,000	118,656
				電話・FAX維持費		870,000	366,273
				本部移転費		1,800,000	1,366,599
				小原台事務局運営費		300,000	2,000
				評議委員会運営費		700,000	502,455
				小計		4,860,000	2,998,696
				広報部	機関紙発行費(作成)	800,000	
					(発送)	3,000,000	2,634,250
					事務通信費	50,000	40,883
				人事部	小計	3,850,000	2,675,133
					事務機器費(パソコン等)	562,000	630,022
					事務通信費	10,000	111,905
				経理部	小計	572,000	741,927
					会長運営費	500,000	200,000
					事務員雇用費	2,700,000	2,550,000
					本部事務局室賃貸料	2,400,000	2,397,049
					事務費	200,000	376,034
					通信費	200,000	77,975
					交通費	300,000	357,980
					会議費	500,000	270,556
				予備費	2,000,000	1,193,179	
				委員会	小計	8,800,000	7,422,773
					委員会活動費(事業推進委員会)	0	0
					(50周年記念事業委員会)	3,200,000	3,200,420
				小計	3,200,000	3,200,420	
				合計	28,282,000	21,124,151	



ビーチ・キングエア 350

ジェットプロップの最高峰。

追従を許さない多用途性、高い信頼性、卓越した堅牢性を誇るキングエア・シリーズは世界各国の政府機関、軍、エアライン及びトップ企業でVIP輸送、偵察、飛行検査、捜索救難、訓練、患者移送やビジネス機として運航。




伊藤忠アビエーション株式会社
航空機営業部

〒107-0061 東京都港区北青山1丁目2-3
TEL: (03) 5414-8674 FAX: (03) 5414-8700


平成11年度 防衛大学校同窓会予算

防衛大学校同窓会経理部
平成10年12月8日(単位:円)

	項 目	11年度予算	10年度予算	10年度比
収 入	会 費 (43期生)	22,560,000	21,063,000	1,497,000
	預貯金利息	1,190,000	1,377,000	- 187,000
	広 告 代	未定	未定	
	同窓会名簿売上金	0	6,000,000	- 6,000,000
	積立金からの繰入	0	4,940,000	- 4,940,000
	収 入 計	23,750,000	33,380,000	- 9,630,000
支 出	事業計画の推進 (現職・OB会員交流)	1,000,000	500,000	500,000
	(同窓会主催親睦交流会開催)	500,000	300,000	200,000
	(相談窓口の設置)	50,000	200,000	- 150,000
	(講演会の実施)	0	500,000	- 500,000
	(会員の出版支援)	50,000	200,000	- 150,000
	(外国留学生OBとの連携)	300,000	100,000	200,000
	(全国的な情報網の整備)	50,000	200,000	- 150,000
	総 会 費	2,500,000	3,300,000	- 800,000
	期生会支援費 (47期生会助成)	100,000	100,000	0
	(43期生会助成)	100,000	100,000	0
	校友会対外活動助成費	1,000,000	1,000,000	0
	開校記念祭助成金	2,000,000	2,000,000	0
	顕彰碑献花費	600,000	600,000	0
	慶 弔 費 (供花、弔電)	350,000	350,000	0
	職員定年退職者記念品費	100,000	100,000	0
	複写機賃貸料	120,000	120,000	0
	電話・FAX維持費	500,000	720,000	- 220,000
	小原台事務局運営費	100,000	300,000	- 200,000
	代議員会運営費	700,000	700,000	0
	各期生会連絡調整費	300,000	500,000	- 200,000
	機関紙発行費	3,300,000	3,800,000	- 500,000
	同窓会名簿発行費 (作成費)	0	6,000,000	- 6,000,000
	(発送費)	0	1,350,000	- 1,350,000
	(郵便番号変更費)	0	50,000	- 50,000
	(発行案内広告費)	0	240,000	- 240,000
	同窓会名簿維持費	200,000	0	200,000
	会長運営費	500,000	500,000	0
	事務員雇用費	2,000,000	2,000,000	0
	本部事務局室賃貸料	2,750,000	2,750,000	0
	事 務 費	350,000	250,000	100,000
	通 信 費	150,000	250,000	- 100,000
	交 通 費	400,000	300,000	100,000
会 議 費	500,000	500,000	0	
予 備 費	1,680,000	2,000,000	- 320,000	
50周年記念事業委員会	1,500,000	1,500,000	0	
支 出 計	23,750,000	33,380,000	- 9,630,000	



Your Partner for Success

 Mitsubishi Corporation
三菱商事

Head Office: 6-3, Marunouchi 2-chome, Chiyoda-ku, Tokyo 100-8086, Japan

防衛大学校同窓会機関誌

小原台だより



Vol. 7

平成12年1月1日
発行 防衛大学校同窓会

編集 熊倉惟晴 今泉一郎 吉田伸
印刷 (株)エイコープリント



ご挨拶



防衛大学校同窓会会長

小西 岑生

新年おめでとう御座います。平成12年の正月を、国内、国外の各地で任務を遂行しつつ迎えられた方も大勢居られたでしょうが、今年も又平和の内に越年出来たことを皆さんと共に慶びたいと思います。昨年春に第43期生が加わって、防大同窓会の会員は1万9千名を超えました。本部の運営は、9期生までのボランティア活動によって順調に推進されており、今年度も幾つかの新しい取り組みが行われました。現役を退いたクラスを対象とする親睦交流の事業も、5月のテニス大会、10月のゴルフ大会、11月の囲碁大会と一応当初構想した事業が出そろって、来年度以降の更なる充実発展が期待されます。また、4月には防大の短艇競技に同窓会チームが参加、学生との親睦を深めました。

支部については、6月に海外で始めてのシンガポール支部が発足し、11月には関西支部の設立を見る等少しずつ組織の充実が図られております。

同窓会の事業が、今のところ本部を中心に行われているために、地方の同窓生に恩恵が少ないとのご不満を耳にしており、本部としても今後支部の充実発展にいかなる支援が必要かつ可能かを長期的な展望の下に検討することが急務と考えております。

母校との交流については、本年からホームカミングデー

1を防大の卒業式に合わせて行うことで計画を進めつつあり、3月の44期生の卒業式には1期生が母校に集うこととなります。現在最も若い同窓生のホームカミングデーが巡ってくるのは、43年後と気の遠くなるほど先の話になりますが、丁度クラスの全員が65才となる年となりますので、一つの節目に当たると考えております。

母校も、創立50周年に向けて施設の更新が精力的に進められており、本館も取り壊されて風景が一変しました。2002年までには大方の建設工事も終わって新しい偉容を目にすることになります。同窓会もこれを目標に何らかの貢献をなすべく、ご案内のとおり委員会を中心に募金活動を行って参りましたが、今年で終了することとしておりますので未済の方のご協力を重ねてお願いいたします。

さて、平成8年以来、志方副会長に支えられて同窓会の運営に微力を尽くして参りましたが、この度代議員会において副会長共々交代を承認して頂きました。この間、各理事を始め本部事務局員等大勢の方に献身的なご支援を賜りましたことに心から感謝申し上げます。

西暦2000年は、20世紀を締めくくる年であると同時に21世紀に向っての助走の年でもあります。同窓生の皆さんにとって意義のある幸多き年となりますよう祈念申しあげます。

目次

会長挨拶	1
平成10年度防大同窓会講演会における 学校長講演	1
防大の現状と将来	5
防衛大学の改編	5
国際防衛学セミナーの現状	6
学生隊がめざすもの	7
平成11年度校友会活動状況	7
防大50周年同窓会記念事業	8
同窓会行事	10
第3回期別対抗ゴルフ大会	10
第2回期別対抗テニス大会	10
第1回期別対抗囲碁大会	11
防大カッター競技会	11
防大同窓会中期事業計画の現状	12
同窓生アラカルト	13
絵画のすすめ	13
バリ島の過し方	13
抵抗（50歳を迎えて）	14
期生会だより	15
支部だより	19
平成12年度防衛大学同窓会予算	21
平成10年度防衛大学同窓会決算報告	21
事務局からのお知らせ	22

世紀の国際社会に船出しなければ、いつまでたつても今のような優柔不断な事になっていくのではないかと非常に心配されます。それを離脱するにはどうすればよいか、非常に難しいのですが、私はやはりもう一度歴史をみんなが読み直して見る必要がある。歴史教育の議論も色々行われていますが、それと別の意味で予断や偏見に偏ることなく、日本はもとより古今東西の世界の歴史、国家興亡の歴史をもう少し教育の中に取り込んで、人類の歩んできた歴史というものをしっかりと勉強してみる。その中から、守るべき国への誇りとか自覚とか使命感といったようなことが生まれてくるのではないかと思います。そこをどうするかというものが非常に曖昧になり、欠けている状態が続いているように思います。そういう意味で防大の学生教育においても、この部分を重視していかなくてはならないと思っております。

第2に、考えなくてはならない問題は、一言でいうと、「防大は士官学校か大学か」という問いにどう答えるかです。学生の中からよく出る質問です。この場合の士官学校という意味は厳しい訓練、規律ということが前提にあつての意味で、学生の中には防大生らしからぬ規律の緩みというものが目につくことに對する批判が強く出ておりますし、それを無くすためにはもっと厳しく、士官学校らしくを強調したいという意味での質問になるわけですが、それも確かに一理ある、そしてそのことは考慮しなくてはならないのですが、一方それが行き過ぎますと、それは大学教育といひましようか、レベルの高い教育からの逃避につながりかねない。防大は決して下級の自衛隊幹部を作る養成学校ではない。防大の目指すべきは高級幹部の養成学校である。そのためにはやはりレベルの高い知識とか知恵とかあるいは教養というものを身につけてこそ、より大きな高いところから物事を判断できるようになることも忘れてはならない。その意味でも大学教育的な部分も重視しなくてはならない。模範解答ではないのですが、だいたい防大内で議論しまして、私はこんなふう

に答えることにしています。「防大は士官学校か大学かという単純な二者択一の上になり立つものではない。将来幹部自衛官となるものを育成するという設立目的から、防大はいわゆる士官学校としての性格特色を有し、規律正しい学生生活、全員参加の校友会活動、初歩的な訓練、基礎的防衛学教育などを進じ、優れた幹部自衛官としての素養を与えることを重視している。しかしこれと同時に、広い視野を開き、科学的な思考力を養い、豊かな人間性を培うことを目的に防大は他の一般一流大学とか、他国の士官学校に負けぬ高度の大学教育を与えることを、今一つの柱として等しく重視している。防大は昭和28年の建学以来、常にこの二重の重要な性格を学生各人が一身の上に一体化して人格化することを目的としてきた。それこそが「真の紳士・淑女にして真の武人」の育成という言葉の目指すものであり、学生諸君には不断の努力を期待している。「100年兵を養うはただ一日のため」という言葉もございませぬ。またダートマスにある英国の海軍士官学校には「心に遅れをとつていけないか、腕に力は抜けないか」の有名な碑文もございませぬ。またサンシールのフランスの士官学校へ行くと、そこで「ドゴール大統領の卒業式に述べた有名な言葉、要約しますと「士官たるべきものは長い戦争に耐える勇氣と共に長い平和に耐える勇氣が必要である」という言葉も残っています。我々防大には吉田総理の「治にいて乱を忘れず」という石碑も残っております。いつ起こりいつ役に立つかわからない危機に備えて、常に心を緩めず兵を養い、力を蓄えておくことはなかなか難しいのですが、それが我々に課されている、君たちに課されている課題なのだと言っているわけですが、将来国防のプロフェッショナル、幹部自衛官となることを志す学生諸君が、今防大で学ぶという至難の任務を果たすことにつき、まず一つは揺るぎない使命感を確立し、いかなる状態においてもそれを成し遂げる責任感を持ち、そしていかなる事態にも耐えうる不屈の心身を鍛えることにあると思ひます。これが一つの大きな柱ですが、同時に大学の目的は、学校教育法にあるように国家社会に必要な人材、専門的職業人や社

会の指導者の育成にあたる。そのため大学では広い知識と深い専門を身につけ、知的、道徳的、応用的能力の修得が要求されるわけです。知識を得ると共にそれを応用して問題を発見し、解決する知恵を体得することが大学教育の重要な目的に成っているのです。こうした知識と知恵のある人を教養の高い人といふことは呼ぶわけですが、その教養の高い人は、正しいことと間違つていふこと、正邪の区別を高いレベルで判断できる人です。そして正しいと考へたことを実行できる人です。それはまた幹部自衛官にとつての必須の条件になると思ひます。幹部自衛官に必要な条件といふのは、こういう意味での高い教養である。そしてそういう基礎を養うということから、防衛大学校は外国のどの士官学校にも負けない高いレベルの大学教育を行っているといふと思ひます。

これが私の考へる防大における教育の理念であり、西洋流に言へば「文智のアテネ精神」であり、「勇武のスパルタ精神」の統合を図る全人教育でなくてはならぬ。勇武に偏りすぎていけないし、文智に偏りすぎて問題である。やはりバランスのとれたレベルの高い文武両道の人間を作る。それが我々に課されたものであるといふふうに思ひます。このことを学生にも強調しています。どちらかに逃げるなど、苦しいけれど、この二つの文武両道を身につけることに意味があるのだと言ふことを強調することに努力している状況でございます。

少し別の視点から言ひますと、「知育・徳育・体育」という明治以来の日本の三育のものの見方、これは「知・徳・体」のバランスのとれた人間を作ることが目的なのですが、防大の学生に対して私は「徳・知・体」、「徳育・知育・体育」と順番を替えて強調しております。徳育をまず確立しろと。そこが基本になって、「知育・体育」なのだ。今特にその徳育面が、防大に入ってくる以前の段階で、非常に欠けている状況なのです。非常に豊かな時代の学生になつていふ。富の意味で非常に豊かになつていふ時代は育つた子、ほとんどはバブル期に生まれ育つた子供たちが18歳になつてきていふわけで、学生たちは素

質的には極めて高いものを本来持つて入つて来ている。競争も非常に激しいですし、いい成績の学生がやつて来る。しかも入つてからみんな一生懸命やつていふと言ひますけれども、入つてくる段階での徳育面の欠如が顕著です。それから4年間の教育の中で十分に徳育面で成長したとは思ひえない学生も散見します。その意味でとりわけ徳育を重視した教育をやつていふわけですが、教育というのは家庭教育あり、学校教育あり、そして社会、あるいはマスコミ教育というものがある。福沢諭吉は家庭教育こそまず一番重要なものであると、書いていふのですが、彼の一文を読みますと「人間社会は家庭の集まりたるものなり。社会において悪事を働くものは、この家庭という学校の卒業生なり。社会の有様を改革せんと欲せば、先ずその学校を改革すべきなり。」というのがあります。やはり家庭教育に先ず始まる。家庭に将来悪に育つ芽があると言ふことを彼は強調しています。その通りだと思ひます。また学校教育も今非常に問題です。第2次世界大戦後の学校教育には大きな欠陥があつたと言ひざるを得ない。自由平等という非常に崇高な価値、人類にとって価値あるものが正確に把握されないままに日本に導入されてきた。自由にしても、福沢諭吉に「自由は不自由の中にあり」という有名な一文がありますけれども、人間が社会の中に住んでいふと、その社会のいろんな規則に従わなければならない。その縛られた中で一杯自由に生きる、その不自由の中の自由が人間の持つ自由の意味だということを説いておられますが、今の日本では他に対する意識を非常に欠いた自由、自分勝手な自由というのがかなり一般的になつてきています。平等についても平等は出発点において平等、しかし努力せざる者は差をつけられていくのはやむを得ない。これが世界共通する平等についての理解ですが、結果において平等にしよふという発想がかなり日本にはあるのです。そういう意味での自由平等のはき違へというもの、学校教育の考え方の中にあつたために、非常に混乱した状態になつていふと言ひなければならぬと思ひます。ましてや社会、マスコミの教育という部分については、マス

コミの影響力が極めて大きくなってきている今の状況下で、青少年の教育にとって非常に悪い影響を与える場面も多くなってきている。ともかく国を挙げて教育について考え直すことが要求されていると思います。防大に入ってくる学生もそういう状況の中で入ってくるわけですから、これをどう鍛え直していくのかというのが学校に課せられた課題です。今打ち出しているスローガンは、1学年の「模倣実践」、2学年の「切磋琢磨」、3学年の「自主自律」、4学年の「率先垂範」を各学年の基調となる目標に掲げています。1学年が入ってくるときは、一般の大学に行く学生とそう多して変わらない学生が入ってくるわけですから、4人部屋になるともうそれで文句を言う学生も出てきませんし、朝早く起きる、一緒の風呂に入る、それもなかなか出来ない学生が入ってくるわけです。先輩たちに何か言われるとすぐそんなのおかしいよというふうを感じる。生活環境がそれまでと180度変わっているわけですから、当然起こる訳なのですが、文句を言わずに精一杯やってみてごらんとするのが模倣実践、2学年は、今度は切磋琢磨です。ともかく仲間にも負けるなをモットーに一生懸命やってみるといって考え方が切磋琢磨。3学年はもう防大生活の後半に入る。そこでは自分で物事のいいか悪いか考え判断する、自ら正しいと判断したことを実行してみよう。やったことについては自分で責任をとる。これが自主自律の基本になっている考え方ですが、これを3学年で身につけてもらいたい。そして4学年は今までやってきたことの総決算だから先輩としてこれまで身につけてきたことを後輩にやってみせろ。口で言うのではなくて態度で先ずやってみせろ。そうして後輩を引っ張っていくのが率先垂範だ。リーダーシップというものを作り上げる一番の基本は、やはりこの模倣実践から率先垂範に至るまでのこの流れを修得することにある。それぞれ幹候校に行き、また各自衛隊に進めば、模倣実践から率先垂範への課程はくり返しあると思いますが、その基本を防大時代に身につけなくてはならない、というふうに言っているわけだ。

を10年ほどやりましたが、私が見ていて一番心配したのは、小隊指導教官になって来る若い指導教官、2尉クラスが多いのでしょうか、この2人部屋で育った人たちにどうも自信がない。学生を指導するのにもいろいろとためらいがある人がいる。それがやはり学生たちの影響を与えるということがしばしば見られるようになりまして、4人部屋を決断しました。やはり同じ部屋に4学年、3学年、2学年、1学年がいると、1学年は2学年、あるいは3学年、4学年の様子を見ながらそれぞれ上の人たちの様子を見ながら、そこで模倣実践をしながらかんていく。4学年は特に後輩に見られているわけですから、しつかりしなくてはいかんという意識が自ら育ちます。1学年は1学年、2学年は2学年、3学年は3学年、4学年は4学年の2人部屋の時代は同期ということでもどういっても気がゆるんで、人間形成の上で危ない状況があるのです。ゆとりという意味では確かにゆとりですけれども、学生生活生活というのは防大にとっては普通の教育、あるいは訓練でやれないいろいろなものとりわけ人間関係をそこで学ぶ一番大切なところですから、少しきつくなるけれども、時代に逆行すると言われなければいけません。2人部屋を4人部屋に戻しました。徐々に効果が出て来つつあります。私はこれは成功であったと、将来は必ずプラスになるだろうというふうに思っております。

女子学生が入ってきて、もう8年くらいになるのでしょうか。よく頑張つてやっております。7パーセントから8パーセント位の比率で入学しておりますし、学生舎では4階に入れているということがあります。女子学生、男子学生と一緒にいるということ、当初から考えられていたように、男女関係の心配は常につきまといっているのですが、試行錯誤しながらもう10年近くなりますので、だんだん安定してきつ々あると思います。

留学生については今日はちょっと時間がなくなりましたので、省略させていただきます。昔も同じでしょうけれども、時々不届き者が出て処分もされておりますが、学生たちは今の同世代の他の大学の若者たちと比べると、はるかに真剣に生きているということ

間違いありません。そのことは自信を持って言えると思います。その意味では、先輩諸氏にもご安心いただいたいと思います。また私自身そういう学生を教える立場にあるということ、非常に誇りに思っています。

最後に15分ほど時間がありますので、ここで少し50周年についてお話ししたいと思います。2002年の秋頃を50周年記念式典の時期として考えておりますが、それを前にして今幾つかの改革を行っております。まず一つはソフト面、今ある学校のいろいろな教育組織がやや時代遅れになっている。私は学校作りというものを長く文部省関連で携わってきたものですから、今から目指すべき方向はどこかということについてわりと議論してきた経験があります。防大にまいりまして、私のやる仕事として、新しい21世紀に向けて防大の教育改革をやっておきたいと思っております。幹事始め皆さん方の協力を得ながらやっております。「良き伝統は革新の連続の上に成り立つ」と言われます。伝統の良きものは残さなくてはならないが、伝統の中にも新しい時代、社会にふさわしくない部分も出てくる。その部分は勇気を持って常に革新を続けていく。その革新の連続の上に本当の意味での良い伝統が育つと思えます。そういう意味での教育組織上の改革、一つは総合安全保障研究所が2年前にできました。その卒業生が今日の午後の総合安全保障研究所の委員会において、1期生21名全員が無事卒業も立派に仕上げ、卒業資格を得ました。この21名にはいろいろな年齢の人たちがおりましたが、成果は十分に上げられたと思います。将来各自衛隊でどのように使っていくか、期待しております。

この総合安全保障研究所の外に、今内局に改革したいとして検討をお願いしていることがたくさんあります。

その一つは社会科学系の学科で、今国際関係学科と管理学科がございますけれども、このうちの管理学科の改革です。これは管理学科が当初20数年前にできたときに、同じ管理でもビジネス関係の研究者は日本でも育っていたが、ノンプロフィット、すなわち公共の

3番目は理工学の研究科後期課程の設立をお願いしております。防衛大学校は今、理工学は修士課程まであり、今日の会議で65名の修士課程の学生が卒業することが決まりました。防大にはドクターコースが必要のまじうかの議論を随分しました。しかし考えてみますと、自衛隊にとって必要な理工学系の研究で、日本の他の大学でできない分野というものがありません。一般大学ではやらない、防大でなければやれないもの、しかも自衛隊にとっては必要である。そういう分野を中心にごく少数ですけれども、ドクターコースを作ることこの分野の研究を中心に行いたいということ申請をしております。ドクターコースを作ることは先生たちにとっても大変な誇りになりますし、学生たちにとってもいい影響を与えると考えております。

もう一つ理工学研究科の本科の改変も今お願いしております。これは今14専攻ございませすけれども、やや細分化された方がいいが専門化され過ぎているというところがある。防衛大学校における理工学の意味は、もう少し基礎的な部分に力点を置いた構成が望ましいのではないだろうか。そういう意味で、余り細分化しないで専攻をまとめていくのではないかと。そして自衛隊にとって必要なもの、例えば海洋関係の工学系の科目の分野が防大には非常に少ない。四囲を海にとり囲まれており、また海上自衛隊があるのにもかかわらず、その研究の分野が非常に少ないというの問題です。さらに宇宙、あるいは衛星関係という非常に新しい、しかも必要な分野で存在しないものをこれからどう補っていくのか、勇気を持ってスクラップアンドビルドをやらなさいといけません。副校長、教務部長にも大変努力をしてもらって今やっているとあります。防衛学もここ3、4年来随分検討していただいていたかなり組織的・体系的に整ってまいりました。「軍事学入門」という本が、来月から再来月には出版されると思います。是非読んでいただきたいと思っております。

時間が非常に少なくなりましたが、記念事業のハード面の計画が進んでおります。小原台の中心部分約3千坪で、本館から人文

館にいたる部分についての改革、これは防衛庁において承認され工事が始まっています。全体で数年がかりですが、大変厳しい財政事情の中で140億ほどの予算をいただくことになりました。50メートルほどの高さの給水塔をごろんかと思いましたが、お借りになった方もおられるかと思いましたが、それに始まりまして、今人文学館が今年の秋には完成します。それから本館が取り壊されまして、2年後に完成します。そして現在多目的ホールと呼んでおりますが、卒業式、入校式、大講演会、音楽会、国際会議等ができる多目的ホールがその後に建設され、2002年の式典までに完成されると思っております。そこには皆様方の御協力により、平山郁夫画伯のステンドグラスも入ると伺っております。そのあと新図書館、情報館もできます。資料館は私もいろんな国の士官学校を訪ねて見てきましたが、やはり伝統のあるところはみんな立派な資料館を持つております。その資料館に行ってみると、その学校の歴史がわかる、その国の軍の歴史がわかる。また別の意味ではその卒業生たちにとっての心の故郷と呼ぶものにもなりうる。そういう資料館が防大にも欲しいと思っております。今の図書館が新しくできて新図書館になりますと、そのあいた一部を資料館に使いたい。皆さんがおこしになったときはソファくらいそこにあつて、お茶が飲めるくらいにしたいと思っております。このようにしておそらくあと4、5年経ちますと、小原台の中央部分は装いを一新したものになる。かなり風格もあり、外国からの訪問者にも誇れるものができるのではないかとご期待いただきたいと思っております。

最後に同窓会について少し考えるところを申し上げます。私は先程紹介いただきましたように慶応におりましたが、その時に非常にいい制度だと思いましたが、昭和30年頃に、卒業式に卒業25年のOBと卒業50年のOBを招く制度を作った。それ以来ずっと25年卒と50年卒が卒業式に招かれてくる。その年の卒業生の背後で大先輩たちが見守ってくれている。伝統の絆がしっかりと受け継がれていく、非常に暖かい雰囲気がある。今防大の卒業式には家族が来ており

ますし、大変数は多いのですが、しかしちょっと寂しいのは、OBをお呼びする制度がないということを感じております。私は是非2002年の新ホールが完成したときには、卒業生の背後に何年度OBになるかはわかりませんが最初はお呼びして、背後で見守っていたら、そういう制度を作りたいというふうにご感じております。これから少し議論していきたいと思っております。卒業式、入校式、あるいは秋の開校祭にはOBの方々を招待して来ていただき、後輩たちを見守っていただく。そういう制度を会長を始め皆様方と相談して実現したいと思っております。そういうことを考えていることを申し上げます。そういうことしたいと思っておりますが、日頃防衛大学校に対して、とりわけ今回は50周年の募金活動等で大変に御協力頂いていることに、学校を代表して心から感謝を申し上げて私の話を終えたいと思っております。御静聴ありがとうございました。



当社は、防衛庁との契約に基づき、多連装ロケットシステム (MLRS) 自走発射機のライセンス生産に取り組んでいます。

NISSAN 日産自動車株式会社 宇宙航空事業部

人は空に夢を見る。

三菱重工業株式会社

航空機・特車事業本部

東京都千代田区丸の内2-5-1 〒100-8315 ☎東京 (03) 3212-3111

防大の現状と将来

卒業生は今年3月に卒業した本科43期生を含めて18、912名(うち外国人留学生119名)、理工学研究科は36期生を含めて2、113名(うち外国人留学生12名)であり、総合安全保障研究科の第1期生21名(うち民間人2名)がはじめて卒業しました。すでに御存知のように、1992年から本科および理工学研究科卒業生にはそれぞれ学士、修士の学位が文部省(学位授与機構)から授与されるようになり、一般大学にくらべて遜色のない環境づくりが着実に進んでおります。とくにお知らせしたいことは、政令を改正して民間に門戸を開放したことであり、現在は理工学研究科3名、安全保障研究科2名(すでに2名卒業)が正

防衛大学校本科の改編 理工学研究科後期課程 の設置 および

防衛大学校教務部長 金井 喜美雄
本校は今年で創立以来47年目となり、2002年(ワールドサッカーの年)には創立50周年を迎え、そのための記念事業が学校、同窓会ともに具体的に進んでいます。古い給水塔に代わって50mのシンボルタワーがすでに完成してキャンパスのシンボルの一つになっており、新しい人文科学館は12月に完成しました。本館と旧図書館はすでに撤去され、数年後には様相を新たにした小原台に変身することでしょう。

規の学生として入校しています。このような受託教育は本校の歴史にとって画期的なこととして世間一般から防大が客観的に評価される絶好の場を提供したことになり、我々の真価が問われることになりました。

本科教育課程は1989年にそれまでの理工学専攻の6専門区分を14学科に改編し、同時に人文・社会科学専攻2専門区分を2学科とし、合わせて16学科となって現在にいたり、約10年が経過しました。その間大学進学率が上昇するとともに高等学校教育の内容も多様化し大学新入生の基礎学力の格差が拡大する傾向にあり、基礎教育の充実が一般大学では大きな課題になっております。一般大学では学部では基礎および教養教育を重視し、専門教育は主として大学院で実行し、基礎的内容の教育をより重視する傾向になっております。本校においても10年前の理工学専攻の改編は専門教育の内容がやや専門化・細分化されている面があり、専門教育の基礎的内容を重視する最近の大学教育の在り方に必ずしも適応しなくなっているという反省に立って改編を検討して参りました。

自衛隊の任務の多様化、学問の国際化、総合化などを考慮して理工学専攻14学科を新たに11学科に改編し、人文・社会科学専攻については人間文化学科を新設して3学科に改編し、全体で14学科体制とする計画です。体育、外国語などを含めた現在の16教室を廃止し、教育学目的や学問的共通性に基づいて区分した6学群(総合教育学群、人文社会科学群、応用科学学群、電気情報学群、システム工学群、防衛学教育学群)に改編し、各学群に学群長を置いて群内(3〜4学科で構成)における調整権限・管理監督権をもつ管理職として遇することを計画しています。これによって基礎教育に責任をもって担当できる体制を整備し、学科・科目間の協力体制を確立し、学校運営の円滑化を図っています。なお、基礎教育を責任もって担当する総合教育学

群、防衛学の教育は防衛学教育学群、専門教育はそれぞれの専門にに応じた4学群が担当するように組織化されています。(表1)。

一方、後期課程(ドクターコース)の設置については、益々高度化、ハイテク化する防衛装備、技術に対応し、これら分野における自立した研究開発能力を有する人材を育成するため、専門的かつ高度な研究能力およびその基礎となる幅広い学識を習得させることを目標に表2のような専攻および研究分野を展開する計画です。火薬、暗号あるいはミサイル、海洋音響など国内大学院においてあまり取り上げられない研究分野を中心とし、防衛庁のニーズにあった高度な教育を目指しています。

以上、改編および新設について概略を紹介しましたが、これらの事項は予算要求の段階でして、本科改編は平成12年4月、後期課程は平成13年4月のスタートを目指して大学が一丸となって努力しておりますので諸先輩方の御支援のほどよろしくお願いいたします。



防衛大学校教育研究組織

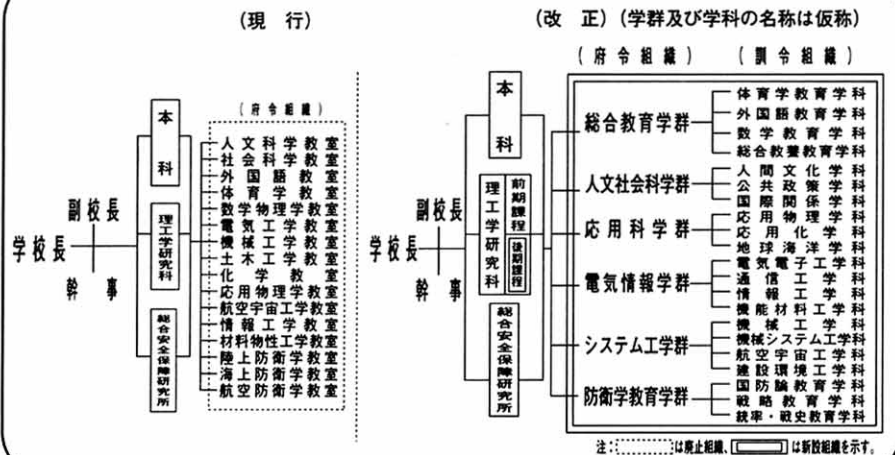


表 1

後期課程

専攻	研究分野
電子情報工学系専攻	エレクトロニクス工学 情報通信工学 情報知能メディア学 海洋音響環境工学
装備・基盤工学系専攻	装備システム工学 航空飛翔システム 装備生産工学 防災工学
物質・基礎科学系専攻	高エネルギー・物質工学 先端機能材料工学 基礎物理学 地球宇宙科学

表 2

国際防衛学

セミナーの現状

航空防衛学教室 小川 修 15期 (空)

1. 国際防衛学セミナー (ISMS)

防衛大学校で最も特徴的な学問分野である防衛学に関するセミナー(国際防衛学セミナー・International Seminar for Military Science)を、平成7年度から毎年本校において開催しております。本セミナーへは、防衛大学校と同様に士官候補生の教育を実施している諸外国の軍学校、防衛学の研究を行っている諸外国の軍学校ならびにわが国の一般大学等から、教官・研究員の参加を得て開催しております。

このセミナーの主な目的は、防衛大学校における防衛学の教育・研究の質的レベルアップを図るとともに参加各国における防衛学の教育・研究の充実発展に寄与することや、アジア・太平洋地域における相互信頼の醸成に寄与すること、さらに参加国の我が国に対する理解を深めることとあります。このセミナーにはオーストラリア、カナダ、中国、インド、インドネシア、韓国、マレーシア、モンゴル、フィリピン、ロシア、シンガポール、タイ、米大佐または中佐クラスの教官・研究員を招聘し、国内の一般大学からも関連講座の先生を3〜4名招聘しております。本校からは陸・海・空の防衛学教室を中心として、社会科学教室、理工学教室等からの教官が参加しております。参加国との調整は半年前から開始しますが、各国のお国柄が如実に表れます。オーストラリア、カナダ、アメリカ等の国々は早々と参加者が決定し、調整もEメールを使いスムーズに実

施できますが、開催直前までなかなか参加者が決まらない国もあり、運営を担当する者にとっては頭の痛い状況であります。今回(第5回)の参加は、モンゴルが初参加のほか、中国が第1回の参加以来4年ぶりの参加となりました。今回は直前になって中国が参加を決め、また、インドが印パ紛争により不参加となるなど国際情勢の影響をもろに受けるかたちとなりました。このような状況の中、オーストラリア統合士官学校副校長、シンガポール国軍士官学校長の外、各軍学校の学部長・部長クラスの教官・研究員の参加を得ることができました。

2. セミナーの準備

このセミナーの準備・運営には防衛学教室教官が中心になって組織した実行委員会があたつております。

第1回から第4回までのセミナーは3月に実施してまいりました。この3月から4月にかけての1ヶ月間には、防衛学セミナー、士官候補生会議、卒業式、入学式等の学校行事が目白押しに続いており、じつくりとセミナーに取り組み雰囲気ありませんでした。このため、第5回は7月の夏季定期訓練期間中に開催時期を変更し、行事の分散を図りました。しかしながら本年(平成11年)は3月に第4回セミナーを、7月に第5回セミナーを開催することとなり、その間の準備期間は実質3ヶ月余りとなったため、第4回と第5回の準備実行は、実行部会長(第4回海防主任、第5回空防主任)・事務局長を除き、ほぼ同一のメンバーで同時並行的に準備・運営を実施しました。

3. 研究会

セミナーは、研究会と研修を実施しております。研究会は各国参加者及び防大参加者による発表・討議・聴講者との質疑応答等を英語により実施します。今までの研究会のテーマとして、第1回は「士官学校教育」について、第2回は、「統率教育」について、第3回は「自然科学、工学及び軍事技術

の教育」について、第4回は「戦史教育」について、第5回は「戦略教育」について討議しました。この研究会は各国参加者の合意を得て結論を出すというものではなく、各国が士官学校教育にいかに取り組んでいるかを紹介し、各国においてより良い士官候補生教育がなされるように討議するものであります。

4. 日本文化等の研修

外国からの参加者は幹部候補生学校と史跡等を研修します。我が国の士官候補生教育は、防衛大学校と各自衛隊の幹部候補生学校において行われていることを研修することによって、日本における士官候補生教育の流れを理解できるようにしております。今回は、江田島の海上自衛隊幹部候補生学校や教育参考館を研修しました。あわせて、史跡研修として広島において原爆記念資料館を研修しました。その他、伝統文化の研修として鎌倉における神社・仏閣の研修、現代日本社会の研修として、横須賀市民ボランティア家庭へのホームステイ・ピジット、ならびに東京都内の研修等を実施し、日本文化の理解を深めるようにしました。横須賀市は外国人との交流を活発に行っており、本セミナー参加者のホームステイ・ピジット、鎌倉研修のガイド、同伴婦人への茶道、着物の着付け等の日本文化紹介には多くの市民ボランティアの協力を得ております。

5. 戦略教育の現状と将来

第5回セミナーは、「21世紀に求められる士官像V・戦略教育の現状と将来」をテーマに発表・討議を行いました。討議においては、「今後の戦略教育においては、知識と情報、グローバル化、科学技術の発展、複雑化によって社会が変化し、それに応じて戦略教育も、自国の利益ばかりでなく平和維持活動、民族や宗教紛争の抑止、麻薬や不法移民の防止といった観点からの戦略も必要であり、軍の役割も多様化

している」と認識する必要があるとの意見が出されました。また、各国から参加者の上級将校の教育機関からの参加もあり、戦略教育の体系と戦略教育を段階的に捉えることの重要性が認識される等戦略教育の理念及び戦略教育の方法論について活発な討議が実施されました。

また、各国の参加者からも、討議の内容が有意義であり、自国の士官学校教育に反映したいとの意見もありました。さらに、女性の軍人が30%に達する国からは、今後のセミナーで女性に關しても意見交換を率直に語られるとともに活発に討議がなされ、各国もそれぞれの国情と教育環境の中で21世紀における士官像や士官候補生教育をいかにすべきか模索中であることを感じ取ることができました。

たしかな技術と実績

●「橘花」に搭載された日本最初のジェットエンジン(F20)

開発年代:1945年
全長:2,700mm
重量:475kg
推力:450kg

●日本航空機工業の発展に大きな役割を果たした軸置型エンジン(J3)

開発年代:1950年
全長:2,050mm
重量:405kg
推力:1,200kg

●中等練習機T-4向けに量産している国産標準エンジン(F3)

開発年代:1975年
全長:1,347mm
重量:340kg
推力:1,850kg

日本の夢を追い続けた半世紀です。 IHI 石川島播磨重工業株式会社 航空宇宙事業部
〒100-8132 東京都千代田区大手町2-2-1 大手町ビル 電話 03-3241-5333

学生隊がめざすもの

防衛大学校本科第44期
学生隊学生長 阿部 直樹

建校以来、防衛大学校学生隊は
自主自律のもと厳しい集団生活を
運営し、学生相互の資質向上を目
指してきた。これは学生隊という
組織を編成するにあたっての原点
であり、今も昔も変わらざるとこ
ろである。

ではなぜ1、600名もの若者
が、大学時代という人生の貴重な
時期に、ここ小原台で厳格な集団
生活を送らねばならないのか。私
の解釈によれば、学生隊がめざす
ものとは、人間社会の基礎ともい
うべき、人と人の「信頼関係」を学
び、それを構築するところにある、
ということである。

同じ部屋の下で寝起きし、同じ
釜の飯を食い、同じ風呂に入り、
文字どおり、「裸のつきあい」を4年
間継続していくことで、見ず知ら
ずだった学生の間にもゆるぎない
信頼関係が構築されるだろう。時
に困難に直面したとしても、そん
な信頼関係で結ばれた仲間の協力
が、大きな力となることを知るだ
ろう。

防大時代に培われた友情が、思
わぬところで実を結んだという話
を、本校卒業の先輩方から伺う機

会が多い。気心の知れた仲間達が
全国各地に散らばって、組織の中
核を担っていくわけである。たと
え遠く離れた部隊であっても、こ
ういった個人レベルの信頼関係が
きつかけとなつて、部隊レベルで
の連携が図られるかもしれない。
事務的調整が難なく進行してしま
うかもしれない。

ただし我々は、信頼関係構築の
重要性を知ると同時にまたその道
のりの険しさをも知るべきである。
学生隊生活は毎日が摩擦、軋轢の
連続であるし、学生の無関心は信
頼醸成の大きな障害にもなってい
る。ここ学生隊においては全学生
が、そういった人間関係の難しさ、
苦悩と絶望を、何らかのかたちで
経験することになるだろう。しか
しこのような経験こそ、人間組織
というものを知るに不可欠であり、
苦悩や絶望が大きければ大きいほ
ど、それを乗り越えて勝ち得た信
頼関係というものが、真に価値あ
るものとなるのである。

我々は、結束の強い組織こそが
最高の仕事をしようということを知
っている。同じ志を持つ仲間との
信頼関係が、将来の国家防衛に
大きく寄与するであろうことを信
じている。学生隊が、これからも
以上の理念を志向する組織であつ
てほしいと願つてやまない。

平成11年度運動系校友会活動結果及び部員数状況

校友会名	成 績	部員数		校友会名	成 績	部員数	
		男子	女子			男子	女子
応援団リーダー部	各種大会における応援	11		グライダー部	全日本新人競技会6位入賞	23	3
短艇委員会	全日本カッター競技大会優勝	60		ソフトテニス	秋季関東学生リーグ戦9部5位	26	
	関東地区新人戦優勝			ボクシング部	関東大学トーナメント戦	35	1
バスケットボール	男子 秋季関東リーグ戦5部昇格	44	11	レスリング部	ライトウェルター級決勝進出		
	女子 神奈川リーグ戦2部8位			東日本学生リーグ戦2部6位	25		
柔道部	神奈川県学生春季大会3位	30	1	ボート部	東日本大学選手権大会8位	20	1
	女子中量級優勝 秋山			フィールドホッケー部	男子 秋季関東学生リーグ戦1部6位	41	16
ラグビー	秋季関東大学リーグ戦3部4位	128		女子 秋季関東学生リーグ戦4部2位			
サッカー	神奈川県リーグ戦1部6位	41		奥多摩、芦ノ湖、薬師寺、立山等	19		
剣道	関東理工系選手権大会準優勝	43	4	パラシュート部	日本選手権大会団体7位	11	3
空手道部	全国国公立選手権大会優勝	59	2	個人Jr.の部優勝 藤井			
	神奈川県選手権大会優勝			神奈川7大学リーグ戦5位	44		
バレーボール部	男子 秋季関東リーグ戦4部優勝	24	9	ベストナイン：捕手 藤田、1塁手 末吉、左翼手 森竹			
	女子 秋季関東リーグ戦11部昇格			合気道部	全日本学生演武会出場	40	2
卓球部	秋季関東学生リーグ戦5部2位	17	2	体操部	東日本理工系大学選手権大会3位	25	3
陸上競技	関東理工系学生競技大会	54	7	弓道部	秋季南関東リーグ戦	35	7
	男子団体優勝 女子団体2位			男子 1部4位 女子 2部4位			
硬式庭球部	男子 関東理工科リーグ戦6部昇格	44	9	少林寺拳法部	全国日本学生大会団体演武4位	29	3
	女子 関東理工科リーグ戦9部昇格			組演武段外の部優勝 高木・高橋			
硬式野球部	秋季神奈川リーグ戦2部3位	36	3	フェンシング部	関東学生リーグ エベ3部4位	29	
射撃部	秋季関東学生ライフル選手権大会9位	22	2	ウェイトリフティング部	全日本学生新人選手権大会	22	
山岳部	箱ヶ岳、谷川岳、立川連峰等登山	9	4	56kg級優勝 甘利			
水泳(競泳)	東部国公立大会5位	26		神奈川社会人選手権大会			
水泳(水球)	関東学生リーグ戦2部3位(全国大会出場)	22		69Kg級優勝 留			
ハンドボール	関東学生リーグ戦5部優勝	23		東日本学生選手権大会Cリーグ準優勝	16		
アメリカンフットボール	関東学生リーグ戦2部2位 1部昇格	90		全国学生選手権大会Cクラス準優勝			
ヨット(小型)	関東学生選手権秋季大会	21	2	自動車部	関東学生対抗軽自動車6時間耐久レース8位入賞	14	
	470級15位 スナイプ級7位			バトミントン部	男子 秋季関東大学リーグ戦5部昇格	15	8
ヨット(クルーザー)	黒船ヨットレース15位	17		女子 秋季関東大学リーグ戦5部3位			
銃剣道	全国日本選手権大会	33	5	自衛隊全国大会3位	15	4	
	男子 銃剣道3位 短剣道優勝			横須賀ライオンズパレード。横須賀港祭り	23	5	
	女子 短剣道優勝			自衛隊音楽祭り	47	4	

1 全般

平成11年は、現役会員を重点とした募金活動を継続するとともに、防大の施設整備状況及び募金状況を考慮しながら、既に構想の固まったステンドグラス以外の各記念事業について具体化のための検討を行ってきました。今後とも記念事業に関する同窓生各位の積極的な提案を期待しております。

2 記念事業の進捗状況

《概定予算額》

(1) モニュメント《総額約5千万円》

記念事業の中核であるステンドグラス《約3千万円》は、平成13年末完成見込みの多目的講堂の正面に設置予定であり、その原画作成については既に平山画伯の内諾を得ていますが、ステンドグラス制作工房を決定のうえ、画伯に対して正式に依頼する予定です。制作工房については、昨年は実績のある日本交通文化協会から申し出があった旨報告しましたが、その後の同協会の状況を勘案し複数の工房の中から選定することが適当と判断しました。選定の条件としては、平山画伯の原画に基づくステンドグラス制作に最適な技術力を有し、かつ記念事業の趣旨を体して従来見積もってきた予算額の範囲内で制作可能であることを考えており、具体的な選定は清家先生

に協力を依頼しています。ステンドグラスの製作及び設置には、素材の国外からの輸入並びに多目的講堂の建設に当る防大当局、設計事務所、建設企業との調整が必要であり、それらの時間的所要を考慮して平成11年度中に工房の選定及び平山画伯への正式依頼を行う予定にしております。

中央広場に設置を計画している彫刻像《約2千万円》は、同広場は記念行事が予定される平成14年秋に完成の予定であり、その地下部分となる図書・情報館の建設工事が平成12年度着手の計画となったため、防大当局と調整のうえ平成12年内に彫刻像の設置場所、大きさ、モチーフ等を該定し、平成13年度に制作を依頼する予定であります。

(2) 顕彰室、資料館等《総額2千5百万円》

防大においては図書・情報館の完成後平成15年開館を目標として現用の図書館を資料館として整備し、その中に顕彰室を設けることが決定されました。これに対する同窓会の協力事業としては、次の事項を計画しております。

ア 顕彰室《総額約1千5百万円》

顕彰室に同窓生殉職者の刻名碑等を寄贈するとともに、遺族や関係者が落ち着いた雰囲気の中で殉職者を偲ぶことができるような空間が作られるよう防大との協議を進める予定です。

イ 資料館

防大は既に資料の収集作業を開始し

ており、同窓会としても資料館の展示資料の検討及び収集について防大当局と調整しつづつ必要な協力を行う予定であり、今後同窓生の御協力をお願い致します。

ウ 卒業生コーナーの整備

資料館内に卒業生コーナーを設けて卒業生の活躍状況、卒業生からのメッセージ等を展示することを防大当局と調整しております。このコーナーで使用するソファ等の調度品を同窓会が寄贈する予定です。

エ 50年史等の編纂

昨年報告したとおり、50年史の正史は防大が平成15年刊行の予定で作成しその中には同窓会関係記事は含まれないことになりました。一方、防大当局は平成14年に小史《縮刷版》及び英文版を発行する構想も有しており、これに対する同窓会の協力要領について今後防大と調整を進めることとしております。

オ 記念アルバム

同窓会による記念アルバムの作成については、その必要性及び可能性を早急に検討のうえ、平成13年度代議員会に諮る予定にしております。

(3) 記念行事等《総額約4千5百万円》

防大の公式記念行事は平成14年秋に行われることになると考えられますが、同窓会としては公式行事の時期及び内容との調整を図りながら、平成12年度内に同窓会記念行事の構想を固め、平成13年度の代議員会において計画の承諾を得たうえ、実行に取り組み予定にしております。現在検討している事項は、記念講演会又はパネルディスカッション及び講

演録の同窓生への配付、記念マーチの作成・贈与等がありますが、同窓生各位の御意見及び要望の掲示をお願い致します。

また、募金協力者に対しては小記念品を贈呈するとともに、その名簿を作成し閲覧可能な形で防大校内に保存することとしております。この記念品についての具体的な御意見を歓迎致します。

以上準備状況については、平成11年12月7日の代議員会に報告し、その了承を得ました。

3 募金状況

平成11年6月には防大同窓会から全国の各駐屯地・基地司令等に対して募金協力の依頼文書を送付しました。昨年11月末現在の拠金実績は、合計約6千5百名、約9千2百万円であり、この1年間に約9百名の同窓生から約1千万円の浄財が寄せられ、拠金率は40%弱に至りました。拠金の細部は別紙のとおりであり、1・2・3・4・6・7・14・15期の各期の拠金率は、50%を超えております。

募金期間は平成10年度の代議員会において平成13年3月末までとすることが決定されており、本年6月頃には募金に際じられていない同窓生各位に対して個別に最後の拠金依頼を行うこととしております。なにとぞ記念事業の趣旨に御賛同のうえ、目標額1億2千万円の達成に御協力賜りますようお願い申し上げます。

防大五十周年記念事業募金状況

(平成11年11月末日 現在)

期	対象者数	拠 金 者 数				合計	拠 金 率	拠 金 額 (×1000円)
		陸	海	空				
1	299	141	57	32	230	76.9	5,040	
2	308	143	43	42	228	74.0	4,870	
3	447	135	51	88	274	61.3	6,020	
4	419	139	46	71	256	61.1	5,260	
5	491	114	45	65	224	45.6	4,700	
6	427	107	56	85	248	58.1	5,140	
7	419	108	52	50	210	50.1	4,455	
8	414	90	42	52	184	44.4	3,410	
9	424	92	56	52	200	47.2	4,410	
10	442	101	45	59	205	46.4	3,090	
11	462	93	53	51	197	42.6	2,700	
12	417	91	47	54	192	46.0	2,470	
13	403	77	39	56	172	42.7	2,000	
14	461	104	62	84	250	54.2	2,732	
15	401	113	50	50	213	53.1	2,295	
16	402	93	32	57	182	45.3	2,010	
17	455	96	52	55	203	44.6	2,140	
18	399	75	54	46	175	43.9	1,870	
19	413	94	34	54	182	44.1	1,940	
20	356	67	34	36	137	38.5	1,415	
21	465	74	52	35	161	34.6	1,850	
22	431	70	56	37	163	37.8	1,704	
23	378	62	32	34	128	33.9	1,405	
24	417	52	44	29	125	30.0	1,270	
25	374	66	43	30	139	37.2	1,440	
26	469	71	62	41	174	37.1	1,785	
27	364	40	63	20	123	33.8	1,360	
28	403	53	43	26	122	30.3	1,270	
29	414	54	37	28	119	28.7	1,220	
30	369	32	30	22	84	22.8	920	
31	396	41	27	30	98	24.7	1,000	
32	334	39	19	29	87	26.0	890	
33	378	44	25	27	96	25.4	970	
34	354	50	17	41	108	30.5	1,102	
35	439	41	22	21	84	19.1	891	
36	340	29	15	27	71	20.9	730	
37	366	27	13	24	64	17.5	630	
38	425	27	15	26	68	16.0	630	
39	338	39	14	25	78	23.1	750	
40	376	25	10	44	79	21.0	760	
41	403	90	41	26	157	39.0	1,385	
42	407	10	0	2	12	2.9	120	
合計	16,899	3,109	1,630	1,763	6,502	38.5	92,049	

備考	1. 拠金総額	92,748,058円	4. 募金への御協力お願い致します
	(1) 真駒内同窓会団体	400,000円	(1口 1万、現役1口、OB2口基準、分割でも可)
	(2) 勝田支部団体	185,058円	郵便局振替口座 口座番号 00150-6-352140
	(3) 未確認拠金者及び会費等振替	114,000円	加入者名 防大五十周年記念事業委員会
	2. 利息	471,887円	
	3. 総額	93,219,945円	



第3回防大同窓会期別対抗ゴルフ大会

昨年と同じくグロス6期、ネット8期

平成11年10月25日、千葉県山武郡の山田ゴルフ倶楽部に於いて、第3回同窓会期別対抗ゴルフ大会が、1期から9期まで各期陸海空混成で10名の合計90名参加で催された。

競技は、6ホールを同時にスタートし、昼食は9ホール目を通して時点で倶楽部が準備した昼食弁当を一齐に摂るといふショット・ガン形式で行われた。中には、キャディーさんを囲んでティー・グラウンドの野外喫食を楽しむパーティーもあった。

順位成績は、昨年同様各期上位7名のグロス及びネット(ダブル・ペリア)合計で決定されます。成績は別表の通りで、グロス優勝が6期生、ネット優勝が8期生となり昨年と同じでした。来年の第4回は10期生の参加予定され、総勢100名の大所帯コンベンとなり益々の盛会が予想される。



優勝した6期チームの代表と会長

グロス(ストローク) ネット(ストローク)

1位	6期生	558
2位	8期生	562
3位	5期生	582
4位	9期生	587
5位	7期生	588
6位	2期生	598
7位	4期生	602
8位	3期生	608
9位	1期生	629

1位	8期生	511.4
2位	5期生	512.4
3位	6期生	514.8
4位	4期生	515.2
5位	3期生	520.4
6位	1期生	521.8
7位	7期生	524.4
8位	9期生	525.6
9位	2期生	528.6



優勝した7期チーム

第2回防大同窓会期別対抗テニス大会

7期生が連覇、8期最下位脱出準優勝、1期健闘及ばず無念の最下位

第2回防大同窓会テニス大会が、5月30日快晴の母校防大のテニスコートで開催された。

大会は、開会に先立ち、現役防大生とOBとのエキシビジョンマッチが実施されましたが、親子以上の年齢差をもつものでもないOBの華麗なプレーが出たと思えば、若き学生の猛烈なスマッシュに一步も動けずといった試合に、拍手やら笑いやらの友好の実をあげるに相応しい風景であった。0920から、開会式が実施され大会会長(小西同窓会長)から、「同窓会の縦の絆を深めると共に、試合では思いやりの気持ちを持って戦うように」との挨拶のち、昨年優勝の7期生から優勝杯が返還され、大会が開始された。

今回から、9期生が初めて参加し、1チームダブルス5組(10名)で予選リーグ、順位決定リーグが実施された。

昨年と一部試合方法を変更し、まず3チームずつのブロックに別れてリーグ戦を行った後、各ブロックの1、2、3位同志が順位決定リーグ戦をして順位を決定することとされた。

この結果、優勝は昨年に引き続いて7期、準優勝8期、3位5期となった。

2位、3位ブロックにおいても、それぞれ年齢のみでは計り知れない好試合の連続であったが、結果的には、4位9期、5位2期、6位6期、7位4期、8位3期、9位1期で大会の幕は閉じられた。

試合終了後、学生会館で実施された懇親会には、金井副校長(2期 北野)、教務部長(4期 金井)及び本大会のため休日を返上して支援に当たってくれた、防大テニス部の学生諸君を交え、和気藹々の内に反省会が行われ、各期の代表から今大会の反省と来年への抱負がスピーチされたが、さすがに1期、2期生からは、今後の試合実施方法について、年齢を考慮した提案も出された。

成績表

	8期	7期	5期	順位	
8期		x(1-4)	○(3-2)	2	1位ブロック
7期	○(4-1)		○(4-1)	1	
5期	x(4-1)	x(1-4)		3	
	9期	2期	6期	順位	
9期		○(4-1)	○(4-1)	4	2位ブロック
2期	x(1-4)		○(5-0)	5	
6期	x(1-4)	x(0-5)		6	
	3期	1期	4期	順位	
3期		○(3-2)	x(1-4)	8	3位ブロック
1期	x(2-3)		x(0-5)	9	
4期	○(4-1)	○(5-0)		7	

蓄積された技術で信頼にお応えします

ダイキン工業株式会社

本社/大阪市北区中崎西2丁目4番12号 梅田センタービル
TEL 06-373-4312
東京/東京都新宿区西新宿2丁目6番1号 新宿住友ビル
TEL 03-3344-8058

■特機事業部営業品目

各種弾薬・信管 誘導弾用弾頭・信管 航空機部品

■その他営業品目

ルームエアコン 業務用エアコン 各種冷凍・冷蔵機器
各種フッ素 化学製品 各種油圧機器装置 各種メカトロニクス
製品 アーク溶接ロボット等

第1回防大同窓会 期別対抗囲碁大会 開催

— 初代チャンピオンは6期生 —

同窓会が主催する各期対抗の親睦・交流行事としてはゴルフ、テニスに次いで第三番目の囲碁大会が、1期から9期のなかから選りすぐられた精鋭棋手72名（各期8名）が一堂に会し、11月21日、日本棋院会館において盛大に開催された。

開会式において、高比競技委員長から「勝負にこだわらず、親睦交流の趣旨をたいし、囲碁を一日楽しんでほしい」との同窓会長からのメッセージが伝達された後、競技実施上の諸注意があり、熱戦の火蓋が切られて落とした。

競技は事前になく抽選により決定された対戦表にもとずき、オール互い先、4回戦で実施され、トーナルの勝手で順位が決定された。一回戦は7勝の4期と7期が一歩リード、次いで6勝の3期と6期が続ぎ、8期（0勝）、9期（1勝）は出遅れた。

二回戦、三回戦で順調に勝星を伸ばした6期が先行し、僅差で7期、4期、3期が続ぎ、1期、2期も尻上がりに調子を上げ、四回戦を迎えた。最終戦は上位陣が低迷するなか、下位の8期（7勝）、9期（6勝）が若さで物を言わせ健闘し順位をあげたが、6期がそれまでのリードを守って逃げ切り見事優勝した。途中から一名欠の5期は序盤の勢いを守りきれず、1期と最下位を分け合う結果となった。

終了後直ちに表彰式及び懇親会が行われ、防大同窓会関西支部発会式からトンボ帰りで参加の小西会長から優勝の6期代表に優勝カップが授与され、また4戦全勝の佐藤（2期）、宮本（3期）、青戸（4期）、田中（5期）、

壺内、佐古井（6期）、伊東、松井（7期）の紹介があり健闘を讃えられた。

引き続き懇親会が行われ、朝からの熱戦とは打って変わって和気藹々の中で行われたが、「今回の結果は抽選の運不運や、手合い時計不慣れ等が大きく必ずしも実力順ではない。一回戦と四回戦の結果を見れば誰でも判る、来年こそは優勝するぞ」と氣勢をあげる期もあった。いずれにしても担当者全員初めてであり不安いっぱいでも大会に臨んだが、無事終了し安堵の胸をなでおろした。

成績表

期	勝ち数				合計	順位
	1回戦	2回戦	3回戦	4回戦		
1	2	3	2	5	12	8
2	2	3	5	4	14	6
3	6	5	3	3	17	4
4	7	4	4	3	18	3
5	5	3	3	1	12	8
6	6	6	7	4	23	1
7	7	4	6	3	20	2
8	0	4	2	7	13	7
9	1	4	4	6	15	5



防大校内カッター 競技へのOB艇 チームの参加

4月23日（金）恒例の校内カッター大会が行われ、男子学生の予選レース後の第4レースで、11時10分から女子艇2隻と黒部旗山岬間の1000メートルで覇を競った。

当日は低気圧が関東南岸を東進中でありましたが海上模様は北東の風5メートル、うねりはわずかであり、まずまずのコンディションでした。

スタートは、曳航索を放すと同時に左に回頭しつつの発進となったが、女子艇がうねりに翻弄されたついでに、OBクルーは左、右がびったり同期して左右ともそれぞれ一本のオールに見える程の息の合った力強いオールの捌きにより直ぐさまリードを奪い、以降10艇身、20艇身と水を明け、最後は30艇身の差をつけてゴールインした。小西同窓会長他海自現職が横須賀警備隊所属の交通艇上から力強い応援を実施したが、あまりの大きさの勝利に、同窓会長からさすがに昔取った杓柄でたいしたものだ、OBクルーの年齢の上限を引き上げるか、男子学生クルーのレースに参加するか、等々のコメントがあり、OB艇世話人としてはこれは今後大変なことになるそうだなと考

えながらの楽しいレース観戦であった。

その後走水荘に場所を移して、昼食会・祝勝会を実施したが何とか女子クルーに負けない



戦斗終了2位はまだこない。ヤレヤレ

で一同胸を撫で下ろしたというレース後の正直な感想でした。

短艇委員会OB会発足

7月2日 横須賀平安閣において、防大12期生が幹事となって短艇委員会OB会総会が開催され、会則の審議を行い、全会一致で承認された。続いて役員選出に移り、名誉会長に寺内顕正氏（2期海）、会長に向井正興氏（7期海）、事務局長に牧山元氏（7期海）を選出して、会員相互の連携と親睦を図るとともに防大短艇委員会に対する後援活動を目的として、防大短艇委員会OB会が正式に発足し、名称を「黒部会」とした。

総会に引き続いて、懇親会が行われ、2期生から41期生までのOBが青春時代にかえて楽しい思い出に浸った。席上、短艇委員会顧問吉田氏（37期海、防大指導教官）から、5月22日に呉で行われた全日本カッター競技大会において防大クルーが3年ぶりに優勝したときの活躍ぶりが紹介され、会員一同から大いに祝福された。

また、各期代表によるエピソードの紹介など、終始盛会のうちに来年の再会と防大短艇委員会OB会の連続優勝を祈念して散会した。



防大同窓会 中期事業計画の現状

同窓会本部が小原台から東京都内に移転して、市ヶ谷に居を構えた概ね3年前に同窓会中期事業計画を策定し、第5回「小原台だより」に掲載し、既にその概要を同窓会員に報告しました。その後、同窓会本部で検討すると共に母校の防衛大学校本部並びに同窓会員の皆様の御協力を得て逐次実行に移し事業化してきたところです。

中期事業計画項目

ホームカミングデーの実施
現職・OB会員交流（地域支部の設置）
親睦交流会の開催（ゴルフ・テニス・囲碁等）
相談窓口の設置
講演会の実施
会員の出版への支援
外国留学生OBとの連携強化
全国的な情報網の整備

1 ホームカミングデーの実施

松本防大校長はじめ学校本部の皆様との御支援御協力を得て、平成12年3月19日(日)に母校で行われる第44期生の卒業式に併せて1期生のホームカミングデーを母校と同窓会の共催で実施する。来年度は2期生を予定しています。

2 外国留学生OBとの連携強化

(1) 昨年に引き続き開校祭に合せ防大を卒業した留学生を母校に招待する
学校行事に連携し同窓会長主催の歓迎夕食会を11月12日実施した。
本年はタイ3名、シンガポール1名でした。



シンガポール支部の発足式

(2) 「防衛大学校卒業留学生との連携推進委員会」を4期生の佐藤幸憲委員長以下6名の委員もって設置し、現地との諸調整の結果、平成11年6月13日にシンガポール支部を発足した。現地在任の川上奉昭氏（8期・陸）に支部長を委嘱し、31名の卒業留学生を核として活動を開始している。なお発足式は同日現地シンガポールで実施し、小西同窓会長及び渡辺委員（10期・海）が日本から列席し、厳粛且つ友好裏に執り行われた。

3 講演会の実施

同窓会主催の第1回講演会を平成11年3月10日同窓会総会に合せ母校の現在の校長である松本三郎先生を講師にお迎えして実施した。（細部本文参照）今後も同窓会総会に合せ同窓会員各位の関心のある事項を演題とした講演会を実施していきます。

4 現職・OB会員交流

中部地域支部の一つの核として関西支部が牧次郎（2期・海）支部長のもと約200名が参加し平成11年11月20日に発足した。小西同窓会長出席のもと同日に大阪で発足式が盛大に執り行われた。

これ地域支部等は4地域支部、4地区支部、1直轄支部体制になったが、いまだ最大の地域である関東甲信越地区が組織化されず、また広島、関西地区支部の上部組織である中部地域支部の設置等まだまだ多くの課題を残している。

5 情報網の整備

情報化時代に合わせ、本年度末迄に同窓会本部事務局にEメールアドレスを取得する予定です。各地域支部等との通信連絡も手軽に早く出来るようになる。

6 親睦交流会の開催

本年度囲碁大会を開催し、当初計画したゴルフ、テニス、囲碁大会の開催も軌道にのりました。今後はこれらを充実・発展させていきたい。

以上、同窓会中期事業計画の主要事業の進捗状況を御報告致しましたが今後益々の同窓会員各位の御協力御支援並びに御意見をお願い申し上げます。

国の安全と平和に 寄与する技術

素材とメカトロニクスの総合企業
JSW 日本製鋼所

東京・日比谷三井ビル ☎3501-6111(大代表)
ホームページ : <http://www.jsw.co.jp>



きっと、もっと、すてきな夢を咲かせます。



HITACHI

人間らしさをキーワードに、
いま私たちの生活や社会には、
本当の豊かさやゆとりが求められています。
日立は、どこまでも人にやさしい先端技術を通じて、
そんな暮らしの夢をひとつひとつ花開かせ、
豊かな実りをお届けします。

◎株式会社 日立製作所 公共営業本部 〒101-8010 東京都千代田区神田駿河台四丁目6番地 電話(03)3258-1111(大代)

同窓生 アラカルト

絵画のすすめ

13期(空) 柳葉 繁

前略

全自衛隊美術展というものをご存知でしょうか。防衛庁主催で2年に1度、絵画、写真、書道の3部門について行われる美術展で、自衛隊員、その家族を対象としております。そのレベルは、結構高いという評価を関係方面から受けております。「朝雲」「防衛ホーム」等で紹介されますが、ご存知でない方がかなりおみえになりますので、まず簡単に説明をいたしました。

まず自慢話し

ところで、昨年の平成10年度全自衛隊美術展は、私の絵画人生にとって大変意義あるものになりました。趣味で油絵をはじめてからおよそ10年。地元絵画サークルでの活動が主体でした。どうせやるなら何か目標をもってという先生の指導で各方面の絵画展に果敢に挑戦し、それなりの結果(自己満足)を出してきたつもりです。出品にあたっては、そのつど先生の指導を受けてきました。ところが、全自衛隊美術展では、その指導を全く受けずに、また、いままでとは違う技巧を駆使しての創作でした。結果は、高い評価(文部大臣奨励賞)でした。いわゆる「守、破、離」でいう「破」や「離」の段階なのかと自負しております。審査をされたのは日展の寺坂公雄先生でした。寺坂先生は絵画の世界でいわゆる大先生でして、日展の理事をされておられる方です。自慢ついでにその時の写真を掲載しました。向かって右の方が寺坂先生、左の制服が小生です。

絵をやって得ること、いいことはたくさんある

さて自分の絵の自慢話はこれくらいにします。

ところで、防衛大出身の特に、自衛官の皆さんは中々芸術を理解してくれず、「絵を描くひまがわんばかりの人が結構います。なにも勤務時間中にやっているわけではないのですが残念です。心外です。また、今は、実用主義横行の時代ですから「絵をやって何か得ることがあるの」とか「いくらで売れるのか」という話が、冗談半分かもしれないが結構飛び交います。でも、何かいい人がいるのは事実でしょう。「単身赴任のヒマつぶし」「サークルをつうじての清い?交際」「定年後の人の和つくり」「教養が不可欠な海外勤務の充実化」「知的高級幹部への変身」等々、それはそれは沢山あります。その中でも、自衛官にとっても一般企業で活躍されている方にとっても「一番いいこと」は洞察力が向上することだと思っております。

絵(芸術)は洞察力を格段に向上させる

絵(芸術)と戦略はつうじるところがあり(詳しくは機会がありましたら述べますが)、絵(芸術)を理解している方の物の見方、考え方はそうではない方とは大きな違いがあります。ですから、いわゆる指揮統率が違ってきてしまいます。よくあの人の指揮統率が素晴らしいといわれる人は大抵「絵(芸術)の良き理解者」です。これは、どうしてでしょうか。洞察力に差が出てしまうのです。絵を描くには洞察力が必要で、ですから、知らず知らずの内に洞察力が向上していきます。私も「もともと、早く若い時から、絵に首を突っ込んでおけばよかった」と、いま、後悔をしております。感性の豊かな、いわゆる若い(青年幹部)時期から始めるとまた能力の伸びがかなり違うようです。

絵に洞察力が必要とする簡単に有名な話を一つ二つします。

「テーブルの上のりんご」を描くときです。形は丸いと思つたらそうじゃないのです。リングを横に切つて見ると分かりますが、種は五角形に並んでいます。それがベースになって、まああるい形になっています。だから上からみると実は五角形なのです。

要は、外面だけではなく、内面にも観察が及ばないとそのものの本質にせまれないということです。既成観念にとらわれない物の見方が必要です。いわゆる洞察力が必要なのです。そ

うでないとは絵は描けません。テーブルにあるカバの色をみてみましょう。グリーンです。よくみてみるとリングの赤が反射しています。リングの下の方は黄色ですから黄色もテーブルクロスに写っています。逆にテーブルクロスのグリーンがリングに写っています。よくみると事実そうなのです。物事の関連性についての洞察も自然と身についていきます。ただ、どうしても筆をとってキャンバスに向かってと、できない人はせめて絵を鑑賞する機会があります。かなり違います。



絵鑑賞で「さすがは……」と感心する。

とは言うものの、しかるべき立場に立つて初めて絵の鑑賞を仕事柄しなければならぬという方がほとんどだと思いますので、そこで、以下絵画鑑賞でのポイントを一つ二つ述べます。これを知っておけば、一般社会のいわゆる上流階層の人達から卑下されずすむようになりま

す。是非実行してみてください。

よくカラオケで、唄い終わった人に「これはいい歌だ」と、少しも誉めていることにはなっていないのに、誉め言葉のつもりで話している人がいます。絵でも同じです。花の絵をみれば「これは何の花なの」か、景色をみれば「ここはどこなの」か、人をみると「男か女か、どこ誰なのか」とかいりどうでもいいことばかりを聞いてくる人が多いものです。労作を目の前にしてこのような会話はうんざりするし、品性、教養を疑われます。

一般社会でのそれなりの地位についている人はこういう分野でも見識があります。自分で描く、描かないは関係ありません。展覧会で何々賞をとったもの、著名な作者の傑作を目の前にしたらどんな人でも感心します。しかし、作者も分らず飾ってあるものには注意をしましう。自分が感じたこと、それを素直に口に出す。それでよいのです。絵には作者の思想があります。ですから受けた印象を、感じたままを話せばよいのです。それは作者の思想と離れていてもよいのです。

また、絵の技術的な面を言いたいなら、色合いがすきた。全体の雰囲気が好きだ。コクがあつて好きだ。とういうに好きな所を言えば良いと思います。「いい悪い」はやめるべきです。

絵を描く人は普通の格好をしています。いわゆる芸術家という姿、格好はしていません。普通のおじさんやおばさんです。展覧会での作品の悪口や批評めいたことをいっていると、あなたの隣に作品の作者がいることが多いのです。特にご注意ください。

最後に見方でこの人はなかなかと思われる見方の1つです。絵の四隅をみてみます。素晴らしい作品は四隅の色合い、タッチ、描かれているもの、絵肌がそれぞれ全て違っています。この辺のことを知っていたら、かなり違います。「あなた相当、おやりですネ」「さすがは……」で

バリ島の過ごし方

3期(海) 浮田 尚家

第2の職場、N.E.C在籍時に、偶々運輸省傘下の「海外コンサルタツツ協会」でコンサルの資格を得、同協会の空港の無線通信、航法援助装置、航空管制などの登録コンサルタントになっていた関係で、ヒョンなことから、昨年6月から現在、コンサル会社からの依頼もあり、インドネシア・バリ島で日本のODA案件の「バリ国際空港第2次近代化計画」に携わり、昨年来4回に亘りバリ島を出入りしている、既にバリ島観光をされた方もあろうが、「バリ島の過ごし方」のひとつを紹介しよう。

ご存じの通り、バリ島は南緯7度くらいに位置し、気温は年中32〜34度くらい。

11月から翌年4月頃までが雨季、雨期でも日本の梅雨と違い1日に1回以上激しいスコールがある程度、それ以外は乾期で湿気もなく日陰に入れば、ヒンヤリする。汗もさほどでない。

最近の大統領選挙でどのように変動するか判らないが、貨幣価値は日本と比べて、1/10、1/6、従って、日本人にとっては生活しやすいのではないだろうか。今年の春にも日本の若者が「旅の恥はかき捨て」の如く、傍若無人に振る舞っていたのが見受けられた。

横道に脱線したが、この状況で、旅の目的は、
①落ち着いて、ゆったり過ごし、リッチな気分にする。

②運転手付きの車をチャーターして、のんびり観光する。

③ホテルのプールサイドのデッキチェアで、海岸の波、雲の動き等を眺めて過ごす。

④空気が澄んでいるので、南十字星や他の星、人工衛星などを眺める。

これらの他に、7〜8世紀に建造された寺院が3〜4箇所、火山地帯の観光、野生の猿など、まあ、1週間か、10日もあれば目的を達するのではなからうか。

日本人観光客にとって、車の使い方が問題。タクシーは既してボラレル。料金を誤魔化すもの、ルートを抑えて料金を高くするもの、外人特に日本人にはつり銭は絶対に出さないなどなど。現地の人とコンタクトして、安心な運転手をチャーターするのが得策。最後に、注意しなければならぬことを、紹介しておく。

①バリ島は、敬虔なヒンズー教徒が人口の9割りを占める。従って、宗教の話題、冗談事は禁物。

②野生の動物、犬、鶏などを苛めないこと。それ以外は、観光ブックに書かれているでしょうから、参考にして、「ユッタリと時の流れを」味わってもらえれば結構です。

抵抗(50歳を迎えて)

17期(空) 高草 俊夫

先日、携帯電話を買い替えた。最近話題の1モードというヤツだ。

この電話、使ってみると大変な代物だ。電話というより携帯端末というほうが正しい。

これ一台で電話はもとより電子メール、インターネットアクセス等いわゆる素人が使うパソコン並みの機能を楽しめる。その機能もこれらからどんだん発展するという。2年後にはこれに画像まで加わるらしい。5〜6年前に携帯電話が売れ出した時は、親子電話の子機が外へ歩き出した程度にしか思っていなかったが、今度はちよつとびつくりさせられた。パソコンの世界でインターネットが流行りだした時以上の驚きだ。

この携帯電話の急激な発展に代表されるように、ここ数年の情報化のスピードは凄まじいばかりだ。昔、米軍のMILSPECを入手するのに多大な時間とお金を使っていたのが、今やパソコンのキーボードをたたく1分もかからないで、しかもタダで入手できる。会社では上下関係を超えて情報が飛び交い、時には若い社員が社長に直接メールをうち、部長が社長に怒られるといったことまで起こる。いつでも、どこでも、誰でも情報共有できる世の中がすぐそこまで来ている。インターネットの広がりは情報世界の国境を無くし、一般社会では組織の上下構造を壊しはじめ、ビジネスには何よりもスピードが要求される時代になった。

当然、企業も社会も否応なく変革を求められる。それを良い時代が来たかと思えるか、大変な時代になってしまったかと思えるかはそれぞれ勝手だ。一般的には若者は前者、おじさん方は後者だろう。夢多き若者達は、ビルゲイツに代表されるベンチャー企業を自ら起こそうと虎視眈々だし、おじさん方は過去の既得権を守りながら平和な老後を夢見ている。いつの時代も同じだと言われるかもしれないが、どうだろうか。

あと何十年(?)生きられるか分からぬが、過去の思い出だけで生きるのには、あの世に行つてからでよい。最後までその時代を素直に感じ、楽しんでみたい。

だから無理して最新の携帯電話を持ち、電車の中で若い女の子と競つて、安くてうまそうなレストランを検索する。何とか時代について行きたいの一心で。



Your Partner for Success

Mitsubishi Corporation

三菱商事

情報産業第三本部 (宇宙航空)

〒100-8086 東京都千代田区丸の内二丁目3番1号
(03) 3210-4595

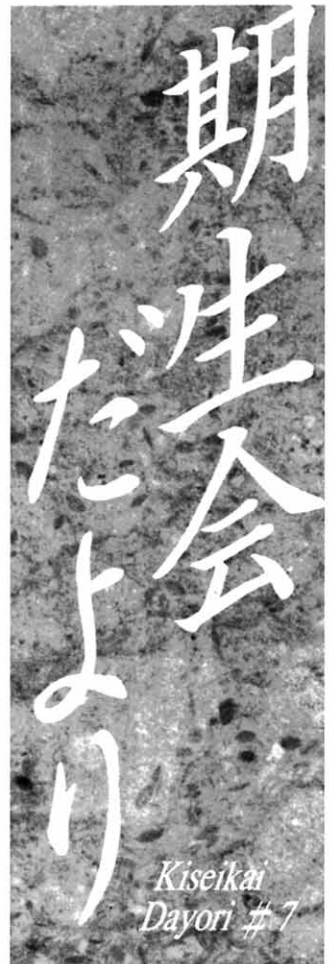


株式会社 マリン ユナイテッド

本社 〒104-0042 東京都中央区入船2丁目1番1号
住友入船ビル
電話 03-5543-4811 FAX 03-5543-4810

東京事業所 〒135-8731 東京都江東区豊洲2丁目1番1号
(石川島播磨重工業K.K.東京第一工場内)
電話 03-3534-2760 FAX 03-3534-2762

横須賀事業所 〒239-0822 神奈川県横須賀市浦賀町4丁目7番地
(住友重機工業K.K.浦賀艦船工場内)
電話 0468-46-2031 FAX 0468-46-2141



3期生会

3期生は西暦2千年をもって入校45周年となります。これまで3期生会（現会長朝比奈喜雄（航空））としては慶弔事その他、節目にはまとまってパーティー等のイベントを実施してきましたが通常は陸、海、空別に活動していますので以下それらの近況を紹介します。

石田一郎（海上）記

陸上3期生会は、北島壽一会長以下、会員248名、準会員（逝去者家族）16名が北海道、東北、関東（本部事務局の直轄）、中部、関西、四国及び九州の8支部にわかれて活動しています。総会は、毎年11月第3金曜日にグランドヒル市ヶ谷で実施し1年間の本部及び各支部の活動状況の報告の後、会員、会員家族及び準会員で懇親会を実施しています。不定期ながら「同期生会ニュース」の発行、同期生による年金相談の事業化、自衛隊各種行事への参加斡旋など、二度目の定年期を迎えて衰えがちな同期会への求心力の維持に努めています。評価はいまいちのようで、事務局の腕が問われている状況です。そのようななかで一番の明るいニュースは、皆様ご承知のように「女性宇宙飛行士」候補に、我が同期角野明人君のお嬢様が選ばれたことです。ど

うか、皆様長生きして一緒にアメリカまで応援に行きましょう。佐藤茂美記

海上要員として卒業した者は97名、以後、事故・病気等で9名が他界され、現在88名です。このうち半数近くの者は、第2の仕事も終え、悠々自適の生活を過ごしており、但し、いまだ社会の前線で、会社役員・顧問あるいは市会議員という重責にあり面々も多く、3期生としていつそうの活躍を期待しているところ。海上3期生は防大卒のみのクラス会活動はなく、江田島の幹部候補生学校卒業者が一緒になった「十期和会」というクラス会を作り活動を続けております。活動の主なもの、年2回の会報発行、旅行、懇親会等です。昨秋、「幹候10期」に因んで平成10年10月10日に江田島方面研修旅行というやや大きなイベントを終了したところです。また、今年度末には、海上クラス会発足40周年記念総会を計画しております。佐々木邦秀記

航空について最近の状況を簡単に紹介します。航空3期全体としての活動は年2回の会合で、御婦人方を交えての春の総会と、暮れの男だけの忘年会で、毎年盛況のうちに実施しており、旧交を温めております。また平成2年1月以降、年5乃至6回航空3期生会報「なすび」を発刊し、今年の7月27日号で54号目となりました。内容は、

各地域毎のグルーブの活動状況、年金の話、健康管理の方法、同窓会活動の紹介、個人の現況等々で、編集者はボランティアが数年毎に交代しています。そのほかゴルフ同好会も盛んで、主としてTBS越谷等でプレイし、今年の9月23日には50回目を迎え、記念大会として熱海に泊まりがけで賑やかにやりました。第2の人生も、半数以上が卒業した現在、益々同期の絆の大切さを感じる今日此頃です。

妹尾起作記

4期生会

◆会長 杉山 蕃

4期生会は昨年、会長、役員の一部が交替し、活躍頂いた林崎君以下の前スタッフの業績を、継承してゆきたいと念じております。我々の平均年齢63歳、第2の人生もそろそろで、昨年全面改訂した同期生会名簿「新草」も、勤務先欄不要の意見が出る年頃となりました。とは言え、ドライバーの飛距離を未だ追いかけている剛の者、未だ強く成れるのではないかと妄想している暑愛好者等が見られる解脱出来ない年齢層でもあります。人生は勝手なもの、若い頃、あんな年令になつたら……と嘆いたその歳になつても、年令なりの生き甲斐、充実感を求めるのは当然の業であります。そんな時、同窓会、同期生会の存在が何らかの支えになれば、それに越した事はないと考える次第です。

昨年初夏、小野忠士君が、心機一転勤務先を退職、次なる人生への第一歩として、四国八十八カ所巡礼の旅をやつてのけました。勿論、リヤカー引いて徒歩野宿の本格的お遍路さん。彼を知る者には、如何にも「らしい」行動ですが、その後髪を剃つた事もあり、高僧の雰囲気と漂わせ精神的満足感が同われます。他の同窓生の方々も、トライしてみても如何でしょうか。

同窓会活動も50周年記念事業、親睦交流会を始め、ホームカミングデー、情報網整備等関係者の御努力で年々充実していく様子にて、大変結構な事と存じております。わが4期生は、それぞれに、参加する事こそ重要モットーに、構成員の一翼として存在感を示してゆきたいと考えております。

6期生会

◆会長 西田 憲正

6期生会の活動状況について、ここ1年を簡単に報告しておきます。

6期生会は、本部と北海道、東北、東海、近畿、中・四国および九州の6支部で活動しております。まず、本部は、「総会・懇親会」を、毎年6月6日6時6分からグランドヒル市ヶ谷で開催し、約150名が参加しています。また、「昼食会」を、毎月6日にグランドヒル市ヶ谷で実施し、情報交換の場にしていきます。

6個の各支部は、年に1〜2回、家族を含めて集まっています。昨年は、東北（7月、松島で1泊13名）、東海（12月、浜松）、近畿（10月、舞子で1泊）、中・四国（5月、道後温泉で1泊25名）、九州（6月、博多で1泊22名）といったところです。

また、6期生のマスコミに強い：池田（歴史）、柿谷（正論）、茅原（中国）、桑原（防衛制度）、橋本（海戦）、服部（空戦）、長谷川（憲法）、藤原（米欧情勢）、室本（軍事技術）、森（防衛制度）、森田（ヘリコプター）、山口（軍事）、山本（軍事英語）、若林（潜水艦戦）、渡邊（海自）君たちが、著書の出版、新聞・雑誌への投稿、テレビ出演や講演活動を活発に実施中です。

防衛庁勤務者は、夏川統幕議長・渡邊陸幕長・村木空幕長が退官したので、4名（防衛大3教授、防研1名）になりました。かつ、還暦を、ほぼ通過完了しました。

7期生会

◆会長 — 伊藤 惇

還暦——遠い彼方の話として聞き流してきて我々7期も、気がつけば、自分自身がいっの間にかその立場になって、どうやら口にする話題も孫のことや、体力の愚痴が次第に多くなった様な気がする。

とは、言うものの、最大公約数的な捉え方で申せば、今の7期の立場ぐらいが、人生の中で一番充実した、人生の享受が可能な時ではなからうかとも思っている。つまり

- ①社会的・家庭的に一応の責任を果たし、自他共に認める一つの区切りの時期。
 - ②体力的に多少衰えたりとは言え、まだまだ不都合はない。
 - ③経済的にも、時間的にも、多少の融通性は持ちうる。
 - ④現役を退いた直後で、まだ意識の面でギャップを感じる程のことはない。
- 等がその理由。

同期の仲間を見て、現役時代よりもむしろ深刺さる感じが結構ある。特技に、趣味に益々意気盛んな者、信じられない様な才能を発揮する者、相変わらず講釈の多い者等に、まだまだ還暦とは言え、気持は青年時代ぬけやらぬ意気盛んな集団である。

人は信念と共に若く、人は自信と共に若く、人は希望ある限り若く、どこかで聞き覚えのある文句だが、今の7期のモットーでもある。

9期生会

◆会長 — 益田 兼弘

「九期生会」の再発進なる。

小原台卒業以来はや35年、ほとんどの仲間が退官し、現役で依然として苦勞を続けているものが若干名。お互いにこの歳になると妙に寂しくなるもので、遊び仲間や呑み友達が

恋しくなるもの。若かりし日の無邪気な空気に触れたいくなるもの。

平成10年秋、何とはなくこの様な話となり、「まずは東京で懇親会でも開こうや」と言うことになり、11年2月にランドホテルで60名以上の参加をみて盛大に実施された。名前と顔が一致しないとか、余りの変わりように互いにそれと気が付かない等で珍妙な話が交わされる場面が所々で見られたが、たちまちにして解消し和氣藹々のうちに懇親を深めた。

卒業時は確かに「九期生会」は存在したのだが、その後、幹部候補生学校の同期会として陸、海、空ごとに、あるいは各地区ごとに活動していた。したがって防大同窓会本部からの問掛けに対する受け皿がいまいになるという不都合が生じていたので、この機会に今一度再発進した次第である。もとより同期生全員の同意を得て発進するのが手順ではあるが、いささか大雑把集団であることもあり、省略させて頂いた。お許しください。

一応、会則も役員も定めたが、今までの経緯や、陸海空ごと、あるいは各地区ごとの活動を損なわないようにと、出来るだけファジイなものとなりました。

ちなみに、海は藤田、空は鈴木、陸は益田がそれぞれ代表で、全体としては、益田が会長となることとなった。これも順番は陸海空という都合のよい理由で、席上で決められたもので、甚だファジー。

平成12年も2月に東京地区で懇親会を計画中です。一番暇そうな時期なので、とにかく「遊び仲間の再構築」が主眼です。……もともとの悪いものに言わせると「弔辞の読み人捜し」だそうですが……奮って御参加を。

ご意見あらば、御一報を。

17期生会

◆会長 — 石井 光政

昭和44年、東大紛争のあおりを受けて東大の受験がなく、赤門をくぐる実力を持ちつつも小原台の地に一步を記した第17期生は、14・15・16期の各先輩の暖かくかつ厳しいご指導を受けて素直にかつ遅く成長し、昭和48年、着校時と同じく桜の花咲く小原台を巣立ちました。

その数、497名（陸269名・海106名・空122名）。その後自衛隊外に活躍の場を求めて退職した者105名、志半ばにして他界した者11名（内殉職者、陸2名・海1名・空2名）で、現在国防の任についているものは381名（陸214名・海79名・空88名）です。

昨年は卒業25周年を迎え、北海道から沖縄まで全国各地毎、陸・海・空の有志が集まり旧交を温めました。さらにその様子を中心に25周年史を編集し、自衛隊外で活躍の会員も含め全員に配布したところです。

自衛隊生活をマラソンに例えればすでに折り返し点は過ぎ、ほとんどの者があと7年前後で第2の人生を迎える年となり、頭が薄くなった者、白髪が隠せないほど多くなった者、腹が出ている者、はたまたすでに孫ができた者等々、卒業後の変化は様々ですが、25周年パーティーではすっかり昔に戻って楽しい一時を過ごしました。

今まさに統合の必要性が叫ばれ、その実行性の確保が話題になっていますが、そのためには陸・海・空の意思の疎通が重要であり、その面では今それぞれの組織において実行の中心として重要な地位を占めている私たち17期生の交流をこれからもさらに活発にしておく必要があるものと考えています。

防大では私たち在校の頃の5大隊制から4大隊制に変わり、文科系もでき、現在は本館の建替え工事が急ピッチで行われる等、制度も環境も大きく変化しているようですが、建

学の精神は脈々と受け継がれているようであり、現在のような大きな社会変化の中にあつては益々その重要性が増しているように感じています。

防大同窓会はこの精神継承の重要な機能を果たしており今後のさらなる充実と発展をお祈りする次第です。

23期生会

◆会長 — 岩本 豊一

23期生会は、11年4月17日(土)G H市ヶ谷において卒業20周年を記念して、横須賀での10周年記念行事に引き続き、第2回目の期生会を実施しました。

開催にあたりましては、準備委員長堀口君（現陸幕装計企画班長）をはじめといたしまして多くの目黒入校学生の皆さまのご協力のおかげをもちまして実現に至りました。

参加状況は、地理的な条件もあり関東周辺勤務者が主体となりましたが、民間で活躍されている同期生も含め約120名弱の同期生が集まりました。



その数は相対的には多い方であり、参加者は同期生間の強固な団結の一端を感じていたようであります。

また、当時指導官でお世話になりました大島順一先生ご夫妻にもお忙しい中駆けつけていただき、変わらぬ熱意と愛情をもって現時点に則した暖かくも大変貴重なアドバイスを頂くなど、非常に充実した会合となりました。その他、この会合では卒業以来未整備であった会則を定め、それに基づく新役員を選出いたしました。選出メンバーは次のとおりであります。

- | | |
|----------|------------------------|
| 会長 | 陸・岩本豊一
(卒業時に引き続き留任) |
| 副会長兼陸分会長 | 濱崎久実 |
| 海分会長 | 吉田正紀 |
| 空分会長 | 森田公治 |
| 総務幹事 | 陸・海沼敏明 |
| | 海・細谷正夫 |
| | 空・井下佳久 |
| 会計幹事 | 海・吉田伸蔵 |
| 会計監査 | 空・石木尚昌 |
| 同窓会評議員 | 陸・岩田清文 |
| | 海・高橋忠義 |
| | 空・池辺 正 |
- (11年4月17日選出時現在)

これからもよろしくお願いいたします。また、役員は、新会則では中央勤務者を主体に構成するように定めているため、異動の都度これから多少の変更もありますが、ご了承下さい。遠方等で連絡等十分に行き届かなかつた同期生の皆さまには、この場をお借りしましてお詫び申し上げます。

25期生会 ◆会長 —高鹿 治雄

我々25期生も卒業して早18年が経過しました。この道程において、残念ながら志半ばにした2名の有為の人材が空に散りました。我々は、彼らの遺志を継ぎ、我が国の平和と安全に尽力することが残された者の務めであると考えております。

それぞれの御遺族に対しては、毎年、命日の近辺において有志による墓参りを実施するとともに、御遺族を訪問して思い出を語る等の活動を行っております。来年はそれぞれ、十三回忌及び七回忌の法要の年にあたり、同期としても心新たに区切りとしての年にするため、関連行事等について計画中です。

さて、我々は現在、部隊にあつては大隊長、艦長、飛行隊長等の指揮官、また、主要幕僚として、そして、中央にあつては中堅の幕僚として重要な配置を与えられる年齢となりました。また、民間においても、それぞれ会社の重要な地位において活躍しております。それぞれその与えられる配置は多種多様ですが、今回はその中でも補綴がピークとなっている駐在武官に焦点を当ててその活躍を紹介いたします。

陸上の同期では6名が駐在武官として各任地で次のとおり活躍しております。富樫勝行(オーストリア)・・・全欧安保協力会議のフォーラム担任として、ウィーンの街並みに似合う男のセンスにも磨きをかけています。

成田千春(アメリカ補佐官)・・・山口将補の下、緊張感を持ちながらも脂の乗りきつた3年目を過ごしています。未安雅之(ベトナム)・・・防衛交流も活発となり、高官のアテンドも経験。ハノイの高級住宅街に住み、中越国境にも足を伸ばしました。

山下純夫(中国)・・・建国50周年を祝う国慶節の軍事パレード(天安門広場)は壮大なものでした。大人の風格を備えつつある昨今です。

遊佐宏文(ミャンマー)・・・筆まめに電報を送っています。邸宅は車寄せにメイド多数を完備しています。加藤利幸(シリア)・・・初代武官として、愛車のジープチェロキーを駆って多忙な毎日を送っています。子供はアメリカンスクール、私はアラビア語に挑戦しています。

この6名に加え、菊地豊(ドイツ予定)が外務省で研修中です。海上の同期では4名が駐在武官として各任地で次のとおり活躍しております。近藤誠(サウディアラビア)・・・映画館や遊園地は存在せず、禁酒、禁豚の中、サッカーを楽しむにがんばっています。

杉原耕二(インドネシア)・・・東チモール問題等、懸案事項で大忙しです。プール付きの一戸建てとドイツ車に乗ることを夢見ていましたが、治安情勢を考え、セキユリティーの良いアパートに日本車になってしまいました。

高山忠(韓国)・・・着任してすぐに南北の銃撃戦がありました。引越越したばかりで何もわからずのんびり過ごし、日本人会の皆様に安心感を与えました。伊藤俊幸(アメリカ)・・・朝はペンタゴン、昼は電報書きと大使館内の調整、夜はレセプションとお客さん対応で大忙しです。

この4名に加え、伊藤元万(イタリア予定)が外務省において研修中です。航空の同期では3名が駐在武官として各任地で次のとおり活躍しています。木村和彦(ジュネーブ軍縮会議日本政府代表部)・・・アルプスを望む風光明媚な多言語国家スイスで、レマン湖名物140メートルの大噴

水を眺めながら軍縮会議に取り組んでいます。通常の防衛駐在官とはかなり異なる業務ですが、地雷の会議で世界中を飛び回りながら、元気にやっています。

木村達人(フィリピン)・・・世界の趨勢がアジア重視となりつつある中で、益々やりがいのある勤務となっております。年平均気温約28度のなか家族共々元気に生活しています。

吉田浩介(ロシア)・・・歴史的な出来事や場面に遭遇しているという満足感と、明日はどのようなのか判らないと言う不安を抱きつつ、厳しい気象条件を克服し、家族と力を合わせ日々生きていくことを実感しながら、近い将来ロシアがよき隣国となるよう汗を流しています。

この3名に加え、石井義哲(フランス予定)が外務省において研修中です。情報化社会、グローバル化等、地球上の時間と距離がどんどん縮まっている社会背景の中とはいえ、異国の地において勤務している同期及びそのご家族に対し、「がんばれ!」とエールを送るとともに、無事、全員が元気に帰国することを祈りたいと思います。

今回の「期生会だより」への投稿に当たっては、岡崎(陸幹校)、徳丸(海幕)、坂本(空幕)と民間に移った杉山等の協力を得られたことを感謝します。いよいよ来年は、20世紀の最後の年です。我々25期は21世紀の幕開けの年となる2001年に、卒業20周年を迎えます。激動する自衛隊でがんばる者、厳しい社会でがんばる者、それぞれに歩んでいる道は違っていますが、嬉しい時、苦しい時、どんなときでも心から頼りになるのは同期です。25期の団結を改めて確認し、お互いを励まし合えるような20周年記念行事を期生会で企画したいと思えます。ひとりでも多くのみんなと再会できることを楽しみにしています。

30期生会

◆会長 堀切 光彦

「住所録を看に一人酒はいかが？」

「ご無沙汰しております。30期生の皆さんお元気ですか？」

私事ながら、堀切は、去る8月末に7ヶ月にわたるゴラン高原での任務を終え、部下隊員達と共に無事帰国いたしました。報告等で檜町に向きました際、陸幕で働いている同期諸兄が帰国を祝う宴をしてくれまして、久々に数十名の同期諸兄の顔を拝見する機会を得ました。やはり、同期というのは有り難いものです。

さて現在、期生会の活動で唯一機能しているのは「住所録の整備」です。毎年一回、年賀状のシーズンの前を目途に、名簿担当者がまとめ近傍の同期の力を借りて、印刷・製本・封・宛名書き等をして皆さんのお手元に届いているはず。この住所録を参考にし、仕事で困ったとき同期に手助けしてもらってもよし、年賀状の宛名書きをするもよし、近傍に所在する同期で集まって何かの機会に宴会をするもよし、せっかくの住所録を活用し、同期生各位の更なる親睦の一助にしたい。ただければ有り難いと思います。

私の場合、ゴランでもそうでしたが、日々の仕事の俗塵にまみれる今日この頃、息抜き策として時折住所録を眺めながら一人酒を飲むのが楽しみの一つです。私の手元にあるのは平成10年12月の期生会作成の住所録で、いささか古いですが、同期諸兄が今どこで何をしているのかを想起しながら一杯やるのも「亦楽しからず也」。例えば、…まず、住所録を手にとり眺める。懐かしい同期の名前が並ぶ。その名前を頼りに当時の顔を思い出し、今何をしているのかを確認する。「へえー、あいつが中隊長か？」なんて独り言を言いがら一杯、…といった具合です。陸自では中隊長をやっている同期が多く、I上君はヒビ

ーンといいながら、O塚君は微妙に音階がはずれる歌を歌いながら、H野君は早口で「だつて、だつて、」と言いつつ、M田君は定年前に上番した叩き上げのような勇姿で、…それぞれの中隊長姿を思い浮かべるだけで十分酒の肴になります。海自では艦艇の船務長・砲雷長・整備長・運用長等になっている者、空自では飛行隊等の部隊勤務している者が数名いるほか、陸海空共に部隊勤務より司令部勤務で激務に就いている者が多いようです。また、社会で活躍している諸兄が、メーカー・商社等の様々な会社や警察・役所等の官公庁が勤務先になっているのを見るのも楽しみですね。「そんな年代になつたんだなあ。俺も年をとつたわけだ。」などと老成したような独り言を言いながら同期諸兄の活躍ぶりを想像するのは面白いものです。

そんな住所録も、その整備には同期生各位のご協力に負うところ大なので、是非とも、名簿担当者(各教務班の名簿係り又は責任者)は山口君(外線03393331161内線8311238V)に住所録情報(自分自身をはじめ他の同期の動きがあつた時点で知っている限りの情報)をあげるように宜しくお願いいたします。例えば、名簿に書いてある情報に誤りがあったり、住所不明になっている同期の住所を知っているとか、こういう情報は個人の持っている情報に依存せざるを得ません。なにとぞよろしく。ではまた、ごきげんよう。

33期生会

◆会長 中塚 千陽

まず会計報告ですが、佐伯君の葬儀に花輪代1万2千円、土田元学校長葬儀に香典3万円を使用しております。以降、年度末の監査結果を次回発行の小原台だよりで報告していくようになります。なお、残高についてはここに載せることが適当でないと思っておりますので、

載せません。ただし、メールアドレスがわかつている同期については、決算報告をメールにてさせていただきます。

佐伯君の葬儀の時に問題となつたのですが、今後、期生会費の使い方として、次のようにしたいと考えています。

「平成39年(同期の一番若い者が50歳になる年)までに死亡した同期については、期生会から花輪または相当額の香典をだす。

平成40年以降の処置についてはこれから考えていきたいと思っております。この件について、ご意見等ありましたら、期生会長までお願いいたします。なお、メールアドレスをお持ちの方は、通信費軽減のため、お知らせください。

宛先は…habu@ma4.justnet.ne.jp

Kawasaki

21世紀の空を拓く。



KAWASAKI OH-1

航空宇宙事業本部
東京都港区浜松町2丁目4-1(世界貿易センタービル) 電話105-6116
電話:(03)3435-2111 ファックス:(03)3436-3037

川崎重工

MITSUBISHI

SOCIO-TECHの三菱電機



41万画素の高画質が用途を広げるコンパクト赤外線カメラ

IR-M700

- 世界最高水準41万画素(801×512)の高画質
- 雑音等価温度差 0.08℃の高感度
- 5kg・4.2ℓの軽量・コンパクト
- 45Wの低消費電力
- マルチ電子ズーム(2、4、8倍)、電子スクロール機能、画面フリーズ機能付

用途に合わせてお選びください。

IR-M300:6万6千(256×256)画素
雑音等価温度差0.2℃

NEW 非冷却タイプ

IR-U300M1:8万(320×240)画素
雑音等価温度差0.2℃

IR-M700/IR-M300/IR-U300M1

三菱サーマルイメージャ

●お問い合わせは…三菱電機株式会社 本社 監視・管制システム営業部 〒100-8310 東京都千代田区丸の内2-2-3 電話(03)3218-3370 三菱電機株式会社

支部だより

北海道地域支部

支部長 樺山 貢

北海道地域支部は、平成9年9月に同窓会本部の強い要請により「先ず発足ありき」で急遽結成しました。

当地域支部の特色は、会員が圧倒的に現職会員（900名・30個支部）が多く、退職会員は、僅か100名に過ぎません。現職の転勤等もあり役員の交代も多く、なかなか活動しにくいのが現状です。

この2年間は、各支部の基盤整備に努め、地域支部としては、役員選出、理事会・代議員会の開催等以外事業らしい事業は、実施してきませんでした。

平成11年度に入り、そろそろ基盤整備の「ケジメ」と、何か「事業」を始めようという声が強まり代議員会で次の事を決しました。

- 1 組織の基盤整備の柱となる1「会費の徴収」
 - 2 「名簿の作成・配布」また、事業として、
 - 3 「防大入校予定者への激励の記念品の贈呈」
- です。特に、「入校予定者の激励」は、北海道地域支部の事業のポリシーとして、「後輩（学生）に対して役に立つこと」また「地方として軽易に実施できる」この2点から、選ばれました。

今後防大同窓会が、永遠に不滅である組織である以上、当地域支部は、焦らず「一歩一歩着実」に「後輩（学生）のため、役に立つ活動」を、計画・実施していく所存です。

東北地域支部

支部長 阿部 賢吉

防大同窓会東北地域支部（通称「東北防大同窓会」）は、平成11年2月27日に発足式を行い、今年度から本格的な活動を開始しました。

発足式は、本部から君嶋事務局長（会長代理）を迎え、仙台市内のホテルに東北各地の陸海空現役・OB有志約110名が集まり、盛大に東北地域支部の設立を祝いました。

「東北防大同窓会」の会員数は約830名ですが、うち9割強が現職会員で占められております。したがって、今後の会運営に当たっては、特に現職会員の積極的な参画に期待しております。

また、下部組織として、すでに現在結成準備中の1～2支部が結成されると東北全域を完全にカバー出来るので、その結成促進を図りたいと思っております。

活動開始初年度の今年度の「東北防大同窓会」の運営は、各支部ごとに組織整備に努めることを優先し、会の計画事業は、4/四半期の「代議員会」のみを予定しています。

平成12年度は、引続き各支部の基盤強化を進めながら、支部・会員の交流・親睦、財政基盤の整備、50周年記念事業の準備等に関する事業を計画して行きたいと考えています。

東北防大同窓会設立総会



平成11年2月27日
発足式であいさつする
初代会長
阿部 賢吉氏（3期陸）

九州地域支部

事務局長 道下富士雄

平成11年度九州防大同窓会（会長・2期空中野純人）の活動状況についてご報告いたします。

第1の事業は、UNDOF派遣隊（第7次・第4師団、第8次・第8師団）に対する激励金の募金・贈呈でありました。

九州地区退職会員のうち有志（約250名）から浄財を募金し、野中第4師団長と備後第8師団長にそれぞれ贈呈し、UNDOF派遣隊を激励した次第です。

第2の事業は、九州防大同窓会および熊本・大分・宮崎各県の同窓会旗の作成・配布についてであります。

昨年度の当同窓会総会では本部から校旗を借用したのですが、校旗はわれわれ防大卒業生の心のよりどころでありシンボルでもあるわけで、是非この際作成して欲しいという要望により作成したものであります。

この写真は、九州防大同窓会旗と事務局の主要メンバーですが、各県同窓会には「各県名を入れた同窓会旗」を作成し配布しました。



なお、経費については、先般本部より活動資金として頂いたものを使用いたしましたことを申し添えます。

第3の事業としては、九州地区ミニ同窓会の実施であります。

昨年度の「同窓会だより」で報告しましたように、2ヶ月に1回事務局の幹事会を行っています。2ヶ月に1回事務局の幹事会を行っています。2ヶ月に1回事務局の幹事会を行っています。

最後に第4の事業である今年度の九州地区の総会は、平成12年2月12日（土）昨年同様に福岡市の八幡閣で行う予定です。九州地区の同窓会の皆さんの多数のご出席をお待ちいたしております。

沖縄地域支部

事務局長 湯浅 美芳

沖縄地域支部は、平成9年11月に発足して、現在、小西忠（1期海）会長のもと、OB11名、現役215名計226名で活動しています。

事業として、総会及び懇親会、防大生部隊実習等支援及び懇親会、防大入校者への記念品贈呈が主な内容です。

特色のある活動として、沖縄寮歌祭への参加があります。沖縄寮歌祭は、過去27回開催され、毎年2月全国各地の旧制高校及び同志校OBが、那覇に集い各校の特色を出して寮歌等を歌い懇親をするもので、地域支部も会長以下約20名で参加し、防大の制服を着て追

遥歌を歌い、参加者との懇親を図っています。



広島地区支部

事務局 総務 土手 義孝

防衛大学校広島地域同窓会(以下、「広島地域同窓会」という)は、設立後2年余りになります。広島地域同窓会は、防衛大学校同窓会の下部組織として活動し、母校の発展及び社会的活動に寄与することを最重要目標にしており、広島地域において、同窓生の結集を図り地域社会に貢献すると共に同窓生の相互扶助を強力に推進することとしています。

会員は、広島経済圏で活躍している230名余りの地域内に所在するOBと部隊等に勤務している現役自衛官で構成しています。



年間の活動は、定期総会の他に春・秋季行事としてそれぞれ登山、テニス、ゴルフ等を家族を含めて実施するよう計画しており、各種行事は、気楽な行事であり、OB・現役会員及び家族の皆様の積極的な参加を呼びかけています。

平成10年度の諸行事に対する会員及びその家族の参加実績は、定期総会、春・

秋季行事(登山、テニス、ゴルフ)の総参加者数は、延べ300名近くになり、毎年増加の傾向になっています。特に、会員家族の参加者が増加しており、会の活動の活性化に寄与しています。

平成11年度春季行事として陽春の4月に似島(広島市南方)の安芸小富士のハイキングを、新緑の5月にテニスを、またゴルフを開催しました。

参加者は、家族を含めてハイキングは20名余り、テニスは10名余り、ゴルフは小野寺第13旅団長、平野呉地方総監部幕僚長初め各部隊指揮官等現役8名、OB15名及び協力会員13名計9組36名となり、春季行事はあわせて延べ70名余りが参加し、会員・家族及びOB・現役相互の親睦、情報交換等を行い旧交を温めました。

なお、ゴルフコンペの成績は、優勝19期(空)坂田直文氏、第2位9期(陸)中田勝利氏、3位協力会員の方でした。

広島地域同窓会の諸行事は、盛況裏に実施中であり、地域同窓会としての基盤は、資金面を除き確立しつつあります。

現在、広島地域同窓会は、中部地域支部が設立されていないため、地域支部の代理的存在として活動しています。これらのことから現在のところ広島地域同窓会は、会員数及び活動実績等から本部で定める地域支部に匹敵する同窓会であると自負しています。

中部地域は、守備範囲が広く地域支部とは別に名古屋、大阪で広島と同じような地域同窓会設立の準備がなされておると聞いています。

防衛大学校同窓会は、地域支部を通じて全国的に活動を広め一つの団体として力を付ける必要があり、早急に地域支部を整備・充実すると共に現在活動中の地域同窓会の活性化を図る施策が重要と思います。そしてそれらの為にも年度活動方針・施策の計画段階で地域支部(地域同窓会)の意見等を聞く場を設



定する等同窓会本部施策に期待するところ大なるものがあります。

同窓会本部の一層のご支援・ご指導をお願い致します。

なお、西暦2000年(平成12年)2月26日(土)呉阪急ホテル(JR呉駅前)で平成12年度定期総会・講演会・懇親会等を計画しております。講演会の講師として元統幕議長 佐久間一氏の招聘が計画されております。

同窓生各位の出席を心からお待ちしております。

「防衛大学校広島地域同窓会事務局」

7300014 広島市中区上臈町2-143

(助自衛隊援護協会広島支部)

(退職自衛官無料職業紹介所)

TEL・FAX 082-2236900

関西地区支部

支部長 牧 次郎

平成11年11月20日大阪全日空ホテルにおいて現職自衛官75名を含む会員等200名が参集し盛大に発足会行事を行いました。

親睦会には1期から43期までが一同に集い40数年に亘る今昔話を花を咲かせ、和やかな雰囲気の中で平成12年11月18日の第2回総会での再会を約し、三々五々に名残を惜しみつつ浪花の夜の巷にその勇姿を沈めました。

本会は、関西防大同窓会と称することとし初年度は2月のEメール講習、4月の防衛時事研修会を皮切りに秋の古刹の探訪、若年期の夏のカタター競技への参加、9月下旬のゴルフコンペ等会員が軽易に参加できる事業を行い、会の逐年の発展を期し会の活動を開始していく所存です。

また時代の趨勢に乗り遅れないようインターネットに会のホームページを掲載し、事務業務の簡素化を図ることにしています。

中部地域支部は広域であり組織化が遅れていますが、広島地区支部及び今春発足する名古屋地区支部と共に手を携えて充実した組織を目指し鋭意努力していく決意です。

本誌面をお借りし、北陸、東海、関西、中国及び四国に在する会員の各地区における尽力をお願いし発会の挨拶と致します。

「事務局連絡先」

自衛隊援護協会大阪支部

総務 河野 光男

TEL・FAX 0669106111



項目	12年度予算	11年度予算	11年度比
収入			
会費(44期生)	19,740,000	22,560,000	-2,820,000
預貯金利息	330,000	1,190,000	-860,000
広告代	未定	未定	
同窓会名簿売上金	未定	未定	
積立金からの繰入	2,340,000	0	2,340,000
収入計	22,410,000	23,750,000	-1,340,000
支出			
事業計画の推進(現職・OB会員交流)	1,000,000	1,000,000	0
(同窓会主催親睦交流会開催)	300,000	500,000	-200,000
(相談窓口の設置)	50,000	50,000	0
(ホームカミングデーの実施)	300,000		300,000
(会員の出版支援)	50,000	50,000	0
(防大卒業留学生との連携)	700,000	300,000	400,000
(全国的な情報網の整備)	50,000	50,000	0
総会/講演会費	2,500,000	2,500,000	0
期生会支援費(48期生会助成)	100,000	100,000	0
(44期生会助成)	100,000	100,000	0
校友会対外活動助成費	1,000,000	1,000,000	0
開校記念祭助成金	2,000,000	2,000,000	0
顕彰碑献花費	600,000	600,000	0
贈り物(供花・弔電)	350,000	350,000	0
職員定年退職者記念品費	100,000	100,000	0
複写機賃料	210,000	120,000	90,000
電話・FAX維持費	500,000	500,000	0
小原台事務局運営費	100,000	100,000	0
代議員会運営費	700,000	700,000	0
各期生会連絡調整費	0	300,000	-300,000
機関紙発行費	3,300,000	3,300,000	0
同窓会名簿維持費	200,000	200,000	0
会長運営費	500,000	500,000	0
事務局雇用費	2,000,000	2,000,000	0
本部事務局宅賃料	2,800,000	2,750,000	50,000
事務費	350,000	350,000	0
通信費	150,000	150,000	0
交通費	400,000	400,000	0
会議費	500,000	500,000	0
印刷費	1,500,000	1,680,000	-180,000
50周年記念事業委員会	0	1,500,000	-1,500,000
支出計	22,410,000	23,750,000	-1,340,000

平成10年度 防衛大学同窓会決算報告

防衛大学同窓会会計監事

平成11年3月31日

(単位:円)

項目	予算	決算	実績
収入			
会費(42期生)	21,063,000	22,216,580	
預貯金利息	1,377,000	1,345,321	
広告代	0	624,580	
同窓会名簿売上金	6,000,000	7,062,290	
積立金からの繰入	4,940,000	0	
収入計	33,380,000	31,248,771	
事業計画の推進(現職・OB会員交流)	500,000	0	
(同窓会主催親睦交流会開催)	300,000	166,445	
(相談窓口の設置)	200,000	0	
(講演会の実施)	500,000	0	講師:防大校長
(会員の出版支援)	200,000	0	
(防大卒業留学生・OBとの連携)	100,000	160,582	
(全国的な情報網の整備)	200,000	0	
総会費(会場費)	1,800,000	789,029	
(通信費)	1,400,000	316,095	
(印刷費)	100,000	4,216	
期生会支援費(46期生会助成)	100,000	100,000	
(42期生会助成)	100,000	100,210	
校友会対外活動助成費	1,000,000	944,210	
開校記念祭助成費	2,000,000	1,785,210	
顕彰碑献花費	600,000	356,765	
贈り物(供花・弔電)	350,000	162,240	
職員定年退職者記念品費	100,000	119,815	
複写機賃料	120,000	194,886	
電話/FAX維持費	720,000	277,255	
小原台事務局運営費	300,000	100,420	
代議員会運営費	700,000	657,384	
各期生会連絡調整費	500,000	0	
機関紙発行費(作成)	800,000	988,000	
(発送)	3,000,000	1,774,964	
同窓会名簿発行費(発送)	6,000,000	7,347,690	
(発送)	1,350,000	336,545	
(経理室変更)	50,000	0	
(発行案内広告)	240,000	126,262	
会長運営費	500,000	60,520	
事務局雇用費	2,000,000	2,000,000	
本部事務局宅賃料	2,750,000	2,784,682	
事務費	250,000	156,849	
通信費	250,000	47,155	
交通費	300,000	185,190	
会議費	500,000	91,167	
印刷費	2,000,000	5,120,720	
50周年記念事業委員会	1,500,000	1,500,420	地区支部設立支援
小計	33,380,000	28,784,926	
次年度繰越	0	2,463,845	出産に繰入
支出計	33,380,000	31,248,771	



コマツは、長年にわたって培った豊富なノウハウと、最先端のトータルテクノロジーで、防衛システムをサポートしています。

【営業品目】

- 戦闘車両 ●施設車両 ●弾薬 ●エンジン
- ロボット ●プレス ●レーザー機器 ●電子機器
- 地下掘削機械 ●海洋開発機器 ●建設機械

KOMATSU コマツ 特機事業本部
〒107-8414 東京都港区赤坂2-3-6 TEL.03-5561-2740

防衛大学校同窓会機関誌

小原台だより



目次

Vol. 8

平成13年1月1日
発行 防衛大学校同窓会

編集 吉田顯彦 熊林俊一 森田卓也
印刷 ㈱エイコープリント



新学校長紹介

ご挨拶



防衛大学校長
西原 正

昨年四月、防大の第七代目の学校長に就任致しました。先達が営々と築いてこられた栄えあるよき伝統を守り、二十一世紀の要請に応えられる防衛大学校を創つていく責任を痛感しております。

就任以来痛感致しますのは、防衛大学校はじつに多くの防大外の組織、個人によって支えられているということです。なかでも全国、全世界の至る所で活躍されている防大同窓会の皆様は、防大にとってきわめて貴重な存在です。同窓の先輩たちがいきいきと活躍していただける姿は、何にもまして現役学生にとつての修練の励みになります。

防大はいまいろいろな意味で曲がり角に来ているように思います。例えば、冷戦が終結した今日の国際情勢のなかで、防大生に対する教育・訓練のあり方はこれまでと同じやり方でいいだろうか、また少子化傾向が急速に進む日本社会にあつて、防大は自衛隊が必要とする人材を十分集めることが出来るだろうか、それが出来ない場合はどういう対策が考えられるだろうか、など基本的な問題に取り組みねばなりません。

最近の日本の若者は精神的に弱く、日本人としての誇りをもっていないということがしばしば指摘されますが、防大生の多くは、一般的基準から見れば、礼儀正しく、規律をよく守り、そして強い忍耐力と民族的誇りをもって卒業していきます。これは学生の教育・指導にあたるものにとつては、満足できることです。しかし未来の幹部自衛官は部下を惹きつける人間的魅力をもっていることが必要です。その意味で、防大教育にあつては、これまで以上に、

心を磨く徳育を重視していくつもりです。

さらに自衛隊が今後これまでに増して国際活動に従事することが多くなることに鑑み、防大生の時にできるだけ異文化と触れ合うことの経験をもつことを強調しております。防大は現在七カ国からの留学生を迎えており、また約三〇名の学生を毎年八カ国に派遣しております。

防大は来年いよいよ創立五十周年を迎えます。それに合わせた建物の改築などを鋭意進めておりますが、記念講堂正面の壁画やそれと併設する図書情報館周辺における記念碑などは、同窓会から寄贈していただくことになっていきます。これらは同窓生と現防大生との結びつきのシンボルとしての役割を果たしてくれそうです。現役学生たちは先輩の温かい支援を胸に秘めて日課に励むでしょう。

同窓各位がご健康のうちに、それぞれの場にあられて、日本のため世界のために活躍下さることをお祈り致します。

【学校長の経歴】

昭和12年8月4日生 大阪府出身
昭和37年3月 京都大学法学部卒業
昭和37年4月 社会思想研究所研究助手兼翻訳助手
昭和39年8月 米国ミシガン大学大学院政治学修士号取得
同大学日本研究センター研究助手
同大学政治学博士号取得
昭和47年12月 京都産業大学助教授(外国語学部国際関係コース)
昭和48年4月 京都産業大学助教授(外国語学部国際関係コース)
昭和50年2月 米田サウスカロライナ大学客員教授
昭和50年10月 京都産業大学助教授(社会科学教室、国際関係論学科)
昭和52年4月 防衛大学校教授(社会科学教室、国際関係論学科)
昭和54年7月 オーストラリア国立大学国際関係学部客員研究員
昭和56年7月 米国ロックフェラー財団国際関係部客員研究員
平成5年4月 防衛研究所第一研究室長兼防衛大学校教授
平成9年4月 防衛大学校教授 社会科学教室主任
平成12年4月 防衛大学校長

この間、日本国際政治学会会員、アジア政経学会会員、財団法人平和・安全保障研究所研究委員、国際戦略研究所理事、日米欧委員会メンバー、日英2000年委員会委員、防衛学会常任理事、日韓フォーラムメンバーなどを歴任

目次

新学校長紹介	1
同窓会長挨拶	1
50周年記念事業	2
防大特集	2
小原台は今	4
日米学生会議の防大研修	5
第6回国際防衛学セミナー	7
校友会活動状況	9
行事	9
ゴルフ、テニス・囲碁・カッター	10
頭彰碑献花式	10
卒業留学生歓迎夕食会	12
中期事業	12
タイ支部の発足	12
ホームカミングデーの実施	12
東海地区支部の発足	13
同窓会ホームページの開設	13
同窓生アラカルト	14
期生会だより	14
第1・4・5・6	15
7・14・24・26・38期	15
支部だより	15
北海道・九州・沖縄地域支部	19
広島地区支部	19
会計報告	21
お知らせ	22
表紙	22
シンボルトワーから見た課業行進	22

同窓会長挨拶



阿部 博男

明けましておめでとう御座います。皆さんは、多難だった前世紀を越えて、希望に満ちた21世紀を、ご家族ともども、或いは国内外の勤務地で新たな感慨を持って迎えられたことと思います。

20世紀は、科学技術の驚異的な進歩で生活が豊かになった反面、驚くほど多くの命が失われた100年でした。わが国は、世紀の後半、平和のうちに国の富を充実することができました。このことは、戦後の指導者の叡知と、国民の勤勉な働きによるものと言えます。この平和の維持のため、防衛大学校が、その一翼を担ってきましたことは、私達の最も誇りとするところです。専守防衛という戦略環境のなかで、見事に平和維持の任務を遂行する一方、ペルシャ湾の掃海を初め多くの国際貢献、また、今日では三宅島での火山監視活動、住民避難支援、それに各地の地震での災害復興等には必ず同窓生の何人かが中核として参加しており、その真摯な活動振りに、深く関係者の感謝と敬意を受けていると聞いております。真に喜ばしいことと言えましょう。

この私達の母校、防衛大学校は昭和27年発足し、来る2002年には創立50周年を迎えることになりました。同窓会は昭和36年1月に発足しています。

私達が自衛官の現職の間は、同窓会に関心を持つことが少なかった様に思います。退職して一般の会社に入ってみますと、同窓生の有難さが身に染みてきます。青春時代を共に過ごしたというだけで、理解し合えるものがあり、嬉しいものです。

定年で退職する者が、続々と出て来るようになって、同窓会のあり方が見直されたのは自然の成り行きであったと思います。平成8年になって新しい構想で運営されるようになりしました。その活動の一つとして、同年、同窓会は佐久間委員長を中心とする創立記念事業委員会を設立し、事業の決定と、その費用の募金をしてきました。各種の事業は、ほ

ぼ固まり、本年度予算で事業に手をつけるところまでできました。来年、創立記念式典が行われる11月までに、完成を目指して鋭意努力をしているところでです。

母校の創立を記念して、何かをやりたいという気持は、私たちの様に自衛隊を離れた者と、未だ現役で活躍している現職とは、温度差があることは理解できます。この募金については、大方の賛同を得ていることなので、何卒宜しくお願い致します。

同窓会として、考えなければならぬ問題が2つあります。その一つは、これから、次々と定年で自衛隊を離れる者が出てきますと、現職の者との構成比率が、同等に近くなっています。現職の方々に同窓会について関心を持つて頂かないと、退職者のための同窓会ということになり兼ねません。是非、現職の皆さんに同窓会活動への参加・協力をお願いいたします。参加・協力できる様な、具体的な活動の提案をお願いしたいと思います。次の問題は、会費です。入会費ということですが、一度に納めて貰っています。入会するに相応しい魅力のある同窓会でなければならぬのです。そうでないと、同窓生ではあるけれども、同窓会の会員ではないという人が増えてしまいます。

新たな構想で同窓会活動が再出発してから、五年目に入りました。

これまで、漠然とした地域的な同窓生の集まりであったのを、まとまり易い地域支部として、現役と退職者で支部を設立してきました。北海道、東北、中部、関西、中国、九州、沖縄で支部が設立されました。関東地区は会員が多いため、支部の設立が遅れています。現在、考え方をまとめているところでです。

外国では最初、一昨年11月、33名の卒業生でシンガポールに、そして昨年8月、88名でタイ王国に支部が設けられました。それぞれの国に忠誠を誓いながら、日本への想いで繋がり、自信をもって祖国の平和と繁栄に活

躍している留学生の様子を見て感動しました。卒業後、少なくとも一度は日本に招待し、更に強い繋がりを持ちたいと感じた次第です。

昨年、初めて一期生が、学校長の招待でホーム・カミング・デー行事に参加し、第44期生の卒業式に立会いました。最近の世相とは掛離れた厳肅さの中で、しばし来し方を想い、感慨に耽りました。卒業以来初めてとか、嫁、孫に学校を見てもらっている者等多士済済で、実現して頂けたことを嬉しく思いました。今年は二期生の番ですが、昨年以上の成果を期待しています。

同窓会の行事である、四月の短艇競技、五月のテニス大会、九月の囲碁大会、それに十月のゴルフ大会は順調に行われています。現役が参加できる機会は限られており、退職者でも、ごく一部の同窓生しか参加できていないことは残念です。年々、裾野を広げ希望者はなるべく多く参加できるようになることを期待し願っております。この一部の人の参加でも、ボランティアで構成する事務局はフル回転で、各種目の会員の積極的な活躍と期生会の協力がなくては、同窓会の行事は発展して行かないと感じています。

その他に、コンピューター・ネットを使った防衛に関する意見交換の場の発足とか、防衛問題に関する出版への助成とかが考えられています。

今年は、プリ創立50周年の年です。50周年のリハーサル的年ともいえます。同窓生一人一人の同窓会事業への積極的な姿勢こそが、21世紀に突入して行く同窓生の心意気を示すものと考えます。その盛り上がりの中で、創立50周年の年を迎えたいと思います。最後に、同窓生各位並びにご家族のご健康とご多幸を祈念申し上げます。

同窓会記念事業

記念事業委員会

1 全般

平成十二年は、募金活動を終える時期に当たると最終的な募金依頼を実施しました。また、現在までの醜金状況を基礎として、各記念事業の予算を概定し事業を具体化するのための見積り作業を開始し、順調に進んでおりました。

ところが、昨年八月中旬以降、平山画伯の協力を得ることに反対するごく一部の活動が顕在化し、同画伯に直接的な迷惑をお掛けする事態となりました。このため、平山画伯に対する協力依頼を断念せざるを得ないと判断し、十二月七日の代議員会で承認を得たところでありました。

誠に残念な結果となりましたが、防大五十周年の節目は二年後に迫っています。委員会としては、計画を再構築し記念事業の成功に向けて努力を続ける所存であり、引き続き同窓生の皆様の積極的なご協力、ご支援をお願い致します。

2 記念事業の進捗状況

(1) ステンドグラス

○ 委員会は、平山画伯の原画をステンドグラスとして多目的講堂の正面に掲げる計画を記念事業の中心と位置づけ、多くの同窓生の賛同を得ながら取り組んでまいりました。したがって、このような事態に至った経緯を明らかにする責任があると考え、以下に記すことに致します。

○ 平山画伯は、私達同窓生が生きてきた時代を代表する日本画家の第一人者であり、加えてご自身の体験を踏まえた芸術を通し

ての国際平和を求める行動、防大卒業式における祝辞等で示された自衛隊に対する深い理解等から、記念事業に対する協力を得られる最適任者として原画作成をお願いし、内諾を得てきました。

○ しかし、一部の同窓生から、平山画伯が特定の国との友好活動を行っておられるとして、同画伯に対する記念事業協力依頼に反対する意見が出てきました。

委員会としては、反対意見を聞きながら、同画伯に対する誤解を解く努力を行うとともに、同窓生等の議論、説得によって理解が得られるものと判断し、同窓会の承認を得て事業を進めてきました。

○ ところが、ある同窓生が反対意見を雑誌に投稿するとともに、同趣旨の文書を配布し、その中に連絡先として防大、同窓会本部及び平山画伯、委員長の自宅の電話番号が記載されていました。その後、同窓生以外の方による脅迫まがいの電話が画伯のご自宅にかけられるようになり、平山画伯から記念事業に対する協力辞退の申し出がなされました。その理由は、同画伯に対する誤解に基づく一方的な非難が行なわれたこと、それによって同画伯のご家族が危険を感じられるに至ったこと、芸術の世界に政治的な論議を持ち込んだことが挙げられています。

○ 同窓会記念事業に対する協力を、善意に基づくボランティア活動として承諾された平山画伯にご迷惑を掛ける行為はあってはならないことであり、またこの事態がさらに紛糾することによって防大同窓会ひいては自衛隊の体質に対する国民の批判が生

じたり、防大創設五十周年というお祝いの事業が論争を抱えたまま推移することは避けるべきであるとの判断から、平山画伯への協力依頼を断念することに致しました。結果としては、誠に残念の極みであります。

○ 一方、防大が建設を進めている多目的講堂は本年末には完成の予定であり、その入口正面にステンドグラスを設置することを前提にして設計、建築が行われていることから、防大当局はその実現を求めています。また、ステンドグラス制作を依頼してきた清家先生をはじめとする関係者は、同窓会の記念事業に対して引き続き協力することを承諾されました。委員会としては、講堂正面にステンドグラスを設置する構想を実現するための計画を検討のうえ、代議員会に報告する予定であります。

(2) 中央広場の彫刻像

多目的講堂の前庭として整備される中央広場に設置する予定の彫刻像については、防大当局と調整しつつ、モチーフの確立、イメージの確認に資するデッサン作成を複数の作者に依頼しましたが、結論を得るに至りませんでした。今後、モチーフについては日本唯一の軍学校としての特質、すなわち文武の両立、陸・海・空の統合、国際性、平和の確保と、学生歌、学生綱領、若人、自主自律等の考慮事項を踏まえながら、現在活躍中の各彫刻家の作風を確認のうえ、制作を依頼するための人選を進めることにしています。

(3) 顕彰室の整備

防大当局から顕彰室のモニメントとして三案が提示されており、これらのイメージの優劣、所要経費等について検討を経て結論を得る予定で、作業を進めています。

(4) 記念ビデオの作成

五十周年を機に卒業生の思い出の記録(仮題:防大五十周年の歩み)を作成し、希望者には一千元程度の価格で頒布するための準備を進めたいと考えています。ビデオの資料提供は防大勤務者OBの久保田氏の協

力を得るものとし、ベースとなるシナリオを検討した後に、業者に依頼して本年春頃に作成を開始する予定です。

(5) 記念講演会等

五十周年にふさわしいテーマを選定し、講師またはパネラーを選考して中央における記念講演会等を開催するための検討を進めています。また、これとともに地方における講演会等の実施についても検討することとしています。

(6) 記念マーチの作成、贈呈

五十周年記念マーチの作成については、防大吹奏楽部OB会が主体となつて事業を進める方向で作業を進めています。

(7) 人材活用機構(サイバー・インスティテュート)の創設

安全保障・防衛等に関する同窓生の知見を活用するためのコンピュータ・システムの創設について研究し、同窓会による設置・運営が可能な場合はその創設のための資金提供を準備することを検討しています。

(8) 醜金者名簿の作成、醜金者に対する小記念品の贈呈

平成十四年秋に実施が予期される記念行事に間に合うよう準備を進めることにしています。

3 募金状況

募金期間は平成十三年三月末までとなっていますので、昨年六月末に今まで募金に応じられていない同窓生を主体に最後の協力依頼を行いました。

募金目標額は一億二千万円ですが、現在の醜金総額は一億八百万円を超えました。期別、陸・海・空別の醜金状況は別表のとうりであり、若年期の参加状況がやや低いようです。残された募金期間内での現役組の協力を期待しております。

なお、醜金された浄財は、全額が銀行口座で厳重に管理されていることを再度報告させていただきます。

防大五十周年記念事業募金状況

(平成12年11月21日現在)

期	対象者数	募 金 者 数				合計	応募率%	募金額 (×1000円)
		陸	海	空				
1	299	151	61	46	258	86.3	5,700	
2	308	147	46	46	239	77.6	5,120	
3	447	151	56	90	297	66.4	6,500	
4	419	148	49	76	273	65.2	5,680	
5	491	126	50	73	249	50.7	5,210	
6	427	117	59	87	263	61.6	5,430	
7	419	131	55	56	242	57.8	5,045	
8	414	103	44	59	206	49.8	4,050	
9	424	103	57	59	219	51.7	5,190	
10	442	114	50	61	225	50.9	3,870	
11	462	101	57	56	214	46.3	3,660	
12	417	100	48	57	205	49.2	2,710	
13	403	99	40	60	199	49.4	2,340	
14	461	117	66	85	268	58.1	3,052	
15	401	122	53	54	229	57.1	2,495	
16	402	111	35	58	204	50.7	2,290	
17	455	110	56	58	224	49.2	2,390	
18	399	87	57	55	199	49.9	2,110	
19	413	104	36	55	195	47.2	2,090	
20	356	83	37	37	157	44.1	1,625	
21	465	84	57	38	179	38.5	2,040	
22	431	75	62	38	175	40.6	1,824	
23	378	70	34	36	140	37.0	1,545	
24	417	65	46	31	142	34.1	1,450	
25	374	76	47	32	155	41.4	1,630	
26	469	85	63	45	193	41.2	1,995	
27	364	48	63	23	134	36.8	1,480	
28	403	62	45	32	139	34.5	1,450	
29	414	63	38	28	129	31.2	1,325	
30	369	40	31	24	95	25.7	1,040	
31	396	56	34	31	121	30.6	1,240	
32	334	48	22	32	102	30.5	1,040	
33	378	68	27	29	124	32.8	1,280	
34	354	58	20	46	124	35.0	1,272	
35	439	55	26	29	110	25.1	1,161	
36	340	32	21	28	81	23.8	840	
37	366	33	21	26	80	21.9	800	
38	425	34	19	29	82	19.3	740	
39	338	41	18	29	88	26.0	840	
40	376	26	14	45	85	22.6	820	
41	403	94	41	29	164	40.7	1,465	
42	407	13	2	4	19	4.7	200	
合 計	16,899	3,551	1,763	1,912	7,226	42.8	104,034	

備 考	1. 募金総額	105,379,133円	2. 募金への御協力をお願い致します。 (期限 : 平成13年3月末) 現役1口 OB2口基準(1口1万円) 郵便局振替口座番号 00150-6-352140 加入者名 防大五十周年記念事業委員会
	(1) 団 体	882,719円	
	① 真駒内	400,000円	
	② 勝 田	185,058円	
	③ 府 中	103,634円	
	④ 24期生	194,027円	
	(2) 未確認募金者等	462,414円	

小原台は今

防衛大学校訓練部長 海将補 小林 拓雄

平成14年に創立50周年を迎える本校では、現在施設の老朽更新が進んでおり、平成12年度中に本館が元の場所に完成する予定です。また本館と時計台の間には多目的ホールと図書情報館を建設中であり、50周年に合わせて完成する予定です。

これに引き続くものとして、14年度から学生舎を立て替えるべく計画中です。学生舎生活を通じて行われる教育補導は、防大生教育の三本柱の一本であり、その重要性は今後も変わるものではありません。諸外国の士官学校における学生舎の位置付けも同様であり、学生舎生活を通じて将来国防の任務を負うリーダーの素質が育成されると言えると思います。

従って新学生舎の整備にあたっては、如何なる要件が満たされるべきであるか十分な検討を行い反映させる必要があるとの観点から、幹事を委員長とする学生舎整備委員会を発足させ、作業を実施しているところです。これまでに本科卒業生約1万9千人を送り出した学生舎がありますが、その部屋編成は社会環境の変化や、卒業生に求められる資質についてのさまざまな検討を反映しつつ、まさに試行錯誤してきました。その足跡は次のとおりです。

小原台に現学生舎が完成した昭和30年から53年までの四分の一世紀は、8人部屋が続いたわけでありませんが、その中でも当初の学年・要員混合部屋から同一学年・要員混合部屋へ、次いで学年混合・単一要員部屋を経て再び学年・要員混合部屋へと変わりました。昭和54年に8個学生舎体制となり、1室4人の学年・要員ともに混合の部屋編成を1年間

とつた後、同一学年、要員混合の4人部屋制が8年間続きました。この後昭和63年から逐次同一学年・要員混合の2人部屋制へ移行し、平成8年までこの部屋編成が続いた後、平成9年からはまた室員4人の学年・要員混合部屋の編成に戻って現在に至っています。

半世紀に及ぶこれらの経験を生かすとともに、これからさき育ってくる青年の特質を予測し、本来防大生が卒業時に保有すべき資質を育てるために、必要な学生舎の機能等は、どのレベルに持つてゆくべきか、まさに今検討の最終段階に入っています。現在母校の職員としてその計画に携わることになった我々は、今後少なくとも50年間は使われることになるであろう新学生舎のアウトラインとして最も適切な姿を導くよう尽力しています。

検討の中では、諸外国の例も参考にすべく情報収集しています。その結果によりますと、諸外国の士官学校ではほとんどが同一学年の学生2ないし4名で1室を構成させている状況です。これは過去防大が一時期採用したもののさまざまな理由から再び別の方式に変更したものであります。また上級生と下級生の関係についても調査しましたが、上級生による下級生指導方式を採用しているところはどちらかといえは少数派であり、中には各学年間の交流にはほとんど意を用いていない国もあるなど、防大の伝統的學生舎指導理念と大きく異なり、直接参考にならないところもありました。

外国にならって、学生特に下級生にゆとりを持たせるとの考え方から、一時期同一学年2人部屋に踏み切ったものの、団結の低下、リーダーシップ養成の不充分等ネガティブな

傾向が顕在化したことは、特徴的なこととして記憶に新しいところです。現代日本の幼年期から少年期における家庭教育と、外国のそれとの違いからくる入校生の素質における潜在的な違いが問題の根底にあるものではないかと思えます。

また学年混合の多人数部屋に戻さなければならなかったことについては、欧米では民間の会社もオフィスは個室タイプにしているのが普通であるのに対し、日本では大手の会社でも未だに大部屋制度であるという例が示すように、上下関係のあるグループの中での公私にわたる日常の接触が、日本人の組織の一人としての能力をうまく活性化するのはないかとも思えます。

2人部屋から4人部屋へUターンして4年目となりますが、その当時学生間で燃え上がった不満の声も、今やロッカーの中の記録に残るのみとなりました。更に今年度は1学年が多数入校したことから、現在実質的には5人以上の部屋が全体の31パーセントを占めるに至っていますが、学生はがんばっています。学生舎整備委員会では、防大初期のころの8人部屋も検討の対象に含めて、人間文化学科の先生も委員として参加して検討中であります。

同窓生の皆様には、部隊勤務等を通じ学生舎のあり方について様々なお考えをお持ちのことと思います。本件についてご意見をいただければ幸いです。

部屋編成の変遷

	大部屋	8人部屋	4人部屋	2人部屋
S28～29	○			
S30～31		○		
S32～39		△		
S40～47		□		
S48～53		○		
S54			○	
S55～62			△	
S63～H4			△	→ △
H5～8				△
H9～			○	

○：学年混合、要員混合 △：同一学年、要員混合 □：学年混合、単一要員

●日米学生会議の防大研修●

日米学生会議のメンバー26名が 本年も防衛大学校研修に来る。

防衛大学校 防衛学教育学群 新治1佐 (13期航空)

第52回日米学生会議実行委員長、慶応大法
学部政治学科3年〇〇学生から5月8日、丁
寧な防大研修の依頼状をもらった。内容は、
昨年、第51回メンバーとして防大を研修し貴
重な交流の場を設けて頂いたとする御礼にと
もに、今年度も、防大研修は日本側参加者の
準備活動に欠かすことができない最も重要な
活動と言っても過言ではないので、昨年度と
同様に研修の機会を設けさせて頂きたいとい
う依頼であった。

日米学生会議は、日本と米国の優秀な学生
代表各30名が、政治・経済・文化・安全保障
などの諸問題について自由・対等の立場で約
1ヶ月間米(日本)国内を旅行しながら議論
する会議であり、日米相互に隔年ごと実施さ
れる。歴史は古く1934年に始まり第二次
世界大戦の中断を経て1964年以降毎年実
施しており、第52回目当たる本年は、7月
21日〜8月21日、ハワイ大学、ワシントン、
ニューヨーク、ハーバード大学などで行われ、
外務・文部省、米国大使館などが後援してお
り、宮沢元首相やキッシンジャー氏などもこ
のメンバーだったと言われる。松本前校長
も「この会議のメンバーになることは将来に
わたって勲章になるよ、防大生も参加させて
やりたいね」と言っておられたような優秀な
メンバーが集まる会議である。

防大では、防衛学教育学群が主体となって、
平成8年度以降、日米学生会議に参加する日

本側の一般大学生の要望を受け、毎年6月に
約半日間、約20名を防衛学に関する事前勉強
のために受け入れている。昨年度実施したそ
の一般大学生の所感の一端を紹介すれば、
「これを有意義と言わずに何を言おうといっ
た感じです。こんなにも純粋に国のことを考
え、魅力的で明確な意思を持つ学生に出会っ
たことを本当に幸せに思います。感動しまし
た(筑波大人文2年)」としており、毎年、
その評価は高まっている。それが証拠に、初
めは12名で始まった研修が年々増え、5回目
に当たる今年は26名(日米学生会議メンバ
ー約30名の内概ね全員)が来ることとなり、毎
年、北海道から沖縄までの一般大生が半日の
防衛学ゼミや討論などのために、前日は東京
のホテルに泊まり、自主的に時間と交通費を
使って研修に来るのですから――。(従って、
一度でも防大に研修に来て学生が有意義と感
じなかつたら二度と来なくなる)

6月16日、東大×9、慶応×10、早稲田大
院×1、中央、青学、法政、明治、立命館、
千葉×各1の計26名の学生が来校した。当日、
11時〜18時の間、概況説明(防衛学、軍事力
を学ぶ必要性について)、防衛学ゼミ聴講
(戦史、戦略、統率など)、本科学生との討論
(日米関係等)など実施した。

終了した後の研修生の所感は、「防大訪問
は有意義、貴重な経験、新鮮等」15名、「防
大生は規律正しい、国防の意識が高い」10名、

「防大生は明るく、気さく、10名、「このよう
な機会を増やしてもらいたい、また訪問した
い」14名であった。一方、防大生側は、「レ
ベルの高い一般大学生と接して刺激を受け
た、有意義であった」15名、「討論を通じて
勉強になった」15名、「彼等に親近感を持て
た」6名、「今後も実施したい」11であった。

特に、研修生の所感は防大生などに自信を
つけさせるもので、例えば、「日本の社会の
中で軍事という存在があるということがとて
も新鮮だった。国際社会を考える上で絶対に
忘れてはいけないファクターであったにもか
かわらず、今まで考えず、むしろわざと目
をむけていたように思う。防大生は、さわや
かな人達だった。きびきび、さばさばしてい
て話していて気持ち良かった。むしろ国防を
担っている人々の方が良く勉強しているよう
に思う(東大)」「安保一つをとっても上の空
で議論している僕らとは意識が違う。先生の
気合いも自分の学校とはレベルが違った。も
っと議論をしたかった。特に憲法に対する意
見、安全保障、他国の脅威が細かく説得力が
あった。学生間の仲が良さそうで、先生・学
生同志の熱さに圧倒されてしまいました(慶
応)」「防大生は学生でありながら社会的責任
を負っているという自覚があり、素晴らしい
と思いました。自分の周りには、大学生とし
ての業に誇りと目的意識を持っている学生は
あまりいない。その点で貴重な存在だと思
います。きれいに線の入ったシャツの防大生の
自信が伝わってきて自分の生き方を大切にし
ていると感じた(早稲田大院)」「防大生から
学びたいこともまだまだたくさんあるし、こうい
った機会を通じてもっと高めあっていたら
いい。一般の学生にも防大の授業内容(国防論
等)へのアクセスを得るチャンスが与えられ
るべきだ(東大)」

「学生の方々の日本を代表する意識、背負
っているという意識の高さ、それを実際に外
部から求められているということをきかせて

頂き印象的であった(慶応)」「各教官のお話
を聞いていても日本の防衛に関して、プロフ
ェショナルな見識と熱い思いを抱いておられ
るのを感じる事ができました。防大生の
方々の深い見識と考えを聞くことができて大
変有意義であった(慶応)」「時間厳守や授業
にきちんと出るなど当然のことなのに普段私
達が守れていないことを日常のこととしてい
る人達に会い、良い刺激になった(中央)」

「大変充実したものだ。改憲派の僕とし
ては、9条の問題について色々聞けて良かつ
た。1人の防大生が9条の問題があってもそ
れを声高に叫ぶのは軍人の役割ではないとい
う言葉は強く印象に残った。規律がしっかり
していて大変感動しました。自国を守るとい
う意識が強く尊敬に値する人達でした(慶
応)」などであった。

彼等は、離校する時最後の瞬間まで写真な
ど撮って防大生と離れ難く、パスが発進し自
然に防大生が「帽フレ(帽子を振る挨拶)」
の動作をする熱いまなざしで素晴らしいと
いつていた。パスの中で「本日の研修につ
いて勉強になった人は？」と尋ねると、全員が
手を上げ、中には両手を上げる男子学生も数
名いた。彼等は、「これからも防大、日米学
生会議の交流を是非続けて行って欲しい。国
際関係や安全保障に興味がある学生にとつて
こんなに刺激的な場はない」としていた。そ
れらを聞きながら、彼等以上の優秀な学生は
我が国に少ないだろうし、その学生が防大を
高く評価してくれており、改めて防大の教育
は素晴らしいと防大生とともに我々は自信を持
つべきであると感じた。

研修後直ちに、日米学生会議実行委員長か
ら6月19日付「今回の訪問では先生方より大
変勉強になるお話を頂戴し、優秀な防衛大学
校学生達と意見を交わすことができ参加者一
同感謝の気持ち一杯です。今後とも日米学生
会議との関わりを続けて欲しいです」という
礼状を頂いた。

日米学生会議参加学生の

防大来校後の所感を読んで

学生隊学生長 4学年 水越 洋光

なお、防大では、この日米学生会議のメンバーとして2年前(平成10年度)に防大を研修した東京大学法学部4年学生の「私は、二年前、日米学生会議のメンバーとして防衛学を研修させて頂き大変感銘を受けたので、来年度大蔵省に入省することになったのですが、私と共に大蔵省に入るメンバーを連れて再度研修に行きたいのですが受け入れて頂きたい」という要望を受け、平成12年1月21日、東大・7、京大・1、一橋・1、早稲田・1、慶応・1、大阪・1の計12名の国家公務員試験一種採用試験合格、平成12年度大蔵省採用予定者の研修を実施した。日米学生会議と同じ内容を実施した後の所見は日米学生会議同様素晴らしいもので、例えば「自分にとって、本当にためになる勉強をさせて頂き感謝しています。これから国の仕事をして行く上で欠かせないファクターである軍事について勉強するきっかけとなりました。防大は大学生としての勉強、部活等をこなした上で、さらに自分の国について考える環境が整っており素晴らしい(慶応)」「防大生は毅然としていて感銘を受けた、特に、自分の意見をしっかりと持ってそれを表現できる点を尊敬する、非常に勉強になった。今後お互いに一生涯連携をとって行くべき(東大)」などであった。彼らは離校するとき「有意義であったので来年(今年)の大蔵省採用予定者にも必ず申し送るのでよろしく願います」といっていた。本年度も1月頃研修に来ると思われるが、彼ら以上に優秀な学生は我が国にいないであろうし、その学生が防大生を多大に評価してくれており、国家、防衛庁のためにもなり、この関係も大切にすべきと考えている。

防大の教育は、意識の高い学生から高く評価されつつあり、我が国は望ましい姿になりつつあるのではと感じています。

来校者の所感を読むと、例外なく、防大への来校を有意義であると答えている。何が「有意義だった」と感じさせたのか考えてみる。

まず一つの要因として、イメージがあるだろう。我々にも同じことが言えるのだろうか、一般大学生達は防大生を「堅物」、「みんな同じ意見を持っている」というイメージを持っている。しかし、彼らの目に映った我々の姿は、「普通の人」、「親近感が持てた」というものであった。一般大学生と同じフィールドで話し合うことが出来たのは、紛れもなく防大教育のためであると言える。

次に、来校者は我々と視点が異なっていることに新鮮な印象を持ったと窺える。一般大学生はその特質からも、まだ、目が自分の回りにしか向いていないように感じる。しかし、防大生の目は世界とまでは言わないまでも、日本・国家に向いていると彼らの目には映ったようだ。同じ年のそれと同じ学生という身分で、これ程までに意識しているものに違いがあることに對して、彼らは我々に對し新鮮な印象を持ったのではないか。

三点目として、一般大学生も程度の差はあるにせよ、国防・防衛問題に関心があるという点だ。一般大学では教育の機会がほとんど無いにもかかわらず、防大では教官も熱意を持って教育し、学生も関心を持って国防・防衛問題を学んでいる。その中に一般大学生が入り込んだことで、眠らされていた「関心」が蘇ってきたのだと考える。

一般大学生の目には、以上のように我々は映り、「また、このような機会を是非提供して欲しい。」

「もつと多くの人に、防大を開放すべきだ」、「もつと多くの防大生と話をしたい。」という所感が出てきたのではないか。

続いて、防大生の所感を読んでみて感じたことを述べる。防大生も、この懇談を非常に有意義であったと述べている。それはなぜかを考察してみる。

まず、物事を観察する際には、いろいろな切り口が存在する。しかし、防大という閉鎖社会で生活することで、知らず知らずのうちに視界が狭くなってしまっているのではないか。この懇談は、我々に色々なものの見方があるのだということ認識させたと思う。また、4学年ということもあり、防大生として凝り固まった考え方を再考する良いチャンスになったのだと思う。

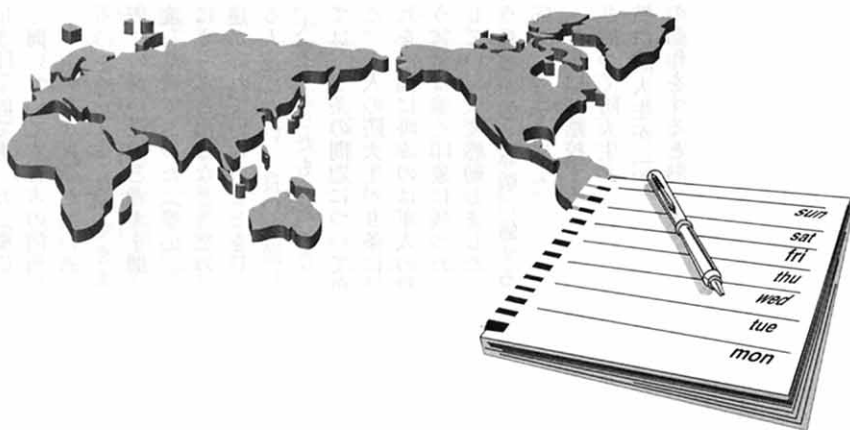
次に、この閉鎖された空間で生活していると疎外感を持ってしまいがちだが、来校した多くの一般大学生が防大に対して大変強い関心を持ってくれたことにより、非常に励みになったと思われる。

また、今回は日本でもトップレベルの優秀な学生が来校されるということで、引け目を感じていた学生も少なからずいたようであるが、議論をしてみても対等に話し合えたことで、防大生として非常に自信が持てたようであった。

更に、防大生は受け身の生活をしていることを感じ取った学生がいたことも大きな成果

と言えるだろう。なぜならば、我々は規則の中で、その規則に安易に頼って生活している面がある。一般大学生は、自分のすべきことを、自分で見つけて積極的に行動しなければならぬからである。

このように、来校者だけでなく、防大生にとっても非常に良い経験となったことは確かなのである。この貴重な機会を今後も断ち切ることなく、続けていかなければならないと、参加学生は感じていると私は受け取った。



第6回
国際防衛学
セミナーについて

現代士官学校に
おける統率教育

26期 坂野 予彦

はじめに

「防衛学教育の充実・発展及び参加国とわが国との安全保障に関わる相互理解並びに相互啓発」を目的とし、平成12年7月11日（火）から20日（木）までの間、アジア・太平洋地域14カ国代表者の参加を得て、第6回国際防衛学セミナーを実施しました。本セミナーは期間を前・後段に区分し、前段に研究会、後段に研修等を行いました。

今回のセミナーは、統率・戦史教育室長が実行部会長としてセミナー全般の計画・実施を担当し、私は企画係として参加いたしました。本稿では、企画係から見た第6回セミナーの概要を紹介したいと思います。

1. 実施の概要

本セミナーには、招待国14カ国全てからの代表各1名とシンガポールのオブザーバー1名、並びに、日本から他大学教授等2名及び防衛大学校教授等13名の、計15カ国30名の参加を得て行われました。

前段の研究会においてはメインテーマを「現代士官学校における統率教育」、サブテ

マを「リーダーシップ教育の意義・重要性」「リーダーシップ教育の現状と問題点」及び「将来のリーダーシップ教育のあり方」とし、現代の士官候補生を取り巻く社会環境等の変革が世界規模で急速に進む中、士官候補生に対してリーダーシップ教育をどのように行うべきかについて発表・討議を行い、それぞれ国の士官候補生教育の充実に役立つ意見の交換を行うとともに、参加各国の相互理解を促進することができました。

また、後段の研修等においては、海上自衛隊幹部候補生学校等及び広島・東京・横須賀地区の史跡を研修し、防衛大学校卒業後の幹部候補生教育の状況及び日本の伝統について理解を深めることができたと思います。

2. 研究会の概要

(1) 全般

研究会は、7月12日（水）から15日（土）の4日間にわたり、基調講演及び2コセッションに区分して実施されました。はじめに基調講演において、「防衛大学校におけるリーダーシップ教育の現状・問題点」と、「将来のリーダーシップ教育の在り方」等について報告し、それに対する質疑応答を行いました。その後、第1セッションでは「リーダーシップ教育の意義及び教育の現状・問題点」について、また、第2セッションでは「将来のリーダーシップ教育の在り方」について焦点を絞り、発表・討議を行いました。

(2) 基調講演

防衛学教育者群の高橋1佐が「防衛大学校におけるリーダーシップ教育の意義及び現状」と「21世紀のリーダーシップ教育を取り巻く環境の変化とこれに必ずする教育」を内容とする基調講演を行い、防衛大学校における統率教育の現状と将来への対応を紹介し、じ

各国士官学校で養成目標としているリーダーシップのレベル

	小隊長 レベル	中隊長 レベル	大隊長 レベル	連隊長 レベル	団長 レベル	全
オーストラリア	○					
カナダ	○					
中国					○	
インド				○	○	
インドネシア	○					
マレーシア		○				
モンゴル					○	○
韓国					○	○
ロシア			○			
シンガポール	○	○	○			
タイ				○		
アメリカ	○					
ベトナム				○		
日本						○

フィリピンを除く

各国士官学校におけるリーダーシップ教育の核心となる資質

核心要素	規律心	使命感	真勇	積極性	正直
国数	12	10	10	9	8

複数回答で回答数の多い要素を抜粋

後の討議における主要論点を提起しました。

「防衛大学校におけるリーダーシップ教育の意義及び現状」においては、特に教育上の課題として、宗教観が希薄とも言える日本の社会において、死生観を如何にして確立することができるか、また、自衛官として何を忠誠の対象とすべきかが問題点として挙げられ、参加者の問題意識を喚起しました。

「21世紀のリーダーシップ教育を取り巻く環境の変化とこれに必ずする教育」においては、国際社会の変化、軍事力を構成する人的資源の質的・量的変化（現代青年の価値観の多様化、女性兵士の増加など）並びに軍事におけるハイテク化と高度情報化が統率教育に及ぼす影響とこれへの対応を紹介し、その後の各国の発表においても、これらに関する多くの

意見が出されました。

(3) 第1セッション「リーダーシップ教育の意義、及び教育の現状・問題点」について

マレーシア、韓国、ロシア、モンゴル、シンガポール、フィリピン、ベトナム、中国及びオーストラリア（発表順）の各国代表が発表を行い、各国の歴史と伝統に基づいた統率教育の現状が紹介されました。

教育の意義において、各国士官候補生教育で養成目標としているリーダーのレベルの捉え方には「小隊長レベル」から「旅団長以上のレベル」まで幅広く、また、リーダーと軍隊の指揮官の相違が指摘される等、リーダーシップ教育の意義に対する考え方については

各国とも特色がありました。しかしながら、リーダーシップ教育の核心となる資質についての認識は概ね一致していました。また、教育の現状・問題点については、文化の相違、世代間の相違や価値観の多様化等、現代社会が多様化する現状を容認する一方で、教育においては本来の原点を認識する必要性や、軍事における革命（RMA）、国際化の進展などの環境は変化してもリーダーシップには不変の価値が存在することを指摘する意見が出されました。

リーダーシップ教育において、各国は理論教育と実践教育の両方に各種施策を講じ、真剣に取り組んでいるが、その中から一端を紹介します。

統率の実践教育において、学生の日常生活は重要な役割を果たしています。このため、各国とも軍隊組織に準拠した学生隊制度を取り、上級生による下級生の指揮や指導・助言の機会を与えて統率能力の向上を図っているのが通例です。しかし、オーストラリア代表は、能力・人格ともに未完成な学生に過大な権限を行使させることの問題点を指摘するとともに、オーストラリア防衛大学においては、2年前から学生隊制度を廃止し、全ての士官候補生は同等であり、候補生間に階層を設けず、指導教官が直接学生指導を行っている現状を紹介しました。これに対して、各国から上級生に対してどのように統率実践の機会を与えるのかなどの質問が出されました。

これに対し、オーストラリアの代表者は学生隊制度に代わるものとして、小隊規模（約30名）のリーダーとして必要な資質・識能の修得を教育目標として、士官候補生を鍛錬するため70コ状況以上のリーダーシップの実践機会を設定している状況を紹介し、理解を得ました。

また、学生居室の構成人員については下段の表に示す様な編成をとり、居室の人員構成については、民族の構成、多言語国等により各

国の特性ある構成となっています。

(4) 第2セッション「将来のリーダーシップ教育の在り方」について

インド、タイ、米国、インドネシア及びカナダ（発表順）の各国代表が発表を行った。各国とも現代の統率教育を取り巻く環境の変化が様々な側面から捉えられていました。

特に、冷戦終結後軍隊の任務が拡大された結果、将校にこれまでと異なる能力が要求され、伝統的な統率教育に代わる新しい統率教育の方法の導入の必要性が確認されるとともに、個人指向の強い現代青年を集団の統制の中に適用させ、さらに自立したリーダーに成

学生居室の構成人員

人員数	1人	2人	3~4人	~10人	30人	30人~
国数	4	*4	*5	1	3	1

*：米国、韓国は学年により異なる。

学生居室の学年構成

学年構成	同学年構成	各学年混成	その他
国数	9	1	1

オーストラリア、カナダ、中国、インド：無回答

各国軍隊において女性軍人の人数が全体に占める割合

割合	1%未満	1~10%	10%以上
国	インド インドネシア 韓国 シンガポール *タイ(0%)	中国 マレーシア 日本	オーストラリア カナダ フィリピン 米 国

*タイは今後も女性軍人の採用は予定されていない。
モンゴル、インドネシア及びベトナムは無回答

長させるための教育の必要性が指摘されました。女性兵士の比率の高い国においては、「女性兵士の強化に貢献している。」、又は、「人口構成上50%を占める女性に平等な地位を与えることは必要」との認識の下、今後さらに女性兵士に門戸を開放することを予定しているとの意見がありました。女性兵士の比率が低い国を含め、女性兵士の増加が統率教育へ及ぼす影響についても関心が集まり、影響を大きいと認識している国9カ国、影響が少ないと認識している国5カ国、無回答1カ国でした。

(5) 総括討議及びまとめ

環境の急速な変化と価値観の多様化に対応

3. 現地研修等

するため「リーダーシップの向上」のため、教官の能力向上や大学教育における人文社会学・自然科学・工学分野を総合的に教育する必要性などが議論され、特に、カナダや米国において、近年コアカリキュラムとして大幅に総合的な教育が取り入れられるという注目すべき傾向が見られました。

海上自衛隊幹部候補生学校においては、防衛大学校における教育訓練と幹部候補生学校における教育訓練の接続について実地に研修することができたとともに日本帝国海軍以来の伝統について研修し、理解を得ることができました。

また、広島・東京・横須賀地区の史跡等を研修することにより、日本の歴史と文化に対する理解を得ることができたとされています。

おわりに

今回は、テーマが5回で一巡したことから第2期の初年度（統率）に当たり、従来の包括テーマである「21世紀に求められる士官像」から焦点を「現代士官学校における防衛学教育」とし、メインテーマを「現代における士官学校の統率教育」とし研究等が行われました。

各国の士官候補生に対する統率教育の在り方において、多くの共通点がある反面、各国の国情、文化等の相違に由来する幾つかの相違点についての理解を得ることができました。また、今後の統率教育における問題点は各国の国情、各学校の目的及び置かれている状況により差異はあるものの、大きな方向については、各国とも共通の認識を持っていることを確認できたことは有意義であったと思えます。

平成12年度運動系校友会活動結果及び部員数状況

(12. 11. 21現在)

校友会名	成 績	部員数		校友会名	成 績	部員数	
		男子	女子			男子	女子
応援団リーダー部 短艇委員会	開校記念祭リーダー公開 全日本カッター競技大会 男女優勝 関東地区新人戦 優 勝	10 72	(9)	銃剣道部	全日本優勝大会・全国寺井大会 男子 大学生の部3位 全日本学生選手権大会 女子銃剣道及び短剣道団体 優勝	38	4
バスケットボール部	男子 秋季関東リーグ戦 5部3位 (Aブロック優勝) 女子 春季神奈川リーグ戦 2部7位	54	11	グライダー部	全日本新人競技会 競技中 久住山岳滑翔大会 女子準優勝 2年内藤	22	4
柔 道 部	神奈川県学生春季大会 団体3位	36	2	ソフトテニス部	秋季関東学生リーグ戦 9部4位	28	
ラグビー部	秋季関東大学リーグ戦3部 6戦1勝5敗	104		ボクシング部	関東大学トーナメント ライト級優勝 3年水野 バンタム級優勝 3年渡邊	45	1
サッカー部	神奈川県リーグ戦 1部4位	60		レスリング部	東日本学生リーグ戦 2部5位	34	
剣 道 部	関東理工系選手権大会 ベスト8	46	5	ボ ー ト 部	東日本大学選手権大会 8位	25	
空 手 道 部	全国国立選手権大会 優 勝 春季関東リーグ戦 1部昇格	52	2	フィールドホッケー部	男子 秋季関東学生リーグ戦 1部6位 女子 秋季関東学生リーグ戦 3部昇格	35	18
バレーボール部	男子 秋季関東リーグ戦 4部2位 女子 秋季関東リーグ戦 9部昇格	26	13	ワンダーフォーゲル部	奥多摩、芦ノ湖、立山、大雪山等 で活動	17	
卓 球 部	春季関東学生リーグ戦 4部昇格	14	1	パラシュート部	日本選手権大会 団体4位 個人Jr.の部 優勝3年種橋 個人女子の部 優勝2年上田	13	3
陸上競技部	関東理工系学生競技大会 男子団体優勝 女子団体準優勝	59	5	準硬式野球部	神奈川7大学リーグ戦 3位	43	
硬式庭球部	男子 関東理工科リーグ戦 6部3位 女子 関東理工科リーグ戦 9部2位	46	9	合 気 道 部	全日本学生演武会出場	68	
硬式野球部	神奈川リーグ戦 (春・秋) 2部優勝	35		体 操 部	東日本学生グループ選手権大会 団体6位	37	6
射 撃 部	秋季関東学生ライフル選手権大会 3部1位	22	3	弓 道 部	秋季南関東リーグ戦 男子 2部2位 女子 2部4位	40	9
山 岳 部	北海道利尻岳、谷川岳、南北アル プス等登山	12	1	少林寺拳法部	全日本学生大会 団体演武3位 神奈川県大会 団体演武優勝	36	3
水泳 (競泳) 部	東部国立大会、 男子9位 女子6位	39	5	フェンシング部	関東学生選手権大会 フルーレ 4部3位、 サーブル及びエペ 3部3位	35	
水泳 (水球) 部	関東学生リーグ戦 2部5位	22		ウェイトリフティング部	神奈川県社会人選手権大会 62kg級優勝 3年甘利、 77kg級優勝 3年加治屋 85kg級優勝 3年豊釜	25	1
ハンドボール部	秋季関東学生リーグ戦 5部4位	21		相 撲 部	東日本学生選手権大会 Bリーグ昇格 (Cリーグ準優勝)	21	
アメリカンフットボール部	関東学生リーグ戦 1部Aブロック7位	102		自 動 車 部	全国学生選手権大会 Bクラス昇格 (Cクラス優勝)	16	
ヨット (小型) 部	関東学生選手権秋季大会 470級11位 スナイプ級9位	14	2	バドミントン部	秋季関東大学選手権大会 男子 5部B準優勝 女子 4部昇格	19	5
ヨット (クルーザー) 部	関東フリートレース 8位 イタリア海軍兵学校・リボルノ市 共催国際レース 総合30位 士官候補生の部8位	23		居 合 道 部	自衛隊全国大会 団体準優勝	16	4
				吹 奏 学 部	横須賀港祭り、定期演奏会	20	9
				儀 仗 隊	自衛隊音楽祭り	45	5

第4回 期別対抗ゴルフ大会

10期 田尻 洋介

恒例のゴルフ大会が、平成12年10月23日(月)に千葉カントリー・川間コースで開催された。今年から、1期生から10期生までの参加となり、阿部博男同窓会会長をはじめとする約100名の選手による大会となった。

当日は生憎の雨のため、最終ホールではボールも見えない悪コンディションであったが、各選手は奮戦し、普段の練習の成果を十分に発揮して競技を終了した。競技は例年通り団体戦で、グロスの部とネットの部(新ペリア方式)の2部門で争われた。各期10名の選手の内、



グロスの部団体優勝 4期生チーム



ネットの部団体優勝 10期生チーム

上位7名の合計スコアで2部門の順位を決定した結果は次の通り。

グロスの部

優勝 4期生チーム 平均86・6
準優勝 6期生チーム 平均87・1

ネットの部

優勝 10期生チーム 平均73・8
準優勝 9期生チーム 平均74・1

表彰式の後、懇親会を実施した。来年は11期生を迎えて、楽しく、賑やかに開催することを誓い合いゴルフ場を後にした。

▶松崎同窓会副会長とシニアリーグで優勝した2期生チーム



▶レギュラーリーグで優勝した10期生チーム



第3回 期別対抗テニス大会

10期 吉田 顯彦

第3回同窓会テニス大会が、6月4日快晴の母校防大のテニスコートで開催された。大会は、開会式に先立ち現役防大生とOBとのエキシビジョン・マッチが実施され、和気調々のうちに現役とOBとの絆を強めた。九時二十分から開会式が行われ、大会会長(松崎充宏同窓会副会長)、金井喜美雄防大副校長(4期選手)の挨拶、井川 宏競技運営委員長(2期選手)の競技要領説明の後、昨年2連覇を達成した7期生から優勝杯が返還され、大会が開始された。

選手数の増加(10期生の参加)に伴い昨年と試合要領を一部変更し、1期〜10期の10個チーム(各チーム、ダブルス5個組)を1期〜4期のシニアリーグと5期〜10期のレギュラーリーグに区分して、シニアリーグは4個チームによるリーグ戦を、レギュラーリーグはAブロック(3個チーム)、Bブロック(3個チーム)毎に予選リーグ戦を行い、両ブロックの1位、2位、3位同士による順位決定戦を行うこととされた。この結果、シニアリーグの優勝は2期、レギュラーリーグの優勝は初参加の10期となった。熱戦間、西原 正防大校長の視察・激励を頂いた。試合終了後、学生会館で実施

された表彰式・懇親会は、各期選手及び家族など130名が参加し、龍岡資臣競技運営委員(7期選手)の成績発表、松崎大副会長からの優勝杯授与に引き続き、阿部順治大会副会長代理(1期選手)の音頭による乾杯をもって懇親会が開始された。表彰式・懇親会には金井副校長、八尾 隆硬式庭球部監督及び本大会のため休日を返上して支援に当たって呉れた学生諸君を交え和やかな雰囲気の中に反省会が行われた。本大会準備・実施の原動力となった同窓会小原台事務局の諸官はじめ、賀好泰文庭球部顧問(37期)に感謝したい。

シニアリーグ

1位 2期生 3戦全勝
2位 4期生 2勝1敗
3位 3期生 1勝2敗
4位 1期生 3戦全敗

レギュラーリーグ

1位 10期生 3戦全勝
2位 7期生 2勝1敗
3位 9期生 2勝1敗
4位 6期生 1勝2敗
5位 8期生 1勝2敗
6位 5期生 3戦全敗

注：勝数が同じ場合は古い期を上位とした。

第2回定期別対抗囲碁大会

3期生が圧勝

10期 若木 利博
 第2回囲碁大会は平成12年9月2日(土)、日本棋院会館において盛大に開催された。

当日は三伏炎暑の名残宜しく残暑厳しい一日であったが、1期生から今年初参加の10期生まで80名の選抜棋手が一同に会し、猛暑をもとめせず熱戦が繰り広げられた。

開始に先立ち阿部博男同窓会会長兼大会会長から、親睦交流の趣旨を体し、囲碁を一日楽しんで欲しいとの挨拶の後、高比康之競技委員長から競技実施上の注意があり、熱戦の火蓋が切って落とされた。

競技は事前に各期担当委員の参加により決定された対戦表に基づき、オール互い先、4回戦で実施された。各回戦終了と同時に各期担当委員が競技結果を持ち寄り、集計結果をその都度壇上のチャートに掲載しつつ、

緊迫した中で午前2回戦、昼食をはさみ午後2回戦の競技を予定通り円滑に終了した。



優勝した3期生チーム

その後、表彰式・懇親会に向け会場整理中に総合結果が出、直ちに表彰式に移った。優勝した3期生の代表者に対し阿部会長から優勝カップが授与され、4戦全勝の高比棋手(1期)、三石棋手(2期)、宮本・倉田棋手(3期)、清水・橋本棋手(4期)、大野・川上棋手(5期)、壺内・佐古井棋手(6期)、松井棋手(7期)、新美棋手(9期)、佐々木棋手(10期)の紹介があり全員で健闘を称えた。結果は準優勝4・6・7期生(同率)、以下9期生、1・5期生、2期生、8期生、初参加の10期生の順位となった。表彰式後高比競技委員長の乾杯の音頭で懇親会に入り記念撮影を交え和やかな歓談の内に本大会は成功裏に終了した。期待した戦果を得られず次年度に賭ける選手も見受けられた。

成績表

	勝ち数					順位
	1回戦	2回戦	3回戦	4回戦	合計	
1期生	5	3	3	4	15	6
2期生	2	3	4	3	12	8
3期生	7	8	5	4	24	1
4期生	4	5	5	5	19	2
5期生	4	3	4	4	15	6
6期生	5	5	5	4	19	2
7期生	3	4	6	6	19	2
8期生	4	3	0	4	11	9
9期生	4	3	5	4	16	5
10期生	2	3	3	2	10	10

校内カッター競技への

OB艇(黒部会)チームの参加

黒部会事務局長 7期 牧山 元

防大短艇委員会OBからなる黒部会A、Bチーム2艇(オープン参加)は、4月28日走水沖において、昨年同様女子2学年2チームと新たに来る5月27日に行われる全日本大学カッター・レースに参加予定の女子チームの合計5艇で順位を競い合うことになりました。

当日は五月晴れのもと、風も南よりの風3m/sと弱く、絶好のレース日和でした。

競技に先立ち小西前同窓会会長から激励と身の程を弁えて無理しないようにとの

の暖かい訓示を頂きました。また、多忙なスケジュールのなか長谷川自衛艦隊司令官も応援に馳せ参じてくれました。スタート直後、女子の全日本参加チームが頭一つリードする形となりましたが、練習の甲斐もあり(我々は4月8日から試合当日までの土日6回を練習にあて競技に臨みました)、その後はOB2艇が力強い水とりと一糸乱れぬオール捌きにより徐々に他艇を引き離し始め昨年同様OB艇の圧勝に終わりました。因みに成績は優勝Bチーム8艇身遅れてAチーム更に20艇身遅れて選抜チーム、2学年チームの順でした。

競技終了後、走水荘にて祝勝/懇親/慰労を兼ねて昼食会を盛大に実施した後、今後の黒部会の発展と参会者の御健勝を祈念しつつ解散しました。

なお、31期 川崎 英洋、24期 石塚 達也、18期 西岡 篤の3名は練習には参加されましたが、当日は業務の都合がつかず残念ながら参加出来ませんでした。

Aチーム			Bチーム		
艇指揮	7期	向井 正興	艇指揮	7期	牧山 元
艇長	13期	阿部 洋継	艇長	14期	水田 寛之
艇員	42期	森 慶太	艇員	39期	佐々木 司
	41期	森田 健		39期	古賀 肇
	40期	南里 英一		37期	吉田 久哉
	39期	坂井 智哉		37期	岡井 哉
	39期	村田 俊郎		34期	湯浅 純
	37期	国沢 保		34期	中村 鋭介
	37期	富岡 直明		29期	触井園 淳
	30期	石原 浩二		21期	吉田 明
	28期	井上 善文		19期	松尾 信一
	21期	豊沢 幸徳		16期	阪上 廣一
17期	高橋 英雄	16期	西田 利雄		
15期	峰岡偉津夫	15期	正田 勉		

顕彰碑献花式

9期 戸島 勝彦

快晴に恵まれた十一月四日(土)一三三〇から一四三〇の間、図書館脇の顕彰碑前において、開校祭初日のメイン行事として、防衛大学校同窓会による「顕彰碑献花式」が、本年度顕彰者「余語圭太」同窓生のご両親のご参列を得て厳粛に執り行われました。

余語同窓生は、愛知県出身、防衛大学校第四十一期生として航空宇宙工学を専攻、平成九年三月、航空自衛隊に入隊、操縦要員教育課程に進まれましたが、本年三月二十二日に飛行訓練中に殉職されました。先ずもって、同君のご冥福をお祈り申し上げます。

さて、本年度の献花式には、学校当局から新たな陣容となられた西原防衛大学校長、金井副校長、田原幹事の三役をはじめ各学群長及び各学科長・教育室長等多くの皆様のご参列を賜りました。

一方、各期生会からは志摩第一期生会会長をはじめ、本年度ホームカミングデー該当期の五十君第二期生会会長等、各期生会代表者の参列を得ました。

式は、同窓会から執行者の阿部博男同窓会長及び川名事務局長等が参加し、野澤一等空佐(防衛学教育学群長)を実行委員長として執り行われましたが、特に、計画運営全般にわたり、小原台事務局の吉村二等海佐はじめ現役諸官の献身的な協力を得た事を記録にとどめたいものと存じます。

なお、本年度の式には、多くの一般参列の皆様からの献花をいただきました事、また、既顕彰の同窓生折戸征夫君のご遺族から、芳志が小原台事務局に託されました事を付記します。結びに、殉職同窓生を偲び、ここに祀られる八十七名の御霊のご冥福をお祈り申し上げます。

防大卒業留学生歓迎夕食会

9期 日高久萬男

例年の通り、開校祭を機会に海外から招聘された留学生OBを歓迎する同窓会長主催の夕食会が催された。

出席した留学生は、ワンロップ・ティンカオ中佐(航空29期)、チョイヤット・ティンカムシー中佐(航空30期)、アヌクーン・チャーンチャン中佐(海上33期)及びドーン・プラビーク大尉(陸上37期)で、いずれもタイ王国からの現役軍人である。

彼らは、10月29日来日し、防大表敬後、11月1日、2日と陸上自衛隊富士駐屯地及び航空自衛隊浜松基地を研修し、都内に戻った3日の夕刻、新宿三井ビル「三井倶楽部」での夕食会に参加した。

同窓会からは、阿部会長(空1期)、佐藤留学生連携委員長(陸4期)及び日高事業部長(空9期)と留学生OB同期の柳澤浩幸3佐(空29期)及び貞殿知彦3佐(海33期)が参加した。

会での話題は、小原台での思い出から、アジア更には世界の政治、軍事、経済、そして同窓会に対する期待及び現地での活動状況等に関する意見交換に及び尽きることがなかった。

留学生OBは、11月6日横須賀地方総監部を研修し、翌7日離日した。



阿部同窓会長を囲む留学生OB(前列)

中期事業 1 防大同窓会 タイ王国支部の発足

4期 佐藤 幸憲

防大同窓会タイ王国支部(タイ王国防大同窓会)が昨年のシンガポール支部に続き、2つ目の海外支部として、8月5日バンコックで発足した。

発足行事は、バンコック市内アマリア・アトリウムホテルで行われ、タイ卒業生88名中、演習等で不在の者を除き国内各地から卒業生52名と一部の夫人子息を含め80名が出席した。

本部からは、阿部会長、杉本事務局副長、佐藤留學生連携委員長が、大使館から立花防衛駐在官が参加した。行事は、初代支部長チョンチェン・ブラスシルピン氏(6期陸上)の挨拶、阿部会長の祝辞等の後、祝賀会食に移り海軍音楽隊の演奏支援のなか、会員の現況報告・家族紹介が続けられ和やかに進められた。この中でチョンチェン氏は第1回留學生としての苦労話や受けた暖かい心遣いの思い出に触れると共に、チョンチェン氏をはじめ4名以上の卒業生が日本女性と結婚していることも話題となった。また、会長のスピーチ及び杉本副長の準備した資料により、防大及び同窓会の現況と50周年記念行事の紹介も行われた。

本行事は、海軍卒業生担当で準備し実施されたが、海軍現役先任で副支部長のタナラット海軍大佐(23期海上)が陸海空卒業生をうまくまとめチョンチェン氏を盛り立て、成功させていた。終わりは、防大生歌及びタイ予科士官学校マーチの斉唱で盛り上げ次の再会を誓って終了した。今後、タイ卒業生相互及び日本タイ両卒

業生間の交流が一層進むものと期待される。翌日、会長はタイ最高司令部教育部長カセム中将を表敬懇談し、留學生制度につき相互理解を深めた。

現在、防大には本科22名、研究科7名、日本語課程5名合計34名のタイ留學生が在学しており毎年5〜6名が卒業・帰国し、同窓会員となることになる。

なお、この主要海外2コ支部の発足により卒業生の現況も逐次明確になったことによりフィリピン、マレーシア卒業生を含め卒業留學生名簿の発行も来年度計画されることとなった。



バンコックにおける支部発足式

中期事業 2 ホーム・カミング・デーの実施

9期 日高 久萬男

本年3月19日、防衛大学校本科第44期生、理工学研究科第37期生及び総合安全保障研究科第2期生の卒業式に合わせ、本科第1期生のホーム・カミング・デー(HCD)が行われました。

HCDは、卒業後の適切な時期に想いでの小原台を訪ね、母校の卒業式典に陪列し、新たな卒業生の前途を祝福・応援すると共に現在の大学校諸施設を見学し

つつ、現役学生、指導官及び教授等との相互の交流を通して同窓会と母校との絆を強化する、また、併せて、同期生とその家族の健康を祝い相互親睦を図る趣旨で計画されたものです。このHCDは、元々、平成11年3月10日、同窓会総会で戴いた当時の松本中学校長の講演の中で同窓会へ提案されたものです。

この実行にあたって、当初、入校式(4月)、開校祭(11月)卒業式(3月)及び別途設けた時期の数案が在りましたが、松本前校長の積極的な御支援と御理解を得て、区切りとして意義在る世紀末の平成12年の卒業式時、概ね65歳に到達する第1期生から始まりました。以降、期の順番で原則として毎年実施するものです。

HCDの主要な内容は、前述の趣旨に則り、卒業式陪列、観閲式陪列、校内研修及び懇親会です。ご承知の通り、卒業式は官邸、内局はもとより、在日外国大使館或いは米軍関係、そして卒業生家族と大勢の来校者で大学校当局は、その対応に暇なき状況ですが、防衛学教育学群長を頭とする同窓会小原台事務局の各員がHCDの計画、実行にあたってくれました。

第1期生の参加者は全国から133名で、令夫人83名と9名のお子たちを入れ合計25名が1日、台上で懇親を深められました。中には、部活、所属学生班或いは小隊で数日前から集合し、HCD予行を催された方々もありました。後日、参加者から大きな評価を得ましたが、その評価の大部分は、小原台事務局の積極的行動に負っています。尚、同窓会としては、参加者の午餐会経費支援の名目で所要の予算補助と参加記念品を準備させて頂いています。次回のHCDの順番である第2期生にあつては、年度当初から期生会役員を中心に準備を進められています。読者各位の順番をお待ち下さい。

中期事業

3

東海地区に 同窓会誕生

東海地区支部会長 1期 江戸 満

平成十四年には、防大創立五十周年の節目を迎えます。この半世紀に亘る年月の経過と共に退職者が各地域に居住し、今後その人数は逐年増加して行きます。

このような背景のもとに平成八年に同窓会規則が改正され地域・地区支部の設置が定められた状況を踏まえ、東海地区においても同窓会設立の機運が高まり、平成十一年九月に各期有志で意見交換を実施、以後準備委員会を発足させて一年あまり数回の検討を重ねて、去る十二月三日各期の発起人(発起人代表国枝氏(#1))の尽力により、めでたく愛知・岐阜・三重3県に亘る東海地区支部が誕生しました。会員は、退職会員約300名、現職会員約400名、合わせて700名の大所帯であります。防大同窓会長阿部氏(#1)、関西地区同窓会長牧氏(#2)、防大副校長金井氏(#4)を招き、OB 90名・現職40名で盛大な設立総会と懇親会を開催しました。一期から四十三期までの面々が一堂に集い、思いを語り、旧交を温める模

懇親会



様は防大キャンパスの姿そのものでした。今後は当同窓会を縦糸とし、同期生会や中部小原台クラブや親交のあるグループを横糸として、相俟って東海地区同窓の味を増し、素敵な色彩を生み出して行きたいと念願しています。

同窓会未結成の地区に早期に同窓会が誕生して全国に同窓会ネットワークが構築され、本部と地域・地区とが意見を交換しつづ必要に応じて組織的な活動ができる体制を築く施策が期待されます。

同窓生各位のご健勝とご多幸を祈念申し上げます。

「東海地区支部事務局」

〒511-0103 三重県桑名郡多度町戸津508-24

連絡先 仁木一男(#9)

平日・昼間 TEL 052-443-2071

休日・夜間 TEL 0594-48-2004

niki@nagoya-denki.co.jp

中期事業

4

同窓会ホーム・ページの開設

9期 日高 久萬男

従来から同窓会会員に対する、同窓会活動状況の紹介等は、代議員会、総会及び同窓会広報誌「小原台だより」を通じて為されてきました。しかも、それは、同窓会会則等による年一回の義務的のものでした。しかし、IT化社会の真つ只中にある現今においては、これらの手段では内容が限定されるとともに適時性が薄く、また紹介事項等が会員に広く伝達されたいとは言い難い面があり、各種不満のつのもろのと思われま

この懸案の解消を図るべく、同窓会本部は、「中期事業計画」の一環として、昨年、本部にEメール(bodai@nifty.com又はZAN24404@nifty.com)を設置しました。これに引き続き、本年は、同窓会ホーム・ページを開設すべく検討を重ねてきました。現在の同窓会財政状況及び事務局の技術的状況から、独自のホーム・ページ開設は困難と判断し、代替策として防衛大学校webmasterの好意で大学校が管理するコンピューター・システムにある同大学校ホーム・ページに間借りの「同窓会の窓」(<http://www.nda.ac.jp/cc/alumni/ndaalumniopen.html>)を設けてもらうことにしました。

内容としては、次のような項目を掲載する予定です。

- 1 同窓会長挨拶
- 2 同窓会規則並びに地域及び海外等支部組織図
- 3 総務関係
総会、理事会、代議員会等の状況
事務局の状況
- 4 事業関係
各種交流会開催状況
ホーム・カミング・デー
校友会及び期成会助成状況
その他
- 5 尚、将来は、支部及び各期生会便り或いは現役学生からの質問欄等同窓会活動の一層の活性化に一役果たしたいと考えています。

防衛大学校URLは、<http://www.nda.ac.jp/index-j.html>です。是非、アクセスしてみ下さい。勿論、大学校は、防衛庁(<http://www.jda.go.jp/>)或いは各自衛隊ホーム・ページ(<http://www.jda.go.jp/gsd/>)同MSDF/同jsdf/等からリンクされています。

同窓生

アラカルト

よこずき三昧

6期(海) 熊野 梁一

投稿依頼の電話が掛かってきたとき、やはり私は変り者なのだと自覚しました。でないに投稿の依頼などありようがないからです。再就職の会社を三年で辞して、「青春への回帰と頑張らない」をモットーにし、焼き物の道に入ったのは二年半前です。陶芸仲間が別れ際に「じやー頑張らないで下さい」と言ってくれます。

さて、私の借家は長崎県波佐見町の山奥の中尾山と言い、波佐見焼き発祥の地にあります。四百年前に朝鮮の役で連れてこられた陶工が磁土を発見し、以降、食器・生活雑器の生産地として発展してきました。佐賀県の有田とは車で十分のところですが、ここ中尾山には町営の陶芸修業場があり多様な人々が集まってきますので、私のようなビギナーには格好の場所です。これとは別に、中尾山から十キロ離れた同じ波佐見町に古い家を借り小さなガス窯を据えて工房としています。

(このような事で紙面を埋めても面白くはないでしょうから、断片的ですがエ

ピソードを紹介しましょう。)

宝物

まだ窯焚きを始めた頃、年配の男が挨拶もなしに我が工房に入ってきて来て、窯から出したばかりの作品をジロジロと見始めました。机の上にはテストピースが五十個くらい並んでいました。「どなたですか」と聞くと「△△だ」と言ったきりでかなりの沈黙が続く、やがて彼は「みんな初めは色々試し焼きをするが、こんな事をやっても何もならない」と口火を切り、焼き物の講義にも似た果てしない自慢話が続きました。後で知ったのですが、彼は中尾山の極めて不人気な陶芸家でした。自衛隊を退職したド素人が焼き物を始めたことを知り、巨匠たることを示さんがためのパフォーマンズだったのでしょうか。今ではテストピースも三百個を越え、私の宝物となっています。…そ



こで一句

「クソジジイ 宝の山にケチをつけ」

たくまじさ

秋は猟のシーズンで男共は競って猪や兎を捕っています。借家のすぐ傍に、獲物を解体する小屋があり、仕事を終えた連中が夜に獲物を担いで集まって来ますが、時として紅一点を見掛けることがあります。陶芸修行中の若い女性です。彼女は猪を恐れることもなく解体を手伝っています。男共は喜々として女性を励ましています。解体が終わると焼肉の酒宴が恒例となっていて、この女性に加わった時は一段と盛り上がるようです。牡の急所を丁寧に焼いて、彼女に食べさせるのが男共の極め付きの楽しみだからです。当の女性はと言うと平然とこれを口に頬張り、男共のとても上品とは言い難い話を聞きつつ胃袋を満たしています。これって今はやりのセクハラではないのかな。しかし待てよ、男共の前で牡の急所を食いチギっている彼女は、男共に対するセクハラではないのかな。どっちもどっちだ。このような経験を重ねて、遅い陶芸家が育つのでしょうか。

(山を幾つも越えて帰った男達の車が谷に転げ落ちて……バチが当たったのか)

ステータス

ゴールデンウィークは、波佐見では陶器まつり、有田では陶器市が開かれるお祭りです。生来のサボリ癖を直すため、

今回の陶器まつりに出店しました。波佐見商工会に申し込みに行きましたら、作品の種類と数をチェックに来て、数が少ないと即座に言われましたので、ガラクタをせっせと作り数は揃えました。私の作品はすべて、手捻りと言って手で作っています。隣に店を張っていた陶芸家の奥さんが度々のぞきに来て、手捻りをこんなに安く売るのでかと再三牽制していききました。世の中不況でも陶芸家はステータスを捨てる訳にはいかないようです。私は単なる土いじりに過ぎませんで、まことに失礼。ちなみに工房名は「よこずき三昧」です。パロディーが結構受けました。



最後になりましたが、何かを始める時は何かを犠牲にしなければならぬという事です。私は、妻に心配を掛け、老後を犠牲にしているのでしょうか。



1期生会

◆竹井 溥

1、感動のホームカミングデー

第一回の「ホームカミングデー」の行事が3月19日第44期生の卒業式の日に行われた。此の行事は松本学校長の御発案によるもので、卒業式にOBを招き伝統の偉大さをお互いに認識しあい、その絆をしっかりと受け継いで行くという趣旨から始められた制度であり、その一回目として私共1期生が招待された。

この日は我々にとっても一生一度の晴れ舞台というわけで、北は北海道から南は沖縄まで約半数にあたる百五十三名の同期生が集い、更に石山晃君、平山救馬君、湯浅強君の三末亡人も特別参加され、同伴のご夫人方を入れると、実に二百五十五名が参集するという大盛況となった。

先ずは控室で、久し振りの再会に各所で歓声が上がった。中には卒業以来の人、名前が思い出せない人などもおり、43年の時の流れを感じた。

午前十時から場所を総合体育館に移

し、第44期生の卒業式に臨んだ。本科三百八十九名、研究科八十五名に対する卒業証書、学位授与の後、松本学校長、故小淵首相、瓦防衛庁長官、来賓の上坂冬子氏の祝辞があり、最後は卒業式の名物で、我々も是非やってみたかった卒業生の帽子投げで終了した。

次いで陸海空の制服に着替えた卒業生の宣誓式と観閲式に列席した。各幕僚長への宣誓は自衛官として生きる決意の誓詞であり、思わず身が引き締まった昔を思い出す。曇天の中、陸海空のOBパイロットによる各種航空機の祝賀飛行があり、在校生の観閲行進が始まった。儀礼刀は紺の制服によくマッチし、防大生でしか味わえない凛々しさを感じ、又女性小隊長の甲高い号令が新鮮だった。

午後二時から学生会館で、我々だけの懇親会が開かれた。準備された食事は余り褒められたものではなかったが、我々の再会の熱気がそれを補って余りあった。久里浜の仮校舎から始まり、小原台までの四年間の防大生活が、走馬燈のように頭の中を巡る。傍らでは若かりし頃、同じ官舎で過ごされたであろうご夫人方の話も弾んでいる。長いようで実は

アツという間に過ぎ去ってしまった現役時代、しかしその中で、各人それぞれの歴史を刻んで来たが、その原点がここ小原台にあった。けれどもそれを語り尽くすには、時は余りにも短すぎた。途中、松本学校長も見えられ、本会の趣旨を説明され、岡田一期生会長が答礼した。その後、一年の時の小隊編成で各々記念撮影をし、開校50周年記念日での再会を約して散会となった。

外に出ると、卒業生を送り出す人垣が校門に向けて長く延びていた。43年前我々が巣立った時、小原台特有の一陣の猛砂塵がまき起り、「風と共に去りぬ」と言われたことを思い出す。昔と違い各クラブの大きな旗が林立し、太鼓を鳴らしての派手な演出を横目で見ながら、足は自然と浦賀に向かった。昔はまさしく「けもの道」で雨が降ると草にしがみつきながら登ったものだが、今では階段には手すりがつき、道路は舗装され、麓は家々が軒を接し、標高が変わらない以外は往時を偲ばせるものは何もなくあった。

小原台上は開校50周年に向け、現在建築ラッシュで、本館、人文館は取り払われ、新築工事に着工中、一足先に完成した給水塔兼時計台が、新しい歴史を刻みつつある。母校の発展する姿を頼もしく思い、興奮の一日の心地よい疲れを感じながら帰途についた。

2、将来のために

このホームカミングデーの行事は来年は2期生、再来年は3期生と受け継がれて行くという。我々はいわばそのテスト

ケースといつてよいであろう。将来よりよき伝統行事として残していくために、少しばかり所見を述べたい。先ず招待者としてのOBの年齢が偶然にも65才前後であったことは、真に当を得ていた。65才といえば、ほぼ第二の仕事も終わり、人生の折り合いもつき、お互いに利害関係もなく、丁度防大卒業時に似た横一線の心境になり得ること。そして体力、気力ともに、まだ十分余力を持っている時期であること等から、年齢的に非常に適切であったと思う。又イベントとして卒業式を選ばれたことも最良の選択で、この行事の趣旨からして、これ以外に考えられないであろう。ただ折角列席しているのだから、OBと卒業生との間で、何らかの形で触れ合いが欲しい。例えばOBからはなむけの言葉を送るとか、記念品を渡すとか、又は代表者が握手を交わすだけでもよいと思う。今後一連の卒業式行事の中で、考慮していたければ有り難い。

最後に懇親会食について申し上げたい。会食を我々だけの会として実施していただいたことは、正解であったと思う。もし卒業生の会食会に参加していたら、大混雑の中で満足に会話を交わす間もなく、あわただしいうちに終わってしまったであろう。それは別として、問題は懇親会食の中身である。先ず缶ビールや缶ジュースで乾杯をした。又お料理も、一生に一度しかないパーティのものとしては、かなり簡素な内容であった。

もう少し盛大な宴席に出来なかつたの、この会が男性だけの、所謂気楽なスタ

ッグパーティーであったならば許せるであろうが、大半の者が夫人同伴で参加している正式な会食会である。この百人を越すご夫人方の中には我々が現役時代、各幕のトップ、各級最高指揮官、司令官等の夫人として、内外の豪華なパーティーに出席した経験をお持ちの方も多くおられた。このことからしても、パーティーがこの程度のものかと思われれることが、何としても恥ずかしく情けない。これを要するに、準備をされた方と我々の間の、この行事に対する思い入れの温度差にあると思う。

私は懇親会食は同窓会にまかせることなく、各期生会が主導で行うことがよいと思う。

即ち該当期は、その年の同期生会を、一生に一度、母校で行うと考えれば、会費を支払うことも当然であろうし、自分達なりの満足のいく会が開けるであろう。

やや次元の低い話になってしまったが、今後伝統行事として根付かせて行くための、一つの意見としてとらえていただきたい。第一回の行事として、同窓会の役員の方々は暗中模索しながら、良く準備して下さったと感謝している。これからは該当期の役員とよく細部調整され、この行事をより良い方向に発展させて行かれることを、切に願って止まない。

4期生会

◆会長 杉山 恭

ミレニアム、シドニー・オリンピック、米国大統領選挙等多彩な年を終え、新世

紀の幕開けである。我が四期生も小原台の土を踏んで四十五年になる。

昨年の四期生会は、恒例の同期生会、同窓会主催のゴルフ、囲碁、テニス大会への参加等も「業務計画」どおり実施し、また一年歳を経たと言うところが、率直な所感である。そんな中で、金井君の防大副校長就任は、大変嬉しいニュースでありました。また、隔年実施している同期生名簿発行の年でありましたが、勤務先欄の空白がめっきり多くなり、晴耕雨読、悠悠自適(?)組が増えた事は経年変化とは言え、厳粛な事実でありました。今回の名簿の大きな特徴は、EIMAILアドレス欄を新設した事です。長たらしいアドレスがあり枠をはみだすとか、ページ数が増えるとかの問題はありましたが、時代認識優先で踏み切ったもので

EIMAILに関連する話ですが、みなさんご承知のとおり、本年はIT革命の本番開始である。情報の多彩さと量、時間・速度・使い易さの優位性等から、社会活動の格段の飛躍、持続性のある経済成長をもたらすものとして、期待されるどころ大であります。さらに、「携帯」とのリンクによる「iモード」への展開も時間の問題でしょう。還暦を越えた我々も「今更、チャラチャラした事を」と言う主張もありますが、遅かれ早かれ、所詮は時代の流れについて行く事になるでしょう。十年を経ぬうちに、同窓会、同期生のメールネットが構成され、情報提供・交換、サークル活動等の神経中枢となると考えられます。インターネット時代に取り残された層を如何にするかと

言う「ギャップ」の問題が既に検討され始めている現在、善良にして知性高き存在であるべき我々は、年代層を牽引していくぐらいの気概が必要と思う次第です。かく言う小生も、インターネットはともかく、携帯を片手で扱うのは、とてもではない。自衛隊で鍛えた太い親指には、キーが小さ過ぎると内心こぼしながら、「しばらくは我慢」と心して「練成訓練」に励む所存です。

四期の諸兄も同期生名簿EIMAIL欄新設を契機に時代に対応した「モダンイズド・エイジ」を目指して頑張りましょう!

5期生会の皆様に

◆理事長 安岡 義純

5期生会の皆様には、新年を迎えますます御健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、5期生会としては、千葉・根岸・横沢君を中心に陸・海・空それぞれで行う親睦会と、期生会として行うゴルフ・テニス・囲碁大会を通して親睦を図っておりますが、月日の経つのは速いもので、今年4年毎に開催する総会の年となりました。

昨年8月28日、総会に先立ち5期生役員会を開催し、(1)総会を今年の6月29日(金)に開催すること、(2)期生会規約(組織)の改正を提案することを決定いたしました。

新しい規約では、陸・海・空から各1名を選出し理事長と2名の副理事長に就

任することと監事2名を陸海空関係なく選出することは現在と同じですが、本部の業務運営(事務・会計・同窓会代議員)を担当する本部理事として陸・海・空から各3名を選出することと地区(北海道、東北、近畿、中部・北陸、中・四国、九州)担当理事各1名(関東地区は本部理事が兼任)を陸海空関係なく選出することを提案しています。

この案は、すでに、陸海空それぞれの期生会で説明されていますが、この新しい規約(案)について、要望等がありましたら、2月末までに、千葉(陸)、根岸(海)、安岡(空)千葉瑞圓(FAX:03-3269-1764)、根岸勝利(FAX:03-3269-1764)、根岸勝利(FAX:03-3269-1764)、安岡義純(FAX:04-68-44-5903、E-MAIL: yasuka@cc.nda.ac.jp)へ知らせていただきたいと思えます。皆さんからの意見をもとに3月末に開催する役員会で規約を再検討し、その検討結果を6月の総会で提案させていただきます予定にしています。

総会の案内は4月に発送の予定です。多くの皆さんの参加を期待しています。なお、新名簿を作成致しますので、案内の返書は早めにかつ確実にお願致します。

6期生会

◆会長 西村 義明

六期生は、1962年3月17日に44名が小原台を卒業してから38年になります。この間に31名のクラスメートがあの世界に行きました。率にして6.4%です。生き残っている者達は、総員が還暦を過

きて、益々元気に円熟味を増し、仕事に興味にそしてボランテアにと、人生の第4コーナーを謳歌しています。

さて、クラスメートの活躍状況ですが、先生が偉いわけではありませんが、母校の防大教授には小暮敬二君をはじめ3名が現役で頑張っていますし、その他の大学にも7名が教授として活躍しております。また、作家稼業的なことをやっている者も柿谷勲夫君や茅原郁生君等5名もおります、その他時々、新聞、雑誌、テレビ等に顔を出す者は多数おります。その一方で、既に第2の人生を終えて年金生活に入り、悠々自適の毎日を送っている仲間もぼちぼちと出てきております。

期生会は毎年1回地域毎にやっています。北海道支部、東北支部、東海支部、関西支部、中・四国支部、九州支部はそれぞれ地域特性を生かした活動をやっておりますが、東京での期生会がやはり盛大です。今年も6月6日午後6時6分からグランドヒル市ヶ谷でやりましたが、135名(内19名夫人)集まり大変賑やかな同期会でした。その外、東京では、毎月6日に昼食会を市ヶ谷でやっており、毎回20名程度が顔を出します。

また、防大同窓会主催のクラス対抗競技でも六期生チームは強く、昨年はゴルフと囲碁で優勝し、特にゴルフは2連覇して、他のクラスから少し遠慮したらと、憎まれる程の強さです。今年も大いに活躍することでしょう。

7期生会

◆会長 伊藤 惇

“7”という数字の響きは悪くないし、偶々7期として育まれたことに秘かな幸運すら感じたものだ。だが、実際問題、世の中の制度なり規則なりは、大体5年間位の出来具合を見て、7年目位に反省や教訓を籠めて、より厳しく、より教育的に、より本格的になつて行く様だ。我々も、感覚的で恐縮だが、どうも入校以来その種の流れの悲哀を随所に感じたものだ。勿論それは、恨み節ばかりとは限らないが。

序でに、我々が入校、卒業、退官等の節目を迎える時期は、いつも社会全体が谷間に喘いでいる時で、どうも巡り合わせは芳しくない年次の様だ。今また再々就職の道に喘ぐ時期を迎えている。

7期として卒業した者は499名で、その中、不幸にして亡くなった者が26名。卒業後38年を経て、結構危険と背中合わせの仕事にも就いてきて、ほぼ還暦を通過する世代でなお、95%近い残存率は恐らく誇りうるものだと思う。但し、問題はこれからで、二つの要素がある。一つはこれから急激な減勢カーブを覚悟せねばならぬ時期。特に今まで我が身へのいたわりなど忘れ去ってきた我々なれば、大なる自戒と反省と、自重自愛が必要と思っている。もう一つは、先程の再々就職にも繋がる話だが、好むと好まざるに拘わらず、平均的にはこれから20年近くの人生を歩む責務を背負っている。俺はもう仕事はやり終えたのだ、“あとは余生だ。のんびりやるよ”など、悠長な

事で済ませる期間ではない。思い出や経験だけに生きるには一寸長い。後輩や子孫のためというよりも自分自身のために。アクティブに、挑戦的に、積極的に取り組んで行くべき人生が、我々の行く手であると思っっている。

14期生会

◆石黒 正昭

14期生会は、卒業30周年記念総会および懇親会を、5月6日グランドヒル市ヶ谷において実施しました。陸、海、空それぞれの期生会は盛んに行われておりましたが、合同の期生会は、10年ぶりという事で、開催に当たって、半年ほど前から役員を選定し、準備にかかりました。一番の心配は、何人の出席が得られるかでしたが、北海道から沖縄までの同期生約200名ご婦人60名のほか、招待者として卒業当時の校長大森寛氏を始め、教授、指導官等30名余のご出席をいただき、盛大に催されました。総会においては、おそらく現役最後の期生会になるであろうことから、新しい同期生会規約の承認が行われました。

引き続き行われました懇親会においては、まず卒業時の班編制でテーブルにつき、物故者に対する黙祷から開始されました。新会長吉田正君の挨拶に続いて、大森元校長の祝辞をいただきましたが、その矍鑠としたお姿とお元気な言葉に、さすが！校長と感動すら覚えるものがありました。

途中、学生時代のスナップショットの映写があったり、1年生当時の班に席替え

をしたりして、「やあ！やあ！元気」とか、「おっ！変わらなね」とかの声が飛び交い、頭の白さと薄さや顔の皺の多さを忘れ、30数年前の青春の真っ只中に戻り切って、楽しく、有意義な一時を過ごし、大盛会のうちにお開きとなりました。

14期生の役員は次の通りです。

会長…吉田 正 君(航空会長)
副会長…渡辺 元且 君(陸上会長)
斎藤 隆 君(海上会長)

24期生会

◆会長 高橋 均

我が防大24期生会は、平成12年4月1日(土)グランドヒル市ヶ谷において、「防衛大学校第24期卒業20周年記念パーティ」を和気藹々と盛大に実施しました。

開催にあたりましては、準備委員長を半澤君(現空募人事一班長)にお願いするとともに多くの目黒地区入校学生の皆様の御協力により、陸、海、空の組織力を最大限に発揮してOBを含め全国の同期に可能な範囲で連絡をとりながら、やとと実現に至りました。まさに、防大創立の意義の一つである統合の実を挙げる事が出来たものと感じております。

当日の参加者は、有珠山の災害派遣対応もあり、残念ながら関東周辺勤務者が主体となりましたが、遠くは鹿児島から駆けつけてくれたOBもあり、同期生約140名が集まりました。

受付では、10年後の開封を楽しみに、

タイムカプセルに入れるメッセージを各人記入して貰いました。また、会場内では、久々に会おう同期、まさに20年振りといった同期、そして風貌からは思い出せず名札を確認して驚き合う同期など、大隊別に配置した会場内のあちらこちらで学生時代の話が花が咲き、時間を忘れる程の盛況振りでした。そして、帰路の電車の中で学生時代と卒業後の20年間をしみじみと思い出す貴重な一日でもありました。尚、パーティ参加費の残金と併せて2名の方々のお志を、参加者全員の同意を得まして、24期生会として防大50周年記念事業への支援金とさせて頂きました。

OBを含め同期全員にとの方針で連絡にあたりましたが、結果として連絡がなかった同期の皆様には、この場をお借りしましてお詫び申し上げます。

26期生会

◆平山 力

西暦2000年、

防大第26期同期生会

第26期会は、西暦2000年11月24日(金)、グランドヒル市ヶ谷において、恒例の同期生会を、無事終了したことを報告します。時期はずれのミレニアム、いえいえ、4年に一度、オリンピックの年を同期会としています。

当日は、前日が祝日の金曜日にて、「日程に異論あり」の声もありましたが、徳永元中隊指導教官、陸海空及び自衛隊OBの同期生160名(同期生の約1/3)



が参集しました。皆、気持ちは若き防大生ながら不惑の齢をすぎ、「草原の後退、白髪、太った、痩せた」、お互いに傷口をなめ合う近況報告をしつつ、再会を喜び、和気藹々のうちに同期の団結を深めることができました。(写真は第1大隊)

「次回の幹事は?」「俺か?」の声を残しつつ、4年後の再会を誓って、それぞれ自衛隊、会社等の現実世界に帰ることとしました。

38期生会

◆会長 石井 浩之

防大入校から10年目を迎えて

同窓会の諸先輩方並びに後輩の皆様におかれましては、各勤務地等において益々御活躍のことと存じ上げます。

この度、同窓会本部の御厚意により投稿の機会を得る事ができましたので、筆無精の身をかえりみずにペンを執った次第であります。乱文乱筆に關してはどうぞ御容赦頂きますようお願い致します。

我々38期生の近況であります。陸・海・空いずれの部隊におきましても現場組織の牽引車としての責任を与えられ、奮闘の日々を送っている最中であり。また各職域における学校等での教官、区隊長及び指導官として後輩の指導に汗を流す者や、向学心に燃えた同期の中には、防大研究科をはじめとする修士または博士課程に進んで更に自己研鑽を積み将来に備える者等、様々なジャンルにわたって活躍の場が広がっております。

かつて、小原台において寝食を共にした仲間が全国、そして海外で活躍する姿は、その話を耳にするたびに身震いするような期待感と、自分も負けては行かないという心地よい向上心をかき立ててくれるかけがえのない財産であり、失敗をおそれるあまり、ともすれば消極的になりがちな私たちが自分自身を奮い立たせるのに十分な活力剤となります。これは、小原台での数年間を共に過ごした者だけに許される特権であり、同期として

の絆をより深いものにしていくファクターであると最近になって特に考えるようになりました。

一般的にある期間において目標を共有し、達成する過程において苦楽を分かち合った集合体は、その過程を経ない人間よりも強固な団結心と個々を尊ぶ精神が身に付いているといいますが、防大生として互いの理想を語り合い創り上げた38期生の信念は、一社会人、自衛官となった今となっても、それぞれの職域における責任の重さや現実につづかりながらも必死になつて現状の打破と将来への向上を模索し続ける私たちのトリガーとなつていきます。

私事ではありますが、先日結婚をして家庭を持つにいたりました。私にとって機会を見つけて同期と酒を飲むことが何よりの楽しみでありますから、必然的に妻が私の同期と顔を合わせる場面も多くなります。そんなときに妻は「あなたとあなたの同期の間には、私には入り込めない何かがある」とよく言います。私にとっては普通の付き合いでしかないのですが、やはりこれも小原台で培ったある種の財産ではないかと再認識した次第であります。

先日、48期生が私の所属する部隊へ研修にやってきました。はじめて目にする早期警戒管制機に目を輝かせながら、説明係の私に鋭い質問を投げかけていました。

真つ黒に日焼けして初めての夏期訓練を終えようとしていた彼らの目からは力

がみなぎり、現実には妥協しつつあった私の心を初心に戻してくれました。引率の指導官は私の同期でありました。

ふと気がつけば、防大坂を登り小原台の門を叩いてから10年の月日が経ちました。諸先輩方からはまだまだヒヨコと言われそうですが、これを21世紀に向かう38期生のよい節目として、更なる飛躍を誓うステップにしたいと思えます。

今後とも変わらぬ御指導の程よろしく
お願い致します



支部だより

北海道地域支部

支部長 檜山 貢

北海道地域支部は、平成9年9月発足して以来、3年が過ぎました。

この3年間は、各支部の基盤整備に努め、地域支部としては、役員選出、理事会・代議員会の開催等その他、事業は、実施していませんでした。

平成11年度に入り、組織の基盤整備の柱となる「会費の徴収」、「名簿の作成」、また事業として「防大入校者の激励」を代議員会で決めました。

「会費の徴収」、「防大入校者の激励」は、実行しました。

しかし、「名簿の作成・配布」は、現役OBが圧倒的に多く、且つ転属の多い現況に鑑み、概成したものの、配布までには至っていません。

画期的なことは、「入校者の激励」を初めて実施したことです。

北海道出身の今年の入校者38名に対して、高価な本人のネーム入り「ボールペン及びシャープペンシルセット」を、入校記念品として贈呈しました。

贈呈・激励には、ハゲ頭の支部長(3期)では、かえって入校学生が自分の将来の姿?を想像し、勉学意欲に悪影響が

あると判断しました。

それで、髪の毛フサフサ・眉目秀麗な小津・札幌地連部長(14期)に、地連部長会議に上京の際、小原台の母校まで足を延ばして貰いました。

記念品は、入校代表者数名に直接手渡しました。入校者は勿論、学校側にも大変好評だったとのことです。入校者の勉学意欲の向上に役立てば幸いと思えます。

今後も「北海道地域支部」としては、活動の狙いである「後輩(学生)のため、実際に役立つこと」、「地方で軽易に実施できること」これら2点から、この種事業を着実に継続実施していく所存です。

九州地域支部

支部長 中野 純人

九州では十年前に自衛隊退職同窓生の組織として、九州防大OB会が発足し、三年前の自衛隊現職、退職合同の同窓会組織への変更もスムーズに実施され、組織の運営と各人の帰属意識も概ね定着した。

これまでの活動は、年一回の総会、懇親会名簿の作成、自衛隊行事への参加で

あったが昨年度は、地域支部及び県支部の旗の作成と九州地区の部隊のPKO派遣に伴う募金を行い、今年度からは、さらに定例行事として、防大学生の部隊実習時の激励(現地部隊実施による激励会に退職会員も参加する形)、会員参加のゴルフ大会(十月実施、六十人参加)、戦没者慰霊(福岡地区での日本海海戦記念慰霊祭への参加及び各地での護国神社行事への参加)を実施した。

国際関係、国内ともに問題は山積し、このまま放置すれば日本の国は自壊するのではないかと心配される今日、小原台で教育を受け、その後国の安全保障に直接タッチして同じ絆を持つ防大同窓生の組織として、相互の親睦、団結と意識高揚を計るとともに、国民の一人として部外への働きかけについても、可能などころから一歩ふみだしたいものと考えている。

現在、九州では県支部として福岡、大分、熊本、宮崎が組織されているが、今後は全県に組織ができ各県毎に退職会員と現職との連携がさらに強化され、現地レベルでの活動がさらに活発化されるよう切に願っている。

沖縄地域支部

事務局長 佐藤 修二

沖縄地域支部は、平成9年11月設立(会長…1期海 小西 忠)後3年が経過しOB…11名及び陸海空現役約200名で活動をしています。

主要な活動内容としては、年度総会及び懇親会、防大生部隊実習支援、防大入校者への記念品贈呈及び沖繩寮歌祭等への参加です。

平成12年度は、地域支部総会において副支部長の藤井建吉氏（陸7期）に「イランに勤務して」という演題でイラン駐在武官時代に体験されたイスラム社会における「インシャーラ…すべての物事は神の御心で成り立っている」等宗教からくる気質等に関する講演を実施していただき、盛会に終わることができました。

また例年2月に行われている第28回沖繩寮歌祭（旧制高校等約30校参加）に会長以下20名が参加し、窮屈な防大の制服姿で逍遙歌を熱唱し、他大学OB等との親睦を図りました。

今年度は、夏に沖繩サミットが実施されたため、防大生の部隊実習支援は、春の高射部隊の実習支援のみ（第5高射群計画）を実施しました。

今後も引き続き支部の基盤強化のための事業を計画していきたいと考えています。



広島地区支部

総務 土手 義孝

明けましておめでとうございます。

21世紀を迎え、広島防衛大学校同窓生各位及びご家族の皆様におかれましては新たな気持ちで新年をお迎えになられましたことをお喜び申し上げます。

広島防衛大学校同窓会（以下「広島同窓会」という。）は、母校の発展等に寄与することを目標としており、広島経済圏で活躍している同窓生の結集を図り地域社会に貢献するための地道な活動をしてまいります。

年間の活動は、定期総会の他に春・秋にゴルフ・テニス・ハイキング等を計画して会員相互の親睦に寄与しております。諸行事には、会員家族、自衛隊OBで構成する各種団体及び自衛隊協力団体等から多数参加してもらっており、地域に密着した活動をしてまいります。

最近では昨年度設立された関西防衛大学校同窓会と緊密な連携を図り、地域で活動するOBと部隊で活躍する現役の手助けが出来る地域の同窓会となるように目下努力中です。

因みに、平成12年度各種行事のうち、ハイキングは、会員の家族と海上自衛隊のOBで構成する「呉桜美会」の会員の参加を得て、広島百山の一つでもある「岩谷観音岩場」等にハイキングを実施しました。また、ゴルフコンペもハイキングと同様に各方面から多数の参加者があり、ゴルフコンペ優勝者は、春が昨年秋に引き続き19期（空）坂田 直文氏、秋は8期（海）大川 博正

氏でした。なお、平成12年度の総参加者数は、延べ300名近くになり、盛況裏に終了しております。

今や、防衛大学校同窓会は、2万名近くの同窓生を有し、同窓生は、部隊や各地域で活躍しており、各方面で影響力を与える組織となりつつあります。この基盤を担う大きな力は地域同窓会であり、同窓会本部としても地域同窓会の発展拡充に格段の御配慮を頂く必要があるものと考えております。例えば、必要な財政的援助の外部主催のイベントを地域で計画するなど地域で勤務する現役及びOBに何か示唆的施策が必要かとおもいます。

21世紀を迎え、地域で活躍している同窓生は、防衛大学校同窓会本部の「夢のある施策」を期待しております。



▲平成12年度定期総会記念公演



▲春季ハイキング

▼秋季ゴルフコンペ



なお、西暦2001年（平成13年）2月24日（土）広島弥生会館（JR広島駅新幹線口から徒歩5分）において平成13年度広島同窓会定期総会・講演会・懇親会等を開催致しますので現役・OB同窓生各位の出席を心からお待ちしております。

広島防衛大学校同窓会事務局

〒730-0014 広島市中区上鞆町2-43

（財）自衛隊援護協会広島支部

（退職自衛官広島無料紹介所）

TEL・FAX 082-2223-6900

平成13年度 防衛大学校同窓会予算

(単位：円)

	項 目	13年度予算	12年度予算	12年度比
収 入	会 費 (45期生)	18,120,000	19,740,000	▲1,620,000
	預貯金利息	510,000	330,000	180,000
	積立金からの繰入	2,970,000	2,340,000	630,000
	収 入 計	21,600,000	22,410,000	▲810,000
支 出	事業計画の推進 (現職・OB会員交流)	550,000	1,000,000	▲450,000
	(同窓会主催親睦交流会開催)	300,000	300,000	0
	(相談窓口の設置)	—	50,000	▲50,000
	(ホームカミングデイの実施)	600,000	300,000	300,000
	(会員の出版支援)	50,000	50,000	0
	(防大卒業留学生との連携)	400,000	700,000	▲300,000
	(全国的な情報網の整備)	50,000	50,000	0
	總會/講演会費	1,500,000	2,500,000	▲1,000,000
	期生会支援費 (48期生助成)	100,000	100,000	0
	(45期生助成)	100,000	100,000	0
	校友会対外活動助成費	1,000,000	1,000,000	0
	開校記念祭助成金	2,000,000	2,000,000	0
	顕彰費献花費	500,000	600,000	▲100,000
	慶 弔 費 (供花、弔電)	350,000	350,000	0
	職員定年退職者記念品費	100,000	100,000	0
	複写機賃貸料	350,000	210,000	140,000
	電話/FAX維持費	400,000	500,000	▲100,000
	小原台事務局運営費	100,000	100,000	0
	代議員会運営費	700,000	700,000	0
	機関紙発行費	3,300,000	3,300,000	0
	同窓会名簿維持費	250,000	200,000	50,000
	会長運営費	400,000	500,000	▲100,000
	事務局雇用費	2,000,000	2,000,000	0
	本部事務局室賃貸料	2,900,000	2,800,000	100,000
	事 務 費	350,000	350,000	0
	通 信 費	150,000	150,000	0
	交 通 費	400,000	400,000	0
	会 議 費	200,000	500,000	▲300,000
予 備 費	1,500,000	1,500,000	0	
50周年記念事業委員会	1,000,000	0	1,000,000	
支 出 計	21,600,000	22,410,000	▲810,000	

平成11年度 防衛大学校同窓会決算報告

平成12年3月31日
(単位：円)

	項 目	予 算	実 績	備 考
収 入	会 費 (43期生他)	22,560,000	23,393,720	
	預貯金利息	1,190,000	1,207,997	
	広 告 代	未定	569,790	
	同窓会名簿売上金	0	611,460	
積立金からの繰入	0	390,000	供託金の返還	
収 入 計	23,750,000	26,172,967		
支 出	事業計画の推進 (現職・OB会員交流)	1,000,000	1,065,840	ホームカミングデイ実施
	(同窓会主催親睦交流会開催)	500,000	295,909	
	(相談窓口の設置)	50,000	0	
	(会員の出版支援)	50,000	0	
	(外国留学生OBとの連携)	300,000	676,021	シンガポール支部設立
	(全国的な情報網の整備)	50,000	1,050	
	總會/講演会費	2,500,000	1,110,539	講演会キャンセル
	期生会支援費 (47期生会助成)	100,000	100,210	
	(44期生会助成)	100,000	100,000	
	校友会対外活動助成費	1,000,000	993,210	
	開校記念祭助成費	2,000,000	1,816,710	
	顕彰碑献花費	600,000	100,210	
	慶 弔 費 (供花、弔電)	350,000	251,594	
	職員定年退職者記念品費	100,000	142,878	
	複写機賃貸料	120,000	307,253	複写機更新
	電話/FAX維持費	500,000	272,384	
	小原台事務局運営費	100,000	100,210	
	代議員会運営費	700,000	748,776	
	各期生会連絡調整費	300,000	0	
	機関紙発行費 (作成)	3,300,000	2,027,571	
	(発送)	—	818,317	
	同窓会名簿維持費	200,000	180,470	
	会長運営費	500,000	200,000	
	事務局雇用費	2,000,000	2,000,000	
	本部事務局室賃貸料	2,750,000	2,815,336	
	事 務 費	350,000	101,708	
	通 信 費	150,000	55,825	
	交 通 費	400,000	292,960	
会 議 費	500,000	85,617		
予 備 費	1,680,000	1,267,525	同窓会記念品作製	
50周年記念事業委員会	1,500,000	1,500,000		
小 計	23,750,000	19,428,117		
次年度繰越	0	6,744,850	財産に繰入	
支 出 計	23,750,000	26,172,967		

防衛大学校同窓会機関誌

小原台だより



Vol. 9

平成14年1月1日
発行 防衛大学校同窓会

編集 洞澤佳廣 宇仁健一郎 内田輝昭
印刷 (株)エイコープリント

会長 年頭のご挨拶



阿部 博男

同窓生の皆さん、明けましておめでとうございます。二十一世紀、二度目の新年を迎えました。皆さんはご家族と共に、或いは、単身世界的に広がった勤務地で、新たな考えを持って、この新しい年を迎えられたことと思います。

今年は、私どもにとり母校防衛高等学校が創立五十周年を迎える歴史的に意義の深い年でもあります。公式記念行事は十一月十七日、日曜日に執り行なわれる予定です。

私ども同窓会は、その前日十一月十六日土曜日に、この春竣工する記念講堂で講演会と祝賀会を実施することで準備を進めております。多数の同窓生の参加をお待ちします。

それまでに、同窓会として、記念講堂正面にステンドグラスを、図書情報館中央に彫刻像を創立五十周年を記念して寄贈することとしております。その他各種の事業を含めて同窓会の記念事業は、全て平成七年十一月、同窓会総会の決議で設置した五十周年記念事業委員会の周到な準備によるもので、七年間に渡る佐久間委員長始め二十数名の委員の献身的な活動に対して深く感謝と敬意を表するものであります。

また、五十周年事業に賛同戴き、募金にに応じて下さった同窓生の皆さん方に厚く御礼を申し上げます。

わが国では、十年一昔と言われています。十年経つと、物事が変わってしまうことを表しております。冷戦が終結して、早くも十年経ってしまったことを考えると、この格言のように、今日の世の中の変化は、一桁の期が現役であった時代には考えられないようなことが起きており、その激しさには驚かされるばかりです。

例を上げますと、昨年十月、参議員テロ対策特別措置法案の審議の過程において、総理は「従来、備えるから憂いが生ずる」ということで議論を避けてきたと述べております。しかし、どうもそうではないことがこれまでの経験から分かってきたので「憂いの恐れのあることには備えなければならない」と方向

転換を明言しております。

この議論の主体は防衛問題です。縄を編うから泥棒が生まれるのだとする防衛論議は、占領下、そしてその後も、これまでの主流でした。それが、先に縄を編っておこうという変化をしたのです。

この変化をもろに受けて準備をするのは、私たち防衛高等学校の同窓生であると言っても過言ではないでしょう。この方向転換は大きいのです。これまでの自衛隊で私たちは、縄を編う必要性を訴え続けてきたのですが、政治的配慮でそれを受け入れることに踏み切ってもらえなかったのです。創設以来、言い続けてきたことが聞き入れられるようになった今、その必要性を同窓生が切実に感じていないのではないかと恐れるところです。国民が、政治を通して縄を編うように要求した時、十分にそれに応える事ができないとすれば、防衛大学存立の是非を問われることになることを覚悟しなければならぬといえましょう。現役同窓生の活躍を大いに期待するところです。

四十年前、同窓会の設立が論ぜられたとき、卒業生の消息の把握、校友会の援助等その必要性にあわせて、防大関として指弾されることなく三自衛隊統合活動の推進力となることが期待されました。同窓会は、本来この様に、わが国の安全保障上、必要欠くべからざる課題を負う事になっているのです。このことは防衛大学校同窓会以外何人も負うことができないことなのです。特殊な同窓会であると言えましょう。

と同時に、この重要な課題をどの様に果たすかという点、同窓生相互の交流による意思の疎通がその基盤であると考えます。それも、同じ学校で教育を受けたというだけでは十分といえず、自衛隊の現場を経験し、それを踏まえて相互に理解しあうことがその上に要求され、次の段階として重要になってくるのです。同窓会活動は、このような人間関係構築の場を提供できるものとして活用願いたいと考えます。

昨年夏、遠洋航海部隊がタイに寄港した時、タイ防大同窓会が創立五十周年記念と銘打って、わが国と縁の深い陸海空高官、留学経験者及びその家族を含めて一〇〇名余が待ち受け、歓迎の宴を開いてくれたとのことでした。同窓生の活動が、国際的な広がりを持つようになつてきたことに喜びを禁じ得ません。このような話題が寄せられるにつけ、地域、引いては世界の平和と繁栄に関わりをもつ重大な責任を私たちには課せられていると感じる次第です。

防衛問題がわが国にとつて、如何にとらえるべきか真剣に議論が始まり、また周辺諸国からもその姿勢に関心を持たれるようになってきている昨今、一方では、徒に無関心を装っている同窓生が散見されるのは残念なことと言わなければなりません。私たちは全同窓生に対して、今後とも同窓会として責任を果たしていくつもりでおりますが、同窓会を外から見た場合、同窓生の纏まりこそが同窓会の評価に繋がることを心に留めて頂きたいと思っております。同窓生の皆さんは、物事に積極的に取り組み、それを解決する当事者としての自覚を持ち、防衛大学校出身者であることに誇りを持って行くように、同窓生一同一丸となつて努力して行くようではありませんか。

昨年の一年と一昨年の一年とを比較して見ますと、この一年は、その変化が多方面に渡ることとその激しさに驚かされます。任務の多様化、テレビ出演を含めた活動範囲の広がり、それにも増して同窓生の長官、しかも二四期生を戴いたこと等は一昨年には思いもよらなかつたことで、同窓生の活躍の場は予断を許さぬ程、広く、深くなつてきています。今こそ、同窓会を意思疎通の場とし、これまでに考えたことや経験したことを知恵として、国民の負託に応えるよう皆さんの活躍を期待して新年の挨拶と致します。

終わりに、同窓生各位並びにご家族のご健康とご多幸を祈念申し上げます。

同窓会記念事業について

記念事業委員会

一 全般

平成十三年は、積年に亘って同窓生の皆様にご協力をお願いしてまいりました募金活動を無事終了し、記念事業に必要な募金目標を達成することができました。

また、委員会としては、これまで鋭意検討してきました事業等を「防大創立五十周年同窓会記念事業実施計画」として纏め、平成十三年十二月七日の代議員会において、その全体計画を報告し承認を得ました。昨年の「小原台だより」で報告致しましたステンドグラスの原画制作者の問題も、多摩美術大学教授平松礼二画伯（二十一世紀に活躍が期待される画家として、その作品が昨年一月から月刊誌「文芸春秋」の表紙を飾っています。）が、従来の経緯を承知されたうえで記念事業に対する協力を快諾して戴きました。原画は昨年七月に完成し、現在これに基づくとステンドグラスを制作中であり、本年三月の卒業式までには防大の記念講堂正面に設置される予定です。

平成十四年は、いよいよ防大も創立五十周年を迎え、記念事業を完遂する年になります。この実施計画を準拠に、今後、同窓会本部と記念事業委員会が一体となって記念事業の実現に取り組んでまいりますので、同窓生各位の一層のご理解と、ご協力をお願い申し上げます。

二 募金活動の最終結果

平成九年六月に開始しました募金活動は、

平成十三年七月二十七日をもって終了しました。

その結果、同窓生等七六九七名の協力を得て、総額一億二千五百四十四万円の募金を得ることができました。この成果は、同窓生各位の母校への限らない愛着と感謝の気持、並びに二十一世紀に飛躍する後輩への強い期待の現われであると、委員一同、真摯に受け止めております。この中には、募金目標を是非達成できるようにと多額の浄財を寄せられた同窓生や、殉職された同窓生の御家族からの募金があったことを申し添えておきます。

この募金総額から郵便局の振込手数料四十七万円を差し引いた一億二千二百七十四万円を事業経費に充当して、記念事業を実施することになります。なお、ご協力戴いた募金者の皆様の氏名は、期別に整理し、「防衛大学校創立五十周年記念事業同窓生募金者芳名録」として母校に遺すことに致します。

三 「防大創立五十周年同窓会記念事業実施計画」の概要

(一) 全般構想

① 記念事業の計画当初から会報を通じて説明してきましたとおり、事業内容は後世に遺す価値あるものを重点とし、また記念事業の計画、実施に当たっては、二十世紀後半の歴史を踏まえつつ二十一世紀に向けての飛躍を基本理念としております。

② 記念事業の実施については、同窓会本部及び防衛大学校と密接に連携を図りつつ、事業を計画的、かつ整齊と推進する

ことを方針とし、また次を重視事項としております。

- ア 記念事業の柱であるモニュメント事業の円滑な推進
- イ 同窓会記念行事の周到かつ計画的な準備と実行
- ウ 広報、特に会員の同窓会記念行事への参加意識の高揚

③ 同窓会記念行事に関しては、同窓会本部と事業委員会との事業担任を明確にするとともに、防大、同窓会本部及び委員会で記念行事に関する調整会議を設置して行事の円滑な準備と実行を図ることにしております。

(二) ステンドグラス

原画のタイトルは「若人の城」とし、その構図は、守るべき対象である日本のシンボルとしての富士山と、陸・海・空を示す「咲き誇る桜」「金色に輝く海」「紺碧の空」を描き、全体として国を守る若人の城としての小原台の場を表わすものとなっております。

(三) 中央広場の彫刻像

中央広場に、愛知芸術大学教授 高橋洋氏の制作によるブロンズ像を、本年九月に設置の予定です。

彫刻像のタイトルは「国の護り」とし、陸・海・空及び学生綱領の「廉恥、真勇、礼節」を表わす三本の柱で、武の象徴にして頭脳（知恵）を守る「兜」を支え、全体として防大生のあり方を表現するものとする構想です。

(四) 顕彰室・資料館の整備支援

資料館の顕彰室に御影石プレートに殉職同窓生の刻銘板を寄贈・設置するとともに、卒業生コーナーに必要な備品を寄贈する事業を計画しています。ただし、防大の顕彰室・資料館整備が当初計画の平成十五年度から平成十六年度に変更されたため、これらの事業の実行体制は同窓会として別途検討することになっております。

目次

会長年頭のご挨拶	1
同窓会記念事業	1
防大特集	1
小原台は今	6
防衛大学の訓練の概要と現状	6
第7回国際防衛学セミナーについて	7
校友会活動状況	8
特別寄稿	8
UNDOFに参加して	9
タイ王国防大卒業生との交流について	9
同窓会行事	9
第5回期別対抗ゴルフ大会	11
第4回防衛大学校同窓会テニス大会	12
第3回期別対抗囲碁大会開催	12
顕彰碑献花式	13
同窓会費納入状況に大異変!	13
同窓生アラカルト	14
期生会だより	14
第2・5・6・7・8	14
13・14・15・17・25・35期	20
支部だより	20
沖繩・九州・関西・北海道地域支部	20
タイ・広島地区支部・小原台クラブ	25
会計報告	29

また、防大当局が編纂する五十年史に関連して、防大の要請に基づきブックレットを作成する予定です。

(五) 記念ビデオの作成

卒業生の思い出の記録として、記念ビデオを本年十二月までに作成する計画です。タイトルは、「任重く道遠し（小原台を駆けた若人）」とし、構成は、防衛大学の誕生、防大生の生活、防大五十年の回顧、創立五十年記念行事、現在の学生生活及び同窓会活動等とし、BGMとして記念マーチも取り入れることにしています。ビデオの作成に当たっては、シナリオ作成について六期生桑原泰彦会員の、編集支援について陸自OB久保田博幸氏の協力を得ております。

本年十一月の同窓会記念行事の際には準完成ビデオの試写会を予定しており、また本年十二月の代議員会及び明年三月の総会において、完成ビデオの試写会を実施することも考慮しております。

(六) 記念マーチの作成、贈呈

防大生の観閲行進及び課業行進の際に使うことを目的として複数の記念マーチを作成し、本年十一月の同窓会記念行事の際に防大に寄贈する予定です。この事業は、防大吹奏楽部OB会が主体となって計画を進めております。

既に民間音楽家三名に作曲を依頼したほか、昨年十二月までに一般及び防大OB・学生から募集した作品を部門別に数曲選考したうえで、最終審査を本年四月から六月の間に防大で実施して贈呈する行進曲を選定し、記念行事の際に正式に披露することにしております。

(七) MCI (Military Cyber Institute) 構想の策定

昨年の「小原台だより」による報告の中で、人材活用機構としてサイバー・インスティテュートの創設を検討していることをお知らせしました。その後、委員会として検討を重ね

た結果、防大創立五十周年を記念し百周年に向かう植樹として、同窓会にMCI（仮称）を設立する基本構想を策定し、事業化のための具体的な提案書として纏め、本年十一月の記念行事において同窓会に提案する予定であります。

MCI構想の最も基本的な狙いは、全国に分散居住している同窓生各位が在職間に培った貴重な経験に基づく専門的な識見を結集して、その能力を最大限に活用していくことにあります。すなわち、公開された一般情報を分析・蓄積して軍事に関する諸情報を発信する機構を、同窓生による手作りで設立しようという構想であります。委員会は、この分野に造詣の深い十数人の同窓生有志の協力を得て検討チームを編成し基礎的な研究を開始しています。一方、このような提案は、同窓会に対し、今後の同窓会のあり方や運営に大きな転換を求めることにもなります。したがって、昨年十二月の代議員会では、委員会に対して同窓会の判断に資するような具体的なMCI提案書の作成及び同窓会への提案を承認するとともに、同窓会にも検討プロジェクトを発足させMCI機構設立の可否及び同窓会のあり方について検討を進めていくことになりました。同窓会各位の皆様には、委員会の考え方について更に理解を深めて頂くために、先の代議員会にご報告した「MCI趣意書」と「MCI構想推進の全体的枠組」を別項に掲載しておりますので、ご精読下さい。

(八) 記念行事

防大創立五十周年記念行事は、例年開校祭が行われる時期すなわち本年十一月に開催されることになりました。具体的な日程は、十一月十六日（土）が同窓会記念行事、十七日（日）が防大の公式行事であり、学生主体の行事は十四日（金）からの四日間の実施が予定されています。

同窓会記念行事の内容は、慰霊碑献花式、記念講演会、記念ビデオ試写会、ステンドグラス・彫刻像の制作過程作品の展示並びに記念祝賀会（同窓会本部が計画実施し、記念マーチの贈呈・披露、記念ビデオの贈呈、醜金者名簿の贈呈、MCI企画書の提案等を含む。）であり、いずれも防大校内で行われます。

記念講演会の講師については、三浦朱門氏の快諾を得ました。なお講演録は、平成十五年一月発行予定の「小原台だより」防大創立五十周年記念特集号に掲載することにしてあります。また、同窓会各支部が計画実施する記念講演会等に対して、可能な範囲で必要な資金を援助する予定であります。

記念行事の案内状は、本年八月頃までに同窓会全員に対して送付することにしてあります。

(九) 醜金者に対する小記念品の贈呈

記念事業醜金者全員に対して、小記念品として記念ビデオ並びにモニュメントの絵葉書セット（モニュメント説明文、記念講堂及び中央広場全景写真、ステンドグラス写真、彫刻像写真）を、明年三月頃を目途に送付することにしてあります。

なお、防大の要望に基づき、モニュメントのパンフレットを本年十一月までに作成し、防大に贈呈致します。

(十) 経費計画

平成十年の代議員会において、総額一億二千万円の記念事業予算と事業項目別の予算枠について承認を得ました。その後、計画の進捗に伴い明らかになった具体的な所要経費について、昨年十二月の代議員会において承認されました。その内容は次のとおりであります。

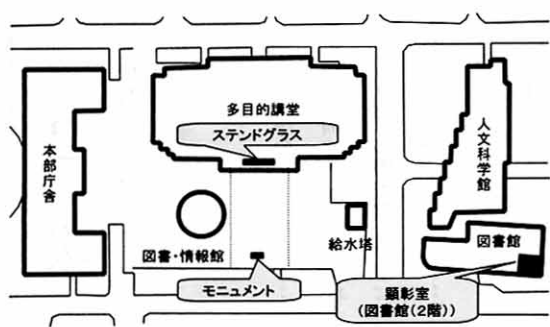
- ① モニュメント … 五千万円
- ステンドグラス … 二千七百五十万円
- 彫刻像 … 二千二百五十万円
- ② 顕彰室、資料館、記録 … 二千七百万円
- 顕彰室 … 一千八百万円

- 卒業生コーナー … 三百万円
- ブックレット … 百万円
- 記念ビデオ … 五百万円
- ③ 記念行事等 … 一千四百万円
- 記念講演会（支部講演会を含む。） … 一千万円

- ④ MCI構想 … 四百万円
- ⑤ 醜金者対応 … 九百五十万円
- 醜金者名簿 … 五十万円
- 小記念品 … 九百万円
- ⑥ 予備経費 … 一千五百五十七万円
- 所要経費総計 … 一億二千六百万円

(十一) 実施結果の報告及び記録
記念事業の中間的な実施結果を、記念行事終了後の本年十二月の代議員会及び平成十五年三月の総会で報告するとともに、記念事業全般についての最終的な報告は、委員会としての任務が終了する平成十五年六月頃に行う予定にしております。

また、記念事業に関する委員会の活動経過を記録として整理し、同窓会本部に永久保管することにしてあります。



MCI構想(仮称)趣意書

平成十三年十二月七日

一 本構想提案の背景

防衛大学校(防大)は、創設以来、いまや半世紀の歴史を重ねるに至りました。その卒業生は、第一期生から第四十四期生まで約一万八千名を越え、自衛隊および一般社会で大いに活躍しています。一方、自衛隊の幹部は防大卒業生のみで構成されていないことから、現役の間は防大卒業生のみによる同窓会活動は意識的に抑制すべき側面があることも否めません。

したがって、防大同窓会の活動は、主として既に退官した者が中心となつて防大校友会の活動に対する補助や会員相互の親睦事業を行つてきました。しかしながら、退役した防大同窓生の数が増大するにつれて、これまでの活動以外にも何か社会的な貢献をなすべき時機、すなわち社会に対する「発信力」を持つべき時機がきたのではないかという意見も、一部から出るようになりました。

その最初の動きが、平成六年に発足した「同窓会将来構想委員会」であり、この委員会に於ける審議を通じて、会則の改正、財政運営、事業の推進についての概案を得るにいたりしました。しかしながら、全事業にわたつて更に詳しい検討が必要との認識から、引き続き約一年間にわたり「事業推進委員会」で検討を重ねた結果、短期及び中長期の事業案として同窓会に答申され承認を得る運びになりました。「短期の事業」としては、支部育成、ホーム・カミングデイ、学生の悩み相談等を行うこととし、「中長期的な事業」としては、「同窓会として何らかの社会的貢献を行うこと」、「OBの連携をさらに深めること」等で、

じ同窓会として計画的に取り組んでいくことになつて今日に至つております。

ここに提案するMCI構想(細部は後述)は、五十周年記念事業の一つとしての提案ではありますが、「同窓会員を繋ぐネットワークを構築する」、「同窓会員の各種能力を総合して活用する」、「わが国における防衛問題の正しい位置づけに寄与する」等を柱にしているもので、近い将来、前述の事業推進委員会が提案した「防大同窓会の中長期的な活動計画」の推進につながる可能性を持ったものであります。

二 五十周年記念事業と本構想の関係

防大五十周年記念事業を立案する初期の段階では、「募金の規模」・「五十周年記念事業のあり方」・「寄贈事業(ステンドグラス、彫刻像、顕彰室等)」・「記念行事事業(講演会・行進曲・小記念品・記念ビデオ・醜金者名簿など)」について鋭意具体化を進めてきました。これらの各計画が着詰まる段階で、何か前述の「防大同窓会の中長期的な活動計画」に結びつく事業、すなわち「記念植樹の苗木」に当たるようなものを加えてはどうか、との提案が委員の中から出され、委員会で審議検討の結果、MCI構想こそ、五十周年という節目に記念植樹の意味合いで発足させるにふさわしい事業ではあるとの合意に達しました。しかし、MCI構想の取り扱いが、事後の同窓会の「長中期的な活動計画」に大きく関係することから、五十周年事業委員会として、醜金の一部を充当して、実行に移すために必要な具体的構想、即ち「趣旨」、「手順」、「組織」、「技術的な試行」、

「経費見積」など、実行可能性の細部事項を含む「提案書」を完成させて同窓会に提案することとし、じごの取り扱いは同窓会代議員会において検討して頂くことにいたしております。

三 MCI構想の趣旨

わが国の国家運営では、政治・経済・外交・安全保障(以下、本文では軍事と表現する)の四本柱のうち、何か物事を決めるに際して、軍事的視点が抜けていることが多々あります。これには幾つかの原因があると思いますが、その一つは、軍事に関する知識や体験が整理総合されていないため、軍事的視点からの考察をすることが難しいことにあります。

政治、経済、外交についての政策判断や学術研究をする際に、参考にできる「軍事的識見が整理総合されているセンター」が無いために、どうしても軍事的な視点が疎かになっています。現在、意ある者が中心となつて運営している軍事・防衛の課題を中心とした研究所も幾つかあつて心強い限りであります。それぞれが研究の基礎となる識見を整理総合する段階で多大の時間と労力を必要とすることから、研究そのものに充当する時間や労力が不足する共通の問題に直面しています。もし、このようなセンターが設立されれば、これらの各研究所も資料を効率的に整理することが可能となり、一挙に研究効率を上げることが可能となります。

他方、現在の政治・外交・経済界では、それを良いことに、意識的に軍事的な思考を排除する傾向さえあります。

反対に、これに気がついている政治家、財界人、外交官も多いのですが、自分の力で軍事・防衛に関する識見を整理統合する余裕がないのが現状であります。

ここに提案するMCI(Military Cyber Institute)構想は、未だ仮称であつて実行に

移される場合には、さらに理解し易い名前(例えば、防衛情報機構、DIO)等に変えるべきものであります。ここでは便宜上MCIと呼ぶことにします。

このような軍事・防衛に関する識見を整理・総合できるセンターの設立が必要であることの認識はありますが、現実これを立ち上げるとなると、二つの大きい問題を克服しなければなりません。

第一は、わが国でも最高レベルの軍事知識や体験を持った者が結集することであり、

第二は、立ち上げるための組織と当面(おそらく二〜三年)の運転資金を準備することであり、ある程度の年月の継続した実績がないと、官公庁や産業界や研究所等から「運転資金」に見合うだけの「資料提供料(委託料)」を得ることは難しいことです。

まず、第一の問題は、防大同窓会会員の知識を結集して立ち上げるのが一番の早道といえます。これに勝る母胎が日本には無いからです。防大同窓生の力を結集してもそれが出来ないとなれば、日本に出来る集団はないといえます。もちろん、発足後は、防大同窓生以外の者の参人も視野にいれておく必要があります。

現在、軍事の各部門で重要な識見を身につけた同窓生が日本全国に散在して、それぞれに活躍していますが、それらの識見が結集され、総合化されていないのが実情です。各同窓生が自分のカバールでできる識見を予め登録してセンターに集め、センターの専従員がこれを組織化し、各分野からの資料要求に応えられる態勢をとることがMCIの具体的なイメージといえます。

これからますます発達するコンピュータ・ネットワーク技術を活用して迅速に情報を交換し、各種の情報を集積・分析・加工して付加価値を付けること等によって、MCIは防衛に関する高いレベルの識能を結集し、

国の内外に安全保障関連の役に立つ情報や仕事を提供し、同窓会はこれを通じて大きい「発信力」を持つことができるようになることを確信します。

第二の問題は、MCIは営利を目的としたものではありませんが、最低限、運転に必要な収入を得る必要があります。同窓会からの資金だけを当てにするようでは長続きしないし、同窓生の賛同や協力は得られないと思います。

しかしながら、発足当時から、それに見合う収入源を他から得ることは難しいことも事実です。各界に呼びかけて設立と運転のための資金提供を受けるのも一案ではあります。これも現今の情勢では難しく、また情報分析の独立性を確保するためにも、できれば避けたい方が賢明であります。

同窓会がMCI構想を採択するか、採択すればどのような位置づけにするかは、これから同窓会が決める問題であります。営利を目的としないことや、特定の業界や官公庁との結びつきを持たせないことを考えますと、「NPO法人」として防大同窓会の下部組織とするのも有力な一案といえます。どの程度の資金を、どの程度の期間にわたって投入すれば、同窓会の「負の荷物」にならないかについては、その検討結果を「提案書」に記す予定であります。

いずれにしても、何事も見積り通りにならないリスクは存在します。その場合、提案書の作成経費や当初の二、三年の準備段階での経費投入は無駄となり、最悪の場合、防大同窓会の電子ネットワークだけが残ることになってしまうかもしれません。しかしながら、母校創立五十周年の節目に、同窓会の存在意義を高めるためにチャレンジする価値のある事業を創造し、同窓生の英知を結集して取り組んだということは、防大同窓会の歴史の中で価値あることと考えられないでしょうか。

MCIは五十周年記念事業委員会としての

一提案に過ぎず、委員会としましては、必ずしもMCIの設立に固執しているわけではありませぬ。しかし、これが出来ないとなると、これから先、どのような形で同窓会活動を意義あらしめるのか、同窓会としての「代案」を明らかにする必要があります。これからの五十年間を、今までのように会員の親睦を主とした任意団体として存在し続けることが、祖国防衛に生涯を投じて燃えた防大同窓生の同窓会として相応しいことなのでしょう。五十年間を迎える今こそ決断する時機ではないでしょうか。

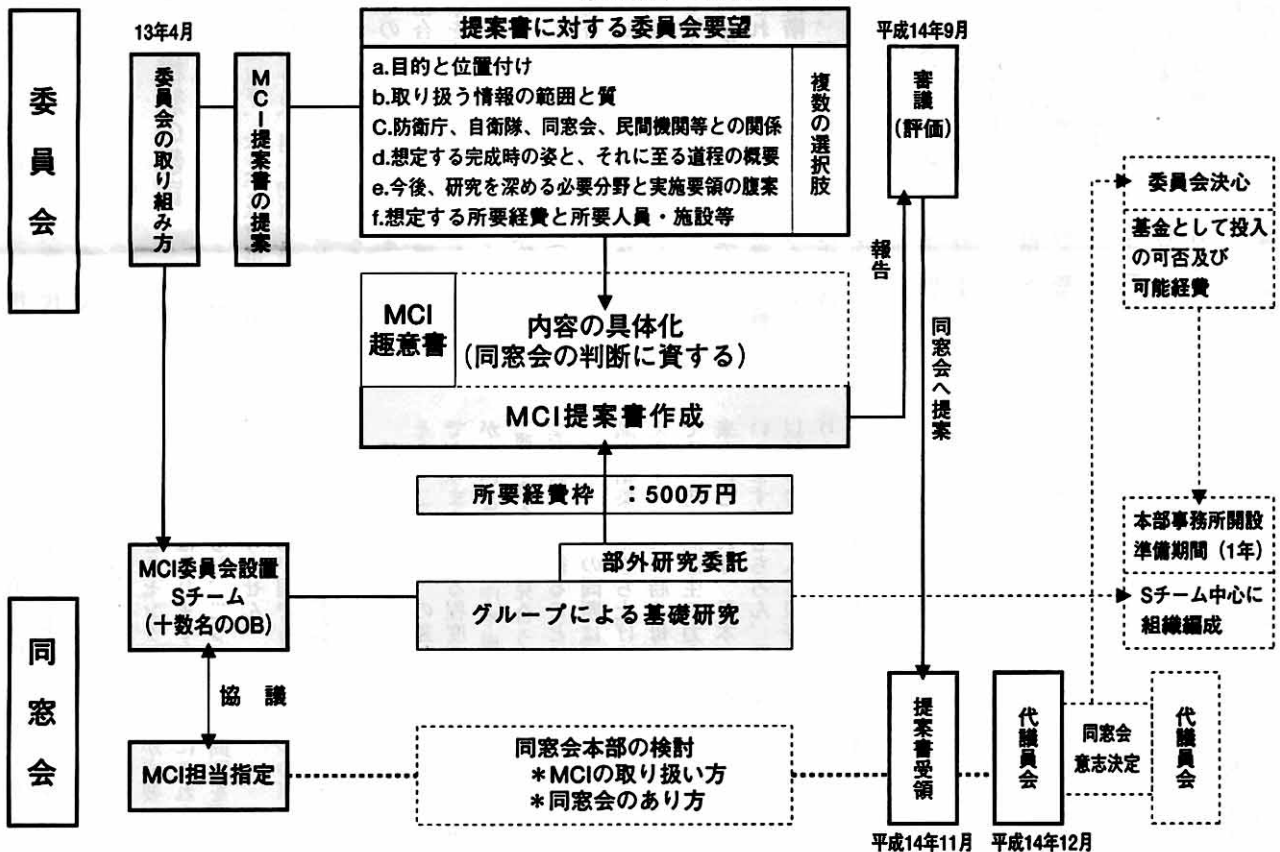
創始者である防大第一期生が同窓会をリードしている五十周年の節目のいま、防大同窓会の中長期ビジョンが出来ないとすれば、いつ、何を契機に、他の誰にそれができるのでしょうか。

MCI構想を何らかの形で発足させることが出来ますよう、同窓会員の皆様の御賛同を是非頂きたいものです。五十周年の節目に、百周年に向かう植樹として、このMCI事業を推進することは、防大同窓会はもとより、「軍事抜き日本国」を「軍事も考え合わせる日本国」にするためにも、極めて重要な一歩を踏み出す一助となると確信します。



MCI構想推進の全体的枠組み

◎100周年への植樹の苗(種)



防大五十周年記念事業募金状況

(平成13年11月30日現在)

期	対象者数	募 金 者 数					募金額 (×1000円)
		陸	海	空	合 計	応募率%	
1	299	152	62	47	261	87.3	5,900,000
2	308	150	53	46	249	80.8	5,320,000
3	447	161	57	93	311	69.6	6,780,000
4	419	154	50	77	281	67.1	5,720,000
5	491	136	51	75	262	53.4	5,490,000
6	427	126	63	89	278	65.1	5,840,000
7	419	133	58	58	249	59.4	5,195,000
8	414	111	45	60	216	52.2	4,250,000
9	424	107	57	61	225	53.1	5,280,000
10	442	118	53	63	234	52.9	4,090,000
11	462	135	57	57	249	53.9	4,185,000
12	417	102	48	59	209	50.1	2,790,000
13	403	105	41	60	206	51.1	2,500,000
14	461	121	67	87	275	59.7	3,147,000
15	401	129	57	57	243	60.6	2,640,000
16	402	111	38	61	210	52.2	2,405,000
17	455	114	58	57	229	50.3	2,445,000
18	399	92	58	54	204	51.1	2,195,000
19	413	133	37	55	225	54.5	2,420,000
20	356	89	46	41	176	49.4	1,830,000
21	465	92	58	47	197	42.4	2,135,000
22	431	85	68	39	192	44.5	2,014,000
23	378	103	34	40	177	46.8	1,935,000
24	417	79	46	31	156	37.4	1,809,027
25	374	79	47	34	160	42.8	1,695,000
26	469	87	64	45	196	41.8	2,040,000
27	364	54	70	36	160	44.0	1,760,000
28	403	64	47	38	149	37.0	11,665,000
29	414	74	39	29	142	34.3	1,475,000
30	369	53	41	29	123	33.3	1,340,000
31	396	57	37	32	126	31.8	1,300,000
32	334	55	24	32	111	33.2	1,170,000
33	378	80	27	30	137	36.2	1,425,000
34	354	57	21	50	128	36.2	1,357,000
35	439	58	28	30	116	26.4	1,271,000
36	340	33	21	28	82	24.1	880,000
37	366	35	22	27	84	23.0	895,000
38	425	37	20	30	87	20.5	960,000
39	338	51	22	32	105	31.1	1,070,000
40	376	27	14	46	87	23.1	885,000
41	403	96	42	30	168	41.7	1,515,000
42	407	15	3	4	22	5.4	220,000
合 計	16,899	3,850	1,851	1,996	7,697	45.5	121,238,027

勝田 支部							185,258
府中 支部							103,634
稲森 友三郎							10,000
本橋 昇司							10,000
総 計							121,546,919

小原台は今

●防衛大学校の訓練の概要と現状●

一 訓練の体制とスケジュールの概要

(一) 訓練の体制
防大における現在の訓練の体制は、首席指導教官、次席指導教官及び指導教官がそれぞれ訓練主任教官、訓練主任教官補佐、及び訓練教官として学生の訓練に当たっている。また、一学年の共通訓練及び二学年以上の陸・海・空の要員訓練にそれぞれ首席指導教官をもって訓練のための組織を編成するとともに、学生は各学年十六個の班に区分して訓練を実施している。

(二) スケジュールの概要

ア 訓練課程は、四年間で一〇〇五時間の訓練を実施している。学年別にみると第一学年は、陸・海・空各要員に共通した訓練を主体に実施し、第二学年から第四学年は、陸・海・空各要員別の専門訓練を実施し、卒業後の陸・海・空各幹部候補生学校における訓練課程に接続したプログラムとなっている。

イ 各学年ごとの一年間の訓練課程は、課程訓練と定期訓練に区分して実施している。

(ア) 課程訓練

課程訓練は、第一学年及び第二学年においては、毎週一回、第三学年及び第四学年においては、隔週に一回いず

れも午後の二時間を充当している。また、課程訓練週間実施予定表により、各訓練班に訓練科目及び時間を割り当て、第一学年及び第二学年においては前期十五週、後期十五週の計三十週（六十時間）、第三学年及び第四学年においては、前期八週、後期七週の計十五週（三十時間）の訓練を実施している。

(ア) 定期訓練

定期訓練は、春季、夏季、秋季及び冬季定期訓練に区分し、各学年年間約六週間実施している。定期訓練は、課程訓練に比較して期間も長く、かつ集中的に訓練が実施でき、訓練効率の高い訓練である。定期訓練において実施する科目は水泳（遠泳をふくむ）、スキー、野営訓練、部隊実習及び陸・海・空各自衛隊研修等である。

ウ その他

訓練関係行事として、体力・気力の養成と団結の強化を狙いとして、カッター競技会（四月・第二学年）、水泳競技会（九月・全学年）、棒倒し競技会（開校祭時十一月・全学年）、断郊競技会（十二月・第三学年）、持続走競技会（三月・第四学年）、及び教務部（体育学教室）が担当する体育競技会（十二月・全学年）の各競技会を実施している。また、指揮能力及び基本教練の練度向上を図る目的として、年間三回の観閲式を実施している。また、三年に一回実施される自衛隊記念日観閲式に第二学年以上の学生をもつて参加している。

二 訓練の現状

(一) 共通訓練

ア 共通訓練は、陸・海・空各要員に共通する訓練として、訓練課程一〇〇五時間のうちの四〇六時間（40%）を配当している。これは、平成八年度に訓練科目表を見直し、特に専門訓練及び陸・海・空各幹部候補生学校との接続を考慮した科目の精選及び時間配当を行った結果、従来の四三六時間から三〇三時間を削減したものである。

イ 共通訓練の訓練科目及び時間配当は、共通補導一〇四時間、基本教練三〇時間、戦技基礎一六九時間、富士登山七時間、教育法三四時間、部隊研修等五九時間及び異動・予備三時間である。将来幹部自衛官としての資質の向上、識能育成上必要な基礎的訓練であり、陸・海・空各要員間の相互理解を深めることを目的として、主として第一学年に二五五時間（共通訓練の55%）を実施している。

ウ 訓練の実施にあたって各訓練教官は、基本を徹底して指導し、要員訓練の基礎を築くとともに、陸・海・空共通マインドの育成を図るため、偏りのない指導に留意している。また、良識ある社会人としての徳操及び将来幹部自衛官としての積極敢為の気風、リーダーシップの基礎、フォロアシップ、規律心、団結心、及び闘争心の育成を図るとともに、幹部自衛官に相応しい挙措容儀及び基本教練に示す諸制式を確実に行うことに留意して訓練を実施している。

(二) 専門訓練

専門訓練は、陸・海・空各要員別の訓練であり、第二学年以上に実施している。訓練課程一〇〇五時間のうち、五九九時間（60%）を配当している。これは、近年の地上戦等基礎訓練装置及び新機動艇等の新

器材の導入、防衛学の在り方検討の進展及び女子学生訓練の四年終了（女子第一期生の卒業）等、訓練課程を取り巻く環境の変化に対応して訓練科目表を見直し、平成九年からは三〇三時間増加して五九九時間としたものである。実施に当たっては、共通訓練と同様に陸・海・空各幹部候補生学校からの本校に対する要求を取り入れるとともに、特に、陸・海・空各幹部候補生学校における訓練課程との連携に留意している。専門訓練は、将来自衛官勤務の基礎をなすとともに、その方向付けをする重要な訓練であることから、特に次の点に留意して教育を行っている。

* 学生を引きつける「魅力的な訓練」の実施

* 「知的訓練」及び「考えさせる訓練」の実施

* 短時間で効果的な訓練を実施するための「コツ」を教える訓練の実施

* 更に自学研鑽の動機付けをするための「よつてきたるゆえん」「戦史・戦訓」を教える訓練の実施

また、女子学生の訓練においては、共通訓練及び専門訓練とともに男子学生と同一条件で実施し、訓練の評価も同一に行っている。しかしながら男女の性差に基づく訓練環境の整備等の要配慮事項については、きめ細かな対処に留意して訓練を実施している。その他、教育訓練の実施にあたっては、主として訓練部所属の訓練教官が実施しているが、定期訓練など同時に多数の教官を必要とする際は、防衛学教室の教官及び陸・海・空各部隊等からの教官・助教の支援を受けている。

(三) 競技会

競技会は、旺盛な体力、気力及び強固な団結心を養成することを目的とし、昭和42年以来続いている伝統的な行事となっている。春季（カッター）、夏季（水泳）、冬季

(断郊・体育・持続走) 競技会及び開校祭における棒倒し競技会の実施及び事前訓練を通じ、各学年に求められる資質の錬磨及び学生個人の体力、気力の練成を図ることを狙いとしている。このため、事前訓練は指導組織(職員・学生)を確立するとともに、周到な訓練計画を準備し、その実施に万全を図るよう留意している。また、事前訓練の実施に当たっては、訓練開始・終了時刻を厳守させる等、規律心あるいは競争項の涵養の場ととらえ指導している。このほか、競技不参加者の絶無を期するため、平素の健康管理及び校友会活動との調和を図るとともに、水泳、断郊及び持続走競技不参加者に対しては補備訓練を実施し、全員参加の気風の醸成に留意している。

三 卒業生の皆様に対する要望

部隊等研修あるいは部隊実習で学生が駐屯地・基地を訪問した際は、よろしく指導をお願い致します。(訓練課)

第七回国際防衛学セミナーについて

14期 山内敏秀

一 全般

防衛大学校は、平成十三年七月十日(火)から十九日(木)の間、アジア・太平洋地域の十二ヶ国の参加を得て第七回国際防衛学セミナーを実施した。本セミナーは「防衛大学校における防衛学教育・研究の充実発展を図り、防衛大学校の新しい時代への対応に資する」とともに「参加各国の防衛学教育・研究

の充実発展及びわが国との安全保障にかかわる相互理解の促進に寄与し、併せて「国内の一般大学の防衛学に関連する学部・学科および部内外の同種研究機関等の教官、研究員に対し、相互理解の場を提供し、相互啓発に資する」ことを目的として平成六年度から実施されているものである。

二 実施の概要

本セミナーへはアジア・太平洋地域の十四カ国を招待し、カナダ、中国、インドネシア、韓国、マレーシア、モンゴル、フィリピン、ロシア、シンガポール、タイ、米国およびベトナムの十二カ国から参加があった。なお、残念なことにオーストラリアおよびインドは当初、参加を予定していたが、諸般の事情から直前に参加を取りやめた。その一方、防衛研究所および海上自衛隊幹部学校から初めての参加を得ることができた。

なお、今回のセミナーから十三年一月に竣工した本館に設けられた国際会議用の第二会議室を使用した最初の国際会議であったことを付け加えておきたい。

第七回にあたる今年度は「士官学校における軍事科学技術教育」をメイン・テーマとし、「士官学校教育における軍事科学技術教育の意義」および「科学技術が飛躍的に発展する環境化における軍事科学技術教育の在り方」という二つのサブ・テーマを設定し、研究会において第一セッションでは前者を、第二セッションでは後者についての討議を予定した。

七月十日、海外の参加者等十三名(カナダの代表が夫人を帯同)がほぼ予定どおりに来日。翌十一日、実行委員長である田原幹事主催の昼食会の後、十三時から開講式が行われた。西原正学校長は開講式の挨拶において「士官学校あるいは防衛大学校における専攻と任官後の職域とが必ずしも一致しない現状を考慮すると特定の識能を付与するのではなく科学的思考を可能とする基礎的知識が求められて

いるのではないか」との視点から「理工学教育において先端分野との比較において基礎分野の教育のあり方、カリキュラム上での教養科目と専門科目の適正な比率、さらに教官の研究活動と教育活動のバランス」等を例に引きつつ「軍事科学技術の重要性を指摘することとは比較的容易である。これに反し、士官候補生/防大生に理工学の分野をどのように教えるべきかそれほどやさしい問題ではない。」と述べられた。

開講式に引き続き、基調講演が行われた。その細部については後に譲ることとした。

十八時からは海外参加者に対するホーム・ステイ/ホーム・ビジットを受け入れてくださる横須賀市民との懇親会が本館大会議室で実施され、海外参加者と受け入れ横須賀市民との顔合わせも行われ、和気藹々のうちに終了した。

十二日(木)から十四日(土)は本セミナーの中心を占める研究会が行われ、十二日の第一セッションでは先に述べた「士官学校教育における軍事科学技術教育の意義」について、また十三日の第二セッションでは「科学技術が飛躍的に発展する環境化における軍事科学技術教育の在り方」について報告、討議が行われた。研究会に関して特筆しておきたいのは、今回、防衛学教育学群以外の学群から五名の発表・討議委員の参加を得、各委員はそれぞれの分野から積極的に議論を展開し、研究会の活性化に大きく貢献したことである。十四日午前の総括討議をもつて研究会は終了し、その日の午後は希望する海外参加者は横須賀市民の家庭に招かれ、日本文化、日本社会に対する理解を深めたものと思われる。

十六日(月)から十七日(火)にかけて広島、海上自衛隊幹部候補生学校、同第一術科学校の研修を実施した。今回のセミナーの主題である科学技術との関連を考え、往路には新幹線「のぞみ」を使用することを計画した。このため、早朝宿舎を出発し、各人は宿舎謹

製のランチ・ボックスを手に横須賀線で東京へ進出。東京駅ではJRの運行時間の正確さが裏目に出て、若干名が下車し損ね、隣駅まで行ってしまおうという樁事も出来したが、大きな混乱もなく、広島に到着した。

広島では平和公園を研修の後、宿泊予定地である呉に移動した。

十七日午前は、海上自衛隊幹部候補生学校及び同第一術科学校を研修。海外参加者は幹部候補生学校における教育・訓練に高い関心を示し、一方で教育参考館では深い感銘を覚えたようである。

十八日(水)の午前は、八カ国の参加者が東京研修を行った。その日の夕刻、終講式に引き続き、学校長主催の招宴が品川プリンスホテルで行われ、海外参加者のみならず、参加国の駐日武官、横須賀市民も参加した。招宴では日本への理解をより深めて貰うことを目的として日本舞踊、居合及び少林寺拳法の演武も行われた。時間の経つのを忘れる盛会であったが、金井副校長による参加国の各言語での乾杯の音頭で杯を揚げ、全ての行事を終了した。

三 成果の概要

(一) 基調講演では、「士官学校における軍事科学技術教育」を主題とし、将来戦の様相を見積り、そのような環境下で士官/幹部自衛官に要求される科学技術に関する知識、判断力、責任感、規律心、創造性等の能力及び本校における軍事科学技術教育の現状について報告が行われた。

これに対し、「指揮官が戦場において正しい判断を下せるためにはどのような教育を実施しているのか」、「防大生の創造力を高めるためにはどのような方法があるか」といった質問が海外参加者から出された。創造性の向上については、海外参加者から「オープンなクラスにおいてプロジェクトを付与し、自分で立てた計画に基づき、研究を実施し、その成果をクラスにおいて発

表させることにより創造性の向上を図っている「旨の発表があった。また、本校委員から卒業研究もその役割を果たしている」との説明があり、理解が得られたものと考えられる。

(二) 各セッションおよび総括討議を通じ、次のような共通した関心あるいは問題点が認識された。

ア 今回のセミナーの主題である「軍事科学技術教育」を越えた、より本源的問題である士官学校における教育の主眼は何かという問題について貴重な意見交換がなされた。「軍事科学技術にのみ通曉した者は専門家であつて我々が必要とする士官ではない」との発言が象徴するように各発言者からは「全人格的教育」の重要性が指摘された。これに関連し、士官学校教育における文系科目と理系科目の比重に関しても意見交換が行われた。

イ 前項とも密接に関連するが科学技術に関する教育において先端内容を教授すべきか基礎的内容を重視すべきかについて各参加者は高い関心を示し、活発な意見交換が行われた。「軍事科学技術」および「先端技術」をどのように捉えるか、今後の士官に必要な資質として「科学的思考に基づく健全な(軍事的)意思決定」ができる能力が不可欠であり、その能力を育成するための科学技術教育の重要性が指摘された。また、ハイテク兵器の操作に関わる教育は士官学校卒業後に実施し、士官学校ではそれらの教育の受け皿となる力を涵養するとの意見もあつた。

ウ 教育手法について、各国とも若者の気質の変化の中、いかに候補生/学生に授

業への動機付けを行い、いかに考えさせるかについて悩みを抱えていることが明らかにされた。

第一の問題は学生の学習意欲の低下であり、その対策として「習っている学科がなんの役に立っているのかを理解させる」、「勉学に対するハングリー精神を涵養するような雰囲気作りを行う」等が提示された。また、「中長期を見据えた将来の将校の理想像」を確立すべきであり、このためにも「全人格教育」の必要性が強調された。

第二の問題は原則として各教官が個々に対策を立てることではあるが、「学生が理論を新しい課題に適用せざるを得ない状況に陥るような質問を課する」等の教務運営上の工夫が参加者から紹介され、参考となるものであつた。

エ 上記に関連して、教務運営におけるコンピュータの役割について議論された。コンピュータを利用した教育の有効性は指摘されたが、その一方でコンピュータはより良い教育環境を構築するための道具の一つに過ぎないという点で共通の認識を得た。

おわりに

これまで述べたようにセミナーの中心であった研究会においては、軍事科学技術の革新的変革が進む中、士官候補生にどのような軍事科学技術教育を実施すべきかという問題に対する参加各国の関心は高く、活発な議論、有意義な意見交換が実施された。また、その他の行事も整齊と実施され、相互理解を促進し、国際防衛学セミナーの根本である信頼醸成に寄与したものと考へている。

最後に、関係各部の同窓生の支援がなければ、このような大きな国際セミナーを成功裏に終了することはできなかった。紙面を借りて改めて謝意を表したい。

平成13年度運動系校友会活動結果及び部員数状況

校友会名	成 績	部員数		校友会名	成 績	部員数	
		男子	女子			男子	女子
応援団リーダー部	開校記念祭リーダー公開	10		グライダー部	全日本新人競技会 8位	19	5
短艇委員会	全日本カッター競技大会 準優勝	68		ソフトテニス部	秋季関東学生リーグ戦 9部5位	25	
	関東地区新人戦 優勝			ボクシング部	関東大学トーナメント 4部3位	46	2
バスケットボール	男子 秋季関東リーグ戦 4部10位	54	12	レスリング部	東日本学生リーグ戦 2部5位	26	
	女子 春季神奈川リーグ戦 3部5位			ボート部	5大学レガッタ総合優勝	28	
柔道部	神奈川県学生春季大会 団体4位	40	3	フィールドホッケー部	男子 秋季関東学生リーグ戦 1部6位	32	15
ラグビー	秋季関東大学リーグ戦 3部7位	101			女子 秋季関東学生リーグ戦 2部5位		
サッカー	神奈川県リーグ戦 1部4位	66		ワンダーフォーゲル部	尾瀬、西湖、谷川岳、南アルプス等で活動	16	
剣道	全日本学生剣道優勝大会出場	59	6	パラシュート部	日本選手権大会	13	3
空手道部	全国国公立選手権大会 3位	68	4		個人Jr.の部 優勝 3年上田		
	春季関東リーグ戦 1部6位				2位 4年 水野、3位 4年 種橋		
バレーボール部	男子 秋季関東リーグ戦 4部7位	28	14	準硬式野球部	神奈川7大学リーグ戦 2位	50	
	女子 秋季関東リーグ戦 8部昇格			合気道部	全日本学生演武会出場	41	1
卓球部	春季関東学生リーグ戦 4部6位	17	1	体操部	東日本学生グランド選手権大会 団体10位	32	6
陸上競技	関東理工系学生競技大会	57	6	弓道部	秋季南関東リーグ戦	37	5
	男子団体優勝 女子団体優勝				男子 1部昇格、女子 2部4位		
硬式庭球部	男子 関東理工科リーグ戦 6部3位	41	8	少林寺拳法部	全日本学生大会 団体演武2位	37	2
	女子 関東理工科リーグ戦 9部2位				関東学生大会 団体演武優勝		
硬式野球部	神奈川リーグ戦(春・秋) 2部優勝	35		フェンシング部	関東学生選手権大会	31	
射撃部	秋季関東学生ライフル選手権大会 2部4位	24	1		フルレ 4部2位、サーブル及びエペ 3部2位		
山岳部	剣岳、穂高岳、金峰山、鷹取山、盾岩等登山	8	1	ウェイトリフティング部	神奈川県社会人選手権大会	17	2
水泳(競泳)部	東部国公立大会 男子6位、女子7位	30	5		69kg級優勝 1年楠、77kg級優勝 4年秋元		
水泳(水球)部	関東学生リーグ戦 1部昇格	17		相撲部	全国国公立対抗大会 団体3位	20	
ハンドボール部	秋季関東学生リーグ戦 5部5位	23			東日本学生リーグ戦 2部昇格		
アメリカンフットボール部	関東学生リーグ戦 2部Bブロック6位	87		自動車部	全関東学生ダートトライアル選手権大会	9	
ヨット(小型)部	関東学生選手権秋季大会	25			団体17位		
	470級11位 スナイプ級10位			バトミントン部	秋季関東大学選手権大会	27	9
ヨット(クルーザー)部	イタリア海軍兵学校・リボルノ市共催国際レース	16			男子 5部6位、女子 4部6位		
	士官候補生の部8位			居合道部	自衛隊全国大会 団体優勝	24	3
銃剣道	全日本学生選手権大会 3位	33	4	吹奏楽部	横須賀港祭り、定期演奏会	26	8
	全国寺井大会 大学生の部2位			儀仗隊	自衛隊音楽祭り	51	5

UNDOFに参加して

第一師団司令部 三等陸佐 鬼頭健司

一 はじめに

私は、平成十二年八月十六日から平成十三年二月十四日まで一八三日間、UNDOFの一員として国連平和維持活動に従事し、人として、自衛官として、非常に貴重な経験をすることができました。また、日本を離れ、世界の関心の集まる地域でいろいろ考えさせられました。貴重な投稿の場をいただいたので、参加所見を述べたいと思います。

二 UNDOF及び日本隊のUNSN

まず最初に、UNDOF及びゴラン高原派遣輸送隊（日本隊のこと）について理解していただくために若干説明します。UNDOFは、United Nations Disengagement Observer Forceの略であり、日本語で言うと、国連兵力引き離し監視隊となります。UNDOFは、第四次中東戦争の結果、一九七四年五月にイスラエルとシリア両国間で締結された兵力引き離し協定に基づき、国連の安全保障理事会により設立され、ゴラン高原に展開しています。なお、ゴラン高原は、イスラエルの北東部、シリアの南西部に位置し、北はレバノン、南はヨルダンに接しています。東西約二十km、南北約七十km、面積は神奈川県約半分です。緯度は福岡県南部と熊本県北部に位置し、気候は全般に乾燥しており、十一月下旬～三月下旬が雨期と言われています。また、水資源が豊富であり、イスラエル・シリア両国にとっての戦略的要衝です。

UNDOFの任務は、①兵力分離・制限地域に關し、協定等の履行状況を監視する。②両国の停戦が厳密に遵守されているかを確認する。③停戦状態を保持する、です。司令部、二個の歩兵大隊、兵站大隊から編成されており、現在司令官には、スエーデンの少将が任命されています。派遣国は、オーストリア、スロバキア、ポーランド、カナダ、日本の五カ国です。

ゴラン高原派遣輸送隊は、カナダ主体の兵站大隊の一部を担っています。平成八年一月からUNDOFの仲間入りをして、半年毎部隊交代をしています。我々が派遣されたときは第十次隊でした。隊本部、輸送班、分遣班、警務班から編成されており、派遣人員は、四十三名、陸上・海上・航空自衛官からの混成部隊です。任務は、日常生活物資の輸送・道路等の補修です。

なお、任務以外にも、積極的に他国との競技会に参加し、また、日本文化紹介行事などを主催して派遣各国との交流にも努めています。

三 UNDOFへ参加したの所見

(一) 指揮官として更なる修養を痛感

UNDOF派遣を通じて、指揮官として日本においては得ることができない経験を積むことができました。我々の部隊は長官直轄部隊であり、指揮官としてかなり重い状況判断・決心をしなければならぬことが何度かありました。特に、昨春秋以来イスラエルとパレスチナの紛争が激化した際、一つ一つの輸送任務をどう遂行するか、思い悩みながら、決心をしました。

また、たった四十三名の日本人が、言葉の通じない諸外国の軍人の中で業務に従事すると言うことで、言葉では説明することが難しいストレスが蓄積してきました。このストレスは端的に言えば人間関係に現れ、お互いの

関係がギクシャクしてくることもあります。その中で指揮統率して任務を達成すると言うことは、指揮官として厳しいものがありました。この点に關しては、今なお反省しきりです。

(二) 自衛官、日本人のすばらしさの再確認

時間通りに行動できる、決められたことは確実にその日のうちに実施をする、業務では手を抜かないなど日本人としては当たり前のことが、他国の部隊長には「プロフェッショナル」と映り、日本隊はすばらしいと賛辞をいただきました。日本にいるとなかなか気がつかない日本人の優れた点を再認識し、日本人として誇りを感じました。

(三) 意志決定の要領の相違を理解

UNDOFでの仕事のやり方は、日本的な業務の積み上げ方式でなく、欧米型のトップダウン方式でした。派遣直後は戸惑いも多くありましたが、慣れてくると指揮官同士の話し合いで物事を決定し業務を円滑に遂行できました。

(四) 国連PKOシステムへの習熟の必要性

伝統的PKOに分類され、二十七年という長期に活動しているUNDOFに参加できたことで、多国籍の現場において、いかに雑多な業務をシステム化しているかを理解することができました。国連PKO活動もかなりシステム化、マニュアル化されており、今後日本が更なるPKOへの参加を視野に入れるなら、このシステムを十分に理解して活動する必要があると感じました。

四 おわりに

任務を完遂し帰国した今、UNDOFに参加でき本当に有意義であったと確信しています。また、上記で述べたことのみならず、四十二名のかけがえのない仲間をもつことができました。更に、日本と大変異なる、中東の文化、歴史、宗教についても直接触れ、見識

を深めることができました。

最後に、我々が任務を無事終了することができたのも、遠く離れた日本からご支援いただいた数多くの皆さんのおかげであると感謝しております。(八十八U・東大卒・筑波大研修第三十普通科連隊中隊長等歴任)

タイ王国防大卒業生との交流について

「もうひとつの同窓会」

練習艦隊司令官 海将補 保井信治

平成十三年度遠洋練習航海は、去る四月二十日から九月十日までの約五か月間にわたり実施され、ペルシャ湾岸七カ国、マダガスカル及び東南アジア方面の計十二か国十五寄港地を親善訪問した。

タイは、今次遠洋航海における最後の訪問国であり、八月中旬から下旬にかけて首都バンコク及び主要海軍基地であるサタヒップ港に寄港し、各種の研修及び親善行事を実施した。

タイは、アジアにおいて特に親日的な国として有名であるが、練習艦隊の寄港に際しても、タイ海軍の全面的かつ親身な支援により、予定された諸行事をすべて順調に終えることができ、日タイの友好親善の促進に大きな成果を挙げることができた。

入港中には他の寄港地同様、表敬訪問及び艦上レセプションのような儀礼並びに親善交流に加えて士官学校や海軍基地及び、特にタイでは、東南アジア唯一の空母及びトランシット中に寄港していた米海軍空母等の研修を行うことができた。また、バンコクにおいて

は、タイの防衛大学校出身の陸海空軍将校による同窓会が開催され練習艦隊の防大出身者総員が招待された。今回は、このタイで行われた防大五十周年記念同窓会について報告する。



タイでは、例年一月に防衛駐在官（陸上自衛官）が、また、八月にはタイにおける防大出身の陸海空軍士官が主催して、それぞれ交互に同窓会が実施されている。今回は防大創立五十周年記念祝賀という節目にあたり、練習艦隊の入港を機に、八月十九日にタイ空軍オフィサーズ・クラブにおいてタイ側の主催で同窓会が実施されたものである。

同窓会には、駐日武官を経験された元副首相のソンプーン・ラホン空軍大將（退役）及び前空軍司令官のタナニット・ニアンタム空軍大將らを始めとする駐日武官経験者及び防大出身の陸海空軍将校とその家族等が多数参加しており、異国の地における母校の盛大な同窓会に驚くとともに、防大同窓生及び日

タイの絆の強さを改めて実感し、深く感動した次第である。

会場では、タイ海軍のバンド演奏、プロ・ダンサーによる華麗な民族舞踊やマジック・ショー等が企画され会場を沸かせた。

タイの卒業生による防大の紹介がスクリーンに映し出されると、自らの学生時代を懐かしむ声が上がリ、また、会場の各所では日タイの同期生同士がそれぞれの思い出話に花を咲かせ久々の再会を祝っていた。

練習艦隊側からは若手幹部及び実習幹部らが防大道遥歌を披露したほか、会の最後には日タイ両国の同窓生が全員肩を組んで学生歌を斉唱し盛況のうちに同窓会を終了した。

防大六期生に初めてタイから留学生を受け入れて以来、タイ軍における防大同窓生は、累計八十人を超えるまでに至っており、間もなく、防大出身の将官が続々と誕生する時期を迎えている。

彼らは、タイの将来を背負う国家の至宝として、各軍において必要な配置に就くエリート軍人というだけでなく、タイにおける知己、親日的な一大パワーとして、さらに良好な日タイ関係を構築する上で、大きな掛け橋となっていることを、身をもって感じた。

現在防大には、以前からのタイ、シンガポールからの留学生のほか、東南アジアを中心に合計八か国から本科・研究科あわせて八三名もの留学生が在学中と聞いている。さらに、今次遠洋航海においても各国の海軍司令官等を表敬訪問した際、先方からは是非とも防大に留学させて士官教育を受けさせたい旨の発言もあり、創立五十周年を迎える今、諸外国からの注目が一段と増していることを再認識した。

これは、単に防大の士官学校としての教育理念及び教育体系が高く評価されているだけでなく、我が国に対する各国の高い関心の表



れである。我が国を取り巻く情勢は近年大きく変化し、従来の経済大国に対する憧憬及び経済支援といった経済活動のみの興味から、最近では、特にPKO活動や信頼醸成活動等、「目に見える国際貢献」に一定の成果を挙げている。これらの活動に対する各国からの高い評価が我が国の国際社会に貢献できる国家としての存在感を増大させている。これは、我が国を不安定な国際社会における安全保障上の重要なパートナーとみなしてきている証左であり、各国がアジアにおけるリーダーの一員である我が国との信頼醸成等の安全保障環境を構築、整備する上での掛け橋となる人材を留学させているのである。

このように、創立五十周年という節目を迎えるに当たって、防大の果たす役割と諸外国からの期待は益々高まりつつある。個人主義至上の現代において、四年間にわたり、「二つ屋根の下に寝て」、「同じ釜の飯

を食った」、防大の同期生は、かけがえのない仲間であり、他の組織では決して培うことのできない、国や時間をも超越した強固な信頼関係が醸成される。

同窓会終了後、嬉々として二次会に連れ立って出て行く後輩たちを見て、同期に留学生のいない私は非常に羨ましく感じると同時に、それぞれの国家の次代を担う若者たちの強固な友情と信頼関係を目の当たりにし、この上なく頼もしく感じた次第である。



第五回期別対抗ゴルフ大会

第五回同窓会期別対抗ゴルフ大会は、九月二十八日（金）千葉CC川間コースで一期生から十一期生までの各期十名の選手（総一〇名）により行われた。

午前中は、霧雨の天候であったが昼前からは急速な回復をみせ、絶好のコンディションの下各期代表選手は、平素の練習成果以上のスコア獲得を目指し奮闘した。

その結果、グロスの部は、八期生チームが、ネットの部は、五期生チームが優勝した。両チームとも、グロス、ネット部門では初優勝であった。



▲グロスの部優勝
(8期生チーム)



▶ネットの部優勝
(5期生チーム)



▶阿部会長からの授与(5期生チーム)

ネットの部優勝の五期生は、「五回までの大会で優勝と縁のなかった五期が五回目の記念すべき大会でやっと取ることができました。皆さん

グロスの部優勝八期生の代表は、「ネットの部ではいままで優勝したことがないので、今回はグロスでの優勝を同期一丸となって練習しました。欲しかった優勝であり、感激しております。ありがとうございました。」とのスピーチ
八期生代表選手名：織田勝、上野春樹、三代武徳、末廣容徳、千葉恒平、熊谷文憲、泉卓郎、笠井健介、池島奎一郎、江見英樹

ありがとう。」とのコメント
選手：杉浦功一、富岡勝、三村正勝、福地建夫、千葉瑞圓、江添正倫、松本哲雄、多田力、青山利雄、白石充司

特に、今回は優勝トロフィーを寄贈頂いた松本前防大校長も参加され阿部会長、君嶋・利渉両副会長と一緒にラウンドされました。懇親会時、前校長から、「卒業後一期の人は、五十年、今回初参加の十一期生の方も卒業後四十年経過とのこと、このように卒業生が一同に会して親睦を深めることは歴史を感じるとともに極めて有意義であると思います。益々同窓会が充実発展することを期待しています。」とのスピーチを頂き、会長



▶松本前校長からのカップ授与(8期生チーム)

グロスの部	成績	ネットの部	成績
優勝	8期生	優勝	5期生
準優勝	10期生	準優勝	9期生
第3位	9期生	第3位	10期生

から「来年は、五十周年行事を計画しており同窓会として一致団結、玉成を期しております。」との答辞でゴルフ大会を閉めくくった。
なお、ゴルフ大会も今回で五回目で各期代表選手もやや固定化されつつある現状を打破するためにも、事務局は各期の予選会や練習ラウンドの機会増大（勿論安価で）をゴルフ場と調整していく所存です。愛好者は同期ゴルフ仲間との連携を密にして積極的にゴルフを楽しんで下さい。来年はあなたの参加を待っております。

事業部 森永吉彦

第四回期別対抗テニス大会

平成十三年五月二十日(日)、超好天の中、第四回防衛大学校同窓会テニス大会が開催された。各期から選抜された選手は、昨年のリベンジを期して、家族の声援を受けながら熱戦を繰り広げた。大会は、一期生から五期生までのシニア・リーグと、六期生から初参加の十一期生までのレギュラー・リーグに分けて実施され、現役の庭球部員の積極的な支援を受け、整齊と進行し、万一のため掛けられていた傷害保険のお世話になることなく無事終了した。大会後の懇親会では、あまりの好天と熱戦の連続のためビールの売れ行きがよく、在庫が底をつき、役員が買い出しに走る光景も見られ盛況裏に終わり、来年の大会での再会を約して散会した。参加選手は、各期チーム十名



であったが、補欠選手を含め一三三名がエントリーし、シニア・リーグでは、八名のご婦人が出場した。成績は次のとおりであった。

シニア・リーグ			
優勝	第2期	準優勝	第3期
第3位	第5期	レギュラー・リーグ	
優勝	第7期	準優勝	第6期
第3位	第10期		

第五回大会は、平成十四年五月十九日(日)、予備六月二日(日)に開催される予定である。

毎年、初参加チームが、選手の選抜に苦勞しているので、二期生は早めに選抜を終え、優勝を目指して練習を積み重ねることをお勧めする。

事業部 明野充功



第三回期別対抗囲碁大会開催

第六期生が二十七勝五敗で圧勝!

防衛大学校同窓会が主催する各期対抗の親睦・交流行事として、第三回囲碁大会が平成十三年九月一日(土)、日本棋院会館において盛大に開催された。当日は初秋を思わせる比較的涼しい一日であったが、一期生から今年初参加の十一期生まで約九十名の選抜棋手が一同に会し、熱戦が繰り広げられた。開始に先立ち阿部博男同窓会会長兼大会会長から、親睦交流の趣旨を対し、囲碁を一日楽しんで欲しい。又来年は防衛大学校創立五十年記念行事が行われる。皆さんには創意を持って積極的に参加をお願いしたい。と挨拶された後、高比康之競技委員長から競技実施上の注意があり、熱戦の火蓋が切つて落とされた。

競技は事前に各期担当委員全員で決定した

	勝ち数					順位
	1回戦	2回戦	3回戦	4回戦	合計	
1期生	2	3	1	3	9	11
2期生	1	3	4	5	13	9
3期生	7	7	5	4	23	2
4期生	5	4	3	4	16	5
5期生	3	5	5	4	17	3
6期生	7	7	5	8	27	1
7期生	4	3	5	5	17	3
8期生	4	3	3	1	11	10
9期生	4	2	5	4	15	6
10期生	4	2	5	3	14	7
11期生	3	5	3	3	14	7

対戦表にもとづき、オール互い先、四回戦で実施された。各回戦終了と同時に各期担当委員が競技結果を持ち寄り、集計結果をその都度壇上のチャートに掲載しつつ、緊迫した中で午前中に二回戦、昼食をはさみ午後二回戦の競技を実施した。競技途中救急車を呼ぶハプニングもあったが、参加者全員無事に予定通り競技を終了した。

その後表彰式・懇親会に向け会場整理中に総合結果が出、直ちに表彰式に移った。優勝した六期生の代表者に対し阿部会長から優勝カップ及び副賞が授与された。会場において四戦全勝旗手十七名：宮本 双葉旗手、中川 久雄旗手、朝倉 謙旗手、倉田 眞治旗手(以上三期)、清水 聡一旗手(四期)、川上 陽太郎旗手、川崎 浅夫旗手、上村 俊一旗手(以上五期)、濱本 良弘旗手、壺内 成人旗手、仲路 唯禮旗手、志賀 茂男旗手、伴 明旗手(以上六期)、萩原 嘉明旗手(七期)、佐藤 至茂旗手(八期) 山 岸 征洋旗手(九期)、平井 龍雄旗手(十一期)の紹介があり全員で健闘を称えた。結果は準優勝三期生、以下五・七期生(同率)、四期生、九期生、十・十一期生(同率)、二期生、八期生、一期生の順位となった。

表彰式後高比競技委員長の乾杯の音頭で、懇親会に入り記念撮影を交え和やかな歓談の内に本大会は成功裏に終了した。更に修養を重ねる度に賭ける!選手も見受けられた。次年度五十周年記念行事に向け、今後アイデアを募り実りある行事としたい。

事業部 若木利博

平成十三年度 顕彰碑献花式

穏やかな小春日和に恵まれた平成十三年十一月十七日防大顕彰碑前において、平成十三年度の顕彰碑献花式が阿部同窓会会長（実行委員長・野澤同窓会小原台事務局長）の執行の下厳粛に執り行われました。学校長はじめ学校幹部、各期生会代表、同窓会事務局長等多数の方々が参列し、黙祷、学生儀仗隊による儀仗、会長及び西原学校長による慰霊の辞の後、参列者全員による献花が行われ、八十七柱の殉職同窓生の御冥福をお祈り申し上げました。幸いにして本年度は、殉職者おりませんでした。

総務担当 阿保文敏



同窓会費納入状況 に大異変！

昨年、防大本科卒業生が二万人を越え、今年、防大設立五十周年を迎えた今日、同窓会の活動も活発化し、大いに発展しているのはご存知のとおりと思います。さて、同窓会の経理を担当している者

として最近の経費納入状況は心配せざるを得ないものとなっております。紙面を通して特に若いクラスの皆様には是非とも会費に関する理解をして頂きたく筆を執っている次第です。

毎年の同窓会活動費は、新しく会員となる防大卒業生から拠出された終身会費をもって充てています。すなわち、十三年度は、十三年三月に卒業した四十五期生から拠出予定の会費をもって充てる訳です。

過去四十数年、卒業生からの会費をもって毎年度の活動経費とし、余裕が出た分を積み立てて今日に至っておりますが、昨年度、本会費の拠出に大異変が起りました。

すなわち、十二年度は四十四期三百九十名の八十五パーセント（過去の拠出平均値）の三百二十九名が納入するものと予測していましたが、結果は二八一名、四十七パーセントの納入率でした。

したがって、十二年度は半分程度の収入しかなく、積立金からの繰入を余儀なくされました。

納入者を更に細かく見ると、陸二百五名中、六十名（納入率29%）、海九十二名中、三十七名（40%）、空九十二名中、八十四名（91%）となっております。

四十四期の空の皆さんには敬意と感謝を申し上げ、陸及び海の皆さんには毎日の業務に多忙を極め、ついつい会費の件をお忘れになったことと思います。今からでも何等問題ありませんので、それぞれ連絡を取り合つて会費納入の件、宜しくお願いします。

次に四十五期の皆さんも現在までの納入を見ていると楽観を許さない状況を呈しています。

昨年六月、同窓会事務局の代表者が各幹部候補生学校を訪ね、四十五期の皆さんに同窓会の活動状況等を説明しており

ますので、会費納入についても十分に理解を得られたものと期待しています。

終身会費六万円（三尉一号俸月額四分の一）という一見高いように思われるかもしれませんが、日本人男性の平均寿命を七十七歳として、防大卒業から毎年、年会費として納めるとすれば千円余りです。

多様な任務を遂行し、期待される自衛隊を支える初級幹部として実施すべき、あるいは勉強すべきことが多々あるうかと思いますが、勤務の合間、山を、海を、空を見つめつつ、母校をそして同窓会を想って欲しいものです。

二十一世紀を迎え、部隊の骨幹をなす若い皆さんの限らないご発展を祈念を申し上げます。同窓会への理解をお願いする次第です。

なお、同窓会費の納入等についての問い合わせ先は左記のとおりです。その他同窓会の活動等についての疑問あるいは意見があるようでしたらいつでも連絡して下さい。また、十二月の代議員会あるいは三月の総会においても大いに発言して下さい

経理担当 十一期（海）河村 嘉宏
防衛大学校同窓会本部事務所
東京都新宿区本塩町二一三二二
TEL/FAX: 〇三・三三三・五一一・八九一〇
E-mail: bodaj@nifty.com

同窓生

アラカルト

剣道の海外普及事情

七期(陸) 杉田 明傑

はじめに

現役を退官後、土田元校長も通つておられた丸の内にある長い歴史を持つ道場で同期生の江藤兵部君達と一緒に剣道を続けている。それが縁で三年前から財団法人全日本剣道連盟(以下全剣連)の国際委員を委嘱され、警察、教職等の剣道専門家や学識経験者等からなる国際委員会の末席に身を置いている。全剣連には各種の委員会があり会長に意見を具申し、連盟の運営に資しているが、国際委員会は、剣道の海外における普及振興に關する活動を行っている。

一、剣道の特徴

剣道を論ずるとき、その中にある精神性や人間修行的な面を抜きにすることは出来ないだろう。古今東西、鉄の発明以

来、人を倒し己を守るために剣が用いられるようになる、少しでもこれを効果的に用いる方法を研究し鍛錬を重ねたであろうことは容易に想像がつく。その意味においてこの種の武術は我が国固有のものではない。しかし単なる斬り合いの術は、文明の進歩とともに不要となり多くは姿を消してしまっている。然るに、これが、「礼」につながり、「剣禅一致」の言葉のように「禅」とつながり、精神性を深めて人間修行の道となつて今日維持されているものは我が国の剣道を除いてないと言つてもいい。これが剣道の特徴だと思ふ。実際、全剣連は「剣道の理念」として「剣道は剣の理法の修練による人間形成の道である。」と定めているし、審判規則には「相手に非礼な言動をする」と最大限の罰則が適用されるように定められている。これらは他の競技にはない表現だろう。また、剣道の試合において、勝者が飛び上がつて喜んだり、ガッツポーズをすることはないし、観衆も拍手以外の応援は戒められている。声援も鳴り物も論外でありそれがマナーとなっている。

このように武道として精神性を重視した特異性があるため、普及に課題を生ずることもあるが、逆に多くの海外の人々



を惹きつけていることも事実である。小生が接したシンガポールの青年は「祖父母は、私が剣道をやることを喜ばなかった。しかし、英米にも留学したが、科学とテクノロジーばかりで、精神的なものはなかった。日本の近代化の背景に武道の精神があつたのではないかと思ひ剣道を修行することにした。」とのことであつた。ドイツの剣道家は、「精神を集中して相手を圧する。これが剣道の魅力だ。」と言つている。また、韓国の青年は「神前に礼をすることは抵抗があるが、礼節を重んじ精神と身体を鍛えるのに最適のスポーツだ。」と述べている。このように何らかの形で剣道に精神的なものを求めている声は多い。

二、世界大会と国際組織

戦前戦後を通じ海外との文化交流や、在留邦人を中心に行われてきた剣道も、日本の高度成長とともに飛躍的にその裾野を広げてきた。そして昭和四十年には台湾において、日、米、台湾、琉球四個チームによる第一回国際剣道大会が開かれた。その後三年に一度の大会は逐年充実し、昨年第十一回大会では四一の国と地域(台湾、香港、ハワイなどは一個チームの参加が認められている)から三〇〇名以上の男女が米国サンタクララに集まり勝敗を競つた。結果は団体、個人ともに日本が連覇したが、男子団体決勝では、韓国に二勝一敗一引き分けという際どい勝ち方で、実力は伯仲してきている。ちなみに三位はカナダであつた。次回は二〇〇三年に英国グラスゴーで開かれる予定であり、準備に着手しているところである。

一方、規模の拡大に伴い、昭和四五年には国際剣道連盟(IKF)が結成され、現在四一の国と地域がこれに加盟している。IKFは会長と事務局を日本に置き、一二名の理事からなる理事会によって運営されている。理事の構成は日本四名、他にアジアゾーンから二名、米州ゾーン三名、欧州ゾーン三名であり、小生も日本代表理事の一人として名を連ねている。

現在の剣道人口は、韓国の四十万人を筆頭に仏、台湾、独、米、ブラジル、カナダが千人から五千人規模であり合計約四三万人と推定している。ちなみに日本の剣道人口は登録者だけで、一一六万人である。

三、海外普及活動

現在行つている普及活動には、前記のような大会の開催のほか、年間十回以上の講師の派遣や講習会がある。派遣経費は被派遣国が負担することが多いが、海外交流基金や、民間団体の寄付によることもあり、全剣連が独自負担することもある。小生も派遣員となり数ヶ国を訪れたがその都度、人々の関心の高さを感じるとともに、教えられることも多い。海外の剣道家の中には、新渡戸稲造の「武士道」や鈴木大拙の「禅」などに関心をもっている者も多く、取り組み方も熱心で、日本の文化を再認識する機会ともなっている。

八期(空)工藤雄司君がかつてフランスに滞在派遣されたのもこの事業の一環であるし、他に何名かの自衛官が短期派遣されている。また派遣ではないが、十四期(陸)の上松大八郎君や同(海)大

田文雄君、二九期(空)村上和彦君達がそれぞれの海外任地で剣道を普及し交流したことは未だに現地で語り継がれている。

他に毎年、夏の最も暑い時期に有段者を日本に招き、滞在経費を全剣連が負担して、約十日間「外国人剣道指導者夏季講習会」を埼玉県北本市で行っている。

この講習会には本場での修行を目指し希望者が多く、人選、国選に担当者は苦勞している現状である。今年は、二六回目であり、主要国のほかロシアやグアテマラ、ユーゴスラヴィア、南ア等からも参加し、二三ヶ国、五十六名(年齢は二十一歳から五十五才)による合宿であった。日本側の主任講師は、経験豊富な八段教士が当たっている。小生は、二回目の参加となったが、日本人を含め多国籍八十数人の昼夜に亘る修行の日々は壮観で心を打つものがある。国籍も人種も違いますが、ただ剣道修行という一点において、共同体なのだ。真摯という言葉が一番ふさわしく稽古はもとより、起居動作に至るまで教えられたことをよく守る。彼らもまた、帰国したならば、教える立場に立つ人々である。

ひとところ日本は、洪水のように製品を輸出し、経済摩擦を引き起こしたが、文化面でこのような活動をしていることは、意外に知られていない。剣道界にとつてPRは苦手とするところであるが、二六年間もこのような国際文化活動をしていることを、もつと内外の人々に知ってもらっても良いのではないかと思う。同時に、これらの人々が、憧れの「サムライ」の本場で剣道修業を終え、道場を一步出て、わが国の世情を見ると、一

体何を感じるであろうか、気になるところである。

四、剣道とオリンピック

剣道をオリンピックの種目に加えることが、剣道の普及には最も近道ではないか、という考えがある。また、剣道界は、オリンピック種目化を悲願としているのではないかと思っている人も多い。事実、日本を除く多くの国々は内心そのことを望んでいる。昭和三十九年の東京オリンピックの時、剣道は公開競技として、これに参加した。当時の剣道界には、オリンピック種目化が視野にあったことは事実のようだ。オリンピック種目化を希望する国々の意見は、「このようにすればいい剣道をより多くの人々に見てもらい、参加してもらおうべきだ。また、種目化されれば国家から、補助が受けられるし、入賞すれば、賞金が付与され励みになる。」というものである。オリンピック種目化の条件は、二十五ヶ国以上の参加国があり、過去二回以上の世界大会を開いていることである。この条件からすれば、剣道は、はるかにこのハードルを越えている。然るに、現在、全剣連は、敢えてオリンピックの種目に入れることを意図していない。理由は、武道としての剣道の真髄(精神と様式)が、勝敗だけが全ての、そして好むと好まざるとに問わず、商業主義や国際政治の影響を受け易いオリンピックの場で、守られることは至難であろうとの認識に立っているからだ。やはり、本来太刀をもって生死を賭することから発した剣道は、祭典イベント的な面もあるオリンピックにはなじまないとは私では考えている。柔道の国

際化の経緯もまた、貴重な参考となっている。ある国で、日本大使が「国際化すれば版權はなくなりますよ。」と言ったことが印象的であった。

やはり剣道は、身の引き締まるように拭き清められた道場で、師弟関係のな人間関係のもとに、心、技、体に亘り本来の剣道を伝えていくことが指導の原点なのだろう。そのためには、わが国剣道そのものが競技化、スポーツ化にながれることなく、武道の原点に立ち返りそれを維持することが前提であることは言うまでもない。

世界剣道連盟(IKF)は前述のとおり理事十二人中、八名が外国人である。

現在は家元としての権威を守っているが、理事会が民主的な合議制である以上、将来は予断を許さないものがある。極論すればフェンシングのように電光表示による勝敗判定の方式などが導入されないと限らない。家元理事の責任は重いものがある。

五、韓国の剣道

韓国の剣道人口四十万人は、人口比で見るとわが国と大差がない。道場も四〇〇以上あるといわれているし日本同様、多くの小中高校の学生も学校や道場に通って稽古をしている。高段者も多く、実力も前回の世界大会が示すように、わが国に肉薄している。このように盛んな理由は、戦前からの日本との関係、儒教的な精神風土や気性が剣道と合う、などが考えられる。また、韓国剣道(クムドウ)とよばれている。)は韓国独自の剣法が源流であるとの意識があるからだと言人もいる。(一九九七、六「剣道時代」)

ともあれ、剣道の海外普及にあたり韓国との連携の必要性は増している。

終わりに

全剣連が剣道の海外普及のためにやっていることは前述の他に、昇段審査や中古剣道具の海外送付などもある。このように、人的物的、経済的な負担のもとに、海外普及をすすめている目的は何であるうか。私なりに言えば剣道の普遍的価値の共有ということになる。生死を賭した斬り合いから発し、生者必滅、諸行無常の中に死生観についての先人の深い思索と長い鍛錬を経て、武士道をはぐくみ、人格形成の手段としての剣道が確立されてきた。剣道に「交剣知愛」という言葉があるが、剣道を通じ切磋琢磨するなかに、国境人種をこえて、互に理解し合い、尊敬し合い、平和な世界構築に貢献することこそ剣道海外普及の目的ではないかと思考している。

十期応用化学同期三人 中国で奮闘中

十期応用化学 古澤 典彦

一 はじめに

十期の応用化学は一個班ですが、陸海空要員が揃っている珍しい班で、卒業後の結束も固く毎年十月十二日前後を十期十二班の日としてグランドヒル市ヶ谷に集い、旧交を温めています。その十二班から三名(押川、遠山、古澤)が現在中国遺棄化学兵器廃棄事業に参

画し、齢六十に近いながらも防大応用化学の名を高めようと奮闘しているところであり、今回その活動の一部を皆様に御紹介したいと思います。

二 中国遺棄化学兵器とは

昨年九月多くの新聞等で、中国東北部の北安における遺棄化学兵器の発掘回収の状況が報道されたので、御存知の方も多いと思えますが、簡単に中国遺棄化学兵器について述べておきます。

中国遺棄化学兵器とは、中国に遺棄されている旧日本軍の化学兵器のことであり、一九九七年に発効した化学兵器禁止条約は、条約発効後原則として十年以内に他の締約国の領域内に遺棄した化学兵器を廃棄することを義務付けております。中国は一九九七年四月に条約を批准し、日本は中国の遺棄化学兵器を廃棄する義務を負っています。



条約成立以前の一九九〇年に中国が日本に対してその解決を要請してきており、一九九一年以降外務省が中心となり多くの現地調査が行われるとともに、日中政府間で協議が重ねられ一九九九年七月中国遺棄化学兵器廃棄に関する覚書に双方が署名しました。我が国としては関係する各省庁の協力の下に、政府全体として取り組むことを基本としており、現在内閣府の遺棄化学兵器処理担当室が中心となって、この事業を推進しています。

三 中国遺棄化学兵器の特性

中国遺棄化学兵器は以下のような特性があります。

(一) 数量が極めて多い。

我が国はこれまでの現地調査の結果約七十万発の旧日本軍のものと思われる化学兵器が中国国内に存在すると推定しています。

(二) ほとんどがハルバ嶺に集中、されど広範囲にも分布

遺棄化学兵器のほとんど(六十七万発)は、中国東北部の吉林省敦化市ハルバ嶺地区に埋設されていますが、それ以外にも南は浙江省から北は黒龍江省まで広く分布しています。それらの地域は一部を除き、生活環境が日本に比べかなり悪いところでは、腐食が進み危険性が増しているものもある。

(三) 腐食等が進み危険性が増しているものもある

これらの化学兵器は戦後長期間にわたって埋設されていたため、腐食、損壊が進んで化学剤が漏れているものもあると見られます。また砲爆弾の炸薬等に使われているピクリン酸は、感度の高いピクリン酸塩を形成している恐れがあります。

(四) 処理上の困難性がある

更に旧日本軍の化学剤はルイサイト、ジ

フェニルシアノアルシン等砒素を含むものが多い等廃棄処理上の困難性があります。

四 遺棄化学兵器廃棄事業と我々の関わり

当初の現地調査の段階から防衛庁は要員を参加させ、調査に協力しておりますが、我々のようなOBが中国に渡り現地調査、発掘回収に携わるようになったのは、押川が自衛隊を一九九七年に定年退職し遺棄化学兵器廃棄のために作られた某企業に入社し、現地調査に参加したのが最初です。遺棄化学兵器の廃棄処理は

① 現地調査を行って、旧日本軍の化学兵器が否かを特定する。

② 砲弾等を発掘回収する。

③ 保管庫に輸送し、処理までの間保管庫に保管する。

④ 実処理(前処理、本処理、後処理)・・・処理方法未決定

のようなプロセスで行いますが、これらに携わる要員としては化学兵器、砲弾等に関する知識・技能及び長時間防護のための装備品を着用し悪条件下でも仕事を行える体力・気力・忍耐力を持つことが必要であり自衛官なかならず化学及び武器(弾薬)職種の人間が適任です。しかしながら自衛官の参加には様々な制約があることから、OBよって必要数を確保しようということになり、昨年九月黒龍江省北安市においては三〇〇発を越える発掘回収事業においては、押川、古澤を含め多くの陸上自衛官OBが参加し大きな成果を挙げました。これが契機となつて本年六月日本国際問題研究所に今後行われるであろう現地調査、発掘回収事業に対し実働面から支援するため自衛官OBを集めることとなりました。現在六名の陸上自衛官OBが勤

務しており、押川、遠山、古澤の熟年同期生三名(全員化学職種)はその中の中心的存在として頑張っています。(遠山は十月から参加)

五 奮闘状況

二〇〇一年度の関連事業の一端は、次のようであります。

瀋陽におけるサンプリング事業…六月六日

唐山・石家庄における現地調査…七月十日

南京における事前調査…七月二十二日～二十五日、古澤参加

英国DSTL研修…八月十八日～九月二日、古澤参加

南京における事前探査…九月九日～二十九日、押川全日程参加、古澤参加(二十四日～二十八日)

ハルバ嶺における道路建設視察…十月十九日～二十一日、押川、遠山、古澤参加

武漢における現地調査…十月二十二日～三十日、押川、遠山、古澤参加

南京における発掘回収…十一月五日～二十九日、押川、遠山全日程参加、古澤参加(十四日～二十九日)

唐山における現地調査…十一月五日～十二



日、古澤参加
正に東奔西走、休む暇とてなく奮闘していることが御理解いただけるでしょう。

六 まとめ

このような超多忙の中で我々が音を上げることなくチャレンジしている大きな理由は、我々の知識・技能が必要とされていることに對する満足感・充足感であり、中国遺棄化学兵器廃棄事業に参画することに生きがいを感じていることでしょうか。また一衣帯水とはいいながらも、なかなか行く機会のない中国に行けるというのも理由の一つであり、草の根として日中関係を良好なものとしたいとひそかな自負もあります。

定年後の第二の人生を爽りあるものとして実感しつつ、今後とも我々は持てる力を発揮して行きたいと考えており、皆様の御声援を御願ひ致します。また今後我々のメンバーは増強される方向にあるので、自分もやってみたいと思われる方はチャレンジしてみても如何でしょうか。

化学兵器禁止機関査察局に勤務して

本科第十五期生 秋山 一郎

皆様のご支援で当職を得、平成九年六月に単身オランダに赴任してから、検証活動の中心である査察局の立ち上げから、査察団の派遣と査察時のトラブルシューティング、問題解決のための加盟国との事務折衝等を積み重ね、なんとか無

事に四年間で一、〇〇〇回を超える査察実績を上げるまでに漕ぎ着ける事が出来ました。直接は日本の防衛に貢献しないポストではありますが、国際的な場で「国際貢献」という防衛庁・自衛隊の新しい活躍分野の一端を担う重職にあることを光栄に思っております。

世界平和のために設立された国際機関と言いましても、実態は各国それぞれの国益がぶつかり合う国際政治の渦中にあり、査察という実務を成功裏に進めていくため、機関総員五〇〇名中の約半数を占める二三〇名(出身約六十ヶ国)の多国籍プロ集団を部下に持ち、査察マシーンとして一丸となして(しかも英語を駆使して)仕事をさせる苦勞は並み大抵ではありませんが、いままさらバタ臭いことをしても付け焼き刃なので、自衛隊で培った頑張りや誠実さと部下への思いやりを基本とし、思い切って「浪花節」一流で統率しています。

驚いたことにこの「浪花節」流アプロ



OPCWの旗とともにオペレーション・センターにて

イチが、多国籍であってもOPCWのような新しい国際機関で途方もないプラス効果を発揮しています。国連を含め、国際機関では自分の出世のために部下の手柄を横取りする上司が多い中、自ら監督責任を買って出て部下のことを本気で庇う上司がいること自体が彼らにとつては驚きですし、人種・宗教の区別なく「異文化」と「異なる価値観」を認めあつた上で全員のチームワークの必要性を説いていく私のアプロイチは(査察局という実動部隊であつたことが成功の鍵ですが)なにかにつけて一家言あるプロ集団の中でも強固な連帯意識を醸成していくことができました。もちろん実際に部下を身体を張って庇ってやることと、是非で処罰する決断が必要なこととは言うまでもありません。

例えば、操作マニュアルの誤りで米国の秘密文書を間違つてキューバ大使の公邸にFAXしてしまつた部下を(本人はクビを覚悟していましたが)、「単純に本人のみの責任は問えない」と判断して私が監督責任を負つてやり、その夜のうちに米国代表団長とキューバ大使の両者を自ら説得して無事解決したり、口ばかり達者で、肝心の「軍令」に従わないチェコ人の査察団長を「一年のみの契約更新」という嚴重注意処分にしたりとつうように、自ら是非非非を実行して火中の栗を拾つてみせることが肝要です。あとは、ちゃんとした情報源の確保でしょうか。情報なくして独断専行するのは、「伏魔殿」の国際機関では単なる無鉄砲者で終わつてしまいますので……

結論は、(一) 自衛隊のやりかたは国際機関でも十分通用する、(二) 異なる文化・価値観を尊重しつつ共通の目的・目標のために強いリーダーシップを発揮していく、(三) それを裏打ちする「最後の責任は俺が取る」、ということに尽きると思っています。

これからは自衛隊がもつともつと国際舞台で活躍できる場が増えて行くわけですが、(残念ながら、語学のハンデの克服が一番の課題ですが)我々の能力・アプロイチには全く問題はありません。UNに尻込みする必要はありません。自信をもって事に当たりましょう。それを証明するために引き続きオランダでがんばつて「浪花節」の実践に努めますので、今後とも引き続き皆様のご支援・ご鞭撻をよろしく願ひいたします。

我が人生二〇〇年、生涯現役!!

海上十七期 大段 和廣

卒業以来二十八年、コンピュータ、事務機器営業一筋で今日に至っています。営業二年目、米国内社の教育部のカリキュラムで行動科学心理学を用いた営業教育がありました。高い営業実績を達成した時の社会、会社、家庭における、満足している自分の振るまい、言動、行動様式を強くイメージし、その状況を獲得するために、楽しく営業活動を行い、いかに高い目標にチャレンジし達成するかのすべてを受講しました。根性と体力で営業実績を上げられると自負していた私には、新しい何かを自覚めさせるものでし

た。私にとってはイメージトレーニングの始まり
でした。また、上司から意志あれば物事は成就
する。人類が月に立つことができたのは、ケネ
ディが月に人を送りたいという意志を持った故
に実現したのだと、意志、イメージの重要性が
強く印象に残っています。営業に限らず人生目
標を根性と忍耐で達成するのではなく、案に何
でもやり遂げていく事を、営業という職業を通
じて体得しました。子供たちが小学生になっ
てから、このイメージトレーニングを家族に、も
ちい始めました。毎年正月家から場所を移し券
囲気を変え、ホテルのレストランで食事の後、チ
ビラベルを配り、二年後の自分の姿、勉強・スポ
ーツ・遊び・手にしたい物等、そしてそれを手に
する為の一年何をするのか等を書き、一人ず
つ家族の前で公表し家族で支援をすることを
確かめます。この毎年の行事のラベル集は我が
家の財産になっています。この習慣は長女の結
婚にまで成果を出したようです。

部門をマネージメントする立場になって、会社
のトップ方針を受けて自部門の営業戦略を立案
することが最初の仕事になります。営業部門で
は営業戦略を立案する際、戦場を市場、武器を
商品、兵力を営業員、兵たんを事務・物流・
サポートスタッフ、敵を競合他社に分類し、軍事
戦略書を参考にしています。技術革新による製
品の機能性能の進歩、市場要求の変化、サポー
トシステムの変化に即応した営業力を磨きつつ、
競合優位に戦えるよう、市場と市場にマッチし
た課題解決手段を迅速に提供すべく準備を
します。プレジデント誌の野中郁次郎氏(元防
衛大学教授)の記事に、製品の本質が、ハードウ
エアの機能や品質、価格から、それらによって、
提供される情報や知識にシフトしている現代、
企業活動において「知識社会」を迎えつつある。
組織全体にわたる「俊敏な思考」と「機敏な行動」

が強く求められている。故に企業も機動力に富
んだ世界最強の軍隊といわれる米国海兵隊に
学ぶべき点が多いと述べています。ここからヒ
ントを得て、アジルカンパニー(機敏な企業)を目指
し、部門の年度初めのキックオフに際して、海兵
隊のビジョンを参考に営業コンセプトを作成し、
販売戦略(マリン作戦)を展開した。その際同期
の泉君に海兵隊についての話をお願いしたとこ
ろ、当時湾岸戦争さなかで湾岸戦争に参加し、
横須賀に一時帰港している海兵隊の中佐から、
直接生の声を聞かせてもらえたこととなった。
部長もその迫力ある話を聞きキックオフミーテ
ィングは成功裏におわった。各部門から営業が集
結し新生の営業部門が誕生し、スタートしたば
かりであつたが、チーム一丸のムードを早々に醸
成する事が出来ました。機動力を持ち部長そ
れぞれ自己変革を推進することで、その初年度、
事業構造の変化の兆しが見え始め、難易度の高
かつた販売目標を達成しました。マリン作戦で
は目指す方向を明示し私の思いを徹底する為、
考え方、目標達成手段、価値観等を一にする
べくトルあわせに議論を重ね、阿吽の呼吸で業
務遂行できる信頼関係を礎とし、実行計画を
共有することに注力した結果が成果に結びつい
たものと考えます。コンセプトの「ページ(私の
思い)を記す」。

(一)エブリ・マリン・アライフルマン(海兵隊の基
礎能力)を目指す。↓早急なセールスパワーの具
備が求められており、一人一人セールスマン・セ
ールスマネジャー・スペシャリストに基盤となるス
キルを身につけよう。(二)成果(戦果)の達成↓製
品サービスを迅速かつ効率的に市場に送り出
し、お客様を豊かにする。(三)海兵隊要件を備え
よう↓販売部組織の自己革新の継続①平時の
構想力と緩やかなビジョンの共有②官僚制とタ
スクフォースを具備する柔軟な組織構造の維持

↓方針/システム営業戦略立案&マリン作戦展
開(事業の構造変革)③表裏一体の情報通信体
制と迅速な物流システムの構築↓業種・業務別
キーマンによるタスク実行④阿吽の呼吸で動く
為に知識や思想の原形を共有↓双方向コミュニ
ケーションによる相互信頼の醸成⑤トップが常
に前線にたつ「前線指揮」↓部門長の率先垂範
⑥「最後に骨を拾う」浪花節非合理的価値を信
じよ海兵隊の戦地に遭体袋の持参也

こうして、毎年、年度がスタートする度に、何
の疑問も覚えず目標達成に邁進することを繰
り返していました。しかし、目標は達成するが
何かスッキリしないものを感じるようになりま
した。現代は人間の物理的快適さを求め、物質
中心の社会で、情報技術、科学技術、生産技術
の進歩を一層加速させています。その社会の構
成員の一人として活動している自分の姿を第三
者的に見る事を忘れていたのです。人間生きて
いく上で、社会人、企業人、家庭人の三つの輪
がバランスよく保たれてこそ、人間本来の有り
様と何年か前から考えていたことが思い出され
ました。振り返ってみると仕事に傾注しておれ
ば、企業の成長と日本経済の成長につながるも
のと、企業人の輪が大きく、私の思考回路が、
会社・自部門の業績に占められている、アンバラ
ンスさに立ち止まった状態にありました。その
状況下、ノーベル経済学賞(平成十年)を受賞し
たインドのアマーティア・センの「経済を物質だけ
ではなくて、人間の価値、倫理、自然との関係、
調和、こういうぜんたいでの評価をすべきだ。」と
いう論文が目にとまり、何かを呼び戻すキッカ
ケとなるものでした。又同時期に、中村天風
(日露戦争の始まる前、明治三十五年十二月陸
軍参謀本部情報班員として蒙古に派遣される)
の著書「成功の実現」を一読しました。中村天
風を師事した人には、東郷平八郎元帥、原敬元



首相、山本五十六元帥、石川素重元鶴見総持寺
禪師、倉田主税日立製作所元社長、松本幸四郎
七世歌舞伎俳優、杉浦重剛儒学者、堀越二郎セ
ン戦設計者等、軍人・政治家・文化人・禅僧・企
業人等がおられます。本文中に、「人間はこの世
の中に、世の中の進化と向上に順応すべく、生
まれてきた。」「人生を価値高く生きるには心の
積極化が重要」「蟹は甲羅に似せて穴を掘る(人
は心のスケール以上の人生は作らない)」の文面
にふれ、目先の仕事のことばかりに比重の高か
った私は「私は何をする為に生まれてきたのか、
自分にとって本当に大切なものは何か。」「自分
の価値は何か」を真剣に考えるようになりまし
た。話は飛びますが、この著書の中に、東郷元
帥の話が出ています。中村天風師からクンパハカ
を教わった時に、「日本海の時、もしも
この方法を知っておれば、敵の旗艦の沈没する
一部始終をゆくり見ることができたが、自分の
立っている指令塔協で、敵の三十三センチ砲が
炸裂した。これを見て、至近弾に気を取ら
れた瞬間に敵の旗艦が沈没したため、報告書に
一部始終をみていたと書けなかった。」といわれ
た述懐が私は非常に専いと思つた。と記されて

いる。東郷元帥は天風師を哲人と称えて書を贈つておられます。書には「神国哲人出、扶桑靈海開、英雄興兒女、都入法門来」(神国に哲人出で扶桑の靈海を開く。英雄兒女と興に都て法門にきたる)と記されている。

(クンバハカ・肛門を締め、同時に、肩の力を抜いて、下腹部に力を充実させる。)

平成十三年夏、昭和四十一年、四十二年の二回、堀越先生の依頼により中村天風師が防衛大学校で「心と人生という問題」という演題で講演されたテープを聞くことができました。堀越先生の「学生はすでに相当の自覚が出来ているだろうが、いつ何時どのように国際情勢が変化するか解らない現在、心の問題と言う重要な事理解を、学生に持たせたい」という強い思いから講演が実現したようである。この講演から四十年経た今、同時多発テロを契機に私達は国際情勢の大きな変化に遭遇し、防衛の任務も大きく変化しつつある。このタイミングで、四十年前にタイムスリップして中村天風師の講演を聞いた私に、同窓会紙欄に寄稿依頼があった事に不思議さを感じ、敢えて中村天風師の講演の内容を挿入させて頂きます。講演に、「心の問題は真剣に生命を考える人には、大問題である。生命に対する心の重大性を本当に正しく認識している人が少ない。昭和二十年以降、物質文明が異常に進歩し、精神文化が停滞した傾向のなかに生まれ、習慣性から肉体の方を尊重し、心を自分の注意から外におく日本人の一般的傾向がある。どのように学問、位地、名位を高めようが人生一回限り、ダブルページはない。一回張りの人生を価値高く生かさねば、万物の靈長としてこの世に生まれた甲斐がない。命は肉体と心を一丸としており、さらに心と肉体とを結びつけている神経系統を堅持するには、事ある日も事なき日も、心に積極的態度を持たせるこ

とが重要である。難事にぶつかっても平常心で心を空虚にせずうわずらすることもなく、平素と同様な対応をするには、心の積極化が重要である。肉体は右向けといえ右を向くが、心というのは肉体と同じようになかなか統御出来ない事に気が付く。我が命、我身のものでありながら、心掛けざる心、思うようには動かない。ある訓練を行えば肉体を取り扱おうと同じように心を取り扱うようになれる。訓練法は堀越先生、佐々木先生に聞かれれば教えていただける。」と講演されています。

人生一〇〇年、生涯現役と定める私にとっては、生涯現役の三分の一を通過中の今、アマテイヤ・セン氏の論文、中村天風師の著書・講演テープによって、これからの五十年「世の役に立つ自分の価値は何か」「自分は何をやる為に生まれてきたのか」を考えるキッカケを掴むことができました。何時間か経つ時でも、心に積極的態度を持たせ続け、心の統御が容易に出来るようにしよう、と、昨年五月より、心と身体を鍛練法を出勤前約一時間毎日継続して行っています。(富士ゼロックス)

平成十二年度自衛隊統 合防災演習について

三十期 山口 芳正

防衛大学第三十期を代表して、陸上自衛官の山口芳正が一言述べさせていただきます。

私は、今は陸上幕僚監部に勤務しておりますが、ここでは今年の七月まで勤務していた第一師団司令部第三部防衛班長として

の経験談を話してみたいと思います。

防衛班長として勤務したのは、丁度二年間ですが、山北町玄倉川の水難事故に伴う災害派遣に始まり、東海村核燃料施設の放射能漏れ事故に伴う災害派遣等十五回もの災害派遣に携わり、非常に思い出深い勤務となりました。

中でも、在任間で一番印象に残っているのは、平成十二年度自衛隊統合防災演習の主務者として、参加したことです。東部方面総監部は、実質的な演習の計画を第一師団に任せて下さいましたので、ほぼ思い通りに演習計画を立案することができました。

ただ、調整所要は非常に膨大で、部内では師団隷下部隊を始め、それぞれの会場を担当する師団隷下部隊とも調整する必要がありました。東部方面総監部、海上自衛隊の横須賀地方総監部及び航空自衛隊の航空総隊司令部の関係者との調整も実施しました。

また、東京都庁の災害対策部、衛生局及び建設局、警視庁の警備部及び交通部、東京消防庁の警防部、関係自治体、総務省(当時郵政省)、農林水産省、海上保安庁、及び関係企業等様々な部外機関との調整をする必要もありました。

師団で訓練の案を作って、これを東京都庁と調整すると、今度は東京都庁が部外関係機関と調整します。師団隷下部隊から師団に調整が入ると、調整の結節は、三、四つにもなり、非常に手間がかかりました。最後の方では末端の部隊・機関相互の調整を実施することにより、その手間はかなり省けましたが、通常の陸上自衛隊の組織だけで完結する訓練の調整とは違った苦労がありました。

これらの機関と調整を図りつつ銀座、白髭西、葛西、木場、駒沢、舎人、都庁、立川、篠崎及び晴海の十コ会場の訓練計画を策定することは、大変なことでした。

さらに、この準備間は丁度三宅島火山活動に伴う災害派遣及び神津島近海地震に伴う災害派遣並びに七都県市総合防災訓練準備と重なり、本当に忙しく、とすればどの業務も中途半端になる恐れもありました。

この時は、防衛班を始め師団司令部の方々に全面的にお世話になったのですが、中でも、第一期生の福田師団長始め第三期生の山下副師団長、橋本副師団長、西村幕僚長そして第二十一期生の越智第三部長等の諸先輩方には本当にお世話になりました。非力な私を暖かく見守って下さり今も感謝の気持ちで一杯です。

さらに、第二期生の東京都の志方俊之参与及び第十三期生の神奈川県防災局の佐藤喜久二課長(現参事)にもいろいろとお世話になりました。自衛隊を退官されてからもこのような形で仕事をされている先輩がいます。これは、後輩の私としては大変誇りに思います。これからもお体にお気をつけて活躍されんことを祈っております。

結局、統合防災演習の方は、私個人としては必ずしも準備万端とは言えないまま本番を迎えたのですが、北は恵庭の第三施設団から南は福岡の第十九普通科連隊まで、各部隊の周到な準備に裏打ちされた活躍によって成功裡に終えることができました。この時ほど、自分一人の力の限界、周りの人の協力の有難さを感じたことはありません。

ここに、改めて各演習参加部隊の皆様にご挨拶申し上げます。有り難うございました。

二期生会だより

Kiseikai
Dayori #9

2期生会

◆幹事 一 柚木 文夫

二期生のセンシメンタルジャーニー防大
ホームカミングデー参加

平成十三年三月十八日、四十五期生の卒業式にご案内をいただき、防大同窓会によるホームカミングデーが行われた。前年の一期生に引き続き、今回は二期生が案内を受け、当日は家族を合わせて約三百人の二期生一家が懐かしの小原台上に大集合し、互いに久闊を叙し、母校への思いを新たにしました。また、その前夜及び当夜は、横須賀のあちこちで二期生の班会、クラブ会などの懇親会が開かれ、昔に変わらぬ大声が町に響いた。

ホームカミングデー準備のことなど

前年の一期生のホームカミングデー(以下HCGと略記)当日、私も二期生の役員数名が参考のため、行事にオブザーバー参加させていただいた。北は北海道、南は沖縄から集まった一期生の皆さんが、互いに時間の経つのも忘れて談笑しておられる様子を拝見して感銘を受け、この催しを来年も是非続けていただき、二期生自体としても中味の濃いイベントにしたいと思い、早速、二期生会役員会で実行要領の検討を始めたことだった。

二期生の多くが、この平成十二年度をもって満六十五才を迎えて第二の人生を終え、これから夫婦共々悠々自適(?)の生活に入ろうとする時期である。この時期こそ、青春の一時を共に過ごした小原台に集まり、その後縁を得た伴侶共々、我々の人生の原点ともなった往時を思いを馳せ、自ら選んだ生涯への思いを新たにす貴重な機会だろうと考えたものである。防大及び同窓会には申し訳ないが、この機会を二期生として大いに利用させてもらおうというのが実は本音でもあった。

二期生は、毎年十一月に東京で二期生会の総会兼懇親会を実施している。しかし、今回の平成十二年度例会については、十一月を三月に延期して防大HCGDに合わせて実施し、東京近辺に限らず、全国から出来るだけ多くの同期生とそのご夫人方に集まってもらおうと考えた。そのため同期生会としては、早い時期(九月)にHCGDの趣旨説明を含めた予告案内を全国会員に発出し、参加予定者を募った。その結果、十二月末時点での参加予定者は三〇八名(内家族一三九名)に達した。参加計画の内容は、卒業式・観閲式の陪席、校内ツアー、同期生会総会・懇親会、三本柱とすることで、防大及び同窓会にご協力をお願いした。日にちが近づき、防大当局の当日の時程・細部計画が煮詰

まってくるにつれ、色々と実行上の問題点も明らかになってきたが、それぞれに前向きに打開の途を工夫していただき感謝している。特に、同窓会小原台支部の皆さんには細部にわたりご協力ご支援を賜り心から感謝申し上げる次第である。

晴天に恵まれ二期生大集合

当日は、朝方、小雨のぱらつくはつきりしない天候であったが、観閲式の前には嘘のように晴れ上がり、観閲飛行も整斉と行われ、参加者全員の集合写真も好条件で撮影することが出来た。二期生一同の日頃の心掛けの良さの結実と、自らほくそ笑んだ次第である。

当日の出席者は、結果的には二期生本人一六七名を含む二九八名となった。二期生現存会員三二四名の内の過半数の参加である。中には、遠くタイ国から、この日のために駆けつけてくれたK君夫妻の例もある。また、既に車椅子の生活になつておられるO君を何としてもこの行事に参加させたいとの奥さんの熱意で、車椅子担送の介助を含め、一家八人総出で参加いただいた例もある。また、H・K・O未亡人三人を含め奥様方が一〇二名もご参加いただいたことも嬉しいことであった。またお孫さんを含め三世代の一家挙げて参加のM君などは、家庭内での同君のステータスがうかがい知れ、微笑ましい限りであった。

卒業生の帽子投げと雄叫びに感激

卒業式陪席では、有事法制整備を強調する森総理の訓示が力強かった。新時代の軍人の道を説く来賓代表山本卓眞氏の

祝辞も感銘深かった。また、卒業証書受領に登壇する学生の情報工学、システム工学、地球科学などといった我々の時代にはなかった専攻の多様さ、留学生、女子学生の多さに、時代の流れを痛感させられた。最後の防大卒業式名物の帽子投げと学生の雄叫びを目の当たりにしては、四十数年もの後輩学生の若さを、うらやましく、また頼もしく実感したことだった。

洗練された観閲行進に感あり

観閲式に陪席した。我々の頃の砂埃のグラウンドとは様変わりして、整備された芝生とアンツーカーの赤色が目に鮮やかである。陸海空の制服に着替えた卒業生の緊張した表情に、往時の我々の思い出が重なり合う。宣誓を受ける陸海空各幕僚長がいずれも防大卒業の先輩、観閲飛行の陸海空航空部隊の編隊長も全て防大卒業生であることに、防大と陸海空自衛隊の長い歴史を改めて痛感した。

在校生の観閲行進では、やはり我々の時代になかった指揮官学生の指揮刀が目々を惹いた。紺の制服によく似合う。とりわけ、指揮刀を帯びた女子学生長の凛々しさが目にまぶしい。ただ、余計な所感を一言。防大學生の観閲行進はなかなか洗練されている。大変整然と上手だとは思いますが、今一つ力強さが感じられないのはどうしてだろう。年寄りの繰り言ではあるが、関係者にご一考をお願いしたいもの。

観閲式終了後、式場のメインスタンドを借りて、HCGD参加者の記念写真を撮影した。約三百名の集合写真ではあるが

なかなか良く撮れており、天眼鏡で同期生いずれ劣らぬ年寄り振りを改めて確認し、慥然とさせられた。撮影を担当していただいた元防大総務課の久保田氏に改めて御礼申しあげる。

懇親会で我々の原点・小原台を再確認

二期生会の総会・懇親会は、学生会館四階ホールを借りて行われた。年次総会もそこそこに懇親会に移り、卒業以来初めて顔を合わせた人、早くに自衛隊を離れて久し振りに顔を見せた人などもあり、四十三年前の昔に帰って、時間の経つのも忘れて積もる話が弾んだ。久里浜時代の珍談奇談、小原台早創の頃の武勇談、陸海空自衛隊勤務のあちこちの思い出、第二の職場での様々、更には最近のエプリーサンデーの自慢など、話題は尽きることがなかった。そして結局、話は又、防大四年間の思い出のあれこれに戻って来るのである。まさしく、我々の人生の原点は小原台にあるということであるのか。

この間、西原学校長、このHCDの生みの親の松本前校長、阿部同窓会長にも来ていただき、ご挨拶を頂戴した。西原校長には、席上、参会者を代表して五十君二期生会会長から、心ばかりの御礼の印しを贈呈した。

この懇親会のケータリングサービスは、昔懐かしい横須賀中央駅前「お太幸」にお願いした。候補数社を役員会で検討の結果、同社を選んだが、同社には我々の趣旨をよく理解してもらい、会場準備や料理・飲物サービス等に、行き届いたサービスをしていただいた。参会者の同

期生とそこご夫人方にも、十二分の満足してもらったことが何よりである。

センチメンタルジャーニーの校内ツアー

校内ツアーは、まとまったツアーの時間がとれそうもないことから、同窓会小原台支部を煩わして「校内ガイドマップ」の作成・配布をお願いし、参加者が空き時間に自由に見学してもらうことにした。懇親会終了後から夕方遅くまで、新装成った本館、人文学館、時計塔、学生舎、武道場、二期生寄贈の吉田茂揮毫碑などのあちこちを、ガイドマップ片手に三々五々、家族を案内しながら楽しそうに散策する二期生の姿が見られた。そして夜、横須賀の町は、家族共々の二次会を楽しむ二期生で賑わった。

5期生会

◆理事長―福地 建夫

平成十三年度五期生会総会及び懇親会は、平成十三年六月二十九日(金)にグランドヒル市ヶ谷において開催された。参加者は会員一五七名、婦人三十三名、計一九〇名であった総会は安岡義純理事長の挨拶、平井敏之会計担当理事による会計報告、並びに議案審議(五期生会規約改正承認の件、及び、新役員承認の件)の順に行われたが、規約改正の審議では地区理事の役割等について、いろいろな意見が発表され、活発で有意義な総会となった。

新規約、及び、新役員は、先般配布された五期生会名簿(平成十三年度作成)の最終項に記載されているので五期生は

確認されたし。懇親会は総会に引き続き、根岸勝利副理事長の司会により理事長挨拶、新役員紹介、新役員代表挨拶、来賓挨拶(参義院議員 田村秀昭氏)、乾杯、そして懇親の順で行われ最後に参加者全員で防大学生歌を斉唱し、和気あいあいのうちに終了した。五期生会の運営については、新役員一同、安岡理事長以下旧役員の成果を引き継ぎ、会員の絆をより強固にするための活動を積極的に推進してゆきたいと思っておりますので会員各位の積極的な御協力、御助言をお願い致します。

以上

6期生会

◆会長―西村 義明

今年は、昭和七十七年になります。ということとは、昭和三十七年三月十七日に小原台を巣立った我々六期生は、卒業四十周年を迎えることになりました。まさに節目の年です。そこで、六期生会は当局にお願ひして、六月一日(土)に防大で実施したいと思ひます。

防大も創設五十周年を迎え、本館や講堂が新装される等、一新されつつありますので地方の同期生もフルムーンを兼ねて是非ご夫妻で参加してください。

昨年の東京での六期生会は、例年通り六月六か六時六分からG・日市ヶ谷で実施されましたが一二五名(うち夫人十三名)が出席して賑やかな会となりました。しかし盛大に同期生会がやれるのもあと数年でしょう。年金生活に入ってから郷里に帰ったり、あの世に行ったりで、いつも会を盛り上げてくれた名物男が一人二人

と欠けていき寂しくなります。

「子孫に小銭を残そう!」なんて考えずに元気な内に奥さん共々行きたい所へ行き、食べたいものを食べ、残余の人生を大いにお謳歌しようではありませんか。

なお十三年度の防大期別対抗競技の成績は、一期から十一期まで参加して、囲碁は優勝、テニスは準優勝(レギュラーの部)、ゴルフは五位と、選手各位はすべて自費で参加して六期生の名誉のために頑張りました。

では、六月一日(土)小原台での再会を楽しみに奥さん共々元気に過ごしてください。

7期生会

◆大越 兼行

北斗会の皆様に報告いたします。

さる七月七日、北斗会(同期生会)総会を防衛大学校で開催されました。参集した同期一〇九名、東京周辺の同期生はもとより、遠隔地の同期生の参席もありました。小原台での熱き青春から40年、皆若き日の面影を残しつつ孫を持ち初老の年頃となり「口だけ達者」なるもの、立ち居振る舞いは年齢相応でした。

この総会で次の二点が決議されました。一 いままで、北斗会は全国を七つの支部に分けて運営していましたが、関東支部と首都圏支部を一つにして関東支部としました。又、静岡県は中部支部になっていましたが「静岡は交通アクセス等から東京支部に編入した方が妥当である」との意見があり東部支部に編入する事になりました。尚「会員の

居住地、勤務地等の都合により、会員が所属支部の変更を希望する場合は所属支部の変更を認める」事が決議されました。

二 同期生会役員任期は三年であり本年は役員改選の年になります。次期会長として「大越兼行君、陸（任期H十三年・七月十六・七）との推薦が現役員から有り、案件は議決されました。これに伴い、新役員は次の諸兄にお願いする事になりました。

本部	会長	(陸) 大越兼行	武蔵野市吉祥寺北町3-9-170	0422-55-7588
	副会長	(海) 玉川尚男	三浦市南下浦町上宮田1334-12-531	0468-88-5383
		(空) 伊藤文夫	清瀬市中里6-95-11-502	0424-94-0812
	理事長	(陸) 若松重英	我孫子市根戸1001-2-610	0471-69-4305
	理事	(陸) 兵頭祥治	横浜市戸塚区品濃町533-1H802	045-824-6778
		(海) 菅原 勉	川崎市宮前区けやき平1-41-404	044-861-8668
		(空) 北原 彰	入間群毛呂山町岩井1107-52	0492-95-7318
		(海) 高野駿一	横浜市港北区新吉田町1268-1-220	045-544-8431
北海道支部長	(陸) 小澤 肇	札幌市清田区美しが丘2-7-8-7	011-884-3801	011-884-3801
東北	(陸) 阿部多功	秋田市権山登町7-52	018-831-3055	018-831-3055
東部	(陸) 石田 潔	柏市篠籠田455-2	0471-43-5655	0471-43-5655
中部	(空) 岡部輝男	各務ヶ原市鶴沼三ツ池町5-278-2	0583-84-1260	0583-84-1260
近・中・西	(陸) 坂口恭平	大阪府旭区中宮5-4-30-506	06-6956-2383	06-6956-2383
九州	(陸) 伊藤宏美	久留米市中央町13-22-504	0942-38-5204	0942-38-5204

8期生会

◆五味 睦佳

① 桑江良達元第一混成団長を囲む会

八期九州支部は約十年前から、期担当指導官であった桑江元将補を囲む会を実施している。
桑江指導官は第一混成団長を最後に退

官され、その後県会議員として活躍されていたが、脳梗塞にかかられ、行動意の如くならない状況であったが、ゴルフでリハビリに精をだすと一念発起され、回られたラウンド約二〇〇〇との由。その甲斐あって、最近では極めて健康そのもので、毎年九州支部の面々と一夕を共にし大いに語られ、翌日は有志とラウンドされることになっている。桑江指導官もこの催しを大変楽しみにされ、沖縄から参加されているが、八期九州支部の面々もこれを機会に相集い大いに同期の団結を高めており、桑江指導官の感化力は依然として健在である。

② 横須賀市会議員への立候補

防大設立以来数多くの卒業生を送り出したにも拘わらず、防大出身の横須賀市議員は未だ一人も選出されていない。そこで市議員に立候補して見ようかと言うものが我が八期から出そうである。未だ姓名を公表するのはやや時期尚早のこと、名前を出せないのは残念であるが、その節は宜しく。

13期生会

◆理事 川村 成之

防大十三期生会は、平成十年四月に航空自衛隊の内山君が、陸上自衛隊の山下君から「上番し」活動して来たところであり、本年四月をもって海上自衛隊の牧本君（海幹校校長）と交替しました。執行部の体制は、私、川村（海幹校研究部長）が理事、浜田君（東京通信隊司令）が会計、澤田君（基礎情報隊司令）が庶務を努めております。

さて、現下の情勢は、ウォサマ・ビンラーディンの企図した同時多発テロによって自衛隊の活動範囲が従来の法的概念や活動空間を大きく超えて拡大し、国民の自衛隊に対する期待が更に高くなっており、一方、我々十三期生は、気持ちは若くても既に老兵であり、その半数を超えた人達がリタイヤー、第二の人生航路に船出したところであり、我々が防大を卒業し、自衛隊生活の大半を過ぎた二十世紀後半は、冷戦時代だったとは言え、一定の秩序と安定があり、経済的発展が期待出来ましたが、二十一世紀の初頭に立った時、その動向は政治・経済・軍事など、何事を問わず、不確実で不安定であることが予見されます。

その不安定な今こそ、クラスとしての団結、それは小原台で、また久留米／江田島／奈良で、額に汗して共に語り苦しみを分かち合い、数々の思い出の一つの価値観（共産党のような一枚岩と言うより、自民党のように方向がほぼ同じでたどる異なる方向であっても許し合える間柄と言う感じ！）を共有している我々の心情を大切にすることです。

そこで、この転換期における海上要員「同期生名簿」の整備に努めています。自衛隊在職中は、官報を見ていれば誰が何処に居ることなど、造作のないことで、クラス間の連絡も容易です。しかし、リタイヤーして放っておくと一人一人が孤立した存在に陥り易く、現在、鋭意、各人の住所・勤務先、それぞれの電話番号、更にインターネット・アドレス等を確認する作業を行っていると

14期生会

今回は、陸上担当ということで、本科十四期生陸上部会の活動状況についてお知らせします。

一 関東地区

関東地区には、サンチヨロ会なるゴルフ愛好者の会があります。ゴルフでチヨロ、仕事でチヨロそして家庭でチヨロ、を意味した何とも愛らしいほのぼのとした名前です。 (命名者石井利博君は、素直に自分の生活を表現しただけだそうです。)

定年後に皆でゴルフを肴に人生を楽しむ趣旨で会をつくりました。今は単身赴任者も参加できるクソ暑い八月とクソ寒い十二月を主に細々と運営しています。が、九年十二月の第一回（七組二十九名）からすでに八回（三組十二名）を重ねております。もう少ししたら本格活動です。多くの同期生の参加を期待しています。

(補給統制本部薬部長 加藤慎一)

二 九州地区

平成十三年度「魅七十会」(幹部期別七十期は「皆若い」…九州・沖縄に在住または勤務する防大第十四期卒業生及び陸上自衛隊幹部候補生学校第四十七期生並びに同期相当の有志をもって構成。会長 安部啓司以下会員七十名)例会を平成十三年五月二十六日(土)福岡県久留米市西鉄久留米駅東口「ハynesホテル」において、三十二名(内防大十四期二十六名)の参加を得て一八〇〇からの総会に引き続き懇親会を盛大に実施しました。

遠路、関西補給処(宇治市)から駆けつけた安部君をはじめ小倉、佐世保、熊本、別府、福岡等から馳せ参じた懐かしい顔の同期生と親交を暖めること三時間余り、盛会裡に懇親会を終了。六割近くの十九名がカラオケスナックに陣地変換、経験豊かなロマンスグレーの渋い「のど自慢」を披露しました。翌二十七日(日)はマイクをクラブに持ち替え、名門「久留米カントリー・クラブ」において十名が集い親睦ゴルフを実施しました。表彰は「自画自賛」としたので舌戦と珍プレーの続出、和やかなうちに競技を終了しました。

平成十四年度「魅七十会」例会は、平成十四年五月二十五日(土)～二十六日(日)、火の国「熊本県」で実施を予定(担当 西方総監部調査部 平井久雄)しています。

来年のダイアリーに記載を忘れずに！多数の同期生の積極的な参加を期待しています。

(陸上自衛隊幹部候補生学校教育部 伊藤俊廣)

15期生会

◆正岡 富士夫

小泉首相の靖国参拝騒動の余韻が冷め切れぬ八月十八日(土)、私も第十五期生会は、小原台卒業三十周年記念事業及び総会を実施しました。三色の同期生が一同に会するのは卒業二十周年の総会以来十年ぶりでした。自衛隊を去り全国津々浦々に散らばっている同期生との連絡をとることや在校時お世話になった先生方へのご案内、IT化社会に適応した連絡体制の確立、名簿の作成など多様な業務を適切な統合運用の妙をもって処理し、成功裏に記念事業を終えることができました。



記念事業の一つとして、「敗戦後の日

本の責任のとり方」と小泉首相の靖国参拝「私の見た戦犯の遺児たち」という演題で上坂冬子氏による講演会を行いました。一時間余りの短いお話でしたが、題名のとおり氏の体験に裏打ちされたものであり、ご夫人たちの涙を誘う場面も散見される感銘深い講演会でした。

ご来賓には曲壽朗氏(元防大幹事)、柳田益雄氏(元訓練部長)、木村康之氏(元機械工学教室教授)、金井喜美雄(元

航空工学教室講師)、西修(元人文文学講師)、森本敏氏(元小隊指導官)、兼坂弘道氏(元体育教室教官)及び同窓会会長阿部博男氏をお招きしお祝いとお叱咤激励の頂きました。(括弧内職名は、卒業時の職名等)(当時、海上防衛学教室講師でおられた外山三郎氏もご参加頂く予定でしたが都合により不参加)

今回作成した名簿には、防大卒業時と現在、つまり使用前/使用後の顔写真を並べましたので、ふやけ、皺増え、目尻下がり、頭髮淋しき我々も若いときはこんなに凛々しかったということ証明できる材料として大変好評でした。また、その名簿は、学生歌、追遥歌、一九七〇年作成ビデオ「小原台の青春」及び二〇〇〇年作成ビデオ「最近の防衛大学校」とともに一枚のCDに焼き付け、全員に配りました。また、この機に第十五期生会のホームページを開設し、定年後の連



絡体制の確立を図ったことは言うまでもありません。

第十五期卒業生数は、四六三名、自衛隊現役者数は三三九名、同現役外者数一〇二名、物故者数二十二名です。そのうち本記念事業には、同期生の約三十七%が参加いたしました(不思議と陸海、空とも同率)。オランダ・ハーグから化学兵器禁止機関で査察局長の職務にある陸の秋山一郎君や国内では鹿児島、京都、宮城などから既に退職している同期生が多数参加してくれたことは大きな喜びでした。

17期生会

◆泉 徹

現在、十七期として、特段の催しを考えているわけはありませんが、来る平成十五年が我が防大十七期の三十周年記念になりますので、そのための記念の会をどのようにするか模索中であります。先輩クラスの方からのご意見も伺いながら、準備を進めようと思っております。よろしくお願い申し上げます。

(一応、今年の期生会会長を仰せつつっております。)

25期生会

◆会長 高鹿 治雄

一九八一年(昭和五十六年)に小原台を巣立った我々二十五期生は、今年卒業二十周年を迎えました。二十年という節目を記念して、同期生相互の懇親を更に深めるために、平成十三年五月二十六日



(土) 都内において防衛大学校卒業二十周年記念の宴を開催しました。

開催にあたっては、陸海空準備委員(陸：永井君、海：池田君、空：坂本君)をはじめ目黒地区入校学生の皆様のご協力を得まして実現することができました。当日は、地理的な条件もあり関東周辺勤務者が主体となりましたが、関西や九州から駆けつけてくれた者や民間で活躍されている者も含め約一五〇名強の会員が集合しました。また、来賓として防衛大学校同窓会会長 阿部博男氏及び元二十五期生担当指導官 中村征人氏、山口壮一郎氏や会員のご家族をお迎えし、総勢二〇〇名を超える盛大な宴となり、本当に楽しい時間を過ごしました。土田元学



校長夫人は、ご旅行のためご欠席されましたが、かわりに暖かいメッセージを我々二十五期生会にいただきました。我が二十五期生会は、他の期生会に勝るとも劣らない団結力を誇っており、今後ますます二十五期生会のネットワークを強固なものにするために、二十五期ホームページとメールボックスを鈴木君(海民間)のご努力で開設しました。なお、今後の二十五期生会の運営は、陸海空及び民間に事務局を置く以下の態勢とし、一層の活性化を図りたいと思えますので宜しくお願いします。

会 長 海：高鹿 治雄(海幹校A C学生副会長兼民間事務局長 空：杉山 一弥(民間) 陸事務局長 陸：永井 昌弘(陸幹校教官) 海事務局長 海：河村 正雄(防研研修員) 空事務局長 空：吉田 浩介(ロシア駐在武官) 会 計 空：坂本 卓己(空幹校教官)

役員は、異動等により多少の変更もありますが、ご了承下さい。

☆防衛大学校第二十五期生会ホームページ：
<http://www.comforhousing.co.jp/nda25>

☆防衛大学校第二十五期生会 メールボックス：NDA1981B25@aol.com

※陸海空事務局長は、本局を市ヶ谷地区、所要の支局を適宜地方に設置する。

最後に、遠方等で連絡等十分に行き届かなかった同期生の皆様には、この場をお借りしましてお詫び申し上げます。

35期生会

◆山本 光伸

我々三十五期生が小原台を後にして、はや十年が経過いたしました。卒業当初は、それぞれ新しい仕事や環境にとまどい、試行錯誤を繰り返す日々を送っておりましたが、現在は各人がそれぞれ経験を積んで成長し、まさしく組織の原動力として全国の陸海空部隊や外国で活躍し頑張っております。卒業十周年を記念して、我々三十五期は去る三月十六日に新宿プリンス・ホテルにおいて卒業後十周年記念パーティーを開催いたしました。

パーティーには、来賓として我々の恩師である夏目元学校長をお迎えするとともに、関東近辺を中心に遠くは宮崎県からも陸海空自衛隊や民間企業で活躍している多数の三十五期卒業生が参加いたしました。本パーティーは、我々の心に残るものとなりました。卒業生は普段の忙しい仕事をしばし忘れて、久しぶりに学生時代にかえり、思い出話や最近の近況について談笑し、楽しい時間を過ごすこ

とが出来ました。一方、同期生の中には、卒業時とかなり顔の輪郭や体型や毛髪が変化していた者もあり、十年という年月の長さや重みをひしひしと感じました。パーティーの後半では陸海空自衛隊のそれぞれの代表者が「十年間の歩み」と題して、それぞれの部隊経験や職務の概要について紹介を行い、活躍の内容や近況を知ることができ、各々の卒業生が活躍ねば…と、気持ちを新たにいたしました。同期というのは、いつ会っても時間の空白を感じない「心のふるさと」の様なものであり、一体感を持つことにより、防大の卒業生であることへの誇りをより深めることが出来ます。十年後、二十年後もこの様なパーティーが開催され、三十五期卒業生全員がひとまわり大きくなり、元気な姿で「心のふるさと」に帰ってくることを願っております。

35期生会の役員

期生会長： 植森 治(航空)
〒981-0503 桃生郡矢本町矢本大林566
南浦官舎241 0225-82-4296
事務局長： 熊谷 三郎(航空)
〒228-0802 相模原市上鶴岡910-201 042-765-5538
評議委員： 中迫 博文(陸上)
〒229-1114 相模原市向陽町3-13 3-204 042-757-7086
保科 俊朗(海上)
〒737-2125 安芸郡江田島町大原官有地大原宿舎3-109
0823-42-1998
右田 竜二(航空)
〒340-0831 八潮市南後谷725-1ライオンズマンション
草加東510 0489-97-5025
35期事務局長 熊谷 三郎

支部だより

事務局長 大坪 成二

九州地域支部

沖縄地域支部

事務局長 宮崎 剛

た。学生も「学校紹介」、「防大生に聞いたアンケート紹介」と趣向を凝らした出し物を用意してくれ、立派に整備された母校に感心するとともに変わらない学生気質に安心した次第でした。

③沖繩寮歌祭への参加

また、年度末には恒例の沖繩寮歌祭への参加を予定しています。これは戦前の旧制高校や新制大学など全国各地の学生寮歌や校歌を披露するお祭り（沖繩出身の方を中心に約三〇〇人が参加）であり、他大学等OBとの親交を深めるとともに防大OBの意気を示す良い機会であると考え、防大制服まで取り揃え窮屈ながらもピシッと決めて参加しております。出場者もノリノリ気分になり、そのまま制服姿で那覇市内を闊歩して帰宅した方もおられた様です。

主な事業としては、「総会及び懇親会」、「防大の部隊実習支援及び懇親会」、「沖繩寮歌祭への参加」、「防大入校者への記念品贈呈」があります。今年度につきましては、

①総会及び懇親会

五月総会に阿部博男同窓会本部長をお迎えし、「防大同窓会の現状と問題点」の演題でお話していただき、会員一同遠く小原台に思いを馳せながら拝聴しました。その後の懇親会にも参加していただき、大変盛り上がることができました。

②防大の部隊実習支援及び懇親会

四月と七月、部隊実習に来た三、四年を迎えて盛大に歓迎会を実施しまし

平成十三年度九州防大同窓会（会長二期空中野純人）の活動状況について報告します。

平成十三年度の事業項目として次の五項目を設定し実行しております。

- 一、未結成支部の解消
- 二、日本海海戦記念大会の協賛
- 三、部隊実習防大生の激励
- 四、期對抗ゴルフ大会
- 五、総会および懇親会

一、防大五十周年行事を九州において全地域的展開するために現在支部結成していない三地域（佐賀、長崎、鹿児島）について支部の結成を目指しています。

七月六日に支部長会議（支部長および支部未結成の地域は地域の代表者）に、支部未結成地域（佐賀、長崎、鹿児島）の代表者の出席をお願いしたところ、早速七月二十二日佐賀県支部（支部長二期西岡清）が結成され、中野会長から支部名入りの校旗が授与されました。残りの・未結成支部も本年度中に結成される見込みです。

二、五月二十七日、日本海海戦記念大会に協賛参加しました。

当日の午前中は福岡市の箱崎神宮において祭礼があり、年後は博多湾沖の玄界灘で洋上慰霊祭があり、会長以下十余名の同窓生が参列しました。

三、毎年三年生の夏期訓練時に部隊実習が実施されますが現職が実施する行事

に参加し後輩を激励しようとするもりで、陸上は四師団の担当で海上は佐世保地区で、また航空は春日、築城で実施され、それぞれの地域のOBが参加し、学生を激励しました。

四、十月三日に第二期別對抗ゴルフ大会を目前にして出場者は土日は熱心に練習に励んでいるようで、今年は第一回の昨年以上の参加者が見込まれ盛会が予想されています。

因みに昨年度は参加者二期二十二期、五十七名で熊本、長崎、下関等の遠方からの参加者あり、久し振りに再会するもの、初めて顔を合わせる者等でお互いに懇親を深めることができました。

五、平成十三年度の総会及び懇親会は平成十四年二月十七日に福岡市内で開催を予定しています。

参加者は例年現職・OB合わせて約二五〇名が参加し、同窓会本部から副会長等が来賓として出席しています。

当日の目玉は、懇親会で、一時間の講演があります。

防大副校長の「防大の現況」、UNDOF派遣隊長の講演、昨年度は佐監僚長の三・二三北朝鮮工作船事案への対応一等の講演は例年好評であります。

六、これらの活動の源は事務局の要員（OBの各期の代表、現職陸海空の代表）が奇数月の第二金曜日に集まり活動方針の徹底と情報交換及び意思の疎通を図りつつ事業の運営を行っている事にあります。

関西地域支部

会長 牧 次郎

平成十一年に発会し、この十一月で三年目を迎えることになりました。

初年度においては、Eメール講習(参加者四十三名)を皮切りに、現職自衛官を講師とする、防衛時事講習会(四十三名)三期生西本徹也氏の講演会(八十九名)、関西地区カッター大会への参加、東寺の一般には公開しない施設見学(六十五名)、ゴルフコンペ等多彩な行事を無難に行いました。

二年度は、初年度の気負ったこともあったことを反省し、長続きする会を目指し、肩の凝らない会の運営を行うことにしました。

それでも、二年度のヒルトンホテルにおける総会行事には、二期生志方俊之氏の講演会に一三五名(ただし父兄会、走水会の参加を得て)、懇親会に一〇九名が参加し、最後の万歳三唱を最年少の三十四期の末政圭介君が盛会裡に締め括り、二年度の会の運営に弾みを付けることができましたことを本誌面を借りて参加した諸兄にお礼申し上げる次第です。

二年度の事業は、この七月にカッター大会への参加、八月に歴史探訪大阪遍(十名)、九月に会員の経済に関する講演「いまなぜISOか…五期近藤欣司氏」(社長の責任…二十一期鍋島和史氏)(二十五名)を終え、秋には、ゴルフコンペ、歴史探訪大山崎遍、東福寺の参禅と京料理の会を行い、十一月十四日(土)にホ

テル阪急インターナショナルで、八期藤縄佑爾氏を招き、総会・講演会行事を行い三年目をスタートさせることにしています。

又、平成十四年は、母校の半世紀を飾る節目となる五十周年を迎えるにあたり、三月二日(土)に記念講演会を予定しています。

講師は、神戸大学工学部情報知能工学科教授高森年氏(防大七期)で、二十一世紀の科学の先端技術とロボット工学に関し、NHKに出演した以上の生の話を伺えることができ、五十周年の頭書を飾るに相応しい講演会にしたいと意気込んでいます。

少しばかり泣き言になりますが、発会当初、有資格会員四〇〇余名中二七〇名を越えた会費納入者も、二年度は二〇〇名を割り、今回は一五〇名程度となり、会の運営・行事のあり方を考え直す必要性を痛感しており、ボランティアで役員を引き受けているのだという奮りがあることも事実で、今後は趣味・教養と云った文化的活動を大切に、金の掛からない同好の志の集まりにして、永続させたいと考えています。

会員諸兄の暖かい支援をお願いし、支部だよりを締めさせていただきます。

【事務局連絡先】総務 七期 河野光男
TEL・FAX〇六六九一〇一六二一
(ホームページ) <http://www.aianet.nj.jp/~kazun/>

北海道地域支部

支部長 檜山 貢

北海道地域支部は、平成九年九月に、地域支部としては、全国に先駆けて発足以来、早五年が経過しました。

当地域支部としての特性である、現職会員が圧倒的に多くかつ分散していること。このため、この間「一歩一歩着実に事業を推進してきました。

今年度は、会員から年会費五〇〇円を徴収している関係から、最低限の会員に對する義務として、◎「全会員の名簿を作成し、全員に配布する」また◎「北海道からの防大入校者(新入生)に、激励の「本人ネーム入りボールペンとシャーペン」のセット」を贈呈しました。

去年は、小津札幌地連部長(十四)が、三十八名に、今年は宗像北方総監部行政副長(十八)が、母校を訪問し懇談会後記念品を一人一人に手渡した。本人はもとより学校側にも大いに喜ばれたようです。新入生の勉学意欲の向上荷に役立つとともに、OBの存在感を意識してくれば幸いです。

昨今、自衛官OBの集まりが、「呑み食い」「モグラ叩き」等単なる仲良しクラブ化している感があります。せめて「われわれ同窓会」だけは、活動の狙いを、(後輩「学生」のため、実際に役立つ)また事業としては、(地方でも、軽易に実施できる)をポリシーとして、地道に着実に活動していきたいものです。

タイ地域支部

駐在官 立花 尊顕

タイ支部は、毎年二回家族を含めた夕食会を持つなどの活動を行ってきているが、今年、防衛大学校創立五十周年を記念して、タイ支部会員が防大の学生時代にお世話になった元在日大使館付武官及びバンコクに寄港予定の海上自衛隊練習艦隊を招待して「防衛大学校創立五十周年記念パーティー」として行うことが決定された。

招待状の発出、会場のセッティング、食事及び余興のアレンジ等全ての準備は、チェーン支部長(防大六期)、タナラット副支部長(防大二十三期)指示の下、防大卒業生であるタイ軍の現役士官自らが率先して進め、去る八月十九日(日)、タイ空軍オフィサーズ・クラブにおいて盛大に開催された。

パーティー当日は、招待客である元在日大使館付武官であったソンプーン空軍大將(退役…元副首相)、タナニット空軍大將(退役…元空軍司令官)、ウィーラ空軍大將(退役…元空軍副参謀長)、ウィラウィット空軍中将(現最高司令部人事部長)、アピシット空軍少將(現空軍情報部長)、サウエーク海軍大將(退役…元海軍参謀長)、ワイポット陸軍少將(現陸軍情報部長)、カラウィット陸軍少將(現陸軍通信部長)、海上自衛隊練習艦隊司令官保井海将補以下幹部及び幹部候補生四〇名の他、防大卒業生とその家族、合計約二〇〇名が参加した。



（尚、プラサート現海軍司令官も元在京武官であり当初出席が予定されていたが、「急用のため出席できない。極めて残念だ。」との連絡があった。）

パーティーは、タナラット副支部長が司会を務め、まず、タナニット空軍大將からの祝辞、保井練習艦隊司令官から御挨拶を頂いた後、タイ支部がパワーポイントを使って作成をした資料を使用して「防衛大学校タイ留学生の現状」についてブリーフィングが行われた。また、タナニット大將は祝辞の中で、「防衛大学校への留学はタイ軍にとって極めて有意義なものである。日本において知識と技術を学んだタイ軍士官は、現在タイ軍の中で非常に重要なポストに就き活躍している。今後とも、この留学のプログラムを継続していく努力をしていかなければならないし、日本側にも将来にわたるご支援をお願いしたい。」と述べられた。



その後、夕食をとりながら余興が行われ、タイ支部がアレンジしたプロのタイ舞踊やマジック・ショウの他、海軍バンドの生演奏に乗せて卒業生のみならず練習艦隊司令官や幹部が自慢の喉を披露したり、練習艦隊の幹部候補生全員が前口上を含む防衛大学校追遥の歌を披露したり、タイ支部の会員同士で近況を確認し合ったりと、大盛況のうちに時間が過ぎた。宴の最後にはタイ支部、練習艦隊司令官以下幹部、幹部候補生、在タイ防衛駐在官等防衛大学校の卒業生全員がステージに上がり肩を組んで防衛大学校校歌を合唱してパーティーを締めくくった。大成功の「防衛大学校五十周年記念パーティー」であった。

「塵も積もれば山となる」という諺は良く聞かれる諺ではあるが、現在のタイ支部がまさにこの諺を体現したものでないだろうか。毎年、タイからの留学生は僅か数名であるが、留学生を受け入れ始めてから約四十年、今では一〇〇名以上が防大を卒業している。数が膨れ上がったのみならず、彼らは率先して「防大五十周年記念パーティー」を自ら企画し実行する様に防大卒業であることに誇りをもち続けているおり、これが防衛大学校同窓会タイ支部という組織を支えている。そして、タイ支部の一人一人が、タイではエリート且つ安全保障をつかさどっている軍人である。彼らの勢力、日本に対する好意が、日本とタイの二国間関係を維持・発展させるにあたり極めて大きな力になることに疑問の余地はないだろうと思う。今後とも、小さな積み重ねを続けていく努力をする事の重要性を深く認識させられたパーティーでもあった。



広島地区支部

理事兼総務 土手義孝記

新年明けましておめでとうございませす。

広島防衛大学校同窓生及びご家族の皆様におかれましては今年も総り多い良い年を祈念しつつ新年をお迎えになられましたことお喜び申し上げます。

広島防衛大学校同窓会（以下「広島同窓会」という）は、OB及び現役の親睦等を図るとともに地域に密着した活動を継続実施しております。

毎年、定期総会のほか春・秋季行事として、ハイキング・ゴルフ・テニスを実施しております。

平成十三年度の各種行事の実績は、二〇〇名余り参加しております。その内訳は、定期総会・講演会・懇親会OB現役併せて六十名、ハイキング延べ四十名、ゴルフ延べ七十名及びテニス延べ三十名等であり各種行事とも盛況裏に終了しております。

二十一世紀幕開けは、平穏裏に経過しておりますが昨年九月十一日米国において過激派テロ集団による民間航空機四機がハイジャックされニューヨークの世界貿易センターのツイン・タワー（高さ四一五m、四一七m各一〇階）及び国防総省等に突っ込みツイン・タワーは間もなく全壊、国防総省等に甚大な被害と五千数百人の尊い命が突然失われましたこと未だ鮮烈に残っております。

二十一世紀の当初から激動の時代の始

まりを予見させるに相応しい大事件であり、国の安全を堅持することの難しさを痛感する次第です。

今年、防衛大学創立五十周年にあたり、わが母校の同窓生は、阿川尚之氏著「海の友情」で「訓練を怠らず、危機に備え、何も起こらなかつたのをよしとして現役を去っていった自衛隊将兵の功績は、いくさで名を上げた戦前の陸海軍将兵の功績に、勝るとも劣らないように思える。」と述べられているように、この一翼を荷い半世紀に亘り国家・国民の安寧に身を捧げてきました。

半世紀余りの平和を維持して来られたのは時の情勢に一喜一憂することなく防衛の中核として地道に努力してきた賜物と考えております。

この節目に当たり、防衛大学校同窓会（以下「防大同窓会」という）は、本部と地域支部の緊密な連携のもと各方面で影響力を行使できる組織作りが緊急に必要と考えます。

広島同窓会は、各種団体及び協力団体等と緊密な連携を図り、地域社会で各種行事等を開催或いは他の行事等に参加すること等により広島同窓会の存在をアピールし、その成長を得て本来の目的を達成するとともに、副次的効果として広島地域の政治・経済圏で「意味ある組織」となることが地域同窓会の使命と考えております。

このためには、二十一世紀当初は、予算面を含めて支部組織の充実・発展に力を傾注する時期と考えます。当世は「改革」の時代です。今日までの方針を見なおし、例えば地域とか地区の名のもとに

▲ゴルフコンペ（広島中央GC）



予算配分が異なることなどを抜本的に改め、地域で活発に活動している支部に予算を重点配分すること等ご検討をお願い致します。

又、同窓会本部は、活動拠点を東京方面に過度に集中することなく地域の活動を考慮し、支部と一体となった夢の施策の推進が要求されております。このことは、防大同窓会の活性化になり、地方で生活・勤務している同窓生が本部に期待しているところでもあると考えます。



▲ハイキング（広島百山日浦山）

同窓会本部の支部に対する一層のご指導・ご配慮を期待しております。

平成十四年度広島防大同窓会定期総会・講演会・懇親会を次の予定で計画しております。同窓生の参加をお待ちしております。

一 期日：平成十四年二月二十三日（土）
十六時～二十時

二 場所：呉森沢ホテル本館（TEL 〇八三三～二一〇一～五一八八）
（呉駅から徒歩十五分又は本通り三丁目バス停から徒歩五分）

三 その他

状況により、艦艇見学又は入船山記念館を見学することにしております。

小原台クラブ

幹事長 中島 正雄

会員の相互の親睦を図るという事で菅沼会長（N）のもと、民間に身を置く約六〇〇名の会員により運営されております。

平成十三年においては、新年賀詞交歓会（二月二日於市ヶ谷）、総会（七月十三日於市ヶ谷）、講演会、懇親会も同時開催（会報第二十四号発行（三月上旬）を定例的活動として行いました。）

今年、小泉内閣に於いて会員の中谷元氏（二十四A）が、防衛庁長官に任命され就任されました。会員有志により七月三日激励会を開催いたしましたところ約一〇〇名の会員の出席があり盛会裏に終了しました。又このほど会員の尾辻秀久氏（七N）が財務副大臣に就任され今後の活躍が期待されております。

九月には、米国においてイスラム原理主義勢力による同時多発テロ事件が発生し、全世界あげて対応に苦慮しておりますが、今度発行の会報二十四号に当会副会長舟山真弘（二N）による「二十一世紀を迎えるにあたって―非対称脅威と〇〇TWW―」という小論文が掲載されており、この種の事態が近々に起こり得ることを予見され、かつどのような考え方で対処すべきかを述べておられます。

当会は伝統として、先輩、後輩を意識せずまた肩書きにもこだわらず、共通の信頼関係のもと、素直な議論ができる環境と雰囲気があります。入会希望者は、事務局あて御一報下さい。別途ご案内いたします。

〈事務局〉 千一六〇一〇〇〇三 東京都新宿区元
堀町二十一―三十一

電話/FAX 〇三三三五五〇九〇五

平成14年度 防衛大学校同窓会予算

(単位:円)

	項 目	14年度予算	13年度予算	13年度比
収 入	会 費 (46期生)	18,320,000	18,120,000	+200,000
	預貯金利息	371,000	510,000	-139,000
	積立金からの繰り入れ	8,959,000	2,970,000	+5,989,000
	収 入 計	27,650,000	21,600,000	+6,050,000
支 出	事業計画の推進			
	(現職・OB会員交流)	500,000	550,000	-50,000
	(同窓会主催親睦交流会開催)	300,000	300,000	0
	(ホームカミングデーの実施)	800,000	600,000	+200,000
	(会員の出版支援)	0	50,000	-50,000
	(防大卒業留学生との連携)	400,000	400,000	0
	(全国的な情報網の維持整備)	100,000	50,000	+50,000
	50周年事業			
	(記念祝賀会)	2,000,000	0	+2,000,000
	(地方事業支援)	1,500,000	1,000,000	+500,000
	(通信費)	2,000,000	0	+2,000,000
	(顕彰碑献花費)	500,000	500,000	0
	総会/講演会費	1,500,000	1,500,000	0
	期生会支援費 (47期生助成)	100,000	100,000	0
	(50期生発会)	100,000	100,000	0
	校友会対外活動助成費	1,000,000	1,000,000	0
	開校記念祭助成金	2,000,000	2,000,000	0
	安全保障講座助成金	100,000		+100,000
	慶 弔 費 (供花、弔電)	350,000	350,000	0
	職員定年退職者記念品費	100,000	100,000	0
複写機貸料	350,000	350,000	0	
電話/FAX維持費	400,000	400,000	0	
小原台事務局運営費	100,000	100,000	0	
代議員会運営費	700,000	700,000	0	
機関誌発行費	4,000,000	3,300,000	+700,000	
同窓会名簿維持費	250,000	250,000	0	
記念品作成	500,000	0	+500,000	
会長運営費	500,000	400,000	+100,000	
事務員雇用費	2,000,000	2,000,000	0	
本部事務局室貸賃料	2,900,000	2,900,000	0	
事 務 費	350,000	350,000	0	
通 信 費	150,000	150,000	0	
交 通 費	400,000	400,000	0	
会 議 費	200,000	200,000	0	
予 備 費	1,500,000	1,500,000	0	
支 出 計	27,650,000	21,600,000	+6,050,000	

平成12年度 防衛大学校同窓会決算報告

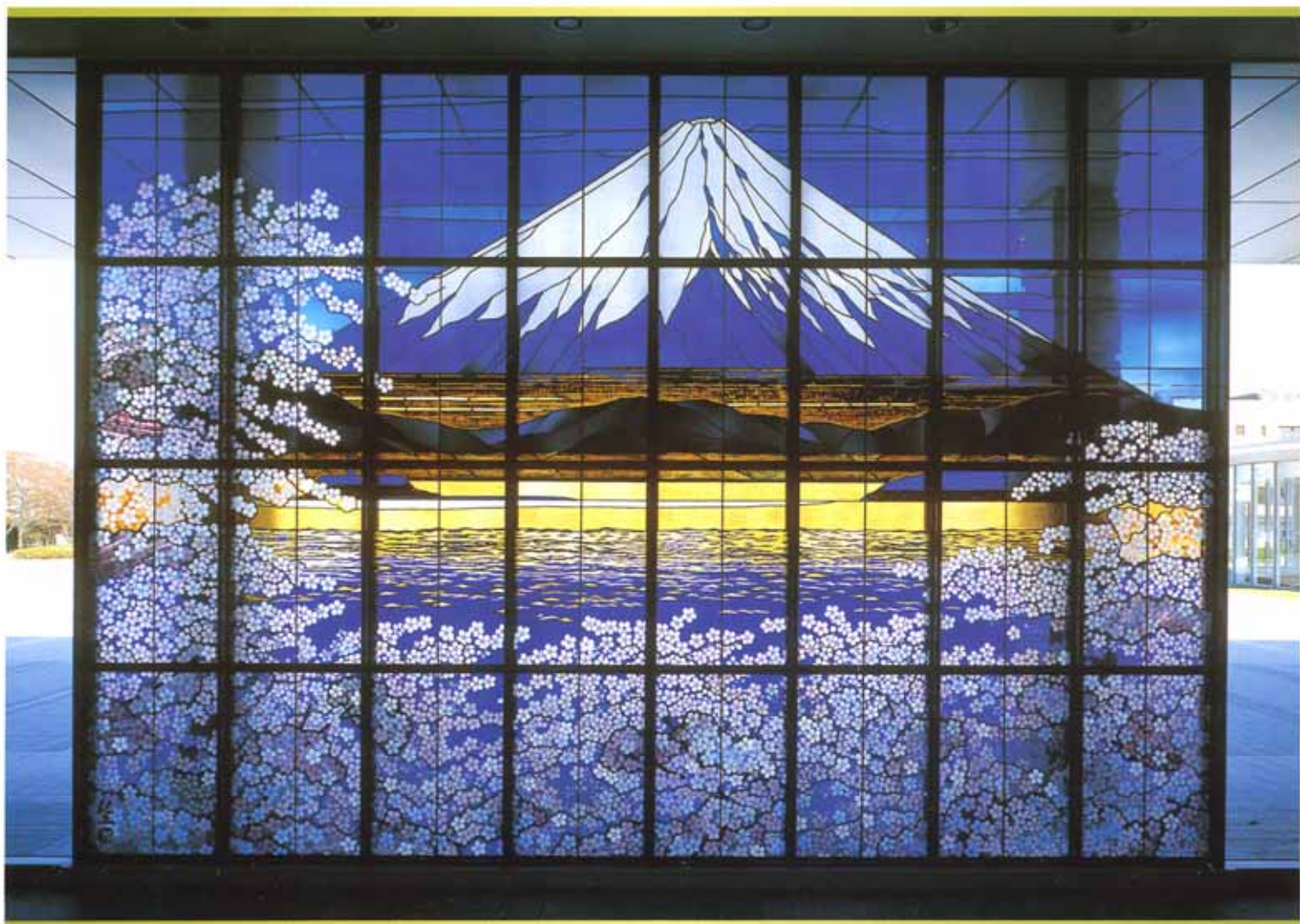
平成13年3月31日

(単位:円)

	項 目	予 算	実 績	備 考
収 入	会 費 (44期生他)	19,740,000	11,013,960	会費納入率47%
	預貯金利息	330,000	316,660	
	同窓会名簿売上金	未定	30,000	前年度広告代
	積立金からの繰り入れ	2,340,000	7,026,330	会費減に伴う繰入増
	収 入 計	22,410,000	18,386,950	
支 出	事業計画の推進 (現職・OB会員交流)	1,000,000	507,720	
	(同窓会主催親睦交流会)	300,000	339,726	
	(相談窓口の設置)	50,000	0	
	(ホームカミングデー)	300,000	663,570	参加員数の大幅増
	(会員の出版支援)	50,000	0	
	(防大卒業留学生との連携)	700,000	994,104	タイ支部設立支援
	(全国的な情報網の整備)	50,000	28,980	
	総会/講演会費	2,500,000	1,249,103	講演会講師-部内現職
	期生会支援費 (48期生会)	100,000	100,420	
	(45期生会)	100,000	100,420	
	校友会対外活動助成費	1,000,000	1,000,210	
	開校記念祭助成費	2,000,000	1,790,670	
	顕彰碑献花費	600,000	300,210	
	慶 弔 費 (供花、弔電)	350,000	615,231	物故会員の増
	職員定年退職者記念品費	100,000	160,177	定年退職者の増
	複写機貸料	210,000	344,550	複写機の更新
	電話/FAX維持費	500,000	252,061	
	小原台事務局運営費	100,000	0	
	代議員会運営費	700,000	792,086	臨時代議員会の実施
	機関誌発行費	3,300,000	2,874,590	
同窓会名簿維持費	200,000	2,140		
会長運営費	500,000	429,620		
事務員雇用費	2,000,000	2,000,000		
本部事務局室貸賃料	2,800,000	2,835,831		
事 務 費	350,000	351,724		
通 信 費	150,000	145,760		
交 通 費	400,000	308,510		
会 議 費	500,000	99,327		
予 備 費	1,500,000	100,210	安保講座賛助金	
50周年記念事業委員会	0	0		
小 計	22,410,000	18,386,950		
次年度繰越		0		
支 出 計		18,386,950		

防衛大学校同窓会機関誌

小原台だより



(若人の城)

Vol. 10
(50周年記念特集)

平成15年1月1日
発行 防衛大学校同窓会

編集 洞澤佳廣 合田直樹 工藤武司
印刷 (株)エイコープリント

平成15年年頭のご挨拶



阿部 博男

全国各地で、また日本を離れگران高原、東チモール、インド洋上、南極等任務遂行中に平成十五年の新年を迎えられた同窓生の皆さん、明けましておめでとうございます。

まず最初に、昨年十一月十六日、無事防衛大学校創立五十周年同窓会行事を終了することができましたことを報告させていただきます。皆様方から頂戴しました数々のご支援に対して心から御礼申し上げます。

創立五十周年行事を開始するに当たり、十月八日、諸行事が成功裡に成就することを念願し、防衛大学校において達磨の片目を入れる儀式がありました。そして、去る十二月十八日には、全ての行事が所望の成果を得て終了したことを祝い、もう一つの目を入れる行事を済ませました。その席上、西原学校長から同窓会の協力に対し、深甚な謝意を頂戴しました。同窓会記念行事の際に頂戴した感謝状と合わせ、深く恐縮したところであります。学校長をはじめ防衛大学校の創立五十周年行事に対する取組は、早くから計画的、積極的で、その上現場では素晴らしい協力を戴きました。同窓会としても学校当局に呼応し平成八年に記念事業委員会を立ち上げ、学校の施設整備に併せて、卒業生の思いを後輩に申し送るために、記年講堂正面にステンドグラス「若人の城」、中央広場に彫刻像「国の守り」を寄贈することとしました。創作して戴いたステンドグラス原画の平松礼二、彫刻像の高橋洋の両先生には、我々

の思いを深く理解して戴き、素晴らしい作品を作って戴くことができました。この両モニュメントは、防衛大学校を巣立つ後輩の思いの中で、永く刻まれていくものと確信しております。

この様なすばらしい作品を寄贈できたのも、同窓生一同に代わり、七年の長期間、周密な計画と果敢な実行を実践した佐久間委員長以下記念事業委員会のメンバー一人一人の真摯な活動に負うところが大きく、この場を借りて深く感謝を表させていただきます。

この他に、記念事業委員会が計画した事業が幾つかありますが、一つ大きな計画が残っております。それは、MCI (Military Cyber Institute)です。これらのIT化社会の中で、われわれの軍事に関する知識、経験をまず相互に同窓のネット・ワーク内で陶冶し、質を高め、軍事に無関心な社会に、必要性に併せて提供しようとするものです。

ITの活用について、いまだ評価が分かれておりますが、同窓生の熱意と努力で使い易く、高品質なデータベースが生まれることを期待しております。

次に、世代交代について述べます。同窓会は、昭和三十六年設立以来、四十年間一期生が会長を務めて参りました。五十周年の記念すべき節目の年を終わつた今日、「新しい酒は新しい皮袋に収める」との例えどおり、諸業務のけじめを付けて、委員会の任務が終了する段階で、現同窓会本部の体制を一新したいと考えております。

昨年二月から各期生会代表（一期から十期）から意見を聴取し、推薦を戴き、次期会長には六期生の陸上要員からということになりました。

同窓会長を出す機会のなかった二、三、四、五期の諸兄には誠に申し訳なく思っております。後輩期が会長になると、先輩期の同窓会活動への参加が消極的になると心配する向きがあります。先輩の方々には宜しくご配慮をお願い申し上げます。

最後に新年早々、申し上げ難いことですが、会費の納入状況が改善されず、先行き不安を感じております。新たに同窓生となる卒業生はもとより、卒業してから時間を経た同窓生でも是非会費に関心を持ち、お納めいただきたく思います。

二十一世紀も三年目を迎え、ようやく我が国を取巻く安全保障が外郭を現してきたように思います。同窓生の活躍の場も臍氣ながらはつきりして参りました。

防衛大学校の同窓生の活躍の場は、少なくとも、これまでの踏襲では打開できないことがはつきりしてきました。国内政治情勢を理由に国際的な貢献を免れると言ったことは許されなくなってきたのです。どうか同窓生の皆さん、我が国唯一の軍事プロ集団であることんを心に留めて、主体性を発揮し、二十一世紀の我が国の平和と安全に懸命の努力をさせていただきますようお願いいたします。

最後に、同窓生各位並びにご家族皆様のご多幸とご健勝を心より祈念申し上げます。新年のご挨拶と致します。

防衛大学校五十周年記念行事

同窓会事務局

平成十四年十一月十六日(土)、記念行事は、曇りやや肌寒い天候の中の午前10時、正門から真直ぐ伸びた石畳の道の先に立つ学校本部庁舎玄関での受付から始まった。

受付窓口は、50周年記念事業(記念モニュメント、記念マーチ等)関係、殉職御遺族関係、それに陸海空の同窓生関係と設け、受付リボンの取り付け、行事案内や校内見取り図等の資料を配付するなど整齊と為された。参加者の多い陸上窓口は、更に期別で二つに分け、それぞれの窓口は同窓会本部事務局員と小原台勤務の現役同窓生が担当した。和やかな受付中、はや、久闊の挨拶を交わす北海道から沖繩に至る全国から参加した同窓生の姿があつた。

最初の行事は、顕彰碑献花式である。前日から横須賀プリンスホテルに宿泊されていた御遺族を同窓会本部事務局員添乗の学校提供マイクロバスでお迎えにあり、受付後、本館の御遺族控え室にて休憩していただいた。当日は、各御家族の校内案内役として殉職者の友人同期生に多大の協力をして戴いた。

慰霊祭は、例年、開校祭行事(小原台事務局担当)として同窓会が行っているが、今年も、記念行事の一環として午前11時から厳粛に執り行われた。新設された記念講堂北側道路沿いにある顕彰碑周

りの式場は、同窓生の手によって綺麗に掃き清められ、学生儀仗隊の見守る中で同窓生会長、学校長「慰霊の辞」等の弔辞後、白菊を献花し故人を慰霊し偲んだ。参加者は、御遺族、会長以下同窓会関係者、学校長以下学校関係者、同期生会長等である。今回は節目と言うこともあり、87柱の全御遺族に同窓会からの案内状を送り、28家族、53名の御遺族関係者の参加があつた。献花した同窓生の数は、数え切れなかつた。献花式後、参加者は、学校大会議室において慰霊会食を行った。尚、学校施設立て替えに伴い、図書館機能が新設された新図書館に移動した後、50周年記念事業の一つとして現図書館の一部を殉職者顕彰室に新しく整備することとなつている。



開校祭の学生が販売する弁当等で、同窓生が、三々五々、昼食を取り終わった午後1時過ぎから記念講堂で、三浦朱門氏の記念講演が開始された。三浦先生は、卒業式のご来賓として来校して戴くとともに創立以来の卒業式におけるご来賓の祝辞を一冊の本として綴られた方である。また、当日は、所用で欠席であったが、ご夫人の曾野綾子氏も時期を変えて卒業式等のご来賓として来校して戴いている。

聴衆は、御遺族家族、記念事業関係者、同窓生及びその家族、学生そして開校祭に見えた市民の方々に、一五〇〇名程であつた。演題は、「望ましき自衛官像」

目次

平成十五年年頭のご挨拶
五十周年特集

防衛大学校五十周年記念行事

五十周年記念事業報告

MCI事業提案書

防大に奉職して二十五年

望ましき自衛官像

三浦朱門氏を囲む在校生代表との懇談会

五十周年記念顕彰碑献花式によせて

小原台は今

同窓会行事

記念行事類末記

代議員会議決結果

各種競技会

同窓会名簿の発行予定

同窓会アラカルト

防衛大学校学生歌作詩者の解題

ジャカルタ生活

世界学生ヨット選手権に参加して

今、ラグビーに学ぶ

京都大学アメフト部水野監督について

人に恵まれる

大空と共に

インド洋に展開して

湯治温泉宿「ごせんの湯」の坊主から

「えひめ丸事故を通しての経験」

期生会だより

支部だより

会計報告

防大同窓会総会のご案内

1 3 14 20 26 35 39 41 45 46 47 49 50 51 52 54 56 57 58 59 60 62 65 70 75 76

で、主として学生を対象とする意義深い講演であった。講演内容は、本冊に掲載されているとおりである。尚、後日、テープから起こした講演録が、三浦先生の加筆等を経て印刷製本され、全学生を含めた関係者にお渡しすることとなっている。余談ながら、三浦先生は、当夜、学生との懇談後、校内に宿泊されて翌日の学校行事に参加された。

卒業式同様に赤絨毯の引かれた記念講堂ステージでは、講演に引き続き、各種贈呈行事等が行われた。この催しを「各種贈呈行事等」と銘打ったのは、各種贈呈と記念事業でお世話になった方々への感謝状贈呈式と贈呈品である記念マーチの披露演奏、記念ビデオの試写等を一緒に行ったからである。



式典は、先ず、佐久間50周年記念事業委員会委員長の記念事業経過報告から始まった。次いで、同窓会長から学校長に記念事業の「醗金者名簿」、「記念マーチの楽譜等」、「記念ビデオ目録、同シナリオ」が贈呈された。尚、本冊、記念事業

経過報告にあるとおり、事業の大部である記念講堂のステンドグラス及び記念広場の彫刻像は、既に、それぞれ、講堂及び図書館の竣工に合わせ本年2月末と昨年10月始めに贈呈行事を行っていた。



ステージには、式典開始時から、ステンドグラス原画「若人の城」を作成された日本画家平松礼二先生、ステンドグラス制作に関わられた横田至明氏、彫刻像「国の護り」を制作された高橋洋氏及びマーチ作曲者の方々が着席されており、同窓会長からそれぞれの方に感謝状と記念品が手渡された。

その後、約10分の休憩をとり、記念マーチの披露演奏に開始した。この10分間に舞台黒子役の小原台勤務の同窓生が舞台模様を作り直し、演奏する防大吹奏楽部約50名を配置した。指揮棒を振るわれたのは吹奏楽部を指導しておられる北村憲昭氏と吹奏楽部OB田辺恒弥氏である。各曲毎に作曲者と作品のモチーフ等の説明が司会から紹介後、夏合宿も含め練習を重ねた吹奏楽部は、横に着席する

作曲者の作曲したマーチを次々と演奏した。作曲者の紅一点である吉永光里嬢も壇上にあつた。

観客は、講演会後に開校祭の各種催しで会場を後にした学生等を除き約一〇〇〇名であったが、楽しい演奏会であった。演奏後、再度、黒子の作業で楽器、譜面台、椅子等がかたづけられ、ステージにスクリーン設定がなされて記念ビデオの試写が行われた。ビデオは、当日の記念行事も収録することになっており、完成には至っていない内容であったが、期待の持てる作品との評を得た。平成十五年春先には、記念品として醗金者各人に配送されることとなっている。完成品の受領が待ち遠しい。

記念行事最後の催しは、祝賀会である。祝賀会は、各種贈呈行事後の休憩、そして移動の後、場所を学生食堂に移し、夕暮れの午後5時から始まった。招待者71名、同窓生六二五名（家族を含む）と四個大隊それぞれ招待された学生二〇〇



名の合計約九〇〇名の参加があり、ウエルカム・ドリンクの勢いも手伝い開会宣言の前から大賑わいとなり、廣い学生食堂も手狭に感じられる程であった。会では、同窓会長挨拶後、同窓生、学生の絆とも言える学生歌、応援歌及び追遠歌の作詞、作曲者への感謝状授与が行われ、平松画伯及び松本前校長から祝辞を頂戴した。懇談風景は、TBS報道特集で放映されたが、同窓生が乗艦する砕氷艦「しらせ」から届いた南極の氷でお酒もすすみ誠に盛大であった。

夕闇迫る午後6時半、祝賀会は参加者の学生歌大斉唱後、現役代表として防大幹事奥村陸将の乾杯で中締めとなり散会し、同窓生は臨時運行の京急バスで小原台を後にした。



五十周年記念事業報告

記念事業委員会

一 全般

平成十四年度は、昨年同窓生の皆様に御報告した「防大創立五十周年同窓会記念事業実施計画」に基づき、一つ一つの事業を計画に従って実行してまいりました。特に、記念事業の柱であるモニユメント制作及び寄贈に際しては、防衛大学校側と密接に連携して防大行事の一端として除幕式を執り行い、所定場所に無事設置することが出来ました。又、平成十四年十一月十六日の同窓会記念行事については、同窓会本部に編成された同窓会記念行事実行組織が中心となり、委員会と一体になって細部の実施計画を具体化し、学校側の協力をいただきながら周到に諸準備を進めてまいりました。お蔭様で、全国から多数の同窓生及び御家族の参加をいただき、また在校生の参加も得て、母校創立五十周年をお祝いするにふさわしい盛会にして、かつ感銘深い諸行事ができましたことを、先ず皆様に御報告いたします。

この際、同窓会記念行事の準備、実行に際し、特に各行事を担当された同窓会本部の各位の真摯な取り組みと、防大同窓会小原台事務局をはじめ放送委員会や防大吹奏楽部等実際にご支援いただいた皆様に対し、記念事業委員会として深甚なる感謝の意を表します。

同窓会記念行事という大きな節目を終え、これからの記念事業委員会の活動も、終末段階にはいります。従って、今回は記念事業の特集号として、これまでの事業活動を委員会として中間的に総括して、同窓生各位に御知らせする事に致します。

先ず、今日までの記念事業の全般的な経過については、同窓会記念行事において佐久間委員長から参加者に報告致しました内容を次章に掲載し、続いて、記念特集号の意味合いを深めるため、記念事業の各担当者から、実際に担当した事業ごとに実施した内容の概要について紹介させていただきます。

委員会としましては、今後、三浦先生講演録の記念冊子化等各事業の補備事項を完結し、記念品の一つである記念ビデオを完成して、醜金者の皆様への発送を確実に実行したのち、皆様からいただいた貴重な浄財に基づく事業経費の支出を総合的に整理し、事業会計の決算報告として纏めます。そして、約七年有余の間に亘って、真摯に取り組んできました記念事業を総括して最終的な報告事項として取り纏め、今年六月頃に予定される代議員会に最終報告を実施すると共に必要事項を同窓会本部に申し送る予定であります。

従いまして、同窓生の皆様には、遅く

なりますが次年度発行の「小原台だより」において、募金の最終結果や事業会計決算を含めた記念事業委員会からの最終報告を実施させていただきたいと思っております。なお、昨年十二月二十日の代議員会において、昨年十月に委員会から同窓会に提案しました「MCI事業提案書」の主旨を踏まえて、同窓会本部から新たにMCI事業化に関する同窓会の事業提案がなされ、「平成十五年度から同窓会として段階的に事業に着手していく」ことに決定されました。これにより、同窓会本部に本年三月末までに設置されるMCI準備委員会で平成十五年度の事業推進要領等が検討され、六月の代議員会に報告・承認されれば、先ず同窓会ホームページが開設される予定ですので、開設され次第、委員会の最終報告内容を掲載したいと考えておりますことを申し添えておきます。

二 同窓会記念行事における佐久間委員長の記念事業経過報告

防衛大学校の創立五十周年に当たって、同窓会の記念事業委員会が計画・実施してきました事業の経過について、報告致します。

平成七年十一月の同窓会総会において、記念事業の実施並びに記念事業委員会の設置が決定され、委員会の任務として、防大が行う事業に対する協力、同窓会としての事業の企画・実行、事業に必要な経費の募金活動、の三項目が示されました。第一回の委員会は平成八年七月に開催し、以後、防大当局の意向を踏ま

えながら基本構想を策定し、平成八年度の評議員会及び総会において承認を得ました。その内容は次のとおりであります。

方針としては、防大の事業に対する協力を主とし併せて同窓会独自の事業を行う事、事業の内容は後世に遺す価値のあるものを重点とする事、事業の計画実施に当たっては、将来の節目も視野に入れながら、二十世紀後半の歴史を踏まえつつ新世紀へ向けての飛躍を理念とする事、の三点を掲げました。

防大に対する協力は、学校中央地区にモニユメントを設置する事を全体の中心として位置付けるとともに、殉職同窓生の顕彰室整備に対する支援、五十年小史作成に対する協力を行う事としました。同窓会が計画実施する事業は、五十周年を記念する記録の作成、講演会の開催、祝賀会の実施、マーチの作成等を含めました。また、募金活動を平成九年から開始する事になりました。

以下、募金活動及び各事業の経過について申し上げます。

募金活動は、当初は目標を二億円としましたが、モニユメント制作をお願い致しました関係者の格別な御厚意により所要経費の縮小が可能になった事、並びに祝賀会を同窓会本部が行うようになった事から、平成十年度の代議員会において、目標額の一億二千万円への変更と、その枠内での事業予算が承認されました。

募金の実績は、総額約一億二千二百万円が寄せられ、目標を達成する事が出来ました。同窓生各位の御協力に感謝致しますとともに、この中には、殉職同窓生等の御家族並びにタイ・シンガポ

ール支部からの醸金が含まれている事を申し添えておきます。醸金者の氏名を記した芳名録は、本日防大へ贈呈すると共に一部を同窓会本部で永久保存致します。

モニュメントのうち、記念講堂のステンドグラスは、最も早くから準備作業を始めました。制作全般の指導をお願いしました清家清先生に防大を訪問して戴いたのは、五年前の十二月でありました。寒い風の吹く日でありましたが、先生には時計台の上まで上って戴き、防大全体の風景の中で講堂の位置付け等を確認して戴きました。清家先生は、東京工大及び東京芸大の名誉教授であり、また、防大の草創時期に久里浜の教室で講義を戴いた恩師でもあります。先生は、平成十年三月の卒業式に御参列戴き、その後の講堂設計とステンドグラス設置場所についての具体的な御指導によって、講堂の入口中央にステンドグラスを飾る事になりました。

原画制作については、当初の構想を変更せざるを得ない事態が生じましたが、多摩美術大学教授の平松礼二先生が、それまでの経緯を御承知の上で快諾して戴きました。私達は、平松先生にお願いする事が最も望ましいという結論を得ましたが、全く面識のない先生にどのようにお願いするか悩んだ折に、自らその役をかって戴いた方があります。それは、この席にお越しの、ステンドグラス制作に豊富な御経験をお持ちでデザイン・システム社相談役の横田至明氏であり、あらためて感謝申し上げます。本日御夫人と共に御臨席戴きました平松

先生は、国内外において活躍されている日本画家であり、一昨年一月からは、二十一世紀に輝く画家としてその作品が月刊誌「文芸春秋」の表紙を飾っておりま

す。先生は、昨年五月に防大を訪問して戴いた後、防大はもとより各自衛隊の関係資料を広く検討され、限られた期間内で集中的にこの制作に取り組んで戴き、昨年六月に原画「若人の城」が完成しました。このタイトルは、申すまでもなく学生歌の歌詞から採ったものであり、守るべき対象である日本の象徴としての富士山に、陸・海・空を示す「咲き誇る桜」「金色に輝く海」「紺碧の空」を配して、全体として国を守る若人の城としての小原台の場を描いて戴きました。

この原画に基づくステンドグラスの制作は、清家先生の教え子の角永博氏が代表を勤めておられます株式会社デザイン・システムにお願い致しました。制作作業は、横田氏を統括責任者として、現代壁画研究所の湯河原工房が担当する事になりました。作業は、繊細で華麗な原画を出来る限り忠実に表わす事を目指して進められ、そのため工房の担当者、新しい技法に挑戦して作品の制作に取り組んで戴きました。また、平松先生は、度々工房へ足を運ばれ直接作業の御指導を戴きました。

もう一つのモニュメントである彫刻像は、図書館及び中央広場の建設工事の進捗に合わせて計画が具体化しました。平成十二年春に、防大当局から中央広場の構想とモニュメントの許容重量等が示され、委員会における検討の結果、文武両道を表わす彫刻像を中央広場の芝生部分に設置する事にしました。

制作者の選定については、三越美術部の支援を得る事とし、二十一世紀に輝くと期待される彫刻家を推薦して戴き、作品の写真・デッサン、展覧会展示作品等による検討を進め、最終的に愛知県立芸術大学教授の高橋洋先生にお願いする事として、昨年一月に制作受諾のお返事を戴きました。高橋先生は、国画会を中心に活躍され、近年は「形によって形なきものを表わす」と評される見事な制作を続けておられる方であり、本日御夫人と共に御臨席戴いております。先生は、昨年二月以降度々防大を訪問され、昨年夏には複数の案の中から「兜」をモチーフとする事が決まりました。秋には、若人の無限の可能性を表現する天を指す「兜」に日輪と羽根ペンを配したブロンズ像と、学生綱領の三徳目及び陸・海・空を示す黒御影石の「三本柱の台座」から成る構想が固まり、タイトルは防大応援歌から「国の護り」を採る事となりました。

粘土による原型の制作は、愛知県日進市の高橋先生のアトリエで本年二月から開始され、次いで石膏像の制作に移りました。この石膏像を用いて造形及び色付けの完成度を高める作業が続けられ、七月には仕上げを終えた石膏像が鑄造のため富山県新湊市の工房へ送られました。

この間五月中旬には、台座が防大の中央広場に設置されました。鑄造が八月上旬に仕上がり、色付け、錆び止め加工を終えた兜部分が防大に運ばれて台座と結合され、彫刻像として完成したのが九月二十四日でありました。

十月八日、図書館落成式に併せて、彫刻像の除幕式並びに同窓会から防大に対する寄贈が行われ、学校長から先生に感謝状が贈られました。

モニュメントの制作をお願い致しましたお二人の先生からは、等しく防大五十年記念事業に携わる事が光栄であるとお言葉を戴き、他のお仕事に優先して制作に当たって戴きました。誠に有難い事でありませう。高橋先生は、昨年末から病床に臥せられた時期がお有りだっただけに、本日の感慨はいかばかりかと拝察しております。

さらに、平松先生は、ステンドグラス原画の版画百部を同窓会に寄贈して戴きました。委員会において検討の結果、先生のお気持を活かすためには、防大卒業生が勤務する全国の部隊等に配布する事が最善と判断し、同窓会から各自衛隊等に贈呈致します。また、高橋先生は、彫刻像のレプリカを寄贈して戴き、彫刻像除幕式の日と同窓会長が受領致しました。ステンドグラスの原画及び彫刻像のレプリカは、昨日から明日までの間、記念講堂で実施中のモニュメント制作過程展示の場で御覧戴く事が出来ます。これらの作品は、将来防大資料館が完成した後は、その中に飾る方向で防大による検討が行われております。

同窓会記念事業の中心となったモニュ

メントは、小原台を飾る香り高い芸術品として学生の心を豊かにすると共に、将来にわたって卒業生の心の故郷となり続けるものと信じております。また、この作品が、お二人の先生をはじめ多くの方々の熱意と御尽力によって出来上がった経緯が、語り継がれる事を願っております。

なお、モニュメントのパンフレットを作成して平松・高橋両先生へお送りし、また防大及び同窓会本部へ送付しました。

殉職同窓生の顕彰室整備は、母校創立五十周年の節目に際して、同窓会として是非とも行うべき事業と認識しております。ただし、顕彰室が設けられる予定の資料館の開館が平成十六年度になるため、委員会としては顕彰室整備事業を同窓会の手に乗ねる事になります。しかし、顕彰室に殉職同窓生の刻銘板を設置する事は既に決定されており、その仕様並びに顕彰室に隣接して設けられる予定の卒業生コーナーのレイアウトは、本年中に防大へ通知する事にしております。

五十年小史作成に対する協力は、防大の要請に基づき、「防衛大学校五十年のあゆみ」と題する小冊子を作成し、防大及び同窓会本部へ送付しました。

記念記録の作成に關しましては、複数の案を検討の結果、約五十分程度の記念ビデオを作成することになり、六期生の桑原泰彦会員の手になる「任重く道遠し」と題するシナリオに沿って、長年カメラを通して防大の歴史を記録してこられた陸上自衛隊OBの久保田博幸氏の協力を得ながら、作業を続行中であります。本

日は、約十五分の紹介版の試写を実施すると共にビデオの目録及びシナリオ台本を防大へ贈呈致します。

この記念ビデオは、本日の記念行事の映像を含めて完成させ、小記念品としてモニュメントの絵葉書セットと共に、明年二月醸金者全員に贈呈するほか、地方連絡部及び同窓会の本部・各支部へ送付致します。

同窓会主催の記念講演会は、検討の結果三浦朱門先生にお願いする事とし、昨年十月に快諾を戴きました。先程行われました講演は、先生の広く深い学識と透徹した歴史観に基づく感銘深い内容であり、また防大の初代校長植智雄先生の教えに通じるものがあるとの思いが致しました。

三浦先生は、本人の御希望により、殉職同窓生慰霊碑献花式に参列され、今夜は校内に宿泊されて学生と懇談されることになっております。本日の講演録は、明年一月発刊の「小原台だより」に掲載するほか、同窓会の本部及び支部等に送付することにしております。

なお各支部は、記念事業の一環としてそれぞれの計画に基づく地方講演会を開催しており、そのための経費を配布致しました。

記念マーチは、各種観閲式における防大学生隊の行進並びに日常の課業行進に使用される事を期待して作成する事とし、具体的な企画及び実行は防大吹奏楽部OB会にお願いしました。一般公募作品については、一次審査の合格曲七曲を対象とし、海上自衛隊横須賀音楽隊の演奏協力を得て、本年六月、二次審査を行

いました。審査には、同窓会長をはじめ、防大の校長及び職員・学生、部外の専門家、各自衛隊音楽隊長、防大吹奏楽部OB会等が当たりました。審査においては二曲を選考の予定でありましたが、優秀つけ難い作品揃いで、防大の要望もあり最終的に四曲を選定しました。

これに専門家作曲の四曲を合わせた八曲の楽譜とCDを、本日防大に贈呈致します。また、防大吹奏楽部による披露演奏が行われ、明日の防大記念行事における観閲式の際に、初めて防大行進曲として使用される予定であります。

以上は当初の構想に基づく事業の概要であり、委員会は、これに加えて、五十周年を機会に一つの種を蒔き将来これを育てて行く記念植樹の構想を同窓会に提案致しました。「MCI (Military Cyber Institute)」と仮りに名付けた構想であります。その目的は、我が国の国家運営に当たって軍事的視点が欠落する事が多い現状の改善に資するため、防大同窓生の力を結集してインターネットを利用した「軍事的識見が整理総合されていくセンター」を構築し、それを基に国家・社会に対して軍事的配慮の重要性を発信することにあります。

この構想の同窓会に対する提案並びに必要な経費の執行は、昨年の代議員会において承認されました。委員会において、志方副委員長をリーダーとして記念事業委員以外の同窓生を含めたMCI検討チームを編成し、また構想を実現するための事業モデルの研究を同窓会員が経営する企業に委託し、その成果を本年八月末に受領しました。委員会は、研究成

果を踏まえて、同窓生の理解が得られ、かつ同窓会が実行に移せるような構想案を作成し、十月二十三日に同窓会長に手渡しました。

同窓会本部は、委員会提案書の取扱いを、来月の代議員会に諮られる事と承知しております。委員会としては、同窓会が、目的の一つに掲げながら今日まで具体化することの出来なかつた社会的な活動に挑戦する意義は極めて大きいものと考えており、同窓生各位の御賛同が得られる事を期待してまいります。

委員会は、今後、記念講演講演録の作成、「小原台だより」記念事業特集号による報告、醸金者に対する記念品の送付、委員会活動記録の作成等を行い、代議員会における事業及び会計最終報告と同窓会本部への引継ぎをもって任務を終了し、明年六月末に解散する予定であります。

過去七年間における委員会の会議開催数は四十一回に及びました。多くの課題を巡って激論を交わす事もありました。しかし、志方・石塚両副委員長の優れたリーダーシップと、二代にわたる宇野・田村事務局長の的確な企画・調整のもと、各委員は、長期間にわたって計画並びに部内外の関係先との調整及び契約作業等に当たり、任務を全うしようとしております。その献身的で見事な努力に対し、委員会の責任者として心から敬意と謝意を表します。

この七年間に同窓会記念事業に対して寄せられました、同窓生、防大当局、そして各種事業に御協力戴きました多くの方々の御支援は、防衛大学校に対する熱い想いと期待の現れであると強く感じて

おります。

私達の母校が、次の節目に向けてさらに輝かしい歴史を築く事を願い、皆様の御支援に重ねて御礼申し上げます。報告を終わらせて戴きます。(平成十四年十一月十六日、防大記念講堂にて)

三 各主要事業の実施内容の概要

(一) ステンドグラス

① 概要

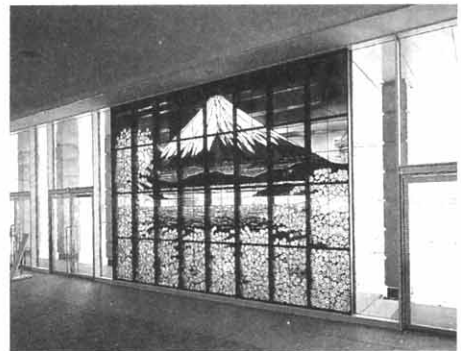
ステンドグラス「若人の城」は防大の記念講堂の建設にあわせ、記念講堂に「防大を象徴するモニュメント」としてのステンドグラスを同窓会として設置・寄贈したものです。記念講堂の建設工程を勘案し、五十周年事業委員会として最も早期に着手した事業であり、平成八年に構想を概定し事業をスタートいたしました。

当初順調にスタートした本事業も平成十二年になって、当初予定の制作者を変更せざるを得ない事態となる等の曲折を経た後、平成十三年六月末には原画が完成しました。

そして、平成十四年二月にはステンドグラスとして完成し、記念講堂へ設置され、平成十四年二月二十八日の記念講堂落成式時、同窓会から防大へ寄贈いたしました。

西欧で発達したステンドグラスは、その類い希なる不変性・耐久性により幾世紀にわたり変わらず人々に語りかけているものが数多く存在しています。ステンドグラス「若人の城」にも、変わらぬ精神と思いが込められています。いつまで

も防大生の精神の拠り所として存在する事を願っております。



▲講堂正面入り口のステンドグラス

② 経過の詳細

○ 制作者の選定

平成八年十月、海自鹿屋基地資料館のステンドグラス制作に御尽力いただいた平山郁夫画伯に本事業の核となる原画の制作をお願いし承諾を得ました。

翌九年十一月には設置場所と記念講堂の設計との整合などの全般指導を清家清先生に依頼し、制作にはデザイン・システム社を、ステンドグラス本体の制作業には財団法人日本交通文化協会現代壁画研究所を選定いたしました。

何れも海自鹿屋基地資料館のステンドグラス制作に尽力された、経験豊富な、望みうる最良のメンバーでありました。

ところが、平成十一年の同窓会代議員会時点から十二年末にかけて、原画制作者の平山郁夫画伯に対する一部同窓生の反対意見・行動が画伯個人やご家族迄も巻き込み御迷惑をかける事態となりました。



▲平松画伯作「若人の城」

た。ここに至り、画伯からついには事業への協力辞退の申し出がなされ、事業委員会としても平成十二年末、平山画伯への協力依頼を断念いたしました。(細部については、平成十三年一月小原台だより (Vol.6) 2 ページに掲載しております)

その後、防大当局との協議検討を重ね、中断している記念事業としてのステンドグラス事業の継続を確認し、清家先生ほか制作関係者の専門的助言を得ながら、再度原画制作を依頼する画家の選考を実施しました。

そして、候補に挙がった二十一世紀をリードする気鋭の日本画家の中で実績・画風・画壇での評価等を勘案し、平松礼二画伯を最も望ましい画家として選定いたしました。

平成十三年四月、当該美術界に造詣の深い制作関係者の横田至明氏を仲介にして、本事業の主旨、これまでの経緯等をお話しし原画の制作を依頼して、画伯の承諾をいただきました。

こうして、制作の柱となる原画制作者

に平松画伯をお迎えしたステンドグラス制作新メンバーは、一年後の平成十四年三月の完成を目指して再スタートいたしました。

○ 原画の制作

本事業に深いご理解を示された平松画伯は、依頼を承諾された折り「意義のあるこの事業に参加出来る事は光栄であり名譽なことです」とその思いを吐露されております。

画伯は、極めてご多忙な身でありながら、この事業に全力を傾注され、防大はもとより自衛隊の各部隊に至るまで広く関係資料を収集し、更には現地に赴き「若人の城」をいかに表現するかその構想づくりに心血を注がれました。日本の象徴富士山をメインに絵を構成することを考えられた画伯は各所でスケッチを重ね、制作資料の収集に努められましたが、この時のスケッチの一部は制作過程の資料として防大に寄贈されました。

制作意図について、画伯ご自身次のように語られています。「紺碧の空、金色に輝く海、咲き誇る櫻、永遠の象徴富士山を求めて相模湾を取材地に決めました。構想時に考えたことは、「日本」「人間」「安全」「幸福」「自信」「勇氣」などについてでした。この国と美しい自然を守る純潔な若い力を称え、その強さと美しさを表現するため、自然が一番美しく輝く季節「春」を描きました。小原台から希望の翼をつけ、任地に飛び立った若人が、やがて困難や辛苦に遭遇したとき、若き日々、魂を鍛えた小原台を思い出し、いつでも翼を休めに帰郷出来るよう願って

描きました。」

このような思いで、連日早朝から終夜まで筆を執られ、限られた期限の六月末には原画が完成いたしました。

○ステンドグラスの制作

ステンドグラス本体の制作作業は、横田至明氏を統括責任者として現代壁画研究所で制作することになり、原画入手の平成十三年七月初旬から三ヶ月かけて、原画から本体の五分の一の線分図を作成し、各部分のガラスの色合い、材質、制作手法等作業の細部を検討し、材料の色ガラス、鉛線、型紙、手法に見合う特殊工具等を準備しました。

制作は九月から始まり、先ず線分図を原寸大に拡大した型紙を作り、それに原画と対比しつつガラスの色等をあわせ、全体の構図・色合い等を検討しました。そしてこの型紙を細かな部分毎に切断し、これに合わせてガラスをカットし、パネル毎に並べてガラスの色合い・構成の確かさを確認しつつ各部のパーツを確



▲工房内での作業風景

定しました。それらのパーツに絵付け、加工、焼き付けを施し原画と対比しつつ鉛線で各パーツをハンダ付けして、ついに平成十四年二月に完成いたしました。

この間、色合わせ、絵付け、検査などで六回にわたり平松画伯から現地工房において指導を頂きました。ステンドグラス制作に当たった工房にとって今回の作業は、約二千もの桜花が咲き誇る約八十号の精緻華麗な絵が原画として提供されたことで、これに負けないようあらゆる技術を駆使し、可能な限り原画の雰囲気そのままをガラスで再現しようという担当者の思いが意気込みとなり、工房の全力を挙げた作業となりました。五ヶ月間の血のにじむような努力が、平成十四年二月二十二日完成検査時の平松画伯の「よくぞここまで」という感嘆となり、記念講堂正面を飾るに相応しいものとなりました。

○講堂への設置

ステンドグラスの設置場所は、防大を訪れ現場をつぶさに検討された清家先生の指導もあり、五十周年記念講堂の正面入り口で、且つ学校のメインストリートといえる学生舎道路の行く手正面で、朝日に輝くようにと、当初南北で計画されていた講堂入り口を東西方向に変更し現在の位置に決定したものです。

平成十四年二月二十五日、ステンドグラスの各パネル三十二枚は湯河原の工房を出て防大に搬入され、一日がかりで枠に組み込まれました。初めてその全容が姿をあらわしたステンドグラスに立ち会った人々から期待せずして歓声が上がりました。

した。



▲ステンドグラスセッティング時の平松画伯(後列右から5人目)と制作関係者

光に映えるその風景は、守るべき対象である日本のシンボルとしての富士山に、陸・海・空を示す「咲き誇る櫻」「金色に輝く海」「紺碧の空」を配し、全体として国を守る「若人の城」小原台の生気あふれる姿そのものであります。

○ステンドグラスの完成・除幕、原画・版画等の寄贈

ステンドグラスの除幕式は、記念講堂の落成式にあわせ学校行事として平成十四年二月二十八日に実施されました。

学校長以下の学校関係者、阿部会長以下同窓会関係者等六十八名及び平松画伯ご夫妻、清家先生他のステンドグラス関係者八名が参加し、記念講堂落成のテープカット、安全祈願、施設見学の後、落成式・除幕式が行われました。

佐久間委員長の経過報告の後、平松画伯から原画が、阿部会長からステンドグラスがそれぞれ目録として学校長に贈呈されました。

ステンドグラス及び原画を覆う白幕が外されると、講堂のホワイエは感嘆の声に満たされました。

防大同窓生の母校に寄せる熱い思いと、関係者の防大に寄せる強い期待がこのステンドグラスの完成につながったものとの感を強くしました。



▲除幕式

その後、平松画伯から原画の役割を終えた日本画「若人の城」が防大に寄贈されました。又同様に、この絵の構想の基となった「さくら」「富士山」「御殿場市」「逗子」「葉山長者が崎」のスケッチ及び下絵六点多、制作過程展示終了後学校に寄贈されました。これらの作品は、計画中の防大資料館に飾られる予定です。

また原画の制作を終わられた画伯は、この事業に参加できた記念にと、作品「若人の城」をF8号の精緻な版画にされ、京都の工房で作成した限定版百部を同窓会へ寄贈されました。これらの版画は、防大卒業生が活躍している陸・海・空の部隊等に配布することといたしました。

○制作過程展示・同窓会からの感謝状の贈呈

開校祭・同窓会記念行事にあわせ、平成十四年十一月十五日から十七日までの三日間にわたり、記念講堂ホワイエにおいて、ステンドグラス・彫刻像それぞれの構想段階から完成に至るまでの制作過程を写真パネル、原画、スケッチ、下絵、レプリカ等をもって展示いたしました。



▲制作過程

また、十六日の同窓会記念行事の中で、阿部同窓会会長から平松画伯・デザインシステム社・現代壁画研究所にそれぞれ感謝状が贈られました。

(竹下 茂之委員)

(二)中央広場彫刻像

①概要

彫刻像「国の護り」は、防衛大学校同窓会が、五十周年事業の一環として防大に寄贈するため、ステンドグラス「若人の城」と対を成すミニユメントとして制作され、中央広場に設置されたものです。彫刻像が設置されている中央広場は、

創立五十周年に際して防大が整備した施設等の中心部で、防大の諸行事が行われる記念講堂の前庭部分にあたり、学生・職員はもとより全国から行事に参加する父兄をはじめ、内外の来校者が訪れる場所であります。このため、ミニユメントには創立五十周年にあたって改めて顧みる建学の精神の表現と共に、記念撮影の背景として周囲の景観に調和する造形が求められました。



▲「新たなシンボル「国の護り」」

彫刻像「国の護り」を制作していただいた愛知県立芸術大学教授 高橋 洋先生は、防大に対して深い理解を示されると共に強い期待を抱かれ、約二年間に亘って情熱的に制作に取り組みされました。そして、文武両道をモチーフにした芸術的香りの高い彫刻像「国の護り」が完成し、平成十四年十月八日、除幕とともに同窓会から防大に寄贈され、学校長から高橋先生に感謝状が贈られました。そして同日、高橋先生は「兜の記念碑「国の護り」について」という次のような一文を寄せられました。

「初めて記念碑設置の候補地に立ち、同窓会の構想を伺い、又防衛大学の想いを知った時のことを昨日のように思い出す。この大学の精神は「真勇」であり「廉

恥」「礼節」である。又「文」と「武」がバランス良く教育に採り入れられ、その指導を受けて「陸・海・空」の若人は自らの肉体と精神を成長させ、果立って行く。その人々は国を護り、そして世界の平和をも願っている。

五十年の歴史の中に共通した理念、精神、これを基にしてこの形が出来た。この兜を使った「国の護り」の記念碑は、この様な多くの人々の想いが籠った「形のメッセージ」である。」

②経過の詳細

○計画の始動

彫刻像寄贈の構想は、図書館及び中央広場の建設工事の進捗にあわせて具体化しました。計画が動き出したのは、平成十二年春でした。防大から中央広場の構想とミニユメントに関する意見並びに建築物の構造強度上許容される重量制限等が提示され、ミニユメントの種類とモチーフを固める作業を開始しました。記念事業委員会での検討及び防大との意見交換を重ねた結果、ミニユメントは、具象の彫刻像とし、モチーフの材料として「防大建学の精神」「若人」「学生歌」「学生綱領」等を提示して、その裁量については制作者に委ねることとしました。

○制作者の決定

制作者の選定は三越美術部に負うところが大きかったです。二十一世紀に輝くと期待される複数の具象彫刻家の推薦を受け、作品写真集及びデッサンの検討、美術特撰会における等身大像の比較等を通じて選定を進めました。最終的には、国画会を



▲「アトリエの高橋洋先生」

中心に活躍中で、近年は「夢・風・翔」をテーマに「形により形なきものをあらわす」との評を受けて精力的に制作活動中の高橋 洋先生に依頼することとし、平成十三年一月に快諾していただきました。

○構想の具体化

平成十三年二月、高橋先生は構想を固めるため防大を初訪問、その後も度々防大に足を運ばれ、夏には武の象徴たる「兜」を主題とする事が決定されました。秋には、若人の無限の可能性を表現し天を指す「兜」に、護るべき対象を表す日輪と勉学を象徴する羽ペンを配するというディテールと、学生綱領の三徳目及び陸・海・空を示す「三本の柱の台座」で支えるミニユメントの構成が先生から披露され、委員会も了解し、その後、彫刻像の名称は応援歌の一節から「国の護り」とすることとなりました。

設置場所は中央広場の芝生上で、ステンドグラスと相対し、方向は広場全体の整合性と記念撮影時の陽光等の効果を総

合的に考慮して西向きと決定しました。彫刻像の大きさは、広場とのバランスを考慮し、高さ5m(像・ブロンズ製3.5m 台座・黒御影製1.5m) 重量は約6tとなりました。

○制作の開始

粘土による原型の制作は平成十四年二月、彫刻家 加納秀美氏を助手として、愛知県日進市の高橋先生のアトリエにおいて開始されました。四月中旬には石膏による雌型取り、雄型の制作(於 東京赤木石膏研究所)へと作業が進められました。この石膏像雄型は作品の仕上がりに大きく影響を与えるものであるため、里帰りした高橋先生のアトリエにおいて、造形や仕上りの表面状態に至るまで細かい作業が続けられる一方、五分の一大のスケールにより風格と品位を醸し出すための着色の検討も進められました。



▲「マケット」

○台座の設置と安全性の確保

台座は岡崎市の武嶋石材店において無垢の黒御影石により制作され、五月中旬、建設工事途中の中央広場に設置されました。これに先立ち中央広場の施設工事を担当した石本設計事務所と安藤建設の協力により、地震時の建築物への影響や像自体の安定についての検討が行われ、充分

な安全性を確保する処置が施されました。



▲「台座の設置 (14.5.14)」

○石膏像からブロンズへ

石膏像の仕上げと着色は、五月下旬の委員会による視察を経て、更に完成度が高められ、七月十五日、富山県新湊市のクロタニコーポレーションに移送されて、ブロンズ像の鑄造工程へと移行しました。

○彫刻像の完成・除幕及びレプリカの寄贈

ブロンズ像は、工場に於ける高橋先生の監督を受けつつ九月初旬に仕上げが完了し、九月二十四日には防大へ輸送されて台座と結合され、彫刻像「国の護り」として完成いたしました。

十月八日、新図書館の落成に併せて彫刻像の除幕と共に同窓会から防大に寄贈され、学校長から高橋 洋先生に感謝状が贈呈されました。また、将来資料館に展示することを視野に入れて別に制作された、本体の五分の一大のレプリカが同日、高橋先生から防大同窓会に寄贈されました。



▲「除幕式に於ける学校長からの感謝状の贈呈」

○制作過程展示・同窓会からの感謝状贈呈

制作過程の展示については、ステンドグラスの項で記述されていますので重複を避けここでは割愛いたします。

十一月十六日の同窓会記念行事当日、記念講堂において阿部同窓会会長から高橋先生に対し制作へのご尽力とレプリカの寄贈に対し感謝状が贈呈されました。

彫刻像を生み出す構想の段階から設置までの長期間にわたる高橋先生の情熱的な取り組みと、先生の健康を気遣い常に寄り添いサポートされた奥様、加納先生、三越日本橋本店美術部、毎日アートコレクションの積極的な支援を得て素晴らしい作品が完成したことに対し、プロジェクトに携わった関係者一同感謝を込めてお礼を申し上げます。

(村岡 亮道委員)

(三) 記念講演

① 防大における記念講演の実施

平成十四年十一月十六日 一三〇〇〜一四三〇の間、防大記念講堂において防大創立五十周年を記念する講演会を実施しました。講師は三浦朱門氏にお願いし、「望まじき自衛官像」という演題で実施していただきました。聴講者は、記念行

事に参加した同窓生(家族を含む)約六百名に、招待者(ご遺族を含む)約百二十名と防大在校生・職員の約千名を加えた約千七百名にもなりました。

講演の要旨は、「防大五十年の歩みの背景に常にあったのは、「憲法の問題」と且つ戦後の日本人の軍事的無知」というものである。これらの事は五十年経った今も基本的には変わっていない。さらに加えて着目すべき事は軍及び軍人が持っている保守性というものである。これらの困難な事柄を克服するためには、自らのアイデンティティーを確立するとともに他人や他国の事も良く理解できる人間にならなければならない。これから先も様々な障害があるだろうが、恐れず勇気を持って自分に誠実に、そして民族に対する責任感を持って、問題の解決に向かって行っていたいただきたい。」というものでした。参加者は大きな感銘をもって聴講しておりました。

本講演の「講演録」は、この日の一八四五〜二〇四〇の間、学生舎において行われた、三浦先生を囲む在校生二十一名



▶「三浦先生」

「講演に聴き入る聴衆」



との懇談会における「三浦先生談話録」と併せて本記念特集号に掲載させていただきます。

また本講演を、防大創立五十周年を記念する冊子にまとめ、一月末までに二千二百部を作成いたします。これらの記念冊子は、主として防大在校生や陸・海・空の各幹部候補生学校等に配布し、将来の自衛隊を担う若い幹部候補生の座右の書として活用していただくことにしております。

②同窓会支部が実施する地方講演会への支援

各支部は、それぞれが計画する創立五十周年記念事業の一環として地方講演会を独自に開催しております。この地方講演会を支援する目的で、所要経費をそれぞれの支部に対して平成十四年十月までに配分いたしました。

(原 充宏委員)

支部等名	実施日時 (場所)	演題等	講師
北海道 地域支部	十五・二・二十二 札幌ラフ・フィット 札幌(予定)	「防衛大学校創立五十周年を迎えて」	防衛大学校 副校長 安岡 義純氏
小原台ラフ	十四・七・五 谷	「勝利への道」	京都大学 アメフト部監督 水野 淵一氏(七期生)
東海支部	十四・十二・十五 名古屋ホテル・キ ヤッスルプラザ	「おしやべりコンサ ート」	ソプラノ歌手 下垣 真希さん
北陸支部	十四・八・二十五 (金沢全日空ホテル)	「教育と付加価値に ついて」	金沢工業大学 理事長 泉屋 利輝氏
関西 地域支部	十四・三・二一(大 阪ホテル・ニューオ オタニ)	「二十一世紀への新た な挑戦・マイクロナ ノテク(ラジ)」	神戸大学 教授 高森 年氏
広島 地域支部	十四・一・二三 (広島厚生会館)	「私が選んだ道に悔 いはなし」	NHKプロ野球解説者 野 豊氏(元広島東洋カー プ選手)
西部 地域支部	十五・一・二十二 (福岡全日空ホテル 予定)	「最近の国際情勢と 防大教育(仮題)」	防衛大学校 校長 西原 正氏
沖縄 地域支部	十四・九・七 (パシフィックホテ ル沖縄)	「思い出に残る在職 中の出来事、現職自 衛官に望むこと等」	元統幕議長 藤堀祐爾氏 元航空幕僚長 村木鴻二氏 元海上幕僚長 藤田幸生氏

④記念マーチの作成

外国の士官学校や旧陸海軍等の行進曲には、その組織をイメージさせるような独自性のある名曲があります。

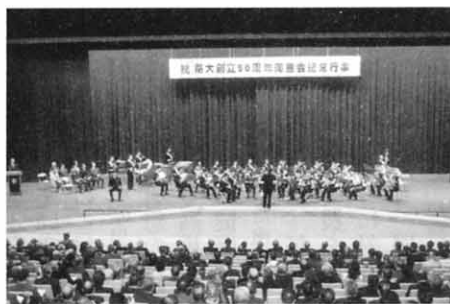
残念ながら防大には、観閲行進、課業行進時等に使用されるそのようなオリジナルの行進曲が事実上無かったことから、創立五十周年を記念して、同窓会として記念マーチを作成して防大に贈呈しようというのが本事業であります。この事業の具体的な企画、実行は平成十三年の一月から防大吹奏楽部OB会に担当していただきましたが、その際委員会では次の事項を方針として五十周年に相応しい曲を作成する事にいたしました。即ち、
○日々の課業行進、観閲行進などに常用でき、防大生の生活・訓練等に密着して輝かしい伝統作りの一環となること。

○防大らしい若き溢れたメロディーで、題名には日本語を用いること。

○なるべく多くの曲を募り、そしてその中から複数曲を選考すること。

これらの要求事項に基づき募集要領を定めて、専門の作曲家への依頼、一般からの公募、卒業生・在校生に通知活動等を実施しました。一般公募曲の応募は十三曲に及び、その内七曲を第一次審査の楽譜審査で選考し、海上自衛隊横須賀音楽隊の演奏支援・協力を得て第二次審査を行い一般公募曲四曲を選定いたしました。これで、平成十四年六月には専門作曲家に依頼した四曲と一般公募曲四曲の合計八曲の贈呈曲が出そろいました。七

月からは、贈呈曲の編曲、良質の録音及びDAT化、CD化、楽譜の作成・配布準備等を実施して、予定通り十一月十六日には記念講堂において、作曲家参加のもと防大吹奏楽部の演奏で贈呈曲の披露及び防大への贈呈式を行うとともに、翌十七日の小泉総理臨席の開校祭観閲式において、初めて贈呈曲が観閲行進曲として演奏されました。



▲披露演奏

②専門作曲家への依頼

専門の作曲家の人選は、防大、自衛隊に正しい理解を有し、音楽界においても実績のある著名な方々の中から次の四氏に白羽の矢を立て、作曲を依頼いたしました。

○北村憲昭氏：防大吹奏楽部指導者で、オペラを主とするオーケストラ指揮者。

○吉永光里氏：防大生の若い感性に近く、自衛隊を良く理解している女性シンガーソングライター。

○藤倉 大氏：防大吹奏楽部指導経験者で現在、英国において作曲活

動中の作曲家。

○田辺恒弥氏：第二期生として防大入校後、音楽界に転身し、現在、武蔵野音楽大学作曲科の教授。

③公募曲の審査

公募曲の募集開始から約一年後の平成十四年六月九日、楽譜審査を通過した七曲の演奏審査を防大において、海自横須賀音楽隊の演奏支援を得て実施しました。

審査メンバーは、阿部同窓会会長を審査委員長として、同窓会・防大吹奏楽部OB会関係者、学校長をはじめとする防大関係者、陸・海・空の各音楽隊長・専門の作曲家等の音楽関係者等十三名で構成し、決められた審査手順に基づき、厳正かつ整齐と審査を行いました。

当初計画では、優秀曲二曲を選抜する予定にしておりましたが、防大側からのたつての要望もあり、二曲を追加し、公募曲は四曲を贈呈することになりました。贈呈数は予定数を超えましたが、選定各曲はそれぞれ優れた特徴を有しており、今後の防大において諸活動に貢献するものと確信しています。

④CD化等

当初計画では、百五十枚のCD作成を予定しておりましたが、各方面からの要望があること、経費面でも千枚作成しても大差がないこと等から千枚作成しました。当初計画百五十枚分については、事業委員会の経費負担とし残余八百五十枚分については防大吹奏楽部OB会の負担といたしました。なお、作曲の著作権は防大ではなく同窓会が保有することになりました。

CD及び楽譜は防大及び各自衛隊の音

楽隊等に配布し、今後の演奏活動等に活用していただけるようにいたしました。

⑤贈呈曲の概要

防大に贈呈いたしました八曲の概要は次のとおりです。

(曲名・作曲者名・作曲者のコメントの順で記載)

○部外作曲家への依頼曲

*「勇姿」北村 憲昭(オーケストラ指揮者)
恒久平和を担う若人の意気を想い、その志に伝える曲とした。多くの人に訴えるため「For Peace Forever」の語感をモチーフにした。

*「み・ら・い・へ」吉永 光里
(シンガーソングライター)
歌詞を付けたロック調の原曲を作ったから行進曲にアレンジした。歌える、明るい、若い、活発、歯切れ良い、メロディが覚えやすいを基に前向きなイメージ、未来へ一歩でも前進する若い足音に花を添えられたら嬉しい。

*「栄華壯観」藤倉 大(英国在住作曲家)
学生が堂々と行進し、その先には世界を舞台にして活躍する姿があるというイメージを基に作曲した。

*「我が山河」田辺 恒弥
(武蔵野音大作曲科教授)
日本人なら誰でもが心のどこかに持っている「日本」への愛着、誇り及び四季の変化の美しく豊かな表情を念頭に、明るくさわやかな行進曲とした。

第二期生であったことに心から誇りを持っていきます。

○一般からの公募曲

*「飛翔」神 明(陸自・中央音楽隊)

防大の制服姿は爽やかで凛々しく、若々しい躍動感とともに国防という崇高な使命感を輝くまなざしから感じ、四年間の厳しい規律と訓練を経て校章の如く逞しく、力強くはばたく姿をイメージした。

*「輝く紋章」堀 滝比呂

(陸自・中央音楽隊)
校章及び襟章をイメージした。祖国と国民の盾とならんと志願した若人の心意気を謳った。

品格と威厳を持ち努めて勇壮、剛毅、闊達を意図しながら日本の美観をも併せ持つ曲となるよう努力した。共に胸を張って未来へ邁進しよう。

*「小原台の青春」澤辺 泰紀

(海自・横須賀音楽隊)
前途有望な若人が颯爽と、かつ優雅に行進する様をイメージし、曲の一部に学生歌を取り入れ愛校精神の鼓舞を図った。

*「若き精鋭」岩下 章二

(海自・東京音楽隊)
将来の自衛隊を背負って立つ小原台の若き精鋭が訓練や勉学に励む、希望に満ちた澁刺とした姿をイメージした。

(田中 厚彦委員)

(五)記念品等の作成

①記念ビデオ

防大五十年の歩みを回顧し同窓同学の志を思う縁とすべく、記念ビデオを作成しました。

タイトルは「任重く道遠し(小原台を

駆けた若人)」です。構成は、防衛大学校の誕生と発展、防大生の生活、防大五十年の回顧、同窓会活動、現在の防大、及び創立五十周年記念行事等とし、防大発展の姿と新たな飛躍のための努力を強調することにしました。この中で、BGMとして記念マーチも取り入れています。

マザービデオ(DVD)一卷を防大へ寄贈すると共に、醸金者への記念品及び地連広報用等として約八千本のVHSビデオを作成しました。ビデオの制作は、各自衛隊関連のビデオ制作協力に実績のある「あだちビデオ制作室」に委託すると共に、シナリオ作成については六期生の桑原泰彦委員にお願いし、写真・映像資料等の提供や編集支援について陸上自衛隊OB久保田博幸氏の絶大な協力をいただきました。

収録時間は、約五十分で、創立五十周年記念行事や式典の模様も取り込みました。完成は平成十四年十二月となりました。同窓会記念行事においては、ビデオ未完成の段階のため、贈呈目録及びシナリオ台本を同窓会長から防大校長にお渡しすると共に、ビデオの縮小版(約十五分もの)を参加された皆様に紹介させていただきます。

因みに、タイトルの「任重く道遠し」は二期生卒業式において小泉信三先生が卒業生に対して期待を込めて論された言葉です。それは「任重く道遠し。私は、諸君が十分の用意を持っていることを信じます。諸君が常に心に世界の平和と国民に対する奉仕を忘れず、いよいよ心身を鍛練して、よく任務に堪える人となることを期待します。」という言葉の中から

ら引用させていただきました。なお、作成した本ビデオは、非売品ですが、若干の予備もありますので、醸金者以外で希望される卒業生に別途実費頒布も予定しています。(細部については、次章の最後に掲載しています。)

(小泉 進委員)



▲記念ビデオ

②ブックレット(防大五十年小史)

防大は、創立五十周年を記念する「防大五十年史」を作成するに際し、その要約版としての「小史」を同窓会で作成し、欲しいとの要望が出されました。

小史は部外からの来校者に防大を正しく理解してもらうために配布するものであり、一時は、外国人の来校者のための英語版作成も検討致しましたが、最終的には五十周年記念式典への来賓等に配布する「記念ブックレット」を作成することに落ち着きました。

その編集は防大が行い、出版を同窓会が担当することとし、事業委員会としては、その所要数(二千部)を出版することといたしました。その後、防大から教育の一環として、学生・職員にも配布して防大の歴史を理解させたいので五千部に増刷して欲しいとの要望があり、事業委員会として検討の結果、予備費から経費を追加し、同窓会用百部を含み五千部

部を出版して、防大の要望を満たすことに致しました。

ブックレットは「防衛大学校五十年のあゆみ」と題し、予定通り刊行し、記念式典において来校者に配布され、好評を博しました。

(福地 建夫委員)

③モニュメントの絵葉書セット及びパンフレットの作成

○モニュメントの絵葉書セット

記念事業に対する醸金者への記念品として絵葉書セット八千部を作成して記念ビデオと共に送付することにしました。絵葉書セットは、ステンドグラス、彫刻像、中央広場及び防大全景の四枚の写真で構成しております。

○パンフレット

モニュメント(ステンドグラス及び彫刻像)の写真入りパンフレットを同窓会名で作成し、三千部防大に寄贈しました。このパンフレットは五十周年記念式典招待者及び在校生に配布されました。

また、追加処置として千二百部を作成し、約千部を同窓会五十周年行事に参加した卒業生に配布するとともに、モニュメント制作者の平松、高橋両先生に各百部ずつを贈呈いたしました。

(村岡 亮道委員)

(六)醸金者への記念品の発送

①同窓会記念事業に賛同され募金に協力していただいた七千七百有余名の醸金者に対し、小記念品として「記念ビデオ」と「モニュメントの絵葉書セット」の二点を送付する準備をしています。

②発送の要領

・発送作業は、名簿の整理・確認を委員会で実施し、発送業務は業者に委託することにいたします。

・同窓生(OB)会員の皆様に対しては、各個人宛荷姿により自宅に送付します。

・現役の会員の皆様に対しては、各駐屯地・基地ごと集約した形で送付します。この際、梱包は、個人宛の荷姿を各部隊ごと小梱包し、更に駐屯地・基地ごと大梱包し、それぞれに名簿を添えて送付します。

・タイ、シンガポールの醸金者に対しては両国の大使館を通じて送付する予定です。

・名簿は平成十四年十二月末現在を平成十五年一月中旬までに掌握・最新化し、記念品が作成され次第同二月初旬頃から発送する予定です。

③再発送の処置

・万一、宛先不明等で返送される記念品につきましても、速やかに住所を再確認して、二次発送を行います。

・再発送は二次までとさせていただきます。不明及び残余の記念品は同窓会本部へ申し送ります。

(内村 彰和委員)

(七)MCI事業提案書の作成と同窓会への提案

防大の創立五十周年記念事業を記念してステンドグラスやモニュメント等を残すことその他に、これを機会に新しくスタートするような事業は考えられないものだろうかとの提案が、記念事業委員会の席上でありました。他の事業が記念事業

の実施とともに終わるのに反し、この提案はそこから始まる事業であり「記念植樹」の一つであるとも言えます。このような提案の中の一つが本構想で、その主旨は「全国に散らばっている同窓会会員の軍事に関する識見を集集して、国家・社会に対し軍事的考慮の重要性を正しく発信するメカニズムを構築する」、また「それには事務所や多大な設備投資などを必要とせず、同窓会の限られた資金で設置・運用できるようなインターネットを利用したシステムではどうか」というものでした。

記念事業委員会は、便宜上この提案を「MCI (Military Cyber Institute)」と仮に名付け、同窓会が行う中・長期的活動の一部と位置付けて、記念事業委員会として「提案書」を作成して同窓会に答申することとしました。記念事業委員会は、そのための経費として記念事業醸金のうちから平成十四年度に五〇〇万円を充当し、「MCI提案書作成のためのプロジェクト・チーム(MCI検討チーム)」を編成しました。MCI検討チームは、同窓会本部の中に連絡用のパソコン一式を設置するとともに、この構想を実現するためにはどのような事業モデルの選択肢があるかを検討するため、同窓会員が経営する企業に研究を委託し、その研究成果に基づいて「提案書(案)」を作成しました。

記念事業委員会は、案に示された幾つかの選択肢を、同窓会の一事業として実現可能なものかどうかという観点から吟味し、その検討結果を「防衛大学校同窓会・防大創立五十周年記念事業委員会、

MCI事業提案書」に纏め、同窓会本部に答申しました。提案書の内容は、MCI構想の趣旨・原則・範囲等のいわば構想の「理念」、構想実現のための事業モデルに関する複数の「選択肢」、各モデル案の「経費見積」等でありました。(参照「MCI事業提案書・防大同窓会への提案」抜粋)

MCI構想のキーワードは「結集」・「軍事」・「発信」の三つです。すなわち、全国に散らばっている同窓会員の識見を「結集すること、安全保障や防衛といった概念だけではなく「軍事」という側面も考慮に入れること、それを同窓会の事業の一つとして国家・社会に「発信する」ということです。同窓会が提案書に示された構想を、実現可能な形として発足させることになれば、同窓会が親睦団体の域を越えて、国の政策決定や社会システム作りに「発信力」を持つことができるようになり、その意義は極めて大きいものであると考えられます。

(志方 俊文副委員長)

(八)顕彰室・資料館の整備支援

防大の創立五十周年事業の一つとして、防大の歴史や学生生活を内外に伝えるための「資料館」の整備が計画されました。そのねらいとするところは、「学校の歴史の経緯、教育研究成果、校友会活動を含む先輩・学生の活動成果、卒業生の活躍の状況等を学生・職員に認識させ、誇りを持たせる訓育環境を設置するとともに、見学者に対して、一目で防大の沿革や現状等が理解できるようにし、一般社会に防大への正しい理解と関心を

促す」ことにあります。

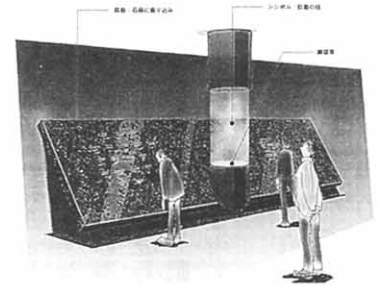
防大の創立五十周年事業の施設計画による資料館の整備は、平成十四年度に情報図書館を新設した後、移転した現在の図書館を資料館として改修し、十六年度開館を目標に進められています。殉職学生・卒業生を顕彰する顕彰室は資料館の中に整備されます。

資料館の整備、特に顕彰室及び卒業生の活躍をテーマとする展示スペースの整備や、防大の沿革に関する資料の収集には、同窓会（卒業生）の支援が不可欠であり、記念事業委員会としても、五十周年記念事業の重要項目として「顕彰室・資料館の整備支援」を取り上げることになりました。

資料館整備の現状は、展示については基本設計を終え実施設計の詰めの段階に入っており、また改修工事についても、基本設計を終了し、十五年度に着工する改修工事の予算措置もなされ順調に進捗しております。

同窓会の支援事項は、今日まで学校側と調整しつつ、設計に当たったの助言・要望を伝えるとともに、必要な資料収集の支援を行って参りましたが、今後具体的な形として表れる事業としては、顕彰室の中心となる殉職者の刻銘板を寄贈・設置すること、資料館の中に、卒業生コーナーを整備することであり、卒業生コーナーを整備するための経費はその所要額を控置しております。

顕彰室は、顕彰ミニュメント（シンボルと殉職者銘板）と顕彰データ装置からなり、殉職者を哀惜し学生の倫理観や使命感を深めさせることができるような荘厳な空間デザインを意図しています。（イメージ図参照）



▲「顕彰室イメージ図」

卒業生コーナーは、顕彰室に隣接して設けられますが、最大二十五名程度の人達が、寛いだり、ミーティングができるよう調度品等を選定したいと考えております。資料館の整備は、他の記念事業より二年遅れ、開館も平成十六年十月頃となるため、記念事業委員会が解散した後は、同窓会本部が事業を引継ぐこととなります。

同窓会本部としては、資料館が開館する十六年度の顕彰碑献花式には、ご遺族を初め各期の代表者をお招きし、新装なつた顕彰室の披露を行う予定にしております。

（福地 建夫委員）

四 その他

①記念事業関連各種贈呈等

- ①防大への寄贈等
 - ・ ステンドグラス原画及びステンドグラス並びに主要な制作過程展示品
 - ・ 彫刻像及び彫刻像レプリカ
 - ・ 記念マーチ楽譜とCD八十枚
 - ・ 記念ビデオ一本と台本
 - ・ ブックレット 五千部
 - ・ パンフレット 三千部
 - ・ 醜金者芳名録 二部

④各種感謝状の贈呈

- ・ ステンドグラス原画の版画 三部
- ・ 記念講演録 二千部
- ②醜金者への贈呈
 - ・ 記念ビデオ及び絵葉書セット 七千七百二十六人分
 - ③各幕等への贈呈
 - ・ 平松画伯の原画「若人の城」の版画（陸・四十二部、海・二十二部、空・二十部、その他）
 - ・ 記念講演録 百六十部
 - ・ 記念ビデオ 地方連絡部に百本
 - ・ 記念マーチCD二十三枚と音楽隊用楽譜

感謝状贈呈者	感謝状受賞者	贈呈時期	贈呈理由
防大校長	平松礼二氏	平成14年2月28日	ステンドグラス原画の寄贈
	高橋洋氏	平成14年10月8日	彫刻像の制作
	記念マーチ作曲者八名	平成14年11月16日	楽譜とCDの寄贈
	同窓会長	同右	防大への各種寄贈
同窓会長	平松礼二氏	同右	ステンドグラス原画及び版画制作・寄贈
	デザインシステム社	同右	ステンドグラスの制作
	現代壁画研究所	同右	同右
	高橋洋氏	同右	彫刻像制作及びレプリカの寄贈
	久保田博幸氏	平成14年12月25日	映像資料の提供及び編集支援

③記念ビデオ実費頒布のご案内

醜金者の皆様には、記念品として後刻贈呈します。醜金者以外の卒業生で希望される方には、実費頒布いたします。数に限りがございますので、左記によりお申し込み下さい。

記

- お届け先・・・住所・氏名・電話番号・勤務先（現役の方）
- 申し込み宛先・・・〒一六〇一〇〇〇三 東京都新宿区木塩町二一 十一一三一二 共済一 号館
- 申し込み期限・・・平成十五年三月末
- ビデオお届け予定・・・平成十五年四月以降
- 代金等・・・千五百円程度（送料込み）、支払方法はお届け時、代金引換払い

防大同窓会本部

①平成十四年二月二十八日、防大で実施

MCI事業提案書(防大同窓会への提案) 抜すい

平成十四年十月二十三日

まえがき

● これまでの経緯

平成六年、当時の中尾時久(二期・陸)同窓会会長の発議によって、同窓会の活性化を目的とした「防衛大学校同窓会・将来構想委員会(将来構想委)」が発足した。同窓生の殆どが現役の自衛官であった時期の同窓会活動は、どうしても式典への参加や事務連絡に終始する傾向にあった。自衛隊を退官した同窓生が増えるにつれて、同窓会活動は相互の親睦だけではなく、何らかの「構想(方向性)」を持った活動も行おうべき時期に至ったのではないかとの認識が同窓生の中に生まれた。

「将来構想委」は、志摩篤(二期・陸)、小西岑生(一期・海)、阿部博男(一期・空)会員を中核に主としてOBとなつた同窓生が、現役同窓生の支援を受けながら、約二年間にわたって、会則改正、事業構想、財政構想等の分野について活発な審議を行い、その成果を平成七年十一月の総会で報告した。この活動によって、会則が改正されて、同窓会本部を小原台から東京都内に移すなど、諸活動の基盤を確立することができた。

平成七年の総会においては、将来構想委の答申の提案を受けてその内容を実行に移すための委員会を設けることが決定

された。これに基づき、当時の小西岑生同窓会会長のもとに、阿部博男会員を委員長とする「事業推進委員会」が発足した。この推進委は同窓会の今後の活動の基盤を決定するため、約一年間にわたって真摯な活動を行った。その成果として、「支部等の育成」・「ホームカミングデイの実施」・「学生の悩み相談」・「趣味の分野の期生間交流」等を実行しつつ、中・長期的活動として「同窓会ネットワークの構築」、「同窓生の各種能力の活用」、「防衛問題への寄与」等を中心とした活動を推進することが決定された。

平成七年の総会においては、事業推進委員会とともに「防大創立50周年記念事業委員会(以下、記念事業委)」(佐久間一(一期・海)委員長)の設置が決定された。記念事業委は、防大創立50周年としてふさわしいもので後世に残す価値あるものを事業の重点とし、21世紀に向けての飛躍を基本理念として事業構想を具体化し、記念講堂ステンドグラス及び中央広場モニュメントの寄贈、顕彰室・資料館の整備支援、記念行事(記念講演会、祝賀会等)の実施、記念マーチや記念ビデオの作成、醸金者名簿の作成等の事業を計画してきた。

これらの記念事業の内容を詰める段階で、「その他の活動」として「記念植樹」のように、この機会に種を蒔き、将来こ

れを育ててゆくような活動を提案する考えが平成十二年夏から浮上した。それは「全国に散らばっている同窓生の軍事に關する識見を結集して、国家・社会に對し軍事的考慮の重要性を正しく発信するメカニズムを構築してはどうか」、また「それには事務所や多大な設備投資などが必要とせず、同窓会の限られた資金で作れるインターネットを利用したシステムではどうか」というものであった。記念事業委は、便宜上この提案を「MCI (Military Cyber Institute)」と名付け、同窓会が行う中・長期的活動の一部と位置付けて、構想を具体化するための事業を50周年記念事業の一環として平成十三年度の代議員会(平成十三年十二月七日)に提案した。代議員会においては、記念事業委がMCI提案書を作成して同窓会に提案すること、並びにそのため経費として記念事業醸金のうちから平成十四年度に五〇〇万円を充当することが承認された。

記念事業委は、「MCI提案書作成のためのプロジェクト・チーム(MCI検討チーム)」を編成し、MCI検討チームは、同窓会本部の中に連絡用のパソコン一式を設置するとともに、この構想を実現するためにはどのような事業モデルの選択肢があるかを検討するため、同窓会員が経営する企業に研究を委託し、その研究成果を平成十四年八月末に「MCI事業モデル提案書」(以下、「モデル提案書」と呼称する)として受領した。

● 本提案書の主旨

記念事業委は、MCI検討チームから

報告された「四つの事業モデル」(内容については、「MCI事業モデルの提案書」参照)を平成十四年九月二十五日の委員会で審議し、同窓生の理解を得られ、かつ同窓会が実行に移せるような「一つの現実的な構想案」に纏めることを決定した。本提案書は、記念事業委として、正式に同窓会本部に提出する「防衛大学校同窓会・防大創立50周年記念事業委員会、MCI事業提案書」である。提案書は、第1章にMCI構想の趣旨・原則・活動等のいわば構想の理念、第2章に構想実現のために研究を委託した成果である複数の事業モデル案の内容、第3章に各モデル案の特徴と評価、第4章に各モデル案の評価を踏まえて記念事業委として同窓会に提案する事業の提案内容を記載している。

記念事業委としては、同窓会が、本提案書に示す「事業化構想」を活かして、平成十五年度に独自のホーム・ページを開設する活動を実行に移すことを採択し、「MCI準備委員会」を設置して、積極的に取り組むことを期待している。さらに、平成十六年度以降の活動については、同窓会が年度ごとに活動実績と情勢を勘案して判断すべきことであるが、本提案書に示した中期的な構想を実現することによって、同窓会が親睦団体の域を越えて、目的の一つでありながら今まで具体化することの出来なかつた国家・社会的な活動、すなわち国の政策決定や社会システム作りにも軍事的側面を加えることの重要性を「発信する」価値は、極めて大きいものと確信する。

平成六年に一期生が中心となって挑戦

した「将来構想委員会」の構想が策定されてから8年後、また平成七年の「事業推進委員会」による再挑戦から7年後の今日、同窓会が新しい世代に移行する重要な節目の時期に、一期生のリーダーシップのもとに、MCI事業が「具体的な同窓会事業活動案」として、同窓生の前で次の世代に「提示され」、「採択され」、「手渡される」意義は大きい。防衛大学校が創設され半世紀を経過した今、その50周年記念事業の一環として、MCI事業構想をスタートさせることは千載一遇の機会である。同窓生各位の御賛同を得られることを強く期待してやまない。

第1章 MCI事業の構想

1、MCI事業の趣旨

わが国の国家運営では、何か物事を決めるに際して、政治・経済・外交・安全保障（以下、本文では軍事と表現する）の四本柱のうち、軍事的視点が抜けていることが多い。これには幾つかの原因があるが、その一つは、軍事に関する知識や体験が整理総合されていないため、軍事的視点からの考察をすることが難しいことである。

政治、経済、外交についての政策判断や学術研究をする際に、参考にできる「軍事的識見が整理総合されているセンサー」が無いために、どうしても軍事的な視点が疎かになるのである。現在、意ある者が中心となって運営している軍事・防衛の課題を中心にした研究所も幾つかあって心強い限りであるが、それぞれが研究の基礎となる識見を整理総合す

る段階で時間と労力を必要とすることから、研究そのものに充当する時間や労力が不足する共通の問題に直面している。もし、このようなセンサーが設立されれば、これらの各研究所も資料を効率的に整えることが可能となり、一挙に研究効率を上げることが可能となる。

他方、現在の政治・外交・経済界では、それを良いことに、意識的に軍事的な思考を排除する傾向さえある。反対に、これに気がついていて政治家、財界人、外交官は多いのだが、自分の力で軍事・防衛に関する識見を整理統合する余裕がないのが現状である。

ここに提案する「MCI (Military Cyber Institute) 構想」は、このようなわが国の現状を改善するために、防大同窓生の力を結集して国家・社会のための活動を展開しようとするものである。名称については未だ仮称であって、同窓会が本構想を実行に移す場合には、さらに一般に理解し易い名前（例えば、防衛情報機構、DIO）等に変えるべきものであるが、ここでは便宜上「MCI」と呼ぶことにする。

2、MCI事業実現のための課題と対策

軍事・防衛に関する識見を整理・総合できるセンサー設立の趣旨に賛同が得られたとしても、現実的にこれを実現するためには、二つの大きい問題を克服しなければならぬ。第一は、わが国でも最高レベルの軍事知識や体験を持った者が識見を結集することである。第二は、実行のための組織と当面（おそらく二一二年）の資金を準備することである。ある程度

の年月継続した実績がないと、官公庁や産業界や研究所等から「運転資金」に見合うだけの「資料提供料（委託料）」を得ることは難しいからである。

まず、第一の問題は、防大同窓会会員の知識を結集して設立するのが一番早道である。これに勝る母胎は日本には無いはずであり、防大同窓生の力を結集してもそれが出来ないとなれば、日本にそれを出来る集団はないからである。もちろん、発足後は、防大同窓生以外の者の参入も受け入れる必要がある。

現在、軍事の各部門で貴重な識見を身につけた同窓生が日本全国に散在して、それぞれに活躍しているが、それらの識見は「結集され」、「総合化され」てはいない。各同窓生が自分のカバールできる識見を予め登録してセンサーに集め、センサーの専従員がこれを組織化して各分野からの資料要求に応えられる態勢をとることがMCIの具体的なイメージである。これからますます発達するコンピュータ・ネットワーク技術を活用して迅速に情報を交換し、各種の情報を集積・分析・加工して付加価値を加えること等によって、MCIは軍事に関する高いレベルの識見を結集し、国の内外に安全保障関連の役に立つ情報や仕事を提供し、同窓会はこれを通じて内外に大きい「発信力」を持つことができるようになるであろう。

第二の問題は、MCIは営利を目的としたものではないが、最低限、「運転に必要な収入」を得る必要がある。同窓会からの資金だけを当てにするようでは長続きしないし、同窓生の賛同や協力は得

られない。しかしながら、発足当時からそれに見合う収入源を他から得ることは難しい。各界に呼びかけて設立と運転のための資金提供を受けるのも一案ではあるが、これは現今の情勢では難しく、また運営の独立性を確保するためにも、できれば避けた方が賢明である。

同窓会がMCI構想を採択するか、どのような位置づけにするかは、これから同窓会が決める問題であるが、営利を目的としないことや、特定の業界や官公庁との結びつきを持たせないことを考えると、最低限、運転資金程度の収入を得ることが出来る「何らかの組織」としなればならない。組織形態としては、二つの選択肢がある。

第一は、「任意団体」のまま同窓会の下部組織として活動規模を少しだけ拡大する選択肢である。本来、会員相互の親睦を目的とする「任意団体」である同窓会は、もともと財産的権利能力がなく、それを行って収入を得る活動（に限界があり、大々的な活動はできない。しかしながら、防衛大学校同窓会の「下部組織」として、常に完全な監督下におくことができるメリットはある。

第二は、防大同窓会の外に出して、防大同窓会が外部より何らかの形で関与する組織形態とする選択肢である。「何らかの組織」としては、次のようなものが考えられる。

●「特定非営利活動団体（NPO）」とする。（同窓会が人材を送り込むことによって関与することができる）

●「財団法人」とする。(この場合は、資金供給源の影響を強く受ける)

●「既存の財団法人の下部組織」とする。(自主性を失う可能性が大きい)

●「株式会社」とする。(営利追求が第一義となり、設立の目的に反する)

MCIを「特定非営利活動団体(NPO)」として設立することは、それほど困難ではない。MCIは利潤追求を目的としておらず、12分野にわたる特定非営利活動の幾つか活動に該当すると考えられ、また対象となる団体が満たすべき条件の全てを満たしているからである。しかしながら、構成員の資格について不当な条件を設けることができないから、いわゆる「好ましくない者」を排除することが難しいことが一つの難点である。

以上述べたとおり、MCI事業をどのような組織形態で行うかは大きな課題であり、MCIの目的である「防大同窓会員等の識見を結集して国家・社会に対し軍事的考慮の重要性を正しく発信すること」を表現するためには、「何らかの組織」を設立することが必要である。その具体的な方策については、第4章において提案する。

3、MCI運営の原則

MCIの設立は、情況不明の中で「0」から「1」を創出するものであるから、柔軟な対応を必要とするが、それだけに次の七つの原則を堅持する必要がある。

●第1原則(目的の原則)

MCIは、防大同窓会員等の識見を「結集」して、国家・社会に対し軍事的考慮の重要性を正しく「発信」する

ことを目的とするもので、全ての活動は、この目的に沿うものでなければならぬ。政治的活動、利潤の追求、排他的行動(防大同窓会員以外の者の排除)等は決して行わない。

●第2原則(自主活動の原則)

「何らかの組織」としての正式発足までは、原則として「自主活動」により体制を整備する。すなわち収入は期待しない。「防大同窓会員の社会的貢献活動」として一定の期間(当初の段階)は、同窓会の資産で運営する。特定の政党・集団・企業等からの資金を投入すれば設立は容易であるが、運営の自主性を失う可能性が大きいからである。

●第3原則(負担軽減努力の原則)

「何らかの組織」として発足した以後は、「申し込み」があれば「受託作業」を行い、同窓会の負担を「軽減」する。ただし、この努力はあくまで二次的なものとする。(親方、日の丸的な体質は排除する)

●第4原則(チェック機能担保の原則)

毎年度のMCI活動内容については、同窓会の意志に基づいて決定する。すなわち、前年度の代議員会にそれまでの活動結果を「報告」するとともに、次の段階に進むか否かの「決定を仰ぐ」ことよって、各段階で代議員会のチェックを受けることとする。

●第5原則(ハイエスト・クオリティ維持の原則)

MCIは、コンテンツの軍事的識見の質に関する限り、わが国で最高のレベルを維持するよう努める。防大同窓

生の軍事的識見を結集して出来あがったMCIより高い質のサイトがわが国で出来ることがあれば、それは防大教育の鼎の軽重が問われるからである。

●第6原則(公開と秘密保全の原則)

MCIは、あくまで防大同窓会員の財産であり、同窓会員は全ての情報に自由にアクセス(ただし、アクセスのために必要なIDを持つための費用等は会員の負担となる)できる。ただし「限られた情報」すなわち受託作業で委託者が「秘密」の保全を要求した情報、個人のプライバシーに関する情報、付加価値を上げたことにより「秘扱い」にすべきであると同窓会が判断した情報等については「秘密保全」を厳守する。

●第7原則(多数参加・相互依存の原則)

MCIは、ハイエスト・クオリティを維持するといっても、貢献意識や情報処理能力の高い一部の同窓会員の独占物になってはならない。可能な限り、多数の同窓会員等が参画するように常に努力しなければならない。また、現在すでに活動中の「自衛隊に関係の深いシンクタンク(例えば、日本戦略研究フォーラム、ディフェンス・リサーチ・センター、平和安全保障研究所、森野軍事研究所等)の研究活動や、自治体の防災訓練(CPX)支援会社(例えば、SBS社)の営業活動をMCIのデータベースにより支援し、相互依存の体制を確立しつつ部外力の活用、ベンチャー企業の育成に留意する。

4、MCI事業の活動(内容区分)

MCI事業の活動は、内容によって二つに区分する。すなわち、同窓会員自身のために行うサービスである「自主活動」と、他の組織や個人から委託された活動を有料で行うサービスである「受託活動」である。任意団体である同窓会が、同窓会員のため「自主活動」を行うことは当然であるが、運転資金を確保するため有料で行う「受託活動」は原則として不可能である。したがって、当初は「自主活動」を行い、その実績を見て同窓会が「何らかの組織」を作る段階においては、その組織の性格によっては「受託活動」が可能となる。以下、それぞれの活動の内容について説明する。

(一)自主活動

●情報システムの構築・データベースの構築(同窓会員、軍事的識見、軍事情報、検索制御及び利用者登録データファイル)、ネットワークシステムの構築

●ホームページサービス・MCIの紹介、軍事トピックス、各データベースへのリンク、掲示板へのリンク、各種検索リンク、各種登録

●同窓会名簿閲覧サービス・同窓会員名簿の更新・維持・閲覧のサービス

●掲示板サービス・軍事イベント等の情報照会、チャット窓口、その他コンシエルジュ

●軍事的知見保有者の紹介・知見保有者の自動検索(自動検索)、能力者間のメーリングリスト作成(MCI仲介)

●軍事関連情報及び資料の紹介・軍事情

報の閲覧、ダウンロード（自動検索）、情報源の紹介（MCI仲介）

● パネルディスカッション、講演会の開催
● 防衛意識の啓蒙、感化

● ボランティア活動支援
● 各種ボランティア活動の組織づくり支援

(二) 受託活動
● 軍事専門家の派遣
● コメンテーター、防衛庁事務手続き代行

● 軍事関連情報及び資料の紹介
● 閲覧、ダウンロード自由に（自動検索）、情報源を紹介（MCI仲介）

● スピード突貫翻訳
● 豊富な要員により短時間に大量の翻訳（特にロシア語、中国語）

● 防衛関連資料の電子化
● 戦史、防衛庁資料等、特に専門家でない出来ない分野

● 教育
● 管理者或いは子供教育、徳操教育

● 防衛諸活動支援
● 軍事関連資料の収集、軍事関連資料の作成、データ加工、防衛庁提出物の事前審査、各種分析、シミュレーション、その他

受託活動を行うに際しては、受託の契約から業務処理の統制、成果物の提供にいたるまで一切の責任はMCIが負う。また、予想される受託先としては、「既存の研究機関」「防衛産業」「マスメディア」「防衛庁等官庁」「地方公共団体」「その他」が考えられる。

5、活動の段階的区分（フェーズ）

MCI構想は、本来、中・長期的なものであるから、「小さく産んで、大きく育てる」を原則とし、活動は次のような

五つのフェーズに区分して段階的に充実し発展させる。

● フェーズ1（防大ホームページ開設段階）
（一）防大同窓会ホームページを開設する。
（二）データベースの構築を開始する。
（三）ホームページサービスを開始する。

（四）同窓会名簿閲覧サービスを開始する。
（五）掲示板サービスを開始する。

● フェーズ2（情報システム構築段階）
（一）情報システムを構築する。
（二）献志願者の登録を開始し、登録者の取り扱う部門を決定する。当初の貢献志願者数は、同窓生（現役の同窓生を除く）約八、〇〇〇名の1%（約一〇〇人）と見積もってスタートする。
（三）軍事的知見保有者の紹介を開始する。
（四）軍事関連情報及び資料の紹介を開始する。
（五）コンテンツの充実を図る。（これは、どのフェーズでも常に行う）

● フェーズ3（タスク・フォース編成段階）
（一）分野別タスク・フォースを編成する。例えば
— ロシア語の軍事資料等のスピード翻訳タスク・フォース
— 中国語の軍事資料等のスピード翻

訳タスク・フォース
— 地方自治体の防災CPX統裁支援タスク・フォース
— 戦史（旧軍OB資料等を含む）のデジタル化タスク・フォース
— 防衛諸活動の支援（資料収集・データ加工等）タスク・フォース
（二）タスク・フォースの稼働のための準備作業を実施する。

● フェーズ4（デモンストレーション段階）
（一）MCI活動（タスク・フォース活動を含む）を部内外に展示する。
（二）同窓会ホームページの一部としての「防大同窓会MCIサイト」を完成させる。
（三）新組織発足の準備を実施する。

● フェーズ5（新組織発足段階）
（一）新組織（何らかの組織）を発足させる。この時点で組織の正式名称を決定する。
（二）全ての自主活動を実施する。
（三）出来ることから逐次に受託活動を開始する。
（四）軍事専門家の派遣、スピード突貫翻訳、防衛関連資料の電子化、教育、防衛諸活動支援

第2章 MCI事業モデルの選択
肢（委託研究結果）（欠）

第3章 MCI事業モデル案の比較検討（欠）

第4章 MCI事業の提案内容
1、方針
（一）MCIの目的
防大同窓会等々の識見を「結集」して、国家・社会に対し軍事的考慮の重要性を正しく「発信」することを目的とする。
（二）名称
当面は「MCI (Military Cyber Institute)」と仮称する。
新組織（何らかの組織）発足の段階で、同窓会が「正式名称」を決定する。一例として、「防衛大学校同窓会・軍事情報機構」などが考えられる。
（三）活動の着実な拡大
第1章第5項に示した活動の段階的区分（フェーズ）に従って、着実な活動の拡大を図る。
この間、最初の同窓会ホームページ開設から新組織による全面的な活動実現までの各段階において、客観的な実績評価と的確な将来予測を行い、MCIの目的実現を期する。
（四）システムの構築
システムの構築に当たっては、予測される将来の技術進展に依りうる機能を備えるよう配慮することとし、特にセキュリティについては当初から十分な機能を確保する。これによって、資金の逐次投入による非効率性を排除する。
（五）運営の原則

第1章第3項に示したMCI運営の七原則を堅持する。

2、組織

(一)組織形態

当初は、防衛大学校同窓会の「下部組織」として「MCI準備委員会」を設置する。受託活動を開始する段階において、新組織（第1章第2項に示した「何らかの組織」）を発足させ、MCIの目的に沿った活動を実施する。

(二)新組織の選択肢

NPOの発足は、特定非営利活動促進法（以下、NPO法）に拠る必要がある。NPO法第2条別表に、次の12分野のいずれかの活動に該当することが必要となっている。

- ① 保険、医療または福祉の増進を図る活動
- ② 社会教育の推進を図る活動
- ③ まちづくりの推進を図る活動
- ④ 文化、芸術またはスポーツの振興を図る活動
- ⑤ 環境の保全を図る活動
- ⑥ 災害救援活動
- ⑦ 地域安全活動
- ⑧ 人権の擁護または平和の推進を図る活動
- ⑨ 国際協力の活動
- ⑩ 男女共同参画社会の形成の促進を図る活動
- ⑪ 子供の健康育成を図る活動
- ⑫ 前各号に掲げる活動を行う団体の運営又は活動に関する連絡、助言または援助の活動

本年の国会でNPO法の一部が改正され、次の5分野が加えられる予定である。

- ⑬ 情報化社会の発展を図る活動
- ⑭ 科学技術および学術の推進を図る活動
- ⑮ 経済活動の活性化を図る活動
- ⑯ 職業能力の開発および雇用機会の創出を図る活動
- ⑰ 消費者の保護を図る活動

MCIは、⑥⑦⑨⑬⑭⑯の分野の活動として申請すれば、認可される条件を整えている。この他、活動が全国的になることから、所轄庁は内閣府（旧総理府）となること、構成員の数が10人を超えること、定款を作ること、役員として理事3人以上、監事1名を置くこと、次のような手順を踏んで認可を受けることなど多くの手続きをしなければならないが、MCIは、全ての条件を満たすもので、NPO活動として位置付けるのが有力な一案である。

- 設立認証申請のための事前準備
- 設立発起人会
- 設立総会
- 設立認証申請書類の作成
- 設立認証の申請
- 縦覧・審査
- 設立認証の決定
- 設立登記申請のための事前準備
- 設立登記申請書類の作成
- 設立登記の申請
- NPO法人の成立
- 各種届出の実施
- 活動の開始

(三)MCI準備委員会の組織案
①委員会…委員長以下 約10名（無報酬とする）

職名	人数	任務・役割
委員長	1	委員会を代表する
監事	1	業務全般、とくに経理の適切な実施を監督する
企画総務部	2	組織の運営および渉外事項を担当する
経理部	1	経理の責任者
データ管理部	3	ハード・ソフト・セキュリティを管理する
業務管理部	1	自主活動および受託活動を管理する
業務部	1	タスクフォースを管理する
タスクフォース	15x 班の数=a	平成16年度は、5個班でスタート : 小計75名
合計	10 + a	当初は5個のタスクフォースで開始 : 合計85名

②タスク・フォース…部門別に各班 約10〜20名（平均15名）
（交通費・活動費の実費のみ支給）

3、事業実現のためのプログラム

(一)平成十五年度から十八年度にかけて、第1章第5項に示した活動の段階的区分（フェーズ）に従って、計画的に活動を進展させる。

(二)各年度の段階区分は次のとおりとし、

平成十四年度は、同窓会が平成15年度に「MCI準備委員会」を設置するまで、記念事業委の「MCI検討チーム」が継続してフェーズ1の準備を実施する。

(三)平成十五年度、同窓会が設けた「MCI準備委員会」がフェーズ1およびフェーズ2を実施する。

●平成十五年度…フェーズ1（防大ホームページ開設およびデータベース構築開始の段階）およびフェーズ2（情報システム構築および貢献志願者の登録段階）

●平成十六年度…フェーズ3（タスク・フォース編成と稼働準備の段階）

●平成十七年度…フェーズ4（デモンストレーション段階および新組織発足を準備する段階）

●平成十八年度…フェーズ5（新組織発足および一部の受託活動を開始する段階）

四各年度における事業活動については、別紙「年度別MCI事業活動」を参照

4、経費計画

(一)全般

①平成十五年度の事業（フェーズ1、フェーズ2）及びそのための準備作業の所要経費は、代議員会の承認を得た上で、50周年記念事業醸金の予算経費（一五〇〇万円）を充当する。

②平成十六年度から平成17年度までの間（フェーズ3、フェーズ4）の所

各年度の予算額及び収支バランス見積 (単位は万円)

	費目	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度
支 出	支出システム構築費	800	0	0	0	0
	システム維持費	30	60	60	60	60
	データ処理費	80	60	60	60	60
	事務所借上費	0	0	0	0	0
	MCI基幹要員数(人)	10	10	10	10	10
	人件費	100	100	100	100	100
	活動費	480	240	240	240	240
	タスクフォース要員数(人)	0	75	90	10+ (80)	10+ (140)
	タスクフォース交通費等	0	270	324	36+ (288)	36+ (504)
	タスクフォース準備活動費	0	60	406	0	0
	受託作業・必要経費	0	0	0	312	2,450
	予備費	10	10	10	4	0
計		1,500	800	1,200	1,100	3,450
収 入	本部運営訓練支援	0	0	0	0	2,500
	防衛関連研究支援	0	0	0	550	850
	戦史等の電子化	0	0	0	50	100
	スピード翻訳等、その他	0	0	0	0	0
	同窓会の支援(期待分)	1,500	800	1,200	500	0
計		1,500	800	1,200	1,100	3,450
収支		0	0	0	0	0

注1: タスクフォース要員数の欄に示した()内の数字は、受託作業の必要経費から交通費等を支出する人数の意味。
 注2: 平成18年度の受託作業の利益率は、コンピュータ上のものが多く、人件費を小さく見積もることができるので、288万円/600万円=48%とした。
 注3: 平成19年度の受託作業は、訓練支援が中心で、日当や消耗品費を必要とすることから、利益率は1,000万円/3,450万円=29%とした。
 注4: タスクフォース交通費等の欄の()内の数値は、当該の受託作業に従事する要員に支払われる金額、それ以外の数値は別の作業のために従事している要員の分である。

いま我が国は大きい歴史の転機に立っている。我が国が国家の四本の支柱である「政治」、「経済」、「外交」、「軍事」のうち、軍事的要素を考慮に入れず、長年にわたり経済的要素だけを考慮に入れて政治や外交を運営した「付け」が表面化してきたのである。「軍事」という言葉を意識的に避けて、「安全保障」、「防衛」、「危機管理」という用語で代用してきたが、それも限界に達したようである。

政治、経済、外交についての政策判断や学術研究をする際に、参考にできる「軍事的識見が整理総合されているセンター」がないために、どうしても軍事的な視点が疎かになるのである。他方、現在の政治・外交・経済界では、それを良いことに、軍事的な思考を排除する傾向さえある。これに気がついていて政治家、財界人、外交官、企業人は多いのだが、自分の力で軍事・防衛に関する識見を整理統合する余裕がないのが現状である。

防衛大学校創立50周年記念行事の一環として、多くの同窓生から寄せられた資金の一部を使い、「軍事的識見が整理総合されているセンター」、すなわち、ここに提案する「MCI (Military Cyber Institute)」を設立することは、形を変え

要経費は、代議員会の承認を得た上で、同窓会の資金を投入する。

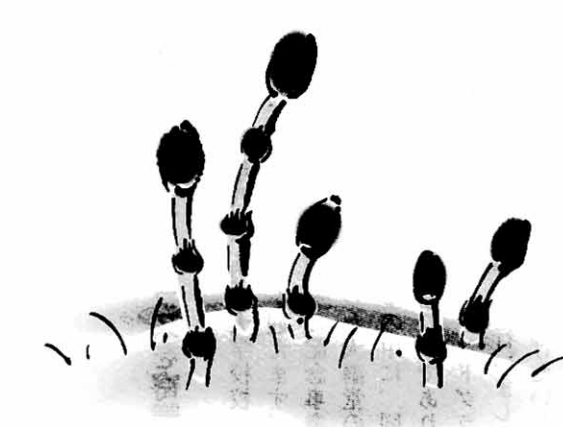
③平成十八年度(フェーズ5)は、新組織による受託活動の収益を期待するが、初年度の収益が運営経費を賄うまでに至らないことが予期されるため、代議員会の承認を得た上で、引き続き同窓会資金の投入を予定する。

④平成十九年度以降については、新組織による自立した運営経費の確保に期待する。

⑤平成十六年度から平成十八年度までの間に投入する同窓会資金の総額は、二五〇〇万円を予定する。この資金は、新組織による受託活動の収益が順調に得られるに至った段階で、同窓会へ還元することを基本とする。

政治、経済、外交についての政策判断や学術研究をする際に、参考にできる「軍事的識見が整理総合されているセンター」がないために、どうしても軍事的な視点が疎かになるのである。他方、現在の政治・外交・経済界では、それを良いことに、軍事的な思考を排除する傾向さえある。これに気がついていて政治家、財界人、外交官、企業人は多いのだが、自分の力で軍事・防衛に関する識見を整理統合する余裕がないのが現状である。

防衛大学校創立50周年記念行事の一環として、多くの同窓生から寄せられた資金の一部を使い、「軍事的識見が整理総合されているセンター」、すなわち、ここに提案する「MCI (Military Cyber Institute)」を設立することは、形を変え



た「記念植樹」でもある。いま、我々防大同窓生はMCIという小さい苗を荒野に植えようとするものである。これは、現状を嘆くのみでなく、目に見える形でそれを打開しようとする新たな挑戦であり、未知の世界に乗り出すためには勇気と決断が求められる。

記念事業委員会としては、同窓会が本提案書の趣旨を深く理解して頂き、MCIの実現のための決定をされることを期待している。また、同窓会の呼びかけに対し、一人でも多くの同窓生がこの植樹計画に参加してもらいたいと考えている。

最後に、本提案書を作成するに当たり、記念事業委員会の各委員をはじめ、自発的にMCI検討チームに参加して頂いた多くの同窓生の御協力に深く感謝いたします。

防衛大学校長「西原 正教授」紹介

防衛大学校長の西原先生をご紹介いたします。先生は昭和十二年、大阪の生まれで、三十七年に京都大学の法学部を卒業しております。そしてその後米国のミシガン大学に留学され、約六年間過ごされました。そしてその後、そこからインドネシアに二年ほど、現地にありました京都大学東南アジア研究センターに所属して、インドネシア政治や対外関係の勉強をされました。昭和四十八年に帰国され、京都産業大学で助教授として勤務され、五十二年に防衛大学校の教授になられました。四十八年と五十二年の間に米国のサウスカロライナ大学の客員教授になられたり、あるいは京都産業大学の教授になられたりされました。五十二年から現在まで、ずっと防衛大学校校に關連する——關連するといったら語弊がありますけれども——お勤めになりました。五十四年にはオーストラリアの国立大学国際関係学部の客員研究員として

防大に奉職して二十五年

防大教授 西原 正

本日はお招きいただきましてありがとうございます。大変光栄に存じます。防衛大学校の同窓生の前で、こうやって防衛大学校のお話をするのは、私にとつては義務でございますけれども、皆様方の何人かは「なんだ。自分の学校のこ

キャンベラに出張されたり、あるいは五十六年には米国ロックフェラー財団国際關係部門客員研究員としてニューヨークに行かれたりということもされております。そのほかに平成五年には、防衛研究所の第一研究部長も、防衛大学校の教授を兼ねながら務められました。平成九年四月に社会科学教室の主任になられて、一昨年、平成十二年四月、防衛大学校校長になられました。この間、日本國際政治学会会員、あるいはアジア經濟学会会員、財団法人平和・安全保障研究所研究委員、國際戰略研究所理事等、その他もろもろの役員についておられます。今日は特別にお願いをいたしまして、お忙しい中、「前進する防衛大学校校、その理念と成果」という題で、今から40分から50分、お話しできるようにお願いしております。副題は「防大に奉職して二十五年」となっております。ご静聴をお願いいたします。では、よろしくお願いいたします。

「同窓会会長による講師紹介から」

とを、ほかの大学を卒業したやつが話すのか」と思われるかもしれません。しかし私自身、防衛大学校にこれで25年間勤めたことになりました。一九七七年、昭和五十二年に参りまして、二十二期の学生からお付き合いがございます。そういう

面では防大の歴史の約半分くらいのところを防大の中に経験したことになります。それに比べれば、皆様方はたった四年しか防大にいらつしやらなかったんじゃないですか。

「私は二十五年もいます」と、こういう言い方もできるわけでございます。防大に長く居たこともありまして、私は防大の学生歌は何百回と歌っています。私の母校の歌はほとんど歌う機会がありません。そういう点でも、上から下までむしる防衛大学校の血とか汗とかが、すっかり体に染み入ったような感じでおります。そして毎日の生活をエンジョイしております。

先ほどご紹介いただきましたように、私は國際政治を勉強してきたこともありまして、海外に出ることが多く、また海外に出ることが自分の勉強にとつても良いと感じて参りましたので、積極的に出て参つたわけです。むしろ、日本におりました「私が防大の先生です」ということよりも、海外にいて「私が防衛大学校校、ナショナル・ディフェンス・アカデミーのプロフェッサーです」というほうが、よほど受けがいいという感じがいたしました。そういう面でも、海外に行くことのむしろ楽しさといえますか、満足感も感じてきた次第です。しかし防衛大学校校の存在も、日本の社会の中で次第に受け入れられてきていると私は感じております。

今日は短い時間でございますけれども、ご先輩の前でいささか喋りにくい点もございませぬけれども、過去五十年の歴史をおおまかに振り返ってみて、今、防衛大

学校はどういうところにあるのだろうかということ、私なりに少し申し上げてみたいと思っております。

同窓会がステンドグラスを寄贈

最初に、本年八月、防衛大学校校はご承知の通り創立五十周年を迎えます。実は昨日、防衛大学校校でその記念事業の一つとして、今度出来ました大講堂の落成式をいたしました。講堂の中に、同窓会の皆様方の素晴らしい贈り物であります、平松礼二先生によるステンドグラスがありまして、この除幕式も行いました。皆様方にまずはお礼を申し上げたいと思っております。大変立派なものでございます。防衛大学校校に講堂が出来たのは、実は過去五十年の歴史の中で初めてでございます。一度も講堂らしい物はなかった。あったのはいわゆる「中講堂」ですが、これには全学生が入りきれなかったんです。そういう面で全学生が入れる所といえば、ご承知の通りの体育館でしかなかったし、これまでの卒業式も体育館で行ってききました。しかしこの三月には新しく出来ました講堂で卒業式を行うことができます。こういう面でも素晴らしい大講堂になったと思えます。しばらく前に私は膨大の「十年史」を読む機会がありました。それを見ておりましたら、一九六五年、昭和四十年の出版物ですが、現在理工学一号館といまして、正門を入つてすぐ左側の一角にあたるところに、大講堂建設予定地と点線で囲ってある箇所があるのを発見いたしました。したがって創立十周年を迎えた頃には、そうい

う構想があったことになりませんが、一度もそれが実現されなかった。今度初めて五十年経って講堂が出来たことになりました。

防大発展七つの節目

過去五十年の歴史の中で、防衛大学校の歴史はいくつかの節目がありました。見る方によって、どこに節目をおくかという点は違ってくると思いますけれども、私なりにいくつか申し上げてみたいと思います。七つの節目になります。

もちろん最初の節目は、防衛大学校が出来た頃から小原台に移ったことでしょうが、小原台に移った一九五五年に航空要員の学生が初めて入ってきた。これが一つ新しい節目だと思います。それまでは陸と海だけでした。学生もしたがって四〇〇人くらいから五三〇人になったと記録でみておられます。

その二つ目の節目は六十二年なんです。理工系の研究科ができました。

それから三つ目の節目としまして、一九七四年に人文社会科学系の専攻コースができました。私は七十七年に防大に着任いたしましたので、社会科学教室ができましたから三年目ということになります。防衛大学校の理工系で入ってきた学生の中から希望者を集めて、社会科学系の学生の第一期生にしました。人文社会科学専攻の第一期生は第二十期の学生になります。人によってはこれを〇期生とっております。そういう面では私は二十二期の学生ですから、人社系二期生からお付き合いがあったことになりました。

その次の四番目の節目としまして、少し飛びますけども、一九九二年に二つ大きな事が起きました。一つは防大の卒業生に対して学士号が正式に与えられたことです。これまでは大学卒業相当という言葉いかなさされておりましたけれども、正式に学士号、英語で言えば「Bachelor's degree」というのが与えられました。もう一つは、この年に女子学生が入ってきたことです。これはいずれも九十二年です。

その次の第五の節目は九十七年に新たな研究科として総合安全保障研究科ができました。それまでは理工系だけの研究科でした。今、日本の中で、安全保障という正式な名前を使っている研究科の大学はどこにもまだありません。そういう面では非常にユニークな研究科です。すでにこの三月で第四期生が卒業することになります。毎年二十名の人が出たとすれば、今年でもう八十名の安全保障研究をした人が自衛隊の中、あるいは一般社会で勤務していることになります。ついでに申し上げますと、第一期生の総合安全保障研究科学生二十数名の中には二名マスコミから来ていました。産経の記者と読売の記者が来てくれましたけども、そのいずれも、今それぞれの新聞で安全保障の分野で大活躍をしておられます。そういう面でも防衛大学校の総合安全保障研究科が大きな貢献を始めているということになります。

六番目に二〇〇〇年を一つの節目と考へたいんです。この年、防衛大学校は教育制度を大改革いたしました。それまでは電気教室とか、土木教室というように、「教室」を中心において教育の体制を作っておりましたけれども、二〇〇〇年度、平成十二年四月から「学群制度」というものを導入しました。これを簡単に説明差し上げるのは難しいんですけども、要はそれまでは専攻学科として十六学科があり、それをまとめた形で十教室がありましたけれども、この「教室」というのをやめて、専攻学科十四学群にしたのです。なぜ「学群」というのかということなんです。「学」と「群れ」ですね。しかし先生方の中には、「学群」の「ぐん」って「軍隊」の「軍」に、

(笑)

間違えられるから反対だという人もいました。「学ぶ」と「群れ」です。いくつかの研究分野をまとめて傘をかぶせるというので「学群」としているのですが、それじゃ、今までの教室とか学科とどう違うのですかということになります。「学部」という名前も考えましたが、それでは一般大学の学部を連想させます。一般大学の学部というのは旧態依然として今の時代に合わないものになっていきます。それをここで借りてくるのはふさわしくないという考えから、「学群」という名前を使いました。「学群」という語は筑波大学などで使っています。

では一般大学の学部のどこが悪いかといえますと、「学部の自治」が大学全体の総合的な、効率のいい運営を弱めてきました。つまり、一般大学全体の観点から大学教育行政を進めていかなくちやいけないうちに、学部が人事、科目などでそれぞれの自治を強く主張するものですから、学長とか総長の権限が、なかなか下

に及ばなくて弊害が続いていました。これが一般の大学の弱点でありまして、文部科学省はこれを変えようとしているわけですね。学部長の権限よりも、学長および総長の権限を強めるべきだ、こういう傾向がありますから、防大では「学部」は使わないことにしましょう、ということになりました。

したがって、今、防衛大学校にいらっしやいますと、もうなにがなんだか分からないような教育制度になっていると思われるかもしれませんが、その下のレベルの学科名を見ていただきますと、比較的よくお分かりになれると思います。

一、二の例を申し上げますと、応用化学群というのがあります。そこには学群が三つあります。応用物理学群、応用化学、そして地球海洋学群があります。別の例を申し上げますと、電気情報学群というのがありまして、電気電子工学科、通信工学科、情報工学科、及び機能材料工学科から成っています。そういうことで、学群は全部で十四ございます。そのうちの十一までが理工系、三つが人文・社会科学系です。

学群制度に時間とりましたけれども、最後に七つ目の節目として、昨年、防衛大学校の理工学研究科に博士課程ができましたことをご紹介したいと思います。これも防衛大学校の歴史にとっては新しい節目を示すもので、昨年からは博士課程に受け入れられました。三年後には防大から博士が誕生することになります。したがって今は、本科と、それから修士課程と博士課程、こういう三層の教育制度ができていくわけです。もちろん本科

はいちばん母体が大きくて、一、六〇〇人くらいの学生がおります。それから研究科は理工系と社会科学系で合わせて、だいたい一六〇人くらいおります。博士課程は六人ですが、三年課程ですので、まもなく十八名くらいになります。

今申し上げましたようないくつかの節目を通して、私たちの防衛大学校は大きく進展してきました。これ以外にもいろんな節目を考えたいとおっしゃる方もいらつしやると思います。例えば、一九七二年に沖繩が本土に復帰してから、初めて沖繩から学生が防衛大に入ってきてくれました。これも防大の歴史の中では重要な出来事です。

教育訓練理念の基本は不変

こういった節目を通して防大は変わってきましたが、防大の教育理念は創立以来変わっておりません。つまり、幹部自衛官を養成するということ、そのためには一般大学生と違って、防衛大学校生は、自衛隊のリーダーとなるための基本的な教育を受けていなくてはならないということです。それは勉強ばかりではなくて、体力の増進も必要であり、同時にまた、リーダーとして人の前に立つだけの仁徳、人格がなくちゃいけない。そういう面で「知・徳・体」の三つをきちんとやっけて育てていくことが、防衛大学校の基本であると思っております。

そういう点で私は学生によくこういうことを言います。「防衛大学校では、一般大学とは異なる教育を受けているという誇りを持つべきだ。一般大学では、知

育を中心にやっているだろうけれども、防衛大学校では「知・徳・体」の三つをきちんとやろうとしているし、そういう教育を受けて卒業してくれることを期待している」と言っております。

現在学生は、先ほども申し上げましたけれども、だいたい全部で一、六五〇人。厳密にいえば一、六五一人です。毎年、定員四六〇人を探って、その四倍（四年制）ですから、実際は一、八〇〇人くらいなくちゃいけないんですが、何人か辞めていきますから、だいたい一、六〇〇人とか一、六五〇人になります。そのうちの約一三〇人が女子学生です。七パーセントくらいにあたります。

増加した留学生

一つ防衛大学校で新しい傾向がありますのは、この学生の中の留学生の数が次第に増えているという点です。現在、留学生は五十八名おり、八ヶ国から来ております。いちばん最初に防衛大学校に留学生が来たのは一九五八年です。タイから来ましたけれども、その後はタイとシンガポールだけから留学生が来た時期が長く続きました。しかしここ五、六年の間に、留学生が増えました。これも冷戦後の一つの動きなのですけれども、防衛庁は、相互の信頼醸成を培うのに重要であるという観点から防衛交流の名で士官学校レベルの交流を進めてきました。その結果、今のような状況になっています。八ヶ国を申しますと、韓国、ベトナム、タイ、シンガポール、フィリピン、インドネシア、モンゴル、それにルーマニア

になります。近い将来いくつかの国がさらに留学生を派遣してくるだろうと、内局から連絡を受けております。

この留学生の世話も実は大変でして、昔のように数が少なければ割合に世話は易しかったのですが、いまのように多くなりなると、言葉がなにも分からないので入ってくる留学生がたくさんいるものから、苦労します。最初の一年間は普通の勉強はしないで、日本語だけ勉強するんですね。そして一年経ってから初めて防大の授業を受け始めます。そこで日本語を勉強している学生のことを「ゼロ学年」と言っております。一年経ってやつと一学年になります。学生舎の中にいますから、毎日の生活は他の学生の生活と変わりませんが、訓練なんかは別です。指導官は随分苦労しているようです。

四月に入ってきた留学生に対して、言葉もなにも分らないわけですから、「朝は六時半に起きるんだよ」というのをどうやって伝えるかですね。こういうことで最初はパントマイムのように、手真似でやっていると言います。それからすでに何国かは留学生の先輩がいるわけですから、その先輩の部屋の近くに新入りを配置して説明させるといふことをやっております。

留学生に関しては、留学生をお世話し、ホームステイなどを手伝う、いわゆる「留学生協力家庭」というのが横須賀周辺にあります。この数が随分あります。三十家庭、もう少しいるかもしれないが、これも近年防大で見られるようになりました活動の一つでございます。

盛んな防大の国際交流

次に学生の国際交流について少し申し上げたいと思います。現在の防衛大学校では十年ぐらい前とは比べられないぐらいに、国際交流をやっております。今申し上げました留学生の受け入れもそうなのですが随分多いんです。毎年三十五名、あるいは年によってはもう少し多く、海外の士官学校へ短期間、二週間とか三週間派遣しております。例えばアメリカ。カナダは今中止になりましたけれども、他にフランス、ドイツ、それから韓国、シンガポール、タイというような国への派遣です。

それからまた、海外の士官学校から士官候補生でやはり短期間防大に派遣されてくるのが随分多いのです。アメリカの三つの士官学校以外にオーストラリア、それからタイなんか二桁の数の士官候補生を送つてこうとしております。それから韓国。ヨーロッパは来ません。韓国から随分多の学生が来ます。

この関連では、今年から新しいことが始まります。それは防大の二年生を一名、韓国の空軍士官学校に一年間留学させるということです。防大はこれまで短期間の派遣はやってきましたが、長期間の派遣はしてきませんでした。しかし日韓の防衛交流の一環として、一年間韓国へ送ることを決めました。韓国の学年は三月一日に始まるそうですから、学生を一昨日送ったばかりです。「朝雲」新聞にも出ておりましたが、その学生は出発前中

谷防衛庁長官、事務次官、官房長、それから人教局長に表敬しました。学生も随分緊張したと思うんですけども、防衛庁がこれを重視しているという姿勢が、これで韓国側に対して示されたと思います。

あと二つ国際交流の点で申し上げたいのですが、その一つは四年前から行っている「国際士官候補生会議」というものです。今年で五年目になります。これも三月に行いまして、来週の月曜日から一週間、十三か十四の国の士官学校から学生代表が防大に来てくれて、国際会議を開催します。学生がイニシアティブをとってテーマを決めたり、それから組織運営をやったりします。もちろん英語で行います。十何人か来る外国の士官学校の学生と、その倍ぐらいの日本側の学生を入れて会議をやります。講堂などで行いますから、残りの学生にも会議の様子を見るように指示しています。場合によっては質問をして、会合に参加できるように仕組みを作っています。今年は基調講演を藤縄前統幕議長にさせていただくことになっております。

もう一つ、防衛大学校校ではご存知のように「防衛学教室」というのがございました。現在は「防衛学教育学群」という名に変わっておりますけれども、ここでは毎年やはり外国の士官学校の教官を集めたセミナーを行っております。今年の夏は「士官学校における歴史教育について」というテーマでセミナーを開催する計画をしております。昨年は、科学校教育を士官学校ではどのように行っているのか、ということテーマにして実

施しました。

まだ不十分な英語教育

というわけですので、おそらく防衛大学校初期にご卒業なつた方からご覧なれば、随分変わったことを今はやっているんだなと思われると思いますが、教育理念の基本は変わっていません。ただ自衛隊のニーズが変わり、社会のニーズが変わりますので、時代の要請に応じて新しい教育課程を設ける必要があります。

英語の教育は以前よりもずっと強調しております。TOEICの試験を全学生に強制的に受けさせますが、これがまた実はちょっと問題でして、一、六五〇人の学生全員に英語に関心を持たせるというのとは不可能ですね。「防大生のTOEICの成績は今何点ですか、平均は何点ですか」と皆さんから聞かれると困惑してしまいます。ちょっと恥づかしいくらいに高くないんです。ですけども、これはやらなくちゃいけません。今年は平均点が四一三点でした。昨年は四〇二点か三点だったものですから、十点上がったということでは我々はそれなりに喜んでるんです。

しかし隣の韓国の士官学校では、全学生が卒業するまでにTOEICを七〇〇点とらなないとダメなのだ聞いています。ですから我々もつと真剣にやっております。TOEICの試験はだいたいたくさん問題があつても、答えは四つのうち一つ選ぶようになっていきますから、全部最初の解答だけ丸にしても、25パーセント

ぐらいの点はとれるのじゃないかという人もいます。しかしその点すら達していない学生もおりますから、恥づかしい状況です。防大生には、もちろん優秀なものもおりまして、帰国子女もおります。したがって九〇〇点ぐらい行く学生もおります。実は昨年今もトップはシンガポールの学生でした。九〇〇何十点取りました。したがって留学生はいい刺激を防大の学生に与えています。

少子化傾向の影響はまだ小さい

ここまでお話をしたところで、我々今、学校当局として、もう少し広い立場から見ると、どういう問題を抱えているだろうか、あるいはどういう問題にこれから直面しそうで、というようなことを少し申し上げたいと思いますが、それはいくつかございます。

一つは少子化傾向のインパクトです。若年層の人口が減っていく傾向にあります。そうした傾向が、防衛大学校に入ってくる学生の数にどういう影響を与えるだろうかといいことです。少子化傾向が進むと、大学に入るのがだんだんと易しくなる。競争率が低くなりますから。そうすると、学力低下を招きます。あまり勉強しなくても大学には入れるんじゃないかということで、高校生が勉強しなくなるかもしれない。そういう傾向がすでに見られますが、そういう状況にある時に防大に入ってくる学生を、毎年四六〇人採るとすると、学力の低いのが入ってくることになるのではないかと。そのままやっておりますと、自衛隊幹部の能力が低

下することになりますから、自衛隊に大きな影響を与えます。

実は私などは、この問題に強い関心をもち、同時に懸念をしております。いろいろなデータを見ております。今のところ少子化傾向が防大入校希望の学生数に、あるいは学力低下に大きな影響を与えているという兆候はありません。

少子化傾向が進みますと、一般の日本の大学は大きく二つの傾向に分かれると私たちはみております。一つは一流校で、もう一つはいわゆる二流、三流であった学校が、表現が非常に悪いのですが、ますます落ちていく。二つに大きく分かれてしまう。東京大学のようにいい大学は別に少子化傾向が進んだって、優秀な学生は東大に行こうとするでしょう。ところが、地方、あるいは東京でも、三流、四流の大学は学生の定員割れが生じる。あるいはそうならないようにするため、学生をどんどん入れようとすると、全体のレベルが下がってしまう。どんどん二分化していく傾向にあるとみておりますが、防衛大学校は今のところ一流校のグループのどこかに一生懸命食い付いているという状況でございます。これが続く限りは少子化傾向のインパクトは受けなくて済むかもしれません。

しかしこれは油断できませんので、私たちはこれに細心の注意を払っております。もし防大入校生の学力低下の兆候が始めれば、それを是正するめには、二つ方法があると思います。一つは入校生の数を少なくして少数精鋭制でやっています。もう一つは、四年制のところ五年制ぐらいにして、一年目は基礎からもうい

つべんやり直して、きちんとやって、それから卒業させる。あるいは訓練の時間をもう少し減らして、まず、基本的な勉強、基礎学力をつけて、それから後に訓練をするというようなやり方に変えていかなくちやいけないかもしれません。そういうような問題でございませぬ。

国立大学の独立法人化の影響は大きい

二番目の大きな問題は、一般の国立大学が平成十六年度から独立法人化するということが一応決まっております。すべての国立大学がそのように移行するかどうか分りませんが、平成十五年度には法律ができる予定です。ここで移行というのはどういう意味なのか、新聞の報道を見ましてもまだ明確に出ておりません。しかし一般に言われておりますのは、より自由な大学研究環境ができる。つまり、それぞれの大学が自分たちのカリキュラムを作ることができ、大学の先生は企業とタイアップして共同研究を進めることができる。研究費も文部科学省からだけじゃなくて、一般の企業から研究費をもらって共同研究や委託研究ができるようになる。そして大学の経営が文部科学省の親方日の丸じゃなくて、それぞれの大学が自分たちの経営方針を立ててやってくる。

こういうのが一般に言われているイメージですが、果たしてすべての国立大学がそういくとは思いません。非常にジグザグした移行になると思いますけれども、にもかかわらず国立大学がそういう傾向になりますと、防衛大学のいい先

生はそっちに行つた方がいい研究ができそうだと行って移籍してしまう心配があります。あるいは我々がいい先生を一般大学から採ろうとしても、「いや、防大では研究費が少ないようですね」と断られるかもしれない。独立法人化した大学の研究教育環境に劣らないものを、私たち防衛大学でも作っていかなければいけないと思っております。やはりいい先生が来てくれることが教育の質を高めるわけで、それがいい自衛官を作っていくことにつながると思っています。

拡げたい防大生の学外交流の場

もう一つの点は、学生と話しておりますと、「自分たちは横須賀の端の小原台ですつと勉強しています。社会の動きについて、なかなか知る機会が少ない。そして卒業すると幹候校へ行き、それから自衛隊へということですから、社会を知る機会、あるいは同じ年代のほかの青年と接触する機会が非常に少ない」と苦言を呈します。これは防大創立以来からそういう問題があったと思えますけれども、外との交流とか接触に対する学生側の要望が割合強くございます。

防衛大学校はしたがって、できるだけ開かれた、そういう面でも魅力ある大学にしていかなければいけないと思うんですが、ここでもいくつか難しい点がございます。例えば防衛大学校を開かれたものとして、一般の大学の学生の希望で、防大の授業を受けることができるようにする、また防大の学生が、ほかの大学に行つて授業を受けることができるように

することが考えられます。しかし防衛大学校という特殊な使命を持った大学で、防大生には非常に規律を重んじさせておいて、一般大学の学生にそれを強いることができないければ防大内の規律はむしろくちやになります。現在、防大で見られますのは、一部の先生が自分の演習ゼミ学生を、他大学で知っている先生のゼミ学生と交歓ゼミをする形式です。何人かの教官がそういうことは行っています。

そこで四年生で成績が優秀な学生には、週に一回ぐらいい他大学で授業が聴講できるように仕組むを作りたいと思っております。まして、学内で今検討してもらっております。誰でもいいといいますが、ろくに防大で勉強してなくて、外部で遊んでくる学生もいるかもしれないから（笑い）、優秀な学生で、先生から「君は行ってもいいよ」と許可があったもの、あるいは「あそこの大学のこの授業を取りたい」といった学生で、「それは君のためになるから行って」といよ」とか、きちんとした教官の指導の下に聴講できる仕組みはできないかなということなんです。

帰国子女優遇には壁

それからもう一つは、帰国子女が割合に防大に入りやすくなるのもいいんじゃないかという点です。つまり、いろんなバックグラウンドを持った学生が防大に入ってくるということは、学生の思考の多様化を促すことにもなるかもしれませんし、いいんじゃないかと思っております。しかしこれは、実は「言うは易し」

といひますか、細かく法的に詰めていきますと、帰国子女だけに甘い基準を設けて、防大に迎え入れるということはできないと人事院から言われております。防大への入学は、入学じゃなくて公務員の採用なんですね。公務員の採用というのは公平にやらなくちやいけないという原則があつて、したがって帰国子女には少し基準をあくくするというやり方はダメなんだと言われております。したがって、そこところは非常に気を付けてやらなくちやいけないんですが、少なくとも海外で勉強した高校生、中学校、その他学生たちが、防大に関心を持って入つてくれることになれば、非常にいいと思っております。何人かはもうすでに入っておりますけれども、もう少し奨励するのもいいんじゃないかと思ひます。一般の大学から見れば、実は防衛大学校は大変魅力ある大学でもあるわけですね。運動施設もしっかりしており、しかも、もちろん授業料もただであり、生活費もただであるということから見れば、大変魅力的な大学でもあるわけです。しかし防大の中に入ると、その良さがよく分かんなくて、外の事をもう少し知りたいというような希望が強くなつてきます。

歴史教育、日本語表現能力など

もう一つの点は、基本的に防大の学生をスキップと育てるために、これまでの教育で不十分なところを、もっと積極的に改善していきたいということです。例えば、先ほど申しました英語なんか、もっとやらなくちやいけないと思ひますが、

それから物理、数学、化学なんかの基礎知識が十分なくて入ってくる学生が多いんです。高校できちんとやってくれていないことが大きな原因なんです。

防衛大学校では入校後の学生に対して一斉に試験をやりまして、成績の低いものは特別に集めて補備教育というのをやっています。しかしそれ以外に私は、歴史教育が防大ではまだ不十分だと思っております。

歴史教育の点はもう、いうまでもないことかと思いますが、防大を卒業し、幹部自衛官となるためには、やっぱり日本の近現代史についての基本的な理解、あるいは世界の近現代史についての基本的な理解が必要です。第二次世界大戦はなぜ起こったのか、どこで日本は失敗したのか、江戸末期から明治以後の日本がどういうふうに進んできたか、あるいは、第二次世界大戦で日本は何をしたのかなどなどについて、防大で教育を受けないで自衛官になるというのは望ましくありません。私は「南京虐殺」について、きちんとした教育がなくてはだめだと言っています。「南京虐殺」について講義をする場合には、一方的な見解だけじゃなくて、両方の見解を紹介し、日本社会や海外で議論になっていることを、学生が知っておかなければならない。こう思っております。

もう一つは先ほど申しましたように、日本語表現能力です。先日、入学試験で立ち会われた防大の英語の先生に、「学生の英語の成績はどうでしたか」と聞きましたら、その先生が「いや、英語よりも日本語表現能力が悪いんです」という

お話です。したがって、日本語の表現をきちんとできる学生というのでなくちゃいけないと思うんです。防大では実は五、六年前から、一学年に対して「基礎ゼミナール」という科目を設けてまして、日本語表現能力の向上を試みています。三十人、三十五人くらいの先生を理工系、人社系から集めて、学生を二十人くらいの小さなグループに分け、前期十五回の授業で、自分の専門分野を教えながら、学生に簡単なペーパーとエッセイを書かせて、それを添削するという形式です。それが少しでも学生にいい傾向を与え、学生がそれから学んでくれることを期待いたします。しかしもう少しこれを効果的な科目にしていきたいと思います。

卒業生からの話を聞きましたが、防大で卒業論文のときに厳しく論文の書き方を教えてくれたことが、その後の仕事にうんと役立っていますというハガキをもらったこともあります。あるいは、報告書を書くのに苦労しています、と言って卒業生もおります。そういう点で、日本語表現能力は非常に重要だと思います。

必要な自衛隊のヒーロー

最後に、防衛大学校の私たちにも一つある問題として、21世紀の自衛隊とのリンクがあります。21世紀の自衛隊がどういう形になるのか。自衛隊のニーズは何かということを見極めながら、防衛大学校の教育を考えていかなければならないと思うんです。何しろ、防衛大学校のお客様は自衛隊でございますから、自衛隊の

ニーズにあったものを作っていくかなくちゃいけない。だから例えば、今、世間で言われていますような、生命科学および遺伝子などについての理解を、これからの社会に出て行く人たちは十分必要だ、知っているべきだと私は思うんです。

しかし実は防衛大学校に生命科学に関しての授業はないんですね。こういう分野について、自衛隊のニーズが、今後出てくると思うんです。少し先を読んで学科を作っていくとか、あるいは学科までいかななくても、そういう科目を作っていくことを考えなくちゃいけないと思うんです。現在のところ、それがまだできていないもんですから、客員教授とか、あるいは課外講演の講師を招く際、そういう防大ではカバーできない、授業でカバーできない専門分野についての講師を呼んで埋め合わせをするようにしております。

最後にもう一つ、自衛隊とのリンクなんですけれども、学生が胸に描くべき現代日本の軍人像の欠如です。私が防衛大学校で学生に話す際、彼らが卒業して自衛官になるとき、モデルとなるべき人間を引き合いに出すのが非常に難しいという点なんです。戦前でしたら「東郷平八郎」のような一つのモデルがあつて、そこでなぜ彼が立派だったかということが具体的に教えられたと思うんです。防衛大学校の今の防衛学教育学群におきましても、制服組の教官が「統率」とか「戦史」などの科目の中で、そういう授業をしているわけですけども、そのモデルは随分古いですね。今の学生に「東郷平八郎」といったってピンときません

ね。もう少し現在に近い時代の人が必要です。今学生に話してモデルになりうるのは、例えばコーリン・パウエル將軍とか、あるいはシエウォルツコフ將軍とかです。湾岸戦争で活躍した將軍はこういうところで苦労したとか、こういうことで立派な仁徳を持っていたとかなど講義できるわけですが、学生が比較的身近に感じるリーダーで、しかもモデルにできるような日本人を見つけるのは非常に難しいです。

自衛隊が最近になりました、PKOだとか、あるいは最近のインド洋派遣とかの任務を通して、まあ、ちよつと表現が不適切かもしれませんが、ヒーローが生まれれば、私は自衛隊にとつてもいいと思います。したがって自衛隊の役割が国際的にも広まっていく中で、また自衛隊の他の任務の中で、学生に示しうるようなリーダーが、何人か出てくるのが防大の学生にとつてより大きなインパクトを与えたいと思っております。

だいたい時間が参りましたので、ここまでにいたしたいと思えますけれども、間もなく防衛大学校校で卒業式がございます。三月二十四日の卒業式には、今年同窓会の第三期の皆様方をお招きいたしております。第三期の皆様方には新しい記念講堂での卒業式を見ていただくこととなります。

皆さんにお願いしたいのは、ご子息、ご令嬢をぜひ防衛大学校に送ってほしいということでございます。これは三期生のことではございません。皆様方にお願ひしたいと思いますが、元氣な若い人たちを防大に送っていただければと思いま

す。皆様方のご支援、ご鞭撻（べんたつ）を得て、良い大学を作っていきたいと思えます。

防衛大学校は大学であり、同時に士官学校でありますし、私は学生に、「自分たちを日本の大学の学生と比較するだけじゃなくて、外国の士官学校の学生と比較してほしい、漫画を読んでいる時は、アメリカの士官学校の学生はなにをして

記念講演師 「三浦朱門先生」 紹介

三浦先生につきましては皆様良くご承知の事と存じますが、簡潔にご経歴等について紹介させていただきます。

先生は大正十五年東京でお生まれになり、東京大学文学部言語学科をご卒業後、大学院進学と同時に日本大学講師として招聘され、教授まで勤められました。一方昭和二十五年作家活動に入られ、第三の新人の一人として活躍されました。ご著作は新潮文学賞を受賞された「箱庭」や芸術選奨文部大臣賞を受賞された「武蔵野インディアン」等、数多くあります。平成九年には日本芸術院賞を受賞され、平成十一年には文化功労者に選ばれておられます。また昭和六十年から六十一年まで文化庁長官をお勤めになり、現在も日本芸術文化振興会会長、日本文芸家協会理事、日本芸術院会員等、数多くの要職でご活躍中であります。

三浦先生には五十年の防衛大学校の歴史を通じて、厳しい時代にあっても一貫

いるだろうかということを考えるべきだ」と申しております。学生はいい日本を作るための責任を自分たちが担わなくてはならないと自覚してくれることを、私は期待しております。どうぞ、皆様方、ご支援よろしくお願いいたします。どうもありがとうございます。

(拍手)

司会 ありがとうございます。

して国防及び防衛大学校の良き理解者として、お忙しい身にもかかわらず折々に本校にお越し戴き、数々の御薫陶と御教示を戴いてまいりました。

この度五十周年の節目に「望ましき自衛官像」というテーマで記念のご講演を戴くことは誠に意義深いことと考えております。本日は、正にこれから望ましき自衛官像を目指す防衛大学校の在校生や現職自衛官も沢山聴講される事になり、必ずやその指標となるお話が伺えるものと思えます。それでは三浦先生よろしくお願い申し上げます。

(講演に先立ち行われた記念事業委員会委員長による講師紹介から)

望ましき自衛官像

特別講師 三浦 朱門

三浦でございます。実は風邪を引きまして一昨日まで声がでなくて、どうなるかと思っておったのですけれども、昨日からどうやら声がでるようになりました。それでも大変お聞き苦しいと思えますが、どうぞ私のつたない話、聞いていただければと思うわけでございます。防衛大学校の五十周年の記念にお招きいただきまして、何か喋れと言われましたこと、私個人として本当に大変光栄に存じております。

私が初めて本校に伺いましたのは、昭和三十二、三年頃であったかと思えます。ようやくこの小原台に移った頃だったと思います。移転を記念してということではありませんけれども、防衛大学校がきれいになったということ、確か若い女性の雑誌だったと思えますけれども、その雑誌に頼まれてルポルターージュに参りました。その時の小原台というのは赤土ばかりでございます。砂埃を避けるためにユーカーの木を植えている時代でありました。そのちょうど参ったのが二月頃という記憶がありますが、やはり西風の強い日、二年生位の学生が、今から考えますと四期生か五期生になると思えますけれども、もちろん皆様方の大先輩でいらつしゃいますけれども、日向ぼっこをしてポケットに手をつ込んでいて、学生舎に寄り掛かっている、何と

く頼もしくないなあと思つた記憶がございます。もつともこの会場で四期生、五期生がおられますと、いや我々の期はそんなことはなかった、それは三浦の思い違いだと、現役の皆様方におっしゃるかも知れませんが、しかしそのような方々であっても、皆様方ご承知のような立派な先輩になられたのですから、例え今の学生が、いくらかがわしいところがありましても、どうか一生研鑽を怠ることなく、立派な自衛官になつていただきたいと思えます。

ただその五十年の防衛大学校の歴史を考えた時に、普通でしたならば本当におめでたいということをまず申し上げねばならないのですけれども、必ずしもこの防衛大学校、五十年の歴史はめでたいという言葉で言い尽くされるものではないと思えます。例えば、今日私共がこうやって使っております大講堂、本館などというものは今から四十数年前には存在しなかったものであります。赤土だらけの中に二棟、三棟の学生舎と、それから教室棟が二つ三つある程度でございます。大食堂も何か倉庫風の建物だった記憶がございます。そのような時代から考えますと、形而下的には、防衛大学校は立派になりました。恐らくこんなに立派な、軍人を養成する施設を持つている国というのは世界にそういくつもないので

はないかと思いません。その意味では確かに防衛大学の五十年の歩みというのは偉大なものであります。そして、多くの優れた先輩を生み出したということでもこの防衛大学五十年の歴史は輝かしく、そしてその点では本当におめでたと申し上げられると思います。しかしながら、今から五十年前に防衛大学校が作られました時に、この大学校が持つていた基本的な問題というのは半世紀経った今日においても、何ら解決されておりません。従いましてあなた方、現役の学生方は先輩の志を受け継いで、この基本的な命題の解決に突き進んでいただかなければなりません。そしてここにおられる先輩方そして父兄の方々、あるいは一般市民の方々も、どうかこういう防衛大学の過去五十年の歩み、茨の道であったと思えますけれども、その茨の道を歩まれた、また、歩んでいる若い人達を励まし、そして茨を少しでも取り除くようにご協力いただけたらと願うわけでございます。

ゆる日本語で言う憲法になります。Constitutionというものを考えますと、これはその国の国柄、その国の体質というものを示す、憲法という言葉よりもその国の体質というふうな考えの方がよろしいかと思えます。私は先年亡くなりました司馬遼太郎さんが好んで使われた「この国のかたち」という言葉がありますけれども、この「国のかたち」というのを英語に直すと、やはりconstitutionだと思えます。大文字で書けば憲法でございます。民主主義国家の先祖のような英国では文章に書かれた憲法はございません。大体一つの国の体質、人間の体質でもよろしいのですけれども、私には私という三浦朱門という人間はどういう体質であるかというようなことを、例えば文字だけで書く場合に百箇条やそこらで言い表すことが出来るでしょうか。これは絶対に不可能なのです。仮に百箇条位で書いたところでまた新しい環境に、例えば私はまだ北極地帯に行ったことがありませんけれども、零下二十度、零下三十度の所に行きますと私は新しい体質を発見するかもしれません。あるいは深い海の底を潜っている時に陸上では気づかなかった私の新しい体質を発見するかもしれません。つまり体質の中に今日までわかっているものと、同時に未来において現れてくるかもしれない可能性として持っている体質、様々なものがございます。従いまして英国人が百箇条、二百箇条の言葉によって英国の体質など表せられるわけがない、むしろ最高裁の判断というもの、何百年に亘って続いてきた最高裁判所の判断の積み重ねの中に、結局

英国的な物の考え方、英国の文化、英国的なもの、英国という国のかたちを示す事ができるといふふうな考えている、それも一つの見識であろうかと思えます。それではアメリカがどうして憲法を作ったかと言いますと、これはもちろん独立戦争が契機になっております。はじめ、まず独立宣言というものを作りました。アメリカの憲法前文というのは非常に簡単でございますけれども、実は独立宣言というのが憲法の前文に当たると私は考えております。その独立宣言というものを有志が作ります。そうしますと当時のアメリカは植民地でございますけれども、十三の地域に分かれておりました。十三の地域はそれぞれ自分は他の地域とは別の地域である、つまり独立した場合に自分達は一つの国家であると考えていた。アメリカ合衆国の州というのはstatesです。statesと言うのはこれは国家という意味でございます。つまり十三の国が一緒になつて英国に対して独立戦争を始めるといふことになりました。十三の国がお互いに条約を結んだわけです。一緒に共同して英国と戦つて行こう、そのためには十三の国がどういふふうな形で協力し合うかというようなことを決めました。これがアメリカの憲法の基本的な性格でございます。従いまして最初のアメリカの憲法を見ますと、基本的な人権とか個人の権利とかは何も書いてありません。一番初めに国会というものが、連邦議会というものがございます。次に大統領というものが存在します。連邦議会というものは何故大事かと言つと、十三

の州が一緒になつてやるわけですから、十三の州の代表者がここに集まらなければいけない。だから連邦議会なのです。そして連邦諸国から選ばれてその意志を体しそして全米軍を、独立軍を率いて戦う大統領というものを選ばなければいけない。従つて第二章が大統領になる。つまり最初のアメリカの憲法というのは十三の国家が一緒になつて戦おう、一緒になつて一つの組織を作ろうという、いわば外交条約といったような感じがございます。今申しましたようにそこには基本的な人権とか個人の権利とかそういうようなものは一切書かれておりません。そこで国家が出来てから後に、それではアメリカの国民というのはどういふ存在なのか、彼等はどういふ権利があり、どういふ義務を持つかというようなことを考えなければならぬ。従いまして独立して間もなくジェファソンという大統領の時代に国民の権利、義務を書いた部分を大量に書き足します。それが「amendment」です。修正事項と言いましょか、附加事項と言いましょか、その始まりでございます。それから後、時代と共にどんどんどんどんamendmentを増やしていきまして、私の記憶によりますと、確か十年に一度位の割合で新しいamendmentをつまみ憲法改正を行つております。つまりアメリカ合衆国というのはスタートした時はamendmentのない状態の十三の国家が共同して物事をやつていこうという外交文書であった。しかしそれが連合国家として成立して新しい問題にぶつかる度に修正条項を付け加えてきた。それがアメリカ

カ合衆国というものであるかと思ひます。従ひましてアメリカの憲法というのは基本的理念において、つまり民主的な共和国を作ることと、そこでは自由が大切なものであるということ、個人の権利が尊重されなければならないこと、そしてそのような自由意志の総合としてアメリカ合衆国というものがあつたということ、それらのものは基本的なものとして存在しますけれども、それらの理念が具体的にどのよう表現されるかということはその場その場の、その時その時の国民の判断によつて付け加えられるかあるいは、酒を飲んじやいけないという条項のように、一度、書きこまれ、後になつてそれを取り消したりというような歴史過程をたどつてまいりました。

日本の場合何故憲法を作つたかと言いますと、これは何よりも日本が近代化するといふことが、今から約百五十年前に、千八百六十年代の終わり頃に決められたそのことに始まるかと思ひます。私は日本国憲法の一番基本にあるのは明治元年に明治天皇が神々の前に誓われたといふ「五箇条の御誓文」であり、まさにこの御誓文が米国の独立宣言に当ると考えます。これは日本の近代化を志して、民主体制を作り、全国民が自由な立場で政治に参加し、そして全世界から知識を求めて、大いに立派な国を作ろうじやないか、そして全国民がその志を遂げ、社会に対して不平不満を持たないような国にしようではないかといふことを慶応四年（明治元年）、「五箇条の御誓文」で表現されました。それが恐らく日本近代化の精神であり、そして今日に至るまで日

本の国の国民の多くの人の考えであらうかと思ひます。「広く会議を興し、万機公論に決すべし」「官武一途庶民に至るまで、各々その志を遂げ、人心をして倦まざらしめんことを要す」「旧來の因習を破り天地の公道に基くべし」、そういう「五箇条の御誓文」といふものを考えますと確かにこれが日本の近代化の基でありました。しかしそれは明治天皇が神に誓つた言葉であつて必ずしも国民に徹底しない。それのみならず諸外国はそれを認めてくれない。そこでアメリカの憲法のような、あるいはフランスその他の国の憲法のようなまとまつた憲法、成文憲法を作ろうといふことになつて明治二十三年、いわゆる明治憲法が作られたわけでございます。

ところがこの時、明治憲法といふのは大きな間違いと言ふか、ごまかしが二点ございました。それは何かと言ふと、第一は行政権の問題でございます。もう一つは統帥権、つまり武力の問題でございます。行政権の中には外交も含まれると思ひますけれども、帝國憲法には大日本帝國は万世一系の天皇、これを統治するとあります。つまり天皇が統治するといふのは、行政権が究極において天皇にあるといふことです。統帥権、即ち軍隊において統帥権は天皇にあって、天皇は陸海軍を統帥す、と帝國憲法には記載されております。しかしそれだけであつて統帥権の内容について詳しい規定は何もない。行政権につきましては枢密院と大臣の条項がありまして、枢密院議員は國家枢要の、國家の非常に大事なことの決定に参与するといふことがあります。そ

れから全ての法律は大臣の副署を必要として天皇に対して責任を負うといふことがあります。統帥に關しては、天皇は陸海軍の編成及び常備兵額を定む、としかなくこれでは綱領に等しい。大臣と枢密院のことがあるだけでも行政権についてはいくらか形は整つておりましたけれども、不完全です。つまり明治憲法は当初から欠陥憲法であつた。

何故かういふ欠陥憲法を作つたかと言ひますと、憲法を作るといふのは一つには対外的なジェスチャーであつた。國際社會に日本は近代國家であるといふポーズを作る必要があつた。そのポーズに基づいたある程度の実質を作る必要があつた。しかし同時に国内的には「広く會議を興し万機公論に決すべし」といふ五箇条の御誓文の精神に沿つて、國民が政治に参加することを望み始めた。強く要求し始めた。従ひまして、うっかりその声に従つて明治政府を作つたかつての幕末の志士達、後に元勳達と言われる人達、明治の行政官僚、軍事官僚を作つた集団にとつては、自分達の権力、自分達の勝ち取つたものが奪われる恐れを感じた。それは必ずしもエゴイズムとは思ひませぬ。自分達こそが本當の意味で日本國家といふものの將來を案じているし、そしてその責任を果たしうるのは正に自分達なのだ。どうして自分達に反対した奴らに自分達の仲間として大量に入れることが出来るだらうかといふ気持ちがあつたに違ひない。

また當時の行政官僚、軍事官僚達といふのはその二十年前は同じようにちよんまげを結つて刀を二本差していた人達で

した。ですから行政官僚は明日にでも軍服を着て軍事官僚になりうる素質を持つていた。また軍事官僚は刀を置き軍服を脱げば、直ちに行政官僚になりうる資質を持つ仲間同士だった。だから行政と軍事についてはお互いに意志を通じ合ひながら、行政と軍事の暴走をお互いにチェックしながらやつていけると思つたのでしよう。

たぶん、かういふ幕末の志士達を作つたエリート集團と言ひましようか、その人達はある程度の成功を収めた。それが例えば日清戦争、日露戦争の勝利であり、そして徳川幕府が諸外國と結ばなければならなかつた不平等条約の改善であり、當時の先進國並と言へる、民主的な国内体制でした。確かに二十世紀の初め千九百年といふと韓國の人は、韓國が植民地になつた呪わしい年だと言つてあまりいい顔はしないと思ひますけれども、二十世紀の初め千九百年を考えた場合に明治維新が始まつてから約四十年で、とにかく日本が立派な國になつた、一応の近代國家になつたと言ふことが出来るかと思ひます。

今日の産経新聞に石原慎太郎都知事が書いていましたけれども、トインビーという歴史家といふのはかなりいい加減な人間であつて、明治の日本の近代化を奇跡だといふようなことを言つておられるけれども、あれはでたらめで近代化の基は徳川時代に作られたといふことを言つておられます。これは別に石原慎太郎個人の考へではありません。これはもう日本史をまともに読む人たちの定説であらうと思ひます。徳川時代といふのは考へてみる

と本当に素晴らしい偉大な時代であった。近代的な日本というものを作るための、原形というものは、この時代に、徳川時代に既に出来ていたと思います。とにかくその徳川時代に作られた蓄積を基にして、そして四十年で見事に近代国家を作り上げた。しかしそういう人達というのははだいたいに於いて千九百二十年頃、つまり近代化がスタートしてから半世紀経った後に全部死に絶えてしまいました。この時から近代日本の混迷が始まりました。

私はキリスト教徒ですけれども、キリスト教徒の原典の中に聖書というのがあります。聖書の中に出エジプト記というのがあります。これはモーゼという、これはもう神話だから実在の人間であると考えする必要は全然ないのですけれども、モーゼという民族の指導者が現れまして、奴隷であったユダヤ人達をエジプトから荒れ野に連れ出します。そして神に約束されたカナンの地を目指すのです。エジプトを脱出する時にいろいろな、何と言いましようか、奇跡的な話があるのですけれども、これはまあどうでもよい。ですけれどもモーゼはエジプトから脱出した民族を直ちにカナンの地に導こうとはしないのです。荒れ野を四十年間さまようのです。荒れ野に四十年さまようというものは何のためかと言うと、エジプトの奴隷であった世代が全部死に絶えるのを待つのです。奴隷であった人間は所詮奴隷なのだ。事実モーゼがユダヤ人を荒れ野に導き出してからも荒れ野の生活の厳しさに耐えかねて、こなぐらいならばエジプトで奴隷をやつて

いるほうがよかつたと言つて反乱を起す者達もいます。ですから本當に自由な、そして自分の足で立てる人間が育つためには、奴隷であった人間が死に絶えるのを待たなければいけない。それで荒れ野に四十年いたということになります。そしてモーゼは約束の地であるカナンを遙か彼方に見渡す山の上で死んだとされています。

聖書の中で四十というのは象徴的な意味で長い間という意味だと思います。例えばノアの箱船の説話では七、六百、十七、百五十、十といった数が何度も出てきますが、一番頻度の多いのは四十という数です。つまり四十というのは六十と同じような、同じと言うのはおかしいのですけれども、四十とか六十とか言うのはユダヤ教の中では一つの象徴的な数であつて日本で言いますと八百八町、八百万の神、八幡様という、八という字に妙に関わりがありますけれども、それと同じようなこだわりのある、こだわりを持たれている数だというふうに考えてもよろしいかと思ひます。

とにかく四十年いるうちに荒れ野に育つたたくましい世代が生まれます。そしてモーゼの後を継いだのはモーゼの副官を長い間務めたヌンという人の子のヨシユアという人です。ヨシユアという人が新しいリーダーとなつてカナンの地に攻め入つてジェリコと言われているジェリコ、から存在したと言われているジェリコ、イエリコとも言いますけれども、当時のその都市を、攻め落としたと言われています。

四十という数が意味があるかないかは

別にいたしまして、明治維新後四十年経つてそのエネルギーは尽き果ててしまつた。そして千九百二十年、大正が二桁になろうとする頃から日本の混迷が始まります。行政権とそれから統帥権の処置の曖昧さの矛盾がでてきます。だいたい帝國憲法には総理大臣なんていう項目は何にもないのです。ですから総理大臣の権限も憲法に照らしてみる限りどこにも書いていない。ただ大臣が天皇に対して補弼の責任を負うとあるだけです。また枢密院というものと内閣がどういう関係にあるのか、それらのものと国会がどういう関係にあるか、何も書いてない。その矛盾が結局大日本帝國を滅ぼしました。その矛盾が明らかにでてくるのは千九百三十年、昭和五年頃、大陸で戦争が始まる頃です。私は十五年戦争という言い方は嫌いですけれども、その頃、千九百二十年頃から千九百四十五年の二十五年間というのが、日本帝國の混迷の時代であつたと思ひます。

そして第二次大戦後という新しい時代が生まれます。そこで大日本帝國憲法の憲法改正の条項に従つて、いわゆる平和憲法、今日の日本國憲法が作られます。これもやはり様々な点で矛盾を持つておりました。私は今の憲法の原文は英語であると思つておりますけれども、例えば言論の自由はこれを保証するというような文章があつたと記憶します。言論の自由は保証するというと、政府が保証するのか、裁判所が保証するのか曖昧なのが、原文である英語を見ると、保証されるべきものとなつて受け身になつているので、言論の自由を保障するであつたところ

で、誰が保障するのか。何々によつて保障されるとは言つても、何々によつての部分が無い。憲法十三条だつたと思ひますけれども、個々の國民の安全と自由と幸福の追求には最高の配慮が必要であるという条文がある。しかし誰がいかにして配慮するかということは何も書いていない。米國憲法でもこの種の条文には受身形が使われています。

日本國憲法は戦後早々に出来たもので、大臣は文民でなければならぬというような条文がある。シビリアンの訳語ですけれども、帝國陸・海軍が解散した後ですから、もう軍人というのはいない。しかもなお文民という言葉を使わなければならぬ。これはやはり旧軍の復活を恐れたのだらうと思ひます。そういうことから考えましても日本國憲法というのは早々の間に慌ただしく作られたものであつて、しかもその細かい部分について非常に不安定で未決定な部分がある。

重要な部分については日本を占領している米軍、あるいは國連が責任を負うという暗黙の了解事項がある。例えば憲法の前文で有名な部分ですけれども、我々は自分達の安全を、平和を愛する諸國民を信頼してこれを委ねるといふ意味の部分があります。つまり我々の安全というものをも自分達で守らずに、平和を愛する諸國や周りの人達の善意によつて守ろうとするのです。それならば當然のことながら、私達の生命、財産というものを守るといふこと、あるいは言論の自由を保障するといふのも我々は自分の手によつて守るのではなくて、平和を愛する諸國民によつてそれらのものを守つてもらう

のかもしれない。

従いましてこの日本国憲法というのは理詰めで考えて行きますと、独立国の憲法であるということが大変いかがわしいと思われる。じゃあそういう憲法が何故今日まで改正されずに残ってきたか。私はその点について吉田茂という人が大変悪く言われる場合もありますけれども、吉田茂元首相が自衛隊の基である警察予備隊というものを作つた時にも何度かこれは軍隊ではないかと議会で質問されると、「これは軍隊ではございません、戦力を持っておりません。」というようなことを言っております。しかしあなたの方々の先輩、一期生、二期生に吉田茂氏が語っているところを見ますと、彼は自衛隊は軍隊でない、いつまでも軍隊でないとは決して思っていない。戦力を持たせないとはいなかつた。時代が来たら、適当な時代が来れば、やがて軍隊になり、そして日本は憲法を改正して戦力を持つようになることを予想していたに違いない、という印象を私は持つております。

私は軍人ではありませんし、そして今日まで軍人であつたことはありません。ごくわずかな期間帝國陸軍の最下級の兵士であつたことはありますけれども、直接には戦争に参加したことはありません。ですから自衛官の方々、そして自衛官の幹部にならうとする方々に軍事的にこういう自衛官になれというような口幅つたいことは申し上げることは出来ません。ただかつての軍が持つていた悪さというものについては言えるかと思ひます。

私共旧制中学に入りますと、軍事訓練の授業がありました。一年生の時は、何も持たずに徒手と言ひましたけれども、整列したり歩いたり回れ右したり、あるいは伏せ、それから折り敷け、その他の基本的な姿勢を習ひ、二年生になりますと、木銃を持つて、それを銃の代わりにして訓練いたしました。三年になつて木銃で戦闘教練、主に分隊教練が中心ですが、けれども、をいたします。三年の二学期になりまして初めて三八式歩兵銃というのを渡されました。私共の中学は二十世紀と一緒に作られました、そこで初期の先輩が使つた銃が見本の形で残つておりました。村田式連発銃というのがそれでした。その次に学校に残つていた約五百丁位小銃がございましたけれども、そのうちの二百丁位が三十年式歩兵銃というものでした。それから残りの三百丁位が三十八年式、三八式歩兵銃でした。私達は小銃を与えられた時に学校に残つてゐる村田式連発銃、三十年式歩兵銃、そして三八式歩兵銃というのをまづ仲間同士で分解して調べてみた。村田式連発

銃というのは明治十三年かに出来ました単発式の村田銃を明治二十二年に改良したものです。銃身の下にもう一つ銃身のようなものがあります、ちょうどウインチスター銃みたいな形で、その銃身の下の筒型の弾倉の中に、列車のように直列に弾を入れておく。そして遊底の操作によつて弾を一発ずつ引き出しては舌のような形の鋼の枝で角度を三十度位変えて薬室に送り込むという式のものでした。弾丸の先端が前の薬莖の雷管を撃発させないかと心配でした。また私達は、ヘアピンみたいに運動する部分というのは見るからおそらく故障しやすいだらうし、こういうものを例えば泥沼の中に落としたら分解修理が大変だろうと思つた。だからこれはあまり実用には役に立たないのじゃないか、というような不安を持ちました。

その点三十年式というのはたぶん皆様方が今使つてゐると同じように、弾が弾倉の中に縦に入つてゐる、五発入れるものです。一発ずつ遊底で引き出して薬室に送り込んで射撃するというやり方です。ところが三十年式の遊底というのは構造が非常に複雑でありました。従つてこの遊底を分解するには特定の器具がないと不可能です。よつぽど指先の力が強くて器用な人だつたならば分解、結合が可能だつたかと思ひますけれども、まづは器具を使わないと分解出来ない。

その点三八銃というのは、遊底部分が五つか六つの大きな部品に分かれていて手袋をした手でも分解、結合が可能であつた。これはやはり偉大な進歩だつたと思ひます。ただ問題は安全装置で、三十

年式の安全装置の場合は安全装置が掛かつてゐる場合には射撃しようと思つても照星照尺の手前に変な棒が出ていて射撃が出来ない。だから安全装置が掛かつてゐるかないか一目で分かる。あるいは手探りでも分かる。ところが三八式の安全装置というのは九十度回転するのですけれども、回転する部分に僅かな出っ張りがあるだけで暗い所では安全装置が掛かつてゐるかどうか、ことに手袋をした場合に安全装置が掛かつてゐるかどうか判断することは困難です。安全装置の欠陥というのはありますけれども、遊底についての非常に大きな進歩があつた。それは私達は認めた。そして村田式単発銃、村田式連発銃、三十年式歩兵銃、三八式歩兵銃に至るまでそれぞれ十年足らずの間に、制式銃を交換してゐる。日本の明治の十年代、二十年代、三十年代の陸軍の誠意、誠実さ、真剣さ、問題に取り組む真面目さというものに対して私達は感動を覚えた記憶があります。

教官が我々を集めて三八式歩兵銃の性能の説明をしてくれました。有効射程距離は千八百メートルである。そして特に照尺を操作せずに射撃する時には、つまり基準射撃距離は三百メートルであるというふうなことです。我々がここで問題にしたのは千八百メートル。千メートル向こうの人間というのは人間がゐるかないかがわかる位のものである。そのようなものを射撃して有効な効果を上げることは出来ない。千八百メートルの射程距離は現実問題として意味があるかということ。それからもう一つ歩兵の戦闘で一番基本になるのは二百メートル

ラスマイナス百メートルじゃあないか。従って基本的な射撃距離は二百メートルであるべきである。ところが三八式歩兵銃の場合には、二百メートルの照尺にするためにはまず照尺を起こしてレバーを上げなければいけない。つまり二百メートルの距離にするために二挙動の操作が必要である。それに銃を持って走ったりなんかすると、照尺を起こすという作業を繰り返さなければならぬ。これは欠陥じゃないか。

私共が訓練を受け始めたのは中学三年、昭和十五年でしたけれども、その年の秋にジョン・フォードの「馱馬車」という作品が日本で公開された。ジョン・ウエインというスターが馱馬車の上からウィンチェスター銃を撃つのですけれども、ウィンチェスター銃というのはレバーを操作するだけで、二挙動の操作で新しい弾を装填して、ほとんど連発銃のようにして射撃している。

我々の三八銃、三十年式もそうでしたけれども、新しい弾を装填するためには四挙動が必要です。レバーを起こして力一杯引いて、空の薬莖を外へ排出しなければいけない。そして新しい弾を薬室に送り込んでロックする。つまり四挙動を確実にしないと新しい弾が装填されない。これは十九世紀のアメリカのカウボーイが持っている銃よりも我々の銃の方が速射能力において劣るのではないかというようなことを、私達は教練の教官に質問をした。しかし彼等はそれに答えてくれない。答えられなかったと思います。十九世紀の末から二十世紀の初めの明治二十年代三十年代の陸軍の将校達が武器を

近代化するという事に苦労したのに比べて、日露戦争以降の千九百五年以降千九百四十五年まで陸軍の軍人は基本的な武器である小銃に対して何ら改良を、本質的な改良を加えなかった。やはりこの時期日本の軍人というのは墮落していたという気がいたします。

姉が早稲田の美術史におりまして、戦後時々発掘に動員されるので、彼女はその後アメスコと言っておりましたアメリカ軍の払い下げのスコップを持って来ました。それを見て本場に帝国陸軍は負けたと思えました。私達が普通与えられていたのは小円匙と言いまして、長さ七十センチ位でしょうか、背囊の横につけて柄の先が十五センチ位背囊の上に突き出るといふ式の小さなシャベルでした。シャベルであるために伏せた状態では穴を掘ることが出来ない。伏せた状態から自分が身を潜めるための穴を掘ろうとする時、どうしても半身起き上がらなければいけない。あるいは理想的に言えば膝をついて、そして半身起き上がって穴を掘らなければいけない。そういう時にどれだけ多くの兵隊が敵の弾に当たって倒れたかということを使う。アメスコというのはアルミニウムの輪が付いておりまして、皆様方は現実にそういうのを使っているらっしゃるかもしれませんけれども、留め金一つによつてL字型にもつまり鋏の形にも、Iの字型にもつまりシャベルの形にでも使える。L字型の場合には伏せたまま片腕でそれを操作して、まず自分の胴体を入れる穴を掘ることが出来る。半身を起こさずに掘ることが出来る。小円匙を使わされた私は、姉が持つて来

たアメスコを見て「これでは日本負けのわ」と思いました。

私達が感じたその無念さ、これはある意味では幕末の日本人達がちよんまげを結っていた日本人達が先進国の文物を見て感じた情けなさと同じかと思えます。そこで私達の世代は奮起した。個人は別に奮起してまともな役に立つようなことをした覚えは全くございませんけれども、やはりその奮起したという世代が千九百五十年頃から始まりましてその後四十年間、ちよんまげから明治維新から日露戦争の終わり頃までに当たる期間頑張った。その奮起の結果がたぶん経済成長と日本の技術の進歩につながったかと思えます。

しかしモーゼがエジプト記で行いまして四十年間の砂漠の生活、この四十年間の砂漠の生活が新しいものを育てる。四十年間というのは、ある一つのスパン、広がりであろうかと思えます。幕末からちよんまげを切った人達が一応の近代国家になるのに四十年間、第二次大戦後日本人が自分達が劣っていたことに気が付いて、もう一度二度目のスタートを切つてから約四十年間。そして今は新しい退廃の時期に入ろうとしているのかもしれない。私達は第二次大戦を第一次大戦のヨーロッパ列強と同じかそれ以下の装備で戦った。その苦い経験が第二次大戦後の技術革新とそれから経済成長にあるとするならば、これから後、再び日本は新しい混乱の中に入ろうとしているのかも知れません。

ちよんまげと原生動物と同じようなもの細胞です。それから母親の胎内においてミジンコのような状態から魚類のような時代、それから両生類とも共通な時代、鳥類とも同じ時代、それから哺乳類の時代を経て、だんだん人間らしくなつて最後に人間として母親から生まれるといひます。

皆様方もたぶんおおよそ軍人として教育を受ける以上、軍人として一番素朴なもの、個人対個人の格闘、戦いということを基礎に置きまして、そして軍隊の一番素朴な一番原始的な状態から訓練を始められるのだらうと思えます。私達の場合で言いますと、中学五年のうちの最初の三年間というのは整列の時に二列横隊に整列いたしました。そして小隊長が一番右端に付きまして第一分隊長と、左翼の分隊長が両横に付き、その他の分隊長が第三列目となつて横隊の後ろに付きました。どうして二列横隊に並ぶかと言うと、昔の、ナポレオン戦争の時代までの軍隊というのは二列横隊で前進して、射撃する時には前列が膝撃ちになり、後列が立ち撃ちになつて小隊長の号令以下一斉射撃をした。その名残のために二列横隊の行進というのが基準になつておりまして。そして二列横隊のまま前進、後進そして二列横隊のまま組組右へ、組組左へ、あるいは右に向きを変え、左に向きを変えという、隊形の変換を訓練したわけです。これはナポレオン戦争時代の記憶をもう一度再履修したわけです。

そして帝国陸軍の戦いの仕方についてですが、皆様方も見えたことがないとするならば、この頃ビデオシヨップで手に

入ると思いますので、日活で昭和十三、四年頃作った「土と兵隊」というビデオを見ていただきたいと思います。あれを見ると帝国陸軍の中隊から小隊、小隊から分隊の戦闘のシステムが本場に教科書通り、操典通りに実演されているのを見ることが出来ます。ただ分隊の単位になってからはもう分隊長であり作者でもある、火野葦平らしい、つまり小杉勇という役者が演ずる一人の下士官の目を通じているので、命令がどうなっているのか、他の分隊がどうなっているのか全然訳がわからなくなってきましたけれども、つまり敵の大砲を受けはじめますと、まず疎開という、疎開と言うと学童疎開なんかになりましたけれども、旧軍では元々攻撃前進の場合に敵の火力の被害を避けるために部隊の距離を、間隔を開くことでした。ですから小隊と小隊、あるいは分隊と分隊との間の距離を開くことを疎開と言いました。号令は「開け」と言いました。さらに敵の小火器の攻撃を受ける段階になりますと、分隊はさらに列兵の距離間隔を開きます。それを散開と言いました。号令は「散れ」と言いました。

映画では散れの段階になってから以降は、もうめちゃくちゃですけれども、その段階までは昔の帝国陸軍はこんな戦争の仕方をしたのかということがわからうかと思えます。もう一つ見て頂きたいのは、軽機関銃です。銃手が病気で後退することになって、後任に申し送るところです。それを聞くと、如何に故障しやすい欠点だらけの兵器かということがわかります。私達の時代で言いますと、最初習ったのは機関銃を中心にして、散

れの場合に分隊の左右に散れということ、右に散れ、左に散れという三つの散開の仕方があったのですけれども、やがて傘型散開と言いました。一番から四番までが機関銃を中心にして先に行きまして五番以下は最後の段階まで後から付いて行き戦闘に直接参加しない、兵力を温存するというシステムに変わりました。これはたぶん昭和十三、四年の大陸の戦争の結果だと思えます。

「土と兵隊」で私達はその頃の日本の軽機関銃、機関銃というのは欠陥商品であるということ、欠陥武器であることを知っておりまして。今でこそチェコというのは工業国としては大したことはないのですけれども、その頃のチェコというのは例えば日本では作れなかったスコダという立派な乗用車も作っておりまして。そしてチェコの機関銃というのは故障がなく、中国軍が使っていました。日本軍もチェコの機関銃を奪いますと喜んでそれを使っていた。日本の精密工業というのは、まだその頃あまり良くなかった。ことに私達が使う小銃弾の空砲ですけれども、もう何度も使い古されたせいか、時々空砲を射撃した後に薬莖が薬室から出てこない。その時火薬が残っていたりすると大変怖いことになるのですけれども、いろんな不具合が当時の日本の武器にはありました。とにかく「土と兵隊」というのを見ますと帝国陸軍の戦争の仕方というのがわかって面白かろうと思えます。

過去の軍隊プロセスを経て、皆様方は今日最も新しい戦いの仕方というものを勉強しておられると思います。ただ軍隊

というのは一面において大変保守的なものであります。軍隊は秩序が乱れますと、これは戦闘能力を喪失します。秩序維持ということは大変に保守的な精神を必要とするのでございますけれども、しかし同時にただ保守、秩序を維持するだけではこれからはやっていけない。必ず新しいものがなければいけない。戦争は一回毎に新しい様相を呈します。第二次大戦と朝鮮戦争、わずか五年ですけれども違う。ベトナム戦争とベトナム戦争はもう違う。ベトナム戦争と湾岸戦争は違う。もしこれから先イラクで戦いが起こりますと、恐らくこれもまた違う様相を示した戦いになるだろうと思えます。

従いまして、軍隊というのはある意味では秩序維持ということが大変重要だと思えます。秩序を維持するための人材というのが必ず一定限度必要だと思えます。しかし同時に今までの秩序が役に立たなくなるといことを考えて、そしてそれに備える人も必要だと思えます。それには現在の秩序のマイナスを知っている者でない改良は出来ない。では今までの秩序が、あるいは今までのシステムが役に立たなくなるといのはどういう状況なのか、そしてそれを想定出来るのかということを考えますと、これはやはり教養ということに行き着くかと思えます。

私は防衛大学の卒業の祝辞を集めた本の中にも書きましたけれども、ハーバード大学が、これから我が大学は一般教養を中心にしてやっていくということを言いました時に、アメリカの陸軍士官学校が本学は百五十年前からそうやってい

ると言ったという有名な話があります。一般教養というのは何かを簡単に言うと専門ではないということです。英国で紳士、ジェントルマンというのは何かと言うと彼は職業を持つていけないという前提があります。職業を持つていない人間は紳士じゃない。つまり職業を持つていないと必ずその職業にとられるから、だから医者でもなし弁護士でもなし、学者でもなし、商人でもなし、国会議員でもなしという何なのだから分らない、そして飯を食っていく財産を持つていて。そういう人間が紳士だ。別な言い方をしますと専門家というのはその専門が通用しなくなつた時にはもはや役に立たない。

しかし専門のない人間というのは何の役にも立たない代わり何の役にでも立ちうる。一般教養というのは社会学とか哲学とか歴史学とかあるいは物理学概論とか、数学とか、そんなようなことを防大で習つて、あんなの全然面白くも何ともなかつたという記憶を持たれる人が多いと思えますけれども、一般教養を身につける条件は、そういう教室で習うものではなくて、自分が自発的に疑問を持つこと、自分は何なのだろうということだと思えます。

私は十七ぐらいの時に西田幾多郎の「禅の研究」という本を従兄弟からもらいまして、それを読み始めまして、もうこれはあかんと思つて放り投げたのですけれども、その中に絶対矛盾的自己同一というのがある。縦から読んでも横から読んでもわからないのですけれども、自己同一は何かと言うと、今の言葉で言うアイデンティティということ。そ

のアイデンティティ、自分とは何であるか、自分を一応外側に置いて眺め、鏡に映したようにして自分を眺め、そのようなものとして自分を再確認する。自分はこれこれであるという形で自分を掴む。それがつまり教養というものだと思います。自分は防衛大学の学生である。自分は自衛官である。自分は男性である。自分は何の誰がしという父親と何の誰がしという母親の間に生まれた子供である。どういいう地域に生まれ育った人間である。日本語、日本文化というものを子供の時から身につけ、そのような中で成人した人間である。いろんな形で自分自身というものを見つけると思います。

古代のギリシャの神のお告げの中で「汝自身を知れ」という言葉があったと言います。これも哲学史だと始終でくるのですけれども、「汝自身を知れ」というのはお前のアイデンティティは何か、お前は何なのだということを認識することだと思えます。教養というのは簡単に言うと、この「お前は何なのだ」ということを認識することに尽きるかと思えます。お前が何なのだと言うことを考えたところで、それではこれが金儲けに役立つか、これが新しい機械を作るのに役立つかというようなことは直接にはつながらないのです。しかしお前は何なのだということを私自身わりと痛切に感じたことがあるとすれば、十九の時に最下級の兵隊でしたが、学生でしたから、幹部になる可能性がある。私は短期間のうちに私と一緒に入った兵隊達に命令し、私達の先輩である人達にも命令しなければいけないかもしれない。お前にそ

んなことをする能力、資格があるのか、お前何様なのだという反省がまず自分の中であつた。私としたらわずかな間にそういうような人達を指揮する自信も、そのような能力が付く見込みもない。その時に自分は、もしリーダーになるとしたら、いつでも先頭において一番辛い場所にいよう、それ以外ないと思う。つまりお前は何だと言つたらその時の自分の答えとしては一番辛い場所にいるということではしかなかった。もちろんお前は何だというのはその場その場によつて、先程最初に申しました憲法と同じようにその場その場によつて違つてきます。

しかし皆様方はお前何なのだ、自衛官なのだ。あるいは防衛大学を卒業したら短い期間のうちで幹部になる、多くの人間を指揮する存在になる、それは何によつてなのだ、を絶えず自問しなければならぬ。防衛大学を卒業した、その卒業免状なのか、幹部候補生学校を卒業した、その卒業免状によるのか。恐らくそんなものではなくてそれは個々の人の内面の問題であらうかと思えます。お前は何なのだということ絶えず問い続けるということそういう意識、そのような基本的な思想がある限り、現在までのあらゆるものが、防大の卒業免状も卒業資格も何もかもなくなつた状態において、なお自分が自分であり続けることができず。自分が今まで受けた訓練、あるいは与えられた武器が全く役に立たない状態であつても自分の最低限のあり方を見つけれらるかと思えます。もちろんその中には素晴らしい能力を発揮して、そして後の時代の手本になるような行動を示

す人もいるでしょうし、あるいは一番能なしならば私がそうなつたかもしれないように、一兵士として戦車の下敷きになるかもしれない。それがどのような形であれ自分が何であるかということを考える。それが教養であらうかと思えます。

自分が何であるかということを知るために、皆様方は哲学を勉強する、経済学を勉強する、歴史学を勉強する、数学を勉強する、物理学を勉強する。学校の点数はどうでもよろしい、ただそれらのものが自分にとつてどういう意味があるかということを考える。基本的なことと言えますと、数学でプラス、マイナスというがマイナスなんていうことをどうして人は考え出したんだろう。どういいう必要があつてマイナスというものを考え出さなければいけないか。何故対数計算などという、今パソコンがあればどんな複雑な掛け算でも出来るのに、何故対数なんて妙なものが出来たのだろうか。そして対数というものが、例えばガウス平面みたいに無限大の長さを示すのに使うようになったのはどういいうきつかけなのだろうといった疑いを持てば、それらの問題と自分がどういいう関係があるか、といったことを勉強しても物理を勉強しても自分の不得意な勉強でも自分なりの物の見方というものが出来るはずです。

繰り返しますけれども、点数はどうでもよろしい、ただ自分がその科目を学ぶことの意味を一人一人自分で見つけて欲しい。自分で物理学を学ぶ、自分にとつての物理学は何かということ、自分にとつての歴史とは何かということ、もしそ

れなりに納得すれば、それによつてあなた方は自分が何であるかということを経験分でも知ることになる。そのようなものの集大成として自分をとらえること、それが教養というものであります。恐らくあなた方が受ける軍事訓練というものも教養の一部になる。あなた方が習つていくこと、例えば小銃を操作すること、射撃をすること、こんなのはあなた方は一生役に立たないかも知れない。しかし小銃を操作するということ、あなた方にどういいう意味があるかを考えることの中に、あなた方は自分と軍というものの基本を学ぶかもしれない。

旧制の中学校ではだいたい分隊長になることを予想して訓練してました。その上になりまして小隊長の訓練をする。私は旧制高校に入りまして、もちろん軍事教練なんて嫌いな子なのですけれども、やはり感心することがありました。例えばその命令文の書き方、今の自衛隊も同じかどうか知りませんが、まず第一項に状況というのがある。つまりこの自分達はどういいうような命令でどのような事情において現在の状態になつていくかということ言う。そして同時に現在自分達が直面している問題を明らかにする。次に第二項として指揮官の決心、そして自分は指揮官としてどうするかということ言う。第三項にそれに基づいて自分の部下に対して第一分隊はこうしろ、第二分隊はこうしろということ言う。その次に必要ならこの命令が発効する時間と場所を言う。最後に指揮官である自分がどこにいるかということ、明らかにする。私はこの命令文の書き方を聞

いた時に、現場においてこんな命令文を、状況、指揮官の決心、区処、命令発動の場所、指揮官の位置、そんなことをくくだ言っている暇なんかないだろうと思いましたが、やはりこの明晰さというのには日本人じゃないな、ドイツ人、ドイツの参謀本部が考えたことだろうなと思いました。これは論文の書き方と同じなのです。あるいは幾何の証明問題の証明の仕方と同じなのです。そういう時に軍というもの、近代軍というものが持っている構造というものに触れたような気がしました。

戦前の日本は軍国主義なんて言いますが、けれども、一般の国民は軍事なんていうのは無関心だった。だいたい軍事についての本なんてほとんどない。私の記憶で言いますと、昭和の三、四年頃春秋社という所で世界思想全集というのが出まして、その中でクラウゼヴィッツの『戦争論』があつたと思います。それ以降ずっと戦争に関する軍事の本は何もありませんで、昭和十九年にリデル・ハートの『近代軍の再建』と言つたと思いますが、その本が岩波書店から出版された。つまり軍事学というのは戦前では一般の学校では扱わなかつた。もちろん軍事教練はありましたけれども、私も含めて一般の学生は、もう嫌なこととしか考えない。そして国民の軍事についての無知というもの、例えば千九百二十年以降の日本の退廃を産んだかと思ひます。

今日おられる防大の学生の中で全員が自衛隊に残るとは言えないかもしれませんが、しかし社会に出て軍服を着ない、制服を着ない人達がでると思ひますけれど

も、その人達にお願ひしたいのは、やはり軍事というものの意味を、他の人達にもわからせて欲しいということ。またあなた方から一人でも多く学者や評論家がでて、軍事学というものを作り上げて欲しいと思う。だいたい軍事学というのは戦前は軍人のものであつた。そして戦後は軍事に触れること自体、軍とか戦争とか言うこと自体が顔をしかめられるような時代でした。つまり明治の近代化以来百五十年、日本国民はまともな意味で軍というものを考えたことがない。

じゃあアメリカはどうなのだよと言ひますけれども、アメリカは今なお様々なマインナスがあるにも拘らず市民が拳銃を、武器を持つことを許している。つまり自分の身は自分で守るといふ建国の精神、自分の身を自分で守る気がない人間が、どうして自分の国を守れるかという精神が裏にあるかと思ひます。それから私はアメリカンフットボール、いわゆるアメラグを見ていて思うのですけれども、あれは一種の格闘技なのですけれども、相撲とか柔道が一对一の格闘技なのに対してアメラグというのは集団格闘技なのです。あれはまさに前線の小部隊の戦いのモデルになるのじゃないか。家の中に拳銃を持つ家庭に育ち、そしてアメラグで鎖骨を折つたり膝関節を痛めたりした若者達というのは、これはちよつと訓練すれば、そして彼等に愛国心があれば立派な軍人になる。そういうことを考えますと、豊臣秀吉の刀狩り以来、日本国民一般は決して尚武の精神なんていうものはない、軍事的な知識は何もないという気がいたします。

従ひまして憲法改正というようなことを言ひますけれども、その一番大きな障害は先程言ひました旧軍に対する嫌悪感にあるかと思ひます。それと共に日本国民一般の軍事に対する無関心も無視出来なれないと思ひます。ただ近年、平和に暮らして来た国民の拉致事件とか、フルに武装した工作船が日本の近海に出没したりして、そして日本の海上保安庁の船と戦つたりする。このようなことが明らかになるにつれ、日本人も次第に国を守るということ、あるいは国によつて自分達を守つてもらうということ、あるいは国に守つてもらふためには自分達が税金を納める以外の何をすべきかということ、考えるようになるかもしれない。その期待がいくらかは持てるような気はいたします。

その意味であなた方はそのような日本人の無知を開くためのいわば最前線にある。敵という言ひ方はおかしいのですけれども、あなた方が戦うべき差し当りの目標はそういう日本国民の無知であろうかと思ひます。あなた方の先輩は無知と戦ひ奮闘されました。しかし勝利を収めたとは言えません。ですからこそあなた方、そしてあなた方の後輩にその志を継いでいただきたい。

それからもう一つ「汝自身を知る」ということにつながりますけれども、近隣諸国というものを知つて欲しい。国と言ひますとすぐに日本という国を私達考えますけれども、こんな国は世界中どこにもない。偶然のことですけれども、いわゆるヨーロッパの先進国と日本とは似ています。マルクスが言うような古代国家、

中世封建社会、資本主義段階というようなものをすらりと経過してきたのはヨーロッパの先進国を除くと世界で日本だけです。ですから日本のマルクス研究者達がマルクスの言うことは本当だと錯覚したのは無理ないのですけれども、マルクスの言うことに、普遍性はありませぬ。マルクスの理論が曲りなりにも当てはまるという意味で日本は例外的な国です。隣の朝鮮半島も日本と比べると違う国です。中国も違う国です。フィリピンもインドネシアも全部違う国です。そういうさまざまな国を知つて欲しい。

また学生諸君にはないのですけれども、ここにおられる先輩方にお願ひしなければなりません、もし日本の制服の自衛官をフィリピンの軍隊に入れてもらつて五年とか六年勤務させる、あるいは航空自衛官がインドネシア空軍に入つて五年とか六年勤務するということをしよつとすると、もう大変な障害が起きることは間違いない。しかし私は例えば軍医ならよろしいかと思ひます。あるいは市民としてならよろしいかと思ひます。色んな方法を考へていただきたいと思ひます。あなた方はインドネシアでもフィリピンでもタイでもそこへ行つてそこで暮らしてその言葉を覚えその人達の物の考へ方を肌で感じ、そしてその国と自分の祖国である日本との違いを知つて欲しい。これは別に将来フィリピンと戦うから、タイを侵略するからという意味ではない。タイ国の軍隊とあなた方が一緒になつてアフリカで国連の平和維持部隊として勤務するかもしれない。そういうことを思ひますと、あなた方はよその国を

知る必要があります。同時にイスラム世界も知って欲しい。キリスト教世界も知って欲しい。南北アメリカ大陸も知って欲しい。

つまり「敵を知り、己を知らば百戦危うからず」と言います。我を知るということは、さつき言いましたアイデンティティです。敵を知るの「敵」という言い方は戦う相手、克服すべき相手というふうにも考えますけれども、私はこの場合敵というのを非常に広い意味にとりまして、「客観」という意味に取りたいと思います。自分とは何かということを知る。その時に同時に自分の環境を知ることが出来る、自分の仲間を知ることが出来る。

私は若い時に文学の同人雑誌をやっておりまして。その中でドイツ文学科を出てきた村上兵衛という男がいました。彼は東大に来る前に陸軍幼年学校、それから士官学校それから近衛第五連隊の連隊旗手、そして戦争に負けた時は群馬県に疎開していた陸軍士官学校の区隊長をしておりまして。彼がつくづく言うのですけれども、自分は幼年学校から士官学校までずっと一緒にいる友達がたくさんいる。声をちよつと聞いただけであいつが誰だということがわかる。あいつは何が好きだということが、柔道がどの位強いかということがわかる。だけど良く考えてみると、あの男は本心何を考えていたか、ついにわからなかった。そしてこうやって一緒に同人雑誌をやってお互いに酒を飲みながら「馬鹿よ、のろまよ、お前才能がないな」と罵り合いながらしゃべり合っている時に本当に相手の気持ち

がわかる。

もし今の防衛大学校の中に規律が厳しくてスケジュールが忙しくて、寝台を並べている隣の男の顔もわからないうようなつもりでも、本当のところこの男が何を考えているかわからないというようなことがあるならば、残念なことです。自分を知るためにも、汝自身を知るためにも、自分のアイデンティティを確認するためにも、隣にいる人間を理解して欲しい。隣の人間を理解することが出来る人は、たぶん韓国の人を理解することが出来る、フィリピンの人を理解することが出来る、インドネシアの人を理解することが出来る。汝自身を知ることだと思えます。そしてその上にあつて、その他者と自分との間の問題を解決するのが言葉であるか、あるいは武器であるか、あるいはその他の手段によるか、つまり貿易交渉によるか、技術的な協力関係を作り上げるか、そのようなことはその後に来るものだと思います。手段というのは最終的にその場になつて必要性を感じて築き上げるものだと思います。

あなた方はおよそ軍というものがこの世に発生してから今日までの歴史を、いわば毎日の生活の中で訓練されている。ですから皆様方が薄々考えておられるように、もしあなた方が戦う場があつたところで今日までに学んだ、身につけた訓練というものが何ほどの役にも立たないということも、また覚悟したほうがよろしいかと思えます。それを解決するのは何か。それは自己認識であり、他者への認識であります。そしてそれに基づいて両者間の問題解決の手段・技術を考

え出さねばなりません。しかし現実には問題を解決するための手段はむしろその時のあり合わせの材料で、あり合わせの知恵で解決するより仕方がないと覚悟すべきでしょう。

あなた方の全世界の先輩は、そのようにして意に満たない状態で意に満たない道具を与えられて、しかも過大な任務を遂行してきたわけです。そのため成功した人もいる、失敗した人もいる。しかしそれに恐れず勇気を持って自分に誠実に、そして民族に対する責任を持って、そして問題の解決に向かつていただきたい。それが私が一人の国民として、将来の自衛隊の幹部になられる防衛大学校の学生諸君にお願いしたいこととございます。

ありがとうございました。

三浦朱門氏を囲む在校生代表との懇談会

参加在校生

- | | |
|-----|---------------------|
| 四学年 | 池田 莊雄 (陸上要員 航空宇宙専攻) |
| 四学年 | 清田 裕幸 (陸上要員 航空宇宙専攻) |
| 四学年 | 園田 大志 (陸上要員 応用物理専攻) |
| 四学年 | 高田 盛宏 (陸上要員 機械シス専攻) |
| 四学年 | 高橋 陽介 (海上要員 国際関係専攻) |
| 四学年 | 谷口 崇 (海上要員 管理学科専攻) |
| 四学年 | 徳田 雄三 (海上要員 国際関係専攻) |
| 四学年 | 中津 郁雄 (海上要員 国際関係専攻) |
| 四学年 | 榎本 圭祐 (航空要員 材料物性専攻) |
| 四学年 | 木村 一紀 (航空要員 電子工学専攻) |

- | | |
|-----|---------------------|
| 四学年 | 原口 大輔 (航空要員 情報工学専攻) |
| 四学年 | 兵藤浩太郎 (航空要員 国際関係専攻) |
| 三学年 | 荒井 定和 (陸上要員 国際関係専攻) |
| 三学年 | 桐谷 高弘 (陸上要員 公共政策専攻) |
| 三学年 | 黒住 匡洋 (陸上要員 建設環境専攻) |
| 三学年 | 松井 美樹 (陸上要員 人間文化専攻) |
| 三学年 | 針原 寛幸 (海上要員 航空宇宙専攻) |
| 三学年 | 平野 泉 (海上要員 機能材料専攻) |
| 三学年 | 松江 奈海 (海上要員 応用化学専攻) |
| 三学年 | 山口 喜久 (海上要員 国際関係専攻) |
| 三学年 | 須田 秀司 (航空要員 建設環境専攻) |

三浦先生 初めに、一学年四百数十名と聞きましたが、少し多いかもしれませぬ。というのは、この数は同期の者同士が内面まで理解し、わかり合うための、限界のような気がします。

陸上、海上、航空の人が同じ学舎で過ごすことは、陸海空様々な人と友情を築けますからいいことです。逆に卒業して別れたらそれきりほとんど会わない、というのはいけないと思います。これからの戦争は、もう何百万という兵士が対峙するような形とは限りません。そのかわり特殊技能を持った戦闘集団同士の戦いが多くなるでしょう。現在米軍によるイラクへの攻撃が検討されていますが、これが現実となれば、おそらく陸海空の全分野の能力を持つスペシャリストによる統合作戦が、重要なものとなると思います。

私の思う専門家の定義とは、全てのことについて何かしらを知っている人で、しかも自分の専門分野については全て知っている人間のことです。かつてありがちであった、自分の専門しか

知らないようではいけないのです。

将来のあなた方に必要とされることは体力、気力、そして全てのことについて何かを知っていて、さらに特定のことにについては追従を許さないという姿勢です。皆さんは将来自分よりも技術も経験も豊かな部下を持つことでしょう。そんな部下を率いるのに、全てのことをカバーしているという前提に立つた総合的判断力が必ず求められます。そしてこれが私の、あなた方に期待することです。

学生 防衛庁の国防省への展望はあるのでしょうか？

三浦先生 北朝鮮の問題は、ああいう工作船が来たときにどういう組織がどう対処するのかを真剣に考える可能性を開いたと考えています。工作船への対処は海上保安庁が今までやってきましたが、海保はあくまで警察でしかなく、作戦的武力を持つてやってくる者には、それでは対応できないのです。「自衛隊でしかできないこと」を理解する方向に世論が向かうよう期待しています。ただ、マスコミの影響力というのは恐ろしいもので、一気にその方向へ世論が向かうという事は難しいでしょう。しかしながら武力を持つ自衛隊に真っ向から反対している新聞もあります。北朝鮮の拉致事件等、従来の論調に不都合な事件が起こるとこれらのマスコミは間違いなく部数を減らしていると思います。

話は戻りますが、このような事件が起きたとき自衛隊でなければできないという暗黙の了解もできつつあると思

います。憲法が変わり、防衛庁が国防省になり、それが国を守る組織集団になる、という気運はいずれ高まってくることでしよう。工作船の事件は不幸なことではありましたが、その事からも防衛のあり方を考えていくことが必要とされるようになったと思っております。

総理というのは大変不自由で、はっきりと断定して物を申すことの出来ない立場にあります。しかし、みなさんが自衛隊のトップになるときは日本の体制は変わっているのではないかと期待しています。

学生 先生は、おそらく日本で一番有名な作家夫妻でいらつしやるわけですが、同じ屋根の下に芸術家が二人いるという事は、お互いの創作活動にプラスに働くものなんでしょうか？それとも、「最も厳しい評論家を常に隣に置いていこうと、やりづらい」(註：ピアニスト、マウリツィオ・ポリーニの言葉)ものなんでしょうか？

三浦先生 あなた方で例えるなら、ちょうど自衛官同士が結婚するものと考えて頂きたい。

まず、私たちはお互いの書いた物をほとんど読みません。というのは、「こうこう、こういうことを書いた」と言うのと、内容は想像できるからです。私たちはそれぞれ違った特殊法人の会長をしており、仕事も違いますが、お互いに役に立つことを交換し合えます。私は日本芸術文化振興会会長の仕事をしておりまして、新国立劇場の設立などについても関わりましたが、妻

の方は日本財団の会長をしております。法人のトップとして、互いに意見交換が出来るわけです。また私たちは作家という職業柄、より根本的な、人間の本質や文化というものについて話し合ったりすることが多いのです。

昔私が日大の教師をしていたときには、私の先輩が「菓子屋の小僧は自分の店の菓子には手を出さない」と教えてくれました。まあその通りで、私は自分の店(自分の教えている大学)のお菓子に手は出さなかったのですが、他の店のお菓子に手を出して(笑)、聖心女子大に通う彼女と付き合うようになったわけですが……。

初め彼女は私たちの同人雑誌の仲間に入れてくれといってきました。書いてあるものも悪くないので、いいだろうということになった。ある日彼女と話をしていた、「好きな作家は？」と訊いたところ、チャールズ・ディケンズのこと好きだ、と言いました。ずいぶん通俗的な作家が好きなのだと言ったら、彼女は、「チャールズ・ディケンズが通俗ならマルクスも通俗だ」と答えたのです。これには私は驚きました。ディケンズとマルクスは同じ時代にイギリスで活躍していました。ディケンズの父は借金か払えず刑務所に入っていました。そのためディケンズは小さい頃から、靴墨用の墨を得るため煙突の中に入ります。取るようなことをしていた、だから彼はプロレタリアートについてよく知っていたのです。一方マルクスは貴族の娘と結婚して、裕福な生活をしていただけのみ

ならず、家で雇っていた女性を身籠らせるようなことまでしています。マルクスは十分に通俗的だった。そうすると、ディケンズとマルクスと、どっちが通俗的で、どっちがプロレタリアートのことをよく知っているといえるのか……彼女の話聞いて私はびっくりしました。彼女の通う聖心女子大文学部ではそんなことも教えるのか！と……まあ、それはあとで妻はそこまで考えて言っていたわけではなく、私の買い被りであったことがわかったのですが(笑)。

インテリゲンツィアの家で育った私は、ブルジョワの家で育った彼女の、いわば百科事典のような役割をしていたと思います。インテリゲンツィアはお金のことを軽蔑する傾向がありますから、私は彼女から形而下的な生活を学びました。

違う環境に育ち、違うジェンダーであるから、お互いにマイナスの面もありますが、相手からよきものを得ようとする限り、そして相手に対する愛情がある限り、二人でいることはよいことだと思えます。自衛官同士やごく近い関係にあるもの同士が結婚するとき、きつと何か役立つことがあるでしょう。いやどんな職業でもいい。相手に何を与えられるか、相手から何をもらえるかが重要なのです。

学生 この学校には一記念祝賀会で挨拶をされた松本三郎前校長がよくおっしゃっていた言葉ですが、「知育・徳育・体育」という言葉があります。そのうち、「知」すなわちインテリジェ

ンスの部分については最近のIT技術の発達で、「体」つまり人間の力の部分については産業革命以降のテクノロジーの進歩によって補完されてきました。それでは、「徳」の部分も補完するものは何なのでしょうか？また、モラルの荒廃が叫ばれている現在、一度崩れてしまったモラルを再構築するために、我々若い世代はどう行動すればよいのでしょうか？

三浦先生 その話でしたら、妻の曾野綾子を呼んできたほうがいいかもしれない……（笑）。知・徳・体は古代ギリシャの三つの価値、真・善・美が人間に具現したものと考えるべきでしょう。妻はギリシャ哲学に非常に興味を持っていてのですが、ギリシャ語の「徳」という言葉には、勇氣・誠実といった意味があるそうです。日本語で徳と言う場合は、中国の儒教的哲学の影響を大きく受けていますが、「知・徳・体」に関して言うならば、ヨーロッパ風に考えたほうがよいと思います。

徳とは誠実さと、「かくあるべき」を貫く勇氣です。使命感を見極め、いかにあるべきかを考える、これは「知」に属します。その信じるもの、「かくあるべし」と思うことを貫くことが、徳です。

例えば部下が自分の思うようにならないとき、自分に誠実であり、かくあるべきというものを貫けるのが勇氣であり、徳であると私は考えます。また、それを貫くためには、体力が必要になります。

戦時中の大学生は入隊して試験に合格しますと、今で言うところの幹部候補生の訓練を受けました。そのときの訓練の一つに、完全武装で2キロ走って、そこで問題を出され、「解答如何、五分？」というのを八キロ、十キロと繰り返すものがありました。最初の2キロくらいはまともな答えができるのですが、それが十キロ十六キロと走ると疲れて、適当な答えしかできなくなるのです。後で見ると本当に恥ずかしい答えをすることになります。結局体力がないと、極限状態に近づくにつれ、知力が衰え、誠実さを貫く勇氣もなくなるのです。

知育・徳育・体育とは一体のものです。知育を磨いて自分がいかにあるべきかを考え、勇氣や誠実さを身につけ、それを貫き通す体力をつけなければなりません。そしてそれが一番必要とされるのがあなた方軍人なのです。

学生 国民の無知を啓くというお話で、戦争を教えない・また戦争に目をつぶる風潮のある教育が問題だとおっしゃいましたが、私たちは一体どうしたらいいのでしょうか？また先生は、近現代の歴史教育についてどのようにお考えなのでしょうか？

三浦先生 まず皆さん方がしなければならぬのは、職務に忠実に生きることです。防衛・軍事に関する問題はいろいろとあります。これらの問題の解決に真剣に取り組むことが、そのための努力を惜しまないことが、とりもなおさず職務に忠実に生きることになると思います。

また教育については、教育基本法が変わろうとしています。国家観が変わろうとしています。あらゆるものが変わろうとしています。戦後、我が国は日本の伝統・文化・優れたものを軽んずる傾向にありました。占領政策にのっとなって作られた憲法の下、愛国心などは軽んじられてきました。しかし現在は左翼的だった有力量コミでも愛国心の形を議論することはあっても、愛国心はいらぬと言言説はなくなってきました。

今の教育基本法には、義務の思想はなく、「個人として」の完成しか書いていません。日本がいろいろな国際協力をやっているが、そこに参加している人たちが感じているジレンマを国民も考えていかなければならないと思います。国際協力に関しても金さえ出せばいいというのでは、駄目になってきました。

新しい教科書の影響で従軍慰安婦の記述もなくなってきました。娼婦がいたことは望ましくないことではありませんが、昔は軍についていくそういう施設もありましたが、これは「日本軍独自の悪」ではありません。新しい歴史教科書の波及効果で全ての教科書の記述が変わりつつある。教育基本法も変わってくるでしょう。

学生 防大生のあるべき姿とはどのようなのだとお考えですか？

三浦先生 隊の秩序に対して誠心誠意従い、どのような劣悪な環境でも任務を遂行できる事が第一です。そしてこのような秩序や任務に対する服従心を持つ

つのと同時に、自分たちが受けた教育や任務に常に疑問を抱いて接する事もできることがあるべき姿だとも思います。人生、間違いと知っていてもやらなければならないことがある。将来幹部となるあなた方なら、部下を騙してでも何かをやらせることがあるかもしれない。そのときに根本的な悩みや疑問を持ちながらも従い、任務を遂行する。それが必要であり、やがてあなた方の知性にもなるでしょう。

任務をただ遂行するのではなく、任務に対する疑いを持ち、疑いへの回答を考えて欲しい。技術的なことは陸曹や海曹でもできる……あなた達にできることはここにあるのではないのでしょうか。軍の根本的な改革は、幹部でなければ出来ません。

学生 先生は、天皇についての著書も出版されていますが、どのようにお考えですか？またこれからの天皇のあり方や皇室のあり方はどうあるべきでしょうか？

三浦先生 天皇は日本文化のシンボル、象徴だと思います。私の友人の話を聞かれました。彼は学生上りの幹部候補生で、夜間行軍をしていました。やがて明け方、東の空が白くなってきた頃に西の方を見れば月が残っていました。その時ふと、万葉集の「東の野にかぎるひの立つ見えてかへりみすれば月かたぶきぬ」という歌が思い出されて、非常に感動したというのです。私が思うにこのように、千三百年前の歌に感動できる国民というのは日本人しかいません。杜甫の詩は字体が変わ

つたために現在の中国人ではわからないのです。

日本の文化は中国文化を取り入れ、仏教を取り入れる際にはインド地方の文化も取り入れています。中世には仏教的な形而上的思想も取り入れるが、それも日本的なものになりました。明治には西周や福沢諭吉がヨーロッパから文化を取り入れて、多くの言葉を翻訳しました。それらの言葉をなくすと、今の東アジアの近代化は成り立たないと思います。ベトナムで共産を表すコンサンという言葉聞いたときに、それは漢字に直せば「共産」という意味だとわかったことがあります。そして「共産」とは日本人が翻訳したものです。

千年以上昔から異文化を取り入れ、十八世紀になってからはヨーロッパ文明を取り入れようとし、翻訳し続け、日本人は乗り越えたのです。中国・朝鮮・インド・西洋の文化を取り入れて、一つの言葉で表現でき、それでいて独自性を失わない文化は、やはり日本の文化のみです。物理的な力、つまり武力でもって日本を守るだけではなく、(日本の)文化も守ることも歴史的な意味合いがあると思います。それが何億人もの人のためになると思います。

これらの文化のシンボルとして、また私たちの歴史的現実として天皇がある。天皇は政治上の国家元首や統治者である必要はありません。天皇はかつて「みかど」と呼ばれ、帝、もしくは御門と表すが、これは門という意味で、

つまり中は見えない、天皇は見えないし見る必要もないということなのです。皇居に行くとき宮殿は見えないし封建時代の壕や石垣に囲まれている。しかし皇居の緑の中に天皇は確かに存在するのです。

天皇制については今までどおりのあり方であればいい。むしろ二十世紀前半の天皇のあり方が異常だったのです。

学生 自分の父くらいの年齢の人を幹部として指導する時に、防大でのやり方では無理なような気がするのです。どのようにして人を惹きつければよいのでしょうか？

三浦先生 私たち学生が戦時中軍隊にとられて、一年ばかりの訓練で将校になるときに悩んだのはそのことです。まず、人を指導するとき人に惹きつけなければ、と考えると難しいでしょうね。自分よりはるかに経験を積んだ人たちに指揮するには、自分が真っ先に死ぬつもりでやればいいと思います。もちろん死んではいけないのですが、そのつもりで指揮していれば、きつとついて来てくれる、そう思います。もちろん、戦時下ということもあって「真っ先に死ぬ」という考えが一番に出てくるのでしょうか。

あなた方は何のダレガシと言うただの人ではなく隊長なのです。私はその時、すぐれた部下を前にして怯えてはならないと思います。一生懸命、とにかく一生懸命。自信なげな態度はいけません。その地位にいる人間として能力の不足はその結果に跳ね返ってくる

でしょうが、自分のやるべきことを一生懸命やるのです。最もよい隊員にも、最もよくない隊員にも全力でぶつかることです。それは、自分の打算ではなく、「よき隊員」にするために一生懸命ぶつかることなのです。

隊長として、やるべきこと、やらねばならないことを、徳、つまり誠実さとかくあるべきを貫く勇気を持ってやればよいのです。ただし徳を貫くには体力が必要となりますね。

学生 私は遠藤周作先生の著書が大好きです。三浦先生は遠藤先生と親交が深かったとお聞きしたのですが、遠藤周作先生についてお聞かせ願います。

三浦先生 遠藤は、それはそれは成績の悪い学生でした。それでいて秀才でした。彼の特徴は、裏切られた苦しみ、裏切ることの苦しみをよく知っていたということ。彼が小学校四年生の時に書いた、どじょうの作文というものがあります。それは、水槽で飼っていたどじょうが次々に死ぬので「もつと広い所に移してやろう」として学校の池に放したら、ついに全滅してしまいました。そこで、自分はどじょうに悪いことをしてしまった、自分は責任を放棄したのだと悩むわけです。似たような話で、犬の話というのがあります。彼は幼い頃大連に住んでいたのですが、両親が離婚したので、母親に連れられて日本に戻ることになった。その時、飼っていた犬が見えなくなるまでずっと追いかけてきた。彼は、自分の飼った犬を裏切ったという気持ちに苛ま

した。この時の記憶が、さっきのどじょうの作文に繋がっているのです。

戦時中、彼は自分がキリスト教徒であることについて一当時、キリスト教徒は国賊呼ばわりされていましたから一悩みました。あるとき彼は、下北沢の古本屋に行つて佐藤朔先生の文学とキリスト教の関係を書いた本を見つけたのがきっかけで、慶応の佐藤先生のところ、仏文科に進学しました。そこで彼は佐藤先生からフランス語の本を手渡されて一彼はフランス語が全くわからなかったのですが一読まなければ佐藤先生に申し訳ないと思つて、辞書を引きながら一生懸命読もうとしました。ドジョウや犬のときのように佐藤先生を裏切りたくない。そんな具合です。二、三ページ読んで、先生のところに行つてその本に書いてあったことについて話して、また新しい話題が出たら、次のところを数ページ読んで……、ということを繰り返していきました。そうしているうちに、彼はフランス語ができるようになった。そのとき彼は「秀才」になりました。

そして彼はフランスに留学するわけです。彼が留学している間に、慶応仏文科の新しい教官に誰を雇うのかという話が出ました。この時、東大出身の若い学者が良いのではないかという話が出たのですが、慶応の仏文科は「もうすぐ遠藤が(フランスから)帰ってくるのだから、もう少し待とう」ということになった。

「君子、豹変す」という言葉がありますが、あるチャンスを得たときに人

五十周年記念顕彰碑献花式によせて

宗 幹 雄

遅れていた紅葉前線が一気に南下し、寒さが一段と厳しくなっています。

此度は、防衛大学校五十周年記念顕彰碑献花式に御招待戴き誠にありがとうございます。

私の兄、敏道は二期生でした。福岡県築城基地勤務中、交通事故死いたしました。昭和三十六年四月八日のことでした。二十六歳でした。

兄は、父が警察官僚であったため、ソ連軍に懸賞付きで追われており、父不在の一家を連れての満州からの引き上げ、帰国しても食糧難の時代、妹弟の空腹を満たすべく満員列車での買出し等、小学生時代から苦労いたしました。

父が帰国してやっと家族も安堵の生活が始まり、兄は、ソ連軍の暴虐を見、同時に共産主義の恐ろしさを知り、父の薦めもあり防衛大学校（保安大学校）へ入学致しました。

私は今や六十の半端の年となり、妻と二人の娘に恵まれ、その二人の娘も嫁いで幸せな生活を送っております。

亡き兄を想う時、二十六才で志半ばで、未だ結婚もせず、路上で散った兄を何か可哀相だといつも感じておりました。

五十周年献花祭に参加させて戴く際

し、兄と父母の写真を持って行くことに致しました。

十六日同窓会受付に参りますと、野本恒雄さんが居られました。十七日記念式典、観閲式に参りますと松井滋明さんが居られました。

お二人共、私共夫婦に付き添い案内する為にわざわざ来ておられるのだと不覚にも後になって知り申し訳なく有難く思いました。

野本、松井両氏は、兄が亡くなって以降も、父母には息子の様に、我々妹弟には兄の様に面倒を見ていただきました。

又、兄の眠る多摩墓地には命日に併せて毎年、四月第一週の日曜日に二期生の皆様が墓参りをされるのが恒例となり桜花の下で、各々持参した得意料理の重箱を開け、お酒を飲み、偲ぶ会が開かれました。

結婚されると奥様を連れ、子供が生まれると子供連れで、多い時は四、五十名にもなる程でした。

こうして二十数年、三十年近く父母を慰め、励ましたくございました。父母の喜び様はとても表現できません。

五十周年祭を拝見し、感無量でした。学生の頃、兄の運動会等で訪れた小原台は目を開けていられない程の砂埃の中

は豹変することがあります。豹は子供の時、斑点はないのですが突如全身に斑点ができます。遠藤は頭のいい鈍才だった。佐藤先生に会わなければ鈍才で一生を終えたことでしょう。同じことは自衛隊においても言えると思います。人間はある条件・環境の中では無能でも、一つのチャンスをつかかして変わる事がよくあります。あなた方には感覚としてよいから、そのことを将来部下を持つ身として知っておいて欲しいのです。部下の中に、第二の遠藤周作がいるかもしれません。また、あなた方の中にも、「遠藤周作」がいるのかもしれない。

学生 私は海上要員なので、どうしても海軍戦略に傾いた話になってしまいました。最近の米海軍の戦略構想でも、一方「統合」が必要だと言われながら、海軍は独自のやり方でいこうとしています。先生は自衛隊に根本的な改革が必要、とおっしゃりながらも、今日の講演で保守性が必要だと、おっしゃっていました。それはどういうことなのですか？

三浦先生 私は保守的なものを身につけていなければ、統合はできないと思っています。海上は海上の特殊性を持って、はじめて陸上や航空と相談し、共同できるのです。世界の先輩たちが通ってきたことを全て忠実に通っていないかなければならない。そうしないと、将来の戦いはわからないと思います。

あなた方は明日パレードをされると思いますが、パレードをして何の意味が

あるのか。実はあのパレードの中に十八世紀の戦い方がある。今日の講演で私をはじめの部分で二列横隊での訓練をしたという話をしましたが、訓練をおして古代から今までの戦いをやっているのです。明日のあなた方の棒倒しなど、さしずめ、縄文時代？の戦争でしょう。そのようにして古代から現在の戦いは学ばなければこれからの戦いはわからないと思います。

三浦先生 まず体を大切にしてください。そうしないとどんな知育も育ちません。この体を大切にしてくださいという言葉は、ただ単に御身御大切にという意味ではなく、体を鍛錬し、最高の状態に保つことを言っています。日常の業務や訓練は、十のうち七、八の体力でもってこなせるように、体を鍛えてください。余力を残しながら、という前提の上での知育、徳育なのです。

に白い学生会がありました。この五十年で全く一変致しました。

日本を背負う学生のための堂々たる学び舎がありました。学生は若く、美しく、逞しく、姿勢、動きは五十年前と少しも変わりません。これを拝見した時、私は、はきつりと覚ることが出来ました。防衛大学の教育は、骨の髄までの全人格教育なのだ。

松井、野本両氏が何気なく我々に付き添ってくださること。

毎年の墓参りに家族を上げて三十年近くも通い続け、見守って下さった二期生の皆様。

そして今、若者たちがこの伝統を引継ぎながら五十年が過つ。

私は兄がやっと二六歳の顔でなく、年相応の姿になったと悟ることが出来ました。

可哀相でなく、「どうだア」という顔に見えます。

本当にお蔭様で区切りが付きました。ありがとうございます。父母も笑顔でこの式典を楽しんだと思います。

同窓会の皆様の心情あふれる御招待ありがとうございました。父母が亡くなりました。二期生の方々にお礼の言葉もなく歳月が過ぎてしまいました。

ここで改めて御礼申し上げます。

阿部様、同窓会の皆様のご健勝、ご多幸をお祈り申し上げます。

会員御入会のお願ひ

財団法人防衛大学校学術・教育振興会は、防衛大学校における教育及び研究を支援することを主たる目的として、各界からいただいた拠金を基に昭和六十二年八月に設立された財団であります。

いうまでもなく、防衛大学校は、我が国防衛の根幹である幹部自衛官たるべき人材を育成するための教育機関であり、同大学校において優秀な教官による優れた教育と研究がなされるか否かが、我が国防衛の将来を左右すると言つても過言ではないと思ひます。しかし、同大学校における教育・研究は、厳しい財政事情の下で残念ながら経費の面で充分とは言えない状況にあります。

このような状況に鑑み、当財団といたしましては、外国及び国内からの優れた学者等を部外講師として招へいするため、の援助、教授等の国際的な学会への参加の援助、特に優れた若手教官に対する顕彰と教育・研究の奨励、学生の短期海外留学の援助、学生の校友会活動や福利厚生への援助、研究科学生の学会参加の援助、最近著しく増加しつつある外国人留学生に対する援助等をはじめ各般の活動を行い、設立以来防衛大学校を財政面から支援して参りました。その結果今日では、当財団の援助は、防衛大学校における円滑な教育及び研究の運営を側面的に支援する上で必要欠くべからざるものとなる

に至っております。

一方、当財団の財政につきましては、近年の金利の低下の影響が余りにも大きく、ここ数年赤字基調の続く厳しい状況にあり、財団としても、止むをえず防衛大学校に対する援助対象の厳選と援助の削減を実施しこれに対処してきたところであります。

ついでには、防衛大学校の卒業生各位に、当財団の防衛大学校教育に果たしている役割と、その置かれてある財政の現状を御理解いただきまして、当財団の会員として御入会のうえ、御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成 年 月

財団法人防衛大学校学術・教育振興会

会 長 松 本 三 郎

法人会員 一口 二十万円

個人会員 賛助会員 一口 二万円

一般会員 一口 五千円

連絡先 防衛大学校学術・教育振興会

〇三―三三六八―四九五二



小原台は今

第八回国際防衛学 セミナーについて

11期 川村康之

一 全般

防衛大学校は、平成十四年七月九日（火）から十八日（木）までの間、アジア・太平洋地域十三カ国からオブザーバー一名を含む十四名の参加を得て、第八回国際防衛学セミナーを実施した。また、国内からは一般大学・研究機関から四名が参加した。

本セミナーは、「防衛大学校における防衛学の教育・研究の充実発展を図り、防衛大学の新しい時代への対応に資する」とともに、「参加各国の防衛学の教育・研究の充実発展及びわが国との安全保障にかかわる相互理解の促進に寄与し、あわせて「国内の一般大学の防衛学に関連する学部・学科および部内外の同種研究機関等の教官・研究員に対し、相互理解の場を提供し、相互啓発に資する」ことを目的として、平成八年から毎年実施されているものである。

国際防衛学セミナーは、毎年三月に実

施している「国際士官候補生会議」とともに、防衛大学校が実施する国際交流事業の二本柱の一つである。また、その目的から、防衛学教育学群の教官が、準備と実施の中核となっている。

紙面の関係上、ここでは、セミナーの中心である研究会の準備、実施および成果の概要について紹介したい。

二 計画及び準備

(一) 実施大綱の検討

平成八年度に開始された国際防衛学セミナーは、過去七回の開催を経て、防衛大学校の国際交流事業の柱として定着し、成果を挙げてきた。しかし、本セミナーの中心となる研究会における発表・討議の内容は、防衛大学校の教育全般にかかわるものが大部分であるにもかかわらず、学校全体として取り組む環境になかったため、得られた成果が学校の教育・研究に充分反映されていまいという問題点があった。

このため、本セミナーを学校全体の教育・研究に資するよう、今回から、参加範囲、テーマ等を防衛学に限定せず、学校全体に拡大することとした。

そして、全校的な参加を可能にするための具体的な改善事項として、今回のセミナーのテーマとして予定されて

いた「戦史教育」を、「士官学校における歴史教育」に拡大し、発表・討議委員として各学群から広く適任の教官の参加が得られるようにした。

(二) テーマ設定の狙いと背景

歴史教育は、教養教育の科目として、学校全体の教育と深いかわりがあると同時に、防衛学においても重要な科目の一つである。また、本テーマを通じて、士官候補生教育における学問的な教育の全体像や理念を考察する機会が得られる。

このような認識に加え、現代の国際社会と変化の方向を考察すれば、国際化（グローバルゼーション、ボーダーレス化）の進展、国家や軍隊の役割の変化、テロリズムなどの国際問題への対応における多様な国家、民族、宗教や文化に対する理解の必要性の増大などによって、歴史に学ぶことの重要性が再認識されている。

このような背景のもとに、テーマを次のように定めた。

メイン・テーマ…

「士官学校における歴史教育」サブ・テーマ…①「歴史教育の理念」②「歴史教育の方法」

セミナーにおいては、以下の事項に関する発表・討議を期待し、準備した。

- ・士官学校における教養教育の意味
- ・歴史教育の意義
- ・歴史教育の位置付け
- ・歴史教育の区分と方法（教養教育、専門教育、防衛学）

しかしながら、これらの区分は、防衛大学校の区分であり、参加各国の教

育機関では必ずしもこのような区分に従って教育が行われているとは限らないので、それぞれの区分や重点にしたがって発表を準備してもらうこととした。

(三) いわゆる「歴史認識」の問題への対応

第四回セミナーにおいて、すでに「戦史教育」が取り上げられていた。そのため、わが国と中国、韓国などの周辺諸国との間で、いわゆる「歴史認識」に関する議論が生起する可能性があり、事前の慎重な対応が必要であった。歴史の教育の重要性については、論をまたず、これを避けて通ることはできないので、前回同様、この問題への対応を検討した。

その結果、以下の基本方針を決定した。「自由で活発な討議を促進する一方、社会の適切な統制によって必要以上の議論に陥ることを回避する。このため、議長は、発表・討議に先立って、以下のことを明言する

① 自由で活発な討議を促進する。このため、「発表内容を他の論文に引用する場合は、発表者の了解を得る」というチャタムハウス・ルールが適用される

② 発表・発言は、個人の資格で行うものであって、所属する政府または機関を代表するものではない

③ セミナーの目的は、参加各国の士官学校等における歴史教育の向上を目指すことにあり、議論を通じて何かの結論を得ようとするものではない

韓国からの参加者は、日本と韓国の

間に歴史認識に関する相違があることを指摘し、「真の民主主義によって、共通の歴史認識を確立することは可能である」と主張する論文を提出したが、以上のような対応によって、懸念されたような個別の問題に立ち至った議論は生じしなかつた。

三 研究会の実施

(一) 基調講演

七月十日、オリエンテーションに引き続き、人文社会科学群の田中教授による基調講演を実施し、大学設置基準に基づく教養教育の理念、防衛大学校における教養教育としての歴史教育の現状、問題点などを紹介し、発表討議のための論点を提起した。

特に、日本の歴史教育における問題点として、現代史の評価が研究者の間で大きく分かれていることから、学生に対する教育内容として積極的に取り上げられにくい点や学生の歴史離れの傾向が指摘したところ、各国参加者の共感を得た。

(二) 第一セッション

第一セッションのテーマは、「歴史教育の理念」であり、オーストラリア、カナダ、中国、インド、インドネシア、マレーシア及びモンゴルの七カ国が、それぞれ各国における歴史教育の理念、現状及び問題点等について発表を行い、それに基づいて討議が実施された。

オーストラリアからは、歴史教育の重要性にもかかわらず、必修科目では

ないことが問題点として指摘された。歴史学専攻課程を有しているカナダからは、Ph. D.の学位を取得した制服の教官を得ることの困難性が指摘された。中国、インド、インドネシア、マレーシア及びモンゴルは、主として軍事学としての歴史教育の理念や概要について発表した。この中で、インドは、ナショナル・アイデンティティーの確立のために歴史教育が重要であると強調し、モンゴルは、社会主義教育を離れた愛国心や忠誠心を強調する新しい歴史教育が模索されていることを紹介した。

(三) 第二セッション

第二セッションのテーマは、「歴史教育の方法」であり、フィリピン、韓国、ロシア、シンガポール、タイと米

国が発表を行った。フィリピンは、統合の士官学校において、ナショナルリズムを強調した歴史教育、タイは、海軍士官学校において王室を中心としたタイの歴史の教育を通じて、愛国心や忠誠心を育成していることが紹介された。

シンガポールは、国軍統合軍学校における各級士官に対する歴史教育を紹介した。この中で、士官候補生から上級の士官に対する一貫した歴史教育が取り上げられていた。

韓国は、EUの例を挙げ、近隣諸国の歴史認識を統一する必要性を強調した。これに対して、インドとロシアは、歴史認識の統一は不可能であると反論した。韓国は、現在には不可能であるかもしれないが、将来については楽観し

ていると述べて討議を終了した。

(四) 総合討議

研究会の最終日である七月十三日には、総合討議が実施された。まず、さまざまな視点から行われた発表討議を総括する意味で、教養教育としての歴史と個別分野の歴史である戦史との対比が議長によって提起された。

ここでは、古代から現代までの通史を重視するのか、あるいは特定の時代や現代の問題を重視するのか、教養教育の重要性はどこにあるのか、歴史教育の重要性をどのように考えるか、歴史教育において客観性を維持するためにはどうすればよいのか、学生の歴史離れをどうすれば防止できるのか等の問題について、活発な議論が行われた。

特に、国際関係がグローバル化する中で、国際的な視点を持つべきであるというロシアの指摘や自国中心主義の視点では不十分であるという米国の指摘が注目された。

四 参加者の所見

総合討議の総括の際、各国の所見を求めたところ、以下の発言があった。

・各国のさまざまな教育理念や方法について学ぶことができた。自国の歴史教育を見なおす場合の参考にした。(オーストラリア)。

・参加各国の事情は異なるが、この発表討議を通じて、教育のあるべき理想を求めて議論できたのが良かった(インド)。

・議論における率直な精神や真剣な態度

に感銘を受けた(ロシア)。

・国情、軍種や経歴の異なる多様なメンバーが参加したこのセミナーにおいて、多くのことを発見できたことは、とかく自国中心主義に陥りがちな我が国にとって重要であった(米国)。

・セッション中の司会を適切に行った議長に感謝する。参加者が相互に協力しながら有意義な成果が得られたと思う(韓国)。

また、国内大学等からの参加者には、セミナー全体の印象とセミナーに対する提言を含めた所見を求めたところ、以下の回答を得た。

・単なる交流ではなく、真摯な雰囲気あり好感が持てた(東京女子大教授)。

・配布資料は、良く整理されており、会場についても良く配慮されていた(日本大学助教授)。

・討議をする雰囲気が良い。また司会進行もむらがなく、順当な国際会議であったと思う(東京理科大学講師)。

・国によって、内容やレベルにかなりの差があった。テーマの設定に工夫をこらして実質的な討議ができるようにすべきだと思う。防衛庁内の各種国際交流事業に関する意見交換が必要である(防研室長)。

五 研究会の成果と今後の課題

今回のセミナーから、防衛学以外の分野の教育についても取り上げ、士官学校教育全体を対象としたものテーマを拡大したことにより、問題も生じたが、一つの前進でもあった。各国の国情に応じて、

教育の理念と方法に大きな相違があることを相互に認識できたことは、国際化の時代において、それ自体が大きな成果であろう。

その一方で、我が国における歴史教育の理念と方法については、いまだに確立されていないことが、研究会の準備間によく理解できた。このため、まず、防衛大学校においてこのような議論を深め、真の教養教育を根付かせるための努力が引き続き必要である。

このような意味で、第八回国際防衛学セミナーは、歴史教育を通じて教育の現状を深刻に見直すよい機会となり、防衛大学校と参加各国の士官学校教育の向上に資するという目的を十分に達成し得たものと思う。

おわりに

本稿は、防衛大学校においてどのような教育・研究に関する活動が行われているのか、その中で、卒業生を主体とする防衛学教官がどのような役割を果たしているのかなどについて、国際防衛学セミナーを通じて紹介したものである。ちなみに、第八回国際防衛学セミナーは、防衛大学校幹事が実行委員長、戦略教育室長が実行部会長、統率・戦史教育室の川村が発表討議委員長となつて実施された。最後に、関係各部の卒業生多数の協力を得て初めてこのように大きな国際セミナーの開催が可能になったことに感謝申し上げ、結びとしたい。

国際士官候補生 会議参加学生所感

三月二日(土)～十日(日)、防大において第五回国際士官候補生会議(ICC: International Cadets' Conference)が開催された。参加者は、オーストラリア、カナダ、フランス、ドイツ、インドネシア、イタリア、マレーシア、フィリピン、韓国、シンガポール、タイ、英国、米国の十三カ国からの士官候補生で、イタリアは今回が初めての参加であった。会議は三月四日(月)～六日(水)、全学生が参加する形で「21世紀における新しい脅威と対応」を主テーマとして、「テロリズム」、「サイバー戦」、「難民問題」の

三つをテーマにしたセッションが行われ、海外の士官候補生たちと活発な討論がされた。その後参加者一行は、富士、横須賀及び浜松でそれぞれ陸上、海上、航空自衛隊の施設を研修し、横浜、鎌倉方面での史跡研修を行った。

以下、本校から各セッションに議長として参加した三人の学生の所感を紹介する。(学年は、国際士官候補生会議当時)

第一セッション(テロリズム)

三学年 高橋 陽介学生
九月十一日に世界を震撼させたテロリズム。この問題を如何に取り組みか考え、テロリズムを四つのカテゴリに分

け、防大側参加者と海外士官候補生をベアにして一つのテーマを担当させる事にした。つまり、意見をぶつけ合う形である。では、どんな会議が出来上がったのだろうか？

まず、松木優子学生と米国のディレク学生在担当した「国家支援テロ」。これをなくせるかどうか焦点が絞られ議論が展開、なくせないとするものの脅威を減少または無力化できるという両学生の強い態度が印象的であった。

次に、本田一郎学生とマレーシアのアズリル学生在担当した「宗教テロ」。敏感になりがちなテーマだけに心配であったが、冷静にテロと宗教の関係を分析した彼らの主張は、質の高い議論を呼び起こした。

そして、斎藤雄介学生と英国のポール学生在担当した「大量破壊兵器」。特にテロリストが核兵器を手に入れ、使用する可能性を模索した彼らの現実的な視点は、まさに現代における核管理問題を浮き彫りにしたような気がした。最後に、松崎周学生と韓国・キム学生在担当した「国際協力」。テロリストに対する国際社会の対応は、武力に依るべきか否か、という問いに対して人道的側面や現実的な有効性という視点を提供してくれた。

閉会式でも言ったとおり、我々はセッションとして結論を一つにまとめ、提言のようなものを出す事はしなかった。しかし、会議は踊っていたかというところではなく、おたがいの個性、国柄をぶつけ合った当セッションにおいて、本当の意味で相手を理解し、学ぶものも多かったと確信している。

第二セッション(サイバー戦)

三学年 横山 真樹学生
ICC期間が始まり、一週間はあっという間に過ぎ去った。事前勉強会が三ヶ月ばかりあり、セッションのみんなですトレートに自分の意見を言い、時には意見が衝突することもあったが、ICC会議では今までの成果を十分に発揮できたと思う。

私達のセッションには、オーストラリア、シンガポール、フィリピン、イタリアの各国士官候補生が参加した。事前討議の段階から活発な意見交換がなされ、また、言葉の面などでみんな協力してくれた。

このICC期間を通じて、世界の士官候補生は真剣に世界の諸問題について考え、勉強していて、自分の意見を持っているなど強く感じた。

この点では、防大生は学ぶべきことがたくさんあると思う。また、彼らの表現力の豊かさについても、私達日本人は学ぶべき点が多いにある。一方で、世界の士官候補生と接して、彼らの良い点だけではなく、防大生の良いところも改めて発見した。そのひとつとして、「ホスピタリティ」が上げられる。各士官候補生の何人かは、「今までこれほど他人から親切に迎え入れられたことがない」と語っていた。「もう少し防大において、皆と話したい。」と語ったある士官候補生の言葉は、学生舎等で、防大生から温かい歓迎を受けてのことだと思ふ。

二年間ICCに参加して、今年はいろいろな新たな試み(学生による事前討議

等)があり、昨年に比べて、学生のICCに対する関心が高まったと思う。世界で見ても、各国の士官候補生が一同に集うということは珍しいことであり、このICCは世界の士官候補生と友好を深め、諸問題に対して意見を交換する素晴らしいチャンスであり、来年度も更に有意義な学校行事としたい。

第三セッション(難民問題)

三学年 池田 由香子学生
第三セッションのテーマは「難民問題」であった。希望により参加することになった学生は、私をはじめ三学年塚木学生、河原木学生、そして二学年日高学生であった。十二月の終わりに指導教官の村井先生の部屋に集まり、約三ヶ月に及ぶ勉強会が始まった。まずは基礎知識の習得ということで、週に一度の勉強会に、各人がそれぞれ勉強してきたことについてレジュメを作成して発表する形式で進めた。厳しい質問が飛び交い、試験期間とも重なり大変だった。

我々の前に立ちはだかる壁は、英語だ。週に二回のギリス先生とのレッスンでは、日本語で行った発表と全く同じものを英語で行い、最初のうちは不安だったが、本番近くになると議論らしくなってきたので、これは行けると思った。

いよいよ外国人参加者を決める段階となった。難民問題は世界的な問題であるため欧州、アジア、米大陸から満遍なく選びたかった。カナダ、ドイツ、フランスは世界有数の難民受け入れ国であり、タイは国境付近で難民の支援活動を積極

的に行っており、またインドネシアは東ティモールの難民問題を抱えているという理由から、以上の五カ国を選ぶことになった。

そして本番。五人の外国人士官候補生たちも非常に協力的で、積極的に意見を述べてくれ、議長の私としても大変助かった。どの学生も自国の難民政策のことをよく勉強してきており、日本人の学生も勉強になった。特に軍隊の難民支援に関しては、誇りを持ってより詳細に語っていた姿が印象的であった。外国の学生と話していつも思うことは、自国に高い誇りを持っていることだ。もっと時間を掛けて話し合いたいくらいだった。この経験を元に、今後も国際問題に関心を持ち続けていきたい。



平成14年度運動系校友会活動結果及び部員数状況

14.12.2現在

校友会名	成績	部員数		校友会名	成績	部員数	
		男子	女子			男子	女子
応援団リーダー部	開校記念祭リーダー公開	13		銃剣道部	全日本青少年大会 団体優勝	35	4
短艇委員会	全日本カッター競技大会 準優勝	60			全日本学生選手権大会 団体3位		
	関東地区新人戦 優勝			グライダー部	久住山岳滑翔大会出場	22	2
バスケットボール	男子 秋季関東リーグ戦 4部13位	39	7	ソフトテニス部	秋季関東学生リーグ戦 8部昇格	22	
	女子 春季神奈川リーグ戦 3部2位			ボクシング部	関東大学トーナメント 4部5位	52	2
柔道部	神奈川県学生春季大会出場	30	4	レスリング部	東日本学生リーグ戦 2部3位	25	
ラグビー部	秋季関東大学リーグ戦 3部2位	111		ボート部	5大学レガッタ エイト準優勝	31	
サッカー部	神奈川県リーグ戦 1部4位	66		フィートホッケー部	男子 秋季関東学生リーグ戦 1部昇格	44	15
剣道部	関東学生剣道新人戦大会 ベスト16	62	8		女子 秋季関東学生リーグ戦 2部6位		
空手道部	全国国公立選手権大会 優勝	66	5	ワンダーフォーゲル部	鍋倉山、立山、尾瀬、芦ノ湖周辺等で活動	18	
	秋季関東リーグ戦 1部4位			パラシュート部	日本選手権大会	13	4
バレーボール部	男子 秋季関東リーグ戦 4部昇格	32	13		個人Jr.の部 優勝1年桜井、2位2年西平		
	女子 秋季関東リーグ戦 8部3位			準硬式野球部	秋季神奈川7大学リーグ戦 3位	40	
卓球部	秋季関東学生リーグ戦 5部2位	20	1	合気道部	全日本学生演武大会出場	38	1
陸上競技部	関東理工系学生競技大会	46	5	体操部	東日本学生選手権大会 団体17位	35	5
	男子団体4位 女子団体2位			弓道部	秋季南関東リーグ戦	40	5
硬式庭球部	男子 関東理工科リーグ戦 7部2位	37	7		男子 1部優勝、女子 2部4位		
	女子 関東理工科リーグ戦 8部昇格			少林寺拳法部	全日本学生大会 団体演武最優秀賞	36	
硬式野球部	神奈川リーグ戦(春・秋) 2部優勝	34			関東学生大会 団体演武優秀		
射撃部	秋季関東学生ライフル選手権大会 総合8位	19	1	フェンシング部	関東学生選手権大会	23	
山岳部	乗鞍岳、明神岳、五竜山、富士山等登山	10	1		フルール 4部2位、サープル及びエベ 2部昇格		
水泳(競泳)部	東部国公立大会 男子3位	32	4	ウェイトリフティング部	全日本大学対抗選手権大会 団体13位	23	1
水泳(水球)部	関東学生リーグ戦 1部12位	18		相撲部	全国国公立対抗大会 団体準優勝	18	
ハンドボール部	秋季関東学生リーグ戦 5部7位	19			東日本学生リーグ戦 2部7位		
アメリカンフットボール部	関東学生リーグ戦 2部5位	85		バドミントン部	秋季関東大学リーグ戦	25	6
ヨット(小型)部	関東学生選手権秋季大会	18			男子 3部昇格、女子 5部4位		
	470級11位 スナイプ級13位			居合道部	自衛隊全国大会 団体優勝	30	1
ヨット(クルーザー)部	イタリア海軍兵学校・リボルノ市共催国際レース	14	2	吹奏楽部	開校記念祭記念式典・観閲式	33	10
	士官候補生の部7位			儀仗隊	横須賀プレ開国祭	50	4

記念行事顛末記

防衛大学の創立50周年に当たり、各地域支部等を含め同窓会は、各種記念行事を行った。本部事務局が担当したの記念行事は、平成十四年十一月十六日(土)の小原台上で予想を超える盛況を呈し滞りなく終了した。

その準備は、昨平成十三年の総会後から始まった。通常、総会後と言えば、本部事務局員の交代であり、当年度を担当する期は、十一期を中心としたボランティア要員である。ところが、行事の大きさや調整相手方である50周年記念事業の委員会メンバー乃至学校当局のメンバーを考慮し、本部事務局長をはじめとした諸先輩方の意向で局員交代が、最小限に留め置かれた。また、恒例となっている各種競技会等を実施しつつの記念行事準備には、どうしても今までの人数では人手が不足すると考えられ、事務局員の増強が図られた。この増強に協力していただいた各期生会には心からお礼申し上げたい。

実際の準備は、「記念行事実施大綱」なる計画を作ることから始まった。計画は、大綱に基づき「細部実施計画」、行事の内容やその管理支援に応じた「部門別計画」と、本部事務局、委員会及び学校の三者で検討、調整後、策定されて実行に至ったものである。それぞれの担当は、意図された如くある年の四年生から一年生の組み合わせとなり、概ね次の通りであった。

行 事 項 目	担 当
全 般 統 制	日高 (9F)、河村(11N)
モ ニ ュ メ ン ト	明野 (10N)
顕 彰 碑 献 花 式 行 事	阿保 (11G)、洞澤 (11G)、佐古 (12G)、佐藤 (12N)
各 種 贈 呈 式 行 事	若木 (10G)、小森谷 (12N)、西大 (12G)
祝 賀 会 行 事	田尻 (10F)、今久保 (11G)、古賀 (12G)
総 務 ・ 管 理	吉田 (10G)、森永 (11F)、新倉 (12N)、清水 (12F)
出 席 名 簿	桜井 (11F)、佐々木 (12F)

勿論、この担当者だけでは記念日当日の所要は満たせず、小原台支部事務局長西井1空佐、局長補佐高橋1陸佐、総務部長最上2海佐、事業部長宇田川2空佐を中心とした学校勤務乃至在学同窓生多数の支援を得た。それは、風の強い中で

の受付業務、慰霊行事にあつては、例年の通り会場清掃、設営に始まり行事進行の担当、そして後始末まで、また記念講堂での講演、贈呈式行事にあつては、会場整理やステージの準備等、延べ約100名を数える同窓生の支援となつた。

慰霊行事は、殉職された方々の御遺族に案内状を送付することから始まったが、その数の特定に曲折があつた。というのは、防大大学生課から入手した名簿には、88柱のお名前があるものの、その中のお一方は学生の身分で航空自衛隊百里基地において亡くなられ、公務と認定されてはいないものの、如何なる経緯なのか不明ながらも遺影が顕彰室にある。諸々の状況を考え、今後のためにも87柱と確定させて戴き、行事参加のご返事を戴く前に宿として横須賀プリンスホテルを予約した。無理した予約に応じてくれたのは、事務局員の元部下のホテル支配人である。

大勢の方に案内状を出した関係で、それぞれの方に応じた控え室を準備する必要があつた。学校当局にお願いし、会議室、教場、新図書館視聴覚室、果ては入札室までも借りることとなつたが、新しくなつた施設のため何処にどの会議室等があるのか掌握に一苦労であると共に、それぞれを管理する責任者が総務課、学生課、図書館或いは教育群等で部屋の鍵接受にも労力を要した。各部屋の案内表示は、かつて手慣れた手法を駆使した拡大コピー、切り張りでの作成と相成つた。管理、総務畑を含めた多くの分野で経験した現職時代の仕事が入手くいかされたと思われ。学校が保有する来校者識別用のリ

ボンは白色が基調である。ことの習いから慰霊行事関係者にその白色リボンを使用したため、赤色リボンが大きき種類によつてはどうしても不足するため横須賀総監部借用をお願いしたりと、その経験の中身は、相当の融通が利くものである。

かかる行事の準備にあつて、予行は欠かせない。手順に従い部門別予行と全体予行を行った。勿論、実際の予行行動の前には、図上演習形式の机上予行も行った。予行での関心事は、部門別ではあるが、思いのほか多くの感謝状等受領者がおられ、引き続き記念マーチ演奏、ビデオ試写を行う各種贈呈等行事であつた。後に続く祝賀会の時程を考えると、数分の滞りも許されない上に会場設定、幕間を利用しての再設定を含め盛り沢山の事柄を織り込んだ行事である。しかも、予め策定した行事の細部計画はほとんど変更されるといふ事態も生起していた。例えば、基調報告の所要時間、受賞者の増加、演奏曲目の増加である。防大吹奏楽部の予行実演奏の間にも変更が為された。その上、会場の放送設備は、学生放送委員会の手を借りなければ、他にそれを使える人がいない状況である。司会を担当する事務方は、やや、薄氷を踏む思いである。しかし、日頃、テレテレやついでにも「本番に強いのが防大生」、当日は、見事な行事進行となつた。

最終予行は、記念日前日に泊まりがけで行つた走水荘での図上演習である。行事当日の時程に従い、各担当が行動の概要を述べ、各人の行動を再徹底した。それでも、未だ不明な点もあり、侃々諤々

の演習である。加えて、未だ確定していない同窓会長挨拶等の案文を作ったり、或いは、招待者氏名札を並べ、相撲の取り組を決めるように講演会場着席位置を考えたりと、十五年春には閉館されるという走水荘での記憶に残る出来事であった。

記念講堂から余裕を持って移動して始まった祝賀会は、参加した4個大隊からの学生の若さを凌駕するような同窓生の熱気であった。あまりに同期等での話声が大きく、司会から注意を促すほどであり、同窓生の宴では散見される事でもあり、気を付けたい事柄である。この会場設営に当たっては、管理課の大竹事務官、

それに入札業者として選んだ「お多幸」の配慮が大きかった。横須賀在住の海OBの車を借り、南極への出航前で田浦に停泊する「しらせ」から運んだ南極の水も好評であった。これだけ同窓生、学生に喜んで貰えば、「しらせ」艦長も本望であろう。

同窓会長から心の絆としての学生歌、応援歌、逍遙歌の作詞、作曲者の表彰があり、従来、作詞者等が不詳とされてきたものが祝賀会担当の調査で明確となった。祝宴の終わりに唄った「学生歌」は、台上から巷に木霊せんばかりであった。

「日高(9F)」

平成十四年度 代議員会 議決結果

1 六月七日G/H市谷で開催された臨時代議員会(議長 土井義尚氏 陸九期、委任状送付者を含め代議員91名参加)において、渡邊 信利氏 陸六期 が次期会長(十五年七月一日以降)に選出された。

2 十二月二十日G/H市谷で開催された定例代議員会(議長 小林貞雄氏 空九期、委任状送付者を含め代議員94名参加)において、次の議案が承認された。

(1) 平成十三年度事業報告、決算報告、財産目録及び会計監査報告

本誌「防衛大学校同窓会平成十三年度決算報告」参照。

(2) 平成十五年度事業計画及び予算案
本誌「防衛大学校同窓会平成十五年度予算」参照。

(3) 平成十五年度の人事案(渡邊次期会長を除く。何れも十五年七月一日以降)

副会長	佐伯 聖二氏(海七期)
副会長	藤縄 祐爾氏(陸八期)
副会長	武田 清氏(空八期)
理事	戸田 耕司氏(陸八期)
理事兼事務局長	新井 宏氏(陸九期)
理事	長谷川 語氏(海十期)
理事	原 充男氏(空十期)

理事 澤山 正一氏(陸十六期)(留任)
理事 赤星 慶治氏(海十七期)(留任)
理事 小川 剛義氏(空十七期)(留任)
会計監事 二見 宣氏(陸六期)(留任)
会計監事 出水 克明氏(海七期)(留任)
会計監事 尾頭 誠氏(空八期)

(4) MCI事業案(細部については次の通り)

ア 審議の中で確認された主要議決事項(同窓会本部の提示内容)
(ア) MCI事業を実施する。

a 同窓会は次の二つを当面の目標として取り組むこととする。

①防衛大学校創立50周年同窓会記念事業の一環として、防衛問題に係わるデータベースを主として同窓生により構築し、国家、社会に対し軍事的配慮の重要性を正しく発信しう得る環境を段階的に整備する。

②同窓生相互間の各種情報交換機能を充実させるとともに同窓生相互が自主的に相互扶助を行い得る環境を提供する。

bこの際、同窓会による経費支援は、当面は将来の返納は予期せず、年度の同窓会事業の枠内で出資可能な範囲にとどめることとする。

cこのため、十五年三月末までに同窓会本部にMCI準備委員会を設置し、記念事業委員会のMCI検討チームを引き継ぎ、事後の検討に着手するとともに所定の業務を推進する。

(イ) 十五年度事業は、次により実施する。

a ①防大ホームページ、②名簿の登録・閲覧機能、③メール機能、④貢献志願者登録、⑤防衛能力者登録、に必要なシステムを構築し、運用を開始する。

b 使用経費は、一、五〇〇万円以内を限度とし、余剰金が生じた場合は、次年度以降に繰り越す。

c 特別会計とする。

(ウ) 十六年度以降の事業については、準備委員会で検討を重ねて、年度ごとに代議員会の承認を得て推進する。

(エ) MCI事業全体について、三年目を目途に見直す。

イ 付帯決議事項

MCI事業を実施する決定に伴い、50周年記念事業委員会からの醸金予備費の運用提案は以下のように決定された。

○記念事業予備費をMCI事業に充当する。
充当する醸金予備費の総額は、記念事業委員会で最終決算でできる平成十五年四月以降に確定するが、それまでの間、一、五〇〇万円を充当できる目安として仮置く。

ウ 議決に際して代議員会での確認事項
○十五年度事業は、記念事業委員会から正式に示された醸金予備費の総額を受けて、準備委員会で検討した実施計画(要領)を、本年六月の臨時代議員会に諮り承認を受ける。

記事「吉田(10A)」

第六回期別対抗ゴルフ大会

優勝 グロスの部 十期生
 ネットの部 九期生

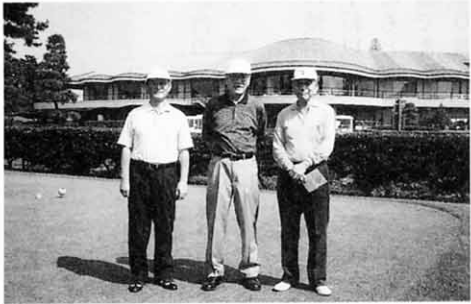
十月四日（金）第六回防大同窓会期別対抗ゴルフ大会が絶好の好天気のもと千葉カントリークラブ川間コースで行なわれ、グロスの部は十期生チーム、ネットの部は九期生チームが獲得しました。両チームとも初の快挙でした。

本ゴルフ大会も第六回を数え、今年新たに十二期生も加わり総勢一二〇名（一期生から十二期生までの各期10名の選手）による対抗戦（規定・グロス、ネットとも上位7名のスコアで順位を決定（シニア・組などの区分なし）で非常に盛り上がり、同窓生相互の親睦を深めることができ非常に有意義な一日でありました。



▲ 懇親会時松本前校長のスピーチ

▼ 松本前校長阿部会長と



当日は、台風21号が通りすぎた雲一つも相互の親睦を図るうえで効果ありとの判断で、「楽しくやって下さい」と返事 同じ組の後輩に先輩からの一言「思いやりのある後輩だから先輩に気を使っただけで林に入れてくれるよなあ」との毒舌ありで各組とも和気藹々の雰囲気です。ラウンド後、スコア集計では グロスの部

も相互の親睦を図るうえで効果ありとの判断で、「楽しくやって下さい」と返事 同じ組の後輩に先輩からの一言「思いやりのある後輩だから先輩に気を使っただけで林に入れてくれるよなあ」との毒舌ありで各組とも和気藹々の雰囲気です。ラウンド後、スコア集計では グロスの部

休憩後の午後のスタート前、先輩期へのインタビュー「いやあ8年、10年離れているのは 事前に承知はしていたがドライバーなどの飛距離全く違うよな。これも飛ばないと気分的にがっかりくるよ。飛距離がでないぶんテクニクでは考えるものの実力が伴わず。」組合わせによつては、一期と十一期、二期と十二期という具合に10年違う組もあり、これも相互の親睦を図るうえで効果ありとの判断で、「楽しくやって下さい」と返事 同じ組の後輩に先輩からの一言「思いやりのある後輩だから先輩に気を使っただけで林に入れてくれるよなあ」との毒舌ありで各組とも和気藹々の雰囲気です。ラウンド後、スコア集計では グロスの部

ない最高の天候に恵まれ、開会式での阿部会長からも、「今日は、この大会のために素晴らしい天気を準備しました。選手諸兄ぜひともがんばって下さい。」とのユーモアあふれるスピーチで、激励され、各選手はそれぞれスタートしていきましました。一方で「スコアが悪かった場合、日頃天気のせいにするのに今日の天気では理由がつかないなあ」とのつぶやきを残して

十期、九期、八期上位3チーム混戦模様で、最後の組のがんばりで優勝は、十期の頭上に輝きました。懇親会における十期代表者のスピーチ「念願のグロス優勝 悲願でした。過去ネットでは優勝したことがあり、今回グロス優勝を目標に全員一丸となって練習してきました。その成果が実現し無量です。」優勝した十期の選手・光吉達幸、悴田登志男、弘中勝彦、山中啓吉、長谷川語、松井茂基、岩崎重雄、酒巻尚生、小山力、木谷正樹（順不同）でした。



▲ 松本前校長、阿部会長と十期優勝メンバー

▼ 松本前校長、阿部会長と九期優勝メンバー



続いて、ネットの部 新ベリア方式によるハンディキャップを案出での集計上、結果がでるまで優勝の期が、判らないことから各期とも「ひよっ」として我が期かな」との淡い期待を堅持しつつ、しばし結果待ち。そして「優勝 九期」との発表があり、代表者は「興奮しています。我が九期は、ゴルフの優勝は初めてであります。これも皆様の応援のおかげです。ありがとうございます。」とのスピーチ 優勝した九期の選手・長崎嘉徳、吉原宣之、田川友康、久保善昭、江本泉、森本洋泰、山口利勝、平佐幸政、山本昇、長嶋浩（順不同）でした。

に接し、あらためて防大の団結力のすばらしさに感激しました。益々の同窓会の発展を祈念しています。私事ですが、今日は私の誕生日です。このような記念すべき大会にお招き頂き感謝申し上げます。」とのお話を頂き、参加者全員から「お誕生日おめでとうございます」との祝福がありました。最後に、阿部会長から、「優勝した十期、九期の諸君優勝おめでとう。尽力された努力に対し敬意を表します。また、プレーされた皆さん今日一日楽しかったですか。かように年一回とはいえ愛好者がゴルフを通じて同窓生の融和団結を図ることは有意義であります。このような各種行事等も継続企画し、同窓会活動の更なる充実・発展を期す所存です。一層の支援、協力をお願いする」とのスピーチで大会を終りました。

また、六期宮下郁雄氏から誕生日の松本前校長に特別賞の寄贈があり、阿部会長から贈呈されました。

記事「森永（11F）」

第五回期別対抗テニス大会

平成十四年五月十九日(日)小原台の防衛大学校テニスコートにおいて、第五回大会が開催された。

前日まで雨が降り続き、コートの使用が危ぶまれたが、白石硬式庭球部主将以下、現役部員が、八尾監督の指導のもと懸命の整備にあたり、どうやら使用できる状態となり開始が若干遅れたものの無事、開催に漕ぎ着けた。

開会式は、松崎同窓会副会長(二期生)の開会挨拶に引き続き、井川運営委員長、龍岡ADからルールの説明があり、遅れた分を取り返すべく早速試合を開始した。試合中は、晴天に恵まれ、6コート狭しと熱戦が繰り広げられた。

ダブルスを組んだご夫妻の仲たがいで一幕もあつたが、和気藹々のうちに試合を終了。

一期生から十二期生までのチームの選手は、ご夫人を含む一三七名であつたが保険のお世話になることなく無事閉幕となった。

成績は、シニアリーグ、優勝五期生チーム。以下、三期、六期、四期、二期、一期の順であつた。

レギュラーリーグは、優勝7期、以下十二期、八期、九期、十期、十一期であり、初参加の十二期の健闘が目立った。

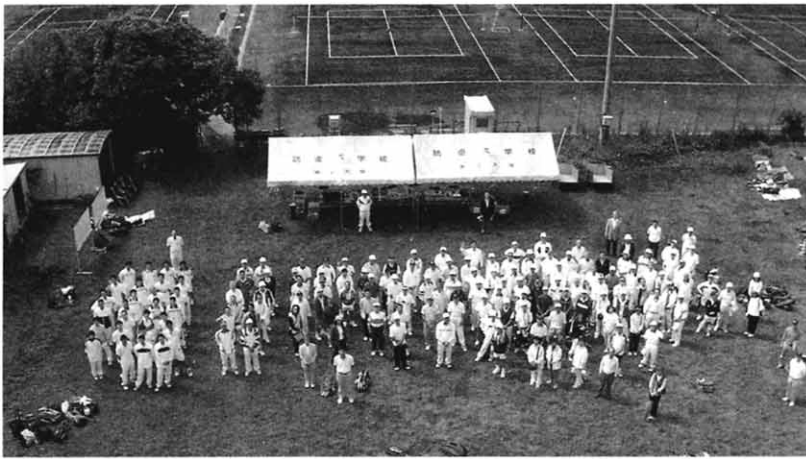
表彰・懇親会では、第六回大会から七期生チームが、シニアリーグに入りをする予定だが、今年優勝したので入れな

いとの意見が出されたものの、健闘を称えあい、再会を誓って散会した。

来年から十三期生が、参加することになるが、今から準備をし、初参加、初優勝を狙っては！

参加についての問い合わせは、同窓会本部まで。

記事「明野(10N)」



第四回期別対抗囲碁大会

50周年記念大会6期生2年連続制覇

防衛大学校同窓会が主宰する各期対抗の親睦・交流行事として第四回目的囲碁大会が本年も九月七日(土)日本棋院会館において盛大に実施された。当日は一期生から今回初参加の十二期生までの選抜碁手98名が一堂に会し、日ごろの腕自慢を大いに発揮して素晴らしい熱戦が繰り広げられた。開始の先立ち、君島信同窓会副会長の挨拶のあと高比康之競技委員長から競技実施上の諸注意があり、0930熱戦の火蓋が切られた。

競技は今回から始めて取り入れたスイス方式で実施され、予め決定していた対戦表の基づき、オール互い先、4回戦で実施された。各回戦終了と同時に次の対

戦相手を発表し、また、対戦結果を増上に設定したチャートに揭示しつつ、緊迫した雰囲気の中で昼食をはさみ、午前中2回戦、午後2回戦の競技を終了した。

その後、成績集計の結果が出次第表彰式に移り、優勝六期生の代表の対して、君島副会長から優勝カップと副賞が授与された。また、4戦全勝の遠茂谷選手(一期)、吉崎選手(二期)、倉田選手(三期)、清水・東野選手(四期)、中田選手(五期)、志賀・吉田・伴選手(六期)、竹永・佐藤選手(八期)、大塚・庄山選手(九期)の13名の紹介があり、参加者全員でその健闘を称えた。

引き続き優勝チームの代表者の乾杯の音頭により懇親会に入り、対戦相手の健闘を称えつつ、和やかな歓談のうちに本大会は終了した。

記事「西大(10A)」

期別成績表

	自チーム		相手チーム		順位
	勝点	計	勝点	計	
一期生	0.5	11.0	0	8	11
二期生	2.0	8.0	1	6	6
三期生	2.5	11.0	2	10	4
四期生	3.0	6.0	2	5	3
五期生	2.0	7.5	3	7	7
六期生	4.0	7.0	4	5	1
七期生	2.5	9.0	2	8	5
八期生	2.0	6.5	1	5	8
九期生	3.5	6.0	3	4	2
十期生	1.0	9.0	1	8	9
十一期生	1.0	6.0	1	6	10
十二期生	0.0	9.0	0	7	12



各期対抗戦実施の1週間後平成十四年九月十四日(土)今回は防大創立50周年の記念大会として「防大同窓会本因坊」決定の個人戦が実施された

日本棋院に各代表22名の腕自慢の参加を得てスイス方式により実施。さすがトップクラスの対戦で高級な打碁。僅差の碁が多く熱戦につぐ熱戦で会場は熱気に包まれました。

結果はここでも長幼の序列が発揮され一期高比康之さんと八期甲斐聖彦さんとの全勝同志の最終戦は高比さんが制し4戦全勝となりここに「高比康之初代防大同窓会本因坊」が誕生いたしました。

その他星のつばしあいの中、3勝1敗が7名実力の僅差が同われた。

終了後、全国から更なる腕自慢の参加者を得て次回本因坊戦の実施を約し散会した。

スイス方式による得点の結果ベスト8は以下の通り

1	高比康之	(一期)	初代防大同窓会本因坊
2	甲斐聖彦	(八期)	初代防大同窓会準本因坊
3	志賀茂男	(六期)	
4	浜本良弘	(六期)	
5	朝日通夫	(三期)	
6	吉田耕平	(六期)	
7	松井 宏	(七期)	
8	清水聰一	(四期)	

記事「西大(10A)」

同窓会名簿、平成十五年十月に発行予定

「平成十五年一月から申込み受け、頒布は十一月…早めに申込みを！」

防大同窓会名簿は、平成四年に第1版、第2版が平成十年に出され、第3版が、平成十五年十月に発行する計画で準備を進めております。

新名簿は、第2版とほぼ同じ構成で、本科四十七期までと理工学研究科四十年、安全保障研究科五期までの会員名簿を掲載する予定です。

同窓会事務局では、名簿発行に備えて、データの大規模な更新を実施中であり、各期生会を通じて会員の方々にも確認、

訂正のお願いを予定しておりますが、より信頼性の高い同窓会名簿の発行のため、ご協力をお願い致します。

なお申し込み頒布は、会員個々に「小原台だより」に添付するハガキ以外は、確認をとりません。十五年一月～七月末までに申込みのあった部数だけを作成頒布しますので、できるだけ早めに申し込んで下さい。

今回発行する同窓会名簿の概要及び申込要領等は、次のとおりです。

○ 掲載会員数

本科一期～四十七期までの約二万五千七百超及び理工学研究科一期～四十年までの約二千数百名十一期～五期までの安全保障研究科計2万2千数百名(本科と研究科の重複を除く)及び名誉会員

○ 掲載項目 氏名、期別、要員、出身高校、校友会活動、現住所、電話番号、勤務先名等

○ 発売日 平成十五年十月(お手元に届くのは十一月末頃)

○ 価 格 一部三千円を予定(梱包代、送料込み)

○ 申込要領 期別、氏名、現住所(名簿送付先)をはがき(小原台に折り込みのはがきの使用が望ましい)に明記して同窓会本部事務局に郵送。なお、事後、届け先現住所の変更があった場合は、すみやかに届けるものとする。

○ 送付及び代金受け取り

現住所(名簿送付先)宛に名簿を個別送付(梱包代及び送料込み)
代金は、宅急便による名簿送付時、代引き徴収予定。

各期生会を通して確認をお願いしている会員データには、同窓会名簿の掲載項目以外の項目もあります。プライベートな項目もありますので、会員本人が登録を希望されない場合は、その項目を空白にして頂いて結構です。但し、氏名、期別、要員、現住所(連絡先)、電話番号等は、必ず確認、明記して下さいようお願い致します。

(同窓会本部事務局人事担当：櫻井、佐々木記)

退職された方及び転勤された方で住所が変わった方は同窓会事務局まで御連絡下さい。

〒一六〇〇〇〇三

東京都新宿区本塩町二十一-三一二

TEL・FAX 〇三-三三三-五一一八九一〇



同窓生

アラカルト

防衛大学校学生歌

作詩者の解題

一期 田崎 英之

この学生歌の作曲依頼を受けて、初めて歌詞に出会った須磨洋朔さんはその初印象を「スケールの大きい学生歌」と感じ、作曲への意欲が湧いたと、語られました。

この歌詩の「スケールの大きさ」は、第一節冒頭の二行、「海青し太平洋の洋」
「緑濃し小原の丘辺」の対句であり、さらに、第二節冒頭の「聳え立つ若人の城」
「みはるかす人の巷」でありましょう。

これら冒頭のフレーズは、歌に雄大感をもたらす、特に第一節の「海青し太平洋の洋」の出足の五・七調の十二文字が作詩上の初動を決める作用をもたらす、後に続く歌詞のスムーズな展開を可能にしたものと考えています。また冒頭の四行の「五・七・五・七」の反復がこの歌のリズム感を生み出しました。

第一節について

前述の通り「海青し、太平洋」「緑濃し小原の丘辺」の五・七調の反復で歌の始まりをスムーズに収めたが、この際「海青し、太平洋」を「太平の「洋」(な

だ)***と読み、五・七調で発した「言葉のあや」が、創案できたことにより、歌詞のスムーズな展開が可能になりました。「洋」を「灘(なだ)」と大胆に読み替えて一気に第一節を描き進めました。

これを受け「緑濃し小原の丘辺」の対句が当然のように並びました。当時の小原台は渥木も乏しく、かつ、黒い関東ロームの地肌がむき出し、風が砂塵を巻き上げていました。作者は、「何れの日か『濃き緑の丘』に変貌しよう」と期待を込めて謳いましたが、それは当時の全学生の思いでもありません。

続く、「学舎は光輝き」、「真実の道の故郷」の二行は「起承転結」での承。青き大海原と広大な緑の丘を謳う冒頭の力強い五・七調の反復から少しシフトした「五・七」と「四・七」の二行が、後に続く後半の主題を一段と引き立てる役割を果たしています。なお、「光り輝き」が「かがよい」と審議委員会により修正されました。

「丈夫は呼び交い集い」から「朝に「忠誠」を誓い、夕に「祖国」を思う」のフレーズだけが三行で「転結の転」で、しかも語調も前の四行の詞とは大きく変化、五七調と四・七調の二回反復で構成しました。

この三行において詩の内容は、愛国の思いへと飛翔します。

それは、防大生の国民への忠誠、並びに父祖から承け未来へ贈る我々の共同体・日本国を防衛する努めへの思いを謳い、本節の真髓であります。

「結びの対句」の「礎ここに築かん」「新

たなる日の本のため」は、我々が「国家」の縁の下で黙々、託された任務・民主国家の防衛に生命を賭けるプロとしての決意の雄叫びである。

第二節について

この歌詞は第一節がスムーズに創案でき、余勢を駆って一気に作ろうとしたが、前半の導入部で躓いて、作詩はしばらく頓挫状態になりました。苦吟を重ねる間に、第一節との対比の形で「丈夫は」以下の後半のイメージが次第に固まりました。だが、前半部は納得できる歌詞が浮かばないまま、夏休みが終わりに近づき作詩上、一番の胸突八丁でした。

歌詞は、一応の形にまとめたが、どうしても何か物足りない感じで、第二節の前半部に不満のまま帰校の途につきました。そして列車を乗り継ぎ、第二の故郷・小原台を望み見られる湘南の地に辿る途上、「聳え立つ若人の城」が、難航する作詩の暗雲を切り裂くように「閃き」ました。車内での一瞬の閃きをメモにとどめ帰校と同時に、「聳え立つ若人の城」から「みはるかす人の巷は」の対句が出来上がり、これらのフレーズが成立した後は、「風荒み、雲乱れ飛び」「行く手に波さかまくも」と一気に進みました。

此処で、後半の「丈夫は***」以下の歌詞——先に作り終えていたフレーズ——すんなりとつながり、学生歌は完成しました。第三のフレーズ三行は社会や世相の混迷に惑わず「理想も高く」「朝に「勇知」を磨き、夕に「平和」を祈る」とこの学生歌の真髓をなし、前節の忠誠・祖国を思うと並ぶ、学生たちの心意気の表出で第二節の核心部分でありま

す。

なお「知・仁・勇」三つの武徳から筆者が知勇を選び、最終的に審査委員会により「勇知」から「勇智」へと修正され、また「雲乱れ飛び」が「乱れ雲飛び」になりました。

「礎ここに築かん」以下は詩の全体を貫くりフレインで丈夫の雄叫びでもあり、この学生歌の最後の締めです。

作詩に際し、古いパターン——五・七調や七・五調を連続・反復する単調な歌詞を避け、変則的な四・七調を随所に取り入れました。また漢音の発音を努めて少なくし、歌詞・全体に「おおらかさ」「しなやかさ」「落ち着きと荘重さ」をもたらす効果を生みました。

作詩者がかねての思い、有名大学・校歌や応援歌——「都の西北***」や「若き日、燃える***」等の早稲田・慶応の名歌に比べ、劣色の無い学生歌を志向した。また、有名な旧制高校の寮歌や旧軍士官学校などの亜流を避けて、未来志向の学生歌——新しい時代の息吹と感覚と、そして、防衛大の使命の独自性への認識・自覚をも反映する——の作詞を一途に志向・模索し、そして、この学生歌を誕生させました。

試行錯誤を重ねての苦心の作詩でありましたが、この歌詞を完成したとき「新しい時代感覚に対応する防衛大学校の学生歌」にふさわしい新鮮なイメージが表現され、かなり良い作品だと、作者自身、胸中密かに満足しました。

多数の応募者から選考者の全員一致で選ばれ、それは二十歳の夏の忘れえぬ思い出になりました。

最後に、歌詞にふさわしい良い曲を残して、先年他界されました元中央音楽隊長の須磨洋朔先生に感謝し、その御遺徳を偲び、ご冥福をお祈り致します。

ジャカルタ生活

三期(海) 浮田 尚家

同窓会事務局から「同窓生アラカルト」への投稿依頼の電話を受け、事前に聞いていたことでもあり、承諾したものの、振り返ってみれば、「小原台だよりVol.7」に投稿したことを思い出し、同じ人間が再度投稿するのは具合が悪いのではないかと危惧したが、割り当てられたので、敢えてノルマを果たすことにした。

前回はリゾート地でもあり「バリ島の過ごし方」と題して紹介したが、バリ国際空港の近代化を終え、次いで「パレンバン国際空港近代化プロジェクト」に携わることになり、ご承知の通り、パレンバンはスマトラ島南部の都市で、石油の積出港として活況を呈しているが、その空港の近代化を日本の援助で実施することになり、二〇〇〇年五月から、年末まで、ジャカルタで「基本設計」、「詳細設計」と、本年に入ってから業者からの質疑応答、更に、提案書評価と一連の作業を終え、来年から始まる工事の施工管理から、後継者にバトンタッチすること、一応終了できたと自負している。

したが、首都でもあり、観光資源にも乏しい場所なので、バリ島のように紹介するものも無く、業務内容を主として紹介し、後の部分でインドネシア人の生活ぶりを紹介することにしよう。

皆さんが海外にしろ、国内にしろ、航空機に搭乗する時は、ターミナルからチェックインし、搭乗ゲートを経由して機上の人となるわけだが、小生が担当している「Air Safety System」は、ご存知の方もあろうが、ゲートを境にランドサイド、エアサイドに区分され、ランドサイドは国内、エアサイドは国外となり、「Air Safety System」とは、殆どがエアサイドに含まれる。内容としては、航法援助装置、航空無線通信、航空管制、空港照明・灯火、気象観測装置などである。もともとの専門は、前三者であったが、空港コンサルタントも人員に余裕が無く、残りの部分も、門前の小僧ならぬ担当せざるを得ない状況である。

航空機がタクシーウェイを通って滑走路から離陸する間に、興味のある人なら、レーダーアンテナ、気象観測装置、照明付き吹流し、着陸援助照明灯、誘導路側灯、滑走路側灯、等に気づかれるかもしれないが、殆どの人は気づかずに通り越してしまふのが普通だろう。

航法援助装置は、計器着陸誘導装置(ILS)のAteは、滑走路延長上であるので、まず、乗客の目には入らない。空港の位置を示すVOR/DMEもターミナルタイプは空港敷地内に設置されるが、主として空港周辺に設置されるのが通例である。少し古くなると、NDBという無指向性のビーコン送信機も、時に

現用されている。

航空無線通信は、遠距離用のHF、近距離・地上用のVHF、と大別されるが、空港としての通信、航空機との通信と多岐にわたるので、詳細は略すが、空港周辺に送信所、受信所、コントロールタワーと分散している。将来的には、衛星を利用し、個別に通信系を設定し、管制のより向上を図り、ひいては、航空管制、航空交通の安全を実現する方向で、開発が進められている。最新の技術を応用していることは勿論であるが、その中でも、モールス信号による通信は、最も確実な通信系として、同時に備えているのも航空安全を考慮したものである。

航空管制は、航空機が飛行を始めて以来、かなりの年月を経ているので歴史も長く、段階も6から7段階に移ろうとしている。発展途上国の航空管制は、レーダーを利用した第四世代くらいが通例である。しかし、過去の経験から、空港に入れる航空管制機能が、担当者レベルに、本当に必要なとされているかどうかは、別問題であることが多い。備えていれば見栄えがする、といったところか。

空港照明・灯火については、ICAOの規定もあり、空港としての保安条項でもあり、一通り備えることにしている。夜間の着陸に備えて、空港の場所を示すことから、滑走路を示したり、安全に着陸を行うための着陸援助灯、誘導路灯、など多種の灯火が設置される。

気象観測装置については、何処の国でもそうだが、広域気象を担当する気象庁からの情報のほか、空港独自でも局地観測を行っている。具体的には、滑走路両

端末で、風向風速を測定するほか、飛行運行にかかわる気象観測を、自動測定を多く取り入れたものが、主流を占める。

以上、「Air Safety System」の概略を紹介したが、これらの機材は当然ながら、オペレータによって運用されているが、オペレータの資質により、良くも悪くもなるもので、これからの空港運用は、過密化、高度化に伴って、ますます重要な問題となる。ODAの案件として、これら空港整備が行われているが、内容の伴ったものとするように、今後とも考慮してゆくことが必要であろう。

次に、インドネシア人というものについて、短期間の滞在であったが、一緒に働き、また眺めた限り、及び、その間に感じたことを一部紹介しよう。

九割近くのイスラム教徒で構成されているインドネシアは、アラブ地方のそれと違って、一言で言えば「何でもあり」の生き方であるように感じる。勿論、周囲に配慮するのではなく、自分だけ、都合の良いことをやっている。従って、「Air Safety System」でも、二年間の予備品を納入しているが、ややもすれば、予備品を勝手に持ち出して売りさばき、自分の収入にしてしまうこともあるようだ。通常、予備品は装置のそばに置いておき、必要なときにすぐに間に合わせるものがあるが、中央本庁で管理しておかなければ、すぐに紛失してしまうらしい。

機械の整備についても同様のことが言え、職務として勉強しておこうなどと思えるものはごく少なく、その時になって、言われるから仕方なく始めようとするが、もともとやる気が無いので、実効が

上がらない。

よく言われることに、新しい機材を入れたら、五年間は安心していられる。点検整備をしなくても、そのくらいの期間は無事に運用できると言うことから来ているのだろう。

日常生活を見ても、彼らの生き方を見ても、根本から改められない限り、先進国への仲間入りは、先ず困難であり、現実には彼らもそれを望んでいないのかも知れない。

最後になつたけれども、二〇〇〇年、最初にジャカルタに着いたときには、あまりにも文化の違いというか、生活ぶり、彼らの習慣を見て、笑つたり、驚いたり、珍しいものだらけであつたものが、回を重ねるごとに、驚くことも無く、笑うことも無くなり、あちらの生活に慣れてしまつたことに、自分でも大変驚いたことを思い出す。慣れてしまつたときが、油断もでてきて、危ないものだと言われる。辛い危ない目にもあわず、無事に往復できたことに満足している。「海外危険情報」と言う番組を、外務省が流しているが、決まり文句で「自分の身は、自分で守る」と言うのがあるが、将にその通り、大使館も、同胞も、誰も守つてはくれないことを紹介して、終わる。

世界学生ヨット選手権に参加して



監督 長嶺 公成
(4N)

監督及びコーチのコメント

十一月でもコートダジュールは暖かく、閉会式のパーティは野外でした。私は昨日までのレースが行われた海を見ながらこの一年間を振り返っていました。

二〇〇一年十一月 チーム編成(五名)、J24による練習開始

高橋氏、相澤氏、畠山氏にコーチを依頼

二〇〇二年三月 国内予選(ANIORU's CUP)優勝(Y23, 1/8)

二〇〇二年四月 伊海軍士官学校招待レース参加(J24, 7/21)

二〇〇二年五月 女子部員二名入部
SYWOC二〇〇二参加決定、チーム編成(八名)
ピオン(30ft)による練習開始

二〇〇二年九月十月 「青葉」(35ft福田氏所有)による練習

「ソーラー」(35ft)による練習

二〇〇二年五月十月 エントリーの手続き

き、旅行の手配、ツロン市、レース海面に関する情報の収集、同窓会、OB会等への支援金の要請

〈チーム編成〉

この選手権の参加条件は

- ① 国内予選での優勝
- ② 二名の女子を含む八名のクルー
- ③ 遠征資金の準備
- ④ 学校の許可



関根英子さんと

今年五月にこれらの四つの条件をクリアした時点で、監督としての参加の要請がありました。私はこの選手権のレベルの高さを知っていましたので、ある程度の練度がなければレースの結果が悪いばかりでなく、事故を起こす恐れがあり、多くの方にご迷惑をおかけすることになるので、私が納得できるチーム作りをす

ることを条件に同行を引き受けた次第です。

直ちにチームを編成し、各クルーの配置を決め、チームワークの確立を目標に練習を開始しました。特に、一学年の女子クルー二名については補欠がいなくてもあり、けがをしないで上達するよう期待をしていました。中田、山下ともこの期待に答えてくれてチームにとけ込み、遅いクルーに育ちつつあります。これからは楽しみです。

七月に入り、六年前にこの選手権に主将として参加した横山君に、監督補佐兼コーチとして同行をお願いしたところ、快諾が得られましたので、これで前回の経験を活かせることができると喜びました。期待どおり、彼は私の良き相談相手となり、クルーの兄貴役となりました。また、業務多忙にもかかわらず、このようになことに価値を認め、二つ返事で横山君の休暇を許可された上司の東郷一佐にたいへん感謝しています。

〈補欠〉

これで、メンバーは決まりましたが、八人のクルーと二人の監督・コーチで、補欠が一人もいないことに不安を覚え、主催者に補欠一人の追加の可否を問い合わせると、各国十人しか選手村に入れないという返事でした。もし、一人がダウンした場合には、七人でのレース参加はOKだということも確認し、学生十人のみで参加することも含め再検討した結果、学生から、やはりOB二名とクルー八名の編成で参加したい、と申し出があり、補欠なしで遠征することをクルー全員で再確認しました。もう誰も、病気も、



シャンタルさんを囲んで

けがも許されない状況になった為、かえって安全第一の意識が高まったと感じました。

〈人との出会い〉

夏の合宿が終わり、出発まで二ヶ月となり、この選手権で使用される35フィートの艇で練習をさせたいと考え、私の学生時代からのヨットの先生だった故関根久氏のもとで知り合い、最近はお隣仲間でもある福田義一氏（成蹊大OB）にその旨お願いしたところ、快く引き受けていただき「青葉」（35フィート）による練習が可能になりました。同時に、高橋良寿氏（東海大OB）にもお願いし、彼の管理下にある「ソーラー」（35フィート）による練習も始め、九月、十月は毎週末に35フィートの艇で練習ができました。これで乗りこなすところまではい

かなくても、35フィートの体験ができ、不安なくレースに臨むことになりました。

また、故関根先生のご令嬢英子さんがパリ在住なので、この遠征の件を連絡すると、次のようなFAXを受け取りました。

「・・・防大のヨット部と聞けば、父の思い出と重なって何ともいえませんね。十月末、仏にいらっしやるの由・・・何か細かい点で調べたりする事があれば申し出て下さい。・・・」

十月に入り、主催者に選手村の場所を問い合わせても、住所はメールされましたが地図は入手できませんでしたので、英子さんをお願いしたところすぐに地図を頂き、一安心でした。また、ツーロン在任の彼女の友人・シャンタルさんに空港から選手村まで道案内していただくことになりました。

このように四十年前に出会った関根先生のおかげで、35フィートの艇で練習ができ、苦勞なく無事選手村にチェックインできました。学生達も、人との出会いの大切さがわかったようたようでした。

〈SYMOCの運営〉

SYMOCの運営は、計画の変更も多く、艇の準備等も不十分でありましたが、運営スタッフが全員学生（二十三名）のみであることを考慮すれば納得できました。スタッフの学生は毎年全員交代し、この選手権を運営することでした。しかし、レース委員長とジュリーは資格のある社会人に依頼し、チャーターした漁船を本部船として、レースは運営されました。観覧艇の準備はなく、監督等が



Ecole Polytechnique スタッフ

レースを観るには自分で船を準備するほかない状況でした。

選手村は「IGESA」（陸軍の家族の保養施設）を利用していました。人里離れた選手村には公衆電話もなく、成田空港でリースした携帯電話と、選手村と艇の間のクルー送迎用に借りたレンタカーは生活必需品に近いものとなりました。

〈レース結果〉

一日目の五レースが終わった時点で、勝てる相手が見えてきましたので、二日目以降のレースにおいては勝てるチームに敗れることのないように、即ち十二位を死守するよう、原スキッパー・古庄タクティシャンにアドバイスをしました。しかし、六レースから最終レースまでの七つのレース中十二位以上だったのは三レースのみでありました。

これらの状況から、結果が十二位であったのは極めてラッキーだったといえます。実力以上のところを狙えば実力以上の結果になることが、クルーはわかったでしょう。また、最終レースに四位をとり、クルーが速いことは楽しいと感じてくれたことは、大きな収穫でした。

他国の選手ほとんどが幼少からヨットを始め、親もセイラーであることを考えれば、防大チームが事故なく十二位を確保できたのは、原スキッパーを中心に精進し、レースでベストを尽くした結果であり、学校名を越えて艇を提供し、また指導に当たっていただいたヨット仲間福田氏（成蹊大OB）、下平氏（成蹊大OB）、永田氏（成蹊大OB）、高橋氏（東海大OB）、関根氏（慶応大OB）、相澤氏（明治学院大OB）のおかげと感謝しています。

また、ご支援いただいた方々、壮行会に出席していただいた方々、ありがとうございます。

最後になりましたが、このような素晴らしい機会を後輩達に与えていただき嬉しかったことを西原校長に深く御礼を申し上げます。



原 巨樹 (四年(海上)スキッパー兼ヘルムスマン)

我々はヨットを地中海を、フランスを楽しみ尽くして帰ってきた。手強いライバル達と毎日戦い、とても素晴らしい友人ができ、十二／十四位という結果に悔しい気持ちを強く押さえつけながらもや

はり楽しかった。なぜだろうと考える。その答えは私なりの四年間の結論とも言えるが「ヨットという共通言語」が我々の拙い英語では伝えきれない事まで包み込んで会話してくれたからではないだろうか。「ヨットは語る」と私の尊敬する二人のコーチは教えてくれた。まさにヨットは「語り」。最高の親友になれたノルウェーのオリンピック候補選手とはナイトレースで夜中一時に宿舎に帰ってから更に三時半までヨットについて語り合った。Good EnglishがGood Communicationなのではない。こうして楽しい話のできたのもヨットのお陰だし、ましてヨットを知らなければあんなに素晴らしい友人達と知りあう機会もなく人生を過ごしていったのだろう。だからこそ言いたい。ありがとうヨット、ありがとう一緒に戦ったライバル達、そして地中海。本遠征に際し様々な方からご支援ご指導を賜った。また監督である長嶺氏、横山氏にはご多忙の中このフランス遠征にご同行頂き、常に我々の背中を暖かくそして強く押してくださいました。心強いご声援を頂いた全ての皆様深く感謝の意を申し上げます。最後にクルーの皆へ。四年間の最後に全日本の代表として共に戦い、フランスを楽しんだ事を誇りに思う。これからもヨットを楽しみ、世界へ羽ばたけ。

「SAIL FAST, LIVE SLOW」



大澤 誠治

(四年(海上)
パウマン

世界選手権。日本一となったチームが世界に殴りこみをかける。まさに夢のような話だ。この夢に憧れて入部したのもう三年半前になる。そして自ら初めての予選で敗北を味わい、苦渋を舐めることになったが、翌年は見事に雪辱をはらすこととなった。練習・研究・師事・・・そして三年間の経験が我々に勝利をもたらしたといえよう。日本代表として防衛大学校が決定したのである。

その後半年間はあらゆる時間がヨットにつき込まれた。特に、一学年の女子クルー二名はよく厳しい練習に耐え、立派なクルーとして成長したと思う。こうして準備を整え、我々はフランスへ旅立った。

地中海の風と初めての艇に翻弄されつつ、緊張の中、日本チームの出だしは不調だった。ようやく終盤になって動きのキレが良くなり、本来の走りが出来始めた頃にはレースが終了した。

確かに世界レベルは高い。幼少期よりヨットに乗っていた者が大半を占める国々に比して我々の経験は全く劣っていた。しかし、技術の面では遜色なかったと思える。小柄な体格ながら、日本勢はよく動き、よく走った。あとはコース取りさえ誤らなければ上位進出は間違いないだろうと思う。

海外に進出し、世界を相手に戦う。それを通じた国際交流。速く走る事への執

着とそれに伴う苦しさに耐える心。いま、ようやく、我が防衛大学校ヨット部は世界のスタートラインにたどり着いたのだ。後輩達が我々四十七期を超え、さらなる成長をすることを期待している。

今、ラグビーに学ぶ

六期生(海上・電気工学) 若林 保男

楕円形のボールに接した期間を振り返ってみると、私のラグビー歴は結構長い。プレイヤーとしては、高校生三年間、防衛大生四年間、海上自衛隊幹部候補生及び初任幹部自衛官二年間である。また、指導者として、海上自衛隊第一術科学校生徒ラグビー部顧問三年間に及び、総計十二年になる。今、還暦を過ぎて懐かしい昔を振り返るとラグビーの実践を通して、先生、先輩、同僚から学んだラグビースピリッツの骨格が見えてくる。現役当時は、先ず、怪我をしないように、恐怖心が薄らぐように、強靱な身体を造ることに精一杯であった。上級生になって後輩を迎えても、自信をもって技を伝授する程のものは中々身に着け得なかった。むしろ後輩からも多くを学び、彼等からエネルギーを吸収した。「教えるは、学ぶが半分」とも言われるが、これは事実であった。

私が卒業した都立高校では、ラグビーが男子体育の必須科目であった、男子の体育は、夏季に水泳、冬季に武道が申し

訳け程度に一、二回実施される他は、三年間を通じてラグビー一色であった。これは、教育大(現筑波大)ラグビー部出身の西山常夫先生の影響によるものであった。先生のラグビー指導は半端ではなかった。雪の日は一層張り切ってグラウンド一杯生徒達を追いかけるが、春先など、小春日和には、三十分程早くラグビーを切り上げ、グラウンドの片隅にある通称「ナマコ山」で女生徒と合流させた。盛り土の山は、早い者がちに三十名も座れば満席になった。いつものパターンであるが、童心に返った先生は、アドリブ宜しく、楽しげに、##おおきなくりのきのしたで、あなたとわたし、たのしくあそびましょう、おおきなくりのきのしたで##と唄い、同じじぐさで、生徒にあとを追わせて輪唱するのであった。適当に一小節を変えれば何時までも換え歌は続いた。結構、生徒には受けていたが、私は、何だか気恥ずかしさが先にたっていた。

冬には冬の厳しさを、春には春の優しさを硬軟合わせて教えたのでしよう。

先生は、「優しさを力に」換えた。

昭和三十三年(一九五八年)春、母校から六名が防衛大の門をくぐった。入校手続きの朝は、一つの風物詩があった。新入生が着校する頃、正門から本館へ真っ直ぐに延びた広い道の両脇に沿って、先輩達が列をなして出迎えた。大きく屈強な新入生を見掛けると、職を立てたラグビー部員や柔道部員は、先を競ってその新入生を取り囲んだ。私は、風物詩に

見とれるうちに人垣をくぐりぬけて本館に辿り着いた。声を掛けて来る部員はいなかった。

人生は皮肉なものだ。この事があって、私は、向こう見ずなチャレンジ精神でキツイと言われるフロントローを自ら志願するハメになった。

一週間続けられるか、いつ退部させられるか不安があった。

二学年の夏合宿になってから、とにかく卒業まで頑張る気持ちになった。

三学年になってから、兼重さん(四期)の後釜として左プロップに据えられた。

当時、兼重さんは、通称「五馬力」、私は「一馬力」と称されていた。私の体躯で「五馬力」の穴埋めをする事は大変であった。事実、渡辺長治監督にとっても大きな課題であったとみえて、紅白試合で、私は一日二試合出場することがザラにあった。これに耐えた御褒美であるうか、いつの間にか「三馬力」に昇進していた。

フロントローは、若林(六期)、大場(五期)、岡本(七期)。四学年では、若林(六期)、堀(七期)、岡本(七期)であった。シーズン後半には、セットスクラムをうまく組めなくなつて、高橋君と交代する場面が多くなつたが、とまれ、脱落は免れ、防衛大ラグビー部を卒業できたので嬉しかった。

その頃、私には目標と夢があった。

第一に、海兵隊(自衛隊で編成するとの噂があった)に配置されても耐えられる体力を付けること、

第二に、防衛大ラグビー部豪州遠征チーム(幻の計画があった)に参加

できる技量に到達すること、であった。防衛大卒業後も五、六年間、海兵隊へ転官の夢は消えなかつた。「目標と夢を力に」
換えよう。

昭和三十七年(一九六二年)春、先輩も後輩もない一年限りの海上自衛隊幹部候補生学校ラグビー部を同僚二十五名で結成した。ラグビー経験者は、防衛大卒二名、一般大卒一名だけであった。一か月足らずで、四月二十九日(昭和天皇誕生日)に実施された広島県七人制ラグビー大会に急ごしらえの三チームを送り込んだ。ほとんどのメンバーは、細部のルールは判るはずもなく、「Dash! Follow me!」を合言葉に突進し、無我夢中でタックルに飛び付くだけであつた。三チームともそろつて敗退したが、お披露目のジャージーを身に着けて、「ラガーは一日にして生る」気分で一ひとりの顔色は昂揚していた。

帰路、我々は年度活動目標を立てた。夏までに呉地区最強淀川製鋼所を撃破する、秋には中国・四国地方国体代表山陽パルプと互角に戦い、第一回陸・海・空幹部候補生学校対抗戦に優勝することであつた。このため、短い、貴重な夏休暇を一部返上し、合宿することを誓つた。驚いたことに、1名を残し全員が休暇を切り上げて参集した。合宿を計画実行するなどは前代未聞であつた。対淀川製鋼所戦、対山陽パルプ戦は目的を達した。三幹候対抗戦会場は、夢の秩父宮ラグビー場であつた。優勝した空幹候に負けたが、後半の中盤、スタンドオフの骨盤損傷(当時は交代が許されないので戦列に

留まつたが後刻骨折と診断)まで0-0の好勝負であつた。

翌年卒業後、国内巡航、欧州方面遠洋航海準備のため、二十五名は四隻の護衛艦に分乗することになった。寄港地では広場を探し、諸行事の合間に各艦毎に基礎的練習を続け、体力・士気の維持に努めた。国内巡航の途次、航海訓練のハンデイを乗り越えて挑んだ対鹿児島大戦に勝つた。努力は報われた。華麗なプレーはできなくとも、「やつてやれない事はない」とヒフティーン全員に印象付けるには十分であつた。

一三〇日に亘る遠洋練習航海(全航程約五万海里、訪問国十か国)では、コロンボ(スリランカ)、ツーロン(フランス)、キール(ドイツ)、ポーツマス(イギリス)へと、万里の波濤を乗り越えて転戦した。1勝3敗であつた。いずれも終わつてみれば厭戦気分は残らなかつた。正直に言つて、航海中の疲労が残り倦怠感があつた。競技場まで送迎バスに揺られる胸の奥は、トクラックで競り市に送られる牛の、あの心境であつた。しかし、軍楽隊の出迎を受け、ラジオの実況放送のインタビュアーを受け、ラグビー・フアンの熱い視線を浴びて、グラウンドに降り立ったときには、皆、日の丸を背負つた日本国海軍士官の顔になつていた。

「誇りを力に」換えていた。

コロンボでは第一試合があつた。強い候補生チームが派遣されているとの前評判が立つていて、陸海空軍特別選抜チームがぐすねひいて待つていた。忘れもしない3-52で大敗であつた。コロンボ

は、北緯7度付近(台湾南端は北緯22度)の熱帯(停泊中の平均気温・32度C)であつた。加えて、日本を離れて航海すること三週間。気持ちは突進しているが、前傾姿勢にならず突破力に繋がらない。タックルを受けると、途端に目から火花が飛んだ。あの時の火花は、ピカッピカッと光らなかつた。チラチラと目の中を黒い蚊が飛んでいた。終盤でやつと左隅にスクラムトライした。バックスも加わつて押し込んだスクラムトライであつた。スタンドの観衆の喝采を受けながら皆で歓喜した。

この負け戦からは智慧を得た。東京湾を出港してから益々航海日数は重み、氣候風土が激変(紅海南部海域の海上温度・40度C、艦内機械室温度・53度C)するアラビア半島を周航しなければならぬ状況に鑑み、ラグビー部員は、朝晩、洋上航行中も上甲板を駆け足周回することについて滝川司令官の許可を得た。また、試合が予定されていない寄港地でも土の上で練習することにした。名所見学に加わらず、岸壁での練習に自主的に残る者もいた。義務感ではなく、自分の身の安全を考えてのことであつた。ラクダの背に揺られてピラミットを眺め、エッフェル塔から華の都パリを眺めたい気持ちはあつたが、いずれ、将来自分で訪ねる、との信念に換えた。

ツーロンでは、気温23-26度C、善戦した。初秋の雰囲気であつた。副主将笹野君が鎖骨を骨折し異国の丘で入院した。

キールでは、気温14-17度C、3-0で勝つた。晩秋の下でのミーティングは

アットホームで、二次大戦における同盟国の余韻を感じさせた。ヨーロッパの対日感情はまだそんな時代であった。

ポーツマスでは、気温13〜17度C、善戦した。英海軍チームがタックルをかわして、鮮やかなドロップゴォールを決めた。生まれた時からボールに慣れ親しんだ者にしか出来ない、否、めつたにやっではならない程の究極の技に見えた。これがラグビー発祥の地のラガーかと、英国の空に放物線を描いてバーを越すボールを追って、妙な感歎が沸いて消えた。

遠洋航海中の試合は、負け戦でも、ノースアイドの笛の音に充実感を重畳させて聞くことができた。学生時代、負け戦のあとに重い気分とは大いに異なっていた。キツイ試合でも、日の丸を背負って精一杯友好親善に寄与したとの任務達成感があった。現役の後輩達にこの昂揚感を体験させたいものだ。しかし、神は、耐え難きを耐えたチームにしかこの恵みを与えない。

昭和五十九年（一九八四年）から三年間、駐米防衛駐在官として勤務した。初対面の外国要人に会ったとき、異文化・言語の障壁を乗り越えて、ラグビーの話題がその場の緊張感を解きほぐし、相互の個人的信頼関係を大いに深めてくれる場面があった。氏素性の分からない者が、互いに国家間の話をする事を生業にしているだけに、個人的な信頼関係を早く築くことは、この世界で重要な事であった。これは平時の、卑近で間接的な例に過ぎないが、練習が厳しければ厳しただけ、有事には、直接的、間接的に、思わぬ時に、更に役立つであろう。また、

上級生から下級生まで寝食を共にした在学生四年間で、延べ七学年にわたる陸・海・空幹部候補生が、渾然一体となった運動を通じて、培った絆は、必ずや自衛隊の任務遂行に寄与するでありましょう。この絆も自己の財産であり、日本国の財産になる、と自覚すれば、それは自分を支える応援歌にもなる。

「覚りは力に」換わる。さて、防衛大ラグビー部が創部五十年を迎えた。21世紀を迎える防衛大が、引き続きラグビーをクラブ活動のひとつに置くならば、現在、恐らく将来とも変わらない大前提があることを、今、再確認することは大変意義深いことである。

第一に、殆ど素人から構成される集団であること、

第二に、規律が要求される軍学校であること、

これは、避けて通れない防衛大ラグビー部の根源的特質である。一般にこの特質は、防衛大ラグビーの精強さを追求する上でマイナス要因として説明され、同情を得やすいが、果たしてそうだろうか。オリンピックメダリスト有森裕子さんは、あらゆる困難に直面した時には、「折角」と言う言葉を冠して物事を再考し、新しいエネルギーと解決策を得ていると語っていた。この金言は、五十年を迎えた防衛大ラグビーにとっても傾聴に値すると思う。「折角、素人集団だから・・・」とか、「折角、軍学校だから・・・」と換言してみると確かにプラスに活用できる要素がある。これを素直に評価し、日常生活に、練習に、試合に

活かすならば、防衛大ならではの伝統が定着し、防衛大ラグビーは、更に強く、逞しく発展するのではないだろうか。そうして、前線で戦える指揮官を自衛隊に送り届けるために、防衛大ラグビーは、心身共に絶対タフ（粗野ではない）でなければならぬ——国民の負託に応えるためにも、将来とも「One for all, all for one」の精神で、高次元のタフでなければならぬのである。

私は、防衛大ラグビー部の限らない発展を願い、永遠の課題「ラグビースピリッツ」を意識させてくれる母校防衛大ラグビー部にいつも感謝している。

(完)

京都大学アメフト部 水野監督について

七期航空 中 一皓

水野彌一監督は、昭和三十四年四月に防大七期生として入校、同期のクラスメイトとして一年間、第三大隊で寝食を共にしました。

当時、防大のアメフト部は関東リーグで活躍できる数少ない運動部の一つであったと思います。それだけに、新入生に対する勧誘も活発で活発で、四期生への願法さんは殊の外、熱心な勧誘をされ、無理やり入部させられたのだそうです。しかし、持ち前のフアイティング・スピリットで練習に励み、ガード・ポジション

で頭角を現していました。

ところが、一年生後期に実施された航空適性の身体検査で、脊椎損傷のため激しい過重のかかる戦闘機パイロットを避けて、レシプロ・パイロットの道を選択するよう指導を受け、防大入校時の戦闘機パイロットへの夢を断たれ、やむなく防大を退校、進路を変更して出身地の京都大学に学ぶことになりました。

京大アメフト部の歴史は古く、戦後まもなく米国人により創部されています。しかし、皆様ご存知のとおり、全国でも有数の難関大学であり、凄まじい入試勉強に耐えてきたほとんどの学生はアメフトの激しい肉弾戦に耐えるわけもなく、アメフトに入部する者すら稀で、部員数も全員出場しても人数不足の時代もあつたそうです。

そんな時に、彼のアメフト経験を知った先輩が助っ人をもとめてきたのが、再び彼をアメフトに駆り出すきっかけとなつたのです。勿論、彼の現役選手時代は関学をはじめとする私立大学に園が立たず惨めな試合の連続であつたと聞いています。

卒業後もコーチとして後輩達の練習を指導するうちに、複雑な作戦を駆使するアメフトは他のスポーツと異なり、京大でも練習のやり方次第では十分に勝てるチームにできると確信していたようです。そのころのエピソードを一つ。

水野曰く、「先輩、アメフトなら、その気になれば京大でも日本一にできると思いますが、どうでしょう。」

先輩曰く、「おーい、水野、そんなに後輩をシゴいて、どうするんや？ そんな

な馬鹿なことは考へんほうがいい。まだ、山本富士子がお前と結婚してやると云うんやったら、信用してやってもいい。彼女も人間やから気が狂うかもしれんやろ！しかし、アメフトで関学や日大に勝って、日本一になれる事なんて絶対にあり得ない事やから、無駄なことをして大事な学生を怪我させたらあかんぞ。」

しかし、そのような先輩の嘲笑をよそに、すべての勤めを捨て、京大アメフトの強化に専念するため、昭和五十五年、監督に就任してから僅か二年で関学に勝ち、翌五十八年には甲子園ボール（毎年十二月中旬、甲子園球場で行われる関西学生リーグの勝者と関東学生リーグの勝者が学生NO1を決める試合）で日大を下し、続いて正月三日のライスボール（国立競技場）にて、社会人NO1のレナウンチームを下し、名実ともに日本一となったわけです。その後、強豪の私立大学やそのOB達が活躍する社会人チームを相手に四回の日本一を成し遂げています。

スポーツ入学等の特典が一切認められない京大では、身体能力に優れた選手の確保にままならず、入部した学生の体力アップから取り組まなければならないのが現状です。そのため、個々の個人技では対抗できないため、チームを一つの組織として捉え、対戦相手を分析・研究して様々な作戦を駆使して、如何にすれば総合力で勝てるチームに仕上げていくかが指揮官としての監督の任務なのです。そうといった意味で、チームを一つの企業に置き換えて、特に関西では水野監督の考え方、取り組み方が企業人の脚光を浴

び、各種講演会や社員教育で重宝されています。また、新聞、雑誌でも取り上げられていますし、テレビ、ラジオ出演もしばしばです。最近では、NHKの深夜放送「心の時代」で連続出演していました。

最後になりますが、このような偉業の原点が、僅か一年足らずしか在籍しなかった防衛大学校にあると云うのが水野監督の口癖です。それは一体何なのか、監督自身の話でお聞き下さい。

人に恵まれる

九期 海上要員 航空工学専攻
定岡 正隆

平成十四年六月、私は予期せぬ海外旅行をすることになった。六月十一日から十三日にかけてカナダのモントリオールでAHS International（国際ヘリコプター学会）の二〇〇二年度学術総会が開催されたが、そのとき会長賞を受賞することになったからだ。

受賞理由は、長年にわたって防災活動や救急活動の分野でヘリコプターの運用に貢献し活用の道を拓いた、というものであった。とりわけ、高速道路など道路上からのヘリコプターによる負傷者の救急搬送、渋滞に阻まれて進めなくなったドクターカーの医師をヘリコプターのウインチで吊り上げ事故現場に降下させるなど、救急活動の分野におけるヘリコプ

ターの活用が注目されたようだ。思い起こせば、昭和四十八年五月三十一日、私は海上自衛隊を退職し、神戸市消防局の操縦士として勤務することになったのだが、このきっかけは、ヘリコプターを導入して二年目になる神戸市消防局が、航空隊を強化するため操縦士を増員することになり操縦士を求めている、と海上自衛隊時代一緒に勤務した初代の航空隊長から誘いを受けたからだった。

私が転職した当時は、神戸市消防局のほかに東京消防庁と大阪市消防局がヘリコプターを保有していたに過ぎず、その活用方法を模索しているときであった。それから約30年、現在では消防関係機関が保有するヘリコプターは68機になった。また、ヘリコプターの運用の考え方も大きく変わってきた。このような変遷の中、神戸市消防局は、ヘリコプターの活用について各分野にわたり先鞭をつけてきた。初期の時代から消防ヘリコプターに携わってきた者として、AHS会長賞の受賞は大変名譽なことであり嬉しく思った。

すでに定年退職していたにもかかわらず、私の受賞を神戸市消防局も喜んでくれたが、賞を受けることになった数々の成果が私一人の力で成し遂げられたもので

はないことはいまでもない。

ヘリコプターを災害現場で積極的に活用しようとした現場指揮者、警察・道路管理者・医療機関等との折衝や調整に尽力した人、私の意見をよく理解してくれて消防局の施策に取り入れるなど具体化に努力した人たちがいた。また、万が一のときには責任を取らなければならぬ立場の人が、その気持ちを殺して、私を信じて任せてくれた。それらの人々の支えがなければ到底大きな成果はあげられなかった。

更に、神戸市消防局には自由にもが言える雰囲気があった。国が設置した委員会の委員として出席したときも、忌憚のない意見を述べてきたが、ある時、委員長をしていた消防関係者以外の人から、「現職の人からそのような意見が出るとは思わなかった。定岡さん、よく首がつながっていますね。」と言われた。そのようなことがあっても消防局から注意を受けたことはなかった。



神戸市消防局のヘリコプターから航空救助隊員の介添えを受けて降下するドクターカーの医師（写真提供：産経新聞社）

海上自衛隊が旧海軍から引き継いだ良い伝統の一つに、物事が決定するまでは、たとえ初級幹部であっても自分の所信を自由に述べる事ができたが、そのような気風が神戸市消防局にもあった。

このようにヘリコプター活用の場合の人との関わり合いのほかに、受賞に向けて多大な力を注いでくれた消防関係者以外の人々がいた。

高速道路等の事故にヘリコプターを活用して負傷者を適切な病院へ搬送することは、先進諸国では何ら珍しいことではないかもしれないが、日本では、救急関係者等から強く叫ばれているものの、世界に遅れること著しい。

このような日本の現状を何とか改善しようと活動している人々や個人的に私を支持してくれている人々が、日本の救急現場でヘリコプターを活用することの困難さと、多くの制約の中、神戸市消防局が成果をあげ救急救命に貢献していることを世界に向けて訴えた。こうした人々の強い働きかけがなければ、神戸市消防局の活動は世界に知られなかったのではないかと思うのである。

私の受賞を新聞報道で知り、真っ先に電話をくれたのが同期生で海上幕僚長を務めた藤田幸生氏であった。私が海上自衛隊を去ってから30年、私の動静を心にかけてくれていた彼が、私の受賞を祝い共に喜んでくれた。友情とはこういうものだ、と深く心にしみる言葉を添えて。

今回の受賞で、私は多くのことを学んだ。人は一生のうち、はつきり自覚しないものの、何度も人生の岐路に立つものである。踏み違ふのはほんのわずかでも、

5年、10年過ぎるうちに大きく開き、歲月とともに、別世界にいるようになる。一つの信念を持ち、夢を捨てず一つ一つ積み上げていくうちに、いつの間にか夢が夢でなくなることもある。ギリシャ神話の彫刻家ピグマリオンが象牙に彫った女性の像を人間の女性に変えることができたように。

人は、他人の悲しみを共に悲しむことができて、他人の幸せを共に喜ぶことは難しいという。しかし、他人の成功に力を貸し、人の名があがることに尻押しをする人々も、また、いたのであった。私は、確かに、そのような素晴らしい人たちに恵まれていたのだった。

大空と共に

十三期海上 後藤(松岡) 紀之

「J1XX、Cleared for take off」、管制塔よりようやく離陸の許可を受け、自分達の番が回って来たという安堵感とある種独特の緊張感がコックピットに漂う。エンジンを離陸推力の70%まで上げてそのスタビライズを確認した後、一気にフル回転として離陸滑走を開始し、約1分後には軽いショックと共に朝靄の残る大空へと機首を上げて行く。みるみる内に眼下では今飛び立ったばかりの地上の景色が小さくなり、一万メートル上空を目指して上昇を続ける。

離陸、上昇の操作も終わって一段落し

たところで自動操縦に切り換え、昔だったら一服するところだが最近のコックピットを含め機内では全面禁煙となつているため、仕方なく紙コップに手を伸ばして冷めたコーヒーを口に運びホッと一息つく。

このような操作を何千回となく繰り返してきたものの、毎回違った感動を覚える。

幼い頃からパイロットになるのが夢でしたが、その道へ進もうと決定付けたのはやはり昭和三十九年の東京オリンピックにおけるブルーインパルスの華麗な演技だったかと思えます。翌年四十年にその夢を実現すべく期待と希望に胸膨らませながら無事小原台の土を踏むことが出来ました。青春真っ只中の四年間を小原台で過ごすことが出来たのは、私にとつて一番大きな財産だったと自負しています。しかし防大卒業後、江田島へ赴任したものの幹校入校式前日にそこを去ってしまいました。

実はその前の年より民間航空で自社養成制度というものが始まったのを防大卒業直前に知り、最初は余り気にも掛けませんでした。江田島へ赴任して入校式迄の1週間の内に、どうしても常に現場で世界中を飛び回りたいという気持ちが膨らみつつ、後先考えずに辞めてしまいました。しかし辞めてはみたものの日本航空の試験を受けるのはそれからで、民間航空のパイロットになれると言う保証はどこにも無く、今考えれば何と無鉄砲なことをしたのかと背筋が寒くなる思いがします。勝手な言い分かもしれませんが、私ももし私の息子が同じ様なことをする

となると私は猛反対することと思いません。

当時の私は防大出身という自負と自分は学生時代にパイロットの適性があつたという理由だけで、自分が試験に落ちるはずが無いという自信過剰そのものだったような気がします。その年の六月から九月にかけて日本航空のパイロット要員としての採用試験が始まり、幸い6次迄の試験をクリアすることが出来、十月に海外委託の四期生として入社致しました。

仙台における基礎訓練の後、アメリカのサンディエゴにあるPSAという航空会社に委託されてパイロットとしての初期訓練を受け、その後各種の訓練を経た後、入社から二年後にDC-8型機のセカンドオフィサー(パイロットのライセンスを持つている者が副操縦士になる前



に航空機関士として業務を行なう職種)として乗務を開始しました。主にモスクワ線を約三年乗務した後、DC-8、B-747型機の副操縦士を経て、昭和五十九年にB-747型機の機長となり約半年間国内線を乗務した後、太平洋線に移りました。

この頃を思い出して今でも一番心に残っていることは、やはり私がキャプテンになった次の年に起こった御巢鷹山のB-747による航空史上例を見ない事故かと思えます。その前にもDC-8で何回か事故がありましたが大勢の乗員、乗客の方々が亡くなられたことに対しては言うまでもなく、あの事故を起こした飛行機は私がキャプテンになるための訓練中、或いはキャプテンになって国内線乗務中、何度となく乗務した飛行機でした。

当時私達の間にはジャンボジェット機に対する安全神話みたいなものがあつただけに、あの事故には相当なショックを受けたことが今でも脳裏に刻み込まれています。

約二年間B-747の機長として乗務した後、第4世代の航空機と言われるB-767が導入され、私もその飛行機へ移行しました。コックピットの中はそのほとんどがコンピューター化され、乗員も機長と副操縦士の二人だけになり、最初は相当なカルチャーショックを受けたものです。その後、B-747-400、B-777等、新型機が導入されましたが私の場合、途中三年半のアメリカの訓練所勤務があつたものの十六年間B-767に乗務し続け、多分六十歳の定年を迎

えるまでこの飛行機を飛びつづけることになるかと思えます。アメリカの訓練所へは教官として赴任しましたが、思えばキャプテンになってそのほとんどが訓練、査察関係の業務だったような気がします。

その訓練所ですが、日本航空ではアメリカに二つの訓練施設があり、一つはカリフォルニア州ナバにある基礎課程の訓練所、もう一つはワシントン州モーゼズレイクに実用機課程の訓練所があります。

一九九一年から約三年半、ナバの基礎課程の訓練所の教官として勤務する機会を得ることが出来ました。ここはサンフランシスコから車で約40分、カリフォルニアワインの産地として有名であり、どこを見渡しても葡萄畑という風光明媚なところで治安も非常に良く、家族共々貴重な体験をすることが出来ました。ライン業務を離れて若い訓練生と共にカリフォルニアの空を思う存分飛び回れたというのも今では楽しい思い出として残っています。

これ迄のパイロットとしての三十三年間、恐い思いをした事も何度かありますが、私にとつての貴重な体験というよりは、五年ほど前に離陸直後にエンジンの調子がおかしくなり、二つのうち一つのエンジンを停止してすぐ飛行場へ引き返したことでしょうか。一つのエンジンでも充分普通のフライトは出来ませんが、シミュレーター訓練ではいつもやっていたことでも実機では初めての経験でしたし、管制官の方も緊急事態ということでも少しく早く着陸させようとかかなり慌た

だしいフライトとなった覚えがありません。

常に現場で飛びつづけるという当初の夢は実現出来ましたが、私も定年まであと四年を切つてしまいました。

今でも同期の仲間と会うたびに自衛隊に残るべきだったと自問自答することが度々ありますが、その昔幹校を辞める時に、多くの方々に迷惑をかけたながらも飛行機一筋で生きて来れたことは本当に幸せな人生だったと自分自身を納得させ、残り三年半、思う存分大空と共に生きる事が御世話になった防大への御恩返しと思つていきます。

先日、夫婦で江田島を訪れる機会がありました。三十三年前の思い出が走馬燈のように駆け巡り、思わず涙してしまいました。最後になりましたが、防大創立五十周年をお祝いすると共に、同窓生皆様のご健勝、ご活躍を心よりお祈り申し上げます。

インド洋に展開して

第二護衛隊群司令 海将補

本多宏隆(十四期)

昨年の九月に発生した米国の同時多発テロから既に一年が経過し、そして間もなく海上自衛隊が艦艇をインド洋に展開して一年を迎える。現在もインド洋における米海軍等に対する協力支援活動は継続中であり、詳細については記述できな

いが、昨年十一月に三隻を率いて情報収集の目的で日本を離れ、引き続きインド洋に展開し、被災民救援活動を終えた二隻を加えた五隻で最初に協力支援活動等に従事してきた指揮官として、当時の状況を述べることにする。

◎ テロ発生から出航まで



米国において同時多発テロが生じたとき、私はロシアとの捜索救難訓練を実施するため佐世保に入港したロシアの艦と諸行事を実施中であつた。米軍基地の門は直ちに閉じられ、車の出入りはすべて禁止された。そのため基地内の棧橋に係留していたロシア艦との往来には支障が生じたが、米軍の警戒は最高度に強化されており米軍の緊張感を肌で感じた。そのような中で、我々はロシアとの訓練を無事終え、総理から発表された米国の同時多発テロへの対応に関する我が国の措置に

ずるため、何時出航が命じられても対応できるように準備作業に取りかかった。準備は通常の出国手続きから、物資の搭載、必要と思われる装備品の新たな設置、人事、訓練等々であったが、直前に遠洋練習航海で湾岸諸国を訪問した練習艦隊の情報が大きい役に立った。

また出航までの期間はマスコミの取材攻勢を受け、我々は平静を装ってはいたが、大変迷惑を被ったものである。

◎ 協力支援活動等

我々に与えられた任務は米軍等の軍隊に対する物品及び役務の提供、便宜の供与その他の措置を実施する協力支援活動、遭難した戦闘参加者の捜索又は救助を行う捜索救助活動及び当該活動を実施する海域における警戒監視・情報収集であった。

米国海軍とは毎年共同訓練を実施していることもあり、支援そのものはスムーズに行うことができるという確信があったが、現場海域での厳重な警戒は必要であるが具体的なテロの脅威は不明であるし、そして我々の部隊に対する後方支援に関しても若干の心配があった。海上自衛隊は、遠洋練習航海で各国を訪問してきた経験はあるが常にあらかじめ計画されたものであり、訪問する日時、期間も出発前から決定している。しかしながら、今回の支援活動で外国の港湾に入港する際は、その都度、当該国の便宜供与を受けなければならぬし、米軍のように入港したら直ぐ支援が得られるわけではない、補給品の調達、修理部品の輸送等

も事前には決定していなかったからである。

私は任務を遂行するに当たって、日頃の訓練の成果を存分に発揮し、何事にも柔軟に対応していくしかないと思いを決めた。

支援活動は戦闘活動とは一線を画した海域にガステーションを設定し、警戒監視を継続しつつ燃料を米国等の給油艦等に配った。入港しても警備は緩和することはなく、常に警戒態勢をとっていた。

我々の部隊への後方支援も支援活動を開始した当初は、多少の問題があったが、現地に連絡要員が派遣され、燃料、糧食、岸壁の確保等の調整に当たるようになってからは、順調に進行した。支援活動等を次の指揮官に申し送るとき私は次のように要約した。

- 今回の支援活動は、内容そのものは我々の能力からすれば困難ではないが、極めて重要な任務である。
- 対テロであり明確な敵はいないが、決して油断はできない。
- 短距離を速く走らなくてもよいが、長距離を黙々と走る忍耐力が必要である。
- 湾岸戦争の時に比較して、支援する金額ははるかに少ないが、以前とは比較にならないほど米国に感謝されている。
- 一緒に戦闘を実施しているのではないが、寄港する各国、アラビア海周辺に展開する各国海軍が、好意的であり、仲間意識を持って歓迎してくれる。

◎ 協力支援活動の成果

一つは国際社会への貢献である。米国等の軍隊に対して補給・輸送等という形で協力支援活動を行うことにより、我が国が国際的なテロリズムの防止及び根絶のための国際社会の取組に積極的かつ主体的に寄与し、我が国を含む国際社会の平和及び安全の確保に資する上での我が国の姿勢を顕示することができたことである。二つ目は従来から緊密な関係にあり、毎年訓練を実施している米国ではあるが、今回の緊密な連携と親密な連帯感に基づく支援活動を通じ、更に強固な日米関係の構築に寄与できたことである。三つめは湾岸諸国寄港を通じ、同地域に対する我が国の関心の強さを具体的な形でアピール出来た点である。

今回の協力支援活動等の実施は、整備する自衛隊から、働く自衛隊への転換期にあつて、今まで訓練主体であった海上

自衛隊が、海外において実任務を遂行するとう正に働く自衛隊になれるか否かの試験であったかもしれない。

この支援活動が順調に継続しているのは、もちろんオペレーション部門の部隊が日頃の訓練の成果を十分に発揮し整齊と任務を遂行しているからに他ならないが、海外において任務に従事する部隊に即応し、縁の下力持ちとなつて昼夜を問わず後方支援に当たっている後方支援部門の活躍もあるからである。最後に、我々は今回の任務を遂行して、国際貢献ができたことまた米軍との強固な関係の構築に寄与できたことを誇りとし、今後国際社会の一員としてこの種事態に対応する際、整齊と行動できるような精強な部隊を錬成し、即応態勢を維持する所存である。



湯治温泉宿「ごぜんの湯」の坊主から

航空五十六会 特別会員
杉本 佳則 (十五期海上)

じーほーさんしーいーしーふー、しー
そんぷーさーもーこーさー、もーこーほ
ーじやーほーろーみー
十方三世一切佛、諸尊菩薩摩訶薩
詞般若波羅蜜……三世(過去、現在、未
来の時間的ひろがり)と八方に上下を加
えたあらゆる方角(空間的ひろがり)の
悟りを開いた、またはこれから開く全

の方の偉大な智慧に導かれることを願うお経です。

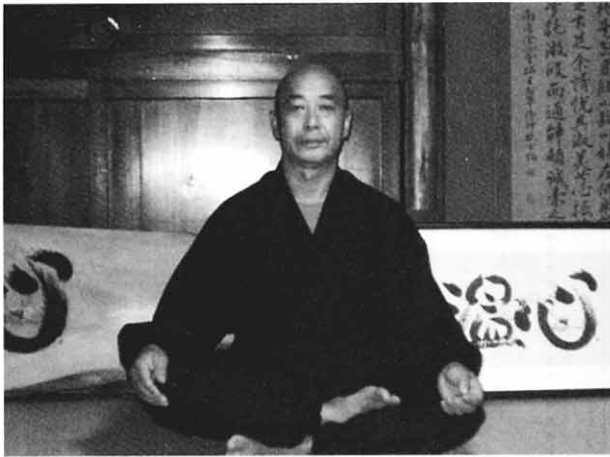
：又願わくは汝等。昼夜恒常に我を擁護して、我が所願を滿ぜんことを。願わくはこの食を施す。施餓鬼のお経も聞こえます。

伊豆半島の真中 修善寺と伊東の間の山里 古い民家を休憩所にそのまま利用した小さな源泉掛け流しの温泉湯治宿(日帰り/宿泊)「こぜんの湯」を三年前から営業をはじめました。

主人、風呂番、調理人、掃除夫をしています
杉本佳則(十五期 海上航空工学)と申します。

もうひとつの名は曹洞宗妙高山最勝禪院の弟子で安名を佳道。

同窓生アラカルトに何か書くと航空同期の奈良君からご指名ですが、かけるの



は冷や汗と恥ぐらい。どうせかくならん懺悔文を唱えつつ、パソコンにむかっています。

過去 それはすでに過ぎ去りしもの。あの頃 小原台に住み、日々煩惱の火が燃え盛る中であつて悩みの果てに民間行きを決心したこと。それでも捨てきれずに航空機関連の会社に勤めたこと。二十数年民間航空関係の仕事の後、防衛営業の担当となり航空自衛隊同期生との二十数年ぶりの再会。航空五十六会にゴルフ参加した日々。海上や陸上の同期との再会等。YS-11の整備や改修で先輩、同期、後輩にお世話になったこと。感謝の日々でした。

禅宗である曹洞宗の得度をさせていただいたこと。勤務している会社の21世紀ビジョンを精魂こめてつくったこと。しかしそれを実行すると確約しておきながら、実行しない泥棒会社にいられなくなつたこと。そこでの逆縁の菩薩との出会い。こういうことをしてはいけないと自らその身を汚してまで教えてくれる逆縁の菩薩社長様。今、拉致で話題の北朝鮮も逆縁の菩薩さまか。

「この世の中が邪悪にも盗賊の支配するところである場合には、幸福などという問題は、話題にならないものである。そして盗賊のさまざまな支配がすべてのものの中に存在する場合には、さまざまな行為がそのような事情によって無意味なものになる。」中論 ナガールジュナ(西嶋和夫 訳)

伊豆の八十八カ所の徒歩巡礼をしたこと。歩き歩き歩き疲れて、その道すがらやっといまの仕事を目指す決心ができた

こと。二十七年勤務した会社をリストラ同然退職したこと。

それらのもろもろの出来事はどれひとつとつてもなくてはならなかつたこと。必ずそうなつたこと。その時その時に存在する全ての物質とそのエネルギー状態は二つとして起こり得ないこと。たつた一つの現実世界。それは過去の全ての結果が今あること。これに気付くのに五十年の月日がかつたこと。

生命は光と水と土そのものであると得心させられたこと。

温泉という善い水の資源に恵まれたこと。退職金を使い、手作りで露天風呂をつくつたこと。妻との離婚届に判子をつけてでも、湯治場が伊豆にもあつたらいいと考えてしまつたこと。

同窓生の皆様、おろかな私の過去を笑いお許しください。

がしやくしよぞうしよあくごう、かいゆうむしとんじんち、じゆうしんくいしよしよう、いつさいがこんかいさんげ我昔所造諸悪業、皆由無始貧瞋痴、從身口意之所生、一切我今回懺悔

現在 これしかありえない有り難い瞬間

九月二十一日 09:00 源泉の温度は62度 泉質 含石膏ぼう硝泉 源泉掛け流し 循環なしの風呂番 本日早朝 川漁師の真似事をする。ありがたいことに今日は不漁。石鯛 天然鮎 うなぎ、やまめ、ずがにをねらい殺生を重ねる覚悟ができてきていること。生き物を殺す意味がわかつてきたこと。

宿泊客予定 本日5組

本年足腰の不自由な方も利用しやすい、車椅子対応のバリアフリーの新館が

完成したところ。

日々新しい出会いに感謝しています。

今年から看護婦であつた妻が退職し、応援している。離婚届はまだ提出してないようです。

未来 未だ来らざる、あれこれ思つても詮無いこと。

同窓の方やご家族に限らず、だれしもどうせなら地獄より極楽に行きたいと言います。「極楽でも地獄でもあの世はよほど良いところとみえて帰つて来た人は一人もいねー」と私の親父。そんなわけのわからない世界のことを考えるよりも現実世界で極楽にいるのと同じ日々をすごせないか。これが私の問題です。生きている間に楽しい生き方をし、良い影響を回りに与えていきたいものです。これからあつちが痛い、こつちが調子悪いと今までの全ての過去が因となって病に苦しむことになる人が増えてきます。私も老眼、中年になつてやつたらグビーの古傷頸椎椎間板ヘルニアが持病です。

現役でご活躍の方は勿論、退官なされた方もお気がむいたら、お出でください。湯治宿ですから自炊もできます。レンジヤーならずとも同窓の方なら無銭で生きていけるほど山野に食材はあります。特に退官直後の区切りなど、これまでよく酷使に耐え、頑張つてくれた幾千幾百萬の命の凝集された貴方の身体をいとおしみ、お湯につけてやってください。来し方、行末に思いをはせながら、坊主と酒でも飲んでやってください。これからの酒の肴は ずがに、いのしし鍋、しか刺身等です。

「沐浴身体 當願衆生 身心無垢 内

外光潔」入浴の偈

ここへは、肩書きや浮世の塵芥など余分なものは脱ぎ捨てるために、お出でください。

余分は脱ぎ捨ていい湯だな。ここは冷川御前の湯 人もない犬もない、石もない花もない、太陽の子供達はみな大切です。お金は一番大切。少し持つてきてください。

以上

自作ホームページ

<http://village.infoweb.ne.jp/~kenko/>
ヤブ等の検索エンジンで 伊豆 源泉 湯治 又は直接 ごぜんの湯 で検索

「えひめ丸事故を通しての経験」

二等海佐 林 秀樹

時が経つのは早いもので、この原稿を書いている今、えひめ丸の事故が生起してもう一年以上が経過しました。最愛の家族を亡くされた方々の心に刻まれた事故の傷跡が癒えるには長い時間が必要であるかも知れませんが、ハワイ連絡幹部としての任期を終えるにあたって、この事故に関わった一年間のできごととその時々にとった私の行動等を顧みたいと思います。

当時、私は海上自衛隊から米海軍太平洋艦隊司令部に派遣された連絡幹部であり、ここハワイではただ一人の海上自衛

官でありました。本来の任務は、アジア太平洋地域の安定に寄与するための日米海上防衛協力、日米共同作戦、防衛力整備構想、各種共同演習等の調整業務にあたることですが、平たくいえば、米海軍の中にあつて唯一の海上自衛隊員として日米両国の懸け橋になるということでした。

起きてはならない悲惨な事故が発生した直後、私の脳裏にひらめいたのは、「この事故を一九九五年の潜水艦『なだしお』事故の二の舞にしてはならない」ということでした。状況こそ異なれ、今回の事故は当時の海上自衛隊の事故にあまりに酷似していました。私は、あの痛ましい事故を通して海上自衛隊が得た貴重な教訓をここに生かすべきであると強く感じました。

事故当初は、被害者に対する同情論、米海軍に対する非難、中傷が渦巻いており、事故の責任は米海軍にあるとは言え、あまりにもマスコミの論調、世論は偏っていました。家族の悲痛な叫びがマスコミ等によって増長されるにつれ、日米両国間の溝は深くなる一方であり、とどまるところを知らないかに見えました。私は、米海軍司令部内の唯一の日本人として、事故直後の捜索救助活動について家族説明を行う際に専門用語の通訳等にあたることになりましたが、私が海上自衛官であることを知らない、また事故によって気が動転している家族からは厳しい叱責を受けたこともありました。私自身、この事故には直接何ら関与していない海

上自衛官が如何なる立場で関与すべきであるのか？海上自衛隊までがいわれなき非難の対象となってしまうのではないか？という疑問があつたことは否定できません。事実、太平洋艦隊司令官ファールゴ海軍大將は、家族、マスコミに対して米海軍が話すときには是非私を通訳にと望んでおられた反面、「事故そのものに無関係である海上自衛官を矢面に立たせていいものか。」と悩んでおられました。

しかし最終的にはこの問いに対し、私は「日米両国の友好関係にとつての未曾有の危機となりつつあるこの事態を救えるのは、30年間ともに太平洋の安定のために努力してきた海上自衛隊しかない。ここはあえて火中の栗を拾つても米海軍と海上自衛隊が一枚岩となって日米関係を土壇場でくい止めることが求められている大事な時、日米関係の正念場である。あえて火中の栗を拾うべきだ。」と考えていたところ、東京の海上幕僚監部も同じ思いだったようで、防衛部から同様の指示を受けました。海上自衛隊の制服を着ている米海軍司令部の一員として立ち会ったため、怒りに満ちた家族らから「どっちの味方か」となじられることもありましたが、この日を境に以後十一年の間、この信念を貫くことを誓いました。

司令部棟の一面にEMCC（えひめ丸コマンドセンター）が開設され、日本の宗教観や礼儀作法を私は教え続けました。謝罪特使のファールゴ海軍作戦副部長もその一人でした。米海軍ナンバー2

の大將が、当時まだ「少佐」に過ぎなかつた私に、「日本人に対する正しい謝罪の態度を教えて欲しい」と頭を下げられました。私が（僭越ながら）ブリーフィングしている内容をファールゴ大將は一言も聞き漏らすことなくメモをとつておられました。二月二十六日の朝、日本へ向かう直前の米海軍機から副部長の緊急電話が入りました。「えひめ丸という言葉と大西（船長）という言葉の発音を直してくれ」。このころ、マスコミでは「土下座しろ」とか「米政府は日本人の心情が理解出来ない」と等と言つた論評が渦巻いていました。しかし、私はこのファールゴ大將の真摯な姿勢に胸を打たれるとともに、ふと日本人として我が身をおきかえて考えた時、これが仮に海上自衛隊の潜水艦が東海中で訓練中に付近を航行中の東南アジアの漁船に衝突、行方不明者を出してしまつていたとして、海上自衛隊ナンバー2が謝罪に行くとしたらここまで相手の国民感情を理解しようと努力し、たかだか少佐ごときとの連絡幹部に頭を下げるだろうかと思うと、改めて米国民の懐の深さに深い感銘を受けました。ファールゴ大將が総理官邸で森総理（当時）の前に深々と頭を下げるシーンを私はテレビで見えていたが、これほどの海軍高官が多くの日本国民が見ている前でここまで頭を下げて謝罪することがどれほど屈辱的で耐え難いことであるか、同じ海軍士官として痛いほど理解でき、流れ出る涙を禁じ得ることができませんでした。数日後、再びハ

ワイに立ち寄られたファロン大将にお会いしましたが、私の手を握りしめ、「君のおかげで米国民を代表して心からの謝罪を示すことができた。感謝する。」と言われました。

海上自衛隊が派遣した、最新の潜水艦救難艦「ちはや」がパールハーバーに入港したのは八月二十日の午後でした。岸壁に多くのマスコミ関係者が並ぶ中、整齊と入港した「ちはや」の艦首に日の丸が、艦尾には自衛艦旗が高々と掲げられていました。「ちはや」の姿を見るまでは、思い思いの取材をしていた日本のマスコミ陣も、その旗を見た瞬間、誰もが目頭を熱くし、声を詰まらせていました。私も、海上自衛隊に勤務して十七年、これほど美しい艦艇、日の丸、自衛艦旗を見たのは初めてでありました。この時の感激、安堵感は一忘れ得ぬものであり、日本国に対する愛国心を再認識した瞬間でした。当初、引き揚げ作業は早ければ八月下旬にも完了するとの見通しでありましたが、実際の作業は困難を極め、一日と作業は長引き、「ちはや」の乗員一三九名の中にも、次第に焦燥感が高まってきました。終わりの見えない派遣と、出番を待ち、準備と訓練に明け暮れる毎日。その中で、一人の乗員が病院で治療を受けるというアクシデントが生じました。患者はただちに陸軍病院に入院し治療を受けることができ、大事に至りませんでした。後日この乗員が退院後、「ちはや」艦長に直接「ハワイで再度手術を受けることになっていいから、ど

うかこのまま任務を全うするまで帰国させないで欲しい」と申し入れてきました。その乗員は目に涙を浮かべ、「海上自衛隊を代表し、御家族のために、また日米両国の友好関係の維持のために派遣されたのに、目的を果たさずに帰ることはできません。」と訴えたそうです。この乗員の気持ちは、当時の乗員総員を代表していたのだと思います。技術的な困難さから、作業が遅れ気味になっており、いつ「ちはや」の出番になるか不安を抱えながらも、皆任務を達成したいという気持ちだけで、何一つ不満も言わず準備作業、訓練に邁進していました。自らの任務を自覚して、任務を全うすることだけが集中した人間の美しさに同じ自衛官ながら感動を覚えました。

遺体の搜索活動が終わりに近づいた十月末、米海軍は民間船を借り上げ、鎮魂のために御家族を現場水域に案内しました。「えひめ丸」を吊り上げていた梓組みの黄色い姿がぼんやり海に浮かんでいたものの、「えひめ丸」の船体そのものは見えませんでした。その見えない船、御家族は必死で海中を探し、同船が西、つまり日本の方向を向いて海底に横たわっていることを説明すると、船上では泣き声があひときわ高くなり、海中に花が次々と手向けられました。

やがて現場水域を離れる時間になり、船が動こうとしたとき御家族の一人の方が私を呼び、声を詰まらせながら、「台船の上で作業をしているダイバーたちにお礼の言葉を伝えたい。」と言われまし

た。責任者の米海軍中佐に無線でメッセージを伝えると、台船上のダイバーから「皆さんの気持ちに伝えるよう、全力を尽くします。」と返事が来ました。その内容を私がマイクで御家族全員に伝えるときでした。誰からともなく、台船に向かって手を振りはじめました。それに応えて台船上のダイバーもいつせいに手を振ってきました。現場海域にいたみんなが泣きました。御家族、私、そして米海軍中佐をはじめ米海軍関係者全員もサングラスの下で涙をこぼしました。

事故が起きたとき、家族の心は米海軍に対する怒りで一杯だったことでしよう。しかしながらそれから八か月、最愛の夫や息子をなくした悲しみは消えないものの彼らの多くが米海軍に対して心を開いてきました。それは度重なる失敗や困難、問題に直面しても米海軍が固い決意で乗り越え、およそ誰もが不可能と考えていた引き揚げ作業をやり遂げたからであります。米海軍は家族との約束を守ることだけを考え必死で最善を尽くしました。船内に入ったダイバーたちは、危険な環境であるにもかかわらず、素手で作業をし、また遺体を見つけると海中で合掌の後そっと触れました。

その陰には、遺体に関する日本人の気持ちを理解しようとする米海軍関係者の切なる思いがありました。

船内搜索では、皆様御存知の通り八人までが発見されたものの一人の生徒さんはどうしても発見することが出来ませんでした。米海軍が三週間強にわたって実

施した潜水作業を終結し、海上自衛隊のダイバーによる最終確認に後の望みを託す時を迎えるということは米海軍関係者にとって苦渋の決断でありました。彼らは行方不明者を自らの家族のように思っ

て作業に当たって来ました。そのことは、最後の一人となった家族の方に搜索終結を告げた次のような言葉に表れています。

「今まで全力で搜索してきましたが、残念ながらご子息の御遺体を発見することはできませんでした。これで搜索終結とするのは、米海軍としても非常に残念な結果であると同時に、苦渋の決断であります。ここにこれまで我々米海軍の作業を信じ、御理解をいただいたことに対して心から感謝いたします。ダイバー一人一人は、皆、行方不明者を自分の子供、弟のように思っ

て潜って捜して来ました。我々は絶対見つかるという希望と確信をもっていたので本当に残念な結果です。しかしながら我々の辛さに比べたら、御家族のお悲しみはいかほどかとお察しいたします。米海軍はこれから海上自衛隊に我々が最後まで失わなかった希望を託します。「ちはや」艦長は同じ海軍士官として尊敬する人物です。これから米海軍は彼が指揮する潜水作業を支援する立場に回りますが、これまで潜水作業を実施してきた以上に、100%海上自衛隊を支援します。我々は何としても御家族の元に返してあげたいのです。」

この言葉の通訳に当たった時、これ以上の辛さはないと思いましたがこの8日

後にもっと断腸の思いがする瞬間が待っていました。

当日は御家族にとつても私にとつても心を静めることができない落ち着かない一日であったと思います。どんな言葉で伝えようと、御家族の心の苦しみを和らげることなどできるわけがないことはよく判っていました。自分の気持ちを整理できないまま、一睡もできないうちに夜が明けて、ついにその日を迎えることになりました。「発見されました」という報告ができたらどれほど救われるかと電話が鳴るたびに一喜一憂していました。

しかし、「ちはや」からの「最後のダイバーが水面上上がった」との連絡を受け、ついに終わりの時が来ました。

ホテルの会議室に向かう途中私の頭の中は真っ白になり、九か月前の事故発生当時の混乱、家族来ハワイ時に浴びせられた罵声、ファéron大將に日本の作法を教えたこと、審問委員会、「ちはや」派遣に至る過程、長く不安な吊り上げ作業、「ちはや」のパールハーバー入港等が次々に脳裏に想い出されてきて考えがまとまらないままにホテルの部屋に入りました。

私が、真心の声を精一杯伝えようと思いい、お話しした内容は次の通りです。

「これまであらゆる可能性について考えられるすべての捜索を実施しましたが、手がかりを得ることはできませんでした。本日午後、最後のダイバーが水面上がってきましたが、その瞬間をもつ

て「ちはや」艦長は苦渋の決断を下すに至りました。

最後に、先週、「ちはや」にお越しになった際に「ちはや」乗員にいただいた白いバラの花束と昨日お預かりしたクッキーは、御息の部屋のロッカーにいれ、御息がいつでも花を見て御両親のことを思い出したり、クッキーを食べられるようにロッカーのドアは開けておきました。」

これだけの言葉を伝えるのに、最後は胸が締め付けられ、言葉になりませんでした。十六年間大切に育ててきた男の子を、その子が17歳になった二日後に失ってしまった夫婦に、このような残酷な言葉をかけなければならぬ辛さ、私にとつても御息の手が届かない帰らぬ人となってしまったという気持ち、四か月に及ぶ終わりの見えない作業に黙々と専念してくれた「ちはや」の乗員に対する感謝の気持ちが一緒になって言葉になりませんでした。

同席していた、米海軍の引き揚げ作業総括責任者は「御両親のお気持ちを察すると余りあるものがありますが、これまで米海軍のダイバーが全力を尽くしたことを御理解いただき本当にありがとうございます」と涙ながらに話されました。私の十七年間の自衛隊生活を凝縮したよりも更に凄まじい体験をした一年間でありましたが、その全てを語り尽くすことはとてもできませんでした。

今振り返ると「溝は深すぎる」と半ば諦めかけながらも、私が家族と米海軍と

の接点であり続けることができたのは、日本と米国という世界でも類を見ない強い友好の絆で結ばれた両国の将来にこの事故が暗い影を落とすことがないようにというただそれだけの思いでした。犠牲者の家族のために、誠意を持って対応しようとしている米海軍のために、日米両国政府のために、両国民の感情のために、自分は何ができるのであろうか。日米間の文化、歴史、制度、習慣の相違という大きな壁に直面しながらこの質問を自問自答する毎日でした。

昨年九月のテロ事件の反応にも一瞥見られたとおり、日米間には価値観の相違、感じ方の違いが多くあります。歴史認識もしばしば食い違いますが、時にはその溝は越えがたくさえ思われます。しかし、そうした懸隔があつても、日米は同盟国として永くつきあわねばなりません。そのために必要なのは、何よりも共通の体験を重ねることだと思えます。困難や問題を共に乗り越えて初めて、共感が生まれ、信頼が育まれていくものであると信じています。

しかし、最終的には私を毎日駆り立てたのは「一人が人を愛し、人が人の死を悲しむ気持ちに変わりはない」という洋の東西、時代の新旧を問わず、生ある物すべてに共通する真理でした。

これまで述べてきましたように、米海軍は人として、組織としてあるべき姿を追求し、その道が如何に険しいものであろうと、決して挫折することなく、万難を排しあらゆる困難な状況を乗り越え、

御家族と交わした「引き揚げます」との約束を果たすために最大限の努力を傾注しました。

ひたむきな努力を続ける米海軍の姿も、最愛の家族を失い、怒り、悲しみ、疲労で混乱している御家族の姿もどちらも真実の姿でした。また、将来の姿を考えた時に、仮に溝ができたまま両者が未来永劫交わることがないとしても、それも真実の姿でしょう。しかし、両者の間に身を投じ、お互いに相手のことを理解しあい、誠意を示しあい歩み寄れる部分は歩み寄ることも真実の姿でしょう。

理不尽きわまりない事故によつて命を落とした「えひめ丸」乗員の家族と引き揚げ作業を担当した米海軍、またその陰になつて支援した海上自衛隊の間に深い絆が生まれたとすれば、それは共に悲しみ、悩み、苦しみ、ともに汗を流すという時を共有した結果に違いありません。

今静かにこの一年間を振り返った時、真実に背かず常に全ての人に公平に、真心を持って、持ちうる自己の最大限の能力で、事態の対応にあたったという自信には一点の驕りはありません。

最後になりましたが、この一年間、「えひめ丸」の事故対応に没頭している私にお寄せいただきました皆様方の並々な御理解、御支援に心より感謝申し上げますとともに、今後とも変わらぬ御指導、御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

期生会だより

Kiseikai
Dayori #10

3期生会

◆宮下 誠

平成十四年ホームカミングデイについて
(出席できなかった三期生の皆さんへ)

ホームカミングデイ(HCD)の奴が今年(平成十四年)もやって来ました。今年は何か気取って、きらびやかに着飾ってしかもお正月とやって来ました。

幼児から少年の頃、お正月は私たちにとって妙にこだわりの雰囲気をまとっていました元日の朝起きると枕元に並べてあった晴れ着を見て、一瞬とまどい、周りを見渡してからどこかくすぐったい感触で袖を通したことを思い出します。そんな「お元日」の気分が、今年のHCDに感じられます。

「小原台一期生」

校長の挨拶にこんな言葉を見つけることができます。泥濘の小原台に全国から選ばれて(とおもっていた)入校した少年達が四年間名立たるほりにまみれて卒業した三期生を西原校長はこのように端的に表現しました。その小原台へ幾星霜のしわをきざんだ顔、顔が戻ってきました。

自分たちの行事が、例年に比べて特別のものであるとの表現は気恥ずかしい。去年も来年もきつと特別なものであるに違いないのに、やはりそう思うのです。

最高司令官が小泉総理でした。学生の頃の国政選挙で清き一票を投じたかもしれない小泉純也元防衛庁長官の子息である地元の小泉純一郎が栄誉礼とともに現れたのです。防大卒業生が初めて防衛庁長官として登壇し、小原台つ子に訓示をしました。防大二十四期生国務大臣中谷元でした。プロパリーの教職員から初めて校長となった西原正が行事の主宰者でした。

小原台の環境も一変していました。新装なった校舎群、これらのとう尾を飾る大講堂が訪れる人に胸を張っています。五十周年記念行事を迎えようとしている小原台の晴れ姿です。季節を間違えたように桜の花までがほぼ満開でHCDの参加者を迎えてくれました。

さて主題のHCDはどうだったでしょうか。人数がこれまでより多い三期生だから当然かもしれません、HCDプロジェクトチームが前年秋につかんだ参加希望者数は四百六十名にも達するものでした。このことによりチームは同期生の熱い思いを知ることができました。卒業式会場の大講堂がまだ建設中でベールに覆われているのに、賑々しく関係者が群れ集う気配のもとで卒業式に全員出席できるのか?悲喜こもごもありませんでしたが解決しました。

卒業式の式辞の中で「白い頭の方も多く見受ける」と西原校長はHCD参加者

にエールをおくってくれました。卒業生の帽子投げに目を奪われ、凛々しい女子学生指揮官の号令に耳をそばだて、後輩の操縦する編隊の轟音に空を仰いでいるうちに、私達が主役の記念撮影となりました。撮影は担当者の心配をよそに、天候と写真屋さんの高い技術力に恵まれて、後日それぞれに届いた記念写真には小原台上に三期生の笑顔の花園が広がっていたのです。一人一人の顔だってよく見えるジャン。

HCDのメインイベントは東京湾を見下ろす同窓会館での懇親会でした。全く見覚えのない人と飲んで話すうちに、だんだん昔の姿に戻ってしまい、「おお、貴様か」と二度目の再会の握手がこちらにもあちらにも魔法のように生まれるのでした。西原校長も会に華をそえた後、「海青し」の大合唱がこだまするなか、短い時間にぎっしり詰まったHCDは終わったのです。

ここで小文はHCDの新たな展開について紹介しなければなりません。それはHCDを契機に芽生え育ってきつつある同期生活動の盛り上がりについてです。六十五歳を過ぎ、私達三期生のほぼ全員がいわゆる年金生活に入りました。高齢化社会の尖兵として長い余命を生きて行くためには仲間が必要で、自衛隊や会社で替わる何か求められています。その仲間社会は共通の基盤、異色の情報源、相互信頼性に富んでいることが望ましいでしょう。同期生会はこれらを十分に満たしていると思われまます。このたびのHCDの参加者数の多さは、単なる懐古だけでなく上に述べた希求の濫觴とも受け

取れます。

最近北海道、北陸、九州、また首都圏でもやや離れた地区で同期生会の支部等の集りが頻繁に行われるようになりました。懇親のみならず政治、趣味、健康、学術などさまざまな交流がうまれITの時代の波に乗って成果を広く発信しています。HCDはまったく良い時期に行われたものだと思ってしまうところです。

HCD懇親会でもお願いしましたが、HCDのすばらしかった感動を不参加の同期生に伝えることが前述の新しい流れを作る有力な一歩だとおもいます。これからの本当の人生を手を取り合って進もうではありませんか。

4期生会

◆理事 児玉 節正

防大同窓会事業でもあるホーム・カミング・デイは、平成十四年度、第四期生の番を迎える。

ホーム・カミング・デイとして平成十五年三月防大第四七期生卒業式に第四期生が学校長から招待される予定である。

平成十四年七月に実施した事前調査ではこれに同期生本人及び家族を含め四百余名の参加希望があった。

参加希望者には後日実施の細部をお知らせすることになる。

また、例年三月G・日市谷で開催している第四期生会総会・懇親会は、平成十四年度はホーム・カミング・デイ当日、小原台で開催の予定である。

参加規模・場所からして平成十四年度は象徴的な総会・懇親会となろう。

5期生会

◆会長―福地 建夫

五期生会の皆様には、新春を迎えてますますご健勝で御活躍されていることとお慶び申し上げます。

さて、五期生会も一昨年の総会で選出された新役員により運営されて早一年半を経過しました。昨年八月二十三日に開催された役員会で今後の会務運営を、次を重点に行つてゆくことを決めましたのでお知らせします。

一 連絡網の整備

電話のみでなく、FAX、Eメールを組合せた連絡網を整備する。

二 名簿の整備

名簿記載項目の変更が多く陣腐化が激しいことや財務上の問題から名簿の新規作成は当面行わず、名簿修正資料のみを配布する。十五年度から希望者に有料(五〇〇円程度)でプリントアウトできるように原簿の整備を行う。また在学中に亡くなった方を五期生会物故者に加え、御遺族の住所等を調査し、名簿に加える。

三 五期生会ホームページの開設

同窓会ホームページとの関係を含め、ホームページの内容、WEBサイト等引き続き検討する。

四 会計の現状

会の資金は現在五〇〇万円弱(会員当たり約一万円)で厳しい現状にあるが、当面は会員からの会費徴収は行わず節約に努める。

五 同窓会の実施するゴルフ、テニス、囲碁の期別対抗を積極的に支援し、代表

選手を応援し優勝を目指す。

(昨秋行われたゴルフ大会はグロスの部六位、ネットの部は五位の残念な成績でした。前回はネットの部で優勝)

以上ですが、五期生会が会員の皆様にとつてより意義ある存在となるためには皆様の積極的な意見具申等御協力と御支援が必要です。

特に会務運営の柱となる連絡網、名簿の整備は不可欠ですので、変更事項の通知等よろしくお願い致します。

連絡先 総務担当理事 浅野勇蔵君
TEL/FAX 043-277-6226
E-mail: fmpc8927@mb.infoweb.ne.jp

7期生会

◆北斗会会長

大越 兼行

一、北斗会の起源

同期生会を創設して四十年、全員還暦を過ぎ第二の人生を終え第三の人生に足を踏み入れたものも多い。我々の起源は「小原台」であり「四十年前」である。ここに古い防衛日報がある。そこに防衛大七期生会の記事が掲載されている。起源の一部分か? 「防大七期生五百二名、小原台の校舎を築立つ」(S二八、三・十七号)

防衛大学七期生の卒業式が十六日、横須賀小原台の防衛大学校体育館で挙行された。

第七期生は五百二名が卒業、その後直ちに陸、海、空の一曹に任命され幹部候補生としてそれぞれの幹部候補生学校に入校し、各自の訓練を終えて初級幹部と

なり、それぞれの任務につくことになっている。

また、第七期生には昭和三十四年四月、志願者七千六百八十九名中から選ばれた六百三十八名が入校したもので、卒業までの四年間に退学したもの、原級にとどまったもの等合わせて六十四名が減少し、更に、第六期生から延期になった者二十八名を加えた者が第七期生となったもの。

まあ、十六日の卒業式に列席した要人の祝辞等は次の通り。

【横校長の式辞】独立と平和は無為と安易のうちに獲得できるものではなく、不断の努力が必要である。

【池田総理】自衛隊の運営は民主政治の統制に服さなければならぬ。自衛隊は常に祖国と国民に奉仕する精神に充実していなければならぬ。

【志賀防衛庁長官】日本民族の運命をなうこととなるよう希望する。決断力、行動力を身につけてもらいたい。

【吉田茂元総理】防衛力のあり方について「世論の議論」に惑わされることなく国防の任務に邁進してほしい。

上の祝辞に比べると志は小さいのですが、私達会の役員は会の活動の潤滑油に成れば良いと思っております。

二、最も若き今なりき

◆北斗会東部支部長

石田 潔

北斗会東部支部は総員二百九十三名で、東京(六十三名)、千葉(九十一名)、神奈川(八十五名)、埼玉(五十四名)の四コ分会より成っています。昨年組織改

編があり、東京分会には新潟、栃木、群馬、長野が、千葉分会には茨城が、神奈川分会には静岡東部地区がそれぞれ含まれています。

東部支部の活動ぶりを紹介しましょう。まず第一に、年に一度の総会・懇親会です。

四コ分会の持ち回りで担任しています。今年、埼玉分会の担当で、七月に池袋で開催しました。同伴のご夫人を含めて百名近い出席者を得て大盛会でした。この際、総会の案内、返信を通して、名簿をチェックすることができまます。今年も村木君の尽力で、メール入りの立派な名簿が整備されました。

第二は、月に一度の一水会です。

毎月第一水曜日に市ヶ谷の防衛庁前の料亭「四季」で昼食会を開催しています。

これが支部活動の中心と言つてよいでしょう。出席者はメールで吉岡君が掌握しています。出席状況は、二十五名から四十名程度です。毎回七、八名の諸君が自薦他薦でスピーチしています。ちなみに九月四日(水)は、二十八名の出席で、若松、村木、江藤、向井、萩原、西島、落合の各君の発言がありました。西島君は神戸から、千葉君は木更津からの出席でした。年十二月の一水会は、東京(藤田君)の主催で、忘年会をかねて防衛庁の十八階のレストランで開催しました。テロ事件後の厳重な警備の中でしたが、約七十名が出席して盛会でした。特にこの日は、夜景が素晴らしく大好評でした。

第三は、その他の自由活動です。まず厚生活動です。囲碁・ゴルフ、テニス等の練成を図り、同窓会の競技会等

へ出場しています。七期生の代表の主力は当支部から出ています。前記の三種目は、同窓会の定例大会でいずれも優勝の実績があり、北斗会の士気は高いのです。他に向井君のように、防大の要請もあり、カッターの女子クルーとOBの対抗戦を実施してこれに圧勝し、次回はもう結構だと言われた例もあります。

ゴルフは、各分会ごとに、北斗会メンバーが主催する定期戦が行われています。千葉では、田吾作会（千葉国際G.C）、四街道グリーンクラブ（丸の内G.C）、常盤会（藤代倶楽部）、埼玉では九七八会（上武G.C）などです。それぞれ、吉岡君、斎藤君、坂田君が世話を引き受けて月一回のコンペを楽しんでいます。

さらに昨年十一月・種村君等有志の諸君の企画による尾辻秀久参議院議員（北斗会会員）の「財務副大臣の就任祝賀会」を支援したこともありました。

去る九月十日、故宮田幸則君の葬儀が東千葉でありました。東部支部の航空会員が中心となって、喪主の奥様に協力しました。航空の支部会員をはじめ、多くのご夫人が通夜と告別式に出席しました。伊森惇君の友人代表の弔辞は、涙を誘いました。あまりにも早いご逝去でしたが、奥様と双子のご子息の立派な立ち居振舞いが印象的でした。

東京へ通勤する会員が毎年減っている今日、例えば一水会の出席状況も以前に比べて減ってきています。しかし、集まった会員の士気は高く、話題は尽きません。同期生相互に刺激し合って、青春を取り戻している様にも思われます。地味な活動ぶりですが、会員が自分の手帳に

北斗会の行事を、ひとつでも多く書き入れてもらえるように、こつこつと続けてまいります。やはり、継続は力でありましょう。

そこで、一句。
つくつくし最も若き今なりき

すでに還暦は過ぎていますが、健康に留意すれば、あと二十年ほどは生きることになりそうです。余生の短い法師蟬の声をききながら、「そうだ、今が最も若いのだ」と当たり前のことに気が付きます。さて、問題は「だからどうするか」です。

アンコールに応えてもう一句。
昼と夜のネクタイ替へて涼新た

三、北斗会中部支部活動状況

◆北斗会中部支部長

岩月 察芳

海、山、川の豊かな自然、歴史と高度な文化に恵まれた中部地区は、ちょうど日本の人口と地理・交通の中心にあり、例えれば「日本の勝」にあたります。

北斗会中部支部会員は愛知、岐阜、三重、富山、石川、福井及び静岡県西部地区に在住する三十四名（陸：十八名、海：一名、空：十五名）で構成されています。会は会員とその家族の相互親睦を目的とし、会員の遺族及び入会希望者にも広く門戸を開いております。

平成十四、十五年度の役員は、支部長 岩月、理事長 和田、会計 浅野、理事 田・山本（征）、監査 倉掛のメンバーが新任され支部の運営を引き継ぐこととなりました。

これまで年間約七、八万円程度の予算で、会員の年会費によって運営してきております。

主要な活動は、会則の整備、名簿の整備、慶弔活動、防大同窓会・北斗会総会への代表者の派遣、総会の開催（七月）、親睦旅行等を行っており、平成十二年度は粟津温泉で家族を含めて一泊旅行し、皆で還暦のお祝いをしました。平成十三年四月は浜松館山寺温泉にて桜を楽しみ、本年四月は伊勢鳥羽方面へグルメの親睦旅行を実施しました。また、七月の総会後は、家族とともに名古屋御園座で観劇を楽しむ等活発に活動しております。

これからは、会員も再就職先も定年となる時期でもあり、また、徐々に高齢化して家族の支えなくしては会の運営も十分にできなくなってくる時期が迫ってきていると考えます。そういう意味でも会の継続と会員相互の交流が重要な意義をもってくるのではないのでしょうか。

中部地区は、常滑沖の中部国際空港の建設が着々と進められ、愛知万博も着手しました。また、日本海側を結ぶ高速道路網が整備されつつあります。伊勢・鳥羽、浜名湖、輪島の海のリゾート、北アルプス、後立山の雄大な山



岳地帯周辺の景観と温泉、スキー場、各地に点在する歴史と文化遺産、美術工芸などといったものも飽きさせない魅力がいっぱいあります。

中部支部会員は団結して支部の運営にあたり、平成十七年度に予定されている北斗会総会に元気で皆と再会できることを楽しみにしております。

9期生会

◆藤田 幸生

防大創立五十周年を、無事に迎え得たことを共に祝いたい。

われわれ九期生にとつても、入校四十一周年である。現在、残りの一人が、統合幕僚会議議長として、まだ任務に就いている。あと少して、総員が、制服を脱ぎ、防大九期卒業生としての第一の任務を終了する。

われわれ九期生は、四年生のとき、それまでの十余年の防大教育を基に、「学生綱領」を作りあげた。それを待ちかねたように、第三学期に退職された横智雄初代校長を、観閲行進でお見送りした。思えばそれは、横校長の建学精神、教育方針の下、旧軍経験の指導官と防大出身の指導官両方に指導され、防大十年と言う節目を経て、「防大教育の伝統」が、固まりつつあるころであった。

以来、任官して三十七年、この間、途中で殉職等した者などで人数は減ったが、何とか無事に防大九期生としてのクラスの任務を果たし、間もなくそれを終えようとしている。この間幸いにも、実の国防のための戦は無かった。一方、行政面

では、クラスの者が、各幕の課長、部長、幕僚長、統幕議長等の配置をそれぞれの自衛隊において、担当させてもらってきいている。そういう意味においては、防大九期生は、恵まれていたかもしれない。

九期生会の活動としては、任務の終わりが近づいた近年になって、やっと活発になってきているのが実態である。尉官の間は、余裕が無く、殆ど活動する機会は無かった。佐官の前半も同じことであつた。むしろ、その間は、目前の業務のため、一般大学出身者を含む各自衛隊幹部候補生学校のクラスの活動を大事にしてきたように思う。佐官の後半になつて

クラスから将官が始めた頃になつて・・・更には、ポツポツ退職者が増え始めた頃から、やっと防大九期生としての意識が、強くなつてきたように思う。これは、防衛庁の本庁においては、課長、部長などの配置、また、部隊においては、それぞれに指揮官など責任ある配置に就くようになり、横の連携をとる機会が多くなつてきたからであると思われる。勿論、情報収集等の面からも、他所に居る同期生の存在価値が高くなつてきた結果であろう。

九期生会の活動は、六本木時代に「九穂の会」から本格的になつた。これは、各幕の部長クラスに九期生が多かつた時代である。集まつては、意見調整（飲み会を含む）をした。質問、不満、反論、説得、非難、説明、賞賛、提案、確認・・・おかげで、相手を見直したり、自己反省したりして極めて有意義であつた。相互理解、統合精神は、増進された。九期生の団結は強まり、以後の勤務に役

立つたように思う。

それから始まる数年間は、同期生が、官（現役）民（退職者）両方に居る貴重な期間であつた。と同時に、現役の者は、大きい責任を負わされ、組織における権限も影響力も大きい時期であつた。この時期にもらつた民間に出た同期生からの情報は、業務遂行上、適切な判断を下す上に、大変貴重であつた。

平成十四年二月二十一日（木）「グラウンドヒル市谷」で第三回目の九期生会総会、懇親会を実施した。毎年一回、全国から多くの同期生が集まつている。今年は、忙しい業務の間を裂いて、竹河内統幕議長も参加してくれた。民間で社長や会社役員などで活躍している者も多い。いつもながら、楽しいひと時であつた。参加者は、回を追うごとに増えつつある。

会長、総括役員は、二年交代で、陸、海、空、持ち回りで、来年は、空の番である。今後とも会則に従い整齊と運営していきたい。楽しく・・・たとえば、防大同窓会クラス対抗ゴルフ大会に優勝するため、九期生会の予選大会を何回も盛大に開くなどして・・・

13期生会

◆川村 成之

防衛大学校創立五十周年記念

防大十三期生（陸・海・空合同）

クラス会について

昨年は、本誌を通じて海上自衛隊同期生のクラス名簿作りに精を出していることを紹介しました。その結果、本年五月

十八日（土）・十九日（日）の両日、海上幹部自衛官の原点である江田島の地において「海上自衛隊創設五十周年記念」に「のき会」記念行事を開催したところ、御夫人を併せ百五名という沢山の同期生の参加が得られました。

一同は、想い出深い江田島の地に集い、互いに語りながら三三五五、候補生学校、大講堂及び教育参考館などを見学しました。八方園では「にれのき会二十五周年記念行事」の際に植樹された「榎の木」の前で、また教育参考館前で、それぞれ記念撮影を行いました。そして、改めて青春時代の熱と意気を思い出すとともに、クラスの絆の強さを再認識しました。

その感激をもう一度、更にその輪を防大十三期生会会長「牧本信近」君を中心に防大十三期の同期生全体に広げようとするのが、今年度の戦略であります。その急先鋒が空自OB「中島」君で、彼を支える面々は陸自OB「関」君「菅原」君、海自OBの私と「鈴木」君及び空自OB「岩崎」君の計五名であります。

今、計画されているプランは、「防衛大学校創立五十周年記念 防大十三期生（陸・海・空合同）クラス会」を「グラウンドヒル市ヶ谷」において「平成十五年二月二十二日（土）午後四時半」から「御夫人同伴」で開催することにあります。陸・海・空の各世話役が、この十一月に牧本会長からの案内状をクラス総員に発送すべく準備を進めているところであります。

クラスの殆どが、退役し第二の人生をそれぞれ歩み始めた今こそ、防衛大学校第十三期生としての真の大同団結を確立

し、残された人生を少しでも実り多きものとすべく皆で智慧を出し合い手を携えて前進しようとする時であり、我々の出発点となつた「小原台の想い出」を語り合うことが大切ではないかと考えています。

出来るだけ多くの方々の参加をお待ちしています。

15期生会

◆萱沼 周輔
（現小平学校副校長）

十五期生会は平成十二年八月、「卒業三十周年記念行事」をグラウンドヒル市ヶ谷において実施した。

全国（北は名寄、南は鹿児島）陸・海・空の現職、OBと御夫人方も含めて総勢約二百五十名が久しぶりに一同に会し旧交を暖めた。

総会に引き続き、上坂冬子女史による記念講演を拝聴し、「私の出会つた李登輝とその妻」と題し一時間余熱のこもつたまた感銘させられるお話であつた。

続いて懇親会に移り、期生会長永岩君の挨拶のあと、来賓として御出席戴いた曲幹事、柳田訓練部長、木村教授、金井助教授、西講師、外山講師、森本敏指導官、兼坂教官（いずれも当時の職名）各々からユーモア溢れる自己紹介を頂戴し会場は当時を思い出し大いにわいた。

今回の期生会の目玉商品（？）の一つとして名簿係佐藤君の尽力により各人の名札に、防大卒業時の写真をプリントして作成したことがあげられる。同期生は互いに三十年前の凛々しい顔と現物との大いなる懸隔に笑い合いました。

寂しくなったりもした。

会は盛り上がり、予定を一時以上オーパー(G・H・市ヶ谷さんごめんさい)、大隊毎の記念撮影のあと全員肩を組み輪になっての追遠歌合唱そして急拠オランダのハーグから駆けつけてくれた秋山君(現化学学校長)の音頭による万歳三唱をもっておひらきとなった。

我が十五期生も一両年中には殆どの者が退官する時期となった。ベビーブームに生を享け安保騒動の真最中に入校し、ブルがはじけ長期景気低迷の中、第2の人生の荒海へ向かう我ら「重ゴキブリ」戦士はこれからも遅しく、しごとく、団結固く生きてゆく決意である。(文責、萱沼)

16期生会

十六期生会は、防大卒業三十周年を記念して、「卒業三十周年」記念パーティーを始めとした記念行事を盛大に行いました。

四月二十八日、グラウンドビル市ヶ谷において、曲幹事、松木大隊指導官、兼坂教官をお招きして、会員と夫人合わせて二百三十名の参加を得て、総会並びに懇親会が行われました。総会では江藤期生会会長の挨拶に次いで、十名の物故者に黙祷を捧げました。会計報告の後、期生会規則改正の方向について議決しました。総会に引き続き、ご来賓を中央に大隊ごと記念写真撮影が行われ、懇親会へと移りました。折木君の開会の辞、江藤会長の挨拶の後、ご来賓各位よりご祝辞をいただき、香田君による乾杯で祝宴に入り

ました。最後は恒例の追遠歌を斉唱し、叶君による乾杯で御開きとなりました。

記念パーティーに前後して、記念CDの作成、記念植樹、ゴルフコンペ、防衛庁見学のイベントが行われました。記念CDは、従来の名簿「黎明」に、防大卒業時の顔写真(アルバムから転記)と現在の顔写真を掲載すると共に、「小原台の青春」などのビデオ、学生歌などを収録して全会員に送付しました。記念植樹は四月二十九日、三十名の会員により母校小原台において行われ、ソメイヨシノを植えると共に、記念プレートで表示しました。

同日、記念ゴルフコンペが十二組四十九名の参加を得て、野田パブリックで行



なわれ、高倉君が優勝しました。パーティーに先立ち二十八日、約五十名の参加を得て、防衛庁見学ツアーが行われました。休日のため記念館内部の見学ができず残念でしたが、空幕防衛部長新野君のからいにより本庁庁舎最上階からの展望

を楽しむことができました。

このようなイベントの他、期生会会則改正作業を進めております。現在の会則は昭和五十八年に制定されたものであり、今後は退職後の対応を含め、内容及び活動を充実する方向で改正することを総会において議決しました。改正会則をはじめ情報交換の場として、十六期生会のホームページの開設を準備しています。開設しましたら防衛大学校ホームページ(<http://www.nda.ac.jp/index.html>)の「防大同窓会」↓「同窓会リンク集」にリンクさせ公開する予定です。ご利用下さい。

21期生会

◆会長―彌田 清

防衛庁が発足して五十年が過ぎ、自衛隊は、「我が国の防衛」という中心的な役割の他に、諸情勢の変化に対応して、「大規模災害など各種の事態への対応」や「より安定した安全保障環境の構築への貢献」などの役割を果たして参りました。この役割に応じて、国民の期待は以前にも増して、益々大きくなってきております。防衛庁の発足より、やや遅れて創立された防衛大学校は、その中で着実に歩みを遂げ、今年で五十周年を迎えることになりました。その間、我が国の防衛の一翼を担う約二十万人に及ぶ卒業生を輩出してきてました。

私達、防衛大学校二十一期生も、志を同じくして小原台の地を踏み、卒業後早くも二十五年が経ちました。それぞれ同期生は、二十五年という歳月をその人生と風貌に刻み、各地各方面で活躍してい

ます。これまで期生会としては、卒業以来、平成八年度までの二十年間を松澤初代会長を中心として、そして平成九年度から十三年度まで河村前会長が中心となつて、期生会の発展に尽力し、活躍してきました。その間、期生会則等の整備及び改正、二十周年記念事業の実施等、現在の期生会の態勢を確立し、活発な運営がなされてきました。

今後五年間は、彌田会長(空)、秦事務局長(空)、林副事務局長(陸)、下出副事務局長(海)、上野副事務局長(空)、湖崎理事総務(陸)、飯尾理事総務(海)、田原理事総務(空)、只津会計(空)、野口会計監査(空)が、微力ながら期生会の発展に寄与すべく、役員を務めることとなります。

今後五年間の期生会の活動としては、先ず、今年行われる五十周年事業、防衛大学校の記念行事へ積極的な参加を考えています。また、平成十九年の卒業三十周年記念事業の準備、定年退官後をも見据えた期生会のハード、ソフト両面での態勢整備等、各種活動については、役員を通じて、広く期生会員の皆様の御支援、御協力をいただきながら、進めていきたいと考えています。何より、形式的な期生会運営ではなく、「実のある、また、楽しい活動」をとおして同期生間の団結、親睦が図れるよう尽力する所存です。

最後に、殉職された方々、御逝去された方々を悼みつつ、同期生会の今後の一層の発展を期して、平成十四年度二十一期生会便りとします。

支部だより

沖縄地域支部

事務局長 宮崎 剛

防衛大学校創立五十周年にあたり、沖縄地域支部は記念行事を平成十四年九月七日(土)記念行事を那覇市内のホテルにおいて、第一部「講演会」第二部「懇親会」の二部構成で実施しました。

小西忠支部長(海上二期)を中心に、支部事務局が鋭意準備を進めた結果、支部会員の約三分の二にあたる百二十八名の参加者を得、講師三名、招待者六名の方々と共に防大創立五十周年を祝ったのであります。



「講演会」には、村木鴻二(航空三期) 元航空幕僚長(日立製作所(株)顧問)、藤縄祐爾(陸上八期)元統合幕僚会議議長(株富士通顧問)、藤田幸生(海上九期)元海上幕僚長(三菱重



工業(株)顧問)の三氏を講師としてお招きし、それぞれ「思い出に残る在職中の出来事、現職自衛官に望むこと等」を演題に講演

をして頂きました。

村木氏は、ウィングマークを取りたての頃、超低高度の水平爆撃訓練において、主翼下の燃料タンクを地面に接触させ、あと数センチ高度が低かったら死に至ったであろう経験を教訓に「安にいて危を思う、思えばすなわち備えあり、備えあれば憂いなし」を強調されました。

藤縄氏は、十年単位でのそれぞれの立場での出来事を教訓と共にお話になり、「統合は時代の必然」であること及び「自衛官として精進と人間性の洞察」具体的には、きつい仕事から逃げない、自分はどこに居るべきかを考えることを強調されました。

藤田氏は、沖縄勤務時代の経験がその後の勤務に大いに生きたことをお話になり、南西域の重要性が増してくることは

確実、貴重な沖縄勤務の間に何事も前向きにとらえ、できるだけの

くの人生の糧を得るよう強調されました。

講師の方々には、

それぞれ違った観点から貴重なお話を頂き、参加者全員が大いに感銘を受けるとともに、防大卒業生としての心意気を新たにしました次第であります。

続いて「懇親会」は、小西支部長の挨拶、沖縄県防衛協会会長儀間氏のご祝辞、南西航空混成団司令内山空将(十三期)の現役代表挨拶と続き、藤井建吉副支部長(陸上七期)の乾杯でスタートしたのであります。



懇親会は、様々なグループで昔話に花が咲く中、陸上自衛隊隊員による「沖縄の島歌」が披露されたり、参加者全員での記念撮影が行われるなど

盛り上がったのでした。

もちろん追送歌もありました。海上二十九期の橋口三佐のすばらしい口上(何故かグライダー部)を機に、全員が一つの輪となり高らかに歌い上げたのでした。第五航空群司令高橋海将補(十九期)の締め乾杯で懇親会はお開きとなったのですが、延べ四時間に及ぶ記念行事は本当にアツと言う間に終了したのであります。その後は、陸上・海上・航空・同期・同部屋などのグループに分かれ那覇市内へと消えて行ったのであります。

参加者の笑顔を見送った役員一同、ホット胸をなで下ろすとともに、やって良かったなーという達成感でいっぱいでした。

最後になりましたが、阿部防衛大学校同窓会会長から祝電を賜り、また同窓会本部より様々なご支援を頂き、この場をお借りし御礼申し上げます。

総合司会を実施した航空四十期の津田一尉が「美人だった!」という、もっぱらの評判も付け加えて、沖縄地域支部における防大創立五十周年記念行事の紹介を終わります。



九州地域支部

支部長 中野 純人

九州支部は西部地域支部であり、通称、九州防大同窓会と称し、九州七県に居住する会員で構成され、会員数は退職会員八〇〇人現職会員一、一〇〇人計一、九〇〇人であります。

事務局を福岡市に置き、各期の代表及び現職陸海空の代表の役員約二〇人で構成し、二ヶ月毎に事務局会同を開催し、会としての活動を推進しております。

活動としては先ず「総会、懇親会」があります。平成三年から毎年福岡市で実施し、すでに十二回になります。近年の参加者は退職会員一二〇人、現職会員一二〇人、計二四〇人です。今年は五十周年記念であり、会場もやや大きくし、防衛大学校長の講演を計画し、平成十五年二月に福岡市で開催する予定です。

九州の会員の皆様には、この機会にぜひ参加されますようお願い致します。

会の組織としては、昨年までに九州の各県に同窓会支部を作ってもらいました。それまでは、退職会員は各人が九州本部に直結していましたが、実際に交流、活動しようとするのと近くの人相互でないといけないものであり、県毎の同窓会を作り、退職会員相互、及び現地の部隊との交流を推進してもらおうと致しました。そして、これに会のシンボルとして各県名入りの防大の校旗を作製配布し、また、平成十四年七月には九州全県の支部長会同を開催し、全員の顔合わせと総

合調整を実施しました。

毎年七月には防大学生の部隊実習がありますが、九州の陸海空各部隊で実習する学生の激励会の支援を行っています。実際には実習部隊が行う激励会に本部または県支部から何人かが参加するかたちであり、部隊によりやり方は変わりますが、それなりに定着してもらいたいと思っています。

また秋にはゴルフ大会を実施しています。七〇人程度の参加で、今のところ退職会員ですが、状況が許せば現職も入っての大会にしたいと願っています。毎年、参加の皆さんの嬉しそうな顔が楽しみです。

各部隊の記念行事等には同窓会としてできるだけ出席しています。各県支部ができ、地方の部隊の行事にも参加できると思いますので現職の皆さんも声をかけて頂き、交流がさらに深まるよう願っています。

最後に、東京本部も役員交代がされましたが、九州支部も次の総会で支部長交代を考えております。九州防大OB会の時代から十二年になりますが、その間、御指導、御協力を頂いた多くの皆様には感謝申し上げますとともに、同窓会、九州支部のさらなる発展を心から祈っております。有り難う御座いました。

中野 純人

福岡市

PX114317@nifty.ne.jp

広島地区支部

理事兼総務 土手義孝記

盛況裏に広島防衛大学校同窓会が主催する防衛大学校創立五十周年行事を終了

新年明けましておめでとうございます。防衛大学校同窓生及びご家族の皆様におかれましては今年も心新たに新年をお迎えになられましたことお喜び申し上げます。

昨年は、防衛大学校創立五十周年となり、歴史の節目を迎えました。この半世紀の間、同窓生は、一万名近くとなり、防衛大学校創設時に生まれた同窓生が現在自衛隊の中核として活躍するなど、国の平和と安全に献身的に職務を遂行してまいりました。

自衛隊の任務は、教育訓練の時代から国際情勢の変化に即応する実任務が主となり、گران高原及び東チモールのPKO並びに対テロ措置法に基づくインド洋への艦艇派遣等における同窓生の肩にかかる重責は大なるものがあります。

広島防衛大学校同窓会（以下「広島同窓会」という）は、創立五十周年広島同窓会実行委員会を設立し広島経済圏で在任している同窓生に集まって頂き記念行事を実施しました。

行事内容は、十月十三日（日）テニスを、十月十九日（土）郷原GCでゴルフコンペを、十月二十六日広島百山「極楽寺山」のハイキングを実施し、延べ百名近くの同窓生及び家族が参加し盛況裏に終了しました。

▲ゴルフ優勝九期航空満田龍平氏



ゴルフコンペの成績は、優勝九期（空）満田龍平氏（グロス七十七）第二位十九期（空）坂田直文氏（同八十）でした。なお、期別対抗ゴルフは、優勝十二、十四、十七、十九期生連合チーム、第二位八期生単独チームでした。

創立五十周年行事の締めくくりとして、十一月二十三日（土）広島弥生会館に於いて記念講演会・懇親会を実施しました。本行事には、防衛関係団体等の会長、呉地方総監、第十三旅団長等現役・OB同窓生及び家族等百名余りが出席しました。まず、記念講演会では、NHK野球解説者であり、スポーツニッポン野球評論家で元広島東洋カープの大野豊氏を招き、同氏が現役引退時述べられた「我が



▲記念講演会講師 大野 豊氏

選んだ道に悔いなし」の表題で講演されました。

講演内容は、現役二十二年間で出場試合七百七試合百四十八勝百敗百三十八セーブのほか、沢村賞、最優秀防御率投手及び最優秀救援投手等の数々の実績を残した経歴を元に熱演が実施されました。

特に、講演の中で大野氏は、「出雲信用金庫に勤務しながらノンプロ野球から広島東洋カープにドラフト外で入団し、当初は、母親を楽にさせることを目標に血の滲む練習を重ね漸く一軍に這い上がる事ができました。

実績のない時代は、ファンから厳しいヤジを浴びましたがこれに反発することなく自分自身を暖かく応援してくれているものと考えて今に期待に応えられる投手に成るんだと自分自身を奮いたせました。

この間、良き監督、コーチ、友達に出会い厳しく暖かい指導を受け、現役時代、怪我による故障以外二軍に落ちたことはありませんでした。野球に取組む姿勢は、常に戦う前に自分の足元を見ながら決して諦めないというプラス指向と目的意識を持って練習することであり、転んでも這い上がる強い意志を堅持することで戦いました。私は、「仕事を愛し、人を愛し、自分を愛せよ」ということを野球人生の中で学びました。」と締めくくられました。真に創立五十周年行事に相応しい記念講演会でした。

講演会終了後、講演会講師も参加して防大一期生から昨年四月卒業の四十六期生までの幅広い同窓生と家族を交えて懇親会を実施し、盛況裏に防大創立五十周年行事を終了することができました。

◀ 広島同窓会令夫人 (懇親会において)



一年近くかかりました。三人の候補を掲げ調整しましたが業務等の都合で断られ最終的に大野氏に快諾を受けたのが記念行事実施日の二ヶ月前で薄氷を踏む気持ちでした。

しかし、広島同窓会役員が結束して諸準備に取り組み、広島同窓会が主催する創立五十周年行事が盛況裏に終了することができ、参加した同窓生及び家族から好評であったことを申し添え同窓会本部のご協力に対し感謝申し上げます。



▶ 三十六期海上 杉山重一氏ご家族 (ハイキング)

関西地域支部

会長 牧 次郎

平成十一年十一月二十日に発会し、十三年十一月二十四日ホテル阪急インターナショナルにおいて総会行事を行い、三期事業をスタートさせました。

総会行事は、八期藤縄佑爾氏を招き講演会を行い、百四十五名の会員、家族、父兄会、走水会の方々が出席し、その後の懇親会も和やかな雰囲気の中盛会裡に終える事が出来ました。関西支部の事業は、「同好の志の集い」とし、趣味・教養と云った文化・スポーツ的活動を主体に軽易に行うことにしていますが、今年、母校の半世紀を飾る節目となる五十周年でもあり、記念講演会と総会行事に力を注ぐことになりました。

手始めに、三月一日神戸大学工学部情報知能工学科教授高森年氏(防大七期卒)を迎え、「二十一世紀への新たな挑戦、マイクロ・ナノテクノロジー」と題し、五十周年の当初を飾るに相応しい講演会を行い、約百名の会員等が先端科学の世界に熱心に耳を傾け、各人なりに二十一世紀へ対応する教養を深めた事に大いに満足したようでした。

「同好の志の集い」としての事業も、逐次定着しており、五月(神戸港)と七月の海の日(大阪港)のカッター競技への参加、六月一日の歴史探訪「楠公の史跡千早赤坂村編」、十二日のゴルフコンペ、十五、十六日のテニス・水泳を楽しむ会、七月二十一日の会員スピーチ、九

月二十二日の京都嵯峨野「大覚寺散策」等多彩な行事を無難に行いました。

因みに、各行事の特徴を紹介しますと、カッターは十年來漕ぎ手が変わらないために参加することに意義がある悩みがあり、歴史探訪はハイキングを兼ねるが還暦を越えた会員に天王山や金剛山の上下りはハードな運動で今回は伏見にするとの事ですが、担当の八期山本茂さんが居なくなる次の担当が心配だ。ゴルフは草分け期の四期小林隆さんが担当しているが、意外にゴルフ人口が少なく、走水会と十七期井上恵由さんが参加者募集に苦勞している。テニスは総務理事の河野さんの趣味の延長でこの位の規模が丁度良いそうだ。

会員スピーチは三回目で六人が終了、順番待ちしても出来ない人もあるのだから、今回の「遠くて近い国オランダ(七期中一皓)」「住んでわかる中国人気質(二十期藤原隆道)」は時期を得た話題で四十五名が参加し、会員のお嬢さんが参加するトピックスが生まれた。只、終了後のビールパーティを楽しみにしている不埒な噂も本音に近いようだ。

京都の古刹探訪は一期の中田壽美夫顧問の法曹会との繋がりで東福寺・東寺・大覚寺の未公開分野が拝観でき、北海道や関東からの参加者もあり、担当の事務局次長十三期盛田さんの悩みは七十名が限界の参加人数の絞り込みにあり、先着順を基本にしていると聞くが、毎年申し込みを忘れた突然の参加者があるのに四苦八苦すると云ったことが、他の行事とは全く逆で羨ましい悩みであることも面白く、よくよくご注意のほど。

十一月二十三日には、総会と記念行事をホテル・ニューオータニ大阪で行うことになっており、本部から頂いた支援金を基に「古典文化狂言と外国軽音楽の夕べ」を催し、五十周年を飾るに相応しい関西らしいエンターテインメントにするという事一同張り切っています。

最後に、会員諸兄の今後とも協力をお願いし、支部の報告とさせて頂きます。
(平成十四年九月末 七期 坂口 奇稿)

〔事務局連絡先〕 七期 河野 光男
☎・FAX 〇六―六九一―〇六一一
〔ホームページ〕

http://www.kcat.zaq.ne.jp/kazu-n/
[eメール] bodaikansai@yahoo.co.jp



関西防大同窓会第三期事業結果・四期事業の概要

事業名	内容等	期日	時程	場所	実施要領・成果	担当
総会	・総会議事(事業成果及び計画、会計報告 会則の改正、役員改正)	14.11.23 (土)	1600～ 1620	ホテル ニューオータニ	・会費補填 300,000	理事有志
	・エンターテインメント 古典文化狂言と豪州軽音楽の夕べ		1630～ 1750			
	・懇親パーティ		1800～ 1930			
研修事業	研修会 会員スピーチ	14.7.27 (土)		大阪弥生会館	45名 (懇親会39名)	事務局 (河野)
	史跡探訪と ハイキング	14.6.1 (土)		千早赤坂村	17名	(山本)
	古刹探訪	14.9.22 (土)		京都嵯峨野	70名	(盛田)
親睦事業	ゴルフコンペ	14.6.12 (木)		きさいちカントリークラブ	16名	(小林)
	カッター競技 参加	14.5.12 (日)		明日香カントリー倶楽部		(中乗)
	テニス同好会	定例会	毎月1回	八尾		(河野)
		大会	14.6.15～16		四条畷市府民の森	13名
母校支援	防大人校者 杜行会等激励	14年2月		大阪地連 20,000 その他5地連 10,000	計 70,000	
	陸海空 自衛隊の支援	13年12月 14年2月		100,000 100,000	計 200,000	
	遠洋航海激励	14.3.24		有志による激励パーティ等への参加		
事務活動	ホームページ掲載	http://www.kcat.zaq.ne.jp/kazu-n/				(中)
	電話設置(FAX共用)・Eメール	☎06-6910-6111 Eメール bodaikansai@yahoo.co.jp				(三浦)
	名簿の作成・送付	会費納入会員への送付 250名				(三浦)
	事務活動・理事会等					
50周年 記念講演会	・講師 高森 年 神戸大学工学部情報知能工学科教授 ・演題「21世紀への新たな挑戦： マイクロ・ナノテクノロジー」	14.3.2 (土) 1630～1800		ホテル ニューオータニ	・参加者 講演会 93 懇親会 85 O 65 62 J 19 14 秋合演会 9 9 ・会費補填 170,000	事務局 理事有志

4期事業の概要 1 総会 15.11.15日(土) 場所 未定 講演 拓殖大学 森本教授に依頼予定
2 その他の事業は、例年と同じ程度に実施。細部は15年4月頃案内状で連絡します。

平成十四年度は、前年同様七月に小牧基地で防大二年生の激励会が行われ、垣内監査役(七期)が参加しました。今年の総会は、創立五十周年の予算により、

九十名でした
九月十日
十二月の総会では前統幕議長藤縄氏にご講演をしていただきました。参加者は現職会員三十五名、退職会員五十五名計九十名でした
平成十三年七月、小牧基地に部隊実習に来た防大二年生の激励会に、國枝副会長(一期)、仁木(九期)が参加しましたが、実習生の元気さと明るいごますり時代に時代の移り代わりを感じ、ほほえましくかつ頼もしく感じました。平成十三年十二月の総会では前統幕議長藤縄氏にご講演をしていただきました。参加者は現職会員三十五名、退職会員五十五名計九十名でした

平成十三年七月、小牧基地に部隊実習に来た防大二年生の激励会に、國枝副会長(一期)、仁木(九期)が参加しましたが、実習生の元気さと明るいごますり時代に時代の移り代わりを感じ、ほほえましくかつ頼もしく感じました。平成十三年十二月の総会では前統幕議長藤縄氏にご講演をしていただきました。参加者は現職会員三十五名、退職会員五十五名計九十名でした

東海支部は、愛知、岐阜、三重の三県を範囲として平成十二年十二月に発足し、やっとなり二歳となりました。人員構成は現職会員三六〇名、退職会員二九〇名の計六五〇名です、特色としては海上自衛隊の基地が範囲の中にないためか海上の会員が少ないことでしょうか。

事務局長 仁木 一男

東海地域支部

例年より華やかにと行うことで十二月十五日に地元のソプラノ歌手下垣真希さんによるソプラノコンサートを計画しております。

東海支部が現在抱えている課題は、①会員・後輩に役立つ事業の企画と②支部会費の問題です。①については、充足以来二年経過した今、会員と後輩に役に立つ事業の企画と実行を模索する動きが支部役員の間に出てきました。「小原台だより」によりますと他の地域支部ではなかなかユニークな事業を行っており、これらを参考に新しい事業に取り組みたいと思っております。②の支部の会費ですが、支部としての運営会費を皆さんどのように集めておられるでしょうか？東海支部では、支部の事務・通信連絡費を年千円とし、十年分一万円を退職会員から一括徴収の形で納めていただいています。一々四期はほぼ完納されていますが、その他の期では会員の理解が十分に得られていない状況で、平均では六〇％に留まっております。こういった状況からも、同窓会本部からの恒常的な助成が望まれるところです。

【東海支部連絡先】事務局長 仁木一男

電話 〇五二四四三二一〇七二

niki@nagoya-denki.co.jp

小原台クラブ

幹事長 中島 正雄

防衛大学校創立五十周年記念に関する
小原台クラブの事業について

日頃、小原台クラブの活動に対し、ご理解、ご協力を賜りありがとうございます。

当クラブは、菅沼会長（一期）以下、約八〇〇名の小さな任意団体ですが、船山副会長（二期）、根岸副会長（五期）及び渡辺副会長をはじめ、各役員全員、納得すれば「まずは行動が先」をモットーに、着実に活動を重ねております。本年は当クラブ創設二十五周年を終えようとしております。五十年と二十五年という奇縁のなか、次の事業が役員会で決定されました。当クラブらしく、細部実施要領はまさに走りながら詰めて行きました。また、電子メールの利便性をフルに活用しました。

一、小原台クラブ座談会

「二十一世紀を想う」

船山副会長が司会役となり、基調講演及び自由討論の部を設定し、約二時間、中身の濃い意見交換の場となりました。

基調講演は、船山氏が自ら経営する情報通信国際コンサルタント会社（アイセック社）の代表取締役としての迫力を示して、「科学技術」「経済」「社会」「政治」及び「安全保障」の五つ

の分野について分析し、爾後の討論の真剣な雰囲気をももし出しました。

自由討論については、パネリストとして、シンクタンク客員研究員の中森氏（一期）、(株)クレスコ代表取締役岩崎氏（九期）、新エネルギー・産業技術総合開発機構 研究員、重富氏（二十四期）、グッドウィル・グループ（株）代表取締役 折口氏（二十八期）及び(株)ジャフコ ジェネラルマネージャー 菅谷氏（三十一期）の各氏です。それぞれの分野での各氏の豊富な経験にもとづき二十一世紀の展望と夢を語りました。座談会の細部は、「小原台クラブ会報」第二十五号/二〇〇二年に搭載しておりますので再読されることを期待します。

二、小原台クラブ特別講演会

「勝利への道」

過去のバブル繁栄に日本は、未だにその後遺症から抜けきれません。挙句の果て、政治が悪いとか、大手企業経営者も悪い、さらに教育も悪だ、と自分をさておいて周辺環境にとかく目を向ける傾向にあります。この指摘は事実でしょうが、個人、個人の人生をみたととき、残念ながら一種の生存勝負の苦勞が続いております。そこには、やはり何か目標があります。京都大学アメリカンフットボール監督 水野氏（七期）の講演は、まさに当を得たものでした。限界のない「信念の持続」こそ、勝利という目標への道である、と水野氏の身体全体から湧き出したわかり易い言葉で語りかけて頂きました。

た。

場所がグランドヒル市谷でしたので、参加者は市谷基地、目黒基地に近いこともあり、百二十名を期待していましたが、残念ながら約百名の聴講者となりました。

三、小原台クラブ会報の増刷

当クラブの会報は毎年発行しますが、今年の第二十五号会報は、創立五十周年記念事業の参加特別号として、会員のみならず期生会会長とか防衛大とかに無料配布するため約一、〇〇〇部を印刷しました。現在、わずかしか残っておりますので、希望者（熱望）は同窓会本部へ連絡して頂ければ送付いたします。

— 以上 —



平成15年度 防衛大学校同窓会予算

14. 12. 20

(単位:円)

	項 目	15年度予算	14年度予算	14年度比
収 入	会 費 (47期生)	20,100,000	18,320,000	+ 1,780,000
	預貯金利息	1,184,000	371,000	+ 813,000
	同窓会名簿代	12,600,000	0	+ 12,600,000
	積立金からの繰り入れ	0	8,959,000	- 8,959,000
	収 入 計	33,884,000	27,650,000	+ 6,234,000
支 出	事業計画の推進			
	(現職・OB会員交流)	300,000	500,000	- 200,000
	(同窓会主催親睦交流会開催)	210,000	300,000	- 90,000
	(ホームカミングデーの実施)	800,000	800,000	0
	(会員の出版等支援)	50,000	0	+ 50,000
	(防大卒業留学生との連携)	200,000	400,000	- 200,000
	(全国的な情報網の維持整備)	100,000	100,000	0
	50周年事業			
	(記念祝賀会)	0	2,000,000	- 2,000,000
	(地方事業支援)	0	1,500,000	- 1,500,000
	(通信費)	0	2,000,000	- 2,000,000
	(諸支援)	300,000	0	+ 300,000
	顕彰碑献花費	500,000	500,000	0
	総会/講演会費	1,500,000	1,500,000	0
	期生会支援費 (48期生助成)	100,000	100,000	0
	(51期生発会)	100,000	100,000	0
	校友会対外活動助成費	1,000,000	1,000,000	0
	安全保障講座助成金	100,000	100,000	0
	開校記念祭助成金	2,000,000	2,000,000	0
	慶弔費 (供花、弔電)	350,000	350,000	0
職員定年退職者記念品費	100,000	100,000	0	
複写機賃貸料	350,000	350,000	0	
電話/FAX維持費	400,000	400,000	0	
小原台事務局運営費	100,000	100,000	0	
代議員会運営費	700,000	700,000	0	
機関誌発行費	3,300,000	4,000,000	- 700,000	
同窓会名簿作成	11,755,000	250,000	+ 11,505,000	
記念品作成	500,000	500,000	0	
会長運営費	400,000	500,000	- 100,000	
事務員雇用費	2,000,000	2,000,000	0	
本部事務局室賃貸料	2,900,000	2,900,000	0	
事 務 費	350,000	350,000	0	
通 信 費	150,000	150,000	0	
交 通 費	400,000	400,000	0	
会 議 費	200,000	200,000	0	
予 備 費	1,500,000	1,500,000	0	
	小 計	32,715,000	27,650,000	+ 5,065,000
	積立金への繰り入れ	1,169,000	0	+ 1,169,000
	支 出 計	33,884,000	27,650,000	+ 6,234,000

平成13年度 防衛大学校同窓会決算報告

平成 14年3月31日

(単位:円)

	項 目	予 算	実 績	備 考
収 入	会 費 (45期生他)	18,120,000	6,388,432	会費納入率34%
	預貯金利息	510,000	421,730	
	積立金からの繰り入れ	2,970,000	14,443,379	会費減に伴う繰入増
	収 入 計	21,600,000	21,253,541	
	事業計画の推進			
支 出	(現職・OB会員交流)	550,000	1,344,240	支部支援
	(同窓会主催親睦交流会開催)	300,000	310,745	
	(ホームカミングデーの実施)	600,000	600,130	
	(会員の出版等支援)	50,000	0	
	(防大卒業留学生との連携)	400,000	102,249	
	(全国的な情報網の維持整備)	50,000	28,980	
	総会/講演会費	1,500,000	1,210,168	
	期生会支援費 (49期生助成)	100,000	100,210	
	(46期生助成)	100,000	0	14年5月に振込
	校友会対外活動助成費	1,000,000	1,000,420	
	安全保障講座助成金	0	100,210	
	開校記念祭助成金	2,000,000	1,995,420	
	顕彰碑献花費	500,000	373,420	
	慶弔費 (供花、弔電)	350,000	316,335	
	職員定年退職者記念品費	100,000	107,877	
	複写機賃貸料	350,000	551,970	
	電話/FAX維持費	400,000	242,383	
	小原台事務局運営費	100,000	100,210	
	代議員会運営費	700,000	836,243	
	機関誌発行費	3,300,000	3,310,449	
同窓会名簿維持費	250,000	410,205		
記念品作成	0	600,420		
会長運営費	400,000	230,360		
事務員雇用費	2,000,000	2,000,000		
本部事務局室賃貸料	2,900,000	2,838,581		
事 務 費	350,000	161,955		
通 信 費	150,000	82,337		
交 通 費	400,000	354,590		
会 議 費	200,000	163,043		
予 備 費	1,500,000	0		
50周年記念事業委員会	1,000,000	1,000,210		
国債購入経費	0	780,181		
	支 出 計	21,600,000	21,253,541	

防大同窓会總會のご案内

平成14年度同窓会總會を下記のとおり開催致します。
ご出席を賜りたくご案内申し上げます。

記

- 1 日時 平成15年3月25日(火) 16:00~20:00
(1) 総会 16:00~17:20
(2) 講演会 17:20~18:20
(3) 懇親会 18:30~20:00
2 場所 グランドヒル市ヶ谷
新宿区市谷本村町4-1
(TEL.03-3268-0111)
3 懇親会費 4,000円

参加される方は、同封の返信用はがきにて平成15年2月28日(金)までにお申し込み下さい(欠席の方は、返信不要です)

平成14年度同窓会行事

平成14年度同窓会行事が次のとおり実施されました。

●6月7日(金) 臨時代議員会

(グランドヒル市ヶ谷)

次期会長として渡邊信利氏(陸6期)が選出されました。

●12月20日(金) 定例代議員会

(グランドヒル市ヶ谷)

下記議案が承認されました。

- 1 平成13年度事業報告、決算報告及び財産目録
2 平成15年度事業計画及び予算案
3 平成15年度事の人事案
4 MCI事業案

本部事務局からのお詫び

11月17日に行われました防大公式行事は、当初の予定(記念式典10:00~10:40、観閲式11:45~12:45)より大幅に早まり(記念式典開始10:00、式典終了後引き続き観閲式開始、観閲式終了11:20)、皆様には大変ご迷惑をおかけしました。私どもがこの変更を承知致したのは同窓会行事の数日前でありましたが、少なくとも同窓会行事に参加された方々にはこれをお知らせ出来た筈であります。この点につきまして、私どもの不行き届きお許し戴きたくお願い申し上げます。

本部・事務局からのお知らせ

Table with 4 columns: Job Title (e.g., 会 計 監 事), Name, Date/Time, and Location (e.g., 陸, 海). Includes a vertical title '平成14年度同窓会本部役員' on the right side.

地域支部等役員(平成14年末現在)

Table listing regional branch officers with columns for Job Title, Name, and Location (e.g., 鹿兒島市, 仙台市).

Table listing other regional branch officers with columns for Job Title, Name, and Location (e.g., 小原台事務局長, 古賀英松).



大講堂前



(国の護り)

防衛大学校同窓会本部連絡先

〒160-0003 東京都新宿区本塩町21-3-2

局 線 TEL・FAX 03-3351-8910 専用線 TEL・FAX 8-6-28895

防衛大学校同窓会機関誌

小原台だより



(大講堂前)

Vol. 11

平成16年1月1日
発行 防衛大学校同窓会

編集 佐古寿聡 多田紀幸

印刷 (株)エイコープリント

ご挨拶



防衛大学校同窓会会長

渡邊 信利

全国各地で、また日本を離れ海外各地でご活躍中の同窓会員の皆様、明けましておめでとうございます。それぞれ輝かしい新年をお迎えのことと、心からお慶び申し上げます。

昨年七月、凶らずも第十六代会長として、阿部前会長から防大同窓会会長職を引き継ぎました。防大創立五十周年を迎え終えたこの大きな節目の時期に、大役を仰せつかり、その責任の重大さを痛感しております。皆様のご協力を得ながら、精一杯努力する所存でありますので、宜しくお願い申し上げます。

さて、冷戦時代が終焉し、イデオロギー対立の構造は影をひそめ、東西対立の時代には顕在しなかった民族・宗教的対立が激化し、エスカレートの様相を呈しております。特に、二〇〇一年九月十一日米国での同時多発テロの

発生は、世界中の人々に、改めてテロの脅威撲滅と大量破壊兵器の拡散防止の必要性を認識させ、アフガン及びイラク戦争という事態にまで発展致しました。

また、北朝鮮の核開発の問題やテポドン・ノドンミサイルの大量配備は、近隣に存在する特異な独裁国家であるだけに、まさに我が国の安全にとって深刻な脅威となっております。

このような国内外情勢の下、ここ数年の間に、国民の安全保障に関する意識は、大きく変化して参りました。国家の危機管理に対する関心も高まり、野党の賛同を得て「有事法制関連法案」が可決成立するまでに至りました。さらに拉致事件の真相解明を契機として、今までタブー視されてきた「国益」とか「国家主権」に関する論議も活発になされるようになり、遅まきながら

日本も「普通の国」になりつつあることは歓迎すべき事象です。

こうした一連の国内世論の好転は、「憲法違反の自衛隊」と言われ、「存在のための戦い」を強いられた時代を過ごした者にとっては、隔世の感を覚えます。

今となつては、集団的自衛権の憲法上の解釈を変更しないで、空理・空論に明け暮れる永田町の論議こそが、時代遅れの最たるものかも知れません。国際的に応分の責任を果たすべき日本の立場、加えて北朝鮮危機への対応が切迫している現状に鑑み、憲法改正には時間を要するのであれば、早急に集団的自衛権の政府解釈の変更をすべき時機であると考えます。

国内外情勢の著しい変化や新しい脅威（テロリズム等）の出現により、自衛隊は、我が国の安全と繁栄を守るた

めに、国際貢献活動など、多くのリスクを伴う広汎多岐にわたる新たな任務・役割が求められるようになりました。

インド洋、イラクに対する自衛隊の派遣は、新たな脅威に対する日本の国際的責務であり、日米同盟の信頼性向上の証でもあり、果たすべき義務であると信じます。

このような転換期にあつて、今日ほど、「職業軍人」として、国防の中核を担う防大同窓生の自学研鑽、切磋琢磨、そして大同団結が大事な時期はないと思ひます。

防大同窓生会員が一丸となり、自重自愛、同窓同学の絆を大切にしながら国防の任を全うしたいものです。

次に、同窓会活動について、直面している課題等について申し述べたいと思います。

取り組むべき課題の第一は、「財源

の確保」です。即ちここ数年、危機的状況を呈している会費収入の激減に歯止めをかけ、会費納入率の全般向上を図ることが緊急の課題です。

幸いに今年度は、関係者のご努力とご協力により、大幅に改善されつつあります。そのご尽力に対し、心から感謝申し上げますとともに、会費未納会員の自発的な納入を強く期待しております。

第二は、「年度事業の見直し」です。同窓会としてやるべき事業を出来る限り厳選して、貯蓄からの繰入金に大きく依存している最近の年度予算の体質を改める必要があります。併せて「費用対効果」を勘案して事業のメリハリをつけ、また歳出の全般的な抑制にも努めて参りたいと考えております。今のままの状態では推移しますと、十数年で財源が枯渇状態に陥ることにもなりかねません。

第三は、「MCI事業の推進」(MCI: Military Cyber Institute の略)です。これは、五十周年記念事業の未完成的の大事業として、同窓会に申し継がれたものです。その目的とするところは、「日本の防衛に関する世論を正しく導くための情報を発信し、防大同窓生OBの経験及び知識を生かし、社会

的貢献をする」とされています。

趣旨に、異論を唱える人は誰もおりません。しかしながら「MCI事業」の内容(中味)については、抽象的な願望のレベルにあり、人によって考え

方、イメージが異なっているのが現状です。具体的な事業構想の確立と、その実現の可能性に関する検討は、今後の課題として残されております。そこで、まずは、十五年度事業として決定された「防大同窓会ホームページ」を、年度末までに立ち上げ、試験運用を開始出来るようにしたいと思っております。当面は、会員を主対象とした同窓会の広報、会員相互の情報・意見交換、防衛関係資料等を掲載し、同窓生の融和団結を図って参りたいと考えております。

このほかに、同窓会本部事務局の東京移転に伴い、やや疎遠となりがちな防大当局と学生達との連携を深め、同窓会活動の理解と協力が得られるように、「小原台事務局の強化」を図りたいと思っております。

また、長(中)期的視点から検討を要する事項としては、「防大同窓会活動のあり方に関する検討」があります。

過去に防大同窓会のあり方について、「将来構想検討委員会」等を設置

して検討された経緯もありますが、その後同窓会をとりまく時代・環境も大きく変化しており、また約十年後には、同窓会員数及び会員の構成(退官会員と現職会員の比率)もほぼ一定になると見積もられます。

したがって、同窓会の長期にわたる安定的活動を維持するために、プロジェクトチームを編成して、同窓会の組織、事業、財政基盤の在り方など全般について、再度時間をかけて検討し、将来の同窓会運営の施策に反映させたいと考えております。

これらの検討に当たっては、「同窓会の設目的」「永続的活動基盤の整備」「在校生支援の重視」「現役会員や支部等活動の活発化」などを念頭に置きながら、慎重に討議を重ね、改善すべき点は、大胆に改めたいと思っております。皆様の建設的なご意見等をお願い致します。

最後になりましたが、同窓会員の皆様のご健勝とご多幸を祈念申し上げ、ご挨拶と致します。

目次

会長年頭のご挨拶	2
防大特集	
小原台は今	2
記念事業報告	9
中期事業	
「防大同窓会あり方検討委員会」について(案)	16
MCI事業の平成十五年の実施状況について	17
期生会だより	
第4・7・13・17・28期	20
同窓生アラカルト	24
支部だより	
北海道・東北・九州地域支部	
北陸・東海・関西・広島地区支部	27
同窓会行事	
第七回期別対抗ゴルフ大会	34
第六回期別対抗テニス大会	35
第五回期別対抗囲碁大会開催	35
顕彰碑献花式	36
平成15年度臨時代議員会	36
「同窓会会員名簿」追加申込みの受付	37
会費納入のお願い	37
会計報告	39
期生会長・代議員名簿	40
防大同窓会総会のご案内	41

小原台は今

西原学校長、 オーストラリアの 国防軍士官学校等視察

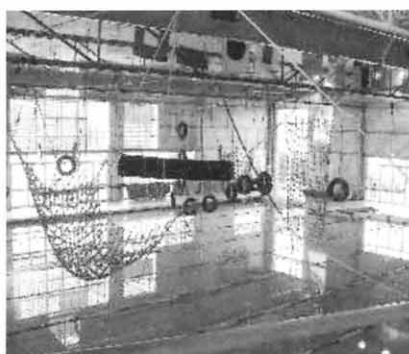


▲ 国防軍士官学校長Goldrick准将と

平成十五年十月六日(月)から同十一日(土)までの間、西原学校長が随行者防衛学助教授財津二等陸佐を伴って、オーストラリアの国防軍士官学校、陸軍・海軍の各士官学校、国防大学等の視察を行った。

オーストラリアは、陸軍、海軍、空軍の各士官学校の他に軍種統合による国防軍士官学校を擁するというユニークな軍人教育体制をとっており、国防軍士官学校における教育システムや同校と軍種別

▼ 同学校の学生たちと



▲ 国防軍士官学校のプール・障害物トレーニング施設

士官学校との連携等に関して、意見交換を行った。

特に、国防軍士官学校は、防衛大学校と同様に陸海空の各士官候補生に対し、軍事教育、訓練及び大学教育を行い、士官候補生として相応しい資質と識能を付与している。軍種共通の軍事教育、訓練は国防軍士官学校が、軍種別教育訓練は

各軍士官学校が、それぞれ担当している。また、大学教育の分野は、国防省との協定に基づき国防軍士官学校の敷地内に教育施設を設置してニューサウスウェールズ大学が担当しており、同大学の学士号が付与される。

施設見学では、充実した図書館や学生食堂、屋内スポーツセンターを子細に見学した。また、学生舎内においては、居室の状況を見るとともに、居合わせた数名の学生とも言葉を交わす等学生生活の一端をうかがい知る機会を得た。同校の現在の全学生数は、陸・三八六名、海・一五二名、空・三五三名、他国・三十四名となっており、この内女子学生は、陸・六十八名、海・五十二名、空・六十九名、他国・三名と全学生の二割強となっている。

学校長の訪豪間、在豪日本大使館付防衛駐在官北川一等海佐(防大二十六期)から、全般日程の終始を通じた随行により、豪国内移動、訪問先のアポイント確認、訪問先に関する事前の情報提供等の協力を受けた。

第八回 国際士官候補生会議開催

平成十五年三月三日(月)～六日(木)、学生の国際的視野の拡大、語学力の向上及び諸外国と我が国の将来の安全保障につながる相互理解の促進に寄与することを目的として、本校において「二十一世紀

紀における軍隊」を統一テーマにした国際士官候補生会議(International Cadets Conference-ICC)が開催された。

参加者は、本校の学生の他、海外からオーストラリア、カナダ、フランス、ドイツ、インドネシア、イタリア、マレーシア、フィリピン、大韓民国、シンガポール、タイ、連合王国、アメリカ合衆国の十三カ国の士官候補生、また一般大学からは、青山学院大学、慶應義塾大学、東京大学の学生がそれぞれ参加した。

今年、「二十一世紀における軍隊」を統一テーマとして、石塚 勲氏(元航空幕僚長)の基調講演に引き続き、三つのセッションに分かれ熱心な討議が行われた。

以下、三つのセッションの要旨と議長として参加した学生の所見を紹介する。



▲ セッション討論風景

第一セッション..

テーマ「士官学校の現状と将来」

(議長 三学年 日高 大輔)

【要旨】

各士官学校の教育面、訓練面、倫理面

に関するプレゼンテーションを実施後、以下の二点について討議した。

- ①士官学校の教育において、時代の変化に合わせて変わっていく要素は何か
- ②士官学校の教育において、普遍的な要素は何か

士官学校の教育において、時代の変化に合わせて変わっていく要素は何かについては、英語教育の重要性、IT教育の重要性、士官学校における統合教育の示唆、士官学校における官民協力の重要性などを挙げた。

また、士官学校の教育において、普遍的な要素は何かについては、共通の規範や価値観を共有すること、軍隊文化を継承し、学生に植え付けることを挙げた。

【所見】

事前の勉強が役に立った。今回、会議を円滑に進めるために、参加者は十一月の後半から英語と日本語で勉強会を実施してきた。第一セッションは公共政策学科の渡井理佳子先生と外国人教官のエドワーズ先生に勉強会を支援していただいた。

勉強会を重ねることで、防衛大学校が他の士官学校と比べてどんな特徴を持っているのか、他の士官学校や防大がどのような歴史をたどってきたのかを知ることができ非常に良い勉強になったと思う。また、会話能力も勉強会を通じて向上したことは言うまでもない。

今年例年以上にタイトなスケジュールを組んで準備をしたが、本番直前はバタバタするもので、海外士官候補生との

連絡調整、プレゼンテーションの準備、討議の構成作り、その他諸々の準備等に追われ、非常に忙しい日々を過ごした。そんな準備の甲斐あつてか、本番ではそれほど失敗もなく、スムーズに会議を進めることができ、その点は良かったのではないかと思う。

今回のICCに参加したことは、防大生である我々のアイデンティティとは何か、今我々がすべきことは何かを改めて考える良い機会となった。第一セッションのテーマである「士官学校の現状と将来」は、第二セッションと第三セッションのテーマである「理想の指揮官」「政軍関係」と密接な関連を持っている。是非この三つのテーマについて自分なりに考えてみてほしい。それが、今後この防大での生活をいかに過ごすかを考えるきっかけになつてくれれば非常に光栄である。

最後に、一緒に会議に参加したメンバー達、支援していただいた教官や学生、実行委員の方々、どうもありがとうございました。来年度もICCが、より良いものになるように頑張っていきたいと思う。

第二セッション..

テーマ「理想の指揮官」

(議長三学年 松崎 周)

【要旨】

今回の討議においては、以下の四点に絞り話し合った。

- ①リーダーシップの原則
- ②過去の偉大な指揮官
- ③女性指揮官

④シナリオ

リーダーシップの原則については、主に戦闘中のリーダーシップについて話し合ったが、中には有事ばかりではなく平時におけるリーダーシップ論が大切であるという意見がでた。また、時代の変化に伴って過去と現在でのあるべき姿も考慮する必要があるという意見を得た。

戦闘時ばかりではなくいかに戦争を起こさないようにするかを考えるリーダーが必要である。

過去の偉大な指揮官については、前記の平時、有事を問わずにリーダーにとつて率先垂範は世界共通の要素であることが確認できた。また、リーダーは如何に恐怖を感じてもその感情をコントロールし部下や部隊の士気の低下を防がなければならない。この様な意見に各国間の相違はなかった。

女性指揮官については、日本側が仕事と家庭のどちらを優先すべきかという点を提案したのに対して、仕事と家庭を両立させるのはあたりまえであるという海外参加者の反応があつた。何故日本人は家庭を優先させるために仕事を止めなければならないのかについて海外士官候補生は非常に疑問をもっていた。また、物を女性という性差でとらえるのではなく、一人の人間という個人差としてとらえてほしいという女性参加者からの意見がでた。

最後に、今まで話し合った理想の指揮官像を基に、具体的なシナリオを想定し、この場合にどう判断するかを尋ねた。想定に対して、上司の命令は絶対服従であ

り、たとえ殉職しようともそれは名譽の死であるという認識が強いことがわかった。また、部下の不正を発見した場合に、上司に報告し事態が大事に至る前に対処すべきであるという意見が大半であつた。

本セッションにおいては海外士官候補生、本科学学生共に活発な意見交換が行われ、討議を通して各自が大きく成長非常に有意義な会議であつた。

【所見】

三月九日早朝、十三カ国からの士官候補生を乗せたバスが、それぞれの思いと共にここ、小原台の地を去っていった。

思い起こせば今回のICCに議長としての参加が決まってから早くも半年が過ぎようとしている。しかしこの半年は早々容易に経過したわけでは決してない。毎晩遅くまで勉強会を実施し、ICC期間が迫ってくると休日を返上してまで作業、勉強会を実施したことも多々あつた。

多くの困難とそれ以上の努力がそこには確実に存在した。針原、吉村、北井、清水、全員の努力が。彼らは今回のICC参加を熱望しており、彼らの勉強への取り組みの姿勢は私には何よりも嬉しいものであつた。

多くの困難にめぐり合わせたとき、彼らは助けの手を差し伸べ、彼ら一人一人もまた皆の助けを必要とし、支えそして支えられて日々成長していく彼らの様子が私にはわかつた。

また、士官候補生が到着してからも全員積極的にコミュニケーションを図り、

諸外国の実情や意見を多く吸収し学んでいた。様々な意見をぶつけ合い自分の見識を高め人間として大きく成長した。ICCは、とかく会議自体が目が行きがちであるが、ICCを通して我々の中に完成したものは、このような国際交流を通じての、「良好な人間関係」と「広い見識」ではないだろうか。

この良好な人間関係について、ある人が今回の親善パティー中に私に次の様に言ったことを私は忘れられない。「この様に多くの国々の人と仲良くなつて、万が一その国と戦争をするようなことになつたとき、一番初めに思いつくのはその人のこと。そう思つたら戦争なんて起らないと思ひます。」

最後とはなつたが、今回の素晴らしいICCに参加することができ、学校長を始めとするICC関係各位、河野教官、シヨーン先生、今泉教官、村井教官、そしてICC実行委員とエスコート、第一、第三セッションの議長に第二セッションを代表して感謝の意を伝えたい。

第三セッション

テーマ「政軍関係」

(議長三学年 高橋信一郎)

【要旨】

以下の四つのトピックに分けて討議を進行した。

①歴史②理論③課題④解決策

シベリアンとミリタリーの関わり方が焦点となつた。結論として、現在の国際情勢を踏まえ、シベリアンとミリタリー

がより密接なつながりを持ち、お互いを理解しあい、共存していくことが大切である。

【所見】

素晴らしい仲間と巡り会えたことに感謝している。だが、もつと英語を含め勉学に頑張らなくてはと感じた。

不安も喜びも悲しみも楽しみもすべて弾けた。思つていたより本番はあつかなかつた。担当の久保田先生が言つてた通りだった。あまり終わったという感じはしない。充実感も満足感も湧いてこない。それはなぜだろうか？心がついていっていかないのかもしれない。あまりにもいろいろなことが自分の中を通り抜けていって、心がそれについていけないのかもしれない。一番納得してないのは自分なのだ。周りに認められたいからやるんじゃない。他の誰のためでもない、自分のため。自分がどこまでやれるのか、自分がどこまで大きなところで通用するのか試したい。

いつかまたこのようなチャンスが物にすることができるようにはがらばらなくてはならない。

ジョン、ケビン、コナン、サイモン(第三セッションの海外参加者)、みんなナイスマイルでとてもいい人達ばかりだった。見る所が違う気がした。みんな私にはない何かを持っている。

最後に、久保田先生、クレイン先生、ウィリアムズ先生をはじめ、私達を支援してくださった沢山の皆様、まことにありがとうございます。

「研究室紹介」

防大における国際法関係教育

国際関係学科教授 真山 全

はじめに

「研究室紹介」ということで今般執筆依頼を受けたが、社会科学系二学科(公共政策学科及び国際関係学科)では研究室ということを意識して仕事をすることはない。そこで、「研究室紹介」ながら、防大の国際法関係の教育について記すことにしたい。

一、本科における国際法教育

(一) 科目

防大では、本科全学生に少なくとも二単位の国際法科目の履修を要求している。理工系の学生にもこれを課している。理工系の学生は我が国では希であるが、防大が士官学校・兵学校としての性格を併せもっていること及び本科学生任官後の任務を考へることであると思われる。具体的には、人社会科学は一年次において、理工系学生にあつては三年次においてそれぞれ国際法の概略を二単位科目として学ぶ。人社会科学と理工系の二単位科目の国際法の講義内容に差はない。さらに、国際関係学科学生は、国際法(四単位)や国際機構論を勉強することができる。加えて、防衛教育学群では国際人道法の講座が

ある。

もつとも、教育内容は、「自衛官や防大学生のための」国際法なるものがあるわけではないから、一般大学と内容となつてはいる。なお、国際人道法講座が別途設けられているのは、おそらく、一九四九年のジュネーヴ諸条約が「軍事教育の課目中」に「この条約の研究を含ませることを約束する」と規定しているからと考えられる。

(二) 教官

国際法関係の教官は、国際関係学科では新進気鋭の佐藤宏美教官(主たる研究対象…国際責任、国際刑事法)と小職(同…海戦法規、国際刑事法)、防衛教育学群のベテラン永澤勲雄教官(同…国際人道法、軍縮法)の三名である。驚くべきことにとうべきか、公務員であるから当然とうべきか、国際法関係教官採用その他で学閥の要素が作用することが防大ではない。一般大学では、出身校その他で各種閥が形成されることが少なくなく、そのこと自体まことに興味深い研究対象であるが、我々にはこれがない。この点非常に居心地のよいところである。

国際関係学科の上記二教官は、勿論本科卒業研究論文指導を担当する。通常、四名程度の卒業研究学生があり、戦争法や海洋法を選択する者が多い。結構難度の高いテーマを彼等は選択するから、こちらも指導に努力を要するが、一番痛いのは図書資料の不足である。図書館関係者の努力にもかかわらず、人社会科学創設から相当たつている

けれども、法学関係図書、特に内外の大学紀要等定期刊行物がなお不足している。ただ、二〇〇四年度から関係者の非常な尽力により LexisNexis と Westlaw という法学関係データベースが導入されることとなり、紀要の不足は相当補われよう。この二種を同時に導入するのはかなりの英断で、こうした努力が継続されることを希望している。

二、総合安全保障研究科における国際法教育

(一) 科目

総合安全保障研究科の国際法関係科目には、戦争法や集団安全保障機構論などがある。戦争法とはかなり刺激的強い呼称であるが、武力紛争法や国際人道法と今のところ同義である。集団安全保障機構論では、国連その他の平和維持機能を扱う。なお、大学院レベルで戦争法を独立の講座として持つているところは、小職の知る限り我が国では他にない。これは小職の専門分野であって、こうした講座のある教育機関にしていることは幸運であるといえよう。

(二) 学生と教官

本研究科定員は二十名で、例年二、三名の陸海空自衛官が国際法をテーマとして修士論文を執筆し、佐藤教官と小職がそのお手伝いをしている。彼らのテーマは、戦争法、国際刑事法、海洋法などである。最近、陸海空自衛隊において国際法研究の必要性が従来よりも一層強く認識されるようになったのは、御同慶の至りである。陸上幕僚

監部法務関係者や小平学校がとりわけ熱心で、一般大学大学院法学研究科と防大研究科に交互に学生を派遣するようになった。こうした諸官によって、将来、陸上自衛隊では部隊の行動を支援する強力なリーガル・アドバイザー・グループが形成されるであろう。軍事的には非常に強力というわけではない我が国にとり、武力紛争時の行動の法的正当性を巡る争い、つまり、「国際法の戦い」に勝利することは重要である。先の大戦において多数の国際法違反行為を行ったため、関係諸国民に重大な損害を与え、我が国の名誉は著しく損なわれた。再度同様のことが生じれば、取り返しが見つからない。国際法を学んだ研究科学生諸官に期待するところは大きい。

また、三年ほど前から、海上保安庁が学生を派遣するようになった。彼等のなかにも国際法を専攻するものがある。彼等は、法執行機関の要員であるから、軍の行動に関する国際法規則を詳細には知らない。しかし、海上警察は、一般に海軍と紙一重の活動をし、おそらく、海上警察機関の船艇は武力紛争時に攻撃目標になるのであろうから、それを知る必要がある。彼等の勉強振りも良好で、自衛官学生よりも法の素養がある場合が少なくない。

おわりに

今後も、本科及び研究科学生の国際法教育に微力であるが努力したい。各位の協力をお願いするものである。

平成十四年度 TOEIC 試験について

平成十四年度第九回本科学生対象 TOEIC 試験が、一月十五日に実施された。受験者数は一六四四名、欠席者は十二名であった。

学生達の真摯な取り組みは、全体の平均点が、昨年度から十三点もアップしたことに反映されている。なかでも、リスニングの平均点が昨年度より十点上も上がったことなどは喜ばしいことである。

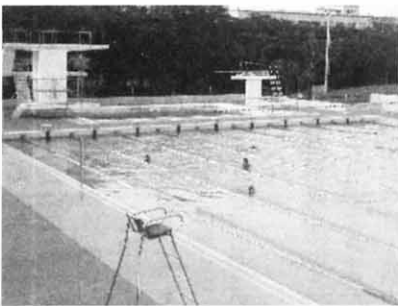
一六〇〇人以上が団体受験する試験で、平均点をこれだけ上げることが並大抵のことではない。日ごろの学習の成果が着実に身を結び、糧となっていることは確かなようだ。

特筆すべきは、五名の学生が九六〇点以上、十三名が八〇〇点以上、さらには四十二名が七〇〇点以上のスコアを出していることである。来年度はこのスコアを超えるよう各学生の努力を期待したい。

競泳プール改修完了

防衛大学の競泳プール（屋外）の本体が、改修を終えオープンした。

新競泳プールは、八月三十日付をもって既存のプールに引き続き、日本水泳連盟から五十m国内基準競泳プール（五十m一般プール）として公認された。



▲ 50m国内基準競泳用として公認された防大プール

FRP製のプール本体は、縦五十m、横二十五m、水深一・三五m、一・五五mとなった。改修前に比べ、本体の短辺が約五m拡張され、水深が全体的に十五cmずつ深くなり、各コース幅も二・五mと広くなった。

この改修により水深が深くなったため、従来に比べより安全にスタート練習（飛び込み）ができるようになり、また、コース幅の拡大により同一コース内を複数の泳者が安全に回泳できるようになった。更にプール短辺が二十五mと拡張されたため、状況に応じて短辺方向での練習・タイム計測等も可能になった。

一方、機能面での充実のみならず、美観的にもすばらしく、また、各種設備も大変使いやすく申し分のない施設となった。今後、本校の水泳教育・訓練が安全かつ効果的に実施できるようになったばかりでなく、他大学との交流試合や水泳記録会等でも広く活用されるものと期待している。

なお、周辺地域の団体等へのプールの貸し出しは、屋外プール周辺の整備が完了する平成十六年度から実施する予定。

校友会活動

防大、全日本カッター競技大会 三年ぶり十三度目の優勝

短艇委員会 主将 四学年 藤原 寛司

さる五月二十四日(土)、横須賀市走水沖において行われた第四十七回全日本カッター競技大会において、我々防衛大学短艇委員会は、昨年、一昨年の雪辱を晴らし、三年ぶり十三度目の優勝、「權立て」の栄光に浴することができた。

大会に向けて再び日本一の栄冠を勝ち取るべく、クルー一同、臥薪嘗胆・不惜身命の精神で練習に励み試合に臨んだ。

大会では予選・決勝ともに、クルーは防衛大学の学生代表として、宿敵海上保安大学校をはじめとする他大学を圧倒する素晴らしい漕をみせ、「防大魂、ここに在り」を示した。

このような成果を挙げることができたのは、部員はもちろん、先輩方、大会運営にご尽力くださった指導官の方々、応援リーダー部をはじめ声援を送ってくれた学生、皆様のお力添えの賜物と感謝しております。

「断じて行えば鬼神もまたこれを避く」の言葉を胸に、防衛大学短艇委員会は二連覇にむかいます。今後ともご指導・ご声援のほど宜しくお願い致します。

全国国立大学対抗相撲大会 防大相撲部 団体戦二十年ぶりの優勝

主将 四学年 齋藤 拓也



▲西原学校長と相撲部団体戦出場メンバー
(左からブヤンバト、光永、中澤、藤田、バトサイハン)

第二十一回全国国立大学対抗相撲大会が、五月十八日(日)に横須賀市大津公園内相撲場において開催された。防衛大学校が主管校として東北大学、東京大学、名古屋大学、奈良県立医科大学、京都大学、広島大学及び琉球大学から八校約六十名の選手が参加した。

大会会長の西原学校長は、大会の開始にあたり、参加各校の選手に対し、日頃の稽古により培った実力を遺憾なく発揮し、若さ溢れる相撲を期待するとともに、国技を愛する者同士として相撲部相互の交流と理解を深めるよう挨拶した。

大会は、参加八校による団体戦、男女の個人戦、新人戦において、大会会長の

期待どおりの実力伯仲の好試合が展開された。

我が防大相撲部は、団体戦において第一回目の大会に優勝したのみであり、その後は十九年間優勝にあと一步というところで涙を飲む結果となっていた。今年我が防大相撲部が主管校という事もあり、何が何でも優勝を勝ち取りたいところであり、毎日血のにじむような稽古に励んできた。

団体戦において我が防大相撲部は、先鋒バトサイハン(四学年)、次鋒 藤田 励生(二学年)、中堅 中澤和臣(三学年)、副将 ブヤンバト(三学年)、大将 光永安孝(四学年)のメンバーで試合に臨んだ。

初戦、琉球大との試合において、次鋒 藤田は琉球大の一四〇kgもの体格を持つ山城選手とあたるが、見事な土俵際のうっちゃりにより快勝した。勢いに乗った我が防大は次々と対戦校を撃破、昨年度優勝の東京大学にも四対一で勝利した。また、副将のブヤンバトは突っぱりが冴え渡り、次々と対戦相手を土俵の下に撃沈させ、七試合中全勝するという快挙を成し遂げ、敢闘賞を受賞した。団体戦を振り返ってみると防大相撲部の結果は七戦中六勝一敗で見事二十年ぶりとなる優勝を勝ち取った。

個人戦においては、我が防大相撲部は参加九人のうち八人が予選リーグを勝ち抜き決勝トーナメントに出場する。中でも活躍したのは藤田と中澤の二名である。藤田、中澤は順当に勝ち進み、なんと準々決勝において防大同士の対決になり、激しい攻防の末、送り出しが炸裂し

藤田に軍配が挙がる。続く決勝戦において昨年度個人準優勝の東京大の大山選手と戦い、甲乙つけがたい試合に会場が騒然とする。そんな中、大山選手の巨漢から繰り出される押し出しにより藤田は土俵の外に。結果としては個人戦において、我が防大は藤田準優勝、中澤が第三位となる好成績を残した。

本大会は、我が相撲部にとって今年度初めての大会であり、まだまだ始まりではない。これからも日々稽古に励み邁進して、ますます成長していく防大相撲部をよろしく願います。

大会成績

団体戦

優勝 防衛大学校
準優勝 東京大学
第三位 名古屋大学

個人戦(男子)

優勝 大山 信(東大)
準優勝 藤田 励生(防大)
第三位 中澤 和臣(防大)
栗山 和之(名大)

個人戦(女子)

優勝 鶴飼 恵美(名大)
準優勝 狩野 愛(東大)
第三位 村木 泉美(京大)
中本 光架(広大)

新人戦

優勝 與世田卓磨(琉大)
準優勝 岸根 翔(名大)
第三位 鈴木 博之(名大)
山本 芳治(京大)

ヨット部活動概要

我々ヨット部クルーザーではクルージング&レースを中心とした活動を行っています。

クルージング

- 五月 東京湾横断クルージング
(千葉県 保田にて新入生歓迎会)
- 八月 夏季クルージング
(相模湾を中心に熱海・伊豆大島・新島等)
- 十一月 横浜クルージング (予)
(ベイブリッジを下から見られる！)
- 不定期 ナイトクルージング
(都会の夜景・満天の星空・夜光虫の群れ)

National

全日本学生外洋帆走連盟レース
各種マリナー主催レース
社会人ヨットクラブレース

International

イタリア海軍士官学校招聘レース
(イタリア)
世界学生ヨットレース(フランス)

特徴的なのが世界大会(イタリア・フランス)に出場できるという事です。全国大会(国内)は勿論の事、全世界を舞台に広く活動を実施し、同時に国際交流を深めることもできます。

通常、こうした各種イベントにむけてクルーワーク練習を実施し、あわせて艇整備も実施します。

他大学との交流、さらに社会人プロセイラーとのレースを通じて、より高いシームanshipの涵養を目指します。また、小型船舶免許講習会等を実施しており、部員は一級もしくは四級ライセンスを獲得できます。

年間概要

- 四月 イタリア遠征
- 五月 新入生歓迎会
- 八月 夏季合宿 夏季クルージング
熱海ランデヴー等
- 十月 フランス遠征
- 十一月 横浜クルージング(予)
- 十二月 年末艇整備 冬季合宿はあり
ません
- 一月 一学年デビュー戦(予)
- 三月 納会(OB・顧問との懇親会)
フランス予選(全国大会)春季合宿

イタリア遠征

イタリア海軍士官学校とピサ・フィレンツェに程近リヴォルノ市が共催するこのレースは今年度で十九回目を迎えた。我々は一九九九年よりこの国際レースに参加を果たし、今年で四回目の出場となる。

約二十余りの国の士官候補生がともに技を競う「J/24クラス」では一般参加者・プロレーサーを含め、六十以上の艇が一斉にスタートする。他にもドイツ各種・メカクルーザーなどの多数のレースが開催されている。

各国の士官候補生とのレース・共同作業・そして時には抗議(プロテスト)を通じ、英語・伊語で主張し合うことで、結果として交流を深める事もできた。

新春の箱根駅伝復路を走って

陸上部 三学年 岡本 英伯



▲復路の第一走者(六区)として、デッドヒートを繰り広げる岡本学生 写真左端

昨年十月末に行われた箱根駅伝予選会において、残念ながら防衛大学校としては出場を逃したが、今回新たに設けられた関東学連選抜チームの一員として私が箱根駅伝第六区に選ばれ、憧れだった箱根路に立つことができた。

復路スタートの六区は全長二十七km、高低差約八〇〇mを一気に下る通称「山下り」の高速区間。前日の冬晴れから一転、夜明け前から降り出した雪はスタート前には道路を白くするまじになっていった。そのためこれまでにない緊張に輪をかけて不安がよぎったが、現地に駆けつけてくれた応援団リーダー部からエールを受け、いつきに気合いが入った。



▲沿道から熱い声援を送る制服姿の防大生：右端岡本学生

八時十分、五校が一斉にスタートした。予想以上に路面が滑り、最初の登り五kmは設定タイムよりも約二十秒遅かった。しかし沿道の観衆からの「防大ガンバレ」の声援に後押しされ、下りは恐れることなく徐々にペースを上げ、最後は先行する三校を捕らえ禰をつなげることができた。六十二分〇八秒、区間十五位は満足いくものであり、そしてなにより憧れの箱根路を、「防大ガンバレ」という応援を受けながら走れたことに感動した。

防大創立五十周年の記念の年に、四十年ぶりに防衛大学校のユニホームを着て箱根駅伝を走れたことは学校関係者、OB、そしていろいろな人に支えられ実現できたことと思っております。本当にありがとうございます。

来年は八十回記念大会です。今度は防大チームとして出場できるように、これからもがんばっていきますので、皆さん、これからも陸上競技部の応援をよろしくお願いします。

平成15年度運動系校友会活動結果及び部員数状況

15.12.2現在

校友会名	成績	部員数		校友会名	成績	部員数	
		男子	女子			男子	女子
応援団リーダー部	開校記念祭リーダー公開	15		銃剣道部	全日本青年大会 団体準優勝	34	7
短艇委員会	全日本カッター競技大会 優勝	69			全日本学生選手権大会 団体3位		
バスケットボール	男子 秋季関東リーグ戦 4部19位	43	7	グライダー部	週末フライト訓練実施	14	
	女子 春季神奈川リーグ戦 2部昇格			ソフトテニス部	秋季関東学生リーグ戦 7部4位	23	
柔道部	関東学生柔道大会出場	36	4	ボクシング部	関東大学トーナメント 4部昇格	56	1
ラグビー部	秋季関東大学リーグ戦 3部2位	123		レスリング部	東日本学生リーグ戦 2部4位	21	
サッカー部	神奈川県知事杯 準優勝	67		ボート部	国民体育大会出場 準決勝進出	28	
剣道部	関東理工系学生選手権 男子準優勝	65	11	フィールドホッケー部	男子 秋季関東学生リーグ戦 2部3位	37	12
空手道部	東日本大学空手道選手権 男子ベスト16	75	4		女子 秋季関東学生リーグ戦 3部6位		
	秋季関東リーグ戦 男女共に2部優勝			ワンダーフォーゲル部	八甲田、山梨、奥秩父雲取山周辺での活動	16	
	全国国公立大学空手道選手権大会 男子準優勝			パラシュート部	日本選手権大会	14	2
バレーボール部	男子 秋季関東リーグ戦 4部8位	38	12		個人Jr.の部 優勝 2年桜井、3位 3年伊内		
	女子 秋季関東リーグ戦 6部昇格			準硬式野球部	秋季神奈川7大学リーグ戦 6位	38	
卓球部	秋季関東学生リーグ戦 5部4位	22	2	合気道部	全日本学生演武会出場	50	
陸上競技部	関東理工系学生競技大会	46	5	体操部	東日本学生選手権大会 団体7位	28	8
	男子団体2位 女子団体4位			弓道部	秋季南関東リーグ戦	34	6
硬式庭球部	男子 関東理工科リーグ戦 7部2位	39	7		男子1部2位、女子2部5位		
	女子 関東理工科リーグ戦 8部3位			少林寺拳法部	全日本学生大会 団体演武優良賞	43	
硬式野球部	神奈川秋季リーグ戦 2部優勝	38			関東学生大会 団体演武最優秀		
射撃部	秋季関東学生ライフル選手権大会	20		フェンシング部	関東学生リーグ戦	26	
	団体2チーム、個人等で全日本学生大会へ出場				フルレ 3部昇格、サーブル 2部5位、エペ 2部4位		
山岳部	針ノ木、槍ヶ岳、谷川岳、前穂高等登山	7	1	ウェイトリフティング部	全日本大学対抗選手権大会 団体17位	19	
水泳(競泳)部	東部国公立大会 男子6位	36	7	相撲部	全国国公立対抗大会 団体優勝	16	
水泳(水球)部	関東学生リーグ戦 3部5位	21			東日本学生リーグ戦 2部6位		
ハンドボール部	秋季関東学生リーグ戦 5部8位	25		バドミントン部	秋季関東大学リーグ戦	23	7
アメリカンフットボール部	関東学生リーグ戦 2部Aブロック	85			男子 4部6位、女子 4部昇格		
ヨット(小型)部	関東学生選手権秋季大会	19	1	居合道部	自衛隊全国大会出場	22	1
	470級18位 スナイプ級12位			吹奏楽部	開校記念祭記念式典・観閲式	40	8
ヨット(クルーザー)部	イタリア海軍兵学校・リボルノ市共催国際レース	7	2	儀仗隊	横須賀開国祭	47	3
	士官候補生の部6位						



▲図書館 吹き抜けと休憩室

記念事業報告

記念事業委員会

元事務局長 田村 鞆 利

一、全般

昨年の「小原台だより」で記念事業の実施成果を記念特集号として会員の皆様にご報告して以来、記念事業委員会は、醜金者の皆様への記念品の発送に努力を集中するとともに平成十五年四月二十一日付で事業会計を決算し事業会計決算書として取り纏めました。これらの作業と並行して委員会活動の諸記録を総合整理して、平成十五年六月二十日の同窓会臨時代議員会において委員会としての最終報告をさせていただきます。

後に述べます一部の継続事業等については、必要事項を同窓会本部に申し送り、七年有余に亘った記念事業委員会の任務を終了して、平成十五年六月二十七日に委員会を解散いたしました。

全会員の皆様へのご報告は、定期的に大層遅くなり申し訳ありませんが、この「小原台だより」の場において、記念事業終了に伴う佐久間委員長からの会員の皆様へのお礼のご挨拶と、昨年六月の代議員会で最終報告しました内容のうち必要な事項を要約して皆様にご報告させていただきます。

二、記念事業終了に伴う

佐久間委員長挨拶

平成七年十一月、横須賀の芸術劇場で開催されました防大同窓会総会において、防大創立五十周年記念事業を同窓会が行うことが決定されて以来、長年の歳月を経て記念事業の終了を御報告するに至りました。

記念事業委員会と致しましては、継続事業を除いて計画した事業を実現できたと考えておりますが、委員会が与えられた任務を全うできなかったかどうかということは、私達自身でなく、任務を示された同窓会が判断されるものと認識しております。

昨年の同窓会総会及び代議員会においても申し上げましたが、私は、この記念事業を実現する事ができたのは、三つの力の結集のお蔭と痛感しております。

その一つは、申すまでもなく事業の実施を可能にして戴いた同窓生の皆様から寄せられました浄財であります。一億二千万円の募金目標は達成され、計画事業の実現のみならず、将来に向けた同窓会活動の足掛かりを築くことができました。記念事業の終了に当たり、皆様の御協力に対しまして心から感謝申し上げます。

第二は、この記念事業に御協力戴きま

した部外の関係者の一方ならぬ御好意であります。モニメント制作をはじめこの事業に携われた方々は、防大の記念事業に協力できることを光栄であると述べられ、文字通り私達の仲間として、全力を挙げて事業に取り組んで戴きました。その御厚情は、決して忘れてはならないと感じております。

第三の力は、記念事業委員会のメンバーの長期にわたる真摯な努力であります。各委員は、陸海空及び世代の違いを超えて、共通の目的に向けて、名実共にボランティア精神をもって、それぞれの任務を遂行して戴きました。その委員諸兄の活動に、私は深い感動を覚えるとともに、共にこの事業に従事できたことを幸せにまた誇りに思っております。

委員会発足以来、同窓生の皆様から賜りました御支援、御協力に重ねて感謝申し上げます。母校と同窓会の将来の発展を確信して、任務終了の御挨拶とさせていただきます。

三、委員会活動総括

(一) 記念事業の全活動を要約して総括したものが、別表第一「記念事業委員会活動経過の概要」であります。

あらためてこの記念事業を振り返って見ますと、大きく次の三段階で事業に取り組んだこととなります。

① 一段階…事業の構想段階（H七年度～H八年度）

基本構想の決定と趣意書に基づく募金活動の開始

② 二段階…事業の計画段階（H十年度～

H十二年度）
事業構想の具体化と事業計画の概成
③ 三段階…事業の実行段階（H十三年度～H十五年度）
記念事業実施計画の作成と事業の実行

(二) 第一段階（事業の構想段階…基本構想決定と募金活動開始）

平成七年十一月十一日の横須賀芸術劇場での同窓会総会で「記念事業を実施する」及びこのために「委員会を設置する」との同窓会の基本方針が決定され、佐久間委員長をヘッドに実行委員会の組織と事業の検討に着手しました。

平成八年に骨格となる「記念事業基本構想」を決定し、全会員に記念事業へのご理解とご協力をいただくために趣意書として取り纏め、平成九年から募金活動を開始しました。

当時は、同窓会本部も防大から市ヶ谷に移転した直後で、しかも同窓会名簿も整理されていない時期で、会員名簿の作成から着手しましたが、趣意書を発送しても約1/3が返送されてくるような状況で、会員の皆様からお寄せいただいた募金の集計も全て手作業で整理するしか方法もなく、担当委員には大変なご苦労をしていただきました。

(三) 第二段階（事業の計画段階…事業構想の具体化と事業計画の概成）

委員会に与えられた「資金も集めて、事業もせよ」との任務の遂行のためにはこの二つの側面を常に天秤にかけることになり、一方において募金の可能性を推し量りながら各事業を考えると同時に、他

防大創立50周年記念事業委員会の活動経過の概要

別表第1

区分	年度	全般	組織	募金活動	各事業					会計
					記念行事	資料館等整備記録	モニュメント	醜金者への対応	MCI構想	
平成7年度(1995)		記念事業基本方針1111 *記念事業実施	*委員会の設置							
平成8年度(1996)		記念事業基本構想	委員会組織(18名体制)	募金構想 (目標・約2億円)	資料館顕彰室整備支援 50年史・記念記録(写真集等)作成検討	モニュメントの寄贈・設置	記念講演会開催 記念ハイテイ実施			
平成9年度(1997)				★募金開始 第1回募金		スタンディンググラス制作依頼				
平成10年度(1998)		各事業構想の概定		募金目標修正 (約1億2千万円) 第2回募金協力依頼	顕彰室整備・卒業生コーナー・刻銘碑の寄贈 50年小史・記念アルバム等作成検討		平成14年に記念行事実施決定 記念講演会(講演録作成) 記念マーチの作成・寄贈 記念祝賀会(同窓会担当)	醜金者名簿の作成・保存 記念品贈呈決定		事業経費計画概成
平成11年度(1999)						彫刻像の検討開始				
平成12年度(2000)		記念事業計画の概成	委員会組織(25名体制)	募金目標達成 第3回募金協力依頼	記念ビデオ作成決定	彫刻像構想の策定 岡田事案	吹奏楽OB会 協力依頼			事業会計事務規則施行
平成13年度(2001)		記念事業実施計画	委員会組織再編(30名体制) 同窓会本部の記念事業組織編成		記念ビデオ作成計画 整備構想の具体化 顕彰室・資料館整備事業の延期(16年度)	平松礼・画伯に原画依頼 スタンディンググラス 除幕式 制作過程展示小計画 レブリカ寄贈受 ハンフレット・絵葉書作成要領 除幕式	記念講演会実施構想 記念マーチ作成構想	記念品決定	MCI提案書作成決定 MCI検討委員会設置 MCI検討委員会設置趣意書 研究委託	予算執行計画
平成14年度(2002)		行事等細部計画の作成		募金締め切り 期間延長	記念行事実施計画(具体化) ビデオ編集 ビデオ編集 最終審査	版画寄贈受 レブリカ寄贈受 除幕式	三浦朱門氏依頼 吹奏楽OB会 協力依頼	醜金者芳名録作成 CD作成 マーチ 審査会	同窓会への提案 1次・3次発送 記念品送付計画	経費見直し
平成15年度(2003)		記念事業の記録・整理		2回(計46回)	記録整理(簿冊)					会計決算 会計監査
【防大】 同窓会記念行事 (11/16)										
代議員会への最終報告										
委員会解散										

方において事業を検討しながら募金活動を見極めるまさに「イタチゴッコ」でしたが、平成十年末に募金目標を一億二千万円に確定してようやく事業規模と各事業構想の輪郭が決まりました。じつは、各事業構想を逐次に具体化しながら平成十二年末には事業計画として取り纏める段階にまで至りました。この間、募金活動も平成九年度及び平成十年度更には平成十二年度と大きくは三回、補足の募金活

動をいれますと合計五回の募金活動を実施したことになります。しかしながら、平成十二年八月頃から顕在化した一部会員による反対行動が、記念講堂に設置するスタンディンググラスの原画作成を早い段階からお願ひしておりました平山画伯を最終的に断念する事態にまで発展し、委員会が当初から計画してきた記念事業の柱がなくなり、委員会にとりまして唯一の大きな挫折となりました。

幸いなことに、新たに平松画伯というすばらしい方に巡り会い、そしてそれまでスタンディンググラスの制作準備に携わっていただいた方々の力強いご支援とご協力をえて、至短期間に当初計画の通りに記念講堂に設置できましたことには感慨無量なものがありません。

このように紆余曲折はありましたが、委員会は平成十三年春、事業計画に新たに一〇〇周年への植樹ともいえるMCI事業を提案することを加えて、更に記念行事の実施要綱を定めた「記念事業実施計画」を完成して、記念事業実行の準備が全て整ったのは平成十三年末でありました。

この過程の中で、平成十三年四月に、委員会も事業の計画段階から実行の段階

に入るとの認識のもとに委員会組織の再編を行い、また同窓会本部も記念事業実行組織を編成する運びとなり、同窓会本部と委員会との任務分担も明確になり、ご一体となって記念行事をはじめとする各事業をほぼ計画通りに実行してまいりました。

(五)記念事業は同窓会の鼎の軽重を問われず、大事業と認識してまいりましたので、全て委員会での審議を中心に推進してまいりました。この会議には、委員会メンバーの他に同窓会長をはじめ本部の主要役員及び防大からは総務課長と施設課長の参加をいただき、記念事業に関わる全ての事項をきめ細かく審議し決定すると共に必要な調整を実施しました。

委員会の開催も実に四十六回になりましたが、事業の実行段階の平成十三年度以降は、ほぼ一回／月のペースで委員会を開催しないと間に合わない状況で、委員会での審議も毎回四～五時間にも及びましたことを申し添えておきます。

又、防大当局と委員会及び同窓会本部が密接に連携して取り組んできたことも成功の重要な要因であります。

平成八年五月に最初の調整会議を防大で実施して以来、防大校長を交えた会議も十回にも及びました。更に、各担当の事務レベルにおいては交通費も自弁で小原台まで再三足を運んでいただきました。

(六)別表第一…記念事業委員会活動経過の概要

四、事業会計決算報告

(一)平成十五年六月二十日の代議員会で会計担当委員から事業会計決算の最終報告がなされ、監査結果報告とあわせ承認されました。各会員特に醸金者の皆様には、代議員会に報告しました事業会計決算報告書を更に要約して、「別表第二…記念事業決算報告」として掲載し、その概要を報告させていただきます。決算報告の細部内容資料は、MCI事業で新たに出来る同窓会ホームページに掲載しますのでご参照ください。

(二)記念事業委員会では、次のような基本的な考え方にもとづき、平成十二年七月二十七日に会計事務規則を制定し会計業務運営の準拠にすると共に、平成十三年七月十六日には事業会計細部実施要領を定めて厳正かつ正確な経費執行に努めました。

ア、事業会計は、平成七年十一月の委員会設立から記念事業終了までを一事業年度として整理することとし、支出を伴う記念事業開始以降においては毎年三月末に中間整理を行い、会計監査を受けると共に委員会に報告してその承認を受ける。

イ、事業ごとに会計職員を指定して契約担当と出納担当を区分すると共に金額により決裁権者を定める牽制組織として責任範囲を明確にする。

ウ、各事業担当は、経費執行前に事業計画に伴う予算案を作成して、委員会の承認を得て経費を執行する。
エ、醸金者の意思に因應するために企画、募

金及び使用に当たり厳正に会計を処理する。

別表第二 記念事業決算報告

五、事業会計残額の取り扱いに関する代議員会の決定事項

上記決算に基づく事業会計残額については醸金者の皆様からの貴重な浄財であることから、じごの取り扱いについても昨年六月二十日の代議員会で下記の委員会提案が承認されました。

(一)事業会計残額の取り扱い方
五十周年記念事業特別会計経費とし、別会計として処置する。

(二)記念事業特別会計経費総額と経費運用予算区分

ア、総額 四、一七四万円
イ、経費運用予算区分

①MCI事業(創設) 予算 一、五〇〇万円
②顕彰室・資料館整備予算(修正)

一、二五〇万円
・顕彰銘板 六五〇万円
・卒業生コーナー調度品 三〇〇万円
・十六年度慰霊祭行事支援 三〇〇万円
ウ、事業予備費 一、四二四万円

(三)事業予備費の運用について
下記の五十周年記念事業の基本理念に則った用途に当てることとし、三年以内を目的に同窓会で検討処置する。

《基本理念》

◎後世に残す価値あるもの

◎二十一世紀への飛躍の理念にそつもの

この際、記念事業の継続事業の完遂に必要な経費及びMCI事業が本来の趣旨である「国家・社会に対する情報発信」へと事業の発展を追求する場合は、優先して使用する。

六、同窓会本部へ申し送り事項

申し送り事項として同窓会本部に引き継いだ主要事項は、次のようなものです。

(一)MCI用パソコン・通信機器

平成十五年三月二十七日にMCI準備委員会に機器の引き継ぎ完了。

MCI準備委員会への責任転移時期…平成十五年三月三十一日 一七二〇〇

(二)継続事業

ア、顕彰室・卒業生コーナー整備事業

(ア)平成十五年二月二十七日、顕彰室の

整備に関する防大との調整会議を実施した結果、顕彰モニュメントの土台と「光の柱」及び遺品格納室は出来る限り防大の改修設計に取り込む

方向で検討していくことになり、同窓会は、刻銘板作成と取り付け費用の負担及び卒業生コーナーの調度品を寄贈することで合意した。じ

ごの予定は、平成十五年六月以降に予定される資料館改修の実施設計の段階で関係する業者選定と共に具体化されて、契約行為に入るようになる。又、顕彰室及び資料館卒業生コー

50周年記念事業決算報告

別表第2
平成15年4月21日現在
(単位：円)

番号	事業項目	事業細目	内 訳	予 算 額	支 払 実 績 額	記 事
事業会計総額				122,215,549		
1.	モニュメント			50,000,000	48,914,519	
		ステンドグラス		27,500,000	26,623,613	
		制作・設置		20,832,000	20,832,000	(株) デザインシステム
		原画制作		2,000,000	2,000,000	平松画伯材料費等
		謝金		3,000,000	3,000,000	平松画伯
		パンフレット		660,000	324,432	
		その他		1,008,000	467,181	除幕式関連経費、検査関連旅費等
		彫刻像		22,500,000	21,122,756	
		制作・設置		20,000,000	20,000,000	(株) 三越
		除幕式経費			200,000	
		パンフレット		660,000	324,431	
		その他		1,840,000	598,325	検査関連旅費等
		制作過程展示経費等			1,168,150	
2.	顕彰室・資料館・記録			27,000,000	6,986,336	
		顕彰室		18,000,000		★ 未執行
		卒業生コーナー		3,000,000		★ 未執行
		ブックレット		1,000,000	2,105,355	防大要望により増部
		記念ビデオ		5,000,000	4,880,981	
		記念ビデオ作製		4,385,000	4,093,950	(株) あだち
		謝礼		300,000	300,000	シナリオ作成者・協力者
		シナリオ作製			143,300	製作者旅費
		映像使用料			125,685	NHK
		ビデオ実費頒布			100,000	委託謝礼
		その他		315,000	118,046	
3.	記念行事等 (レセプション除く)			14,000,000	9,978,191	
		記念講演会		10,000,000	5,471,644	
		講演者関連		4,600,000	3,400,000	支部記念講演支援金含む
		記念行事		1,100,000	799,000	
		講演録作成		1,200,000	1,090,740	
		その他		3,100,000	181,904	
		記念マーチ		4,000,000	4,506,547	
		作曲謝礼金等		3,050,000	3,379,620	
		演奏経費			400,000	
		CD作成費用			288,802	
		マーチ楽譜			92,400	印刷経費
		その他		950,000	345,725	
4.	MCI構想			5,000,000	4,035,354	
		MCI構想モデル作成費			3,200,000	
		事務検討用パソコン一式			507,517	
		電話機・加入権・P/Cラック			93,082	
		その他			234,755	
5.	醸金者対応			9,500,000	10,559,818	
		醸金者芳名録		500,000	504,525	
		小記念品		9,000,000	10,055,293	
		記念ビデオ			3,701,250	
		記念絵葉書セット			751,800	
		配布輸送費等			5,602,243	
6.	予備経費			16,715,549		
所要経費総計				122,215,549	80,474,218	事業会計残高 41,741,331

ナーの整備事業の細部については、記録簿冊「各事業編」の顕彰室・資料館の会議等記録による。

(イ)代議員会で承認された顕彰室・資料館整備予算計画額 六五〇万円

①顕彰銘板 三五〇万円

②卒業生コーナー調度備品 三〇〇万円

③平成十六年度慰霊祭行事支援 三〇〇万円

予算総額 一、二五〇万円

イ、未発送記念品の送付事業

(ア)平成十五年六月二十日現在の記念品の未発送者数 六三名

未発送者リスト一覽表 別表第三

(イ)未発送記念品の保管場所

平成十五年六月以降、同窓会本部

(ウ)同窓会名簿の作成にあわせて各期生会の協力をえて、住所の確認できた

会員に対し逐次に同窓会本部から発送処置する。

ウ、記念ビデオ予備の取り扱い

同窓会保有の記念ビデオの予備八十六本は、同窓会本部で検討処置する。

(三)著作権についてのじごの取り扱い

ア、同窓会が保有する著作権

○ステンドグラス「若人の城」

○ステンドグラス原画

○彫刻像「国の護り」

○記念マーチ曲八曲と関係するマーチ楽譜九曲分(入賞曲含む)

○記念ビデオ

○MCI事業モデル(委託研究提案書)

イ、各著作権のじごの取り扱い

上記各著作権及びこれに関連する著作権

の問題は、個々のケースに応じてその都度同窓会で検討し処置する。

ウ、記念ビデオの実費頒布について

(ア)映像素材入手に際し、営利を目的とする有料販売は実施しない旨を資料提供先に申し入れて、資料の提供及び使用料減免等の協力或いは承諾を得ている。このため、記念ビデオの取り扱いは、引き続き非売品・実費頒布とし、頒布対象は同窓生、防大

学生・職員、防大勤務経験者及び協力者等とする。

(イ)じごの新規発注を伴う実費頒布は、次を窓口として行う。

①同窓生対象・同窓会本部

②学生等対象・防大学生課又は学生隊等(同窓会本部の了承のもと)

この際、関連する実務は、久保田博幸氏(学生委託売店、陸自OB)に依頼する。業務委託に伴う久保田氏に対する実費支払い、謝礼等は同窓会本部で定める。

(ウ)頒布単価は、納品単価、送料、久保田氏手数料等をもとに同窓会本部で定める。

(エ)複製プリントの作成には同窓会本部保管のマザーテープを使用する。(陸自三〇一映像写真中隊保有のもの

の借用も可能。)

(四)彫刻像等について委員会から防大に依頼している事項

彫刻像の防錆のため、半年に一回の水

洗いと十年に一度の手入れの実行

(実施要領に関する三越美術部長の書面)

(五)委員会活動の記録簿冊及び保存品目

約七年半に亘った記念事業委員会の活動内容を会員がいつでも閲覧できるようにすると共に将来の記念事業に資するため、全ての活動記録を纏めた次の記録簿冊と保存品目は、同窓会本部に永久保存する。

ア、記録簿冊(七簿冊)

①総括簿冊(一)

②全般簿冊(二)

③各事業簿冊(三)

④記念行事簿冊(四)「別冊」

⑤MCI事業簿冊(五)「別冊」

⑥記念事業会計決算書簿冊(六)「別冊」

イ、保存品目

①モニュメントパンフレット(一部)

②モニュメント絵葉書セット(一部)

③五十年史ブックレット(二部)

④記念ビデオマザーテープ一本と複製ビデオ一本

⑤ビデオ構成台本(一部)

⑥記念誌(記念講演録)(二部)

⑦記念マーチCD原本(一枚)

⑧各作曲者楽譜(九部)

⑨MCI事業提案書(一部)

⑩MCIモデル提案書(委託研究成果)(一部)

⑪醜金者芳名録(一部)

⑫醜金者名簿(各期別)一覽表(一部)

⑬記念写真集(一部)等

同窓会本部申し送り未送付者リスト

連番	期別	要員	氏名
40	41	陸	伏見嘉将
39	41	陸	小村昌孝
38	41	陸	木野陽子
37	40	空	吉田裕
36	39	陸	武藤憲史
35	38	陸	柳裕樹
34	37	空	佐藤直人
33	37	海	丸尾公貴
32	37	陸	古頭俊司
31	35	陸	野上香
30	35	海	山浦一成
29	32	陸	杉山明
28	32	陸	長江秀幸
27	32	海	松江雄介
26	31	陸	後藤龍一
25	31	陸	大島和樹
24	31	海	相原誠一郎
23	28	海	鶴見伸正
22	27	海	佐竹幸泰
21	27	海	有志英昭
20	26	空	和泉周剛
19	26	陸	熊田晃
18	25	陸	實松亮
17	25	海	平尾亮
16	21	海	瀬永亮
15	20	陸	松永辰士
14	20	陸	関野真理
13	20	海	都合研二
12	20	海	紺野真理
11	19	陸	黒木博士
10	18	空	青木勇夫
9	14	海	横田幸生
8	11	海	三戸守
7	9	空	谷脇武
6	8	陸	沖中浩一
5	7	空	田中時敏
4	6	空	虫本豊實
3	6	空	近藤豊實
2	4	陸	五嶋淳士
1	1	空	田中康夫

七、記念品未受領会員へのお知らせ

(一) 現役会員には、平成十五年二月月上旬に駐屯地別・基地別に一齐に発送して全てを完了しています。

一方、OB会員は、各期生会の協力をえて平成十五年三月までに第一次発送、ついで四月末までに一次発送返送品を含め新たに住所の確認出来た会員に対して逐次に第二次発送をしました。じごも引き続き聞き込み等により未発送者の住所の特定に努め、六月上旬にも第三次発送までしましたが、残念ながら平成十五年六月二十日現在、六三名の会員の所在が確出来ません。

別表第三に「未発送者リスト一覽表」として氏名(期別、要員含む)を掲載させて頂きました。

本人からの申し出はもとより知人として確認できる会員がございましたら、是非同窓会本部までご連絡いただければ幸甚に存じます。会員の皆様のご協力を切にお願い申し上げます。

(二) 別表第三…記念品未発送者リスト一覽表

八、記念事業に携わった委員会メンバーの紹介

(一) 約七年半に亘った記念事業委員会の組織編成の推移は別表第四の通りであります。

委員会は、発足当初約二〇名規模を目

標に立ち上げ事業構想の具体化に伴い逐年委員を増強し、そして平成十三年度以降事業の具体的実行のために更に組織を再編して最終的に三〇名体制で各事業を完遂しました。

この間、委員会にメンバーとして加わっていたいただいた会員は総計四二名(OB会員二五名と現役会員一七名)になります。現役委員は転属に伴い交代制になりましたが、OB委員も三名の方々が平成十三年の組織再編の際に交代いたしました。

しかしながら、佐久間委員長以下一〇名の委員は委員会発足当時から最後まで委員会の推進役として同窓会のこの歴史的な事業完遂のため、多大な労を担っていただいたこととなります。

最後に、委員会の委員として或いは委員会の協力者として真摯にご貢献いただいた方々の氏名を会員の皆様に紹介させて頂きたくと共、その積年の労に感謝申し上げます。

(二) 別表第四…記念事業委員会組織編成の推移

記念事業委員会組織編成の推移

記念事業の構想段階【平成8年9月頃】

【18名】

委員長		佐久間 一	#1海	OB
副委員長	資料館・記念行事担当	志方 俊之	#2陸	OB
	モニュメント・経理・募金担当	石塚 勲	#3空	OB
委員	事務局長	宇野 章二	#4陸	OB
	事務局補佐	長野 耕治	3陸佐	#26陸 陸幹校
	事業総括担当	久保 正佳	#3陸	OB
	モニュメント担当	桜澤 清志	#4海	OB
		石飛 勇次	陸将補	#10陸 陸幕装備部長
		渡辺 至之	1空佐	#20空 統幕5室
	資料館・記録担当	福地 建夫	#5海	OB
		小泉 進	#6空	OB
		永井 昌弘	2陸佐	#25陸 陸幕人計課
	記念行事担当	田中 厚彦	#4空	OB
		高橋 孝途	2海佐	#26海 海幕運用課
		笠井 秋彦	1空尉	#31空 空幕援護業務課
	経理・募金担当	馬野 猛彦	#4陸	OB
		渡辺 正	#5空	OB 小原台クラブ
斎藤 隆		海将補	#14海 海幹校副校長	

記念事業の計画段階【平成12年3月頃】

【25名】

委員長		佐久間 一	#1海 OB	協力者
副委員長	資料館・記念行事担当	志方俊之	#2陸 OB	
	モニュメント・経理・募金担当	石塚 勲	#3空 OB	
委員	事務局長	宇野章二	#4陸 OB	
	事務局補佐	田村 利	#7陸 OB	
	事業総括担当	久保正佳	#3陸 OB	
	モニュメント担当	桜澤清志	#4海 OB	
		石飛勇次 陸将	#10陸 富士学校長	
		渡辺至之 1空佐	#20空 統幕5室	
		竹永三英	#8陸 OB	
	資料館・記録担当	平山助成	#10海 OB	
		福地建夫	#5海 OB	
		小泉進	#6空 OB	桑原泰彦(#6) 久保田博幸氏
	記念行事担当	川口博司 2陸佐	#25陸 陸幕研究課	
		田中厚彦	#4空 OB	
		大塚海夫 2海佐 (南孝宣 2海佐)	#27海 (#29海) (海幹校)	平成12年7月以降
	募金担当	根本浩治 3空佐 (高橋秀雄 3空佐)	#31空 空幕運用課 #32空 空幕防衛課	平成12年8月以降
		馬野猛彦	#4陸 OB	
		渡辺正	#5空 OB 小原台クラブ	
会計担当	斎藤隆 海将補	#14海 海幕防衛部長		
	尾頭誠	#8空 OB		
会計監事	矢島寛三	#8海 OB		
	佐川明彦	#3空 OB		
	平賀源太郎	#7海 OB		
		大久保博一 陸将補	#15陸 陸幕監理部長	

記念事業の計画段階【平成13年8月以降】

【30名】

委員長		佐久間 一	#1海 OB	協力者
副委員長	資料館・記念行事担当	志方俊之	#2陸 OB	
	モニュメント・経理・募金担当	石塚 勲	#3空 OB	
委員	事務局長	田村 利	#7陸 OB	
	事務局補佐(兼務)	藤原利将	#9陸 OB	
	モニュメント担当 (制作展示含む)	桜澤清志	#4海 OB	
		竹下茂之	#10海 OB	
		村岡亮道	#11空 OB	
	絵葉書・パンフレット	竹永三英	#8陸 OB	
	記念行事・特集号担当	(渡辺至之 1空佐)	(#20空) (在米防衛駐在官)	
	記念講演会担当	藤原利将	#9陸 OB	
		石飛勇次	#10陸 OB	
		原充宏	#11陸 OB	
	記念マーチ担当	渡辺正	#5空 OB (小原台クラブ)	
	記念ビデオ担当	田中厚彦	#4空 OB	防大吹奏楽部 OB会
		松浦明裕 3空佐	#34空 空幕防衛課	
	MCI担当(兼務) (兼務)	小泉進	#6空 OB	桑原泰彦(#6) 久保田博幸氏
		志方俊之	#2陸 OB	
	顕彰室・資料館担当 ブックレット作成	田中厚彦	#4空 OB	
		福地建夫	#5海 OB	
	募金・献金者名簿担当	永井昌弘 1陸佐	#25陸 陸幕人計課	
	記念品担当	馬野猛彦	#4陸 OB	
		内村彰和	#11陸 OB	
会計担当	加藤雅巳 2海佐	#31海 海幕人計課		
	尾頭誠	#8空 OB		
会計監事	矢島寛三	#8海 OB		
	佐川明彦	#3空 OB		
現役代表	平賀源太郎	#7海 OB		
	瓦谷育夫 陸将補	#15陸 中央会計隊長		
各幕調整窓口	吉川榮治 海将補	#15海 統幕5室長		
		陸幕監理部長 海幕監理部長 空幕監理部長		

中期事業

「防大同窓会あり方検討委員会」 について(案)

一 「あり方検討委員会」設置の背景

防大同窓会は、昭和三十六年一月に発足して以来今日まで着実な発展を遂げ、現在会員数約二万名(退官者約八千名、現役約一万二千名)を擁し、四個地域支部、五個直轄地区支部及び二個海外支部で構成される大きな組織になり、会員相互の親睦活動、母校防衛大学校への物心両面にわたる支援活動及び会員の社会的活動の支援等を実施しております。

母校防衛大学校は、昨年(平成十四年)創立五十周年を迎えましたが、防大同窓会は「五十周年記念事業委員会」を設置して「五十周年記念事業」を実行し、母校の五十周年記念行事に全面的に協力し、多大な貢献をしました。

この半世紀の間に国内外情勢は大きく変化し、現職の同窓生が中核となって活躍する自衛隊の果たすべき任務・役割は、国際貢献活動など益々多様化しており、また自衛隊を退官・退職された多くの同窓会員が、実業界や言論・教育分野等をはじめ社会的なボランティア活動などでも大いに活躍しています。さらに防大同窓会は、約十年後には、会員数及び

会員の構成(退官会員と現役会員の比率)がほぼ一定になるものと見積られます。

防大同窓会の活動や事業のあり方については、これまでその時々同窓会の置かれた状況に即して検討された経緯があります。

例えば昭和五十五年頃には「同窓会館」設立の可能性等について論議され、昭和五十八年に「財団法人設立委員会」を設置して真剣に検討されましたが、収益事業の具体化が困難として平成五年に断念されました。同時に、同窓会の今後の事業のあり方について中長期的見地から検討する必要があるとして、同年末に「将来構想検討委員会」を発足させ、「同窓会のあるべき姿」や「同窓会の今後の運営のあり方」等について検討され、平成八年三月に同窓会の活動範囲及び事業、同窓会組織の検討・確立、同窓会財政の見直し等について答申されました。この答申を踏まえて、「事業推進委員会」を設けて事業の具体化が検討され、また「中期事業計画」(平成十年度～平成十四年度)を策定し、HCD(ホームカミングデー)のように実行に移された事業もあります。また、事業の具体化に関する検討が進んでいない項目も多く、将来の検討に委ねられているのが現状です。

本年(平成十五年)七月に、渡邊信利氏(六期・陸)が第十六代同窓会会長に

選出されて新執行部が発足したのを機会に、同窓会を取り巻く時代や環境の変化に対応し、また同窓会が直面している諸課題等を解決して、同窓会の長(中)期にわたる安定的活動を維持するために、プロジェクトチーム「防大同窓会あり方検討委員会」(以下「あり方検討委員会」という)を編成して、同窓会の組織、事業、財政基盤のあり方など全般について、これまでの検討成果を踏まえつつ、再度時間をかけて検討し、将来の同窓会運営の施策に反映させることになりました。

二 「あり方検討委員会」の概要

(一) 目的

「長・中期的視点から防大同窓会のあり方を検討し、同窓会運営施策の資を得る」ことにあります。

(二) 主要検討項目

○同窓会の目的及び活動の範囲・重点
○事業のあり方、特に事業設定・見直し(当面の事業及び約十年後以降の会員数ほぼ一定状態における事業のあり方等)

○組織のあり方、特に各支部・小原台事務局の地位・役割及び各期生会・各種OBの会(校友会・NGO等)等との関係

○財政基盤のあり方、特にプール金、適正な予算規模及び会費納入を含む基金の確保策等

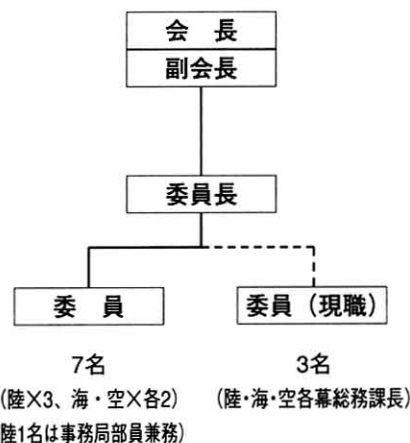
(三) 検討期間

平成十五年十二月～平成十七年三月

(四) 編成組織

会長直属の組織とし、会長を補佐す

るべく担当副会長一名を指名、当面委員長以下十一名の委員(現職委員を含み、委員の一名は事務局部員を兼務)で編成します。



(五) 検討要領

○委員が中心になって叩き台となる「素案」を作成、必要に応じて現職委員を含め検討又は意見聴取し、「素案」に反映します。また「素案」を作成した段階で、理事会等に中間報告します。

○「素案」に関して、各期生会や各支部等に対してアンケート調査等を実施し、また状況により専門家等の意見を聴取し、幅広く会員等の意見を集約します。

○アンケート調査及び意見聴取の結果を踏まえて「成案」を作成し、代議員会等に提出します。

(六) 検討時程

平成十七年三月末を目途に「成案」を得るべく実施、また出来れば十七年度事業等に反映すべく十六年秋頃までに検討案等の提供を実施します。

職務	氏名	期別等	備考
副会長	藤縄 祐爾	8期・陸	
委員長	村田雄二郎	10期・陸	事務局部員兼務
	洗 堯	11期・陸	
	藤本 四郎	12期・陸	
	山根 峯治	14期・陸	
	経田 勇	12期・海	
	木村 誠一	14期・海	
	佐々木 勇	12期・空	
	松井 健	15期・空	
	宮崎 泰樹	22期・陸	
	大谷 祥治	21期・海	
委員(現職)	宮脇 俊幸	20期・空	陸幕監理部総務課長
委員(現職)			海幕監理部総務課長
委員(現職)			空幕総務部総務課長

委員等名簿(敬称略・順不同)

年	15		16			17	
	12	12~2	3~10	9~10	11~12	1~2	3
月							
実施項目等	委員会設置	現況把握等	検討・素案作成	中間報告	意見聴取	再検討	成案作成・提出

MCI事業の平成十五年度の 実施状況について

新聞小原台原稿担当…十三期 空 新治

MCI事業について、不案内な会員もおられると思うが、紙面が限られているので、昨年度の小原台などを読んで頂くとして、事業構想の概要について述べた後に十五年度の実施状況を中心に述べる。

一 MCI事業の構想

(一) MCI事業の趣旨

わが国の国家運営では、何か物事を決めるに際して、政治・経済・外交・安全保障(以下、本文では軍事と表現する)の四本柱のうち、軍事的視点が抜けていることが多い。これには幾つかの原因があるが、その一つは、軍事に関する知識や体験が整理総合されていないため、軍事的視点からの考察をすることが難しいことである。

政治、経済、外交についての政策判断や学術研究をする際に、参考にできる「軍事的識見が整理総合されているセンター」が無いために、どうしても軍事的な視点が疎かになるのである。現在、意ある者が中心となって運営している軍事・防衛の課題を中心にした研究所も幾つかあつて心強い限りであるが、それぞれが研究の基礎となる識見を整理総合する段階で時間と労力を必要とすることから、研究そのものに

充当する時間や労力が不足する共通の問題に直面している。もし、このようなセンターが設立されれば、これらの各研究所も資料を効率的に整えることが可能となり、一挙に研究効率を上げることが可能となる。他方、現在の政治・外交・経済界では、それを良いことに、意識的に軍事的な思考を排除する傾向さえある。反対に、これに気がついている政治家、財界人、外交官は多いのだが、自分の力で軍事・防衛に関する識見を整理統合する余裕がないのが現状である。

ここに提案する「MCI(Military Cyber Institute)構想」は、このようになわが国の現状を改善するために、防大同窓生の力を結集して国家・社会のための活動を展開しようとするものである。名称については未だ仮称であつて、同窓会が本構想を実行に移す場合には、さらに一般に理解し易い名前(例えば、防衛情報機構、DIO)等に変えるべきものであるが、ここでは便宜上「MCI」と呼ぶことにする。

(二) MCI事業の活動(内容区分)

MCI事業の活動は、内容によって二つに区分する。すなわち、同窓会員自身のために行うサービスである「自主活動」と、他の組織や個人から委託された活動を有料で行うサービスである「受託活動」である。任意団体である同窓会が、同窓会員のため「自主活動」を行うことは当然であるが、運転資金を確保するため有料で行う「受託活動」は原則として不可能である。し

たがって、当初は「自主活動」を行い、その実績を見て同窓会が「何らかの組織」を作る段階においては、その組織の性格によっては「受託活動」が可能となる。それぞれの活動の内容については、(一)自主活動としては、情報システムの構築、ホームページサービス、同窓会名簿閲覧サービス、掲示板サービス、軍事的知見保有者の紹介、軍事関連情報及び資料の紹介、パネルディスカッション、講演会の開催、ボランティア活動支援などである。また、(二)受託活動としては、軍事専門家の派遣、軍事関連情報及び資料の紹介、スピード突貫翻訳、防衛関連資料の電子化、管理者或いは子供教育、徳操教育など教育、軍事関連資料の収集、軍事関連資料の作成等防衛諸活動支援等である。

(三) 活動の段階的区分(フェーズ)

MCI構想は、本来、中・長期的なものであるから、「小さく産んで、大きく育てる」を原則とし、活動は次のような五つのフェーズ●フェーズ1(防大ホームページ開設段階)、●フェーズ2(情報システム構築段階)、●フェーズ3(タスク・フォース編成段階)、●フェーズ4(デモンストラトリーション段階)、フェーズ5(新組織発足段階)の五つのフェーズに区分して段階的に充実し発展させる。(以下略)

二 平成十五年度実施成果及び検討の状況

(一) 実施成果

以上のような事業構想の基で、平成十五年六月に実施された臨時代議員会における決定事項に基づき実施したMCI事業の成果概要は次のとおり

① MCI委員会の拡充と委員会における各種事業等に関する検討

○開催の状況

十五年度臨時代議員会以降、武田同窓会副会長及び新井同窓会本部事務局長の陪席の下、第一回を七月十七日に、第二回を九月一日に、第三回を九月二十九日に、第四回を十月十日に、第五回を十一月五日に、第六回を十一月十八日に実施した。

○委員会の拡充と構成等

委員長…久保田和弘氏(陸…五期)
委員…小林 一雅氏(空…八期)
委員…西野 重信氏(空…八期)
委員…荻野 正憲氏(海…九期)
委員…井本 尚英氏(陸…九期)
委員…若木 利博氏(陸…十期)
委員…牧田 正紀氏(海…十三期)
委員…新治 毅氏(空…十三期)

*なお、第二回準備委員会において、久保田委員長が健康等の理由による辞任が表明され、それに伴い西野委員も辞任を表明された。このため、第三回準備委員会以降は、同窓会本部事務局長の要請により、小林委員が委員長代理として準備委員会を総括している。

○主要検討事項

ア、同窓会システムの構成、設置場所、プロバイダーとの契約内容等
イ、同窓会システムの運営組織、運営要員、運営要領
ウ、同窓会ホームページの内容、運営要領
エ、小原台賞、貢献志願者等登録、同窓会名簿の閲覧

② 同窓会システムの整備

○平成十六年一月末までに、平成十六年一月末までに同窓会端末と五十年記念事業委員会から移管されたMCI端末をADSL(NTT東日本)によりプロバイダー(Nifty)と接続するために必要な措置を推進中

○個人名のプロバイダー契約を法人名義契約へ変更するための諸準備を推進中

○同窓会本部事務局施設内にMCI関連設備を設置するための所要の準備を推進中

○同窓会システム構成の概要は、別紙第一のとおり

③ 防衛大学校同窓会ホームページの開設

○防衛大学ホームページの一部として存在していた同窓会ホームページを十月二十九日、同窓会本部のパソコンに移設を完了

○ホームページの段階的充実に伴い、所要に応じ、ドメインの借用及びこれに伴うサービスの提供等に関するプロバイダーとの契約を準備中

○各期生会及び防衛関係のホームページとのリンクを行えるよう所要の調整を推進中

○同窓会ホームページ上に、十六年度以降の事業として、貢献者登録及び防衛能力者の登録に関する計画があることを掲載し、同窓生に周知するための準備を推進中

④ 同窓会システムの運営組織

○運営責任者として同窓会本部事務局長が妥当

○平成十六年一月に予定する同窓会システムの試験運用開始時までに、MCI担当責任者一名(未指定)、同窓会ホームページ構築および維持担当一名(指定済み)を有償による確保するための諸準備を推進中

(二) 検討の状況

① 同窓会システムについて

○同窓会システム

当初、既存資産の有効活用の観点から、同窓会端末と五十年記念事業委員会から移管されたMCI端末をADSL(NTT東日本)によりプロバイダー(Nifty)と接続する形態に留め、爾後、各種事業の拡充に伴いドメインの借用を行う等のシステム規模の拡大を考慮すべきとの考え方をベースに検討を行っている。なお、同窓会システムの検討にあたってはセキュリティを重視して推進している。

○同窓会システムの運営組織

ア、同窓会システムの運営責任者は、

同窓会との関係を重視し、平成十七年度末までは、同窓会本部事務局長とするのが妥当と判断し、事務局長の下に所要の要員を所要に応じ確保する方向で検討している。

イ、平成十七年度末までの間は、MCI担当責任者一名(未指定)、同窓会ホームページ構築および維持担当一名(指定済み)に加えて、同窓会システムによるMCI事業の拡充に伴い、さらに同窓生名簿の閲覧担当一名、貢献志願者および防衛能力者の登録担当一名を有償により確保する方向で検討している。

ウ、運営要員の選定は、期生会からの推薦を重視し、同窓会本部事務局長が指定するのが望ましいと考えている。

エ、平成十八年度以降の運営責任者は、検討中の中間法人が設置された場合、当該法人の理事長とし、運営要員は理事長が指定するのが得策であるとの方向で検討している。

○同窓会システムの運営要領

ア、平成十七年度末までの間、保管情報等の拡充に伴い、所要に応じ、専用ドメインの借用、アクセス権の設定、パスワードの管理、セキュリティの確保等に必要な契約をプロバイダーと締結する方向で検討している。

イ、平成十七年度末までの間、平日のみMCI関連設備に要員を配置する方向で検討している。

ウ、平成十八年度以降は、検討中の中間法人が設置された場合は、当該法人に同窓会システムの運営を委託する方向で検討している。

② 同窓会ホームページについて

○同窓会ホームページの内容

既存の同窓会ホームページの内容を段階的に拡充するとともに常に最新の状態にアップデートすることを基本に、ホームページの目的、範囲、更新頻度、倫理基準等について検討を継続している。

○ホームページの運営要領

ア、当面、コンテンツの取材及び編集の責任者は同窓会システム運営責任者が兼務する方向で検討している。

イ、主として同窓生から送られる電子メール等への対応については、MCI関係者の判断能力を拡充する方向で検討している。

③ 「小原台費」について

○安全保障に関する世論啓蒙のため論文等を広く公募して優秀者を顕彰する事業について検討したが、以下の理由でその実施は時期尚早との結論に達した。

ア、議論の場の未成熟

情報発信母体となるホーム・ページが緒についたばかりで、安全保障問題を議論する場が未だ立ち上がっていないので、当初はそれを整備して質の高い議論の場をまず育成する必要がある。

イ、担当者確保の困難

論文公募のためには、安全保障に関する専門的ポテンシャルを有する人材が上記フォーラムの座長として長期、安定的に確保される必要がある。

ウ、資金的制約

他の学会や研究組織のようなスポンサーがないので、MCIが利潤を出すようになるまで長期継続的資金のメドがなく、本事業に使える資金は限られる。

○したがって、この事業は、MCI事業にはなじまないものであり、同窓会本来の事業にするべきであると考えている。

④ 受託事業に必要な「何らかの組織」について

○監督官庁が不要なこと、構成員に対する規制が可能なこと、会計法上の法人であること、同窓会長に責任が及ばない完結した組織であること、

の理由により、現時点では同窓生による中間法人とすることが望ましいとの考え方を基本に検討を推進中である。

○同窓会が三百万円の基金を中間法人に提供し、受託事業及び同窓会システムの維持・運営を委託する方向が望ましいと判断しており、中間法人の設立要領及び組織の規模、運営要領などについて引き続き検討する。

○中間法人の理事長については、各期生会が推薦する者の中から同窓会長が承認する適任者を選定し、中間法

人の構成員は理事長が選定するとの考え方を基本に検討中である。

○中間法人の定款及び構成員の報酬については、代議員会の承認を得るものとし、中間法人の経営が行き詰まった場合は、その状況を代議員会へ報告し、解散の承認を得るものとす

⑤ 貢献志願者及び防衛能力者の登録について

○登録システムの開発に関しては、今後の「事業の在り方」によって、当該システムの運用（利用）形態が、ア、利用のための管理・仲介組織を設ける形態、イ、利用者が直接データベースにアクセスし当該登録者に直接交渉する形態、ウ、情報（データベースの作成）にとどめ災害発生時等の所要に備える形態、等々が考えられる。従って、これらによりシステムの基本となる要素が左右されることから、引き続きMCI事業の進展に合わせて検討を行う。

○十六年度及び十七年度、MCI管理運営組織において、運用（利用）形態及び登録項目を検討・決定するとともにシステム等を開発・運用する方向で検討中である。

○登録は、ホームページ等で同窓生に登録を要請し、該当者が同窓会システムに登録する方法を検討中である。

⑥ 同窓会名簿の閲覧について

同窓会名簿に係わる業務は、基本的には同窓会本部事務局の業務であることを確認し、MCIは状況によりメールで

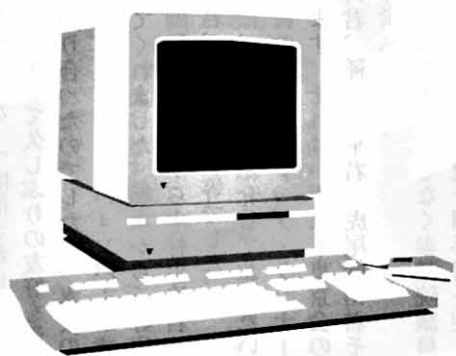
の仲介等を行うものの、セキュリティ及びプライバシー重視の観点から、当面、自動閲覧は行わないことを基本として検討中である。

三 来年度の実施予定事業

平成十六年度は、ホームページの管理運用組織の構築及び運用をすると共に、情報システムの構築及び運用などを実施する。

なお、当面立上げている同窓会のホームページのアドレスは次ぎのとおりであるので、利用されたい。

<http://homepage3.nifty.com/mci-todaidosokai/>



期生会だより

Kiseikai
Dayori #11

4期生会

◆理事—加藤 哲朗

総会及び役員のお知らせ

一 平成十五年第四期生会総会及び懇親会を次により開催致しますので、万障繰り合わせの上多数御出席いただきますようお願い申し上げます。

日 時 平成十六年二月六日(金)

一三:三〇〜一五:三〇

受付開始 一三:一一〇

場所 グランドヒル市ヶ谷 三F

瑠璃の間

会費 紳士 七〇〇〇円
淑女 三〇〇〇円

当日受付で申し受けます。
なお出席希望調査は別途実施しますが当日の急な出席も受付致します。

・その他
今回は近畿圏及び東北圏の一部からも日帰り出席が可能な時間設定にしました。年一回の会合に遠来の同期生諸氏の御出席を期待します。

二 平成十五年第四期生会本部役員
(平成十五年九月一日現在)

平成十五年度本部役員は次のとおりです。よろしくお願い致します。

会長 横 地 貞
自宅電話番号 〇四七四一六二一七五九九

理事(陸) 加藤 哲朗
自宅電話番号 〇四一七一三一八四五五

理事(海) 向井 朗
自宅電話番号 〇四六八―三五―二八六九

理事(空) 児玉 節 正
自宅電話番号 〇四二一九六三―四五七三

総務(陸) 山中 欣也
自宅電話番号 〇四五―三七―〇二九七

総務(海) 白川 稔
自宅電話番号 〇四四―七二―三三三三

総務(空) 上川 高 昌
自宅電話番号 〇四八―九五―一八〇四〇

会計(陸) 杉原 佐
自宅電話番号 〇四七―四三―〇五三三二

会計(空) 稗田 馨
自宅電話番号 〇三一三九六―九三三〇

会計監査(陸) 関根 晟
自宅電話番号 〇四八―七九四―〇九四二

会計監査(海) 野口 章
自宅電話番号 〇四七一―三九―三二二〇

7期生会

◆北斗会東部支部支部長
石田 潔

栗名月

北斗会東部支部の近況

北斗会東部支部は関東各県の会員を四個会で総括しています。各会の会員数は東京会(新潟、群馬、栃木を含む)、支部長・藤田遵二君 六十三名、神奈川会(静

岡東部を含む、会長・出水克明君)八十五名、埼玉会(会長・村木裕世君)五十四名、千葉会(茨城を含む、会長・吉岡誠君)九十一名です。

支部の近況報告は、まず月一回の「一水会」からです。防衛庁の真ん前の割烹「四季」で毎月第一水曜日に開催しています。現役時代からの伝統ある昼食会です。出席者は事前にメールで吉岡誠君に連絡する仕組みです。このところ北斗会同期生が第二の定年になり、東京勤務者が減ってきましたので、出席者数が徐々に少なくなってきました。それでも二十名内外が集まっています。また、メンバーが固定化してないのがよいところです。継続は力です。これからも粘り強く続けてまいります。

この一水会に新しい動きがあります。昼食会の後のクラブ活動です。まず、「囲碁クラブ」は萩原嘉明君、松浦孝昇君等が市ヶ谷会館のOB談話室で対局しています。その効あつて同窓会の囲碁大会では、松井宏、速水誠一、伊東伊佐雄、石寄孝男、高瀬正典、石橋揚夫の各君を含めた北斗会が準優勝の成果を納めました。

もう一つは俳句クラブ、「一水句会」です。土井義彦、高山清、深見重満、石橋稜、山縣秀雄、今井均、石田潔の面々です。ほとんどみんな句会は初体験です。各人五句づつ投句し、作者不明のプリントで互選するやり方です。季語がなかったり重なったりの大騒ぎですが、句評だけはみんな一言居士です。でなかなか厳しいものがあります。ここで自信をつけて、地元の句会等に入会するのもひとつの目標です。

次に、近況報告には年に一度の定例総

会を外せません。総会の担当は各会の回り持ちです。平成十五年度は東京会の担当で、七月四日グランドヒル市ヶ谷で藤田会長が中心になって開催されました。九十余名が参加して久しぶりの友好を深め、近況を語り合ったのでした。一水会の集まり等には出席できないメンバーが遠くから来てくれました。栃木から三好康弘君、静岡御殿場地区から中村忠治君、松本大作君、山口克弘君等でした。

さらに、この際ご紹介しておきたい当支部会員の同窓会のトップ・ランナーが四人います。それはいずれも東京会の尾辻秀久君、種村良平君、虎尾幹司君そして三好康弘君です。

尾辻君は申すまでもなく参議院議員です。当選三回、議員歴十四年目を迎えています。第一次小泉内閣の財務副長官として、名物大臣塩爺さんを支えて大活躍でした。第二次内閣では大臣の有力候補として名が挙がりました。現職は参議院政策審議会会長代理、自民党政調審議会副会長です。TV放映された、前国会での予算委員会の質問は圧巻でした。

種村君は懶コアの取締役社長です。そのコアが平成十五年三月東証二部に上場しました。現在の株価は上場時の三倍強の一六〇〇円をつけています。それを祝う同期生会が十月十七日、明治記念館で開かれ盛会でした。次は東証一部に上場するとの決意表明もあり、その澁刺とした勇姿が喝采を受けました。

虎尾君は小説家です。現在は教育関係の仕事をしつつ二足の草鞋をはいていますが、この度「夢追いて 卑弥呼」(東洋出版社 二二〇〇円)を出版しました。初版から六ヶ国の書店で同時発売になりました。紀伊国屋書店では店のテロップに

も取り上げられています。少女時代の卑
呼のロマンに思わず引き込まれてしま
います。大河小説の初刊です。

小説家としては三好君が先行していま
す。二年前に「虹の橋」(新風社 一〇〇
〇円)でデビューしています。今年十月
には次作が出版されました。「怨念の花」
(新風社二六〇〇円)です。いずれも歴史
小説で、前作は南北朝時代を、新作は室
町時代の日野富子を描いています。是非、
書店で手にしてみてください。

最後に小説家に負けずに一句。一ヶ月
遅れの名月は「後の月」と呼ばれ、収穫
の時を迎えますので、「栗名月」、「芋名月」
の別名があります。北斗会のみんながい
つまでも元氣である事を願って。

栗名月遅れて来たる罰も酒
久闊を叙すにいつものにこり酒

◆北斗会九州支部長

伊藤 宏美

北斗会九州支部の現況

九州支部には、沖繩在住の藤井君を含
めて現在五十八名の会員が在籍していま
すが、近年東京地区等での二回目の定年
を迎えて故郷九州へ帰る人がいて未だに
増加傾向にあります。

支部の活動としては、毎年七月の第一
土曜日に実施する総会(懇親会)におい
て近況を語り合い、お互いの健康を確認
している程度ですが、これには毎年二十
数名が参加し、逐年参加者が固定化され
つつあります。この他に、有志によるゴ
ルフコンペを毎月実施していますが、十
数名で腕を競っています。

会員の中には、公職に就いている者(町
長・矢野君(二期目)、市議・後藤君(二期

目)、この不況下、自営で頑張っている者
(鬼丸・富本・西田・松山君)、趣味を活かし
て工房を開いた宮本大気君や皆さん御存
知の鹿児島県知覧町の「特攻平和会館」で
語り部をしている川床君等多士済々です
が、大半は、定年後の第二ラウンドの最終
コーナーを頑張っている者、第二の定年を
迎えて悠々自適(?)の日々を過ごしてい
る者がほぼ半々という状況です。

北斗会(七期生会)からの連絡

北斗会では九月に同期生名簿「北斗」を
配布しました。これは、多くの同期生が
第二の人生たるお勤めも終わりに近く、そ
れぞれの落ち着き場所もほぼ決まったこ
の時期に住所録を作ろうと、大越会長の
発案で作成しました。住所のわからない
同期生もありますが、お許しを頂きたい
と思います。当然ながらその同期生には
「北斗」を送付していません。同期生会本
部で若干の予備を持っていますので、住
所不明の同期生の消息が判明した時には
本部へご連絡下さい。なお、名簿「北斗」
中、松本十四雄君の住所の末尾が三三一
となつていますが三二一ですので訂正し
て下さい。

13期生会

◆鈴木 秀典

防衛大学校創立五十周年記念
第十三期生会総会・祝賀会(大懇親会)の開催について
【実施報告】

昨年の本誌「小原台だより(Vol.10)」
に、海の川村君が準備状況を紹介しまし
たように、平成十五年二月二十二日(土)
一六・三〇からグラントヒル市ヶ谷二階

「白樺の間」において、「防衛大学校創立
五十周年記念・防衛大学校第十三期生会
総会・祝賀会(大懇親会)」の看板のも
と久しぶりに陸・海・空合同同期生会を
開催致しました。

本会開催の芽は、十三期生会会長・牧
本君を中心に陸の関君と菅原君、海の川
村君、空の中島君と山崎君たちが中心に
なつて名簿整理等の準備作業の形で早く
から育まれてきました。

私は、川村君が東京を離れることとな
ったことに伴い、平成十四年十月から準
備委員の一員に加わりました。そして、
平成十四年十二月一日には、準備委員全
員による苦勞の賜である名簿を基に案内
状の発送に漕ぎ着けました。

名簿作りと並行して四回の準備委員会
も開かれました。平成十四年中に二回、
平成十五年になつてからは一月二十一日
と、二月十四日には最終回が開催されま
したが、毎回仕事帰りの一八・三〇にグ
ラントヒル市ヶ谷の隣の「安具楽」に集合、
大ジョッキ片手に総会の議題、陸海空準備
委員の増員、進行要領から料理、看板、名
札に至るまで、あれこれ意見を出し合い、
各々の進捗状況を確認しつつ進められま
した。委員会の合間にも委員相互の連絡
は極めて頻繁に行われ電子メールの有用
性と有難さを心底痛感したものです。

参加、不参加の返信期限は二月三日で
したが、二月二十日の時点で、夫人を含
めて参加人数が一八四名になることを確
認し、この数字を基に、一月以来会計係
として加わつた海の濱田君が、グラント
ヒル市ヶ谷との最終的打ち合わせを行
いました。

そして、いよいよ「総会・大懇親会」
当日、わくわくする気持ちで一五・三〇

に会場に馳せ参じたところ、会場の「白
樺の間」の入口には、先着の準備委員が
既に長机を並べ配布資料や名札等々を準
備し、一部受付を始めていました。

そうこうするうちに徐々に参加者が到
着しだし、「いよいよ、久しぶり。」の声
がそこそこ交わされるようになりまし
た。紅顔の美青年だった面々も、それぞ
れの年輪を窺わせる変化は隠しようもあ
りません。すぐに誰と分かる顔、卒業ア
ルバムの顔を思い浮かべては一生涯懸命
い出そうと努力を要する顔、比較的頻繁
に会っている顔、卒業以来久々に再会す
る顔、顔、顔。開会を前にして徐々に雰
囲気が高揚してくるのを感じました。

一六・三〇定時、防大同窓会等々で多
くの場数を踏んだ中島君の名司会によ
り、牧本会長挨拶の後、牧本会長を議長
に選出して総会が開催され、会則の改定
等必要な議決を手際よく行い、直ちに
「大懇親会」に移行しました。

懇親会は、副会長の陸・山下君の代
理・菅君と、同じく副会長の空・内山君
の代理・津曲君からの挨拶に次いで、遠
方からの参加者を代表して空の盛田君が
乾杯の音頭を執るやいなや全員が一瞬の
うちに学生時代にタイムスリップしました。

ところで御夫人たちですが、我々が学
生だった当時は、ほとんどが全く無関係
の方々だった訳で、その後各々が赤い糸
に導かれて夫々の伴侶となつたハズなの
に、まるで我々と同様にずーっと昔から
同期生同志であったかのように打ち解け
合つて話に華を咲かせていました。こう
いう情景を見るにつけ、クラス会の素晴
らしさを噛み締めておりました。

会が進むにつれて、また、美酒に酔う
ほどに、あちこちに輪ができては別の輪

に波紋を広げ、卒業後の時間の経過などまるでなかったかのよう会場全体が話し声と笑い声に溢れました。途中、陸・呑田君、海・川村君、空・金木君からの近況報告の時間も用意されていました。その登板の機会が持てなかったほど、懇親会は盛り上がりました。

約一八〇名総員と一緒に記念写真に納まることは無理ということで、防大当時の班ごとに写真に納まることになり、みんなしっかりと参加の証拠を記録に留めていました。

一九〇〇過ぎには、みんなで会場いっぱい輪を作って逍遙歌を声高らかに歌い、北大教授・島津君の挨拶を最後に「大懇親会」の幕を閉じました。



▲逍遙歌大合唱

最終的な参加人数は、その内訳を「夫妻で参加（組）十単身参加（名）参加人数（名）」で表せば、

陸・十四組五十一名 七十九名、

海・十八組十名 四十六名、

空・十四組二十四名 五十二名、

合計四十六組八十五名 一七七名でした。

これは、十三期生会員総数四六八名中一三一一名（二十八パーセント）が参加してくれた訳で、日本各地から馳せ参じてくれた同期の諸君に、準備委員の一人として心から御礼を申し上げます。



「…料理が足りないよとの批判を心配してチヨット多めに奮発したけど、結構みんな酒を追加注文していたね。奥方もそれほど食わずに良く飲んだね。」とは、我々準備委員から出た感想です。

今回のクラス会に参加できなかった全国の同期生の皆さん、皆さんの中には酒の肴にされて話題を提供していた方も相当数いましたよ。本人の知らない間に極悪非道の輩にされてしまった貴君、艶話の主人公にされた貴君、誠にお気の毒。

これを防ぐ方法は只一つ、懇親会等には万難を排してプレゼンスを發揮し、我が身に関する誤った情報が流布されないよう心がけるしかありません。まさに「ブーツ オン ザ フロワー」です。

全国各地で御活躍中の同期の皆さん、次回には再会できることを祈りつつ、ここに、「防衛大学第十三期生会総会・

祝賀会（大懇親会）」の実施報告をさせていただきます。

最後に、準備委員は次の面々でした。

準備委員長 海・牧本信近

実行委員長 空・中島正雄

同副委員長 陸・関 芳雄

海・川村成之

会計係 海・濱田良昭

陸上委員 菅原 純

海上委員 寺口 聡 吉村研二

航空委員 鈴木秀典

山崎俊樹 宇都宮靖

次回の懇親会について

とここで、追伸です。

実は、前述の「大懇親会」終了直後から、「この余勢をかって、来年も十三期生会をやるよ。」という声・声・声があり、前述の準備委員で検討した結果、来る平成十六年二月二十一日（土）一一・三〇から（遠方からの参加者に配慮）、場所も同じグラントヒル市ヶ谷で「防大第十三期生会（懇親会）」を開催する予定です。

前回出席できなかった同期の皆さんも、今度は機会を作つて是非出席してください。何度も言うようですが「ブーツ オン ザ フロワー」です。元気な顔を見せてください。

それでは、再会を楽しみにしています。

17期生会

◆記念行事総務担当

菊池 悦男

卒業三十周年記念行事を終えて

十七期生会は、平成十五年四月、卒業三十周年記念行事を行い、同期生の絆を

深めるとともに、新たな旅立ちを祝いました。

記念行事は、来賓として、曲元防大幹事をお招きして、グラントヒル市ヶ谷において、会員、夫人合わせ約二五〇名が参加して大変な盛り上がりを見せた記念パーティーとパーティーに前後して行われた期生会ホームページの開設、記念CDの配布、母校見学ツアー及び記念植樹、そして最後は記念ゴルフコンペで締めくくり、忘れぬ思い出を刻むことができました。

そこで今回は先輩期も同様な記念行事をされていますので、行事の内容の紹介は止めにして、行事の準備の裏話を少し紹介したいと思います。

裏話その一

記念ゴルフコンペはパーティーの一週間前に実施予定でしたが、実際は約三ヶ月遅れの七月実施となりました。事の顛末はこうでした。

努力の甲斐あって、安くて集まりやすい某ゴルフ場と交渉成立し、開催日が近づいた頃、イベント担当がクラブハウスに電話をしましたが、何回かけても連絡が取れない状況となりました。やっとなおもいで得た情報は「当ゴルフ場は都合によりしばらくの間休業します。」旨の張り紙があるとのこと。また関連情報として、経営が悪化していたらしいこと、オープンの見込みはないこと等が得られた。「すわ！倒産！」「いや、倒産ではないが営業しないさうだ。」「やっばりなー、どおりで安いはずだ。」。かくして三ヵ月後、良好な経営状態にある？別のゴルフ場で楽しく記念ゴルフコンペが実施されイベント担当もほっと胸をなでおろしました。

裏話その二

パーティーに先立つ総会で期生会の会則を今後の活動に適合するように改正するのが各期とも慣わしのようにですが、十七期生会も新会則を制定しました。改正案審議のための役員会を開いた時のコマです。

「えー、今後活動するための期生会費が少なくなっておりまして弔事の場合、試算しますと、会員五〇〇名中、約二〇〇名までしか生花を供し得ない」、「おいおい、早い者勝ちということか？（一同絶句！）」、地獄の沙汰も金次第ではないが、結局、全員平等になる一番安価な弔電となった次第です。

裏話その三
やはり準備段階で一番活躍したのはeメールでした。これまでの電話や印刷物での調整に変わり、メールを多用したお蔭で、随分事務方は楽になり、IT様々だったのですが、思わぬ落とし穴？がありました。

当時十七期生は後輩期から、「十七期生公害？」と嫉まれるほど陸、海、空各幕等に部長クラスが補職されており、もちろん同期生として一致団結して行事の準備に当たったのですが、お偉い方ほど川柳にある、「eメール、メール届いたかと電話をし」の様相を呈したのです。着信メールに返信する暇もないほどの激務だったからと察しますが、まさかIT時代にeメールが嫌いな同期生はいないと信じておりません。

まだまだ裏話は尽きぬところですが、紙面独占は十七期生会の評判を落とすだけですのでこれまでとしますが、市ヶ谷勤務者を中心に諸準備に万全を期した甲斐あり、本番では各行事とも大いに盛り

上がりを見せ、盛大な三十周年記念行事となりました。



▲全員で歌う 逍遙歌

27期生会

◆会長—小林

茂

二十七年期生会は平成十五年二月、「防大卒業二十周年記念同期生会」を、グラウンドヒル市ヶ谷において実施しました。

陸・海・空全体としての同期生会は十年振りというところで、北は北海道、南は九州、更には米国から陸上自衛官六十七名、海上自衛官十七名、航空自衛官三十三名の現職と、今は民間企業等で活躍しているOB二十九名の合計一四六名の参加を得ての開催となりました。また、来賓として当時の指導官六名の方にも出席頂いて非常に盛会となりました。

我々、二十七年期生会も一九八三年三月の卒業以来、早二十年を経過して不惑の年を迎えております。この間、相貌もそれなりになって実際にはかなりの変貌を遂げている者も少なくありません。しかしながら、久しぶりに会うと必ずと言っていいほど「全然、変わらないな」の一

言から始まります。年はとっても懐かしいそれぞれの持つ雰囲気は変わらず、そのことが変わらないという印象を与えているのかもしれない。

会は、実行委員長の尾島君（海）の挨拶に始まり、当時期担当大隊指導官をされていた中村征人様及び長池政彦様から祝辞を賜り、中村君（空）のにぎやかな乾杯の発声で幕が切つて落とされ、当時の懐かしむ話の輪と笑い声に終始した楽しい会となりました。今回は、海外勤務中で特に参加が困難な防衛駐在官や留学中の同期生に現況報告を送って頂いて皆の前で紹介し、海外勤務者にちよつとした参画気分を持ってもらうとともに海外で活躍する同期を皆に認識してもらういい機会となりました。

あまりの盛り上がりで予定時間を大分オーバーしましたが、最後は恒例の元応援団長丸山君（陸）の当時と変わらぬ迫力ある口上とそれに引き続く逍遙歌の大合唱で幕を閉じました。

散会後は、それぞれの大隊等に分かれて二次会・三次会と更に楽しい宴は継続しましたが、一次会を昼間の早い時間にセットしたため、二次会以降の場所を探す苦労があったようで、これは次回の改善事項として考えています。

二十七年期生会は、十年に一回の開催としておりますので、次の開催は平成二十五年の二月頃になるかと思えます。その頃には皆、齢五十を越え、そろそろ退官という声も聞こえてきそうな時期です。次回は現役として実施する最後の期生会となるかと思えますので、日本全国、津々浦々からの参加を期待して。最後に殉職された同期生、逝去された同期生の御冥福を祈りつつ、二十七年期同

期生の益々の御活躍を祈念して期生会だよりとします。

28期生会

◆会長—田浦 正人

二十八期生の皆さん、それぞれの持ち場で活躍のことと思います。今回の期生会だよりは、同期生の連絡網について情報提供したいと思えます。

これまで、同期生への連絡は、陸・海・空・民間別にピラミッド型の連絡網を構成していましたが（そんなものがあったのかとのご批判が聞こえてきますが）、我が二十八期生会も遅ればせながらIT社会に対応すべく、インターネットによる連絡網の構成を計画しています。連絡網は、ホームページを活用するタイプ、サーチエンジン上でメールグループを構成するタイプ等色々考えられますが、先ずは、計報の連絡等現在ニーズの高い正面に対応できる連絡網から構成したいと考えています。例えば、某サーチエンジンが提供しているメールグループサービスを活用する案があります。しかしながら、乏しい資金と知識で四苦八苦している状態ですので、ITに詳しい同期でメールグループ等の運営の助言をいただけの方からの連絡をお待ちしています。

また、名簿の作成もニーズの高い案件ですが、個人情報管理面でセキュリティをどうするか検討する必要があると考えています。

何れにせよ、今後インターネットによる連絡網構成の話が伝わってきた際は（全員に伝わるかどうかが問題ですが）、ご協力の程宜しく願います。

同窓生

アラカルト

「知覧特攻平和会館」 での語りべとして

七期 川床 剛士

定年退官と同時に生まれ育った知覧に
帰郷して八年の歳月が流れました。

縁あって「知覧特攻平和会館」で、語
りべとして勤務以来三年になります。

この会館は、大東亜戦争末期に行われ
た沖繩への陸軍航空特攻隊員として散華
された、一〇三六名の遺影・遺品や関係
資料を展示する町営の慰霊顕彰施設で
す。

会館を訪れる年間七十万余の老若男女
の方々に対し、他の二人の語りべとも
に特攻についてお話をしております。

かつての大戦で、自らを捨て祖国の盾
となった多くの戦没者の方々の尊い犠牲
とその限りない加護の上に、今の日本の
平和と繁栄があります。

特に特攻隊は十七・十八才の少年飛行
兵や学徒出身の見習士官等若い方々が主
力です。彼らは決死隊員ではなく、必死
隊員でした。死を覚悟の上で過ごした数
少ない日々を書き残した遺書・手紙に
は、国やふるさとを愛し父母兄妹を想う

家族愛が満ちており、慟哭の原点を感じ
ます。

戦争・戦災を体験された方々が次第に
少なくなりつつある昨今、この特攻の真
実とその心を、広く後世へ語り継ぐこと
が私たちに与えられた使命だと思ってお
ります。

特攻隊員から多くのことを学び、これ
からの人生に役立てていただければ幸い
と願いつつ、少しおこがましいですが、
国民の皆様への「精神教育」の一助になれ
ばと、これからも特攻隊員の心を日本人
の心として語り継いでいきたいと思っ
ております。

武家屋敷やその庭園も「薩摩の小京都」
として知られ多くの方々が訪れます。

山紫水明、自然の豊かさいっばいの知
覧郷、機会がありましたらお出かけくだ
さい。

皆様の益々のご健勝とご多幸を祈念い
たします。

.....

種村良平君の(株)コアの 東証二部上場を祝う

七期 (陸 機械) 川瀬 亮二

平成十五年十月十七日(金)東京明治
記念館において防大七期生有志による
「種村良平君の経営する(株)コアの東証二
部上場を祝う会」が催された。遠くは山
口、広島、神戸、大阪等から駆けつけた
同期生を含め五十名の七期生が、種村君

の快挙をお祝いした。

種村良平君(七期・陸上・応用物理)

は、防大卒業と同時に民間に出てソフト
ウエア会社に入社し、十年間ソフトウェア
技術者として勤務した後、昭和四十八
年(一九七三年)コアグループを立ち上
げ、本格的にソフトウェア業として独立
した。

その時、種村君に同調して設立したば
かりのコアグループへ移ってきた部下
は、一年間で約七十人に達したという。
このことは三十歳代の若い頃から、既に
企業家としての信頼と多くの人達から慕
われるカリスマ性を持っていた証左であ
る。

コアグループの中核会社である株式会
社コアが、今年三月二十日に東京証券取
引所市場第二部(東証二部)に直接上場
を成し遂げた。種村君は、その(株)コアの
代表取締役会長(最高経営責任者)とし
て(株)コアは勿論のこと、コアグループ全
体を統括し、素晴らしい経営手腕を発揮
し続けている。

現在コアグループは、連結売上高一七
八億円、社員一〇〇名、グループ会社
十六社を有する企業グループと日本全国
にコア学園十校を有して、IT産業界の
独立系のリーダー企業として発展を続け
ている。

種村君は、コアグループ発足当時「コ
アグループ経営方針」として次のことを
示している。

①情報サービス産業の「核」すなわちコ
アになる。

②経営理念

・「夢・理想・方向」の旗

・常に前向きに挑戦

・アイディア、フアイト、サービス

③独立系、分社式、全方位ビジネスの先 端 技術集団たれ。

この経営方針は、三十年後の現在にお
いても、コアグループ経営の基軸として、
いささかもぶれていない。

「祝う会」の席上、種村君は挨拶し、
ひとつには人に恵まれたこと、ふたつに
は防大の教育・生活が現在の自分の基礎
を作ったことを強調した上で次の三点を
述べた。

①「バス一台論」でグループ経営

バス一台の乗客の規模(七十〜八十人)
が会社経営にとって、いちばんいい大き
さだ。

ベンチャー企業には能力がある人間が
どつと集まってくることは、正直不可能
なことだ。

資金を考えても大企業のように何百人
も採用することは出来ない。ベンチャー
企業にとって重要なことは、「活性化」
「エネルギーを結集させること」だ。

技術者集団として、分野に特化し専門
化することでバス一台一台を走らせ、そ
れぞれのバスに目的を持たせて、どこへ
いけばいいかを決定させ運行させている。

今もグループ制を敷いており、今後も
続けていくつもりである。

②スローガンを持つこと

夢(十年先)・理想(三〜五年先)方
向(一年先)のビジョンを持つことはも



のすごく重要なことだ。私は、防大卒業以来ずっとこのビジョンを実行してきた。また、ベンチャー企業経営では、Simple、Speed、Self（自立（自律）、自強）が、キーワードになる。今コアグループでは、この3Sを入れて「3S-CITAC」をスローガンとして経営している。

③人材教育の重要性
企業は儲けることが目的だが、人材を育

成することはもつと重要だと思っている。大企業や外資系企業でよく、人が足りないからと中途でたくさん人を集めたりするが、私はそういうのはあんまり好きではない。むしろ新卒者をじっくり育て、長くコアグループで働いてもらおうという考えである。

また、IT産業に必要な人材の育成に早くから取り組み、地方自治体と協力した公設民営方式で全国十校のコンピュータ専門学校や理学・作業療法士、介護福祉士養成校を学校法人コア学園として運営している。

種村君は、株コアをさらに出来るだけ早い時期に東証一部へ上場させるべく新たなエネルギーを燃やしている。好漢種村良平君の挑戦に、まだまだ目が離せない。

防大同窓生設立の地雷処理 NGOメンバーがアフガニスタン で活動

十二期（陸） 古賀 英松

本年八月、園部宏明氏（八期・陸）、古賀英松氏（十二期・陸）の二名がアフガニスタンにおける地雷処理活動に参加した。

同OB二名は、約一ヶ月間アフガニスタンで地雷処理活動を行う国際NGO・DDG（デンマーク地雷処理グループ）のテクニカルアドバイザーとして参加したものである。

両名は防大OB設立の特定非営利活動法人日本地雷を処理する会（JMAS・ジェイマス）のメンバー（顧問）である。

アフガニスタンは、世界でも一、二位の地雷汚染国と言われ、約一千万個の地雷と又大量の不発弾が遺棄され、その結果、一日十五人から三十人の被害者が発生していると推計されている。アフガンにおける地雷処理は社会経済開発の重要な前提であり、UNMACA（アフガン国連地雷処理センター）の指揮のもと国際NGO二個チーム（前述のNGO・DDGの他一個チーム）と、現地ローカルNGO六個チームの計八個チームが活動している。UNMACAは二〇〇三〜二〇一二年までの十年間に地雷除去を完了する計画であるが、その活動はまだ始まったばかりで今後の成り行きが注目されている。

日本のアフガニスタンに対する支援活動は、難民、避難民等に対する援助の一環として、地雷対策費用全体の三十％の資金援助を行うなど、世界一位の援助国である。

外務省は、今回、アフガニスタンにおける地雷処理活動において、目に見える国際貢献の一環として「JMAS」（日本地雷処理を支援する会）からテクニカルアドバイザーの派遣を支援した。

「JMAS」は、会長 西元徹也氏（三期・陸）元統幕議長、で、理事長は、土井義尚氏（九期・陸）・元陸自補給統制本部長である。同会は二〇〇一年九月、自衛隊を退職した防大同窓生を中核に自



アフガンにおける地雷処理活動

己資金を出し合い設立、昨年七月から本格的活動を開始した。現在、カンボジアにおいて不発弾の回収作業などを行っている。将来的にはカンボジアのみならずイラク、アフガニスタンにおける活動も視野に入れている。

去る、十月三十日には活動開始一年目にして、読売新聞社より「読売国際協力賞」を受賞した。なおJMASは防大同窓生からの寄付及び会員を受け付けている。詳しくはホームページ

<http://www.jmas-ngo.jp>を参照されたい。

海上自衛隊を退いて 一年余

十三期（海） 川村 成之

平成十五年、何かと話題になった冷夏も去り、天下は既に秋、そして、この一文が同窓会誌に掲載される頃には冬を迎え、その時一番話題になっているのは、イラクに派遣され、後方支援任務に当たっている陸上自衛隊隊員の皆様が、厳しい情勢の中で「正当防衛・緊急避難」に限定された権限の下、大変ご苦労をされているのではないかと、思いを馳せております。杞憂であれば幸いです。

さて、私事になりますが、平成十四年九月、青森県上北郡六ヶ所村にある警備会社「株式会社ニユーテック」に再就職しました。六ヶ所村には、国家の原子力政策を支えている日本原燃（株）があり、既に稼働している「濃縮・埋設事業所」と現在建設途上の「再処理事業所」があります。この地区に投資された資金は既に約二兆四〇〇〇億円に達し、原子燃料サイクル事業は国家的な大プロジェクトです。

私の勤める会社は、六ヶ所村「大石平」のウラン濃縮工場及び「弥栄平」の使用済み燃料貯蔵センター・高レベル放射性廃棄物貯蔵管理センターに警備システムを設置し、これを警備員が運用して核物質防護に当たっています。また、建設中の再処理工場が完成すると使用済み燃料からMOX燃料（ウラン・プルトニウム



建設現場全景

混合製品）に至る全工程「使用済燃料冷蔵貯蔵、せん断、溶解、分離精製、脱硝及び貯蔵」の核物質を防護するための警備を行う予定です。

私は、この警備会社で「核物質の盗取等による不法な移転、原子力施設等に対する妨害破壊行為」等の緊急時が発生したときの警備運用計画を立案し、この計画に基づき訓練を励行することを主に担当しています。この計画は、自衛隊の防衛・警備計画と同様に警備現場のリーダー

達に明確な目的意識を提供するとともに、千変万化する盗取、妨害破壊行為等や警備環境に柔軟に対処するための端緒を与えるものです。また、あらゆる教育訓練の基盤となります。

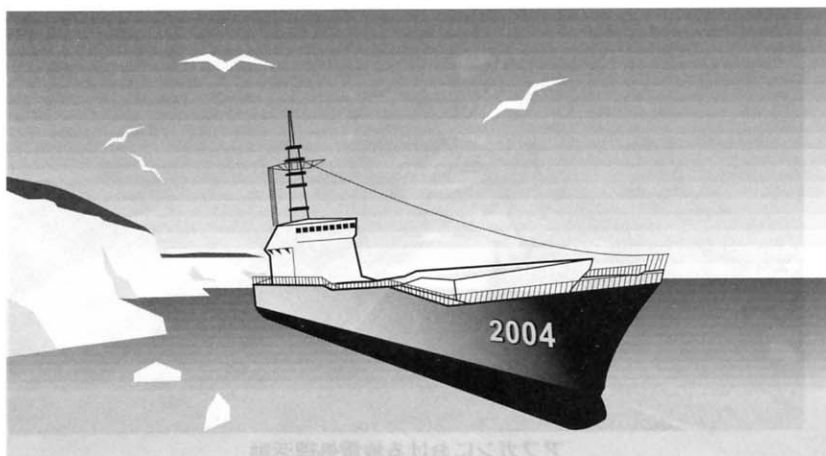
訓練と言っても営利を追及する民間企業では、委託を受けている警備業務に間隙を作らず、警備能力の最大発揮が要求されるから大変です。そこで止むをえず頼ったのが海上自衛隊で経験した図上演習の手法です。しかし、この種訓練の経験を持たない方々に演習比率とか通信票や動作票などについてご理解頂くのですから、訓練参加者には相済まない気持ちで一杯でした。それでも何とか訓練を終えた時、皆さんのお顔に何がしかの満足感が伺えたのが救いでした。

仕事の上で自衛隊時代を彷彿させる環境に加え、我が会社社員（青森在住約一〇〇名）に占める陸・海・空自衛隊OBの比率が四十〜五十パーセントに達し、かつ海上自衛隊出身者が十五名強もいます。私は、青森県で勤務した経験がなく、皆さんとの面識はなかったものの、「陸・海・空」服の色は違っていても、同じ文化を共有できる方々が数多くいるのは心強い限りです。更に、六ヶ所村には防大十一期陸上要員の先輩が二人もいます。一人は政府のオフサイトセンターで勤務されている「島津」さん（サッカー部の先輩でもあります）、もう一人は我が会社の上司で青森県隊友会会長の「君嶋」さんです。

私は、第二の人生で警備業を選択した

ため、仕事の面でも人の面でも随分恵まれた環境にあるといえますが、自衛隊流のやり方でその延長線上を歩いている訳ではありません。先に入社された方々が「郷に入っては郷に入れ」の精神を大いに発揮され、こうべを垂れて若い人に伍し頑張っている姿を目の当たりにして、頭の下がる思いを禁じ得ませんでした。この気持ちを大切に、息長くこの道を辿ることが第二の人生の目標と考えています。

（青森県下北郡六ヶ所村より）



支部だより

北海道地域支部

支部長 工藤 義弘

◎支部の概要について

北海道地域支部は平成九年九月に地域支部としては全国に先駆けて発足、初代榎山貢（三期陸）支部長のもと、地道で着実な活動により、支部の組織基盤を確立してまいりましたが、地域支部の特性を踏まえ組織の若返りを図るため、平成十四年八月から工藤義弘（十二期陸）が支部長に就任し、現在に至っています。

支部の会員は、現職会員九〇〇名、退職会員一八〇名、計一〇八〇名で、現職の会員が圧倒的に多数を占めかつ分散しており、陸上は各駐屯地単位に地区支部を、海上、航空については、全道の基地等をまとめてそれぞれ一支部を、退職会員については全道で一支部を組織し、全部で二十九個の地区支部を以って構成されています。

◎支部の事業について

支部独自の活動をするため、一人年会費五〇〇円を徴収し、次のような事業を実施しております。



▲防大入校者に対する記念品の贈呈

○会員名簿の作成・配布
毎年一回年度の初めに会員名簿を作成し、全会員に配布しています。最新の状況を把握して作成するように努力していますが、現職会員の異動が激しく、手元に届いた時には既に転出入により変更されている状態です。

名簿の配布は、会員に対する最低限の義務と認識しています。
○防衛大学校入校者に対する記念品の贈呈
北海道出身の防衛大学校入校者全員に対して、入校を祝福し、激励する目的をもって記念品を贈呈しています。

四十八期生から実施し、今年の五十一期生で四年目になりますが、四月初めに入校者を確認しそれぞれの氏名入りのボールペン・シャープペンの二本セットを地域支部の代表が持参し、学校側の協力を得て直接本人に手渡す場を設定していただいています。

平成十五年度は野村副支部長が五月中旬防大に赴き二十名の入校者（うち二名は既に退校）に贈呈してきました。既に退校の二名に対しては、後日、本人の自宅宛に記念品を送りましたが、彼等が防衛大学校に在籍した証しであり、将来防衛について少しでも関心を持ってくれることを期待しています。

○その他

防衛大学校学術教育振興会に対する支援、北部方面隊創立記念行事等に対する支援の実施

○総会・懇親会について

支部の特性上、毎年実施することが出来ず通常年度については代議員会の決定を以って総会に代えています。創立総会以降実施していないので来年度は総会・懇親会の開催を考えています。

◎防衛大学校創立五十周年に伴う同窓会地域支部の記念行事について

平成十五年二月二十二日（土）札幌市内のホテルライフォート札幌で一七〇名の会員の参加を得て、前段「講演会」、後段「記念会食」の二部構成で実施いたしました。

前段の講演会は「防衛大学校創立五十周年を迎えて」と題して、安岡義純防衛大学校副校長を講師に迎えて、防大の変



▲防大創立五十周年支部記念会食

遷と現況、そして将来への取り組み等について、わかりやすく講演をいただきました。

後段の記念会食は、工藤支部長の挨拶に始まり、持田北部方面総監の乾杯の音頭で祝宴に入り、一期から四十六期までの同窓生が一堂に会し、思い出話に近況報告にと時間を忘れて歓談しました。最後には全員で肩を組み一つの輪になり道謡歌を斉唱し、一期佐々木直氏の万歳三唱で、新たな五十年に向けての誓いを新たにして閉会いたしました。

またこの席でステンドグラス原画作成の平松礼二氏から同窓会に送られた「若人の城」の版画を会員に紹介させていただきました。

最後になりましたが、同窓会会長から祝電を賜り、また同窓会本部より様々なご支援を頂きましたことを、あらためてお礼申し上げます。

東北地域支部

支部長 小関 隆久

東北防大同窓会は、平成十一年二月二十七日発足以来五年目になるが、現在の会員数は退職会員約一〇〇〇人、現職会員約七〇〇人、合計約八〇〇人であります。

平成十四年度の事業としては、例年恒常的に実施している年度の事業のほか、東北「防大創立五十周年記念」の事業の実施でした。東北地域支部としては、前回の「小原台だより」に投稿が間に合わなかったので、今回東北で実施した防大創立五十周年記念の事業について述べてみたいと思います。

防大創立五十周年を祝し、東北地区の同窓生が一堂に会し、同窓生としての品位のある厳肅な式典と会員相互の懇親を図るための祝賀会食の実施を二大柱として行なうこととして、平成十四年四月に準備委員会を結成しました。この準備委員会は退職会員と現職会員が半々ずつで約二十数名で構成し、私、小関隆久（陸六期）が準備委員長となり、退職会員は小森重信事務局長（陸九期）・現職会員は吉田守利事務局長（陸十五期）と熱海正博事務局長（陸十八期）がリーダーでした。

準備委員会は、四月から十一月までの間合計六回実施し、相互の意思の疎通と各事業の計画の作成等を行ないました。時間は平日の一七・〇〇過ぎから約二時間とかなりハードでしたが、各委員はこの事業の成功を期して熱心に取り組みました。特に、現職会員の永井誠氏（陸十三期）や鈴木実氏（陸三十九期）には、

各駐屯地との連絡をはじめ大変な努力をしていただきました。また、準備委員会での最大の懸念は、東北六県の陸・海・空の駐屯地、基地から各会員を仙台市まで輸送することでした。バスやレンタカーの借り上げ、JRによる移動等とその経費の負担等は袖井孝氏（陸九期）・三田村直幸氏（陸四十一期）の両会計幹事の手腕に負うところが大きかったです。

十一月に入ると準備委員会のメンバーを核心として実行委員会を結成し、MMを実施して本番に備えました。

十一月十七日（日曜日）の記念行事の日は、朝から秋晴れの好天に恵まれこの記念行事の成功を予感させるものでした。一四・三〇の式典開始までには一番遠方の青森県をはじめ各県から続々と集合し、予定通り開始することができました。参加者は、退職会員四十七名、現職会員一四五名、招待者・父兄等二十名の合計二二二名であり、現職のトップは陸が東北方面総監の野中光男氏（陸十二期）、海は大湊地方総監部幕僚長の武田壽一氏（海十九期）、空は第四航空団司令の安宅耕一氏（空十五期）でした。

式典は参加者全員による「国歌」の斉唱で始まり、阿部賢吉東北防大同窓会長（陸二期）の挨拶と、野中光男東北方面総監の現役代表の挨拶及び元防大指導官の千葉巖氏の祝辞と続き、祝電披露の後、ビデオ「任重く道遠し」を鑑賞して厳肅の中にも往時を偲びながら終了しました。

続いて、隣に場所を変えて祝賀会食に入り、先ず全員で学生歌を斉唱した後、渡邊政直東北防大同窓会顧問（陸一期）の乾杯で祝宴を開始した。この祝賀会の配席は、一期〜五期・六期〜九期等と数期毎のテーブルとしたため、祝宴開始と

ともに各テーブルで旧交を温め、昔の話等で大いに盛り上がった。また、途中で「防大時代の思い出」のスピーチを、上口信行第二十二普通科連隊長（陸二十期）、加瀬典文第四航空団整備部員（空三十四期）及び村井嘉浩宮城県議会議員（陸二十八期）がそれぞれ実施した。

そして最後に、全員で肩を組み追遠歌を斉唱した後、一番若い期の佐藤成浩第二十二普通科小隊長（陸四十六期）の万歳三唱で無事終了した。この式典・祝賀会食を通じて弁舌さわやかな司会をし、会を盛り上げたのは仲村悦義氏（陸十二期）でした。

次に十四年度の事業ですが、例年恒常的に実施している「防大三学年部隊実習時の支援」と「防大二次試験時の防大教授等との意見交換、懇親会」は、計画通り行ないました。特に後者は東北防大同窓会が主催で行ない、防大教授等三名、同窓会は会長以下九名、現職は東北方面総監以下十名でした。また東北方面総監は前職が防大幹事であったこともあり、いろいろと話題も盛り上がり有意義な意見交換・懇親会になりました。

その他、防大創立五十周年の本支部行事へ会長以下二名の参加、東北防大同窓会代議委員会の開催等の他、六月三十日に防



大アメリカンフットボール部が仙台市において東北大学と対戦することになり、同窓会長及び野中東北方面総監等約七十名の同窓生が応援・支援した。

平成十五年度の事業は計画通りに進めております。先ずその第一は「防大三学年部隊実習時の支援」ですが、今年は各駐屯地の要望も増え、次の十個の駐屯地・基地の同窓会支部を通じて支援をしました。

○陸…八戸・弘前・岩手・多賀城・福島・郡山
○海…大湊・八戸
○空…三沢・松島

第二は、東北防大同窓会費の徴収です。各種事業の実施、現役学生の支援等、すべて予算が無いと出来ないため、会費の徴収についてはここ数年かけて各支部の意見を聞く等検討を続けてきました。そして今年から徴収を開始しましたが各支部からは順調に納入されています。

そこで、東北防大同窓会の今後の課題としては、積極的に活動されている他の地域支部の事業等を参考に、懇親のための事業や母校支援の事業等をより活発に進めて行くことです。

最後に、会員諸兄の今後とも協力をお願いして、支部の報告とさせていただきます。

「事務局連絡先」

事務局長 十期 大越 雅行
TEL〇二二一三二一五四三七
FAX〇二二一三二一七四一三
総務幹事 十三期 勝美 治
TEL〇二二一三二一七一

(内線三六五二)

北陸地区支部

事務局長 西川 清

私は、北陸三県を取りまとめる防大同窓会北陸支部（略して北陸防大同窓会と称します。）の事務局長 西川清（十五期）です。

北陸防大同窓会の設立から現在までの状況を紹介します。

一 設立総会まで

平成十三年十二月に石川県隊友会会長の真舘蒼氏（五期）から、同窓会の北陸支部を作ろうと思うので、協力してくれというのが始まりでした。それは、隊友会の総会時に東海支部の江戸満会長より、「北陸でも支部を同窓会の五十年記念行事までに組織したら」と進言があったようであります。

早速真舘氏の指示により、設立準備委員を石川県中心に指名して、十四年一月末に第一回の設立準備委員会の開催にこぎつけました。以降、八月上旬まで数回の委員会を開催し、この間、会員の把握、設立の趣意書の発送、会則・役員・設立総会の日時等の設定、設立総会の案内の発送等の諸準備を進めました。

当支部の会長に久保正佳（三期）、副会長に福井県隊友会会長吉村健思（三期）、富山県隊友会会長内島靖雄（四期）、石川県隊友会会長真舘蒼（五期）の各氏に就任していただきました。なお、会員数は、現役七十名、OB六十四名でした。設立総会は、十四年八月二十五日（日）

に六十八名の参加を得て、開催致しました。

引き続き、金沢工業大学の泉屋理事長に講演をしていただきました。懇親会は、来賓五名の参加を得て、和やかに懇親の輪を広げました。最後に肩を組み追遥歌を斉唱し感激のうちに閉会することができました。

北陸支部の設立に際しまして、同窓会本部からの多大のご支援に感謝申し上げます。



◀ 追遥歌を斉唱する会員

二 日本財団のボランティアに対する協力

十四年五月十一日、土曜日に日本財団の計画するボランティアに、久保会長以下OB八名、第十四連隊から現役三名の計十一名が参加し協力いたしました。

これは、孟宗竹が里山の雑木林に進入して、木々を枯らしてしまうということ



◀ 曾野綾子女史を囲む参加者

で、孟宗竹を伐採するのが仕事でした。この経緯は、同窓会の五十周年記念行事に三浦朱門氏に講演を依頼し、その御礼に、阿部同窓会会長が自宅に行かれたところ、奥方の曾野綾子女史（日本財団会長）からボランティア協力の依頼がなされたのであります。

曾野綾子女史は、旧制の金沢高等女学校に席を置いておられたようです。同窓会本部から情報や計画をいただき、石川県の役員で対応するように決定しました。

ボランティア支援の当日は、集合場所に全員集合し、日本財団関係者及び同窓会本部の古賀氏と合流して、現地の山荘に向かいました。現地では、遠来のボランティアや地元参加者、それに報道関係者（この人達もボランティア）など多くの方々が来ておられました。昨年から参加している人も多いようでした。

現地では、昨年、伐採した跡地にクヌギを植樹し、さらにその地域を広げるための伐採を実施しました。体力のいる作業でした。

作業終了後、山荘の庭に全員集まり、曾野綾子女史を囲んで懇親会が行われました。皆、作業を共にしたという仲間意識ができ、お酒、ビール、タケノコ料理、焼き肉などを美味しくいただき、話も弾んでいました。

来年も参加しない訳にはいかないようですから、参加範囲を広げるべく検討したいと思えます。

三 第二回総会・講演会・懇親会の開催

三月末に役員会を開催し、総会・講演会・懇親会の時期を八月末と決定し、準備を進めてきました。最も心配したのが、参加者数でした。

会員の把握、案内状の発送、議案等の取りまとめ、会計監査の実施など準備を進め、八月二十三日（土）に来賓を含め四十六名で開催致しました。

今回の講演は、第十四普通科連隊・連隊長兼金沢駐屯地司令の高橋一佐にお願いし、「防衛雑感」として講演していただきました。

懇親会も昨年同様、楽しく懇談いただきましたが、北朝鮮を正面とする支部という一面から、現役のスピーチの中には現実味を帯びた話もあり、有意義な会となりました。

東海地区支部

事務局長 仁木 一男

東海支部は、愛知、三重、岐阜の三県を範囲として平成十二年十二月に発足し満三歳を迎えました。現職会員約三六〇名、退職会員約三〇〇名計六六〇名の規模の地域支部です。

江戸満会長（陸上一期）の「東海支部を継糸として、同期生会・中部小原台クラブ・親交グループを横糸として、相俟って東海地区同窓の味を増し、素敵な色彩を生み出す」の方針と会長、副会長、理事などの役員の固い団結と協力のもと会の目的を十二分に達成しつつあると思えます。

この一年間を振り返りますと次のようなイベントがありましたので、かいつまんでご報告します。

- ・十四年十一月 防大での五十周年行事に参加
- ・十四年十二月 第三回総会
- ・十五年 二月 中部小原台クラブ総会
- ・十五年 四月 ゴルフ部会の発足
- ・十五年 七月 防大生の部隊実習の激励
- ・十五年 十月 囲碁部会の発足
- ・十五年十二月 第四回総会

防大での五十周年行事に参加

江戸会長以下副会長、理事、事務局長等総勢五名が支部から参加しました。新しい本館、記念講堂には目を見張るものがあり、これは関係各位の並々ならぬ熱意により実現したものと同窓生として感

謝しております。又、五十周年記念事業の数々を見事に達成されました記念事業委員会の皆様のご努力にあらためて敬服の感を抱きました。



▶ 江戸会長挨拶

第三回総会

今回は防大創立五十周年と言うこともあり、又、記念事業委員会及び同窓会本部からの資金援助もあると言うことで、今までの総会より華やかで、ご家族にも楽しんで戴くという趣旨でコンサートをやるうと言うことに決まりました。第四回総会は、平成十四年十二月十五日、JR名古屋駅近くのホテルキャッスルプラザで、来賓として北陸支部会長の久保正佳氏（陸上三期）、関西支部会長の中一皓氏（航空七期）を迎え、現職会員四十五名、退職会員七十名、ご家族十一名の参加を得て開催されました。

総会は、同窓会本部からお借りした国旗及び防大校旗を会場正面に掲げ、ソプラノ歌手・下垣真希さんの国歌独唱で始まり、江戸会長の挨拶、事業報告と計画、

決算報告と予算計画、会員現況等の報告が行なわれました。

総会に次いで、メイン・イベントである下垣真希さんによる「おしゃべりコンサート」が開かれました。下垣真希さんは、愛知県立芸術大学卒業後、ロータリークラブの財団奨学生としてケルン国立音楽大学に留学。九年間にわたるドイツでの音楽活動のかたわら、国際ラジオ局でディスクジョッキーとして人気を博しただけあって、機知に富んだお喋りと二〇〇〇年ドイツ・ハノーヴァー万博の閉会式でアジアの代表曲として発表した『日本の四季』の懐かしい曲を美しく澄み切ったソプラノで歌い上げ、参加者を堪能させてくれました。下垣さんは聴衆の反応に気をよくし、一時間の持ち時間をかなり超過してしまいました。休憩時間におけるCDのサイン会も長蛇の列で、持ち込まれたCDを完売し、「もっと持ってくればよかった」とのことでした。



▶ 下垣真希さん

おしゃべりコンサート

らお借りした、できたての記念ビデオを上映しました。「へえー、昔の小原台はあんなだったんだ！」との声があり、好評でした。

懇親会で

は、まず江戸会長が挨拶の中で先月十六日防大での五十周年記念祝賀会に参加されての報告をされ、新退職会員を代表して佐藤裕紀夫氏（航空十二期）の乾杯で開宴となりました。宴が一段落すると、現職会員代表の挨拶となり、陸上自衛隊からは第十師団長 寺尾憲治陸将（陸上十四期）、航空自衛隊からは第二補給処長 山川龍夫空将補（航空十九期）が、それぞれの部隊活動の現況について、参加者に飲食の間を与えないほどの絶妙な語り口で報告をされ、退職会員にとって大変興味深いものがありました。引き続き、関西支部の様々な行事や活動について、またそれらをホームページでメール会員に楽しんでいただいている事等について、また、石川、富山、福井の三県を東ねて発足したばかりの北陸支部の久保会長からは、発足経緯とこれからの抱負が力強く語られました。再び祝宴に戻り、久しく会っていなかった仲間と酒を酌み交わし、歓談の一時を楽しみました。また、スピーチタイムがあり、新着任幹部である第十師団副師団長 瓦谷育夫陸将補（陸上十五期）、愛知地連部長 土谷貴史一佐（陸上十九期）、三重地連部長 佐藤晃章一佐（陸上十九期）の紹介があり、それぞれ挨拶を行いました。歓談の合い間にはステージ上では、各期毎に下垣真希さんとの写真撮影があり、記念のワンショットとなったようです。

最後の締めは、どこも同じで、みんな肩を組み大きな輪になって、学生歌・道遥歌の大合唱。そして、最年少会員 宮

関西地区支部

会長 中 一皓

島幸一君（陸上四十六期）の音頭で、元
氣よく万歳三唱で締めくくり。会場に掲
げた国旗と校旗は好評で、「防大同窓会
本部は各支部に支給したら」との意見が
出ていました。

防大生の部隊実習の激励

平成十五年七月、防大二年航空要員三
十名が小牧基地に実習に来たので、小牧
支部が歓迎会を開催し、小牧支部の現職
同窓生三十名と東海支部の代表として退
職会員の中山征治氏（航空十一期）、佐
藤悠紀夫氏（航空十二期）の二名が歓迎
会に参加し激励しました。

ゴルフ部会・囲碁部会の発足

東海支部には、発足以来同好会はあり
ませんでしたが、本年度からゴルフ部会
と囲碁部会が発足しました。ゴルフ大会
は支部単独で一回、愛知偕行会と共催で
三回開催されました。ゴルフ部会の会長
は、浅井忠夫氏（陸上一期）、世話人は
水谷登氏（陸上十三期）、囲碁部会の世
話人は山上登氏（陸上十期）です。今後、
北陸支部、関西支部と合同で大会が開催
される日を夢見ております。

第四回総会

第四回総会は、平成十五年十二月二十
一日に昨年と同じ場所で開催の予定で、
会長以下の役員の交代も議題にあがって
おります。講演会の講師として、前防衛
庁長官の中谷元氏を予定しており、同窓
生初の大任としてのご経験談を伺えるも
のと楽しみにしています。

平成二年暮れ、関西一円在住の防衛庁・
早期退職者が中心となって、「関西小原台
倶楽部」が発足した。約十年間の中田（一
期陸）会長・高岡（四期空）事務局長の
名コンビで地道で着実な活動が続いた。

「関西防大同窓会」発足にあたり、準備
委員会では、「関西小原台倶楽部」を前進
的に解消し、その資産も引き継ぐ形で、平
成十一年十一月に「関西防大同窓会」と
して創立総会を迎えた。

初代 牧（二期海）会長・坂口（七期
陸）事務局長が、「関西小原台倶楽部」の
行事を継承、それに新規行事を加えて活
発な事業を展開、平成十四年十一月の総
会で、満三年間の任期を終え、会員諸兄
に惜しまれながら退任された。

二代目会長の大任が一足飛びに七期の
小生に指名されるなどとは思ってもよら
なかった。同窓会本部が渡辺（六期陸）会
長に決まり、それに伴い当方も若返りを
図るためのもっともらしい理由からで
ある。幸い事務局長に同期の河野（七期
陸）、副会長に羽藤（九期陸）、立花（九
期海）等々、有能で協力的な人材が就任
していただけることになり、安心して会
長の大任を引き受けることとなった。

前置きが長くなってしまったことをお
詫びして、この一年間の「関西防大同窓
会」の活動状況を紹介したい。

まず、第四回総会（平成十四年十一月）
は、ご夫人同伴での多数の参加を願い、従

来の講演会をご夫人受けする楽しいエン
ターテイメントとして「オーストラリア
のアカペラ・グループ」と重要無形文化
財・茂山忠三郎の「狂言」鑑賞を実施、参
加者に喜んでいただいた。今後は有意義
な「講演会」と楽しい「エンターテイメ
ント」を隔年毎に催す予定である。

本年度上半期の主要な行事として、「春
のゴルフ大会」（四名参加）、「歴史探訪
伏見桃山周辺の史蹟を訪ねて」（四名参
加）、「私の仕事館見学とテニス大会」（十
五名参加）、「講演会と懇親会」等を実施
した。

下半期の行事として、「第五回関西防大
同窓会・総会・講演会・懇親会」、「古刹
探訪・東福寺で参禅と京料理を楽しむ会」、
「秋のゴルフ大会」、「秋の歴史探訪・新撰
組（第一部）」を予定している。

また、対外的な行事参加活動として、カ
ッター同好会「関西小原台倶楽部」チー
ムがある。当初は盛田君（十三期空）の
呼掛けで、防大時代を懐かしみながら、も



▶歴史探訪

つばら汗を出した後のビールの味がたま
らず、週末に神戸商船大学ポンドに集ま
っていた。その成果を求めて、神戸カッ
ター大会、大阪港ポート天国カッターレ
ースに出場、過去三年は「昔取った杵柄」
も三〇才後半以上が主力の我が「関西小
原台倶楽部」チームには、予選通過も叶
わなかった。ところが、今年には四十期代
の三名が加わり、何と出場四二チーム中
第三位の見事な成績、その上、特別賞「グ
ッド・シーマンシップ賞」まで獲得した。

それぞれの行事は担当者の献身的な努
力で企画・実施され、参加者各位から高
い評価と共に大いに感謝されている。



▲カッター同好会チーム

なお、それぞれの行事結果の詳細は、
「関西防大同窓会ホームページへようこそ」
<http://www.keatzqg.ne.jp/kazan/>に、各
行事終了毎に更新、過去一年間分を記載
している。是非、ご覧いただきたい。母
校、防大のホームページにもリンクして
いる。

広島地区支部

理事長 土手 義孝

新年明けましておめでとうございませう。

防衛大学校同窓生及びご家族の皆様におかれましては今年もより飛躍の年として新年をお迎えになりましたことと推察しております。

一昨年は、防衛大学校創立五十周年となり、歴史の節目を迎えました。今年は半世紀を過ぎ、現役同窓生は、国の平和と安全はもとより国際協調の御旗のものとすきわめて重大な任務を背負うことになりつつあります。

自衛隊の任務は、国際情勢の変化に即応する実任務が主となり、ゴラン高原、東チモールのPKO及び対テロ措置法に基づきインド洋への艦艇派遣並びに対イラク復興支援によるイラクへの派遣等、現役同窓生は、その中枢を担い肩にかかる重責は語りきれないものがあります。

広島防衛大学校同窓会（以下「広島同窓会」という）は、国家防衛という崇高な任務を担う現役同窓生に敬意を表するとともに、現役同窓生との交流を推進し、同窓会OBとしてまた一民間人としてお役に立てることがあれば積極的に行動することにしております。

さて、広島同窓会は、例年定期総会・講演会・懇親会の開催と春・秋行事としてハイキング・テニス・ゴルフコンペを実施し、広島経済圏で在住している同窓生相互の緊密な交流を推進するとともに

各種団体との交流を図っております。今年度諸行事に参加しました同窓生及びご家族等は、延べ三百名近くとなっております。

防衛大学校創立半世紀を過ぎ、例年と変わらない本部同窓会の運営等を抜本的に見直す時期と考えております。東京中心から地方へと同窓会活動の軸足を変えることです。

地方に勤務して、防大同窓会の恩恵を受けることは極めて少なく同窓会活動は、沈滞化しているのが現状であり、これを打破することが必要です。

これからは本部同窓会が支部組織を有効に活用し、地方でのイベントを計画するなど支部活動をより活性化する施策が求められております。本部同窓会の夢のある施策と支部への一層のご協力・ご支援が必要です。

なお、広島同窓会は、平成十六年二月二十二日（日）十五時～十七時の間呉阪急ホテル（JR呉駅から徒歩三分）において、平成十七年度定期総会・講演会・懇親会を実施いたします。広島経済圏に在住の現役・OB同窓生各位の参加をお待ちしております。



秋季行事は、十一月一日（土）瀬野川GCでゴルフコンペを、十一月九日（日）陸自海田市駐屯地でテニスを、十一月十五日（土）広島市の「松笠山」のハイキングを実施し、延べ八十名近くの同窓生その家族及び自衛隊OB並びに協力会員等が参加し盛況裏に終了しました。



▲総会スナップ

さて、関西には、「大阪防大父兄会」（近畿二府四県の防大在校生父兄会）と、そのOB会「走水会」があり、大阪地連と連携して非常に活発な活動を展開している。当同窓会も「大阪防大父兄会」や「走水会」と相互の行事参加で協力関係を深めている。

また、今年度は、「第三次東チモール派遣群」が、田邊一佐（防大二四期陸）以下五二名の主力が、大久保施設部隊（京都宇治）から派遣された。対ゲリラ警備下での道路建設・架橋設置訓練中の青野ヶ原演習場に部隊慰問の便宜をいただけただことは幸運であった。部隊は三月一日、盛大な壮行会で出発、その任務を達成して、十一月一日に帰国歓迎会が中部方面総監部で挙行される。

今後の活動目標として、一人でも多くの同窓生が喜んで参加できる環境づくりと、在籍各部隊長の理解を得て関西在住の現職自衛官及びその家族も参加して、老若相睦ましく楽しめる同窓会活動と現職自衛官の心の支えとなるような活動も展開したいと考えている。

事務局 徳永 文男

九州防大同窓会は防大創立五十周年を祝って、平成十五年二月、福岡市内全日空ホテルにおいて「防大創立五十周年記念総会・懇親会」を開催しました。

九州各県のみならず山口県から、一期の大先輩より防大卒業間もない四十六期の幹部候補生までの退職会員・現職会員約二〇〇名が出席、盛大な総会・記念講演・懇親会となりました。

記念講演は、防大の西原正校長が御多忙中にもかかわらずお出でいただき、「最近の国際情勢と防大教育」と題しておこなっていただきました。

国際政治が専門であり、小泉首相の「対外関係タスクフォース」のメンバーでもある校長は、「国際情勢が大きく変化し、自衛隊の国際的な役割が増大する中で、防大教育にどのように取り組んでいるか」という趣旨で、イラク情勢、北朝鮮情勢、米韓関係などの今後の動きについて説明され、PKOなど自衛隊の国際的な役割がますます大きくなる中、防大では「国際感覚を培う教育」が重要になつてると強調。そのために、これまでの国際関係学科などのほかに「人間文化学科」を創設したこと、語学（英語）教育を重視していること、三年生になると約一割の学生が海外に派遣されること、防大で毎年一回、国際士官候補生会議を開催していることなど、時代の要請

に応じたことに取り組んでおられるとのこと。さらには、試験成績の優秀な学生を公表する、教官の評価を学生にもさせるなど競争原理を取り入れていること、開かれた大学にすべく努めていることなど、伝統は守りつつも、新しい時勢・新しいニーズに合わせた幹部自衛官の養成に努めておられるとのこと。古きよき時代に卒業した者にとっては、まさに大きく変化している防大教育の現況を知ることができ、防大創立五十周年記念として、まことに意義ある講演でした。

総会・記念講演の後は、いつものように和やかな懇親会。締めくくりは、学生歌・逍遙歌の斉唱。四十六期生の幹部候補生諸君の音頭で、学生時代を懐かしく思い出しながら声高く斉唱して散会。

尚、この記念総会を機に九州防大同窓会長の中野純人氏（二期）が勇退、山口賢介氏（七期）が会長になりました。

七月には九州各地において部隊実習中の防大生を激励。これは、防大生が部隊実習している駐屯地・基地所在の現職会員が主体となつて激励会をやつてもらい、これに近在の退職会員も代表者が参加し激励しようというもので、毎年実施しています。今回は、福岡・小倉・佐世保・鹿屋・春日・築城の駐屯地・基地で実習中の学生を激励しました。

第四回目となる期別対抗ゴルフ大会を十月三日、好天の小郡カントリークラブで開催。期別対抗とは言え、同窓生の懇親が主目的であるため、各期何組・何名でも参加できるようにしており、三期から十三期までの十六個チーム・六十四名が参加。「今年こそは優勝を」と練習ラ

ウンドまでやり意気込んで乗り込んできたチームもあったようで、和気藹々の中にも期の対抗意識もそれなりに感じられる盛り上がりがあった大会になりました。

成績は、ネットの部が優勝十期、二位八期A組、三位七期A組。グロスの部は優勝五期、二位十期、三位八期A組。これまでは参加者が退職会員のみの大会でしたが、これからは現職会員にも参加を働きかけていこうと考えております。

九州防大同窓会には退職会員の地区支部として、各県防大同窓会があり、それぞれ活動しています。総会・懇親会、前述の部隊実習防大生の激励会への参加、ゴルフコンペなどのほか、各県所在の現職会員との交流、偕行会との交流などが主なものです。

なかでも、福岡県防大同窓会では、毎年五月二十七日、福岡市宮崎宮においておこなわれる「日本海海戦記念大会」に協賛・協力団体として数年前から参加し、有志が協賛し参列しております。この大会は、明治三十九年以来、福岡県の年中行事として催されてきたもので、日本海海戦の偉業を追憶し、わが国の隆昌と世界平和を祈念するとともに、数多くの海戦における彼我戦没者の御霊を慰霊するものです。鹿児島県防大同窓会も五月二十六日、同様に鹿児島市内でおこなわれた「東郷平八郎記念式典」に参加しました。

このような、各地区でおこなわれる国防にかかわる伝統的な行事に参加することは同窓会としても意義あることと考えています。

この一年間における活動の主なものを紹介してまいりましたが、これらは毎年の活動としてほぼ定着してきました。これを推進するため、退職会員の各期有志および現職陸海空の代表者からなる事務局役員が二ヶ月に一度会同を行っています。年に一度は、事務局役員のない先輩期の代表者にも出席してもらい同窓会と期生会との連携をはかり、運営に助言してもらっています。また、同じく年一度（七月）、九州各県同窓会と事務局との会同を行い、事業の調整、各県の同窓会活動の紹介、意見交換などをしております。

これからも、より充実した同窓会の活動を推進できるよう努めていくつもりです。最後になりましたが、五十周年記念総会をおこなうにあたり同窓会本部より御支援をいただき御礼を申し上げます。



第七回期別対抗ゴルフ大会

優勝 グロスの部 九期生
 ネットの部 八期生

平成十五年十月三日(金) 第七回防大同窓会期別対抗ゴルフ大会が、千葉カントリークラブ川間コースで行われました。

優勝は、グロスの部を九期が、ネットの部を八期が獲得しました。

各期十名の選手で争う同窓会期別対抗ゴルフ大会も、今年で第七回となりました。今年から十三期生が新たに加わり、総勢一三〇名の大規模な大会となりました。

この大会は、グロス、ネットとも、各期上位七名の合計スコアで順位を決定するもので、シニア等の区分・ハンデはありません。



▲開会式で挨拶する渡邊会長

前回までの大会では、一期生も十二期生も同じ組で回っており、十年以上も年が違ふことで、ティッシュョットの飛距離の違いを嘆いている先輩選手もいましたが、(全員ではありません。ほとんどの元氣な先輩は後輩のティッシュョットを遙かにしのぐ腕をもっています?) 今年は一、二期から四期、五期から八期、九期から十三期と、年齢の近い期で同じ組を組み合わせることとしました。さて、先輩諸氏の組み合わせに対する評判はいかがでしたでしょうか。

開会式で、今年から同窓会会長を務めることとなった渡邊会長から「本日は、暑くもなく、寒くもなく、絶好のゴルフ日和りとなりました。日頃の八十%の実力を発揮するよう、選手皆さん頑張ってくださいませ。」とのユーモアあふれるスピーチを受け、各選手は元氣いっぱいスタートして行きました。

ラウンド中、ラフからウッドで打つてOBとした後輩曰く「いやあ、先輩に氣(木?) を使いました!」、これを聞いた先輩曰く「ラフと先輩には、カネ(金? アイアン?) を使うもんだ!」とにかく各組とも和氣藹々の雰囲気でのラウンドでした。

試合は、グロスの部で、九期が優勝の栄冠を得ることとなりました。ネット優勝は、八期でした。

試合終了後、クラブハウスで懇親会を

実施しました。今年は、車で会場に来ている人が多いことから、ノンアルコールでの打ち上げとなりましたが、それなりに盛り上がりがありました。

表彰式では、渡邊会長からグロス優勝の九期チームに、優勝杯と賞金・優勝賞品が授与されました。次いで、松本前校長からネット優勝の八期に優勝杯、賞金・賞品が授与されました。表彰式後、渡邊会長から「皆さんの元氣の良さには驚きです。また、七十台のスコアでラウンドした人が五人もいて、この大会のレベルの高さを証明しました。」との挨拶がありました。

優勝チームのメンバーは、田川、梅田、池田、小林、吉原、長崎、山口、山本、平佐、江本(順不同)の皆さんでした。

続いて、ネットの部、各期とも「我が期?」との期待の中、優勝八期と発表され、代表者から「念願のネット優勝! 全員この日のために日夜練習に励みました。」とのコメントがあり、会場割れんばかりの拍手でした。メンバーは、江見、五味、本間、大塚、笠井、廣重、三代、廣崎、池島、千葉(順不同)の皆さんでした。

今回の大会にも松本前校長が参加され、防大の近況等についてのお話がありました。

一三〇名の大選手団は、来年の再会と健闘を誓い合って散会しました。



▲グロス優勝「九期チーム」



▲ネット優勝「八期チーム」

成績表

順位	グロスの部		ネットの部	
	期	スコア	期	スコア
1位	9期	590	8期	515.0
2位	8期	592	13期	515.2
3位	13期	594	10期	516.0
4位	5期	600	9期	520.6
5位	10期	602	5期	520.8
6位	12期	602	12期	523.8
7位	6期	616	6期	528.2
8位	11期	620	3期	530.6
9位	3期	621	2期	531.6
10位	7期	625	11期	531.6
11位	4期	628	7期	532.2
12位	2期	642	4期	535.6
13位	1期	662	1期	542.0

記事 佐古(十二A)
 多田(十三A)

第六回期別対抗テニス大会

第六回防衛大学校同窓会テニス大会が平成十五年五月十八日(日)防衛大学校テニスコートにて行われました。前日まで小雨が続ぎ、テニス大会の開催が危ぶまれていましたが、十八日当日はやや肌寒いものの一日中曇り空の下、参加者総員元気に熱戦を繰り広げました。参加者は、阿部前同窓会会長ご臨席の下、同陪者十三組を含み、防大一期生から十三期生まで総勢一五〇名でした。参加者の中には、佐世保、岡山から来られた方もいました。

当日、防衛大学校硬式テニス部員には朝七時過ぎから総員による砂入れ、ローラ掛けなどコートの整備や本部テントの設定などの大会支援をして頂きました。試合は、八時二十分から約一時間、OBと現役学生とのエキジビションマッチを行い、身体をほぐしたのち、九時三十分を開始しました。

試合形式は、期別対抗とし一期から七期までのシニアリーグと八期から十三期までのレギュラーリーグに分かれそれぞれ予選リーグと優勝リーグと試合を進めました。各期の選手は防大時代の元気を呼び覚まし夕方五時過ぎまでかかって決着を付けました。成績は下表のとおりです。

試合終了後、防衛大学校本館食堂にて、懇親会を開き、防大同窓生同志の情報交

換などで話も進み、夕刻六時半、来年の再会を誓い解散しました。

記事 小森谷(十二N)

リーグ	優勝	準優勝	3位	4位	5位	6位	7位
シニア	7期	6期	5期	3期	2期	4期	1期
レギュラー	9期	12期	13期	8期	11期	10期	

第五回期別対抗囲碁大会

六期生三年連続制覇

防衛大学校同窓会が主催する各期対抗の親睦・交流行事として第五回目の囲碁大会が九月六日(土)日本棋院会館において実施された。当日は、一期生から初参加の十三期生までの選抜棋手九十五名が一堂に会し、素晴らしい熱戦が繰り広げられた。開始に先立ち、渡邊同窓会長の挨拶の後高比競技委員長から競技実施上の諸注意があり、九・三〇熱戦の火蓋が切られた。

競技は、各期対抗方式(個人戦集計方式)で実施され、予め決定していた対戦表に基づき、オール互先、先手六目半コミ出しとする四回戦で実施された。対戦結果を壇上に設置したチャートに掲示しつつ、緊迫した雰囲気の中で昼食をさ



▲熱戦の囲碁会場

期別成績表

期別	1回戦	2回戦	3回戦	4回戦	合計	順位
1	5-2	3-4	4-3	4-3	16-12	5
2	4-3	4-3	4-3	3-4	15-13	7
3	3-4	6-1	7-0	3-4	19-9	4
4	6-1	4-3	6-1	7-0	23-5	3
5	2-5	4-3	2-5	3-4	11-17	11
6	7-0	7-0	6-1	7-0	27-1	1
7	6-1	7-0	7-0	5-2	25-3	2
8	4-3	4-3	1-6	3-4	12-16	10
9	5-2	1-6	3-4	6-1	15-13	7
10	4-3	5-2	3-4	4-3	16-12	5
11	3-4	4-3	4-3	3-4	14-14	9
12	2-5	3-4	3-4	3-4	11-17	11
13	0-7	0-7	1-6	0-7	1-27	13

み、午前・午後各二回戦の対戦を行った。対戦終了後表彰式に移り、優勝した六期生の代表に渡邊会長から優勝カップが授与された。引き続き高比競技委員長の乾杯の音頭により懇親会に入り、激戦を振り返りつつ和やかな歓談のうちに本大会を終了した。

なお、四戦全勝の選手は次の十三名です。

- ・一期生 木原選手
 - ・二期生 三石選手
 - ・四期生 小野選手、清水選手、満井選手
 - ・六期生 浜本選手、壺内選手、志賀選手、仲地選手、榎田選手
 - ・七期生 高瀬選手、萩原選手、松井選手
- 記事 大西(十三A)

顕彰碑献花式

防衛大学校卒業の自衛官殉職者及び在校殉職者の霊を慰める十五年度の顕彰碑献花式が、防衛大学校人文館に隣接する顕彰碑前において、十一月八日（土）、しめやかに執り行われた。

この顕花式は、例年、開校祭行事の一環として、同窓会（小原台事務局担当）が行っているものである。

当日の朝は、観音崎周辺に名物の濃霧が立ちこめ、数メートル先も見えないような状況であったが、昼前から一挙に晴れ渡り、献花式の挙行された一三・三〇時点においては、小原台全域が紅葉に彩られた秋晴れの好天となった。

小原台事務局の福山三空佐の司会の下、参列者全員による黙祷、防衛大学校儀仗隊による儀仗、同窓会長、学校長の慰霊の辞等、式は滞りなく進行し、最後に参加者全員の白菊献花で、故人を慰霊した。

式には、同窓会会長、各期学生会代表、同窓会事務局長以下事務局員等同窓会関係者、学校長、副校長、幹事、訓練部長、各教授等学校関係者及び学生隊学生長以下、学生代表、儀仗隊、吹奏楽部等の在校生が参加した。

なお、献花式に先立ち、学校本部庁舎大会議室において、同窓会会食が行われ、同窓会会長から、当日の献花式等の準備・実施にあたった小原台事務局員に対

するねぎらいの言葉、同窓会の在り方、同窓会の当面する問題点の紹介等について挨拶があり、また、防衛大学校幹事から、防衛大学校の現状、改革・改善の方向等について紹介があった。最後に全員で逍遙歌を斉唱して会食を終了した。

今回の同窓会会食、献花式は、小原台事務局長の西井一空佐を実行委員長として、学校に所在する同窓生全員の献身的な支援があつて、成功裏に終了したものである。

記事 事務局 多田



◀同窓会会長の慰霊の辞

平成15年度臨時時代議員会

一、二〇〇三年六月二十日G/H市谷で開催された臨時時代議員会（議長 嶋野隆夫氏 陸十期、委任状送付者を含めて代議員八九名参加）において、次の議案が原案通り承認されました。

（一）記念事業委員会報告（「事業会計決算報告」、「会計監査報告」、「事業会計残額の取り扱い」）

（二）MCI事業案（15年度事業の実施要領）

（三）14年度同窓会決算報告等（「決算報告」、「会計監査報告」、「財産目録」）

二、六月三十日をもって退任する現執行部を代表して阿部会長の挨拶、同日で解散する記念事業委員会を代表して佐久間委員長の挨拶が行われた後、七月一日をもって上番する渡邊会長以下、新執行部の紹介が行われました。



▲新執行部紹介の場面

「同窓会会員名簿」追加申込みの受付

同窓会本部においては、昨年末に発行しました「防衛大学校同窓会会員名簿」の追加申込みを受けております。

本名簿は、平成四年の初版、平成十年の第二版に次ぐ平成十五年の第三版で、内容及び申込要領等は下記のとおりです。

昨年の「小原台だより」、「防衛大学校ホームページ」、新聞「朝雲」、代議員会等を通じて名簿発行のお知らせと申込み受付けをいたしましたがおも広報不足か、会員の中にはこの発行をご存知ない方が多数おられることがその後の各方面からの情報を通じ判明しました。次回の全面的な名簿データ更新と発行は概ね五年後になるものと予測されます。従ってご希望の方は、現有在庫に限度がありますのでなるべく早く申込みますようお願い致します。

なお申込み者は、会員に限定してありますが近年の世情に鑑み、名簿の取り扱いについてはくれぐれもご配慮の程お願い致します。

(追伸)
15年内に購入された皆様へ

本冊の巻末に索引部分(「あいうえお順」、「出身県別」及び「校友会別」)がありますが、この中の「あいうえお順」と「出身県別」に海・空の会員が欠落しているという不備がありました。是正処置として索引部分だけを再作成したものを本冊にそえて送らせていただきます。ご容赦の程、宜しくお願い申し上げます。

掲載会員数

本科 一期～四七期までの二万三百数十名、理工学研究科 一期～四〇期プ
ラス安全保障研究科 一期～五期まで
の計二千数百名及び留学生百数十名

掲載項目

氏名、期別、要員、出身高校、校友会
活動、現住所、電話番号、勤務先名等

申込み要領

- (一) 本誌に同封のはがき又は市販のはがき(期別、氏名、名簿送付先住所を記入)
- 「防大同窓会本部 〒一六〇〇〇〇三
東京都新宿区本塩町二一―三―二
- (二) 電話・Fax (〇三―三三―五二―八九一〇)
専用電話・Fax (八六―二八八九五)
- (三) 電子メール
(アドレス bodai@nifty.com)
- (期別、氏名等はがきと同じ)

価格

一部 三、〇〇〇円(梱包及び送料込み)

送付要領及び代金の支払い

宅急便(クロネコやまと)による代引
き徴収(現物引き換え)

会費納入のお願い

一 同窓会の危機

同窓会事業に係わる経費は、主として当該年度新会員が納入する終身会費で賄われています。そして余剰金は、将来増額が予想される事業(例えば、会員の高齢化に伴う弔意費用)及び新規の事業のため、後輩に引き継ぐ積立金として着実に増やしてまいりましたが、下表の通りここ三年は、積立金を約四〇〇〇万円取り崩さざるを得ませんでした。

このような状況が続けば、同窓会としてやるべきこと(同窓会員相互の親睦、防大生に対する支援等)も十分に出来ず、十数年で後輩に引き継ぐ積立金がなくなるのではとの危機感を持っています。

これは、この三年間、新会員(四四期、四五期、四六期)の会費納入率が低かったことが主要な原因の一つです。この点については、会費完納会員から不公平感が出ており、同窓会の財政基盤のみならず精神基盤を揺るがす問題との危機感も持っています。

同窓会事務局長 新井 宏(陸九期)

同窓会財務表

[単位：円]

年度	年度収入	使用実績	積立金繰入額
10	31,248,771	28,784,926	2,463,845
11	25,782,967	19,428,117	6,354,850
12	11,360,620	18,386,950	-7,026,330
13	7,028,562	21,253,541	-14,224,979
14	10,733,689	29,071,745	-18,338,056

現在、同窓会としては、財政再建のため支出の削減に配慮した平成十六年度予算を策定中であり、また、同窓会のあり方検討において中期的・抜本的に会費収入と支出の財政面でも如何にあるべきかを検討中です。要約すると、現在の同窓会は、財政基盤の危機と精神基盤の危機が顕在化する傾向が出ています。

二 お願

同窓会は、「会員の親睦」、「母校の発展」及び「社会的活動」に寄与することを目的とし、各事業を実施し、活動しています。事業実施にあたっては、皆様の会費納入が不可欠であります。

同窓会に対するご意見のなかには、終身会費六万円は高すぎるとのご意見も一部にございますが、三厨初号俸の四分の一は昭和四十四年度以来二十数年間にわたり変わっておりません。現時点での変更は、不公平感を更に助長するとの考えから引き続き維持していくこととなりました。また、同窓会の活動が見えないとのご意見に対しましては、謙虚に反省し各種の施策を講じてまいりたいと考えています。例えば、防大生に対する各種支援事業につきましては、同窓会からの支援である旨が明確に多くの学生に見える形で執行すべく検討しています。

さらに、会員各位につきましては、MCI事業の一環として同窓会ホームページを立ち上げ、充実して、本部と各支部、会員相互に情報交換できる場を構築したいと思っております。

これらについては、同窓会のあり方検討でご要望にこたえるべく細部を詰めていきたいと考えています。同窓会事業の実施にあたっては、会員の皆様が納めていただく終身会費が主要財源である旨をご理解頂き、会費の完納を、重ねてお願い申し上げます。

会費納入状況

15.11.20現在

期別	会員数	完納者数	完納率 %	未完納者数				期別	会員数	完納者数	完納率 %	未完納者数			
				陸	海	空	計					陸	海	空	計
1	340	321	94	11	6	2	19	25	419	395	94	12	4	8	24
2	359	347	97	8	2	2	12	26	505	466	92	26	7	6	39
3	484	452	93	17	12	3	32	27	388	377	97	8	1	2	11
4	463	435	94	20	7	1	28	28	451	420	93	17	8	6	31
5	528	482	91	26	11	9	46	29	391	357	91	17	7	10	34
6	479	431	90	38	7	3	48	30	410	343	84	48	13	6	67
7	504	460	91	29	7	8	44	31	430	408	95	15	6	1	22
8	466	418	90	35	8	5	48	32	404	354	88	31	13	6	50
9	498	447	90	35	6	10	51	33	448	376	84	45	19	8	72
10	498	451	91	28	9	10	47	34	427	372	87	40	9	6	55
11	495	448	91	28	8	11	47	35	496	477	96	11	5	3	19
12	466	408	88	30	16	12	58	36	354	344	97	6	2	2	10
13	467	399	85	45	11	12	68	37	384	347	90	16	7	14	37
14	491	456	93	20	2	13	35	38	342	267	78	61	10	4	75
15	461	446	97	9	3	3	15	39	361	333	92	8	11	9	28
16	428	403	94	10	4	11	25	40	393	333	85	34	21	5	60
17	497	452	91	20	11	14	45	41	415	373	90	24	15	3	42
18	422	395	94	9	7	11	27	42	417	375	90	20	12	10	42
19	446	412	92	14	18	2	34	43	438	391	89	23	16	8	47
20	383	352	92	17	3	11	31	44	381	189	50	137	51	5	193
21	489	467	96	12	4	6	22	45	351	127	36	157	23	44	224
22	473	410	87	31	9	23	63	46	360	137	38	151	8	64	223
23	414	392	95	8	8	6	22	47	* 352	288	82	8	53	3	64
24	446	413	93	8	18	7	33		389	288	74	32	61	8	101

47期欄*印の項は、幹候校入校者に対する数値である。また、海の未完納者は、12月期末手当てで納入予定である。

平成16年度 防衛大学校同窓会予算

平成15年11月27日
(単位:円)

項 目		16年度予算案	15年度予算	15年度比	
収入	会 費 (48期生)	22,130,000	20,100,000	2,030,000	
	預貯金利息	1,380,000	1,184,000	196,000	
	同窓会名簿代	0	12,600,000	-12,600,000	
	積立金からの繰り入れ	0	0	0	
収入計		23,510,000	33,884,000	-10,374,000	
事業経費	事業計画の推進				
	(現職・OB会員交流)	300,000	300,000	0	
	(同窓会主催親睦交流会開催)	210,000	210,000	0	
	(ホームカミングデーの実施)	300,000	800,000	-500,000	
	(会員の出版等支援)	0	50,000	-50,000	
	(防大卒業留学生との連携)	200,000	200,000	0	
	(全国的な情報網の維持整備)	30,000	100,000	-70,000	
	50周年事業 (語支援)	0	300,000	-300,000	
	顕彰碑献花式費	300,000	500,000	-200,000	
	総会/講演会費	1,100,000	1,500,000	-400,000	
	代議員会運営費	600,000	700,000	-100,000	
	機関誌発行費	3,400,000	3,300,000	100,000	
	同窓会名簿管理 (作成)	350,000	11,755,000	-11,405,000	
	慶 弔 費 (供花、弔電)	350,000	350,000	0	
	同窓会のあり方検討	200,000	0	200,000	
	期生会支援費 (49期生助成、52期生発会)	200,000	200,000	0	
	校友会対外活動等支援費	1,000,000	1,000,000	0	
	開校記念祭等支援費	2,000,000	2,000,000	0	
	安全保障講座助成金	100,000	100,000	0	
	小 計	10,640,000	23,365,000	-12,725,000	
	維持管理経費	同窓会本部の整備	680,000	0	680,000
		小原台支部事務所の整備	100,000	0	100,000
		小原台事務局運営費	200,000	200,000	0
事務員雇用費		2,000,000	2,000,000	0	
本部事務局室賃貸料		2,900,000	2,900,000	0	
事 務 費		850,000	700,000	150,000	
通 信 費		450,000	550,000	-100,000	
交 通 費		400,000	400,000	0	
会 議 費		600,000	600,000	0	
記念品作成		0	500,000	-500,000	
小 計		8,180,000	7,850,000	330,000	
予 備 費		1,500,000	1,500,000	0	
計		20,320,000	32,715,000	-12,395,000	
積立金の繰り入れ	3,190,000	1,169,000	2,021,000		
合 計	23,510,000	33,884,000	-10,374,000		
MCI(特別会計)事業	同窓会システムの維持経費 (構築及び運用)	140,000	113,200	26,800	
	MCI準備室の整備	1,000,000	0	1,000,000	
	謝 金 等	1,800,000	1,400,000	400,000	
	通信費及び事務費	150,000	75,000	75,000	
	予 備 費	2,910,000	111,800	2,798,200	
	合 計	6,000,000	1,700,000	4,300,000	

平成14年度 防衛大学校同窓会決算報告

平成15年3月31日
(単位:円)

項 目		14年度予算	14年度実施経費	備 考
収入	会 費 (46期生)	18,320,000	9,350,170	
	預貯金利息	371,000	1,383,519	
	積立金からの繰り入れ	8,959,000	18,338,056	
収入計		27,650,000	29,071,745	
事業経費	事業計画の推進			
	(現職・OB会員交流)	500,000	601,470	
	(同窓会主催親睦交流会開催)	300,000	308,199	
	(ホームカミングデーの実施)	800,000	628,835	
	(防大卒業留学生との連携)	400,000	500,840	
	(全国的な情報網の維持整備)	100,000	28,980	
	50周年事業			
	(記念祝賀会)	2,000,000	2,604,423	
	(地方事業支援)	1,500,000	1,504,030	
	(通品費)	2,000,000	1,660,420	
	(顕彰碑献花式費)	500,000	1,964,165	遺族招聘事業の追加
	総会/講演会費	1,500,000	1,092,122	
	代議員会運営費	700,000	796,960	
	機関誌発行費	4,000,000	3,836,314	
	同窓会名簿維持費	250,000	337,637	
	期生会支援費 (46期生助成)		100,420	前年度事業の継承
	期生会支援費 (47期生助成)	100,000	110,000	
	期生会支援費 (50期生発会)	100,000	100,000	
	校友会対外活動助成費	1,000,000	1,200,840	
	安全保障講座助成金	100,000	100,315	
	開校記念祭助成金	2,000,000	2,098,320	
	慶弔費 (供花、弔電)	350,000	476,138	
	職員定年退職者記念品費	100,000	121,800	
計	18,300,000	20,172,228		
維持管理経費	小原台事務局運営費	100,000	600,210	
	事務員雇用費	2,000,000	2,239,000	
	本部事務局室賃貸料	2,900,000	2,823,431	
	事 務 費	700,000	1,237,901	
	通 信 費	550,000	395,131	
	交 通 費	400,000	616,000	
	会 議 費	700,000	483,424	
	記念品作成	500,000	504,420	
	計	7,850,000	8,899,517	
	予 備 費	1,500,000	0	
合 計	27,650,000	29,071,745		

期生会長・代議員名簿

期	会 長		代 議 員		
			陸	海	空
1	松村嘉夫	F	元島英海	久保彰	鈴木喜一郎
2	野本恒雄	F	中山隆志	井川宏	野本恒雄
3	岩澤徹	N	亀井浩太郎	松本昭一	山下民夫
4	横地貞	A	常田頼史	向井朗	上川高昌
5	福地建夫	N	三浦天士	小田優秀	宮竹惠哉
6	長谷川重孝	A	野見山昌史	塚原武夫	谷十三生
7	大越兼行	A	若松重英	落合峻	北原彰
8	藤縄祐爾	A	志村隆士	宮田洋二郎	尾頭誠
9	藤田幸生	N	土井義尚	長崎嘉徳	小林貞雄
10	酒巻尚生	A	嶋野隆夫	小田倉光伸	吉沢康信
11	木村忠信	F	内村彰和	吉原征義	赤羽益三
12	先崎一	A	山本公志	上村堯彦	寺田治夫
13	牧本信近	N	関芳雄	平井良彦	花岡芳孝
14	吉田正	F	石井利博	斎藤隆	稲葉憲一
15	道家一成	N	林直人	小林幹生	江口啓三
16	江藤文夫	A	坂元順一	高橋理一	肥後監治
17	永田久雄	F	中尾吉孝	半田謙次朗	永田久雄
18	明比章	N	木下典夫	林章	三輪優三
19	酒井健	A	酒井健	竹口健二	木脇治典
20	佐藤貞夫	A	松川史郎	加藤耕治	土橋一大樹
21	彌田清	F	安部隆志	田尾輝雄	奥村芳樹
22	宮下寿広	A	小淵信夫	山口透	福井正明
23	岩本豊一	A	湯前剛	畑中孝行	金山寛
24	高橋均	N	櫻木正明	三木伸介	岩成真一
25	高鹿治雄	N	田中良夫	徳丸伸一	吉田浩介
26	屋代建夫	A	神原誠司	大保信一郎	佐々木金也
27	小林茂	A	小林茂	副島尚志	安川隆廣
28	田浦正人	A	田浦正人	畠野俊一	遠目塚進
29	柴田昭市	A	中村浩之	中尾剛久	福岡哲也
30	堀切光彦	A	角謙二	新里勇人	小田紀彦
31	高山博光	A	山根直樹	今村靖弘	常井隆志
32	榊原吉典	F	池田和典	平井良和	榊原吉典
33	中塚千陽	F	山根寿一	真殿和彦	沖野正敏
34	佐藤信知	F	大谷勝司	福田達也	小笠原卓人
35	植森治	F	中迫博文	保科俊明	右田竜治
36	足達好正	A	足達好正	塩崎浩之	泉山正司
37	宇佐見和好	F	小川隆宏	浦口薫	宇佐見和好
38	有馬元	F	森本康介	濱崎真吾	霜田豊英
39	湯下兼太郎	A	湯下兼太郎	平田利幸	竹岡功二
40	岡田和久	N	小澤学	川野邦彦	大石和浩
41	堤田和幸	N	村上淳	小河邦生	中谷大輔
42	武田和克	A	武田和克	森暁代	山口嘉大
43	鎌田淳		澤繁美	戸水竜太	松永善光
44	高橋秀典		鈴木攻祐	阿部直樹	原田理
45	庄司秀明		青山佳史	岡澤智和	坂田靖弘
46	石岡直樹	A	石岡直樹		
47	吉水憲太郎	A			

1. 会長、代議員が交代した時はすみやかに同窓会事務局へ連絡されたい
2. 46、47期の代議員不明（調査中）



(時計台)

防衛大学校同窓会本部連絡先

〒160-0003 東京都新宿区本塩町21-3-2

●局線 TEL・FAX 03-3351-8910 ●専用線 TEL・FAX 8-6-28895

E/M: ZAN24404@nifty.com又はbodajj@nifty.com

防衛大学校同窓会機関誌

小原台だより



(平成16年10月撮影)

同窓会ホームページアドレス：<http://www.bodaidsk.com/>

〔海外派遣部隊特集〕

- サマーワの人々とともに 番匠幸一郎
- インド洋の活動に参加して 野口 均
- 炎熱のクウェートで勤務して 日暮 正博

新年のご挨拶



防衛大学校同窓会会長 渡邊 信利

同窓会員の皆様、明けましておめでとうございます。全国各地で、また日本を離れ海外各地でご活躍の皆様には、平成17年の輝かしい新春を、それぞれ健やかに迎えのこととお慶びを申し上げます。

さて昨年を振り返りますと、国外ではイラク等におけるテロとの戦いが熾烈さを増す一方、北朝鮮を巡る六者協議や拉致問題は大きな進展がないまま推移し、また南西諸島方面における中国の軍事・調査活動等が活発化するなど、我が国にとっては依然として、テロの脅威、大量破壊兵器やミサイルの深刻な脅威、そして主権侵害の事態に晒されております。加えて国内では、新潟県中越地震の発生や度重なる台風襲来など大きな自然災害にも見舞われました。

こうした中で、国外ではイラクをはじめクウェートやインド洋、さらにはゴラン高原や東チモールで国際貢献任務のために汗を流す（流した）現職会員を含む派遣部隊の凛々しい活動、またカンボジアやアフガニスタン等で国際ボランティア活動に従事する退職会員有志の姿、そして国内の被災地で救助救援・復興支援活動に黙々として取り組む現職会員を含む自衛隊員の活躍には、まさに頭の下がる思いであり、同窓会員として大きな誇りを感じ、国民の皆様とともに、心から称賛と敬意と感謝の意を表したいと思います。

このように困難な状況下でも強固な使命感、高いモラルや燃えるような情熱をもって、与えられた任務に邁進する現職会員やボランティア活動に献身する退職会員有志の姿を見るにつけ、それぞれ本人の自学研鑽は勿論のこと、防衛大学校や卒業後の陸・海・空各自衛隊における教育訓練の在り方や人材育成策が正しかった証左でもあり、新しい人材、有能な人材が脈絡として育っていることを本当に心強く思っております。今後とも若い「青年」会員の皆様には、大きな夢と希望と勇気をもって、何事にも真正面から挑戦する気概、所謂「チャレンジ精神」を

大いに発揮していただきたいと思っております。また経験豊富な、ベテランの「老・壮年」会員の皆様には、「同窓同学の絆」を大切に、後に続く若い方々を見守り、温かい手を差し伸べていただきたいと思っております。

さて私は、会長就任にあたり、早急に取り組むべき課題として3点を、また中長期的な課題として1点を挙げ、その解決に努力して参りました。

その第1は「財源の確保」であり、具体的には近年著しく悪化した会員の会費納入率の改善です。現執行部が一丸となりこの問題に取り組み、母校防衛大学校をはじめ陸・海・空各幹部候補生学校や各職種・術科学校等の関係者の皆様のご協力をいただき、その結果近年新しく入会した会員の皆様の理解・納得を得て、少なくとも従来のレベルと同等又はそれ以上に会費納入率は大幅に改善されました。ここに、ご尽力いただいた関係者各位のご協力・ご支援に厚くお礼申し上げます。

第2は「年度事業の見直し」であり、具体的には15年度（後半）事業の実施及び16年度予算の編成・執行、あるいは17年度予算の編成にあたり、個々の事業の必要性の是非や実施要領等の適否について精査し、特に「費用対効果」を勘案し、「助成金」等の削減、各種行事等の「受益者負担の原則」の確立、防大生支援の「目に見える形」での実施などを実行し、歳出の全般的な抑制を図りつつ、新規事業の財源の確保等に努めております。

第3に「MCI事業の推進」ですが、17年度まで継続される「MCI事業準備委員会」の検討を踏まえながら、先ず15年度事業として決定された「防大同窓会ホームページ（HP）」を16年3月に立ち上げて試験運用し、4月から本格運用いたしました。

また16年度事業としては、この「防大同窓会ホームページ」をさらに拡充するべく努力中であり、掲載内容の充実・拡大や記事の更新頻度の短縮を図り、特に年1回発行している機関誌「小原台だより」の

内容を先取りする形で、同窓会の各種活動を適時適切に公表・広報しています。なおMCI事業については、計画に基づき「ステップ バイ ステップ」、「やれること」と「できないこと」を峻別しつつ、逐次具体化・実行してまいりたいと考えています。

次に長（中）期的な課題である「防大同窓会のあり方に関する検討」ですが、平成15年12月に会長直属の「防大同窓会あり方検討委員会」（以下「あり方検討委員会」という。）を設置して、今日まで精力的に検討・審議を実施していただきました。

あり方検討委員会は、「防大同窓会のあり方」についてのアンケート調査を実施し、多くの会員の皆様から貴重なご意見等をいただきました。これらアンケート調査結果等を参考にしながら、「防大同窓会のあり方」に関する検討を継続して実施し、その審議結果を「防大同窓会の健全な発展のために」（第一次案）としてまとめ、16年10月の理事会及び12月の定期代議員会に報告しました。この答申第一次案について、各期生会長及び各地域支部長等から再度ご意見・感想等を聴取し、本年1月末頃までに再検討し、「防大同窓会のあり方」に関する最終答申文書として取り纏める予定と伺っております。

アンケート調査及び「防大同窓会のあり方」答申案に対する意見提出にご支援・ご協力いただいた各期生会長、各地域支部長等、そして現職主要部隊長等を含む多くの会員の皆様に心から感謝申し上げます。

中間報告された答申第一次案の提言等については、今年度の活動及び次年度予算・事業として取り込めるものは速やかに採用し、特に次年度に事務局内で「プロジェクト・チーム」を編成して、新規事業の実行や事業化のための中期計画の策定等に着手したいと考えております。

私は、アンケート調査への回答として寄せられた建設的な多くのご意見・ご提言等を拝見して、会員一人一人が母校防衛大学校への強い愛情、同窓会員としての高い誇りと固い連帯感を持ち、現職会員も退職会員も共に、防大同窓会の健全な発展を願っていることを改めて確信いたしました。防大同窓生会員が一丸となり、母校発展の原動力となる、より良き同窓会を存続・発展させるために、今後も微力を尽くしたいと思っております。

最後になりましたが、同窓会員の皆様が、ご家族共々益々ご健勝で幸多い年になりますようにお祈り申し上げ、新年のご挨拶といたします。

目 次

会長の年頭のご挨拶	2	・同窓会のあり方検討	24
海外派遣部隊特集	4	期生会だより	28
・サマーワの人々とともに	5	同窓生アラカルト	30
・インド洋の活動に参加して	7	支部だより	33
・炎熱のクウェートで勤務して	9	同窓会行事	39
小原台は今	11	会費納入のお願い	41
特別寄稿		会計報告	43
・小原台の気風伝統	16	期生会会長・代議員名簿	45
防大に対する支援	19	お知らせ	46
50周年関連事業		・名簿更新に関するお願い	
・顕彰室整備	20	・同窓会本部会議室の使用	
中期事業		・防大同窓会総会のご案内	
・同窓会ホームページ	21		
・MCI事業	21		
・ホームカミングの実施	24		

◇ 海外派遣部隊特集 ◇



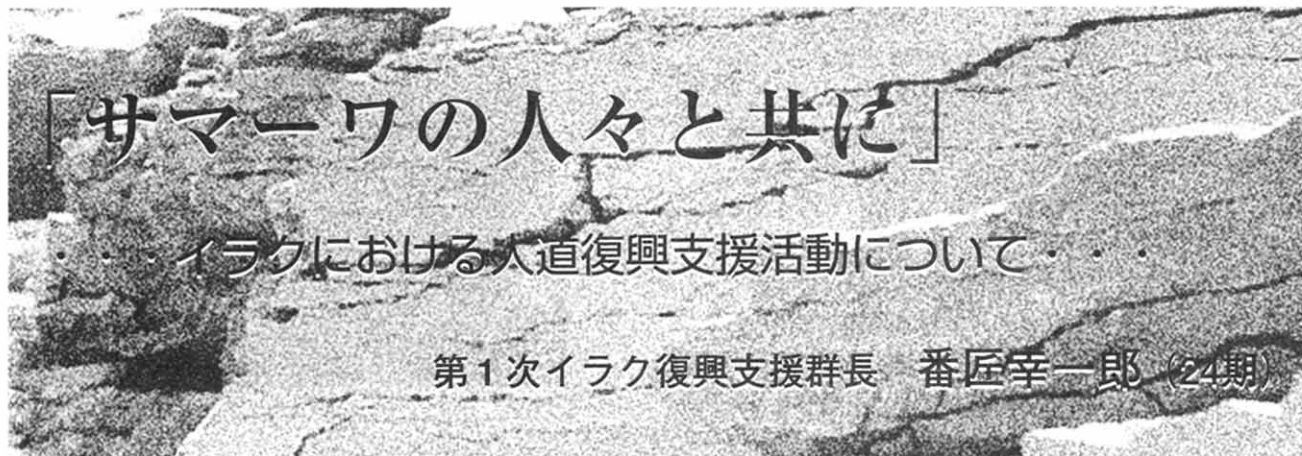
支援群総員集合（陸自）



笑顔で出発（海自）



イラクへ出発する陸自隊員の見送り（空自）



零下24度の北海道から、摂氏40度を超える熱砂のイラクに向かったのは、昨年(16年)2月のことでした。早いもので、イラクにおける自衛隊の人道復興支援任務が開始されて約10ヶ月。体感温度が60度を超えるイラクで、今日も多くの自衛隊員が、そして多くの防衛大学校卒業生が人道復興支援の任務に汗を流しております。まずは、私たちのイラクにおける活動間、全国の防衛大学校同窓会員の皆様から頂きました暖かい御支援・御声援に心から厚く御礼申し上げます。

さて、私たちは、15年7月に成立した「イラク人道復興支援特別措置法」、12月に閣議決定された基本計画に基づいて、陸海空の3自衛隊が一体となって、イラク戦争の終結から間もないイラクでの任務の開始に向けた準備に取り組みました。部隊の編成、任務遂行上必要な教育訓練、装備品等大量の物資の準備と現地への輸送など、約8千キロ離れた中東イラクへの展開は、これまでのPKOに比べても、はるかに大がかりなものとなりました。

私が主力第1派としてイラク入りしたのは2月27日。既に現地入りして所要の準備や関係先との調整に当たっていた先遣部隊と合流し、早速、宿営地の建設や人道復興支援活動の開始に向けた準備に入りました。そして、3月下旬までに、医療支援、給水支援、そして公共施設の

復旧・補修の三本柱からなる人道復興支援活動を開始しました。

陸上自衛隊の活動は、イラク南東部に位置するムサンナ県の県庁所在地、サマーワを中心に人道復興支援活動を核として行われております。私たちは、荒廃した国土を懸命に復興させようとしているイラク国民の方々を後押しすべく、日本から来た友人として人道復興支援活動に努力して来ました。同時に、学校を訪問して子供達に対するミニコンサートを開いたり、地域住民の方々との交流を積極的に行いました。日本の伝統や文化の紹介、日本の有志の方々からお預かりした善意の伝達などの活動も行いました。それは、イラクの復興の主役がイラク人自身であり、我々は彼らに「夢と希望」を持ってもらうことが何よりも重要だと思ったからです。日本人の代表として、イラクの方々と一緒に汗を流しながら、同じ目線に立った「日本式」のやり方で様々な活動を行いました。このような私たちの活動は、イラクの方々から好意的に評価して頂いたのではないかと感じております。実際、2月にサマーワに到着した時よりも、5月末に任務を終えて現地を後にする時の方が、より多くの方々に、より深く感謝と親しみの気持ちを示して頂いたように思います。



部族長との膝詰め懇談

私は、町中で、また、訪問した学校などで「ヤバニー・グー」と大きく手を振ってくれたサマーワの子供たちの輝く目と満面の笑顔を忘れられません。この任務に就いて良かった、日本人の代表としてイラクに来て良かったということを実感する毎日でした。また、このような歓迎を受けたのは、今回私たちがイラクに赴いて活動を始めたからということだけではなく、イラクと日本の歴史的なつながりの中で、幾多の先輩たちが築いて来られた日本という国への尊敬と、日本人に対する深い信頼があったからだと思います。改めて、日本人であることを誇りに思うことでした。

私たち第1次隊は、「日本人らしく誠実に心を込めて、武士道の国の自衛官らしく規律正しく堂々と」をモットーに、イラクに於ける任務に取り組んで参りました。実は「武士道の国の自衛官」を考えると、常に頭にあったのは、学生時代に慣れ親しんだ「廉恥、真勇、礼節」という学生綱領の精神でした。防人、武士、軍人、自衛官とその呼び名は変化しようとも、国のために全力で任務の完遂に努める集団が、熱く静かに心の中に継承してきた規範を再確認する思いでした。

私たちは、イラクにおける人道復興支援の第1走者として、サマーワの砂漠の中に宿営地を作り、日の丸を掲げて、我が国のイラクに対する人道復興支援のスタートを切りました。言い換えれば、砂漠を耕し、種を蒔き、水を遣り、ようやく新芽が出てきた段階だと思えます。私たちの活動によって、偉大な歴史と潜在力のあるイラクの方々に、明るい未来への夢と希望を持って頂けるよう、そして、このことが、中東、ひいては世界の平和と安定に、また、結果的に我が国の平和と繁栄につながることになれば、これほど幸せなことはないと思えます。



砂塵との闘い

自衛隊によるイラク人道復興支援任務は、北部方面隊で編成された第2師団基幹の我々第1次隊、第11師団基幹の第2次隊に続き、東北方面隊の9師団を基幹とする第3次隊が任務を引き継ぎ、そして現在は第6師団基幹福田1佐(24期)率いる第4次隊の隊員達がサマーワで活動しております。また、多くの卒業生たちが、バグダッド、バスラ、クウェート、カタールなどでも連絡調整や輸送任務等に当たっております。第1次復興支援群以降第4次隊の現在まで、陸上自衛隊だけでも、今回のイラク人道復興支援任務に参加した防衛大出身者は約200名にも上っております。彼らは皆、防衛大学校建学の精神を胸に、陸海空3自衛隊一体となり、プロフェッショナルとして、淡々粛々と自然体で様々な任務に取り組んでおります。任務の終了を命ぜられるまで、今後も多くの卒業生を含む隊員がイラクをはじめ中東での活動に従事することになると思います。どうぞ、今後とも格段の御支援、御声援を宜しくお願い申し上げます。

同窓会員の皆様に対し、改めまして深く御礼申し上げます。有り難うございました。



明日を担う子供たちと

テロ対策特措法に基づく インド洋の活動に参加して

前インド洋派遣海上支援部隊指揮官(第62護衛隊司令) 野口 均 (21期)

平成16年5月17日、イージス艦「こんごう」に乗艦し、護衛艦「ありあけ」を率い新緑の佐世保を出港、3月14日に呉を先発し既に任務に就いていた補給艦「とわだ」を合同、前任のインド洋派遣海上支援部隊指揮官(第63護衛隊司令)から任務を引き継ぎ、インド洋派遣海上支援部隊としての任務に従事して、初秋の9月19日、総員元気に帰国しました。補給艦「とわだ」は4回目の派遣であり、「こんごう」、「ありあけ」も昨年に引き続き同じ時期の2回目の派遣となりました。

海上自衛隊は2001年9月11日の米国での同時多発テロを契機としてテロの防止と根絶のための取り組みに積極的かつ主体的に寄与するという日本の立場から同年10月に成立したテロ対策特措法に基づき同年11月以降、インド洋上の米英艦艇を中心とした外国艦艇への補給・輸送支援を実施国艦艇に対する補給・輸送支援等を継続しています。

海上自衛隊が支援している外国の艦艇はテロ防止のための海上阻止作戦に従事しており、主としてアフガニスタンから海路を通じてのテロリストの逃亡を防ぐこととテロリストへの武器、弾薬、不正な資金、麻薬等の流れを断ち切ることを任務としてインド洋で活動しています。

海上自衛隊の洋上補給支援はこれらの艦艇の作戦効率の向上に大きく寄与しています。支援対象国は、当初、アメリカ、イギリスのみでしたが、逐次拡大され、現在はドイツ、ニュージーランド、フランス、イタリア、オランダ、スペイン、カナダ、ギリシャ、パキスタンを加えて、合計11カ国になっています。

今回行動した6-8月はインド洋では最も暑い時期であり気温は35度を超え、陸岸に近くなれば40度を超えることもしばしばです。甲板上は熱せられた鉄板の照り返しで70度を超えます。湿度も85パーセントから90パーセント、時には99パーセントという日もありました。これは室温と湿度が非常に高い風呂場にいるような感じで甲板上に10分もいれば、発汗した汗が乾かず、下着も作業服も水に濡らした服を着ているような状態になります。洋上補給中の甲板作業は更に救命胴衣も装着しますので特に大変です。定期的に水分と塩分を補給しつつの作業となり、補給艦乗員には、相当の体力と忍耐力が要求されます。



警戒体制下での洋上補給

行動海域には国籍が確認できない船舶や航空機が多数行動していました。特に、レーダーに映りにくい小型船舶、オイルリグと陸上間を行き来する小型航空機等に会うこともありその都度識別には神経を使いました。自爆ボートの突入で大損害を受けた米駆逐艦コールや仏国のタンカーの例があるように洋上でもテロの危険が存在するため不測の事態に備え部隊として常に高い警戒態勢を維持していました。特に洋上補給中は、補給艦と受給艦の2隻が数10メートルの距離で並走し運動が大きく制約されるため、一層厳重な警戒が必要で艦載ヘリコプターも動員するなど細心の注意を払いました。また、上甲板で警戒に当たる者は猛暑にもかかわらず防弾チョッキを着用して配置についています。

インド洋の特徴でもある砂塵、高温多湿、昼夜の気温差などに起因する故障等を防止するため入念な整備が必要でした。砂塵防止用のフィルターの定期的な水洗や交換、高温のため劣化が早くなる潤滑油の頻繁な点検、また日本近海では予想もできないアンテナの絶縁低下などの故障に備えるきめ細かな対策も必要でした。

私は今回の派遣に当たっての方針を「一致団結」、「任務完遂」「健勝帰国」として、劣悪な環境下で半年近くも長期行動する乗員のストレス発散のため艦内レクリエーションや艦上体育を奨励するとともに出発前の確実な健康診断と歯科治療の実施、現地における適切な健康管理に留意しました。おかげで途中帰国を要するような大きな



艦上のレクリエーション

病気に掛かる者もなく全員が任務を完遂し無事元気に帰国することができました。

遠く日本を離れ長期の任務行動ともなると、気にかかるのが家族のことです。このため、いろいろな配慮がなされており、その一つが艦内に郵便局があることです。国内と同じように、手紙を出すことも受け取ることもできます。衛星回線を使用してインターネットによる家族とのメールのやり取りも実施でき国内のようにはいきませんが平均すれば2日に1回は家族とのメール交換を実施していたようです。また、艦内新聞を発行し、国内の家族にも送っていました。一方、国内でも地方総監部が留守家族に対する説明会を開き、インド洋の乗員と国内の留守家族とが相互にビデオレターを交換して、近況を伝え合っています。これら家族との通信がインド洋の乗員にとって楽しみであるばかりでなく、大きな心の支えとなっていました。

イラクへの陸自等派遣が決定されて以来、対テロ海上阻止を支える協力支援活動に対する国民の関心が薄れつつあるように感じられますが、インド洋では引き続き多くの国の艦艇がテロリストの移動や武器、麻薬の輸送を阻止する活動を通じテロとの闘いを続けています。一方で、米英を除けばインド洋に継続して補給艦を展開できる海軍は極めて限られており、海上自衛隊の補給艦による洋上補給への期待は大変高いものがあります。平成16年10月には、艦載ヘリコプター用燃料と真水の補給も可能となり、インド洋における海上自衛隊の支援能力は、この海域で対テロ活動を継続する上で極めて重要な柱となっています。この活動を開始して以来約3年が経過していますが、海上自衛隊がこの活動を継続する必要性は派遣当初と変わるところは

ありません。

これまで、海上自衛隊は、補給艦、護衛艦、輸送艦、掃海母艦延べ約40隻、約7000人の隊員がこの協力支援活動に参加してきました。湾岸周辺諸国も自国の平和と安全のため、また湾岸地域の安定のための努力を継続しています。海自隊員の節度ある態度と献身的な努力は、湾岸周辺諸国及びインド洋に展開するコアリションの国々から高い評価を得るとともに、テロとの闘いに正面から立ち向かう主体的、積極的な姿勢は、世界各国から、とりわけ米国から高く評価されています。私は、テロ特措法に基づくインド洋での活動に参加して、この活動は単に洋上におけるコアリション艦艇に対する給油ではなく、ひいては日本の安全保障に直接影響するものであり、日本の防衛そのものであることをあらためて実感した次第です。



各国海軍との交歓

炎熱のクウェートで勤務して

第2期イラク復興支援派遣輸送航空隊司令 日暮 正博 (16期)

第2期イラク復興支援派遣輸送航空隊司令として、16年4月から7月までの間、クウェートで勤務しましたが、この度本誌への寄稿機会を得ましたので、派遣部隊の状況等について、経験談を含め簡単に紹介させていただきます。

イラク復興支援派遣輸送航空隊は、クウェート空軍基地に拠点を置き、イラク特措法に基づく人道復興支援等に係る航空輸送の任に当たっています。派遣部隊は、第1輸送航空隊出身要員が大半の飛行隊及び整備隊と全国各地の部隊からの選抜要員で構成される隊司令部及び業務隊等の部隊により編成された臨時混成部隊でした。派遣隊員は、国の代表としての自覚と誇りを堅持し不透明な現地情勢下において、厳しい自然環境と約3か月の断酒生活を克服しつつ任務の完遂に努めました。

クウェートの治安状況は警察や軍等により警備態勢が強化されてはいましたが、全般的には安定しているように感じられました。しかしながら基地近傍で銃撃や発砲等の事案が時々発生しており、隊員にはその都度注意喚起するとともに常に慎重な行動をとらせておりました。基地ゲートの警備は、クウェート軍及び米軍が個別に実施しており、特に米軍は、ゲートを通過するクウェート



警戒下での搭載作業

軍以外の人員、車両及び運搬物等の検査を厳重に実施していました。私もゲートを通る際、携行していた蕎麦粉に警備犬が過敏に反応したため、爆発物の臭いがするとの疑いで、1時間程炎天下で待機させられ車両の検査を受けた経験があります。

勤務環境で特筆すべきは、やはり気温です。現地では丁度気温の上昇時期に当たり、派遣直後の36～7度から帰国直前には46～8度にまで上昇しました。ただし湿度が低いので数値程の暑さは感じられませんが、直射日光下における屋外作業は体力の消耗が激しく、当時はまだ格納庫が未完成であり、また個人用防暑用被服の準備が不十分な状況でありましたので、航空機整備員や警備員には大変厳しい勤務となりました。一方エアコンが完備された屋内は快適でしたが、エアコンの故障や停電が時々生起し、この時は悲惨な状態になりました。特にクウェートの休養日の前日である水曜日などに故障すると最悪で、施設を管理する軍及び業者の対処が直ぐには得られないので最低5日程度はエアコン無しのサウナ室勤務を覚悟せねばならないことも珍しくありませんでした。これでも、現地のクウェートの人々は、今年は気温が低くかつ砂嵐の少ない10年振りの特異気象であり、こうした時期に派遣されてきた君たちは大変ラッキーであると度々言われたものです。



酷暑の中の整備作業

海外派遣部隊特集

我々第2期派遣部隊の任務は、航空輸送任務を着実に実施しつつ、第1期の業績を引き継ぎ任務遂行態勢を補備充実するという認識の下、特にその基盤となる隊員の生活環境の改善については組織的かつ積極的に取り組みました。この結果7月からは、隊員の食事が、不人気の洋食ケータリング（クウェートの業者による外注食）から、待望の日本人シェフ調理による日本食へと移行しました。その他インターネットや風呂等の整備も推進しましたが、インターネットはダイヤルアップ方式、風呂はホテル用のバスタブと多少使い勝手が悪い状況にあり、今後の本格的な整備が待たれるところです。

厚生活動としては、派遣隊員の現地での思い出作りのため、鯉幟の掲揚、七夕飾りの作成、川柳の歌集の編集等を実施しました。また上級空曹会によるウォーキング大会及びカレー調理等の催しは隊員のストレス解消に大いに役立ちました。その他、個々の隊員はクウェート及び米軍施設を利用してのサッカー、筋トレ及び屋外での

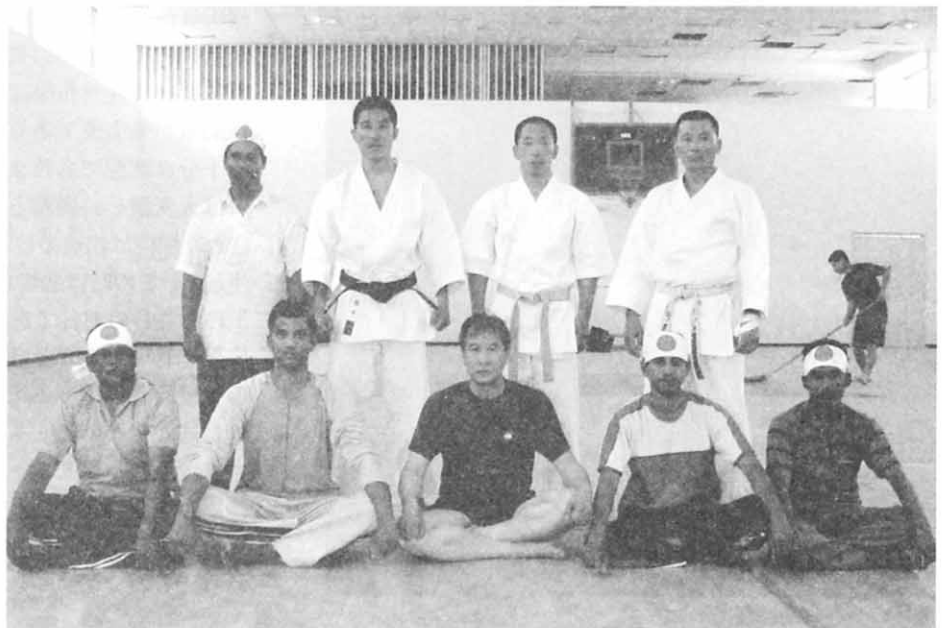
ウォーキング等で汗を流し、厚生で準備した音楽CDや映画DVDの鑑賞等で余暇を過ごしていました。またクウェート軍の兵士に武道を教え、国際交流の促進を図る隊員もいました。

派遣部隊は、現地において陸上自衛隊及び外務省在クウェート大使館と密接に連携し、また相互に協力して任務を遂行しておりましたが、この他OBを含む自衛隊関係者や一般社会の方からも激励品や慰問品等の寄贈等物心両面に亘る多大の激励と御支援を頂きました。この場をお借りして御紹介させて頂くと共に改めてお礼を申し上げる次第です。また今年定年を迎える私に、こうした自衛官らしい仕事を与えて頂いた関係各位にも感謝を申し上げ、最後に現地の川柳等大会での最優秀作品の紹介をもって筆を擱くことにします。

テレビでは伝わらないのよ この体感
暑いというより 熱いんです



七夕祭り



クウェート軍人との武道練習

OB原台は今

西原学校長モンゴル国防大学等を訪問



握手を交わす西原学校長とグルラグチャー国防大臣
(後方は、チンギスハンの像)

西原学校長は、平成16年9月15日(木)から同18日(土)までの間、モンゴルを訪問した。国防大臣、陸軍参謀総長、国防大学長等を表敬して、モンゴル軍の現状と将来、モンゴル軍の教育システム及び留学生の派遣要領等に関する率直な意見交換を行った。



国防大学のブリーフィングを受ける西原学校長
(右前列：ミャグマル国防大学長)

モンゴル軍は3種類の教育システムにより教育訓練を実施している。具体的には、①国防大学(軍事管理アカデミー、士官学校、国民教育大学、下士官学校、軍事音楽専門学校)、②一般大学(医者、コンピュータ専門家の養成等)、③外国の軍事大学への留学である。

国防大学においては、学生によるコマンドサンボ、行進等の訓練展示を見学する機会を得て、国防大学における訓練の一端を研修した。



訓練展示を研修中の西原学校長



コマンドサンボの展示

軍事博物館では、モンゴル地域の原住民が使用した遺物、チンギスカン時代の戦闘服、武器、戦闘方法、モンゴル軍創設時の英雄等に関して研修する機会を得た。

今回の訪問にあたり、事前準備から実施に至るまで在中国日本大使館付防衛駐在官 大澤1等陸佐(防大30期)から、様々な協力・支援を受けた。

■ サプライズ!

研究紹介

画期的泳法理論で 世界的注目を得る

防大教官 伊藤講師

防衛大学校システム工学群機械工学科の伊藤慎一郎講師は、かねてから水泳の泳法の研究発表を行い、その泳法理論は日本のみならず世界水泳界から注目を受けていたが、その正しさが先般のアテネオリンピックで立証され、この度NHKとTBSの2社から取材を受け10月に同テレビ局から放送された。

NHK教育テレビ「科学大好き どうよ塾 シンクロナイズドスイミングの科学」

シンクロナイズドスイミングでは立ち泳ぎを行うとき、手はスカリングという動作を行っている。熟練した演技スイマーがそれを行うときに、空気を巻き込むような渦が発生する。

それがなぜ発生するのか、素人はどうしてできないのかをコメント。

この企画に関して、シンクロナイズドスイミングのスカリング動作は基本的にはヘリコプターのホバリングと同じ機構であることを説明し、放映内容に関してのアドバイスをを行った。

TBS・毎日放送系列「ザ・ブレインサミット 激突! 日本の超頭脳Ⅱ」

“世界に誇れる日本の学者”として今回、7人の学者の中の1人として紹介された。自由形の泳ぎを大きく変える可能性がある泳法を計算によって見出したことがその理由。

自由形の泳ぎは手のひらをSの字に描く“S字泳ぎ”が主流であるが、カメ、スッポンの本能による泳ぎを数式に置き換え、人間に当てはめてみたところ、手のひらを直線的にかく“I字泳ぎ”(称:伊藤講師)なる泳法が見出された。

これは理論的には従来の方法の2.4%程度のエネルギーロスに対して11%のスピードアップが可能となる泳法である。

たまたま、50mあたりのストローク数が極めて低い世界記録保持者イアン・ソープの泳法と伊藤講師の提唱する泳ぎが極似していた。2002年にこの泳法を発表・提唱してきたが、今回のアテネ・オリンピックにおいては、“I字泳法”採用者がかなり増えていた。

現に、コーチが伊藤講師に熱心にコンタクトしてきたポーランドはシドニー五輪ではメダル0個であったが、今回はI字泳法により女子自由形400mにおいて銀メダルを獲得している。筋力がついたためか、同じ泳者が200mバタフライで金メダル、100mバタフライで銀メダルを獲得する波及効果があった。将来的には競泳自由形におけ

る泳ぎは日本発でしかも理論からの“I字泳法”に塗り変わることを期待したい。

今回はテレビ局の協力により、1人のスイマーのフォームを変える実験を行うことができた。わずか2週間という短期間ではあったが7割方のフォーム矯正を行い、50mで29.99秒のタイムを26.79秒に短縮することに成功した。

スポーツの人類に対する貢献度を考えると、世界記録アップにつながる泳法であるだけに、その注目度は高いと思われる。

http://www.tbs.co.jp/program/mbs_brainsummit2.html

○伊藤講師に関する過去の関連記事

(防大タイムズ2002年9月号)

「機械工学科伊藤講師、国際会議において最優秀賞受賞」
<http://www.nda.ac.jp/ad/boudaitimes/btms200209/itou.htm>

■ 新学生舎完成により8人部屋 へ逐次移行

◎部屋人数の変遷

学生舎の部屋は、昭和30年から昭和53年までの24年間、自習室及び寝室を8名で使用していましたが、昭和54年から昭和62年までの9年間、4名となり、昭和63年から平成8年までの9年間においては机とベットを設置した1部屋を2名で使用していました。その後、平成9年からは、自習室及び寝室を4名で使用していましたが、この度第3学生舎の完成にともない自習室及び寝室を8名で使用することとなりました。

2~4人部屋は、自衛隊の「魅力化(ゆとり)」施策を反映したものであり、特に少子化世代である新入生を防大生活に順応させることを考慮された結果でした。しかし、防大の設置目的である幹部自衛官となるべき者を教育訓練するという原点に立ち戻れば、リーダーシップを涵養することが必要であり、そのため、新学生舎完成に伴い、参加型のリーダーシップの涵養及び他リーダーシップの観察(1室に2名の4年生を配置)を重視事項として逐次8人部屋へと移行していくこととなりました。

◎リーダーシップの涵養

同室に2名の4学年が生活することは、切磋琢磨するとともに、情報交換及び下級生指導の役割分担等から4学年の指導能力向上に好影響を与えるものと期待されています。また、心理学の観点からも、リーダーシップの涵養においては8人部屋が最適であると言われています。

◎1学年の防大生活への順応

1学年については2名が同室で生活することにより、相互に助け合い、連帯感が育成されるとともに、修学意欲の向上並びに生活上のストレス軽減を図ることが期待さ

れています。

◎社会性の獲得

最近の特徴である少子化傾向による人間関係（団体生活）に不慣れな学生に対しては、この学生舎生活を通じて、団体の中で意識して行動する習慣（躰、規律の保持）を形成させ、卒業後の部隊への適応性の獲得も期待されています。



寝室



自習室



洗面所



洗濯室

校友会活動

全日本学生弁論大会で 最優秀賞・土光杯を受賞して

国際関係学科 第4学年 福和歌子



16年1月10日(土)に行なわれた第20回土光杯全日本学生弁論大会において、最優秀賞である土光杯を受賞することができた。私個人では身に余るこの栄誉を、皆と分かち合いたいと感じている。

出場のきっかけは、運動部も指導部が3学年に交代したことであり、文化部の活動にも力を入れてみようと思ったことである。そして、せっかく弁論部に入っているのだから、せめて卒業前にもう一度、大会に出場したかったのである。それが10月の初めのことであった。「土光杯」の存在は、昨年春に卒業した池田由香子さんが2年前に受賞されたことを通じて知っていた。出場するためには、まず論文審査に合格しなければならない。急いで書き上げた論文が幸いにも審査に合格し、出場が決定したのを知ったのは12月に入ってからであった。

ただでさえ防大生であるということで、会場の注目を集めることは予想していた。ましてや今の時期、防大に寄せられる関心や期待が多いことも感じていた。それは大会において有利な条件であると自覚していたものの、肝心の弁論がしっかりしていなくては話にならない。防大生の代表として臨むからには、好条件に甘えてはいけない。そのような意識のもと、再度勉強し、原稿の練り直しにかかった。そして1月、本番までの4日間で、何度も勉強会を開き、原稿を読み合わせた。この短期間に何度も顔を出し、忌憚のない意見で弁論を磨き上げてくれた、弁論部顧問および部員、周囲の人々に心から感謝している。

弁論は「ODA（政府開発援助）と外交戦略の正しい関係」との演題のもと、中国へのODAの停止を主張するものであった。それは2003年の8月に、「ODAの目的は、国際社会の平和と発展に貢献し、それを通じてわが国の安定と繁栄の確保に資する」と新ODA大綱で定められた理念を踏まえてのことである。弁論の中で私は、対中ODAはその理念からはずれていると繰り返し説明した。「本来の趣旨に外れた目的で、国民の税金を使ってはならない」という非常にシンプルな認識に訴えかけた点が、強みであったと思う。

今回の出場を通じて、私は「人を説得するとはどういうことか」を掴みかけたのではないかなと思う。相手を説得するためにはまず、自分の考えをさまざまな面で切って見せなければならない。その断面がいつも同じ形であれば、相手を納得させることができる。これは立体であれば「球」にあたる。無論、立体の大きさや材質はその人の個性により、まちまちであろう。今回の弁論を、ど

の面で切断しても「円」になる「球」に近付けるには、私個人の力だけではできなかつただろう。周囲の人々が丁寧にやすりをかけてくれたお陰である。こうして磨きぬかれた「珠玉」は私の宝物として、心の中で、小気味よい音を立てて転がっている。

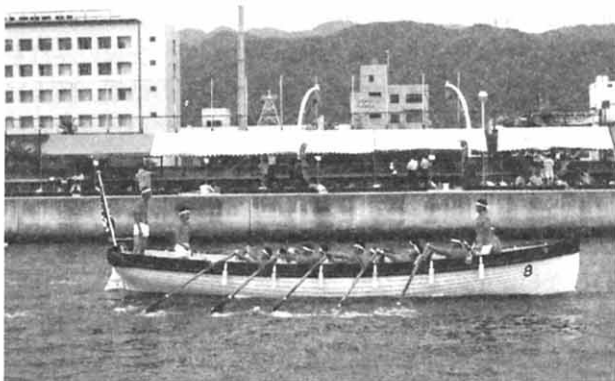
校友会活動

第48回全日本カッター競技会 優勝

平成16年5月29日(土)、第48回全日本カッター競技会が神戸大学深江キャンパス前面海域において開催され、防大から短艇委員会(主将、4学年長谷川学生、以下16名)が本競技に参加した。

午前実施された予選第2レースをトップで勝ち進み、午後の決勝レースでは東京海洋大学と約2秒差の接戦を演じ見事優勝、昨年度に引き続き2連覇を達成した。

本競技会に応援団リーダー部も応援にかけつけ選手と一体となってエールを贈り続けた。



優勝に向け力漕する防大クルー

チームとも終始フェアプレイに徹した好ゲームを展開し、試合を通じて学生相互の友好を深めた。

この間、親善試合の他、防衛大学校の概況説明、校内施設見学、合同練習、横須賀市内見学等を通じて日韓相互の理解を深めるとともに、両国の親善に大いに寄与することができた。



親善試合の様子(防衛大学校サッカー場)

上より

①試合前のペナント交換(左:韓国、右:防大)、②親善試合の様子、③職員参加の試合の様子、④試合後の交流の様子

本交流事業は、日韓防衛交流事業のひとつであり、昨年11月(韓国において実施)の返礼行事として実施された。

校友会活動

韓国陸軍士官学校との スポーツ(サッカー)交流

11月26日(金)から29日(月)の間、韓国陸軍士官学校から生徒隊長 権五晟(コンオソン) 准将以下18名(生徒14名)の訪問団を迎えてスポーツ(サッカー)交流行事を実施した。

本事業の目玉であるサッカー親善試合は、小春日和の27日(日)、防衛大学校サッカー場において行われた。試合は序盤から韓国ペースとなり前半を0-2とリードされた。後半に入って防大が徐々にペースを掴み序盤に2点をいれて同点としたが、負けじと粘る韓国に逆転ゴールを許し2-3となった。2連敗だけは是が非でも避けたい防大は終盤にゴールを奪い再度同点としたが、その後はお互い得点できずに同点のまま終了した。防大は、昨年(0-2で敗戦)の雪辱は果たせなかったものの、両

平成16年度運動系校友会活動結果及び部員状況

16.12.1 現在

校友会名	成 績	部員数		校友会名	成 績	部員数	
		男子	女子			男子	女子
応援団リーダー部	開校記念祭演武披露	19		グライダー部	久住山岳滑翔大会出場	16	
短艇委員会	全日本カッター競技大会 優勝	74			週末フライト訓練 5回実施		
	関東地区カッター競技大会 優勝			ソフトテニス部	秋季関東学生リーグ戦 7部6位	23	
バスケットボール部	男子 秋季関東リーグ戦 4部8位	39	9	ボクシング部	関東大学トーナメント 4部3位	59	3
	女子 春季神奈川リーグ戦 2部5位			レスリング部	東日本学生リーグ戦 2部5位	24	1
柔道部	関東学生体重別選手権出場	46	5	ボート部	全日本選手権大会出場	29	1
ラグビー部	秋季関東大学リーグ戦 2部8位	145		フィールドホッケー部	秋季関東学生リーグ戦 男子2部6位	41	10
サッカー部	神奈川県大学秋季リーグ 1部昇格	64			女子3部優勝		
剣道部	関東理工系学生選手権 男子準優勝	71	11	ワンダーフォーゲル部	双六岳、北アルプス、八ヶ岳登山実施	20	
空手道部	秋季関東リーグ戦 男子1部昇格	76	5		高尾山天狗トレイル大会出場		
	女子2部3位			パラシュート部	日本選手権大会個人Jr. 優勝3年桜井	22	2
	全国国公立大学選手権出場				準優勝4年西平 3位 3年上村		
バレーボール部	秋季関東リーグ戦 男子4部昇格	31	9	準硬式野球部	秋季神奈川7大学リーグ戦 7位	36	
	女子7部2位			合気道部	全国演武大会出場	55	1
卓球部	秋季関東学生リーグ戦 5部6位	16	1	体操部	東日本学生選手権大会 団体12位	27	4
陸上競技部	関東理工系学生大会出場	46	4	弓道部	秋季南関東リーグ戦 男子1部3位	33	4
	東京箱根間往復大学駅伝競走予選会出場				女子2部昇格		
硬式庭球部	関東理工科リーグ戦 男子7部優勝	37	7	少林寺拳法部	関東学生大会 団体演武優秀賞	52	2
	女子8部4位				全日本学生大会 団体演武最優秀賞		
硬式野球部	神奈川秋季リーグ戦 2部優勝	34		フェンシング部	関東学生リーグ戦 フルレー3部4位	20	
射撃部	秋季関東学生選手権大会 2部昇格	19			サーブル2部6位 エペ2部6位		
	全日本学生大会出場			ウェイトリフティング部	全日本大学対抗選手権大会 団体16位	15	
山岳部	五竜岳、谷川岳、前穂高等登山実施	5		相撲部	全国国公立対抗大会 団体準優勝	16	1
水泳(競泳)部	全国国公立大学大会出場	27	5		東日本学生リーグ戦 2部6位		
水泳(水球)部	関東学生リーグ戦 3部6位	19			全国学生個人体重別選手権		
ハンドボール部	秋季関東リーグ戦 4部昇格	24			75kg未満級 優勝4年中澤		
アメリカンフットボール部	関東学生リーグ戦 2部Aブロック	81		バドミントン部	秋季関東大学リーグ戦 男子5部3位	23	9
ヨット(小型)部	関東学生選手権秋季大会出場	19	1		女子4部2位		
ヨット(クルーザー)部	イタリア海軍士官学校・リボルノ市杯	15	1	居合道部	自衛隊全国大会出場	25	3
	国際レース 10位			吹奏楽部	開校記念祭記念式典・観閲式・定期演奏会実施	40	8
銃剣道部	全日本青年大会 団体準優勝	30	6	儀仗隊	開校記念祭記念式典・自衛隊音楽まつり参加	52	2



新学生舎

小原台の気風伝統

— 防大生に講話して —

内田 芳郎

“防衛大学校建学の精神”これは、一介の卒業生にすぎぬ無名の筆者が、過日、防衛大学校の大講堂で1学年生とパレード訓練に参加しない上級生等1,000名の学生を前に講話したときの演題である。演題といい、しつらえられた舞台と講師の取り合わせといい、にわかには信じがたい光景である。なによりも私にとっては夢のような出来ごとであった。

それは正直いってこの上ない晴れがましいことであったが、同時に、恐れ多いことであった。私の観念の中には防大生は神の子というのがあった。これまで、そのようなことにはおよそ無縁の私には、心の備えもなく、名状しがたい戦慄におそわれた。

はずかしながら、それは重ねた馬齢の効用となかば破れかぶれの度胸で克服したが、いままた、本稿でその体験を繰り返そうというのである。それは、ひとり神の子のみならず幾多同窓生の聖なる母校像への挑戦ともなりかねず、心は揺れる。だが、編集者の期待にこたえるためには、進むしかない。ことの成り行き上、その経緯から入ることをお許し願いたい。

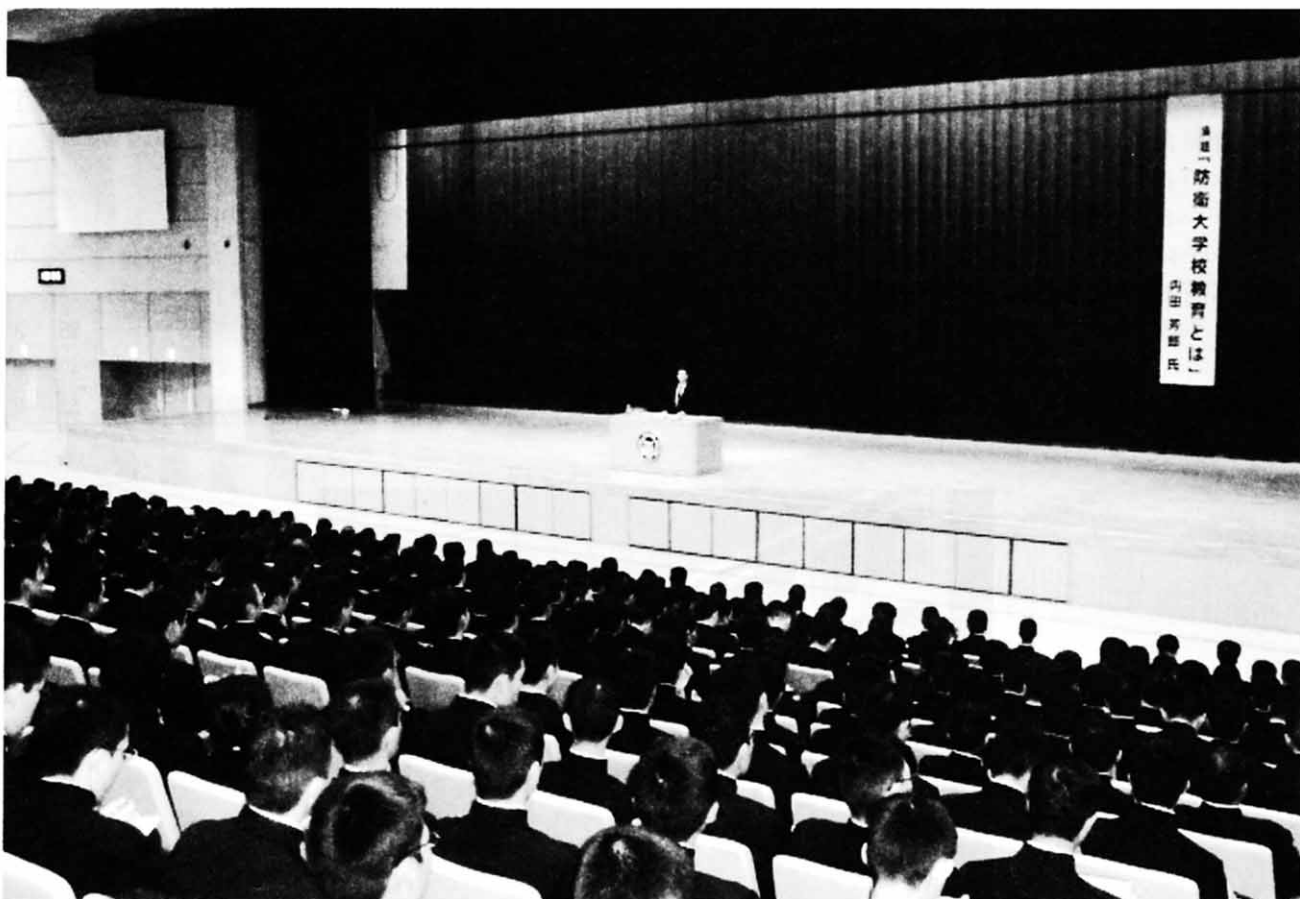
建学の精神

それは、拙文『防衛大学校教育とは何だったのか—横智雄論の試み—』がもたらした椿事ちんじと言った方が早いかもしれない。

この一文は、防大50周年の期に、私の奉仕している世直し団体のオピニオン誌の企画に応えるかたちで、余白穴埋めの責任を果たしたまでのものであったが、ふとした縁から、関係者の目にとまり、防衛大学校の「学生必携」に収録されるという、思いもかけない出来事が起きていた。母校での講話はその後日譚ごじつたんである。

さて、私が「建学の精神」として語った中身は、建学の草創期、初代校長横智雄氏の想念にあった教育の理想が、確かな理念となり不動の信念に結実するまでの、心の遍歴をたどったものであるが、このような神代の昔話が、はたして50年後の今日、育った時代も背景も異なる今どきの学生に通ずるのだろうかという不安は、講話を引き受けるに際しもっとも頭を痛めたことであった。

だが、私は、横智雄論を試みるにあたって、氏の講話集や、著作を紐解き、氏の教育に賭ける熱い情熱には、



殉教者のような激しい魂と精神を感じ取っていたし、進んで止まざるその気迫と実践行動力には、人をして何ものかを感じさせずにはおかないものを感じていた。

軍隊とは縁もゆかりもない私学の一学者であった氏が、新国軍の幹部養成学校の校長を懇請され、占領から独立を回復したばかりの、新旧価値観の相克する混濁の世で、世間の様々な期待と非難を一身に背負い、学生を鍛え、慈しみ、且つ教え、手本のない幹部像を求めて、未知の荒野を切り開いていく姿は、氏の厚恩と薫陶を受けたものには感動を与えずにはおこなかつたろう。それが同時代的に自覚されるものであったかどうかは別にしても、温かな表情に知性の微笑みをたたえ、深遠なまなざしから語りかけられるその洗練された言葉の一つ一つに、学生で、魂を奮い起こされ、心癒され、戒めを感じないものが一人としてあったであろうか。それは、実践躬行の教育者にして初めて可能な教育だったのである。もちろん、校長を語れば防大50年の歴史には、立派な足跡を残した人も一人ならずあるだろう。けれども、誰もが提示し得なかった新国軍の幹部像を求めて、未知の荒野に挑み13年の星霜をかけて、世界に類まれな学校像を描き小原台の学風と伝統の礎を築いた人は横氏をおいてほかにない。この姿は、青春を小原台に賭ける若人には、必ず理解され、共感を呼ぶに違いないと思った。

はたして、その予感裏切られることはなかった。それどころか、聞き入る学生の真剣なまなざしや身につまされるような質疑を通して、学生の悩みや関心や問題意識の所在を知り、往時の自分の体験と思いあわせ感慨深かった。そこに時代のへだたりを感じさせるものはなかった。それが全学生に通有する心の風景とは言い切れないまでも、端正な風姿や厳正な挙措容儀からはうかがいしれない深奥に、その学風伝統は生きていることを知って安んずるところがあった。小原台の学風伝統は決して、安易や気楽なものではない。その環境は、苦勞しらずの野篁坊の専門家^{のつべらぼう}を育てるのではない。悩み多く、疑い、批判精神を持った高い教養人を育てるのである。そこを経なければ、新国軍を担う立派な幹部^{かいしよ}は育たないというのが、横氏の信念であったのである。こんにち膾炙されている「広き視野をもった人」とはこの高き教養を持った人の謂いほかならない。

気風と伝統

だが、そもそも、なぜ、横智雄論なるものに挑んだのか、わたしにはもう少し丁寧に説明する必要があるだろう。それは偶然が生んだ因縁とでもいおうか、卒業以来まったくの無縁であった小原台を、思わぬことから訪問したのが偶然なら、そこで、初代校長横智雄氏の胸像といっしょに学生綱領の碑を発見したのも偶然であったが、横智雄論へと進むには必然の因縁があった。

学生綱領それは、私に小原台を忘れたいものにしていった。それは後輩の期で完成したものであったが、私はその綱領の初代起草委員長として、学生綱領起草作業の着手とその道筋をつけるのに大きく関わっていた。しかし、それはあくまで私個人のひそかな郷愁以上のものでなく、学生綱領になじみのうすい先輩たちの目に、かりに、後輩たちの無邪気なパフォーマンスの産物ほどにしか映ってなくとも仕方ないこととと思っていた。それゆえ、この「学生綱領」に横氏の深い思い入れがあったのではないかと気づいたときの驚きは大きかった。学生綱領起草の動きは昭和38年秋の開校11周年記念祭の式辞「伝統は誰がつくる」によって浮上した。氏は昭和40年1月、9期生の卒業を待たずに退官するが、その卒業生に寄せた一文で万言を費やし、学生綱領の誕生を喜び、それを作った学生達の功績を称えている。

綱領碑には「礼節、廉恥、真勇」の徳目の誓いが刻まれている。その形式文言がその意に沿うものであったかどうかは別として、思えば、学生綱領は、横氏の深い思い入れが産んだという意味では、建学者としての後世へのメッセージでもあったのである。

横氏は昭和27年の学校創立以来、新しい幹部像を求めて師弟同行の旅を続け、未知との戦いと心の遍歴をへて、不動の教育理念に到達する。その転機となる昭和31年晩冬の、米英仏士官学校歴訪の旅を経て、ゆるぎないものになった理念とは、防大は「人間教育の場」であり、ここでは、直ぐに役立つ知識技術の詰め込みや、単なる専門の積み重ねによってではなく「広く深い学問を身につけること」と「厳格な規律の実践による人格陶冶」によって人間をつくるというもので、それら学問も厳格な規律の実践も、すべて学生の自由意志と、自主自律によって行われなければならないとするものである。

この自由意志と自主自立の精神こそ横教育の真髄であった。とくに、厳正な集団規律への服従という軍人教育的要素を、高邁な徳操の自律的涵養という普遍的な人格陶冶の概念にまで高めた横氏の頭の中には、米陸軍士官学校アナポリスで見た学生たちの「あの際だって端正な風姿、きびきびした動作や厳格な挙措容儀、応接の間に現れる教養と知性、又礼節を弁えた鮮やかな身のこなし」があった。そのたくまず、ためらわず、自然に行われる様に、理想とする人間教育の極地を見るのである。

これは、「嘘つかず、欺かず、盗まず」という3つの戒めと、この破戒を自他ともに許さじとする厳しい問責機関をあわせもった「オーナーコード（名譽綱領）」制度にも連動していた。学生はこの「オーナーコード」を自らの名譽に賭けて守り、破った場合は正直に申し出て、ハイポートから謹慎、退校まで含む罰に服するというものである。横氏は思うのである。人間をつくるのは「学問」だけではない、軍人教育の典型と見た「厳格な規律への

服従」もそこに服従する者の自由意志が存在すれば、立派な人間教育になる。この気風はわが小原台にも伝統として根づかせたいものであった。

これを学校管理者として模倣し学生に与えることは容易であったが、「人間教育」を信条とする教育者としてはあくまで学生の自由意志と自主自律によらなければならなかった。

これは、氏の学校建設の原点となった「これからは民主主義の世の中だ」という、時の総理吉田氏のことばから「士官教育もまた昔のままには行かぬ」と自らに言い聞かせ過去と訣別を決意した榎氏にとっては、必然の結論でもあったのである。まかり間違っても「国を誤った軍人」の精神注入に墮してはならなかった。

しかし、榎氏には自信があった。小原台は新地にきづいた若者の鍛錬修行の道場であったが、すでに、その気風醸成の機運は満ちており、やがて卒業生が帰ってくれば、伝統として根づくはずであった。だが月日に容赦はない。そこまで待てない退官の日は迫り、学生への呼びかけとなったものである。

建学者の遺言

榎氏の悲願ともいうべき気風伝統への執念は、学生綱領となって芽をだした。が、その芽は榎氏の夢みたよう格調高い気風伝統となって育ったのであろうか。

わたしは、学生との質疑で、彼らの関心が、自分の進路に関する迷いと、自分がかかわる日々の生活上の問題であったことに強い印象をうけた。その率直な質問とその勇気に好感をもったが、今日、学生も制服の指導官も背広の教官も、理想と現実のはざままで、学問と厳格な規律の調和に悩んでいると聞いた。だが、自由の精神のもと、学生が自ら鍛錬修行することが本校の建学精神であったとすれば、学生が深い悩みや疑問をいだきその解決を求めて苦闘する姿は本来の意味においてまことに健全なことと言わなければならない。

しかし、限られた時間と厳格な集団規律の中で広く深く学問することを宿命づけられた学生が、高い教養と高邁な人格を持った人間へとあくなき向上をめざし、苦闘の果てに挫折してしまつては元も子もない。そこに、挫折させぬよう学生をみまもり、あくなき向上へととぎやわなければならない教育者の使命がある。そのことを誰よりも知っていたのは建学の父榎氏であった。建学の父は実践躬行した。学生綱領、それは、氏なきあと、氏に代わり、苦闘する学生の心に何かを語りかけ、勇気と力をあたえるものだったのである。

だが、学生綱領には荷が重かった。そのことは榎氏に痛いほどわかっていた。氏は晩年、わが国の歴史と伝統にふれ「防衛には、わが国長年の歴史と伝統があり、また経験がある」とのべている。校長在任間たえてな

ったことである。それは建学にあたり、ひとたび訣別した道であり帰ることのできない道であった。だが、この「わが国の歴史と伝統」こそ、小原台の気風伝統に一点の影を落としていたものである。榎氏は、すでに、ウエストポイントやアナポリスでこのことを深く心に刻んでいた。それは、あの学生たちの見せた、端正な容儀、きびきびした動作、進んで服する厳格な規律、垣間みえる洗練された知性等、それらは、何事か悲壮な決意のもとに行われているのではなかった。それは当然のように行われていた。

なぜか。榎氏は、その答えを礼拝堂で祈る学生の誓いの言葉に見出すのである。それが、困苦と欠乏と危険と戦いながら、勇敢に未開の原野や荒蕪の地に挑んだ、彼らの祖先たちの、安易に屈することのない激しい生活と、艱難に立ち向かう強靱な精神に由来することを知って、父祖の伝承の大切さを思うのである。また、礼拝堂には、祖国のために命をささげた英雄たちの記憶が残されていた。ここに佇めば、学生達は言わず語らずうちに、父祖ことばを聞くことができる。「オーナーコード」もアメリカ人の歴史と伝統が生んだ制度であった。

民族の歴史と伝統、それは百の説法に勝る。榎氏はそのことが悔やまれるかのように、退官直後から堰を切ったように一文を綴っていく。そして大胆にも、「今日、自衛隊は、以前の陸海軍と違って、まったくの独自の構想に立つと聞いている。しかし、かつての陸海軍の歴史や伝統を語らずして何が残るだろう」と述べるのである。それは世界に類まれな学校をつくった建学者の、万感の思いをこめた後世への遺言と受けとめられるべきものだろう。世のなかには、わが国が敗戦後の迷妄から覚めて自身をとりもどす時代とも重なり、直木賞作家司馬遼太郎の「竜馬がゆく」が世に出たときでもあった。氏は2年後に去った。

歴史と伝統、それは継承すべきものである、しかし、又、創るものでもある。「伝統は誰が作る」。建学者が残した魂の叫びは今もなお斬新な響きをもっている。

時代は大きく回転した。いまや、若い卒業生は海外に雄飛し、本当の意味での国軍の指導者になることが求められている。ここに、建学の精神がよみがえり、学生綱領に新しい生命が宿り、小原台の気風と伝統に、清新の気がみなぎることを願わずにはいられない。そんなことを思った母校での一日であった。

(了)

(8期生 日本郷友連盟常務理事)



防大に対する支援

目に見える支援

同窓会は、従来から校友会活動や開校祭に物心両面の支援を行ってきましたが、近年防大を卒業した新会員の中には同窓会の支援の実態を知らない者が多いことが判明しました。このため、同窓会として学生によりアピールする「目に見える形での支援」を実施することとし、具体的に何を行うかをアピール度、方法、経費等の種々の要素について検討してきました。その結果、全学生に強い印象を与え、また卒業後も永く記念として残るものとして今や防大名物といわれるカッター、断郊、棒倒し等の各種校内競技の副賞として同窓会の刻印のある記念メダル、キーホルダー及び銘版つきのレプリカを寄贈することになりました。

(メダル及びキーホルダーは個人に、銘版つきのレプリカはチームに授与)



更に、表彰及び支援金の交付に際しては、全学生の前で小原台事務局長から手渡すように防大側と調整しました。

今年度は9月に実施された水泳競技から記念メダルを、また、5月に実施されたカッター競技については遡って銘版つきのレプリカを寄贈しました。

来年度以降も継続的に下記の支援を行うこととしています。

競技種目	時期	副賞の種類	数
カッター	4月	メダル	48
		優勝レプリカ	1
水泳	9月	メダル	42
		キーホルダー	70
		優勝レプリカ	1
棒倒し	11月	優勝レプリカ	1
体育	12月	キーホルダー	236
		優勝レプリカ	1
断郊	3月	メダル	24
		優勝レプリカ	1
持続走	3月	メダル	15
		優勝レプリカ	1

開校記念祭に対する支援

11月8日、防衛大学校学生食堂において、開校記念祭支援金の目録贈呈式が行われた。

この贈呈式は、同窓会活動の「防衛大学校学生に対する目に見える支援」の一環として行われ、全学生の見守

る中、防衛大学校同窓会小原台事務局長（川上一等空佐）から開校記念祭学生委員長（第4学年 大岩学生）に開校記念祭支援金の目録が贈呈された。



◀開校記念祭支援金の目録を手に「ありがとうございます。」と話す開校記念祭学生委員長 第4学年 大岩学生



▲小原台事務局長（川上1空佐）の訓辞

防衛大学校顕彰室の整備について

小森谷・井出記

平成17年3月、防衛大学校校内に顕彰室が開設されます。

顕彰室は、新たに開設される防衛大学校資料館の二階の一角に設けられます。

顕彰室は、「防衛大学校卒業生で自衛隊員として殉職した者並びに防衛大学校学生で殉職した者及びそれに準ずると認められた者の遺徳を顕彰し、学生補導に資する」ことを目的として設置されたものです。

また、資料館は、将来の幹部自衛官となる者を教育する機関として、学生の精神的支柱となりうる「建学の精神」「防衛大学校の理念」「防衛大学校のあゆみ」を展示し、あわせて学生・卒業生の活躍を顕彰する等、精神面の感化を与える場として整備され、資料館と顕彰室は一体となっています。

一方、防衛大学校の見学者及び受験者の増加傾向に対応するための広報拠点の役割も期待されています。

そもそも防衛大学校顕彰室は、昭和44年11月1日に当時の図書館の3階に、本校卒業の殉職隊員の遺品等を展示し「その遺徳を顕彰し、学生補導の資とする」ことを目的とし開設したのが始まりです。その後、平成10年には旧図書館の取り壊しにともない、顕彰室にあった遺影、遺品等は学生会館同窓会室に仮保管されてきました。この度の顕彰室整備によりこれらの遺影、遺品等は顕彰室に隣接する控室（卒業生コーナー）に備えた収納棚に収められることとなります。

また、昭和57年には防衛大学校創立30周年記念事業のひとつとして防衛大学校同窓会から「顕彰の碑」が防衛大学校に寄贈され校内に設置され、同窓会行事として毎年11月の開校記念祭に合わせ顕彰献花式を碑前で執り行ってきました。

なお、顕彰献花式は平成16年度からは学校行事となりました。

このたびの顕彰室整備の経緯は、次のとおりです。

- ① 平成7年5月、防衛大学校創立50周年記念事業委員会が設置された。この下部委員会として「資料館事業委員会」が設けられた。
- ② 平成8年度の資料館事業委員会において資料館に顕彰室を整備する基本方針が決定し、平成10年12月に了承された。
- ③ 平成11年6月、資料館を前図書館の1～2階を改修し開設する方針が決定された。
- ④ 平成12年5月、防衛大学校創立50周年記念事業推進会議が設置され平成13年1月に資料館展示基本構想が、そして平成16年2月には展示実施設計が策定された。
- ⑤ 平成15年6月、資料館の開館時期が平成16年度末に決まった。

左記の経緯のなかで、防衛大学校同窓会は平成10年10月、顕彰室にモニュメントのようなものを寄贈したい旨申し入れ、以後、学校側と幾度も調整を行い平成15年2月27日の防衛大学校との調整会議で同窓会が刻銘板作成と取り付け費用の負担及び調度備品を寄贈することで合意しました。

平成15年6月、50周年記念事業委員会の解散にともない、9月に50周年記念事業の継続事業（顕彰室・卒業生コーナーの整備事業）として防衛大学校同窓会事務局事業部が引き継ぎました。

平成15年9月以降、防大施設課、訓練課、学生課、同窓会の担当者が防衛大学校にあつまり、コンサルタントをまじえ、提案された複数の顕彰室レイアウトのイメージ図を検討し、15年11月に採用案を同窓会会長、学校長にそれぞれ報告し了承を頂きました。引き続き、石の銘板の字体、説明文、検索システム、控室（卒業生コーナー）の調度備品（机、椅子）、室の色合わせなどの検討と選定を進めてきました。

顕彰室のレイアウトは、幅11.5m、奥行6.5m、高さ2.8mの室空間に黒御影石300枚の銘板からなる幅6m、縦1.6mの石板を正面に据え、両脇には向かって左に顕彰室説明板を、右に顕彰データ検索装置を設置し、台上中央には防衛大学校の校章（レリーフ）を浮かび上がらせています。室内はページュ色を基調とし調光可能な間接照明を取り入れ、出入り口を2ヵ所としています。

1枚の銘板には、殉職者氏名、期別、殉職者に関する記事等が刻銘されており、現時点では88枚が刻銘されています。

顕彰データ検索ソフトには、50音別、期別、所属別（防大、陸、海、空）検索や殉職者に関する顕彰データが整理され、タッチパネル方式で表示されます。

顕彰室に隣接し控室（卒業生コーナー）として、顕彰室を訪れた卒業生やご遺族等が遺影、遺品に接し故人を偲びまた親しく談話できる場所を用意しており、2つのテーブルと20脚の椅子が準備されています。

平成17年3月に顕彰室が開設された暁には、是非とも、同期生を誘って防衛大学校資料館・顕彰室を訪れ、殉職された先輩、同期、後輩の遺徳を偲ぶとともに青春の思い出や防衛問題等の談話の場としてご利用下さい。

中期事業

同窓会ホームページ

防大同窓会ホームページ（HP）は、平成15年度のMCI（Military Cyber Institute）事業の一環として、同窓会員のボランティアの運営要員で試行的に開設されました。平成16年度からは内容の一層の充実を図るため、技術面での専従の運営要員1名を配置して4月末から本格運用を開始し、7月には同窓会事務局員1名をHP担当に指定し運営態勢を充実しました。

現在のHPの主な内容は同窓会本部の活動状況を会員に周知するとともに、同期生会及び同窓会地域支部等の活動情報の中継基地となるように、次のような項目を設けています。

目次、同窓会会則、会長挨拶、本部・事務局、地域支部、同期生会、意見交換、お知らせ、会議室予約、校友会活動OB、リンク、新着写真集、その他最新のトピックス等

最近ホームページで紹介した主な内容は次のとおりです。

- ・北陸支部のボランティア活動
- ・同窓生子弟の救済活動支援
- ・「あり方」アンケート調査結果
- ・同窓会の著書紹介（会員からの提案により掲載）
- ・「防大逍遥歌」の紹介（音楽入り）（会員からの提案により掲載）
- ・囲碁、ゴルフ、テニス大会等
- ・新着写真集（自衛隊記念日観閲式、防大開校祭）

なお、今後は著書紹介に加え同窓生が主体として実施する事業等についても①会員相互の親睦・交流の増進②母校の充実・発展③防衛意識の向上・普及④社会的活動に寄与するものについて積極的に紹介するとともに、地方選挙・国政選挙の候補者等の紹介についても検討しております。また、「16年度小原台だより」の発刊にあわせ電子版「小原台だより」についても、掲載を予定しています。

インターネットは古代の紙の発明、中世の印刷機の発明、近代の無線電信の発明に匹敵する現代の革命的な情報ツールであり何時でも、何所でも、誰でもアクセスするのが特徴です。日本だけでなく広く世界中で活躍する2万余名の同窓生が、インターネットを通じネットワーク化され情報を共有し、また発信することも可能です。同窓会ホームページは、そのための共通の広場となるものです。同窓生は、ホームページの読者であると同時に、作成者でもあります。コンテンツの充実のためには、同



窓生皆様の投稿が不可欠ですので、積極的な投稿をお願いいたします。

投稿先E-MAIL：honbu@bodaidisk.com（整理のため本文冒頭に事務局HP担当宛と記載して下さい。）

事務局広報（HP担当） 西

MCI事業の平成16年度の実施状況について

13期(空) 新治 毅

MCI事業について、不案内な会員もおられると思いますが、紙面が限られているので、今までの小原台などを読んで頂くとして、事業構想の概要について述べた後に16年度の実施状況などを述べます。

1 MCI事業の構想

1. MCI事業の趣旨

わが国の国家運営では、何か物事を決めるに際して、政治・経済・外交・安全保障（以下、本文では軍事と表現する）の4本柱のうち、軍事的視点が抜けていることが多い。これには幾つかの原因があるが、その一つは、軍事に関する知識や体験が整理総合されていないため、軍事的視点からの考察をすることが難しいことである。

政治、経済、外交についての政策判断や学術研究をする際に、参考にできる「軍事的識見が整理総合されているセンター」が無いために、どうしても軍事的な視点が

疎かになるのである。

他方、現在の政治・外交・経済界では、それを良いことに、意識的に軍事的な思考を排除する傾向さえある。反対に、これに気がついている政治家、財界人、外交官は多いのだが、自分の力で軍事・防衛に関する識見を整理統合する余裕がないのが現状である。

ここに提案する「MCI (Military Cyber Institute) 構想」は、このようなわが国の現状を改善するために、防大同窓生の力を結集して国家・社会のための活動を展開しようとするものである。

2. MCI事業の活動 (内容区分)

MCI事業の活動は、内容によって二つに区分する。すなわち、同窓会員自身のために行うサービスである「自主活動」と、他の組織や個人から委託された活動を有料で行うサービスである「受託活動」である。任意団体である同窓会が、同窓会員のため「自主活動」を行うことは当然であるが、運転資金を確保するため有料で行う「受託活動」は原則として不可能である。したがって、当初は「自主活動」を行い、その実績を見て同窓会が「何らかの組織」を作る段階においては、その組織の性格によっては「受託活動」が可能となる。それぞれの活動の内容については、(1)自主活動としては、情報システムの構築、ホームページサービス、掲示板サービス、軍事的知見保有者の紹介、軍事関連情報及び資料の紹介、パネルディスカッション、講演会の開催、ボランティア活動支援などである。また、(2)受託活動としては、軍事専門家の派遣、軍事関連情報及び資料の紹介、スピード突貫翻訳、防衛関連資料の電子化、管理者或いは子供教育、徳操教育など教育、軍事関連資料の収集、軍事関連資料の作成等防衛諸活動支援等である。

3. 活動の段階的区分 (フェーズ)

MCI構想は、本来、中・長期的なものであるから、「小さく産んで、大きく育てる」を原則とし、活動は次のような5つのフェーズ ●フェーズ1 (防大ホームページ開設段階)、●フェーズ2 (情報システム構築段階)、●フェーズ3 (タスク・フォース編成段階)、●フェーズ4 (デモンストレーション段階)、●フェーズ5 (新組織発足段階) の5つのフェーズに区分して段階的に充実し発展させる。(以下略)

2 平成15年度実施成果

平成15年はフェーズ1 (防大ホームページ開設段階) とし、次ぎの事業を実施した。

- (1) 防衛大学ホームページの一部として存在していた同窓会ホームページを同窓会本部へ設定した。
- (2) ホームページの段階的充実に伴い、所要に応じ、ドメインの借用及びこれに伴うサービスの提供等

に関するプロバイダーとの契約を実施した。

- (3) 同窓会システムの試験運用開始のために、同窓会ホームページ構築および維持担当1名を有償による確保した。(MCI担当責任者は未指定)

3 平成16年度実施計画、成果、及び検討の状況

平成16年度は、フェーズ2 (情報システム構築段階) とし、次ぎのとおり事業を計画し、所要の成果を得つつある。

(1) 16年度MCI業計画の概要

ア. 15年度に立ち上げた同窓会システムの運用を逐次開始する。開始に当たっては本システムの重要な要素であるホームページの運営及び拡充を重視する。このため管理運営組織の段階的構築、MCI準備室の整備及び要すれば各期生会・地域支部等との所要の調整を行う。

イ. 準備委員会において次の事項にかかわる検討を推進する。

- ・同窓会システムの運営維持、拡充に関すること
- ・同窓会システムの運営組織に関する事項
- ・18年度以降の「何らかの組織」に関する事項
- ・その他、実施すべきと判断される新規時事業に関する事項

(2) 16年度の実施成果及び検討状況等

ア. MCI委員会の拡充と委員会における各種事業等に関する検討

(ア) 開催の状況

武田同窓会副会長及び新井同窓会本部事務局長の陪席の下、第7回を5月27日に、第8回を6月9日に、第9回を9月21日に、第10回を10月4日に、第11回を11月19日に実施した。

(イ) 委員会の拡充と構成等

- 委員長：小林一雅氏 (空：8期)
- 委員：荻野正憲氏 (海：9期)
- 委員：井本尚英氏 (陸：9期)
- 委員：若木利博氏 (陸：10期)
- 委員：牧田正紀氏 (海：13期)
- 委員：中治一秀氏 (空：14期)
- 委員：新治 毅氏 (空：13期)

イ. 16年度事業の実施状況

(ア) ホームページの運用については同窓会本部事務局長の指示の下、専従者を確保して順調に進捗している。ホームページの拡充についてはMCI準備委員会での検討成果を逐次同窓会本部事務局に提供し、その実行を提案している。

(イ) 検討事項に関しては4回に及ぶ準備委員会を開催し、現時点で次のような結論を得ている。

- ① ホームページの開設・拡充は、MCI事業の第一歩として極めて意義深いものである。今後はさらに、「MCI事業は、50周年記念事業の一部であり、浄財を寄付した同窓生の意味を尊重すべき」との認識に立って、拡充すべきである。
 - ② ホームページの拡充に当たっては、記事の取材、部外者に対する協力依頼、各種情報等の収集整理、及び同窓生との連絡調整を担当する専従者を有償により確保することが必要である。
 - ③ 期生会及び地域支部等との関係については、それぞれが有するホームページとのリンクを充実させるため、同窓会としての協力依頼を行うことが必要。さらに各ホームページが有する情報等を収集整理し、同窓会ホームページに掲載することが必要。この際、同窓生個人のホームページもその対象とする。年度内にリンクのモデルを作成し、試行運用する。
 - ④ 受託事業に関しては、同窓生の期待、やる気等に関する実態を把握するために、各種情報、資料等の提供を促進するために必要なメッセージをホームページに掲載することが必要。
- ウ. MCI準備委員会は、年内に①専従者の求人広告、②貢献志願者の登録要領、登録情報を収集整理するためのカテゴリー区分及びフォーマットを検討し、同窓会本部事務局長に提案する予定である。

4 来年度の実施予定事業（17年度事業計画）

(1) 実施事項

MCIの趣旨が「同窓生の軍事に関する識見を結集して、国家・社会に対し軍事的考慮の重要性を正しく発信することであるとの認識のもと、次の事項を推進する。

- ア. 16年度に引き続き、MCI事業の第一歩であるホームページの拡充について検討し同窓会本部に提言する。
- イ. MCI管理運営組織については、本部事務局長の下に設置する方向で検討する。
- ウ. 受託事業については、同窓生の関心の度合いを分析検討し、実施事項、実施要領について17年度末までに結論を出す。

なお、下記のとおり、MCI準備委員会では、1名MCI事業専従者を募集しています。希望者は、自薦、他薦を問わず応募されたい。

また、同窓会ホームページのアドレスは次ぎのとおりであるので、利用されたい。

<http://www.bodaidisk.com/>

MCI準備委員会からのお知らせ

1. MCI準備委員会の活動状況

MCIとは Military Cyber Institute の頭文字をとったもので、防大創立50周年同窓会記念事業の一環として、「全国にちらばっている同窓生の軍事に関する識見を結集して国家・社会に対して軍事的考慮の重要性を正しく発信するメカニズムを構築してはどうか」という提案に基づき発足した事業です。

平成15年度から準備委員会が発足し、平成18年にMCIが正式発足するための準備活動を行っています。平成16年4月、ホームページ担当者を指定し、同窓会のホームページを開設しました。

現在検討中の事項

- ◇ 防衛関係資料の整備（関係先へのリンクを含む）
- ◇ 防衛協力者の登録（例：防衛講話、戦史研究、語学、特殊軍事技能）
- ◇ 貢献志願者の登録（例：災害時のボランティア活動、隊員募集支援、基地行事等支援、趣味・生甲斐分野の指導）

2. MCI事業専従者の募集

現在ホームページ作成要員として1名確保してあるが、その作業量とその業務内容の違いから判断して、ホームページ担当者とは別に、MCI事業専従者をとりあえず1名有償で確保して準備を進める必要であると考えます。

希望者は自薦他薦を問わずご応募下さい。

MCI事業専従者の業務

- ① MCI事業の全般企画、調整、関係先訪問等
- ② 防衛関連の著作、論文、資料の収集・登録（リンク交渉を含む）
- ③ 防衛能力者の選考・登録
- ④ 貢献志願者の募集・登録

応募要項・処遇

自薦他薦に基づき本人の能力、意欲を判断し事務局長が選考。週4日、1日4時間半勤務、常勤を前提、月額10万円基準、交通費別途支給。

略



第6回目のホームカミングデー

—2004年度ホームカミングデー、
第6期生の番来たる—

卒業生の皆さん、「ホームカミングデー (HCD: Home Coming Day)」という言葉聞いた事がありますか、防衛大学校のご厚意で、「防大卒業生の人生の節目に、良さもあり悪しきもある防人の原点である故郷 (走水の地) に集い、若人の晴れの門出に接し、さまざまな想いに・・・」の機会を持つことが出来ました。これが、ホームカミングデーです。なかなか自分の期の番が迫らないと興味は湧きませんね。

今年度は、1998年度卒業式に第1期生が招待されてから第6回目になります。6期生の皆さんが、該当します。現在、6期生会長、高橋様を中心に着々と準備が進んでいます。

昨年度のホームカミングデーを見ていると、奥様に色々説明している人、車椅子でお子様と、独りで佇む人とさまざまな想いを巡らし卒業式で若人の門出を心から祝い、感激し、懇親会では明るい笑顔で旧交を温めていました。

昨年度の防衛大学校長 西原正氏の式辞 (2004. 3. 21) に「・・・さらにこの式典には、43年先輩の防大5期生の方々をホームカミングデーとしてお招きしており、これらの大先輩も、若い後輩諸君の門出を祝福して下さっています。・・・」と紹介をいただいております。

6期生の皆様、下記のようにホームカミングデーが実施されます (詳細は期生会が準備中です)。例年、卒業式は日曜日ですが、今年度は月曜日ですお間違え無いようお願いいたします。

(記事：防大同窓会事務局HCD担当)

2004年度のホームカミングデー

「卒業対象学生：本科49期、理工学研究科前期42期、理工学研究科後期2期、総合安全保障研究科7期」

- 1 実施年月日 2005年3月21日(月)
- 2 実施場所

(1)卒業式	防衛大学校講堂
(2)観閲式	防衛大学校陸上競技場
(3)総会・懇親会	防衛大学校学生会館

「防大同窓会のあり方」答申 (第1次案) について

あり方検討委員会

1 あり方検討委員会の活動状況等

「防大同窓会あり方検討委員会」(以下「あり方検討委員会」という。)は、平成15年12月に会長直属の委員会として設置され、「長・中期的視点から同窓会のあり方を検討し、同窓会運営施策の資を得る」ための活動を実施してまいりました。特に昨年(16年)4月～5月に広く会員の皆様に対してアンケート調査を実施するとともに、併行して9月末までに「同窓会のあり方」について17回以上の検討会合を重ね、その審議結果を「防大同窓会の健全な発展のために」(第1次案)(以下「答申(第1次案)」)としてまとめ、10月8日理事会に、12月17日定期代議員会に中間報告致しました。

アンケート調査結果については、「同窓会のあり方」検討等の参考にするとともに、「アンケート調査結果報告書」を作成して10月8日の理事会に報告し、「同報告書」の内容のほぼ全文を10月中旬に同窓会ホームページに掲載して会員の皆様に対する報告とさせていただきます。(防大同窓会のホームページ：<http://www.bodaidsk.com>参照)

中間報告された答申(第1次案)については、昨年10月下旬～11月中旬に、各期生会会長及び各地域(地区)支部長等に送付してご意見・感想等をいただき、これを踏まえて昨年12月～本年1月に答申(第1次案)を再検討し、あり方検討委員会の最終的な報告文書の作成等に反映したいと考えております。

なお、「防大同窓会のあり方」に関する最終答申文書についても、平成16年度末までに理事会あるいは定期総会に報告した後、ほぼ全文を同窓会ホームページに掲載し、全会員の皆様への報告とする予定です。

2 「防大同窓会の健全な発展のために」(第1次案)の概要

(1) 答申(第1次案)の構成等

答申(第1次案)は、A-4版・約40頁の文書であり、内容的に大きく4箇章から構成されていますが、「はじめに」「1 防大同窓会の目指すべき方向」「2 防大同窓会の現状と課題・問題点等」「3 防大同窓会の改革の方向及び具体策」「4 防大同窓会の改革・改善に沿った移行要領等」「おわりに」の順に記述し、付録として「あり方検討委員会の活動状況等」及び「あり方検討委員会の委員等名簿」を付しています。

(2) 「1 防大同窓会の目指すべき方向」の構成と内容

第1章は、「(1) 防大同窓会の必要性」と「(2) 防大同窓会に具備すべき要件」の2箇節から成り、先ず防大同窓会の必要性として、一般に同窓会は、「単に昔を懐かしむ『仲良しクラブ』的な親睦団体だけではなく、同窓生各人が自分のアイデンティティ（帰属性）を明確にする場」であるとし、さらに「防大同窓会は、国防の中核を担う『士官』学校卒業生の集まりであり、現職会員も退職会員も同じ『運命共同体の一員』であることを強く意識した団体であり、会員相互に『同期・先輩・後輩』の同志的団結が強く、モラルも高い。またその活動内容に対する欲求も広範囲にわたる傾向がある。反面、同窓会活動を運営するために必要な多種分野にわたる人材の不足、財務基盤の脆弱、現職会員の活動上の制約、あるいは複雑な人間関係などによって、その活動には限界があるという特性がある。」とその特殊な面を強調しています。

その上で、一般に同窓会に具備すべき要件として、①同窓会の「継続性」②同窓会員の「参画性」③同窓会活動の「健全性」④同窓会運営の「適合性」⑤同窓会基盤の「安定性」の5要件を説明し、さらに防大同窓会に具備すべき要件として、①同窓会員の「共助性」②同窓会活動の「社会性」③同窓会の「国際性」の3要件を備えることが望ましいと考察し、防大同窓会の目指すべき方向を明らかにしています。

(3) 「2 防大同窓会の現状と課題・問題点等」の構成と内容

第2章は、「(1) 防大同窓会を取り巻く環境の変化等」「(2) 防大同窓会の生い立ちと現状」「(3) 防大同窓会の課題・問題点等」の3箇節から成り、先ず自衛隊や母校防衛大学校あるいは防大同窓会を取り巻く環境の変化を概括的に記述し、次いで防大同窓会の44年間にわたる発展の歴史を振り返りつつ現状を明らかにし、その上で防大同窓会の課題・問題点等について、「同窓会の目的と事業・活動の重点」「同窓会員の資格及び意識」「同窓会の組織」「同窓会の機関」「同窓会の役員等」「同窓会の活動基盤」「同窓会の財務基盤」「同窓会の各種事業活動」の8項目に区分して、直面している課題や問題点等を簡潔に記述しています。

(4) 「3 防大同窓会の改革の方向及び具体策」の構成と内容

第3章は、答申第1次案の核心となる章であり、「(1) 改革・改善の考え方とその背景等」「(2) 同窓会の組織のあり方」「(3) 同窓会の機関等」「(4) 同窓会の活動基盤の強化」「(5) 同窓会の財務基盤の強化」「(6) 具体的な事業・活動の改善策等」の6箇節から成っています。先ず第1節で今回の答申（第1次案）の骨格となる改革・改善の考え方として以下の4点を明確にしています。

- ① 「会員相互の親睦及び母校の発展」を重点にした同窓会活動を推進すべきである。
- ② 現職会員の同窓会活動への参画を高め、退職会員及び首都圏会員の受益に偏した事業・活動の是正を図るべきである。
- ③ 同窓会の組織を充実し、その機関等の運営要領を改善し、また財務基盤の強化や活動拠点の整備等、同窓会の活動基盤をさらに強化すべきである。
- ④ 時代・環境の変化に対応し将来を見通した同窓会の各種事業・活動を推進又は着手すべきである。

第2節以下では、各機能別等に区分してそれぞれ改革・改善案を提示しており、その主な具体的な提言例（要旨）は次のとおりです。

（目的と事業・活動の重点）

- 同窓会の活動は、当面「会員相互の親睦」及び「母校の発展に寄与」する活動を重点に実効の上がる方法で実施し、「社会的活動に寄与」する活動は、経費面、人材面及び要領面（やり方）について「現実」をしっかりと踏まえた上で、本来活動とも言える「2本柱」を阻害しない範囲で実施すべきである。

（組織）

- 同窓会の組織は、期生会と地域支部等を「主軸となる骨幹組織」として明確に位置づけて組織を充実・整備すべきである。

（機関・人事等）

- 「会員相互の親睦及び意思疎通に資する」ために実施している「現行の総会」を廃止し、議決機関としての総会にすべきである。「新しい総会」は、会則の大改正や同窓会の根幹に関わる大事業の実施など重要事項の決定又はその周知徹底のために代議員会が必要と認めた場合や、防大創立10周年毎又は25周年など特別な年度にあたり代議員会が必要と認めた場合に開催し、そのような節目の年には、代議員会に代わって必要事項を決定し、併せて母校の発展を祝賀する等の位置付けにすべきである。
- 代議員会の実施要領を改善するとともに、新たに「副代議員（仮称）」を指名し、「正代議員」が代議員会に出席できない場合に「副代議員」が出席できるようにする。また研究科各期に1名の代議員を割り当てるべきである。
- 同窓会の役員等に現職会員を多く選出・選任し、例えば、会長を退職会員のできるだけ若い期から選出し、新たに、副会長に現職会員の階級上位者の「統幕議長職」あるいは「防大幹事職」にある者から選任する等を検討すべきである。また事務局の各部には、部長職を含め現職会員（首都圏勤務者）を選任

し、特に事業部は現職会員が中心になって「現職会員のための事業」を実施すべきである。

(活動基盤)

- 同窓会は現在「任意団体」であるが、時代の趨勢を踏まえて、例えば「中間法人」設立等の研究・検討を実施すべきである。
- 小原台事務局を整備し、母校との意思疎通をさらに図るべきである。
- 同窓会活動・事業の「地域的な偏重・格差」を是正するために、できるだけ全国各地域で色々の活動を実施すべきであり、そのために活動主体となる地域組織の整備を急ぐべきである。特に関東地方又は首都圏等のように地域支部（地区支部）がない地域においては、地域支部等の設立あるいは同好会等の結成など何らかの形で会員の組織化が必要である。

(財務基盤)

- 会費は現行通り「3尉初号俸の1/4」とし、会費徴収率の維持・向上に引続き努力すべきである。また会費以外の財源確保について「寄付受け」等を検討すべきである。
- 「費用対効果」の考え方をより厳格に適用して事業を精選する等、財務状況の改善・向上を図る必要がある。

(具体的な事業・活動等)

- 「懇親会」は、会員相互の親睦を深める絶好の手段であり、大いに奨励すべきであるが、従来どおり「会

費制」を前提で実施すべきである。

- スポーツ等の交流会は、地域支部等や期生会の事業・活動とした方が懇親の実が上がるので、同窓会本部では実施しないこととし、また愛好者の「同好会」活動として定着させるのが適切である。同好会は、同好会会員の「自己負担」による実施が原則であり、現職会員も、退職会員も、また女性会員も、愛好者が自由に参加種目等を決定して、輕易に参加すればよい。
- 退職会員のホームカミングデイ(HCD)と同じように、現職会員が在職20周年又は25周年に当たり防大に集まり、防大生との交流を図り、また同窓生自身も自衛官としての決意を新たにするために「現職会員HCD」の事業を検討すべきである。
- 会員が死亡した場合、現行どおり「弔電及び生花」を供するが、「運命共同体の一員」と言われながらも、殆どの会員が叙勲の対象からも漏れ、中央勤務の機会が少ないことに鑑みて、弔電は同窓会員代表として、「社会的地位」を有する会員の代表とも言える現職会員の「各幕僚長名等」で打電することの可否について検討すべきである。本事業は、財政的に相当大きな負担になるが、会員各人に等しく還元される唯一の事業であり、最も優先すべき事業と位置づけ、財源は基本的に会費収入から充当し、不足する場合には、機関誌の発行廃止や各種助成金の削減など他の事業の廃止・縮小等で対応すべきであり、また使途目的を明確にして、「寄付」受けやこうした相互扶助の「基金」を集めることを早期に検討・具体化すべきである。

あり方検討委員会の委員等名簿

(敬称略・順不同)

職務	氏名	期別等	備考
委員長	村田雄二郎	10期・陸	
委員	洗 堯	11期・陸	事務局部員兼務
委員	藤本 四郎	12期・陸	
委員	山根 峯治	14期・陸	
委員	経田 勇	12期・海	
委員	木村 誠一	14期・海	
委員	佐々木 勇	12期・空	
委員	松井 健	15期・空	
委員(現職)	宮寄 泰樹	22期・陸	陸幕総務課長
委員(現職)	大谷 祥治	21期・海	前海幕総務課長 ※ (~16.8)
委員(現職)	小野原正信	22期・海	海幕総務課長 ※ (16.8~)
委員(現職)	宮脇 俊幸	20期・空	前空幕総務課長 ※ (~16.8)
委員(現職)	吉岡 秀之	22期・空	空幕総務課長 ※ (16.8~)
担当副会長	藤縄 祐爾	8期・陸	

注) ※印()内は、委員委嘱・交代時期を示す。

- 同窓会は、毎年防大生の校友会活動や開校祭の実行に対して物心両面の援助を実施してきたが、近年防大を卒業した新会員の中には、同窓会が防大生にどういった支援をしているか承知しない者が多いことが判明し、現執行部は、平成16年度から防大生に「目に見える形」での支援を実施することとし、校友会活動や開校祭支援以外に、新たにカッター（短艇）競技会、断郊競技会、棒倒し競技会等にも支援し、「同窓会の支援」を継続してアピールすることになった。
- 個人情報保護法が施行され、この結果異動が頻繁にある現職会員の名簿データの入手・更新が著しく困難になり、各期生会の「全面的な協力」なくして名簿データの把握が事実上不可能になった。このため、早急に各期生会の陸・海・空要員別に「名簿管理員（仮称）」を新たに指名して、名簿データの入手・更新を担任してもらうことが必要である。各期陸・海・空の「名簿管理員」は、最小限年1回以上、夏の異動（8月）を基準に、現職会員の定期異動後すみやかに名簿データ（変更分）を掌握し、変化事項を同窓会本部に通報するシステムを確立すべきである。
- 同窓会ホームページを充実し、各期生会及び各地域（地区）支部等との接続をはかり、「防衛コーナー」の設置を含め各種コーナーを設け、また保全に留意した名簿管理システム等をできるだけ早期に構築すべきである。
- 同窓会ホームページの充実を前提として、機関誌（紙）の発行を段階的に削減又は廃止すべきである。
- 会員名簿の刊行は、これまで5年に1回実施してきたが、例えば防大創立10周年毎の記念行事の一環として、予約・有料制で刊行を継続し、この際広告を募って経費節減を図るべきである。
- 女性会員のための事業を検討すべきである。
- 外国人留学生等との交流を逐次充実すべきである。
- 会員が国政・地方政治の公職選挙に立候補する場合には、同窓会ホームページで紹介すべきである。
- 当面MCI事業のうち会員に対するサービスを行う「自主活動」を積極的に実行すべきである。
- 会員が主体で活動する団体やボランティア活動に対する「寄付」は実施せず、同窓会ホームページ等で紹介すべきである。

〔4 防大同窓会の改革・改善に沿った移行要領等〕の構成と内容

第4章は、「(1) 当面（現在～次年度）速やかに実施すべき事項」「(2) 約5年程度で改革・改善に着手すべき事項」「(3) 将来状況により検討・着手すべき事項」の3箇節から成り、第3章で提言した内容の時期的な実行要領等について言及しています。

- 今年度（16年度）から実行すべき事項として次の事項を提案しています。
 - ・会費納入率の改善
 - ・名簿管理員（仮称）の指名
 - ・同窓会ホームページの充実
 - ・事業の精選・効率化等
- 次年度（17年度）に実施すべき事項として、以下の事項を提言しています。
 - ・会則の改正
 - ・状況により『新しい総会』の開催
 - ・「地区支部等」の立ち上げ奨励及び「現職会員地区支部」の活動の活性化
 - ・「中間法人」設立の検討・研究
 - ・現職会員の役員又は事務局要員への選任
 - ・各期生会・地域支部等のホームページ等の実態調査
- 約5年程度で改革・改善に着手すべき事項として、次の項目を列挙しています。
 - ・同窓会ホームページの拡充と名簿管理システムの完成
 - ・機関誌（紙）発行の削減・廃止及び会員名簿刊行の予約・有料化
 - ・スポーツ交流会等の地域支部等への移管
 - ・講演会の各地域持ち回り実施
 - ・「法人格」取得と寄付受け制度の検討
 - ・会費以外の財源確保及び「積立金」の性格の明確化
- 将来状況により検討・着手すべき事項として、以下の3項目を挙げています。
 - ・政治的活動
 - ・受託事業の実施
 - ・同窓会の活動拠点



国の護り

期生会だより

「5期生」

会長 福地 建夫

今年の期生会の最大のイベントはホームカミングデーでしたが学校、同窓会及び多くの期生の協力により成功裏に実施できました。

全国各地から家族を含め420名が小原台に参集し、卒業式、観閲行進を見学して学生時代を懐古し、懇親会では更に期生会の絆を強めることができました。

その後の期生会の事業としては名簿及びメール網の整備を推進するほか例年と同じように同窓会主催のゴルフ、テニス、囲碁大会に選手を派遣しました。残る事業としてはホームページの立ち上げで浅野理事が中心となって準備を進めております。

現役員の任務も残り少なくなりましたが、17年6月に予定しております総会に向けて準備に入りました。今後解決しなければならない問題もありますのでこれまで以上のご協力をお願いします。

7期生会

北斗会理事長 出来 義彦

1 役員交代

平成16年7月9日(金)グランドヒル市ヶ谷で行われた北斗会総会において、役員が交代が承認されました。

これまで北斗会を見事に運営して来た大越兼行会長以下の旧役員を継いで、落合 峻新会長はじめ次の者が新役員(任期3年)に就任しましたので、よろしく申し上げます。

本部 会長	落合 峻(海)
副会長	中村 暁(陸)、田中伸昌(空)
理事長	出来義彦(海)
理事	大塚忠宏(陸)、出水克明(海) 北原 彰(空)、樋口隆士(空)

各支部長等

北海道支部長	小澤 肇(陸)
東北支部長	阿部多功(陸)
東部支部長	江藤兵部(空)
同理事長	伊藤文夫(空)
近畿・中国・四国支部長	倉掛正徳(空)
九州支部長	伊藤宏美(陸)

2 ホームカミングデー

新役員の大事な仕事の一つは、平成17年春に予定されている「7期生ホームカミングデー」(卒業生による母校訪問)を企画・実施することです。すでに同窓会本部と連絡を取り、先輩期の教を請いながら準備に取りかかりつつありますので、やり方等について、ご意見やご希望のある方は、各役員に申し出て下さい。

13期生会だより

理事(空) 中島 正雄

先日、13期生役員会のスナップ写真のメールを参加役員から受け取りました。

自分の顔は毎日、洗面時に見ているためか、気にはしていませんでしたが、たまにしか会わない同期生の写真を見てみると何と老けていることか。まるでオジイさんだ。

気分は40歳代から変化はないものの、年齢は確実に増え、13期生は平均的に58歳となりました。これを人生半ばと見るか、終焉近くと見るか、気分齢と実齢の差は退官者の価値観になって現れている感じがします。

小原台での13期生としての出会いが、途中、陸・海・空自衛隊にてさまざまな思い出を残し、今や、民間の人として再び自由闊達な出会いとなっています。そこには、階級意識はなく、同期生という共通意識だけがあり、初対面であろうが、なかりやが和やかに話がはずみます。不思議です。

他期の詳細を承知しておりませんので明言できませんが、13期生会は昭和55年3月に会則が施行され、その組織は特徴があるものと考えています。それは、陸・海・空合同13期生を本部とし、これを13期生会と称していることです。その会長は学生隊学生長経験者が陸、海及び空の順に3年任期で交代制となっています。また、陸・海・空の要員を各支部とし、その支部長を学生隊学生長が終身、務めることになっております。つまり、支部長は6年毎に3年間の会長を兼ねることになります。

確かに、この組織は同期の間で2佐から将の階級差のある現職自衛官が多い時代には沈滞さみでした。さらに各支部は一般大卒の同期生を含めた活動が中心となりました。

13期生会としての大掛かりな総会は2003年2月に約15年振りに開催され、ご婦人方を含めて約180名の大懇親会となりました。これは新しい時代、つまり長い自衛官職を終え、新鮮で、しかも長い挑戦への始まりの意味で、第1回目大懇親会と言えます。2004年2月にはほぼ97%

の同期生が退官し、第2回目の大懇親会を盛大に行いました。

今後は毎年2月に開催することとし、まさにこの時期を予期していたかのような13期生会会則がようやく躍動し始めました。その目的には「生涯にわたる融和、団結及び相互扶助」を図ることが明記されています。

2005年は2月19日(土) 15:30~18:00、第一ホテル東京シーフォート1階レストラン(全フロア貸切)にて実施します。同伴者は10,000円、単身者は8,000円です。この時期には、陸・海・空同期生の全てが退官又は退官近くになるものと予測されますので、今までにない新たな雰囲気を楽しみにしております。同期生の諸君、是非、ご参加ください。

同期生の70歳代、80歳代、90歳代の時代を想像することは不可能ですが、幸い13期生の陸・海・空各要員に終身世話人3~5名が存在するため、これらを核とすれば今後趣味別会合等、の変化のある活動も楽しみです。状況によっては60歳代、同期生経営者懇談会もありうるものと期待しております。

13期生は団塊世代の先頭集団です。

世に言う2007年問題とは、まさに我々、同期生が60歳に入る時期、民間企業での大量退職者の出る時期です。国内消費は日本経済の根幹です。団塊世代の先駆者らしく、新しい消費文化に挑戦しましょう。全国に散在する同期生諸君、期生会執行部は活気があります。毎年2月に再会し、お互いの元気を共有しましょう。

防大第19期生卒業30周年記念懇親会の開催について

防大第19期生の皆様におかれましては、ご壮健にて充実した毎日を過ごされていることと推察されます。

さて、我々防大第19期生も卒業30周年を迎えることとなり、既に定年を迎えて第二の人生で頑張っている方もいますが、ほとんどの方が定年を間近にしているこの時期、最後の同期生会を開催したいと思います。

どうかご夫人同伴の上、懐かしい小原台の話を咲かそうではありませんか。

時期 平成17年4月28日(木) 18:00~21:00
場所 グランドヒル市ヶ谷
問合先 陸: 杉村 宏 (8-6-47500)
海: 後藤 博之 (8-6-54141)
空: 山之内 裕 (8-6-64000)

なお、本件を退職者にも連絡いただければ幸いです。

担当 陸: 警務隊本部 榊枝 宗男 (8-6-47600)

29期生会

事務局長 糟井 (海)

29期生は、本年3月で防大卒業後、20年の節目を迎えます。そこで、卒業20周年を祝すとともに、同期生相互の融和団結を図り、29期生会の益々の発展を期するため、記念行事を企画したいと考えております。期生会長の馬場君(陸)がドイツ防衛駐在官、副会長の城殿君(空)が米国防大在学中と、両君ともに不在であるため、陸、海、空の部会長である柴田君、佐藤君、村上君と事務局長の私とで、現在アイデアを出し合っているところです。今回は、この紙面をお借りして、企画の素案を報告させて頂き、同期生諸君への協力を呼びかけたいと思います。

現時点での素案としては、副会長の城殿君が帰国する6月から7月頃を目途に、期生会の事業・会計報告、規則・役員の変更等を行う総会及び記念祝賀会(グランドヒル市ヶ谷)の開催に加え、靖国神社への記念参拝と植樹を実施したいと考えております。今後は、末尾に記します現期生会役員と東京地区勤務者を中心に実行委員会を組織し、記念行事の諸準備を進めたいと考えますので、該当する諸君には、積極的なご支援・ご協力をお願いします。

29期生の諸君からの本件に関する建設的なご意見、ご要望を、また、諸先輩方からのご経験を踏まえたアドバイスをお待ちしております。

(連絡先: jsc-gakusei4@jso.mail.jda.go.jp)

【29期生会の現役員】(敬称略)

会長: 馬場(陸)、副会長: 城殿(空)・日高(民)、陸部会長: 柴田、海部会長: 佐藤、空部会長: 村上、事務局長: 糟井(海)、総務理事: 高田(陸)、総務: 中村(陸)・中尾(海)・大岩(空)、庶務理事: 長島(空)、会計理事: 山内(陸)



若人の城

同窓生アラカルト

防大短艇委員会に思いをよせて

黒部会会長 7期(海) 向井 正興

我等の母校防衛大学校も平成14年11月創立50周年記念行事が成功裏に修了したことを心から喜びたいと思う。21世紀にはいり小原台も新しい段階を迎えようとしております。自衛隊の活動もインド洋上、東チモール、グラン高原さらにイラク派遣など世界各地で活躍しているところです。このような情勢の中で、わが愛する短艇委員会も紆余曲折をしながらも名称変更もなく昔の委員会のまま波乱万丈の輝かしい伝統を残していると思う。この伝統を防大生諸君に受け継いで貰いたいし、また、われらOB組は、その活躍状況を絆として交流のネタとしよう、平成11年にOB会「黒部会」を発足、私向井が会長に推薦され今に至っている。(黒部とは、走水沖にある立標で、カッター漕走訓練時の目標だった。今も黒い立標であるが、船がぶつかったらしく傾いているのが気に掛かる、早く直立になるよう願っている。)

そこで、「全日本カッターレース」が毎年5月に参加校持ち回りで開催されている。レース本番をひかえ、選手諸君の激励会を割京東京湾(旧雷永)で行っている。激励会では、司令官、総監経験者をはじめ、若手のOB連中の励ましのエールで満ちています。

激励の一こまをここに披露すると、

「カッターには魔物が住む」という、第1の魔物は「あんなきついばかりの奴隷船になぜのの?」その奴隷船にも何ともいえない魅力がある。「だからやめられない」第2は「競技に魔物がつきまとう」という、「勝負は時の運」の諺があるが、運ばかりではなさそう。それがわかれば苦労しないよ、と言いたい。全日本カッターレースの歴史の中で6連覇は見事の一言に尽きる。その連覇の後の惨めなこと、「どうしたんだ」との問いに“こうなんだ”と答えられるものはない。それが、「勝ち組」「負け組」を生み、言葉のゲームの始まりとなっている。この言葉のゲームは懇親会の花形である。やや「負け組」のクラスの参加者が少ないのが気がかりだ。おおいに論戦をして魔物が何であるかをひねり出して貰いたい。

やっぱり勝負は勝たねばだめだ、勝って勝って勝ち抜け!

こんな檄に、防大クルー連中の決意表明有り。すがすがしい限りである。

今のところ15、16年度と連覇している。

ひとつ気がかりのことがある、平成11年のことと記憶しているが、学校側から女子クルーの競技相手をOBでして貰えないかとの話があり、早速メンバー集めをしたところ2クルーできた。防大女子2クルーとOB2クルー

の1000メートル直線1本勝負とあいなった。

結果は、女子クルーの「きいろい」声、悲鳴の声とも聞こえたが、容赦なくOBチームの勝ち。次の年はやや肥満年配を入れて調整をしたクルーとしたが接戦とならず、女子クルーを励ますどころか、がっかりさせたかど気になった。

その後もうこの話はなかったこととしたいむね学校側から通知があり、やむなく引き下がることとした。

さらに衝撃的なことになった。それは防大創立50周年行事の一部であった全日本カッターレースが走水沖で行われたので応援に行った。男子チームは、優勝の栄誉に輝いたが、女子チームは参加6チーム中に防大チーム名がなかった。

聞けば「なかなかこぎ手」が集まらないとのこと、だけど生徒数の少ない「九州看護福祉大」では「この厳しさが、看護の原点」だ、とにかく参加することが第一、と指導者の方の声を聞いた。

防大も見習う点はないのか?このようなことで精強な自衛官になれるのか?憎まれ口のように聞こえるかもしれないが、一度途切れたものを復活させるのは至難の事と思うが、防大のことだから、ほっといてくれといわれればそれまでだけれども、はがゆくてたまらないし、なんだかさみしい気がする、読者の皆さんはいかに。

今年も8月1日、短艇委員会恒例の夏合宿遠漕があり、走水ポンドから三浦海岸まで4隻で10:00出港、私、向井とクラスの牧山、別府がそれぞれ同乗させて貰った。

はじめは、クルーも元気がよかったが、漕げども漕げども向いの南風と逆潮のため悪戦苦闘。このままでは、目的地に日没時までには着かないと判断され15:30久里浜沖で反転ポンドに引き返す。来年は何としても完漕できるように応援したいし、防大ともつながりが切れないよう生きていきたいと思う。

マレーシアで日本語教師ボランティアの記

8期(空) 原野 英紀

今年の7月30日から8月30日の間、マレーシアのキャメロンハイランドという常春のリゾート地で日本語教師を体験してきましたので、この概況について記したいと思います。

○ マレーシア

マレーシアはマレー半島南部とボルネオ島北部を合わせ国土総面積33平方km²(日本の約90%弱)、人口約2,300万人、多民族国家。人口の60%がマレー系、30%

が中国系、残りがインド系で構成。国教はイスラム教、公用語はマレー語、その他中国語、タミール語が使われています。また、英語も幅広く使用されており、旅行者は簡単な英語で用が足りません。

○ キャメロンハイランド

マレーシアの首都クアラルンプールから北方約200kmの中部山岳地帯に位置し、標高1,500mの高原です。1855年イギリスの測量技師キャメロンにより発見され、1920年頃から高原リゾート地として開拓整備され発展してきたそうです。その周辺は深いジャングルに囲まれた自然が広がり、丘の上には英国風の瀟洒な山荘やホテルが散見される素晴らしい景観を有しています。

この地の特徴としては、年間を通して最高気温24度、最低気温14度の避暑避寒地であると同時に紅茶や花(プーゲンピリア等)の生産、珍しい蝶・昆虫の生息地としても有名です。故松本清張はここをマレーシアの軽井沢と絶賛し、この地を舞台にタイのシルク王ジム・トンプソンの謎の失踪事件を主題に「熱い網」を書いています。

○ 現地における日本語教室

この教室はキャメロンハイランドクラブというNPO団体(本部は大阪)が主宰し、マレーシア政府観光局と現地町役場の協力を得て2000年8月に開講しました。毎年1月から3月と7月から9月にそれぞれ約3ヶ月間開講しており、この間各クラスごと週3回各2時間の授業を行い、日常会話が話せる水準まで指導しています。

今回、私は初めてこの教室の教師として参加しました。現在クラスは生徒の技量や年齢等に応じて10クラス約100名(中学生から社会人)の生徒がいます(このほか個人指導2名)が、最近日本語熱が高まり受講希望者が増加しつつあります。

10クラスのうち私が担当したのは中学生初級クラス27名(このクラスは人数が多すぎるので教師2名が担当)と個人指導の2名でした。個人指導の1名は50歳台の医者(男性)、もう1名は40歳台のレストラン経営者(女性)で週2回づつ学習しましたが、生徒100名のうちこの2名が群を抜いて日本語が上手だったようです。



○ 現地におけるレジャー等

この夏(7月から9月の間)、日本人の1ヶ月以上の長期滞在者は約150人(日本語教師25名を含む)くらいと推測され、この大半が定年退職した夫婦連れで、当地において各種レジャー等を楽しんでいます。代表的なものはまずゴルフ。タクシーで10分位の所にある公営のゴルフ場でプレイできます。費用は平日でクラブを借りキャディを付けても約3,000円です。私も2回ほどラウンドしましたが、コースが非常にタフでスコアはいつもより10くらいオーバーしました。

次にトレッキングがあります。熟練者から初心者向きまでのトレッキングコースが14コースあり、初心者コース以外はガイドの案内が必要です。またジャングルウオークといって40~50年前まで虎や象が生息していたジャングルを専門のガイド付きで約3時間歩くコースもあります。このほか各種観光ツアーや各種同好会(テニス、囲碁等)、各種教室(料理、刺繍、気功等)があり、自分の好みに応じて参加する事ができます。

○ 生活事情

キャメロンハイランドには長期滞在者に必要なものは殆ど揃っています。住居関係では沢山のホテル、コンドミニウム、アパート(短期入居可)があり、費用は中級クラスで約5万円/月です。次に食事関係では中華料理、インド料理、マレー料理を食べさせてくれるレストラン(一部日本料理もある)が30~40軒あり、費用は私の場合約2万円/月でした。

とにかく物価が安い(日本の1/3~1/5くらい、但し酒類は日本と同じかそれ以上)。例えば洗濯代は4kgまで6RM(リンギット)約192円。1RMは約32円です。クアラルンプールからキャメロンハイランド(タナラタという町)まで約200kmをタクシーで(約4時間)3,200円、バスだと412円。

キャメロンハイランドについては既にテレビや本で紹介されているように“夫婦2人年金15万円で暮らせる”というのは本当だと感じました。

因みに今回私の収支決算の概略は次のとおりでした。

旅費(航空運賃)	81,000円
宿泊費	40,000円
食費	24,000円
レジャー費	16,000円
その他(タクシー代、土産代、登山靴代等)	20,000円
計	181,000円

(ボランティアだから経費は教材代を除き全て自前でした)

○ 終わりに

本年3月に再就職先を退職し、4月から週休7日モードに入りました。現役時代から“仕事を辞めた後、如何に過ごすか”を考えていましたが、本を読んだり、



趣味を生かすだけでは何か物足りない。そこで自分でできるボランティアをやろうということで、5年前から千葉市国際交流協会で外国人に日本語を教えてきました。現在週2回、米国女性と韓国女性に日本語を教えています。今回たまたま日本語教師仲間からキャメロンで日本語教師を募集しているという話を聞いて応募し、行ってきた次第です。

わずか1ヶ月の体験でしたが、気候は良いし、いろいろな国の料理も味わったし、ジャングルも歩いたし、何よりも生徒さん達と楽しく学習できたし、本当に有意義な体験でした。しかし来年1月からまた参加するかという事については今の所わかりません。女房がまだフルタイムで働いており、私の専業主婦業を当てにしているところがあるので、多分家庭内ビザは下りないでしょう。

最後に、海外における日本語教師のニーズは、東南アジア諸国、中国、韓国、豪州、ニュージーランド等が高まりつつあると言われていています。いずれ近い将来、女房と一緒にマレーシアをはじめ何処か条件の合う国へ遊びに行きたいと考えています。

PKOに接続し、NGOで東チモールの国土復興支援

特定非営利法人日本処理・復興支援センター
理事（13期）庄司 智

カンボジアのPKOに自衛隊が派遣されてから10年が過ぎた。

国際協力の名のもと、各国と力を合わせカンボジアの復興支援に活躍してきた陸上自衛隊は、若葉マークを付けての参加ではあったが、その成果はほぼ完璧で、素晴らしい、絶賛の価値があった。

しかし、自衛隊が撤収した後は、装備品の建設機械は日本に持ち帰られ、カンボジアの復興は、復興支援前に逆行し、ショベルとツルハシでの建設工事になってしまった。又カンボジア復興のためにと残してきたプレハブ

（組立式建築物）も、自衛隊が撤退すると、短期間の内にめぼしい物は持ち去られ、壁、床等燃える物は、現地住民の生活の為に燃料となり、残ったものはゴミの山になってしまった。

延べ2,400人の自衛隊員が家族と6ヶ月も離れ、暑さと戦い汗を流し、整備した道路は、再び荒廃し、元の姿に戻ってしまった。

平成14年東チモールに派遣された自衛隊は、カンボジアの教訓を生かし、建設機械は民生品を主に装備し、撤収の際には東チモール国土復興の為に建設機械を東チモール政府に譲渡するとともに、4次に亘る派遣施設群では、本来任務の復興支援の他に建設機械の操縦・整備と、工事の管理について現地人を教育し、技術者の育成を図った。

東チモールは長い間インドネシアの統治下であり、統治下の教育は支配階級のインドネシア人が主体で現地の東チモール人は、ほとんど教育を受けることができず、識字率は50%以下である。

現地派遣施設群は、建設機械の操縦・整備や工事の管理の技術者がなかなか育たず撤収後を心配していた。

この状況を知った施設科OB有志は、この窮状を救うべく同志を集め自衛隊撤収後自衛隊の仕事を引き継ぎ、東チモールの復興を支援することにした。

平成15年5月12日平崎憲昭氏（防大5期）を理事長とする「日本地雷処理・復興支援センター」（略称JDRAC）を設立、9月18日東京都は、NPO法人設立を認証、10月9日法人格を取得した。

JDRACは自衛隊撤収後、引き続き建設機械の操縦及び整備訓練、建設機械による復興工事、組立建物（プレハブ）の建築を追求していた。

PKO後のアフタケアについて計画を持っていなかった内閣府（PKO本部）及び外務省もJDRACの熱意に動かされ、JICA（国際協力機構）に建設機械の操縦及び整備訓練と建設機械による復興工事を担任させることとし、JDRACからは渡邊栄樹氏（防大13期）が統括責任者として派遣されている。

JDRACは15年11月と16年2月に東チモールに調査団を派遣、16年6月1日に東チモール国ディリーに現地事務所を開設、6月11日東チモール国と相互支援の覚え書きを締結、7月19日東チモール組立式建物技術訓練センター



を開設、16年11月現在、3人の元自衛官を教官として19名の訓練生を教育中で、訓練練度は順調に上達し、かなり複雑な組立式建築物の解体、組立ができるようになった。

日本地雷処理・復興支援センター（JDRAC）は設立し1年が過ぎ、東チモールの現地では、順調に組立式建物技術訓練センターを運営している。自衛隊が残っていた組立式建築物を解体、東チモール政府の要求に応じた建物を建築し、非常に感謝されている。

国連による国際復興支援は被支援国の初期復興と自立の促進が主体であり、その成果の拡大は被支援国の能力上、十分でないのが現実である。

かかる状況における国際貢献派遣部隊の撤収（撤退）の見極めは極めて難しく、多くの問題を残している。

東チモールにおいても、これを受け継ぐ組織も人も未完成であり、国連の支援期間の延長を要望していたが、国連支援団は大幅に縮小され主要列国は、当初の計画通り撤収した。

我々、JDRACは東チモール政府の要請により、これらの問題解決の一助にでもなればと日本で初めてのPKOに接続してのNGOとして東チモールにおいてささやかな国

土復興支援をしております。

16年9月外務省の日本NGO支援無償資金協力から16年9月以降一部資金協力を得る事ができましたが、かなりの資金が不足している。

JDRACは自衛隊OBが集まり、退職金や年金の一部を出し合い、定年後の小遣いの一部を出し合って組織を運営している。

防大OBの中で、我々の意気込みに賛同して下さる方はJDRAC事務所にご連絡下さい。体力と暇のある方は労力をお金の出せる方は資金を出して是非ご協力下さい。

JDRAC事務所 〒102-0082

東京都千代田区一番町6-3

ライオンズマンション310号室

TEL 03-3239-6085

FAX 03-3288-8288

郵便振込口座

特定非営利法人日本地雷処理・復興支援センター

口座番号 00120-3-425862

支部だより

栃木地区支部

事務局長 三代 武徳



栃木県防大同窓会は、全国各地で防大同窓会の地域支部、地区支部が次々と発足する中、母校防衛大学校が創立五十周年を迎える記念すべき年に、栃木県防大同窓会を発足させようと栃木県在住の同窓生有志により会

合を開き、君嶋 信氏（3期）を発起人代表とし平成14年12月栃木県防大同窓会を開催し、会則、今後の活動方針等を審議し、役員を選出を行い、初代会長に鯉沼義則氏（1期）が選出され参加会員全員の賛同を得て発足し、早や2年が経過しました。

栃木県は防大同窓会の組織構成では、東部地域支部の管轄地域となっておりますが、未だ東部地域支部が設立されていないため、現在も同窓会本部の直轄支部に属しております。

栃木県防大同窓会は目的の第一に会員の親睦を図ることを挙げており、毎年1回総会、懇親会を開催し、年度の事業等を審議し、新たに県内在住となった同窓生や勤務先の変更等を更新した同窓会名簿を配布して会員相互の親睦を深めております。

同窓会活動の一つを紹介いたしますと、2ヵ月に1回を基準に同窓会ゴルフコンペを実施し、会員及び家族が参加して平素の運動不足を補い、会長杯争奪に熱気があふれ、珍プレーありナイスショットありで和気藹々の雰囲気の中でプレーを楽しみ、表彰式では童心に返ったような笑



▲同窓会ゴルフコンペ

顔で受賞する会員、また次回の入賞を目指し反省の弁を述べる会員等、笑いの耐えない楽しい行事として定着しております。

現在同窓会の退職会員は62名で年々増加しておりますが、肩の凝らない楽しい同窓会活動と現職会員との親睦を深め心の支えとなるような活動を実施し本同窓会がさらに充実発展するよう努力したいと考えております。

北 陸 支 部

事務局長 西川 清

北陸防大同窓会は、平成14年8月の発足以来、3年目を迎えましたが、退職会員93名、現職会員68名の合計161名の小規模の地域支部です。

平成16年に実施いたしました事項を紹介させていただきます。

竹切りボランティアin金沢 2004

(防大同窓会のホームページでも紹介)

平成16年5月8日(土)に金沢市近郊にて実施いたしました。

行事としての名称は、「竹切りボランティアin金沢2004」でした。

北陸防大同窓会からの参加者は、久保会長(陸3期)以下、OB10名(石川県8名、福井県2名)、現役9名(小松基地6名、金沢駐屯地2名、石川地連1名)、家族2名の21名でした。

里山の住人の多くが高齢者であり、かつ、米作の休耕も相まって、竹林の孟宗竹が水田をも竹林に変えていました。

また、金沢は積雪地でもあり、雪の重みで竹が倒れ歩けないような状態を呈していました。

人の入らない里山は、熊やカモシカの生活圏になってしまい、人間の住居と野生動物の生活圏が隣接するという環境が生じています。



▲竹取ボランティア参加の北陸同窓生

今年の参加者は、我々のほか、一般の参加者や精薄施設の人たちも参加していました。

参加者全員を10個班に分け、我々も2名ずつ班に配置されました。

班長には、森林組合の人たちが指名されていましたが、人を指揮して作業をした経験がないようでした。

そこで、我々北陸防大同窓会には何をしてくださいと指示があったわけではありませんが、作業を始めてから、皆、安全管理に気を遣わないといけないと感じました。

昼食時には、日本財団の曾野綾子会長を囲んで食事をしましたが、和気あいあいといろいろなお話をする事が出来ました。

昼食には、地元のタケノコ料理や冷や奴などを持参したおにぎりと一緒にいただきました。空気の清浄な山間地で身体を動かした後の食事は、格別でした。

午後は、早めに作業を終え、3時から地元石川の「手取亢龍太鼓保存会」の演奏や太鼓指導がありました。(日本太鼓連盟がこの行事に協力することで計画されたようです。)

夕方からは、懇親会ということで酒宴になりました。ここでも曾野綾子会長を囲んで大いに盛り上がりました。

同窓会本部の古賀部長には、日本財団との調整から現地指導まで面倒を見ていただきありがとうございました。

平成17年も竹切りボランティアがあると思いますので、全国から防大同窓会会員の参加(視察)をお待ちしています。

第3回総会

総会は、平成16年8月28日(土)、JR金沢駅前金沢都ホテルで、来賓5名、退職会員21名、現職会員27名の合計53名の参加を得て開催いたしました。

国歌斉唱のあと、事業報告、会計報告及び新計画の報告が議長井上博氏(陸3期)のもと行われました。

続く講演会は、第6航空団司令兼小松基地司令の齋藤治和氏(空22期)の講話を拝聴いたしました。

懇親会は、会長挨拶、来賓祝辞をいただき、懇談中には各部隊長の挨拶もいただきました。防大学生歌に始まり、逍遙歌で終わるパターンですが、有意義な会となりました。



▲懇親会・逍遙歌斉唱

本部へのお願い

北陸防大同窓会では、社会への貢献（地域への貢献）の機運が高まってきています。同窓会の名前も堂々と表に出そうと考えています。つきましては、校旗を入手し、竹切りボランティアなどで掲示したいと考えていますが、いかがなものでしょうか。以前、東海支部の総会に参加した時、本部から借用した校旗を拝見しましたが、大きすぎる感がありましたので、その1/2~1/3の大きさの旗がいいようです。「防大同窓会」の文字が入っているとなお結構だと思えます。本部でのご検討をお願いいたします。

連絡先 E-MAIL nishikawa@kyoto-p.co.jp

FAX 020-4624-5955

東海支部

事務局次長 佐藤裕紀夫

東海支部は、愛知、三重、岐阜の三県を範囲として平成12年12月に発足し、満4年を迎えました。現職会員約360名、退職会員約310名計670名の中規模の地域支部です。

支部は、昨年の総会において、江戸会長（陸1期）を中心とした執行部体制から、森新会長（空5期）を中心とした新執行部体制への交代を承認され、新たな陣容で支部活動を開始したところです。

森会長を核心として役員一同、一致団結してこれまで諸先輩が築いてこられた支部の体制を維持発展させ、同窓会の目的の達成に努力していこうと決意しているところです。

ここで過去1年間を振り返り、支部における主なイベントにつきまして簡単にご紹介したいと思います。

- ・15年12月 第4回総会
- ・16年2月 中部小原台クラブ総会
- ・16年7月 防大生の部隊実習の激励
- ・16年12月 第5回総会

○ 第4回総会

昨年の総会は、部隊の行事等の関係もあり、歳も押し迫った平成15年12月21日、JR名古屋駅近くのホテルキャッスルプラザで、来賓として北陸支部会長の久保正佳氏（陸上3期）、関西支部会長の中一皓氏（航空7期）を迎え、現職会員38名、退職会員69名、ご家族及び部外からの参加者16名の参加を得て開催されました。

総会は、同窓会本部からお借りした国旗及び防大校旗を会場正面に掲げ、江戸会長から、イラク問題等、昨今の国際情勢から、国の防衛政策もその場対応に留まらず、抜本的な取り組みを迫られる状況の中、防大同窓会の存在・意義が更に重みを増して来ることが予期されるので、会員皆さんの理解と協力を頂きたいとの趣旨で挨拶があり、続いて、事業報告・事業計画、決算報告と予算計画、会員現況等の報告が行なわれました。

最後に、新役員が満場一致で承認され、森会長以下の新役員が就任しました。新旧の役員が壇上に上がり、これまでのご活躍に感謝すると共に、新たな態勢での大いなる活躍を期待しながら新旧役員が固い握手を交わしました。



▲ 講演中の中谷元長官

総会に次いで、講演会が実施され、我々の同窓生であります前防衛庁長官の中谷 元 衆議院議員の「21世紀の国家防衛」と題した力強い講話を聴講しました。

長官としての勤務を通しての迫力溢れる講話に現職会員のみならず、退職会員も改めて国の安全保障の重要性を再確認させられました。

懇親会においては、江戸会長の挨拶の後、新退職会員を代表して一（はじめ）氏（陸14期）の乾杯で開宴となりました。宴が一段落すると、北陸支部代表の久保氏（陸7期）、関西支部代表の中氏（空7期）がスピーチされ、隣接の支部が同じ目的に向かって力強く活動されておられる様が確認されました。続いて現職会員（陸）代表の第10師団副師団長瓦谷育夫陸将補（陸15期）、現職（空）代表の飛行開発実験団司令林富士夫空将補（空16期）が、それぞれの部隊活動の現況について、報告をされ、退職会員にとっては、任務等が大きく変化しつつある新たな自衛隊の活動に大変興味深いものがありました。更に、来賓として参列して頂いた防大父兄会愛知代表の都築氏と愛知偕行会会長の石原氏の挨拶を頂きました。

再び祝宴に戻り、久しく会っていなかった仲間と酒を酌み交わし、歓談の一時を楽しみました。

続いて、新しく着任した森新会長から、「防大は、我々の精神的基盤であり、また誇りでもあります。現役諸官の活躍はもとよりOB諸氏も同じ気持ち忘れず一体となって頑張りたい。活動に当たっては、小原台クラブ・偕行会等志を同じくする方々との協調を図りつつ実施していきたい。」との会長就任の所信表明があり、森会長を中心にみんなで同窓会を盛り上げていこうと決意を新たにしましたところ。



▲ 第4回総会懇親会風景

最後の締めは、みんな肩を組み大きな輪になって、学生歌・追遥歌の大合唱。そして、最年少の坂本会員（陸47期）、柳詰会員（空47期）の音頭で、元気よく万歳三唱で締めくくりました。

○ 中部小原台クラブ総会

第20回総会が2月1日、名古屋クラウンホテルで、講師として防大28期のグッドウィル・グループ(株)会長折口雅博氏をお招きして開催されました。起業からの波瀾万丈の企業活動・組織運営等について興味深い講話を聞くことができました。我々の同窓生として、政界で大活躍中の24期「中谷前長官」に続いて、財界のホープの活躍の様子を本人から直接聞くことができ、会員一同大いに意気が上がったようでした。

○ 防大生の部隊実習の激励

平成16年7月、防大2年航空要員30名が小牧基地に実習に来たので、小牧支部が歓迎会を開催し、小牧支部の現職同窓生32名と東海支部の退職会員を代表して森会長、佐藤事務局次長（空12期）の2名が歓迎会に参加し激励しました。

○ ゴルフ部会・囲碁部会の活動

昨年発足した同好会は本年度は活発に活動を行い、会員の親睦に貢献しました。ゴルフ部会の会長は、浅井忠夫氏（陸1期）、世話人は水谷登氏（陸13期）で、融和団結・健康の維持増進を主眼に東海三県のいろんな場所で大会を催しました。（支部単独で3回、愛知偕行会と共催で2回の実施でした。）

今後、北陸支部、関西支部と合同で大会が開催される日を夢見ております。

囲碁部会は、山上登氏（陸10期）を世話人として、定期的に活動を実施しているところです。

○ 叙勲等

春と秋の叙勲で、会員の中から江戸前会長（陸1期）、常川会員（空1期）の受賞者があり支部としても喜びを分かち合ったところです。また、8月末に、愛知県扶桑町の町長選挙において、我々が江戸前会長が多くの町民の強力な支援を受けながら、立候補し、見事町長に当選



▲ 江戸前会長、扶桑町長に当選

を果たし、二重の喜びを噛みしめているところです。選挙に当たって、決起大会・出陣式には多数の同窓生が応援に駆けつけ同窓生の繋がり力の強さを示し得たものと考えています。

○ 第5回総会

第5回総会は、平成15年12月5日に昨年と同じ場所で開催の予定です。講演会の講師として、新しく着任された第10師団長の広瀬清一陸将を予定しており、海外での勤務経験・最近の自衛隊の活動状況等を交えた話が伺えるものと楽しみにしているところです。

○ 今後の部隊活動への対応

東海支部の地域には、空自の小牧基地があり、イラク復興支援活動の根拠基地が存在し、国際貢献を実施する自衛隊の部隊活動を間近にして、会員一同大変大きな関心を持っているところですが、近々、陸上自衛隊の部隊が派遣される機会があるものと予期をしながら、同窓会支部として、協力すべき事項について前向きに対応していくべきではないかと考えているところです。

関西地域支部（呼称・関西防大同窓会）

会長 中 一皓（7期空）

今年は関西地域支部が発足して、5年の節目の年になる。当支部発足の経緯、昨年度上半期までの活動状況は、昨年の「支部だより」に記載したので、今回はその後の一年間の活動内容と今後の活動方針をご紹介します。

昨年11月の総会には、昨今マスメディアで大活躍の防大9期空で現拓殖大学教授の森本 敏氏を講師に迎えて『国際情勢と日本』と題して講演をいただいた。激動する国際情勢において、森本教授が一年前に講演された内容にほとんど狂いがないことに驚いている。その折の講演内容の骨子は、末尾に記したホームページに記載している。是非、一度ご覧いただきたい。

「参禅と京料理を楽しむ会」は1期陸の中田氏と同窓の誼で東福寺 福島管長の特別のご配慮により紅葉が最高の季節を選んで隔年毎に催している。この行事には遠く北海道や関東から参加の常連もあるほどで、いつも定員超過の人気行事である。

史蹟探訪は従来、年1回、春に行なっている行事であるが、新春から始まったNHK大河ドラマ「新撰組」を楽しく見るための予備知識を兼ねて昨秋・今春の2回に渡って幕末「新撰組の足跡」を実施した。お陰でテレビ登場の人物や事件現場の相関関係等がよく判り、毎日曜の夜八時が待ち遠しい次第である。

「講演会」は、中国防衛駐在官として3年間勤務、現第37普通科連隊長 山下純夫氏にお願いした。氏は駐在官勤務の傍ら堪能な中国語を駆使して中国各地を視察された経験から、軍事のみならず政治・経済・教育等に言及する内容で50名を超える視聴を魅了した。

「カッター倶楽部」は、昨年の好成績に勢いを得て春先から練習に励んだが、残念ながら昨年ほどの成果は得られず、来期に期待を繋いだ。



「ゴルフ大会」は、春・秋の年2回が定着して参加者も20名を越す盛況となっている。

「テニス大会」は、日頃テニスに親しんでいる会員を中心に夫婦同伴の1泊2日で行い、早朝ハイキングや水泳・ジャグジーもあり、テニスをしなくても和気藹々の楽しい時を過ごした。

10月4日、第2回幹事会を開催、会長はじめ各期幹事18名が参集し、今年度下半期の行事予定と次年度以降の活動方針を検討した。従来の各種行事を踏襲しながら、次年度から新たに文化部同好会発足の提案があり、次年度第1回幹事会（2月予定）までに意見集約することとなった。

次に、イラク派遣部隊がいよいよ地元から派遣される日が近づいてきた。先発隊が年明け早々に、本隊派遣は5月の予定と聞いている。最初に旭川部隊が派遣の折、有志会員から支援の申し出があり、幹事会で検討した結果、それぞれの地域に同窓会組織があり、いずれ地元部隊が派遣される時に支援を申し出る事に決定した経緯がある。現役同窓生のみならず、派遣部隊すべての隊員に物心両面で支援できる内容で実施したいと考えている。

行事内容は、下記ホームページに一年間保存で更新している。ご覧ください。

【関西防大同窓会ホームページアドレス】

<http://www.Kcat.zaq.ne.jp/kazu-n/>

九州防大同窓会の活動概要

会長 山口 賢介

九州防大同窓会は、例年と同様年間7回（約2ヶ月に1回）の本部事務局会同（内1回は各県支部長会議、1回は各期代表者会議）を実施しています。また、毎年2月に九州防大同窓会総会を行う他、ゴルフ大会・夏季定期訓練中の防大生の激励・陸・海・空自衛隊記念行事への参加、及び各県支部毎に、各県防大同窓会総会等の活動を実施しています。また、今年度変わった事項として、福岡FM放送「活躍する自衛隊」のコメンテーターとして福岡地区の事務局のメンバーを中心に出演し、第4師団司令部・西空司令部の協力を得て、自衛隊の活動についてPRしました。

福岡FM放送「活躍する自衛隊」のコメンテーターとして出演

平成16年7月4日から8月8日までの6週にわたり、福岡FM放送で日曜毎に2時間半の生放送番組で、「活躍する自衛隊」が放送されました。

九州防大同窓会では、福岡の有志による参加ということで前会長の中野氏をリーダーとして、同窓会事務局のメンバーを中心に12名がコメンテーターとして参加し、自衛隊の活躍状況を、体験を交え説明しました。

2時間半の各テーマは次のとおりです。

- 1 自衛隊の活動について（任務・訓練）
- 2 災害派遣と自衛隊（雲仙普賢岳・風倒木）
- 3 災害派遣・テロ対処（阪神淡路大震災・地下鉄サリン）
- 4 国際平和維持活動（派遣された主な活動）
- 5 個別の国際平和維持活動での活躍
- 6 国防と自衛隊（国防における自衛隊の課題
有事立法、国民保護法等の課題）

九州防大同窓会総会

九州防大同窓会は、平成16年2月28日、福岡市内のホテル・セントラザにおいて10期生・30期生を担当幹事として「平成15年度防大防大同窓会総会・懇親会」を開催、1期の大先輩から防大卒業間もない48期の幹部候補生までの退職会員・現職会員の出席を得て、例年同様約200名が参加し、盛大な総会・懇親会となりました。

総会の後は、いつものように和やかな懇親会。締めくくりは、48期生の音頭で、学生時代を懐かしく思い出しながら、学生歌・逍遙歌を斉唱して散会しました。解散後、各期それぞれに、2次会へ流れました。

夏季定期訓練中の防大生を激励

夏季定期訓練のため、九州の陸・海・空自衛隊の駐屯地・基地（春日基地・都城駐屯地・鹿屋基地）を訪れていた防大生を、例年と同様に九州防大同窓会長山口氏をはじめ各県支部長及びOB代表等が訪問し激励した。

特に福岡の航空自衛隊春日基地では、副会長の市来氏

(2回) 事務局長竹下氏・事業部長須賀崎氏が激励したが、学生との約40年の差に歴史を感じていた。

第5回九州防大同窓会ゴルフ大会

第5回九州防大同窓会ゴルフ大会を今年の10月1日に恒例となりました小郡カントリークラブにおいて実施しました。今回は、現職会員にも案内を出し、航空自衛隊から4名の現職会員の参加がありました。(昨年度は、現職会員は不参加でその本音は、OBの高いレベルについていけない?からの憶測もありましたが)、3期生から13期生までの61名の皆さんが参加して、秋晴れの下、ダブルペリア方式により熱戦を繰り広げました。

今回は、企画担当者の予想に反し、現職航空チームの活躍が冴えて、賞品を独り占めされました。結果は次のとおりでした。

団体の部 優勝 現職航空チーム 準優勝11期 3位10期となり、グロスの部でも現職航空チームが優勝しました。また、個人の部でも1位美馬(現職航空) 2位工藤(現職航空) 3位濱嶋(10期)の各氏、グロスでは、1位上杉(8期)でした。

連絡先 九州防大同窓会 事務局長 竹下 治雄

沖縄地域支部

沖縄地域支部では、那覇市内のメルパルク沖縄において毎年恒例となった平成16年2月8日(日)の沖縄寮歌・大学の歌祭にOB3名を含む15名の会員が参加しました。

参加会員は、やや窮屈ではありますが、思い思いに昔懐かしい制服に袖を通し、順番がまわってくるまでは、海軍兵学校及び陸軍士官学校の応援出演をするなど、各大学の寮歌に耳を傾けて出番を待ちました。

いざ、出番になると、前口上の後、逍遙歌を全員で声高らかに歌い上げ(写真)、防衛大学校の名を高らしめました。



小原台クラブ

幹事長 中島 正雄 (13空)

岩崎新会長の陣頭指揮の下、変化の第一歩を踏み出しました。

- 1月1. 会報第27号を発行。記事の種類を増やしかつ読みやすくを編集方針として作製。
- 2. 1月23日(金)日本橋サリュコパンにおいて新年賀詞交換会を開催。
- 4月 4月21日(水)ニュー南総ゴルフ倶楽部(千葉県市原市)にて第1回小原台クラブオープンゴルフ大会を開催。会員及び同窓生OB総勢33名(1-33期)によるグロス個人戦で優勝は管博敏氏(13期、80ストローク)以下2位岡田美孝氏(13、84) 3位 岩崎俊雄氏(9、85) 4位 二宮修氏(13、85) 5位大曾根章氏(14、85)
- 7月 7月3日(土)新橋第一ホテルアネックスにおいて定時総会、講演会、懇親会を開催。講演会は岡本智博氏(11期元空将)による「激変する現代戦の実態」この内容については12月発行予定の会報28号に掲載。
- 12月 会報第28号発行。

上記以外に定期的に「小原台クラブ勉強会」を実施。20-40期の若手を中心に部外の一般参加者も多数得て2、3ヶ月ごとに開催。

概要は以下の通りです。

	内 容	メイン講師
第1回 2月13日	最近のSECURITY関連の事件や話題	萩原栄幸氏
第2回 4月21日	最近の金融事情	伊藤一泰氏
第3回 6月4日	サイバー犯罪の現状と課題	舟橋 信氏
第4回 9月29日	指揮官の行動学	仲摩徹弥氏
第5回 10月29日	秋の夜空と宇宙のロマン	井上 充氏

*平成17年の予定

- 1月21日(金)18:00~ 新年賀詞交換会 日本橋サリュコパン
- 4月20日(水) 第2回小原台クラブオープンゴルフ大会
ニュー南総ゴルフ倶楽部
参加者募集中(会員及び同窓生)
問い合わせ
snb02971@nifty.com (担当小木曾)
- 7月8日(金)18:00~ 定時総会、講演会、懇親会
新橋 第一ホテルアネックス
- 12月 会報29号発行

「小原台クラブ勉強会」問い合わせ先

yamamotokst@yahoo.co.jp (担当 山本)

顕彰碑献花式

例年同窓会主催により行われていた顕彰碑献花式は、本年度より開校祭の記念事業の一環として学校主催で開催されることになり、11月13日(土)13:30~14:00秋晴れの穏やかな天候の下、学生の手により奇麗に清掃された顕彰碑の前で、多くの関係者が参加して殉職された同窓生89柱に対する慰霊の式典が厳粛な中に整斉と実施された。

式には、渡邊同窓会会長を始め1期生から52期生までの各期の代表者55名が参加するとともに、学生隊・大隊学生長等の学生代表等多数の同窓生が参加した。本式典には、防大儀仗隊とブラスバンド部が参加したのに加えて、開校祭で訪れた多くの一般来校者が慰霊祭の会場に

詰め掛けて、例年のない盛大な慰霊の行事となった。

式は、参加者全員による黙禱、防大儀仗隊による儀仗、本年度飛行訓練中殉職された第43期生高瀬1等陸尉の芳名録奉納が行われた後、執行者の西原学校長の慰霊の辞に続き渡邊会長が同窓生を代表して慰霊の辞を述べ、その後参加者全員による献花が実施された。

本式典に参加した同窓生達は、高瀬1等陸尉を始め89柱の御霊のご冥福を祈念するとともに、志半ばにして職に殉ぜられた同窓生の遺志を受け継ぎ、我が国の平和と独立を守り国の安全を保つことに邁進する事を誓いあった。

総務部 後藤 記



執行者 西原学校長の慰霊の辞



渡邊同窓会会長の慰霊の辞

タイ国留学生との歓迎夕食会

防大への留学生は現在では常時約30名が在籍しており派遣国もタイ、韓国、シンガポール、マレーシア、モンゴル、ルーマニアと多彩になっています。

同窓会では卒業後母国で活躍しているこれらの留学生を毎年開校祭の時期に合わせて日本に招待しています。今回はタイ国からパンナシリ プアブアン陸軍少佐(防大39期)、ジラワット トングルアン海軍少佐(防大40期)の2名が招待されました。ジラワット少佐は防大卒業後東京理科大学で工学博士号を取得し現在は軍の学校で理工学の教官として勤務しています。

11月15日夕刻、汐留カレッタ46階のスカイレストランで2人の留学生と同窓会渡邊会長、佐伯副会長、後藤、中治各事務局員にタイ国駐在武官 ソラニット ロジャナスワン陸軍大佐、パンナシリ少佐の同期の友人 益永1陸尉(現防大小队指導官)を交えて夕食会が実施されました。

夕食会ではタイで勤務する防大卒業生の活躍状況などの話題で大いに盛り上がっていました。タイでは毎年、夏冬の2回同窓会が実施されその都度約30名が集まるそうです。渡邊会長の来年は日本から押しかけてもいいかとの質問には是非お出で頂きたいと即答が返ってきました。

また、日本の武器輸出3原則が緩和されたら、タイで日本の武器の部品等を製造して欲しいことや、さらに日本の技術を取り入れてタイから東南アジアに輸出できるようにしたいなどの率直な意見も飛び出していました。

ジラワット少佐は来日直前に初めての子供さんが生まれたばかりで病院で赤ん坊とつかのま対面をしての来日だったようです。そのジラワット少佐とソラニット駐在武官の夫人は



▲招待された留学生

いずれも日本人とのことで日本語が大変堪能でした。

二人に比べる日本語環境に恵まれない独身のパンナシリ少佐の日本語は今一步のところが有り渡邊会長から「日本人の奥さんがいない分だけ頑張る勉強しろ」とハッパをかけられる一幕もありました。

最後に留学生がタイから持参してきた民族色豊かな沢山のお土産を一人ひとりに贈り和やかなうちに夕食会を終わりました。



▲プレゼントを喜ぶ会長・副会長

事務局 企画 中治 記

第8回期別対抗ゴルフ大会



優勝 グロスの部 13期生
ネットの部 2期生

平成16年9月23日(金)第8回防大同窓会期別対抗ゴルフ大会が、千葉カントリークラブ川間コースで行われました。

優勝杯は、グロスの部を13期が、ネットの部を2期生が獲得しました。

各期10名の選手で争う同窓会期別対抗ゴルフ大会も今年で、第8回となりました。今年から14期生が新たに加わり、総勢140名の大規模な大会となりました。

この大会は、グロス、ネットとも、各期上位7名の合計スコアで順位を決定するもので、シニア等の区分、ハンディはありません。

開会式で、渡邊同窓会会長から「本日は、曇りだけど、暑くもなく、寒くもなく、絶好のゴルフ日和になりました。ゴルフをできることは、健康



▲グロス優勝 13期生チーム



▲開会式で挨拶する渡邊会長

のあかしであります。日頃の80%の実力を発揮するよう選手皆さん頑張って行きましょう」とのスピーチを受け、各選手は、元気いっばいにスタートしていきました。

各選手は、各期生会の代表ということで、この大会のため、事前に本コースを、3～4回練習ラウンドした期生会もあったようですが、同窓会の大会ということで、各組とも和気藹々の雰囲気の中ででした。

試合終了後、クラブハウスで、ノンアルコールでの懇親会でしたが、自分のプレーの披露等を紹介し合い、盛り上がりました。

表彰式は、渡邊会長からグロス優勝、ネット優勝チームに、優勝杯、賞品が授与されました。

グロス優勝チームのメンバーは、植木、樋口、関、後藤(英)岡田(美)、木下、菅、二宮、寺口、溝下(敬称略、順不同)の皆さんでした。

ネット優勝チームのメンバーは、村田、北村、庄、岡、吉崎、三石、大中、林(尠)、佐藤(進)、白鳥(敬称略、順不同)の皆さんでした。

グロス個人優勝は、二宮 修(13期 空)で、スコアは76でした。

記事 青木(13期 陸)、土屋(14期 陸)

成績表

順位	GRS	NET
	期	期
1位	13期	2期
2位	4期	12期
3位	8期	6期
4位	7期	13期
5位	10期	4期
6位	9期	7期
7位	3期	10期
8位	11期	9期
9位	6期	14期
10位	5期	5期
11位	12期	11期
12位	2期	8期
13位	14期	1期
14位	1期	3期

6期生4年連続制覇



防衛大学校同窓会が主催する各期対抗の親睦・交流行事として第6回目の囲碁大会が9月4日(土)日本棋院会館において実施された。当日は、1期生から初参加の14期生までの選抜棋士111名が一堂に会し、素晴らしい熱戦が繰り広げられた。開始に先立ち、藤縄同窓会副会長の挨拶の後、高比競技委員長から競技実施上の処注意があり、9:30熱戦の火蓋が切られた。

競技は、各期対抗方式(個人戦集計方式で実施され、あらかじめ決定していた対戦表に基づき、オール互先、先手6目半コミ出しとする4回戦で実施された。対戦結果を壇上に設置したチャートに掲示しつつ、昼食を挟み午前・午後各2回の対戦を行った。

対戦終了後表彰式に移り、優勝した6期生の代表に武田副会長から優勝カップ及び副賞が授与された。引き続き高比競技委員長の乾杯の音頭により懇親会に入り、激戦を振り返りつつ和やかな歓談のうちに本大会を終了した。

なお、準優勝7期生、第3位4期生、4戦全勝者16名でした。

また、9月18日(土)には、防大囲碁クラブの主催により、同窓

生27名により本因坊戦(個人戦)が、日本棋院八重洲囲碁センターで行われ、16期の日暮さんが優勝し第3代本因坊に輝いた。なお、準優勝山口さん(36期)、第3位高比さん(1期)でした。



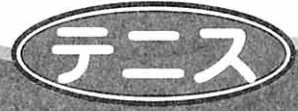
第6回防大同窓会囲碁大会成績表

期	1回戦		2回戦		3回戦		4回戦		合計		順位
	勝	負	勝	負	勝	負	勝	負	勝	負	
1	3	5	6	2	5	3	2	6	16	16	7
2	5	3	4	4	5	3	4	4	18	14	6
3	2	6	5	3	5	3	4	4	16	16	7
4	4	4	5	3	5	3	7	1	21	11	3
5	4	4	4	4	4	4	7	1	19	13	4
6	7	0	6	2	7	0	7	1	27	2	1
7	7	1	6	2	5	3	7	1	25	7	2
8	4	4	2	6	5	3	5	3	16	16	7
9	5	3	3	5	3	5	3	5	14	18	11
10	6	2	3	5	6	2	4	4	19	13	4
11	4	1	5	0	4	1	2	3	15	5	10
12	0	5	1	3	1	3	1	3	3	14	14
13	2	5	3	4	0	7	2	5	7	21	12
14	2	5	2	5	0	6	1	5	5	21	13

注:順位は、各期の上位7名の勝ち数による。従って、6期が8勝した場合は、7勝としている。

(14期 石井)

第7回防大同窓会期別対抗テニス大会



第7回防衛大学校同窓会テニス大会が5月23日(日)防衛大学校テニスコートで行われました。大会日程は、当初予定の5月16日(日)が当日早朝から強い雨に見舞われ、6時に急遽取り止め、予備日の23日に延期したものであります。23日当日は北よりの風が吹く極めて肌寒い曇りペースの1日でありましたが、各期の選手は朝早くからコートに集まり、1期生から14期生までの卒業生117名、ご夫人16名の計133名の参加を得ました。現役学生硬式庭球部員の支援を受け、前日までの雨模様で痛んだコートを整備し、どうにか試合ができるようになりました。9:00開会式を行い渡邊会長のご挨拶の後、試合開始となりました。今回からは、1期生、2期生はグランドシニアとしてペアの個人戦とし、3期生～8期生をシニアリーグ、9期生～14期生をレギュラーリーグとし期別対抗団体戦としました。



各試合とも寒さを吹き飛ばすほどの熱戦がくりひろげられ、昼食時間をとらずに試合を続け、怪我もなく17:15終了しました。終了と同時に雨が降り出しました。17:30から防衛大学校本館地下食堂において表彰・懇親会を行い18:15解散しました。大会の運営、特に準備、撤収に当たっては防衛大学校硬式庭球部学生部員の多大な支援を頂きました。

成績は次のとおりです

	優勝	2位	3位	4位	5位	6位
グランドシニア	井川・船山組					
シニア	7期	5期	8期	4期	3期	3期
レギュラー	14期	10期	12期	13期	9期	11期

会費納入のお願い

防衛大学校同窓会事務局長 新井 宏

12年度から14年度にかけて会費納入率が低下し、同窓会資産の取崩しにより事業を実施する等、会運営の危機に瀕しました。しかし、この2年間は新会員のご理解と関係各位のご努力によりまして、高率の会費完納率をうることが出来ました。特に、48期生の陸上及び航空要員は幹候校修了者全員が完納していただきました(表参照)。衷心より御礼申し上げます。

なお、同窓会に対して同窓生が等しく応分の負担をすと言う原則からすれば、会費未納者の存在は、同窓会存立の精神的基盤の弱体化を招き、将来に問題を残すものと思っています。

現在、会費未納の方(事務局で掌握しておりますので下記連絡先にご確認下さい。)は、次により会費納入をお願い申し上げる次第です。

会費に関する規定は、「防衛大学校同窓会会費に関する細則」により次の通りです。

普通会費は、卒業時における3尉俸給月額(1号俸)の1/4(1000円未満切捨) 同第1条
会費の納入を遅延した場合 同第2条2項

普通会費額 - 既納入額 + 遅延金

遅延金 = 1000円 × (完納年度 - 3尉任官年度又は研究科卒業年度)

事例：44期生で過去分納がない場合

普通会費額 60000円、完納年度 17年度、3尉任官年度 12年度(13.3)

17年度納入額 60000円 + 1000円 × (17 - 12) = 65000円

納入先 郵便局の場合：口座番号 00260-5-□□24826（百万及び十万の桁は無記入）
 加入者名 防衛大学校 同窓会
 通信欄 期別、要員別及び部隊名（例：#30-陸、練馬 li-1Co）
 振込経費 120円

銀行の場合：三井住友銀行 飯田橋支店 口座番号：1270680

防衛大学校同窓会 経理担当 新倉 修

なお、銀行振込した場合は、当方で納入者を確認するため振込者名、住所、期別・陸海空別、振込期日をeメール、Fax、電話等で下記にご連絡下さい。

連絡先 同窓会本部事務所

〒160-0003 東京都新宿区本塩町21-3-2

Tel/Fax 03-3351-8910（専用線 8-6-28895）

eメール ZAN24404@nifty.com

ここ2年間の会費納入率に甘んじることなく、防大在校生に対するPR等継続的に努力する所存です。

会費納入状況

16.12.2現在

期別	会員数	完者 納数	完率 納%	未完納者数				期別	会員数	完者 納数	完率 納%	未完納者数			
				陸	海	空	計					陸	海	空	計
1	339	321	94	11	6	2	19	26	505	466	92	26	7	6	39
2	359	347	97	8	2	2	12	27	388	377	97	8	1	2	11
3	484	452	93	17	12	3	32	28	451	420	93	17	8	6	31
4	464	435	94	20	7	1	28	29	391	357	91	17	7	10	34
5	529	482	91	26	11	9	46	30	410	343	84	48	13	6	67
6	477	431	90	38	7	3	48	31	431	408	95	15	6	1	22
7	503	460	91	29	7	8	44	32	404	354	88	31	13	6	50
8	465	418	90	35	8	5	48	33	447	376	84	45	19	8	72
9	498	447	90	35	6	10	51	34	426	372	87	40	9	6	55
10	498	451	91	28	9	10	47	35	496	477	96	11	5	3	19
11	495	448	91	28	8	11	47	36	354	344	97	6	2	2	10
12	466	408	88	30	16	12	58	37	384	347	90	16	7	14	37
13	468	400	86	44	11	12	67	38	337	267	78	61	10	4	75
14	491	456	93	20	2	13	35	39	356	333	92	8	11	9	28
15	463	446	97	9	3	3	15	40	388	333	85	34	21	5	60
16	428	404	94	9	4	11	24	41	405	373	90	24	15	3	42
17	497	452	91	20	11	14	45	42	407	375	90	20	12	10	42
18	423	395	94	9	7	11	27	43	433	391	89	23	16	8	47
19	446	412	92	14	18	2	34	44	381	194	51	136	46	5	187
20	383	352	92	17	3	11	31	45	351	129	37	155	21	46	222
21	489	468	96	12	3	6	21	46	360	211	59	77	8	64	149
22	474	410	87	31	9	23	63	47	389	338	87	32	11	8	51
23	408	392	95	8	8	6	22	48	* 383	337	87	0	46	0	46
24	446	413	93	8	18	7	33		411	337	82	15	50	9	74
25	422	395	94	12	4	8	24								

48期の欄 *印の項は、幹候校入校者に対する数値。海は教育期間1年故、12月の納入が見込める。

平成15年度防衛大学校同窓会決算報告

平成16年3月31日
[単位：円]

項 目		予 算	実 績	備 考		
一 般 会 計	収 入	会費（47期生等）	20,100,000	26,875,240		
		預貯金利息	1,184,000	1,376,398		
		同窓会名簿代	12,600,000	4,192,000		
		50周年記念事業委員会からの移管	—	159,666		
		50周年事業継続経費からの付替え	—	110,426		
	合 計	33,884,000	32,713,730			
一 般 会 計	事 業 経 費	事業計画の推進				
		（現職・OB会員交流）	300,000	50,110		
		（同窓会主催親睦交流会開催）	210,000	210,000		
		（ホームカミングデーの実施）	800,000	600,210		
		（会員の出版等支援）	50,000	0		
		（防大卒業留学生との連携）	200,000	0		
		（全国的な情報網の維持整備）	100,000	54,658	MCIを含む	
		50周年事業（諸支援）	300,000	221,008		
		顕彰碑献花式費	500,000	236,461		
		総会/講演会費	1,500,000	1,130,282		
		代議員会運営費	700,000	822,040		
		機関誌発行費	3,300,000	4,062,772		
		同窓会名簿作成	11,755,000	7,417,020		
		慶弔費（供花、弔電）	350,000	373,423		
		期生会支援費（48期生、51期生）	200,000	200,000		
		校友会対外活動支援費	1,000,000	1,000,420		
		安全保障講座助成金	100,000	100,105		
	開校記念祭等支援費	2,000,000	2,001,470			
	職員定年退職記念品費	100,000	111,940			
	小 計	23,465,000	18,591,919			
	出	維 持 管 理 経 費	小原台事務局運営費	100,000	37,478	
			事務員雇用費	2,000,000	2,000,000	
			本部事務局室賃貸料	2,900,000	2,816,360	
			事務費	700,000	904,486	MCIを含む
			通信費	550,000	600,308	MCIを含む
			交通費	400,000	645,040	MCIを含む
			会議費	600,000	405,392	
記念品作成			500,000	367,920		
小 計			7,750,000	7,776,984		
予備費			1,500,000	—		
支 出 計	32,715,000	26,368,903				
積立金に繰り入れ	1,169,000	6,344,827				
合 計	33,884,000	32,713,730				
特 別 会 計	収 入	50周年記念事業委員会からの移管	—	41,741,331		
		預貯金利息	—	12,982		
		合 計	—	41,754,313		
	支 出	同窓会システムの維持経費（構築及び運用）	113,200	—		
		謝金等	1,400,000	120,000		
		通信費及び事務費	75,000	19,845		
		一般会計へ付け替え	—	110,426		
		予備費	111,800	0		
		支 出 計	1,700,000	250,271		
		次年度への繰越	—	41,504,042		
合 計	—	41,754,313				



平成17年度防衛大学校同窓会予算

平成16年12月17日
〔単位：円〕

項 目		16年度予算	17年度予算案	備 考	
収 入	会費（49期生等）	22,130,000	18,740,000		
	預貯金利息	1,380,000	1,380,000		
	50周年記念事業等からの移管		700,000		
	雑収入		20,000		
収 入 計		23,510,000	20,840,000		
支 出	事業計画の推進				
	（現職・OB会員交流）	300,000	300,000		
	（同窓会主催親睦交流会開催）	210,000	150,000		
	（ホームカミングデーの実施 7期生等）	300,000	400,000	#7分、30万円	
	（防大卒業留学生との連携）	200,000	200,000		
	（全国的な情報網の維持整備）	30,000	250,000	（MCIを含む）	
	（期生会連絡強化支援）		150,000	新規	
	顕彰碑献花式費	300,000	100,000		
	総会/講演会費	1,100,000	700,000		
	代議員会運営費	600,000	500,000		
	機関誌発行費	3,400,000	3,700,000		
	同窓会名簿管理（作成）	350,000	350,000		
	慶弔費（供花、弔電）	350,000	400,000		
	同窓会のあり方検討	200,000	0		
	中期事業の検討		200,000	新規	
	期生会支援費（50、53期生）	200,000	200,000		
	校友会対外活動支援費	1,000,000	1,000,000		
	開校記念祭支援費	2,000,000	2,000,000		
	防大競技会記念品支援費		530,000	新規	
	安全保障講座助成金	100,000	100,000		
	小 計	10,640,000	11,230,000		
	維持管理経費	同窓会本部の整備	680,000	0	
		小原台支部事務所の整備	100,000	100,000	事業の繰越
		小原台事務局運営費	200,000	100,000	
		事務員雇用費	2,000,000	2,000,000	
		本部事務局室賃貸料	2,900,000	2,900,000	
		事務費	850,000	900,000	（MCIを含む）
	通信費	450,000	600,000	（MCIを含む）	
	交通費	400,000	650,000	（MCIを含む）	
	会議費	600,000	600,000		
	小 計	8,180,000	7,850,000		
	予備費	1,500,000	1,500,000		
	支 出 計	20,320,000	20,580,000		
	積立金に繰り入れ	3,190,000	260,000		
	合 計	23,510,000	20,840,000		
50周年事業継続経費（MCIを含む）	収 入	前年度からの繰越	41,504,042	26,014,042	
		預貯金利息	10,000	7,000	
		合 計	41,514,042	26,021,042	
	支 出	防大顕彰室備品等費	9,500,000	0	
		MCI準備室の整備	1,000,000	0	
		MCI事業及びHPの管理運用態勢整備		1,000,000	新規
		謝金等	1,800,000	1,800,000	
		同窓会システムの維持経費	140,000	200,000	一般会計付替
		通信費及び事務費	150,000	200,000	一般会計付替
		交通費		300,000	一般会計付替
		同窓会一般会計への付替え		(700,000)	
		予備費	2,910,000	1,000,000	
		支 出 計	15,500,000	4,500,000	
		次年度への繰越	26,014,042	21,521,042	
	合 計	41,514,042	26,021,042		

期生会会長・代議員名簿

16年12月1日現在

期別	会 長	代 議 員		
		陸	海	空
1	吉川圭祐(海)	荒武良弘	岡田毅	青柳隆郎
2	野本恒雄(空)	中山隆志	井川宏	野本恒雄
3	永島脩一郎(空)	亀井浩太郎	松本昭一	山下民夫
4	椎崎博理(海)	大久保浩	向井朗	上川高昌
5	福地建夫(海)	三浦天士	小田優秀	宮竹恵哉
6	高橋伸治(空)	大窪哲哉	杉本光	星野元宏
7	落合 峻(海)	大塚忠宏	落合 峻	北原 彰
8	北川文夫(空)	中條 裕	本間 宏	白川 新
9	鈴木一嘉(空)	土井義尚	藤田幸生	鈴木一嘉
10	長谷川 語(海)	嶋野隆夫	小田倉光伸	兒玉秀正
11	竹村 訓(海)	内村彰和	吉原征義	赤羽益三
12	先崎 一(陸)	山本公志	上村堯彦	寺田治夫
13	山下輝男(陸)	関 芳雄	平井良彦	花岡芳孝
14	吉田 正(空)	石井利博	斎藤 隆	稲葉憲一
15	今村 功(陸)	林 直人	小林幹夫	江口啓三
16	江藤文夫(陸)	石川由喜夫	小豆野 実	肥後賢治
17	河野美登(海)	山口浄秀	河野美登	永田久雄
18	持永昇三(海)	木下典夫	岩崎繁美	笠原 久
19	酒井 健(陸)	酒井 健	竹口健二	上田完二
20	佐藤貞夫(陸)	西村智聡	加藤耕司	土橋一大
21	彌田 清(空)	竹田重樹	田尾輝雄	奥村芳樹
22	宮下寿広(陸)	盛一丈嗣	山口 透	福井正明
23	岩本豊一(陸)	堀口英利	高橋忠義	尾形 誠
24	高橋 均(海)	櫻木正明	三木伸介	岩成真一
25	高鹿治雄(海)	田中良夫	徳丸伸一	吉田浩介
26	屋代律夫(陸)	増田潤一	大保信一郎	佐々木金也
27	小林 茂(陸)	小林 茂	副島尚志	安川隆廣
28	田浦正人(陸)	田浦正人	畠野俊一	遠目塚進
29	馬場邦夫(陸)	中村浩之	中尾剛久	村上和彦
30	堀切光彦(陸)	山崎 繁	森田義和	小田紀彦
31	高山博光(陸)	山根直樹	今村靖弘	常井隆志
32	榊原吉典(空)	池田和典	平井良和	榊原吉典
33	中塚千陽(空)	山根寿一	真殿和彦	沖野正敏
34	佐藤信知(空)	大谷勝司	福田達也	小笠原卓人
35	植森 治(空)	中迫博文	保科俊明	右田竜治
36	足達好正(陸)	足達好正	塩崎浩之	寺崎隆行
37	宇佐美和好(空)	小川隆宥	浦口 薫	宇佐美和好
38	有馬 元(空)	森本康介	濱崎真吾	霜田豊英
39	湯下兼太郎(陸)	湯下兼太郎	平田利幸	竹岡功二
40	清水 徹(海)	小澤 学	川野邦彦	大石和浩
41	堤田和幸(海)	村上 淳	小河邦生	中谷大輔
42	武田和克(陸)	武田和克	中尾喜洋	山口嘉大
43	鎌田 淳(空)	澤 繁美	戸永竜太	岩切主税
44	高橋秀典(海)	鈴木攻祐	阿部直樹	原田 理
45	庄司秀明(陸)	青山佳史	岡澤智和	坂田靖弘
46	原田 岳(陸)	石岡直樹	石川俊紀	寺林洋平
47	吉水憲太郎(陸)	清田裕幸	笠原健治	那須悠花
48	和田 嵩一(海)	桐谷高弘	青山太輔	齋藤真吾

名簿更新に関する防大同窓会事務局からのお願い

皆様ご存知のことと思いますが、昨今、個人情報の保護が強く求められる社会情勢になり、防大同窓会の名簿の更新に関する各幕のご協力が全く得られなくなりました。

つきましては、各期生会のご協力を仰ぎ、名簿を更新していく必要が生じました。名簿の更新は、年1回、8月1日を基準として実施しております。よろしくご協力をお願い致します。

また、各期生会の会長、代議員の交代がありましたら、

事務局総務部人事担当までご連絡下さい。また、各期生会に名簿係の方がおられれば、その方と連絡させていただきますので、名簿係の期別、陸空海別、氏名、連絡先等をご連絡下さい。宜しくお願い致します。

事務局総務部人事担当 石井 健治（総括 空担当）
寄田 修（陸担当）
飯田 俊明（海担当）

防大同窓会本部会議室の積極的な使用について

防大同窓会本部は、市谷の防衛庁正門の斜め向い前にあります防衛庁共済組合が所有するビル（共済1号館）の3階の一部を間借りし、業務を実施しています。

防大同窓会本部は、同窓会員との連絡の中核、本部役員等の定例会議、各種事務作業及び同窓会関連の資料保管等に使用してきました。しかしながら、全般に使いつらいため平成16年度の事業として会議・事務処理・保管の各機能の改善を図り年度当初に整備を完了しました。特に会議室は、狭くて使いつらいこともあり、本部の役員及び事務局を除きますと一部の期生会等が使用してきたのに止まっておりました。この度の整備で会議室用の部屋も相対的に広くなり、またパソコン・モバイルプロジェクター等によりペーパーレスで会議等が実施出来るようになりました。

つきましては、防大同窓会本部会議室をこれまで殆んど使用実績のない各期生会や校友会等にも会議等で使って頂き、同窓会本部会議室を有効活用しようと考えております。



使用に当りましては、会議等の重複を避ける為、予約して下さい。

尚、申し込み、使用要領等は下記のとおりです。

記

- 1 申し込み：3ヶ月前から、メールかFAX
- 2 使用時間：10：00～17：00
- 3 使用料：1000円／1回
(会議室の維持整備費として)

同窓会本部会議室が整備されましたのを機に、同窓生の皆さんに是非積極的に使用して頂き、各期生会や校友会ひいては同窓会活動が一層活性化されること期待しています。

【参考】

防衛大学校同窓会

〒160-0003 東京都新宿区本塩町21-3-2

TEL (FAX)：03-3351-8910

専用線：8-6-28895

事務局 e-mail：bodaij@nifty.com

同窓会のホームページアドレス：

<http://www.bodaidsk.com>

防大同窓会総会のご案内

平成16年度同窓会総会を下記のとおり開催致します。ご出席を賜りたくご案内申し上げます。
記

1 日 時	平成17年 3月22日(火) 16:00~20:30	2 場 所	グランドヒル市ヶ谷 新宿区市谷本村町4-1 (TEL. 03-3268-0111)
	(1) 総会 16:00~17:20		
	(2) 講演会 17:20~18:20		
	(3) 懇親会 18:30~20:30	3 懇親会費	4,000円

参加される方は、同封の返信用はがきにて平成16年2月21日(月)までにお申し込み下さい。
(いずれにも参加されない方の返信は不要です。)

同窓会本部・支部等の役員紹介

【平成16年度同窓会本部役員】

会 長	渡邊 信利 6(陸)	総務担当	小津 光由 14(陸)	事務局長	付 藤本 四郎 12(陸)
副会長兼理事長	佐伯 聖二 7(海)	広報担当	青木 吉則 13(陸)	同窓会ホームページ担当	荒木 紀夫 8(空)
副 会 長	藤縄 祐爾 8(陸)	同	西 昇 14(海)	常駐事務局員	塩川 太恵
同	武田 清 8(空)	人事担当	石井 健治 13(空)		
理 事	戸田 耕司 8(陸)	同	寄田 修 14(陸)	小原台事務局	
理事兼事務局長	新井 宏 9(陸)	同	飯田 俊明 14(海)	事務局 長	川上 潔 17(空)
理 事	長谷川 語 10(海)	経 理 部 長	新倉 修 12(陸)	事務局 長 補 佐	三 竿 明 17(陸)
同	原 充男 10(空)	経 理 担 当	小宮 哲夫 13(海)	総 務 部 長	新開 仁司 22(海)
同	藤野 毅 18(陸)	同	城 憲夫 13(空)	総 務 係 長	永田 志仁 35(陸)
同	杉本 正彦 18(海)	同	行徳 浩志 14(陸)	総 務 係	麩澤章太郎 44(陸)
同	橋本 誠一 18(空)	事 業 部 長	佐古 寿聡 12(陸)	広 報 係 長	廣谷 雅臣 35(陸)
会 計 幹 事	出水 克明 7(海)	事 業 担 当	大西 則雄 13(陸)	広 報 係	川口 茂 44(陸)
同	尾頭 誠 8(空)	同	湯川 正修 13(陸)	事 業 部 長	田原 俊幸 21(空)
同	中埜 和男 18(陸)	同	井出 順 13(海)	企 画 係 長	片山 智浩 36(空)
		同	新治 毅 13(空)	企 画 係	櫻井 徹 44(陸)
本部事務局員		同	石井 利博 14(陸)	事 業 係 長	安井 崇 37(陸)
事務局 長	新井 宏 9(陸)	同	土屋 勝政 14(陸)	事 業 係	森安 竜 41(海)
総務部 長	後藤 健次 11(陸)	同	小島 健二 14(空)		
総務担 当	後藤 英二 13(陸)	同	中治 一秀 14(空)		

【地域支部等役員(平成16年末現在)】

北部地域支部	支部長	工藤 義 (12・陸)	札幌市	広島地区支部	同	松村 清人 (6・海)	広島市
東北地域支部	同	小関 隆久 (6・陸)	仙台市	福岡地区支部	同	大坪 成二 (4・陸)	福岡市
関西地域支部	同	中 一皓 (7・空)	枚方市	長崎地区支部	同	国分 八郎 (2・海)	大村市
西部地域支部	同	山口 賢介 (7・陸)	大野城市	佐賀地区支部	同	澤田 猛 (3・陸)	基山町
沖縄地域支部	同	藤井 建吉 (7・陸)	那覇市	熊本地区支部	同	小島 元光 (5・陸)	熊本市
栃木地区支部	同	鯉沼 義則 (1・陸)	壬生町	大分地区支部	副支部長	小俣 健二 (7・陸)	別府市
東海地区支部	同	森 敏 (5・空)	名古屋市	宮崎地区支部	同	樋田 隆 (1・陸)	宮崎市
北陸地区支部	同	久保 正佳 (3・陸)	金沢市	鹿児島地区支部	同	麓川 昭憲 (9・陸)	鹿児島市
岡山地区支部	同	田中 康之 (1・陸)	岡山市	小原台クラブ	会 長	岩崎 俊雄 (9・陸)	市ヶ谷



(16年度開校祭棒倒し)



(優勝の歡喜 4大隊)

編集 青木吉則・西 昇
印刷 ㈱エイコープリント

防衛大学校同窓会本部連絡先

〒160-0003 東京都新宿区本塩町21-3-2

●局 線 TEL・FAX 03-3351-8910 ●専用線 TEL・FAX 8-6-28895
E/M: ZAN24404@nifty.com又はbodaj@nifty.com